杉浦非水装幀

志賀直哉集

改造社版

最近の志賀直哉氏

「志賀直哉集」目次

夢殿の救世観音を見てゐると、その作者といふやうな事は全く浮んで来ない。それは作者といふものから、それが完全に遊離した存在となつてゐるからで、これは又格別な事である。文芸の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあつたら、私は勿論それに自分の名などを冠せようとは思はないだらう。

昭和三年六月

直哉

暗夜行路

序詞

（主人公の追憶）

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病氣で死に、その後二月程經つて、不意に祖父が私の前に現れて來た、その時であつた。私の六歳の時であつた。

或る夕方、私は一人門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其處へ來て立つた。眼の落ち窪んだ、猫脊の何んとなく見すぼらしい老人だつた。私は何んといふ事なくそれに反感を持つた。

老人は笑顔を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の惡意から、それをはぐらかして下を向いて了つた。釣上がつた口元、それを囲んだ深い皺、變に下品な印象を私は受けた。「早く行け」私は腹でさう思ひながら、偏意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた。私は妙に居堪らない氣持になつて來た。

私は不意に立ち上つて門内へ駈け込んだ。其時、

「オイ〱お前は謙作かネ」と老人が後ろから云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立止つた。振り返つた私は心では用心をしてゐたが、首はいつか晉なしく點頭いて了つた。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振つた。然し此うは手な物言ひが變に私を壓迫した。

老人は近寄つて來て、そして私の頭へ手をやり、

「大きくなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解らなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近い肉身である事を私は既に感じてゐた。私は息苦しくなつて來た。

老人は其儘歸つて行つた。

二三日すると其老人は又やつて來た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其處には祖父の他にお榮といふ二十三四の女が居た。

私の周圍の空氣は全く今までとは變つて居た。總てが貧乏臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に殘つて居るのに自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は子供ながらに私は面白くなかつた。然し不公平には幼兒から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起らなかつた。然しかういふ風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起るだらうと云ふ漠然とした豫感が私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ケ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣持になつた。

父は私に積極的につらく當る事はなかつたが、常に〱冷たかつた。が、この事には私は餘りに慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の總體としての全體だつた。私は他の同胞の同じ經驗をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故私はその事を然う悲しくは感じなかつた。

つた。
母は何方かと云へば私には嚴格だつた。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかゝはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。が、兎も角秋の夕方の事だつた。私は人々が夕飯の支度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨てゝあつた梯子から誰れにも氣づかれずに一人母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟傳ひに鬼瓦の處まで行つて馬乘りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い處へのつたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えてゐる。烏が忙しく飛んでゐる………

間もなく私は、

「謙作。――謙作」と下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の惡い程優しい調子だつた。

「あのネ、其處にぢつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其處に音なしくして居るのよ」

母の眼は少し釣上つて見えた。殊に優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の來るまでに降りて了はうと思つた。そして馬乘りの儘少し後じさつた。

「あゝつ」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしい事。お母さんの云ふ事をよくきくのネ」

私はぢつと眼を放さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出來なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は興奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急に明瞭して來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何んといつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私は左う思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。私は一人茶の間で寢ころんで居た。其處に父が歸つて來た。父は默つて、袂から菓子の紙包みを出し、茶簞笥の上に置いて出て行つた。私は寢た儘、じろじろとそれを見てゐた。

父が又入つて來た。そして今度は紙包みを戸棚の奥へ仕舞ひ込んで出て行つた。

私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。間もなく母が、父の脫ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて來た。私には我儘な氣持が無闇と込み上げて來た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。

「母樣、お菓子―」

「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐたのだ。

「何か。よう、何か―」

母は應じなかつた。そして、疊んだ着物を簞笥へ仕舞つて出て行かうとした。

私は起き上つて、

「よう、何か―」かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は默つて私の頰をぐいとつねつた。私は怒つて其手をピシャリと打つた。

「もう食べたぢや、ありませんか。何んです」

母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて歸つた菓子をせびり出した。

「いけません。そんな…………」

「いや！　私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシャクシャしてかなはなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。兎も角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が變へられなくなつて居た。

母は私の手を振り拂つて、出て行かうとした。私は後ろから不意に母の帶へ手をかけ、ぐいと力一杯に引いた。母はよろけて障子に掴まつた。其障子がはづれた。

母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を掴み、ぐん〳〵戸棚の前へ引張つて行つた。母は片腕で私の頭を抱へて置いて、いやがる私の口へ其厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食ひしばつてゐる味噌齒の間から、羊羹が細い棒になつて入つて來るのを感じながら、私は度膽を拔かれて、泣く事も出來なかつた。

興奮から、母は急に泣き出した。少時して私も然し、泣き出した。

根岸の家では總てが自墮落だつた。祖父は朝起きると楊子をくはへて錢湯へ出かけた。そして歸ると其寢間着姿で朝餉の膳に向つた。

來る客も變つた色々な種類の人間が來た。殊に花合戰をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて來た。大學生、それから古道具屋、それから小說家（？）、それから山上さんと皆が云つてゐる五十餘の一寸未亡人らしい女などであつた。此女は其頃の醫者が持つたやうな小さい黒革の手さげ鞄を持つて來た。それには、きまつて澤山な小錢と、一揃ひの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入つて居たさうである。然し此女は未亡人ではなく、其頃大學で歷史を教へて居た或る年寄つた教授の細君で、此女の甥が嘗てお榮と同棲して居た、その緣故で、良人にも隱れて好きな遊び事の爲めに來たのだと云ふことである。其甥と云ふ男は大酒飲みで、葉巻のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、たうとう其二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺して了つたと云ふ事を私は二十年程してお榮から聞いた。

山上と云ふ女は十時頃には大概歸つて行つた。すると其頃になつて、東京者の癖に大阪辯ばかり使ふ若い寄席藝人がよく仲間へ入りに來た。

お榮は勝負へは入らなかつたが、祖父の勝負には多分實際上の氣持から、よく〳〵熱中して口出しをして居た。左う云ふ時、いつも下品な皮肉を云つて皆を笑はせるのは其寄席藝人であつた。

後年私は、何故それ程困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたらうとよく考へた。月々困らぬだけの金は父から來てゐたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の賣り買ひをしたり、がらくた道具屋の競賣に金を貸して席料を取つたりした。まうけづく以上、祖父の下品な趣味のやうにも思へた。

お榮は普段少しも美しい女ではなかつた。然し湯上りに濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。左う云ふ時、お榮は妙に浮き〳〵とする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行唄を小聲で唄つたりした。そして、醉ふと不意に私を膝へ抱き上げて、力のある太い腕で、ぢつと抱き締めたりする事があつた。私は苦しいまゝに、何かしら氣の遠くなるやうな快感を感じた。

私は祖父を仕舞ひまで好きになれなかつた。寧ろ嫌ひになつた。然しお榮は段々に好きになつて行つた。

根岸の家へ移つて半年餘り經つた或る日曜日

か祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度兄達二人は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云ふ未だ一年にならぬ赤兒とそして父だけが家に居た。
　祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、其日父は珍らしく機嫌がよかつた。父はいつにない愛想らしい事を私に云つた。父としてはそれは氣まぐれだつた。何か其日氣分のいゝ事があつたのかも知れない。然しそんな事は私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるやうな心持で、祖父が茶の間へ引きかへしてからも、一人其處に殘つてゐた。
「どうだ、謙作。一つ角力をとらうか」父は不意にこんな事を云ひ出した。私は恐らく顔一杯に嬉しさを現して喜んだに違ひない。そして首肯いた。
「さあ、來い」父は坐つた儘、兩手を出して、かまへた。
　私は飛び起き樣に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかつて行つた。
「中々強いぞ」と父は輕くそれを突き返しながら云つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかつて行つた。
　私はもう有頂天になつた。自身がどれ程強いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいと云ふより、私の氣持では自分の強さを父に感服させたい方だつた。私は突き返される度にシャニ、ムニにぶつかつて行つた。こんな事は父との關係では嘗てなかつた事だ。私は身體全體で嬉しがつた。そして、をどり上り、全身の力で立ち向かつた。然し父は中々私の爲めに負けては呉れなかつた。
「これなら、どうだ」かういつて父は力を入れて突き返した。力一ぱいにぶつかつて行つた所をはずみを食つて、私は仰向け樣に引つくりかへつた。一寸息が止まる位、背中を打つた。
私は少しムキになつた。而して起きかへると、尚勢込んで立ち向かつたが、其時私の眼に映つた父は今までの父とは、もう變つて感じられた。
「勝負はついたよ」父は興奮した妙な笑聲で云つた。
「未だだ」と私は云つた。
「よし。それなら降參と云ふまでやるか」
「降參するものか」
　間もなく私は父の膝の下に組敷かれて了つた。
「これでもか」父はおさへて居る手で私の身體をゆすり振つた。私は默つて居た。
「よし、それならかうしてやる」父は私の帶を解いて、私の兩の手を後手に縛つて了つた。そしてその餘つた端で兩方の足首を縛り合せて了つた。私は動けなくなつた。
「降參と云つたら解いてやる」
　私は全く親しみを失つた冷たい眼で父の顔を見た。父は不意の烈しい運動から青味を帶びた一種殺氣立つた顔つきをして居た。そして父は私を其儘にして机の方に向いて了つた。
　私は急に父が憎らしくなつた。息を切つて、深い呼吸をしてゐる、父の幅廣い肩が見るから憎々しかつた。其內、それを見つめてゐた視線の焦點がぼやけて來ると、私はたうとう我慢しきれなくなつて、不意に烈しく泣き出した。
　父は驚いて振り向いた。
「何んだ、泣かなくてもいゝ、解いて下さいと云へばいゝぢやないか。馬鹿な奴だ」
　解かれても、未だ私はなき止める事が出來なかつた。
「そんな事で泣く奴があるか。もうよし〳〵。彼方へ行つて何かお菓子でも貰へ。さあ早く」
から云つて父は其處にころがつて居る私を立た

した。
　私は餘りに明ら様な惡意を持つた事が恥かしくなつた。然し何處かに未だ父を信じない氣持が私には殘つて居た。
　祖父と女中とが入つて來た。父は具合惡さうな笑ひをしながら、說明した。祖父は誰れよりも殊更に聲高く笑ひ、そして私の頭を平手で輕く叩きながら「馬鹿だな」と云つた。

一

　時任謙作の阪口に對する段々に積もつて行つた不快も阪口の今度の小說で到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中にも淸々しい氣持になつた。そして彼は其讀み終つた雜誌を枕元へ置くのも穢らはしいやうな心持で、夜着の裾の方へ抛つて、電氣を消した。三時近かつた。
　彼は矢張り興奮して居た。頭も身體も心は疲れてゐながら中々眠る事が出來なかつた。彼は頭を轉換さす爲めに何か氣樂な讀物を見ながら眠くなるのを待たうと考へた。が、左う云ふ本は大概お榮の部屋へ持つて行つてあつた。彼は一寸拘泥したが、拘泥するだけ變だとも思ひ返して、再び電氣をつけて二階を降りて行つた。
　襖の外で、
「一寸本を貰ひに來ました」と聲をかけて、「塚原卜傳は戸棚ですか」と云つた。
　お榮は電燈をつけた。
「床の間か、茶簞笥の上ですよ。未だ起きてたの？」
「眠むれなくなつたんで、見ながら眠むるんです」
　謙作は茶簞笥の上から小さい其講談本を持つて、「明日」と云つて其部屋を出た。
「御機嫌よう」からいつて、お榮は謙作が襖を締めるのを待つてパチッと電燈を消した。
　謙作は其氣樂な講談を讀みながら、朝露のやうな濕り氣を持つた雀の朝の快活な啼聲を戸外に聽いた。
　翌日はどんより曇つた靜かな秋の日だ。午過ぎて一時頃、彼はお榮の聲で眼を覺ました。
「龍岡さんと阪口さん」
　彼は返事をしなかつた。返事をするのが物憂くもあつた。が、それよりも今日阪口に會ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では甚くこんぐらかつた問題であつた。
「あちらへお通ししてよ。直ぐ起きて下さいよ」から云つて出て行くのを、
「阪口だけ斷つて下さい」と彼は云つた。
「何うして？」お榮は驚いたやうに振り返り、兩手を襖に掛けた儘、立つて居た。
「ぢやあ、よろしい。二人共通して置いて下さい。直ぐ行きます」
　謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小說と云ふのは、或主人公が其家にゐる十五六の女中と關係して、その女に出來た赤兒を墮胎する事を書いたものであつた。謙作はそれを多分事實だと思つた。そして其事實も彼には不愉快だつたが、それをする主人公の氣持が如何にも不眞面目なのに腹を立てた。事實は不愉快でも、主人公の氣持に同情出來る場合は許せるが、阪口の場合は書く動機、態度、總てが謙作には如何にも不眞面目に映つた。尙其上にそれに出て來る主人公の友達と云ふのはどうしても自分をモデルにして居るとしか彼には考へられなかつた。其友達に對する主人公の氣持が彼を怒らした。
　主人公は其女が餘りに子供らしく無邪氣な爲めに誰れからも疑はれないのを利用して、平氣で友達の前で其女をからかつたり、いぢめたりする事を書いて居た。お人よしで、何も氣がつかずにゐる友達がそれを切りに心で同情して居る。主人公は尙皮肉にそれを見拔きながら、多少苛々もして、其女を泣かす事などが書いて

あつた。
　謙作は其女中を實際嫌ひではなかつた。如何にも無邪氣で人がよささうな點を可愛く思つた事もある。然し阪口がこれと唯の關係で居さうもない事は大概察して居た。それが阪口の小說では何も知らぬ友達が心密かに其女を戀してゐるやうに書いてあつた。そして主人公は腹に動ともすると起つて來る嘲笑を押しつけて、それを冷やかに傍觀して居る事が書いてあつた。主人公が他人の心を隅から隅まで見拔いたやうな、いやに得意らしい心理解剖をする、それが謙作をむか／＼させた。
　然しそれにしても何故今日訪ねて來たか。其雜誌が出てからもう一週間になる。其間何か自分から烈しい手紙でも來さうに思ひながら、中々來ない。其不安に却つて脅迫されて出て來たのではないかしら。それとももつと性の惡い僞惡者根性から、太々しい面構へを自分に見せるつもりで來たのかも知れないと謙作は疑つた。そして若しかしたら手つ取り早く、面と向かつて思ひ切り云つてやつてもいゝと考へた。
　謙作の考へは段々誇張されて行つた。彼は額を洗ひながらこんな考へで興奮した。
　茶の間で着物を着かへて居ると、座敷の方から二人のしてゐる話し聲が聽こえて來た。二人は如何にも呑氣な調子で話して居た。謙作は何んだか自分だけ鯱張つて居るやうな變な氣がした。皆が平氣で居る中に一人怒つてゐる自分が狐につままれたやうに馬鹿氣ても見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。
「昨晩はおそかつたつて？」彼が座敷へ入ると龍岡が氣の毒したと云ふ氣持を現はして云つた。
―もう起きる頃だつたのだ―
　阪口はお茶が出して置いた其日の新聞を見ながら何氣ない顏をして居た。謙作は阪口が今自分が想像してゐたやうな氣持で來たのではない事を知つた。例のだらしない、いゝ、なさからずる／＼と龍岡に誘はれて來たに違ひなかつた。それでも彼は、
「君達は何處で會つたんだ」と念の爲めに龍岡に訊いて見た。
「僕が連れ出したのさ」と龍岡は答へた。そして「此奴の今度の小說を見たかい？」と龍岡は特に「此奴」と云ふ言葉で一面或る親みをも含んだ輕蔑の流し眼を阪口へ向けながら云つた。謙作は返事をしなかつた。
「いやな小說だ。それもいゝが、中に出て來る氣の利かない友達は僕をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすつかり腹を立てゝ、今朝起きぬけに出掛けて、怒つてやつた所だ」
　阪口は新聞から眼を放さずににや／＼笑つて居た。龍岡は一人云ひ續けた。
「大部分空想だと云ふが、怪しいものだ。阪口のやりさうな事だ」
　阪口はこんなに云はれても別に不愉快な顏もしなかつた。彼の腹は解らなかつた。然し彼の行爲の上の趣味から云つて、こんなに云はれながら只にや／＼してゐる事は確かに彼自身氣に入つて居るに違ひなかつた。左う云ふ所に優越を彼は示さうとして居る。又一つは龍岡が全然異ふ仕事をしてゐる所からも、その餘裕を持つてゐるらしかつた。龍岡は其年工科大學を出て飛行機の發動機の研究の爲め近く佛蘭西へ行くつもりで居る。
「他人の氣持を見透したやうな書き振りが一番不愉快だと云つてやつたんだよ。たまには當る事もあるが、人間の氣持は直ぐ動いて居るから、次の瞬間にはもうそれを反省してゐるし、或る場合、同時に反對した二つの氣持を持つて居る事もある。所が阪口の書く物では主人公に都合のいゝ氣持だけが見られて、不都合な方には全

で色盲なんだ」

「もう解つたよ。何遍繰返したつて同じ事だ」阪口も一寸不快な顔をした。

「今朝から散々油をしぼつて居るんだよ」龍岡は謙作の方を向いて多少神經的に笑つた。

「しつつこい奴だ」と阪口が獨語のやうに云つた。

「え〻？」龍岡もむつとして云つた。「この位の事を云はれて君に腹を立つ資格はないよ。腹を立つなら、もつと幾らでも云ふよ。君は一トかどの惡者がつて居るが、惡者としてちつともなつてないぢやないか。書いたものでは相當惡者らしいが、要するに安つぽい僞惡者だ。——墮胎が何んだい」龍岡はつつぱなすやうに云つた。彼は今まで快活らしくはしてはゐたが其實阪口のにや〳〵した態度に不愉快を感じてゐたらしかつた。そしてそれを破裂さした。龍岡は小柄な阪口に較べては倍もあるやうな大男でその上柔道が三段であつた。左う云ふ點からも阪口はすつかり壓迫されて了つた。

謙作は先刻から阪口に對する自分の態度を如何決めていゝかわからないで居る內に龍岡がこんな風にやつて了つたので、その白けた一座をどうしていゝか分らなかつた。其儘三人は默つて居た。

「船は決つたのかい？」少時して謙作が沈默を破つた。

「十一月十二日の船にした」

「支度はもう出來たのかい」

「別に大した支度もないからネ。——それは左うと、浮世繪を少し買つて行きたいと思ふんだが、何時か一緒に見に行つて貰へないかな。どうせ左う高い物は買へないが、向うで世話になる人の贈物にしようと思ふんだ」

「此方もよくは解らないが、何時でもいゝ。行かう。然し此頃は隨分高くなつたらしいよ。前の相場を知つて居ると買ふ氣がしないさうだ。若しかすると巴里で買ふ方が安い物があるかも知れないよ」

「そいつは困るな。何か別の物にするかな」

「榛原の千代紙でも持つて行つちや、どうだい。生じつかな浮世繪より子供のある家なんかは喜ぶだらう」

謙作は阪口の氣押されたやうな樣子を見ると氣の毒な氣もしたが、あの作中の女達が龍岡の云ふやうに龍岡をモデルにしたものとは思へなかつた。成程書かれた場面は大概自分の知らぬ場面であつた。けれども其性格は阪口の眼に映つた自分をモデルにして居るとしか思はれなかつた。實際阪口が龍岡に左う云ふかどうかに分らないが、「場面は成程君との場面を借りた。然し性格がまるで異ふぢやないか」こんなことを云ひさうな氣が謙作にはした。謙作はこれは阪口の猾いやり方だと思つた。若し自分が性格だけは僕をモデルにしたに違ひないと掛合つて行けば、それは同時に自身の性格を其作中の下らない人物のそれに近いものと認めることになる。寧ろ書かれた場面が實際自分との間にあつた事ならば却つて怒りいゝ。然し性格だけを自分に取つたらうとは云ひにくかつた。それ程に下らない人物に書いてゐる。龍岡が怒れば君をあんな性格の人間とは誰れが思ふものかと云ひ、自分が怒れば、君はあゝ云ふ性格の人間と自分で思つて居るのだねと云ひ兼ねない。此處に阪口の變な得意がありさうに思ふと謙作は猶腹が立つた。今の謙作は阪口に對しては極端に邪推深くなつてゐた。前に彼を信じて居ただけにこれを裏切られた今は、事々にかう云ふ邪推が浮ぶのであつた。殊に愛子との事以來、それは甚だ面白くない傾向だと知りつゝも、彼は妙に他人が信じられなくなつた。今も前夜からの阪口に對する氣持を考へて、龍岡が彼自身だ

けがモデルにされたやうに怒つて居るのを見てさへ或る疑ひを持つのであつた。

龍岡には或る昔氣質がある。若しかしたら作中の友達が同時に自分をもモデルにして書かれてある事を承知の上で、故意と自身だけがモデルかのやうに云つて阪口をやつつけたのではあるまいかと謙作は思つた。龍岡は左うする事で一方阪口を懲し、他方で、二人の間を多少でも氣まづくなくして日本を去りたいと思つてゐるのではあるまいか。それでなければ阪口をわざわざ連れ出して來て、自分の前でこれ程にやつつけることが普段の彼の氣質としては少し不自然に考へられた。龍岡には短氣な性質もあつた。然し自分だけの問題に第三者のゐる前であれ程に露骨に云ふ彼とも思へなかつた。謙作には其處に何か彼の昔氣質から出たおもはくがありさうにも思はれた。

二

新開地のやうな泥濘路に下品な強い光がさして居る。兩側の家々からは鮮やかな、然し神經を疲らしこゐる者はその爲め吐氣を催すかも知れない程あくどい色の着物を着た女達が往來を通る男に叫びかけて居る。それは憐憫を乞ふやうにも、罵るやうにも聽きなされる叫聲であつた。

龍岡と謙作とはもうすつかり壓倒されて了つた。二人は竝んで往來の中程を眞直ぐに急ぎ足で歩いて居たが、それでも龍岡は小聲で、

「中々綺麗な女が居るネ」などと云つた。

其日三人が赤阪福吉町の謙作の家を出たのは四時頃だつた。氣不味い感情を脱け出せずにゐる阪口は直ぐ二人と別れたがつたが、龍岡は却却彼を離さうとしなかつた。龍岡には此儘別れて了ふのは如何にも寢覺が惡いらしかつた。彼は自身が餘りに云ひ過ぎた事を多少悔いてもゐる風だつた。そして三人は龍岡の千代紙を買ふいゝいゝつきあひをして日本橋の方へ行つたのである。

木原店の或料理屋で食事をした。謙作は殆ど飲めない方だつたが、其處を出た時には他の二人はもう可成りに醉つてゐた。

龍岡が突然、これから吉原見物に行きたいと云ひ出した。西洋へ行く前に見た事のない吉原を一度見て行きたいと云ふのだ。

「謙作、いゝだらう？ 只見物だけだ」彼は氣兼ねをしながら謙作を顧みた。謙作も未だ左う云ふ場所を知らなかつた。「うん」彼は不愛想に生返事をしたが、心では可成りに拘泥した。左う云ふ場所には決して足を踏み入れまいと云ふ程の氣はなかつた。何方かと云へば多少の興味もあつた。それ故今龍岡にそれを云はれると表には冷淡を粧ひながら、妙にドキリとした。

——謙作と龍岡は電信柱の多い仲の町まで出て、其處で遲れた阪口の來るのを待つて居た。阪口はさも醉漢らしい樣子をしながら、格子とすれ〳〵に、時々何か女に串戲口をきゝながら歩いて居た。

「オイ、早く來ないか」と龍岡が聲をかけた。空模樣が少し變になつて來た

阪口は聽えない振りをして矢張りぶら〳〵と歩いて居る。謙作は空を仰いで見た。黑い雲が建竝んだ大きな建物の上に重苦しく被ひかぶさつて居た。

「俺達はもう歸るよ。一緒に歸るかい？ それとも別れるかい？」と龍岡が云つた。阪口は何か愚圖々々云つて居た。そして三人は其儘其通りを大門の方へ歩いた。

ポツリ〳〵雨が落ちて來た。三人は可成り疲れて居た。結局其邊の茶屋で少し休んで行く事にした。筆太に色々な屋號を書いた行燈を出した同じやうな家が兩側に軒を竝べて居る。三人はいゝ加減に西綠と書いた其一軒に入つた。

眉毛の薄い、瘠せた四十餘の女將が寒さうに兩袖を胸の上で疊み合せ、店先きに立つて、雨の降り出した往來を眺めて居たが、

「どうぞ」と云つて、未だニスの香の高い洋風の段々から彼等を表二階の座敷へ導いた。新築の白つぽい木地には白熱瓦斯のケバ〳〵しい強い光りが照り反して居た。そしてそれとは凡そ不調和に、文晁とした、汚れ切つた横物の山水が淺い置床に掛けてあつた。ニスの香の高い洋風の段々と云ひ、此不調和な生々しい座敷の様子と云ひ、芝居の仲の町とは大分趣の異つたものだと謙作は思つた。彼は多少落ちつかない氣持で、柱に背を寄せかけて、ジーンと音でもして居さうな疲れ切つた膝から下を立膝にし、抱へて居た。

女將と入れ代つて眼の細い體の大きい、象のやうな印象を與へる女中が茶道具を持つて入つて來た。

「小稻と云ふ人は居るかい」物馴れた調子で阪口が訊いた。

「さあ。もう晩うムんすから、有ればようムんすが。お馴染なんですか」

「いゝえ」阪口はいやに済まして答へた。

人のよささうな女中はそれを眞に受けていゝものか、どうかを迷ふらしかつた。そして、

「一寸見て參りませう」と降りて行つた。

謙作も龍岡も何かしらぎごちない氣持に捉へられて居た。龍岡はそれを拂ひのけるやうに食臺の上の烟草盆から紙巻きへ火を移すと、勢よく立ち上つて、障子を開け、一人縁へ出て行つた。彼が、がた〳〵云はして其處の硝子戸を開けると、同時に雨の音、泥濘を急ぐ人の足音などが聽えて來た。

「いゝ恰好をして駈けて行く」彼は通りを見下ろしながら云つた。

女中が今云つた藝者の斷りと、代りを云つて來た事とを云ひに來た。

間もなく、其藝者が入つて來た。藝者は若かつた。そして變に不愛想にして居る三人を見ると、取りつき端がないやうに一寸赤い顏をした。藝者は長い綺麗な襟足を見せて、靜かに高いお辭儀をした。謙作は美しい女だと思つた。そして、物馴れない自分達は仕方がないとしても、阪口までが何故いやに冷淡な顏をして居るのかしらと思つた。然し間もなく阪口は「何んて云ふの？」とか「何家？」とか訊いた。登喜子と云ふ名であつた。

小鼻の開いた、元氣のいゝ、然し餘り上品でない、名まで男の兒のやうな豐と云ふ雛妓が入つて來た。

登喜子は豐と一緒に次の間へ下ると、豐が大鼓を張る間、三味線を箱から出して、調子を合せた。

登喜子は瘠せた脊の高い女であつた。坐つて居ても何んとなく棒立ちのやうな感じがした。動作にも曲線的な所が少なかつた。其癖妙に輕快な矢張り女らしい感じがあつた。

豐の踊りが濟むと、阪口は、

「何か他の事をして遊ばう」と云つた。豐の踊りは如何にも下手だつたが、濟むのを待つて居たやうに直ぐこんな風に云はれたら流石に不愉快を感じるだらうと謙作は氣の毒に思つた。所が豐は却つてそれを喜んだ。そして、直ぐ下へトランプを取りに行つた。

十一時過ぎて居た。謙作は硝子戸越しに戸外を眺めながら、

「どうするネ？」と云つた。

「左うだなあ」と龍岡も生返事をして一緒に戸外を眺めた。雨はひつきりなしの本降りになつて了つた。もう人通りも前程ではなかつた。一臺の自動車が雨の絲を其強い光りで銀色に照らしながら通り過ぎた。

有耶無耶に尻を落ちつける事になつて、皆はトランプの「二十一」をした。

「どうかすると、石本の細君にそつくりだ」謙作は札を撒きながら、隣りの龍岡を顧みた。

「左う」龍岡は今更らしく登喜子の顏を見た。豐と何か話して居た登喜子は自分の事を云はれたと氣附くと、負けん氣らしい眼を謙作に向けて、

「こちらは私の昔の剛惚れにそりやよく似て居らつしやるわ」と云ひ反した。謙作は一寸まごついて矢が次げなかつた。そして一寸沈默が來かけると、登喜子は又輕く、

「それから、こちらネ」と阪口の方を向いて云つた。「私の本當の兄さんにそつくりだわ」

「公平が保てないぞ」と阪口が云つた。

「あら、それは本當の話なのよ」と登喜子はそれでも少し顏を赧らめながら笑つて居た。

龍岡が大きな聲で、

「オイ。皆早く賭けろ〱」と云つた。

眼の細い女中も仲間入りをして、軍師拳の遊びをする時だつた。謙作は時々登喜子と手を握り合はさねばならなかつた。

「今度はこれだ」こんな事を云つて、肩と肩とを附けて背後で暗號の指を握る。そして敵方の支度がおそかつたりすると、

「ちよいと、これでしたわネ」と登喜子は謙作の顏を覗き込むやうにして、同じ指を握り返したりした。そんな時、他の人の場合では感じない鋭敏さを以つて其握り方の強さを彼は計つた。そして此方から向うを握る場合にも同じ鋭敏さで握り方が、それ以上何の意味をも現はさないやうに注意した。彼は登喜子が多少でも意味のある握り方をする事を恐れた。望みながら恐れた。これは矛盾だつた。然しそれが彼の神經で、又行爲の上の趣味でもあつた。其癖彼は猶且何かで登喜子の好意の證が見たかつた。

ニッケル渡しの遊びをする爲めに、石紙で三人づつに分かれた。龍岡と阪口と女中、それから謙作と登喜子、豐といふ風に組んだ。

親になる人が眞中になつて、五錢の白銅を握つた拳を他の拳と重ねる。交る交る一方を上にして仕舞に其白銅が何方の手にあるか分らなくした所で片々づつ兩側の子の握り拳に重ねる。そしてそれを移すとも移さぬとも見せて、最後に皆握つた兩手を膝の上へ置く。敵方は見てゐて、白銅のないと思ふ手から開けさして行つて、其空の手を餘計取つた程勝になる、左う云ふ遊びである。

今、まぶしい程の瓦斯の光りの下に謙作の組の三人が並んで行儀よく手を膝の上に出して居た。豐は子供らしいふつくらした小さい手を派手な友禪模樣の上に並べて居た。登喜子は女としては大きい方だが、形と皮膚の美しい手を矢張り左うして居る。黑い着物の上だけに一層それは美しく見えた。其間で一人、謙作だけが、折目もなくなつた着物の上に大きい節くれ立つた、その上黑い毛の澤山に生えた手を節の上だけが白くなる位堅く握り締めて出して居た。

「こゝには大丈夫ないネ」と龍岡が登喜子の手を指して阪口を顧みた。

「こゝに渡つてるよ」かう云つて阪口は凝つと豐の顏を見た。豐は下眼使ひをして默つて頤を突き出した。

「向うから、順に開けさして行かうか」と龍岡が云つた。阪口は氣合を入れて、

「その左」「へえ、右」と續け樣に登喜子の兩方の手を開けさして、自身の指を二本折つた。そして、

「どうせ謙作にもないと思ふがネ」ともう一度、組み、確かめて置いて、「へえ、其熊のやうな毛の生えた手を兩方」と云つた。豐は大きな聲を出して笑つた。謙作は默つて武骨な空の手を膝の

上で開けた。そして不愉快を感じた。
彼は先刻軍師拳の遊びを始めた時から自分の武骨な手に拘泥つて居た。或る不調和な感じが、それに平氣にならう、ならうと思ひながら却々退かなかつた。それを今、阪口が露骨に指摘した。勿論彼は指摘された事でも不愉快を感じたが、それよりも、そんな事で自分に不愉快を與へようとした阪口の低級な底意に徒腹を立てた。
三時、四時になると戸外も靜まつて來た。雨も小降りになつて、地面を突きながら廻る鐵棒の響が冴えて聽えた。
阪口の眼は引込んで、はつきりと二皮になつて居た。彼は何かしら苛々しながら肉體からも精神からも來る凋殘な氣持に自身を浸し盡くして却つてだらしなく絶えず饒舌つて居た。
夜が明け始めた。疲れと醉ひとで、龍岡も阪口も、もう其處へ寢ころんでうと／＼として居た。豐は緣へ出て、秋らしい靜かな雨の中をぼつ／＼と歸つて行く人々をぼんやりと眺めて居た。眠さに着崩れた彼女の着物は襟擴がりの不様な恰好になつて居た。瓦斯の光りが段々に間が拔けて來た。食ひ殘された食物の器とか、袋なしに轉がつて居る卷煙草とか、トランプとか、碁石とか、それらの散らかつて居る座敷の様子が如何にも何か一段落ついたと云ふ感じを與へた。
謙作も疲れて居た。彼は前日の寢不足からも可成り疲れて居たが、何かしら腹の底では興奮して居た。そして一人「席取り」の遊びに使つた座蒲團を積み重ねた上に腰掛けて居た。酒と睡眠で薄よごれた顏をしながら、こんなにしてゐる自分達が甚く醜く不愉快に感ぜられた。彼は一刻も早く此場面から自由になりたかつた。彼は自分の普段の氣分を根こそぎ何處かへ持つて行かれたやうな氣がした。そしてそれを取戻さうとでもするやうに下腹に力を入れて、自身の胸や肩のあたりを見廻したりした。
彼は不圖、兄の信行の事を思つた。彼は誰よりも此一人の兄に好意と親みを持つて居た。彼は此兄を一寸思つただけでも、幾らか日頃の氣分を取戻せた。
―もう起きたかしら―左う思つて時計を出して見た。六時半だつた。
彼は段々を下りて行つた。階下では庭の薄暗い倉座敷の中で、觀世よりを持つた女將がいそがしさうに其狹い處でお百度を踏んで居た。突當りの燈明のあがつた神棚から丁度歸る所へ彼が前を通ると女將は愛想よく、
「お早うムいます」と、一寸頭を下げた。そして、彼が電話の場所を訊かうと思ふ内に、又くるりと奧を向いて歩いて行つて了つた。
彼は流し元に働いて居た女中に電話を訊いて、兄へ掛けた。未だ寢て居ると云ふ返事だつた。一寸失望したが、起こして貰ふ程でもないと思つて電話を斷つた。
豐はもう食卓に突伏して眠つて居た。その傍で登喜子が獨り低い爪彈きをして居た。戸外は段々に人通りが繁くなつた。謙作はそれらの人々と一緒に歸つて了ひたかつた。左うでなければ此二人の女に早く歸つて行つて貰ひたかつた。
龍岡も阪口も今は輕い鼾をたてゝ眠つて居る。登喜子は階下から掻卷を持つて來て二人に掛けると、お辭儀をして、それから豐を起した。豐は半分眼を眠つた儘お辭儀をしてふら／＼と起つて行つた。
「お豐さん、これ」左う云つて登喜子は龍岡が持つて來た千代紙の太い紙包みを渡してやつた。豐は前夜それを龍岡から貰つて居た。
九時頃漸く二人は無印の番傘を二本貰ひ受けて、しと／＼と降る秋雨の中へ出た。

三

謙作は午頃疲れ切つて自分の家へ歸つて來た。門を入らうとすると、彼が其一週間程前から飼つて居る仔山羊が赤兒のやうな聲を出して啼いてゐた。彼は其儘裏へ廻つて、物置と竝べて作つた小さい圍ひの處へ行つた。仔山羊は丁度子供が長ズボンを穿いたやうな足を小刻みに踏みながら喜んだ。
「馬鹿々々」
仔山羊は小さい蹄を圍ひの金網へ掛けて出來るだけ延びあがつた。謙作は隣りから塀越しに落ちる黄色い櫻の葉が前日からの雨でピッタリ地面へくつついてゐるのを五六枚拾つて、中へ入つて行つた。仔山羊は細かい足どりで忙しく彼へ從いて廻つた。謙作が蹲踞むと仔山羊は直ぐ前へ來て懐へ首を入れさうにする。
「ヤイ、馬鹿」
仔山羊は美味さうに其葉を食つた。揉むやうに下腭だけを横に動かして居ると葉は段々と吸ひ込まれるやうに口へ入つて行つた。一つの葉が脣から隱れると謙作は又次の葉をやつた。
仔山羊は立つた儘の姿勢で口だけを動かし、さも滿足らしく食つてゐる。謙作はそれを見て居る内に昨夜來自分から擦り拔けて行つた氣分を完全に取りもどしたやうな氣がした。彼は一寸快活な氣分になつて、
　さあ、お仕舞ひだ」と云つて、兩の掌に仔山羊の小さい頭を挾んでぐいと胸へ引き寄せた。
仔山羊は吃驚して、一寸抵抗したが、直ぐされる儘に凝然として了つた。謙作は未だ生えて居ない角の處へ手をやつて見た。それでも其處が少し高くなつて居た。彼は二三日前近所の小犬が五月蠅く、ふざけ掛かつた時に仔山羊が不意に角もない頭を相手の横腹にぶつけた樣子を憶ひ出した。
「まあ、謙さんなの？」お榮が勝手口から顏を出した。「音がするから、誰れかと思つて……」
「いゝ、おからはもうやりましたか？」
「由が今買ひに行きました」
茶の間へ來た。
「御飯は？」
「もう濟みました」
「ぢやあ、コーヒー？　それともお茶ですか？」
「今は欲しくありません」
「昨晩は龍岡さんへ？」
「妙な處へ行きました。吉原の引手茶屋で夜明しをしました」
「へえ。阪口さんの御案内なの？」
謙作は前夜からの事を簡單に話した。そして、
「初めてあゝ云ふ處へ行つたんだけど、何んだかそんな氣がしなかつた」と云つた。
「初めてぢやあ、ありませんもの。お行の松に居た頃にお祖父さんと三人で行つた事がありますよ。何んでもあれは國會が開けて、梅のつきいゝ出しのあつた時だつたかしら」
「そんな事はない。國會の開けた年なら、僕が三つか四つだもの」
「さう？　そんなら何時だらう。夜櫻かしら」
お榮は、夜櫻の頃の仁和賀の話をした。さう云はれると謙作にはそれを見たやうな記憶がかすかにあつた。
謙作は直ぐ二階に床をとつて貰つて寢た。
夕方彼が未だ眠つて居る所に兄の信行が訪ねて來た。玄關へ出て行くと大きい赤皮のポオトフォリオを抱へた會社の歸途らしい信行が立つて居た。
「寢てたのか？」
「あゝ」
「何處か飯を食ひに出ないか」
「あゝ。然し一寸上がらない？」

「靴を脱ぐのが面倒だ。今朝電話をかけたつて？」
「別に用ではなかつたんだ」
　お榮も出て來て切りに上がるやう勸めたが、信行は「お榮さんも如何ですか」などと却つて外出を勸めて居た。
　信行は日本橋の方の小綺麗な大きな料理屋へ、謙作を連れて行つた。謙作は此處で又兄に吉原見物の話をした。そして登喜子と云ふ藝者の事を云ふと、
「あれは中々いゝ藝者だよ、俺も半玉の時分に二三度會つた事があるが、何處の土地へ連れて行つても恥かしくない藝者だ」信行はこんなに云つた。そして不意に、
「深入りする氣でもあるのか？」と云つた。
　謙作は一寸まごついた。彼は少し赤い顏をしながら、
「深入りするとすれば如何すればいゝのか僕には見當も附かないもの」と云つた。
　信行は大きな聲をして笑つた。そして、
「金がかゝるぞ」と云つた。
　信行は學生時代から左う云ふ方には通じてゐた。一と頃藝者を圍つてゐるといふやうな噂を謙作は聞いた事がある。今も獨身で、贅澤好きで、始終金には困つて居た。
　二人は其家を出ると直ぐ別れた。別れ際に信行は咲子の傳言だと云つて、若し暇なら明日、有樂座のマチネーに咲子と妙子を連れて行つて呉れと云つた。
　翌日は風の吹く不快な日だつた。午頃誘ひに來た十六と十二になる妹達を連れて謙作は帝劇の女優劇を見に行つた。
　彼の頭は絶えず淡いながら登喜子の事を考へて居た。彼は身を入れて女優達の芝居が見て居られなかつた。何處かに來て居はしまいかと云ふやうな氣もした。彼は幕間毎に妹達を連れて廊下を歩いた。三四人の知人に會つたが、勿論偶然としても登喜子は居なかつた。そして茶を飲みに入つた處で彼は石本に出會つた。石本は、
「君に少し話したい事があるんだが、妹さんを送つて行くなら後でもいゝけど」と云つた。
　石本は彼の友達と云ふよりは寧ろ信行の友達だつた。信行は自分が中學を卒業して仙臺の高等學校へ行く時に謙作を石本に頼んで行つた。謙作と石本とは以前からもよく知つてはゐたが、取り分け其時から親しくするやうになつた。謙作は其頃中學の三年生で、信行の眼からはそれが中學生の一番危險な時代のやうな氣がしたからであつた。一體本郷の謙作の實家の人々が謙作に冷淡である中に信行だけが獨り彼の事をよく心にかけて心配して居た。石本とすれば其年頃の青年として左う云ふ依頼を受ける事が既に惡い氣のしない事である上に、謙作に對する好意からもよく世話をした。謙作が代數の試驗で危かつた時などは石本は自身の試驗勉強を後にして、徹夜で彼にそれを教へたりした。
　かう云ふ謙作と石本との關係はそれからもずつと續いて來た。何時までも石本は先輩で、謙作は後輩だつた。それはいゝとして、今の謙作には昔ながらの石本の自分に對する老婆心が段々閉口になつて來た。同じ自分の事を心配して呉れるのでも兄の信行のは其呑氣な性質の内に神經の行き渡つた所があるだけに彼にはそれ程氣にならなかつたが、石本には絶えず何か教へようとする氣が見えるので、好意は認めながら彼は時々腹を立てた。石本は此頃まで或る大臣の秘書官をしてゐたが、内閣の更迭と共に今は割りに暇な日を送つてゐる。
　謙作は妹達が自分達だけで歸れるといふので電車まで送つて別れた。
「料理屋だと左う長く話せないから、いやでな

かつたら待合へ行かうか」と石本が云つた。

二人はそれから歩いて銀座を越して築地の方へ行つた。石本は其處の或る大きい家へ謙作を連れて行つた。

「話がしたいのだから、誰れも呼ばずに飯だけ食はして呉れ」石本は女中にかう云つた。

奥まつた八疊の間に通された。それは茶がかつて居て、少しも小細工のない氣持のいゝ座敷だつた。前の小さい庭も品よく出來て居た。前日の引手茶屋の座敷とは大分樣子が異つて居た。床には京都の畫かきの稻荷山の幅が掛けてあつた。此畫かきの畫を謙作は前から積極的に嫌ひだつた。然しかういふ家の座敷にはこんな畫も惡くはないと思つた。殊に水盤に生けた秋草が、其の稻荷山の山路に合つて居た。

石本の話といふのは謙作の結婚の事だつた。

「實は信行に頼まれた事なんだがね」こんな風に云つた。「信行は自分が獨者でゐながら、君にそれをいふのは變な氣がするらしい。然し若し君にその氣があれば僕達は本氣でいゝ人を探したいと思ふんだが……」

謙作は斷つた。

「何故」

「他に左う云ふ心配をして貰ひたくないんだ」

「何故だい」

「何故でも厭だ」謙作は不愛想に云つた。彼は凝つと自分を見詰めてゐる石本から顏を反向けて、庭の方を見ながら默つてゐた。彼は我れながら石本に會ふと如何にも駄々つ兒らしくなる自分を變に思つた。そして、「第一、君の左う云ふ老婆心がうるさいんだよ」と附加へた。

「それぢやあ、よさう」石本も白けた氣持で答へた。そして、二人は暫く默つてゐたが、石本は直ぐ又くど〱と始めた。謙作が何か云はうとすると、

「まあ、僕の云ふ事だけ云はして呉れ」と云つた。謙作は苛々しながら聽いて居た。然し到頭彼は、

「もう閉口だ。よさないか」と露骨に不快を現はしてそれを遮つた。

石本は急に笑ひ出した。謙作も思はず笑つた。

謙作は今の自分は精神的にいゝ状態に居ないのだと云ふ事、そして他人に對し變に疑ひつぽくなつて居て、迚も人頼りの結婚などは思ひもよらないと云ふやうな事を話した。彼は今、愛子の事を云ひ出したくなかつたが、信行でも石本でもが、殊更に結婚の話を持出すのは明らかに愛子との事があつたからだと思ふと、矢張りそれを云ふより仕方がなかつた。

「今、僕に愛子さんとの事を書いてゐるんだが、どうしても向うの氣持が分明らない」

こんな事も云つた。

彼は石本の好意には禮を云つた。然しこれからの自分には餘り立ち入つて貰ひたくないと云ふ事も云つた。

石本は少し淋しい顏をして默つて了つた。丁度女中が食事を持つて來た。間もなく二人は氣樂な事に話を移した。そして氣樂な氣分にもなつて行つた。

「君の奥さんに似た人を見る興味はないかい？」謙作は先刻から云ひ出したかつた事を云つて見た。登喜子の事を話したいと云ふ慾望にも誘惑されたが、石本を誘ふ事で行く理由を作りたい氣もあつた。

「別に興味もないが、一體何處に居るんだい」

謙作は登喜子の事を話した。そして

「どうかすると非常によく似てゐるんだ」と云つた。

「其内連れて行つて貰はう」石本はかういつたが、それに餘り興味はないらしかつた。

石本と別れて、彼は自家まで歩いて歸つた。途々石本か誰れかの言葉として云つた「若い二

人の戀愛が何時までも續く／＼と考へるのは一本の蠟燭が生涯點つて居ると考へるやうなものだ」と云ふのを不圖憶ひ出した。「然し實際左うかしら？」と彼は又思つた。此言葉は懷疑的になつてゐる現在の彼には何んとなく惡くない響きもあつたが、左う彼が思つたのは、彼の實母の兩親の關係が彼に想ひ浮んだからであつた。二人は愛し合つて結婚した。そして終生愛し合つた。「成程最初の蠟燭は或る時に燃え盡されるかも知れない。然し其前に二人の間には第二の蠟燭が準備される。第三、第四、第五、前のが盡きる前に後々と次がれて行くのだ。愛し方は變化して行つても互に愛し合ふ氣持は變らない。蠟燭は變つてもその火は常燈明のやうに續いて行く」此考へは、彼に氣に入つた。そして、母方の祖父母の場合は實際それだつたに違ひないと考へた。彼は先刻石本にそれを云つてやれなかつた事を殘念に思つた。すると、不意に、

「然し西洋蠟燭は次げないネ」と石本が云つたやうな氣がした。所が、同じ想像の自分が、

「其二人は純粹に日本蠟燭なんだよ」と答へた。

彼は歩きながらこんな事を考へて、獨で可笑しくなつた。

そして彼には死んだ祖父母の姿が懷しく想ひ浮んだ。

四

謙作は矢張り登喜子の事が忘れられなかつた。彼はあの不愉快だつた二三日前の夜を憶ひ、軍師拳で登喜子と競んで居た時の事なぞを想ふと、不思議な悩ましさが胸に上つて來た。彼は自分で自分の指を握つて見て、握る時の感覺と、其握られた感覺とを計つて見たりした。それも兩方が自分では明瞭しなかつた。然し彼は登喜子に深入りして行かずには居られない程の氣持になつてゐるとは我れながら思へなかつた。只此儘で自分の此氣持を凋まして了ふのは何んとなく惜しい氣がした。それにしろ、そんな下心を自ら意識しつゝ出掛けて行く事は、相手が左う云ふ職業の女にしろ、如何にも圖々しく、氣がひけた。

兎も角何かしら、表面的にも行くだけの理由がなければ彼には出掛けられなかつた。それには矢張り石本を誘ふより仕方がないと思つた。

彼は早速石本に端書を書いた。然し何枚書いても書き損ひをした。石本を利用すると云ふ意識が邪魔になつた。結局端書をよして、電話を掛けに行つた。

「明日行きたいんだ。一緒に行つて貰へるかい？」これだけを云ふと、彼は一寸氣を沈ました。

「よろしい、それぢやあ、其時、もう一度電話をかけて呉れ給へ」

謙作はほつとした。

彼は金を用意する必要があつた。彼は父から分けて貰つた金で、生活とか、本とか、旅行とか、その他必要の金には困らなかつたが、小使錢としては子供からの習慣で時々に三圓、五圓と云ふ風に僅かづつお榮の手から貰つて居たので、左う云ふ事には何か他の事で金を作らねばならなかつた。彼は神田の知つて居る古本屋に翌日の朝の内來て呉れるようにと端書を出した。

それから彼は自分の持つて居る浮世繪を皆賣つてもいゝと思つた。廣重の五十三次の或るものとか、式亭三馬の編纂した初代豐國と國政の似顏繪本とか、歌麿、湖龍齋、春潮あたりの長繪とか、其他やくざな物まで一緒にすると一抱へ程あつた。彼はそれを持つて近所の骨董屋に出掛けて行つた。

「朝の内、ホテルを二軒廻りましたよ」骨董屋は謙作の顏を見るなり直ぐこんな事を云つた。

祥瑞の出物があつて見せたら、こりやあ、本物だや、ねえて云やあがる」
　何の鑑識眼もなしに、度胸だけで買つて、それ等を西洋人の間へ持ち廻つてゐる。かう云ふ商人の露骨さをいきなり見せられると、謙作は持つて來た物を見せる氣がしなくなつた。然し、
「そりや、何んです」こんな事を云つて骨董屋が手を出した時に彼は矢張りそれを渡した。
　謙作が默つて居ると、骨董屋は一枚々々、然し故意にぞんざいに見ながら、「え――」とか「へえ」とか意味のない言葉を一人で五月蠅く繰返して居た。それ等の繪の價値を如何に自分が低く見てゐるかを見せようとする見え透いた心持が少し馬鹿々々しかつた。謙作は一切、價の話をせずに直ぐ包ませて、持つて歸つて來た。
　自家では龍岡が彼の歸りを待つて居た。
「これでよかつたら、お餞別に進呈しよう」と謙作は今持つて歸つた浮世繪を包みの儘龍岡の前へ出した。
「ありがたう。然しこれは君のコレクションの全部ぢやないか。こんなに貰つちやあ、濟まない。僕はどうせ人にやる心算なんだから、いゝ物だけは去つて置いて呉れ給へ」
「いゝんだ。皆とつて貰ふ方がいゝんだ」
　二人の間には二三日前の夜の話が出た。
「あの登喜子と云ふ藝者は中々立派だね」と龍岡が云つた。
「左うかしら？」謙作は不意に拘泥した氣持から、こんな風に云つて了つた。尤も彼は普段から綺麗と云ふ言葉と立派と云ふ言葉とを多少區別して考へて居た。立派と云ふ中には大きさ或は豐さと云ふ要素もなければならぬと彼は思つてゐる。所が、登喜子の美しさにはそれらは無かつたから必ずしも彼の言葉は僞りではなかつた。が、實は彼が拘泥したのは「若し龍岡も……」と云ふ疑問が不意に想ひ浮んだからであつた。「立派と云ふより普通美しいと云ふ方だらう」謙作は最初の否定的に響いた言葉をかう訂正した。
「つまり、さうさ」
「君は登喜子が好きかい？」謙作は思ひ切つて訊いて見た。
「左う訊かれると困るが、君はどうだい」と龍岡は反問した。
　謙作は一寸困つた。彼は自分で自分の顏の赤くなるのを感じながら、
「僕は好きだ。然し若し君が好きなら、僕は遠慮するよ。それが出來る程度だから」と云つた。
　龍岡は大きな身體を搖すつて笑つた。そして、
「その遠慮は要らないよ。第一僕はもう二タ月すれば向うへ行つて了ふんだ」と云つた。
「うん」
「然しそれはよかつた」龍岡は何にこ／＼して云つた。「此間君が何んだか不愉快さうな顏をして居たので、あんな場所へ君を誘つた事に氣が咎めて居たのさ」
「不愉快は不愉快だつたよ」
「どうして」
「阪口の調子が厭だつたぢやないか」
「阪口の此頃は何時だつてあゝだらう」
　謙作は默つて居た。
「ぢやあ、又行つて見る氣があるネ？」
「明日石本と行くつもりだ」
「それなら、今晩僕と行かうか」
　其晩九時頃になつて二人は又西緑へ行つた。然し登喜子は居なかつた。新富座へ行つて歸りは多分十一時過ぎだらうと云ふ事だつた。此前阪口が云つたのを女中が覺えて居て小稲と云ふ藝者を訊いたが、これもゐなかつた。豐だけが居た。それから、隣りの茶屋の藝者が來たが、貧弱で二人は何の興味をも持てなかつた。二

人は一時間程ゐて歸つて來た。歸る時お蔦と云ふ女中が、

「そんなら明日夕方でも一寸お電話を下さいまし」と云つた。

「大丈夫來るが、それでも電話をかけるのかい？」

「それでも、若し……」とお蔦は具合惡さうに云つた。

翌日彼は八時頃眼を覺ました。戸外では烈しい雨音がして居た。樋を傳ひきれない水が二階の庇から直接、地面まで落ちる。其騷がしい響を聽きながら彼は困つた降りだと思つた。雨は別に困らないが、此降りの中をも行くと云ふ事が、相手にはどうしても氣輕な事とは離れないだらうと思ふと、彼は重苦しい氣持になつた。第一石本が此雨では如何かとも考へた。其上自分が似てゐると思つても「これが……」と云はれる場合を思ふと氣遲れがした。

彼は起きてからも何となく落ちつけずに天氣ばかり氣にして居た。午前中と書いてやつた古本屋も來なかつた。然し午頃から幾らか小降りになつた。

「お端書では午前中と云ふ事でしたが、何しろ、えらい降りで」間もなく來た古本屋はかう云ひわけをした。

謙作は次の間に出して置いた古本を見せた。總てで五十圓程になつた。彼は母方の祖父の遺物として貰つた法外に大きな兩側の銀時計と、それに附いてゐる不細工な金鎖とを出して來た。

「これをどうかして貰へるか？」

「承知しました」

「然し其金は若しかしたらかぶせかも知れないよ」彼は全く何方か知らないのでかう念を押した。

古本屋は仔細らしく掌で重みを見ながら、

「いゝえ。かぶせぢやあ、有りません。尤も向うへやれば直ぐ硝酸で擦つて見るんですが、これがむくでしたら大したものですよ」と側へ積み上げた本へ手を掛けて「これだけの二層倍は確かですネ」其處で古本屋は謙作の乘氣な返事を期するやうに口を噤んだ。謙作は默つて居た。古本屋は舊式な大きい時計に就いても「かう云ふのは船乘りが欲しがるんですよ。熱帶邊へ行くと、此位のでないと機械が膨脹して狂ひますからネ。兎も角見せた上で、手紙で御返事致します」こんな事を云つて大きな風呂敷包みを背負つて歸つて行つた。

夕方になつて雨はすつかり上がつた。さばさばした氣持になつて家を出た。美しく澄み透つた空が見上げられた。强雨に洗はれて、小砂利の出て居る往來には、それでも濡れた雨傘を下げた人々が歩いて居た。

彼は知つて居る雜誌屋に寄つて、約束通り西緑へ電話をかけた。その後で石本へかけた。

「今用事の客があるんだが、もう歸るだらうと思ふ。早かつたら是非行く」かう云つた。石本は大門を入つてどれ程行くかとか、西緑の字まで訊いて、電話を斷つた。

三の輪まで電車で行つて、其處から暗い土手道を右手に灯りのついた廓の家々を見ながら、彼は用事を急ぐ人でもあるやうに、さつさと歩いて行つた。

山谷の方から來る人々と、道哲から土手へ入つて來た人々と、今謙作が來た三の輪からの人とが、明かるい日本堤署の前で落ち合ふと一つになつて敷石路をぞろぞろと廓の中へ流れ込んで行く。彼も其一人だつた。

大門を入ると路は急に惡くなつた。彼は立ち並んだ引手茶屋の前を縁に近く、泥濘をよけながら、一軒々々と傳つて西緑の前まで來た。

登喜子はもう來て待つて居た。お蔦と店へひたりと坐つて、往來を眺めながら氣樂な調子で何か話して居た。そして、謙作の姿を見ると、二人は一緒に「さあ、どつこいしよ」と云ふ心持で起上がつた。――と、そんな氣が謙作はしたのである。

「お二人？」と登喜子が云つた。

謙作は段々を登りながら、

「今に、もう一人來る」と云つた。

「龍岡さんですか」

「君に似た人と云つた人の御亭主だ」

「えゝ？」

「其人の奥さんが君に似てるんだよ」彼は少し苛々した調子で早口に云つた。

「あゝ」と登喜子は笑ひ出した。「何んとかの御亭主だつて仰有るんですもの」

食卓のまはりには座蒲團が三つ敷いてあつた。謙作が其一つに坐つた時、

「皆さんは？」と登喜子が訊いた。

「龍岡とは昨晩來たよ」

「えゝ、それは昨晩一寸寄つて伺つたわ。それからあの方は……阪口さんは？」

「あれから會はない」

お蔦が上がつて來た。そして此女も、

「皆さんは？」と訊いた。

謙作はかう云はれる度に何か非難されるやうな氣がした、かう云ふ場所に不馴な自分が、それ程の馴染でもない家に電話まで掛けて、一人で出向いて來る事は何うしても不自然で氣が咎めた。石本に見せると云ふ事がなければ、幾ら登喜子が好きでも自分は此處へは來られなかつたと思つた。

登喜子は笑ひながら、今の「御亭主」の話をして、二人面白がつた。

「何んだか、ちつとも解らないわ」と今度はお蔦が呑込めない顔をした。

「解らない人ネ。其方の奥さんが私に似てらつしやるのよ。偉いでせう？」と登喜子は反り身になつて見せた。

「何が偉い」とお蔦が云つた。

謙作には登喜子が何んとなく前とは變つて見えた。然し美しさは變らなかつた。

「今度は又皆さんでいらつしやいな。大勢で遊ぶ方が面白いわ。つまり此方が遊ばして頂くんだわネ。坐つたつきりで、三味線を置かせないやうなお客樣もありますけど、そりやあ、左う云ふ方に出て居れば藝は上がるわネ。だけど、時々は全く泣きたくなるわ」

「君は踊りが上手なんだつて？」謙作は信行から其れを聽いたのを憶ひ出して云つた

「誰がそんな事を云つて？」

「君の喜三太の踊りを見たと云ふ人から聽いた」

「へえ？　喜三太？　あゝ、弓張月の爲平次です」かう云つて登喜子は一寸赤い顔をした。

夜明かしの夜の話が出た時に、

「阪口さんのこれネ」と登喜子は指の長い白い手を拳固にして重ね、それを振りながら、「全く御上手だわ。人を焦らすやうな事ばかりなさるんですもの。仕舞に本統に分らなくなるわ」と阪口の其技術を讃めた。謙作がそれで腹を立てた遊びである。

「お連れは何をして居らつしやるんでせう」

「もう少ししたら電話をかけて見よう」

「早くいらつしやればいゝのにネ。二人ぢやあ何んにも出來ないわ」

「小稲と云ふ人は居るかしら」

「左うネ、未だ早いから、乾度あるわ」

然し謙作は呼んで貰はうとは云はなかつた。彼は今、かうして登喜子と會つて居る、そして餘りに毒にも藥にもならない事を座を白らけさせまいと努力しながら互に饒舌つて居る。本體

これが、三日も前からあれ程に拘泥し、あれ程に力瘤を入れて来た事と何う云ふ関係があるのだらうと云ふ気がした。彼は深入りした話をしようとは初めから少しも思つてはゐなかつた。然し今話してゐる事は、或は話してゐる心持は、余りに浅く、余りに平面過ぎると思つた。

彼はこれが然し一番あり得べき自然な結果だつたとも思ひ直した。自分が一人角力に力瘤を入れ過ぎただけの事だと思つた。そして今日の登喜子は兎も角も此前よりは軽い意味での親しみを現さうとして居るのだ。今はそれで満足するより仕方がない。それ以上を望むのは間違ひだと思つた。

小稲の事で何か云ふだらうと思つて彼の顔を見て居た登喜子は、彼が其儘黙つて了つたので、

「初めてお眼にかゝつた晩にも小稲ちやん、仰有つたんですつてネ。それから昨晩もだつて。中々御熱心なのネ。何故なの？」かう云つて表情に富んだ一寸こすさうな眼つきをして笑つた。謙作はそれをも美しいと思つた。

「一昨日は勝手に連れの人が云つたんだ」

「でも、小稲ちやんと云ひませんか。――だつて二人つきりですよ、違ひないんですもの」

登喜子はそれを云ひに急いで起つて行つた。謙作は何かしら重荷を下ろしたやうな気安さを感じた。

登喜子は中々昇つて来なかつた。彼は思ひ出したやうに袂から巻烟草を出して吸ひ始めた。彼の烟草はのんでもよし、のまなくてもよしと云ふ程度のものだつた。それはサミアと云ふ、函に女の黒ン坊の顔のついた烟草だつた。

「小稲ちやんありました」かう云つて登喜子が入つて来た。そして坐ると、少しふざけた調子で、

「これ、別嬪なんですか？」と其烟草の函を取り上げて彼の前へ出した。

「君はどう思ふ？」

「左うネ　随分黒いわネ」

「黒くちや、駄目かい？」

「……私、これよりも、あれが好きよ。何んて云ふのかしら、アルマかしら。あたまに薔薇だか何んだかつけた女。あれ綺麗だわ」

「左うかネ」

「左う云へば今、階下にアルマがあつたわ。貰つて来よう」かう云つて登喜子は又起つた。

「僕も一寸電話をかけて見よう」

そして彼も一緒に降りて行つた。石本は、「今、客が帰つた所だから、少し晩すぎるから今度誘つて呉れないか」と云つた。今は謙作も左う失望しなかつた。

十分程して小稲が来た。それに姿のいゝ、動作の静かな如何にも女らしい感じを多分に持つた女だつた。謙作は入つて来た瞬間其女を非常に美しく思つた。小稲は入つた処で一度膝をついて挨拶してから、又起つて、

「登喜ちやん今晩は」と微笑しながら、食台の側へ来て並んで坐つた。

「ちよいと、小稲ちやん、これと、これと、何方が別嬪だと思つて？」登喜子は直ぐ其二つの函を小稲の前へ並べた。

「どれ？」と小稲は額を寄せたが、「そりやあ――」と不意に、其ふつくりした身体や静かな動作などを裏切つた、変に甲高い声を出して笑つた。

謙作は総てで丁度登喜子と対照するやうな女だと思つた。姿勢や動作が左うだつた。又近くで見ると登喜子の米噛や頸のあたりに薄く細い静脈の透いて見えるやうな美しい皮膚とは反対に小稲は厚い、そして荒い皮膚をして居た。

謙作は段々に窮屈な気分から脱け出して行つた。五六杯の酒に赤い顔をして居る彼は今は気楽な遊びに没頭出来る気持になつて居た。

アルマの烟草を金口の處まで灰を落さないやうに吸ふと云ふ競技を始めた。

「ア、ル、マ、のルまで來た」

「ちよいと見て頂戴」小稻は悔々、螢草を描いた小さい扇子で下を受けながら、それを謙作の前へ出した。

「漸々、アの字にかゝつた所だね」

「字がお仕舞になつてからも未だ二分ばかりあるのね。こりやあ、迚も金紙までは持たないわ」から云つて小稻は笑つた。

登喜子は默つて、脣を着けた儘、只無暗とすつぱ〳〵吸つて居た。其内小稻の方の灰がポタリと落ちると、小稻は「あつ」と云つて一寸體をはずまい〳〵やうな事をした。其拍子に登喜子の方の灰もポタリと食臺の上へ落ちて了つた。

「あゝ、小稻ちやん！」登喜子は怒つたやうな眞面目な顏をして、横目で小稻の顏を凝つと見た。

「登喜ちやん、御免なさい」

「…………」

「ね、御免なさい」と云つて小稻は笑つた。

「お前さんが始末するのよ。よくつて？」登喜子は指に殘つた金口を灰吹きへジュッと投込むと、其儘起つて、

「この烟」と一寸上を見て、座敷を出て行つた。小稻は懷紙を二枚ばかり器用にたゝんで、それで神妙に灰を扇子へ落して始末した。

間もなく登喜子は歸つて來た。そして襖を開けると其處へ立つて、

「さあ、早く〳〵」と云つて、濟ました顏をして見せた。それは先刻謙作が、女は入つて來た瞬間に一番美しい顏をすると云つたからであつた。

「おかみさんやお蔦さんを狩り立てゝ來たわ」と云つて、元の席へ坐ると、「此方はどうかしら」とサモアの烟草を抜き取つて、小稻の顏を見ながら、ついと起つて食臺の小稻とは反對の側に坐り直した。そして默つて烟草盆から火を移して居た。呆れたと云ふやうな顏をして見た小稻は、

「まあ、ひどい」と云つて、疳高い聲で笑ひ出した。

女將やお蔦も出て來た。花合はせの石を使つて、トランプで二十一をした。

一時頃謙作は俥で歸つて來た。赤阪までは随分の長道中だつた。然し月のいゝ晩で、更け渡つた雨上りの二重橋の前を通る時などは彼も流石に晴々としたいゝ氣持になつて居た。

歸ると古本屋からの手紙がもう來て居た。鎖は矢張りかぶせではなかつたが、銅が割りに多く、思つた程の價にはならなかつた。時計の方け色々話して見たが、どうしてもつい少しの價にしかならないのは御氣の毒だと云ふ事が書いてあつた。

五

二度目に登喜子と會ふ前と後では不思議な程に謙作の氣持は變つてゐた。彼は今も登喜子を美しく思つてゐる。そして好きだ。然し其美しく思ひ方も、好き方も、前の變に重々しく息苦しかつた時に較べて、妙に輕快なものになつて居た。彼は漸く落ち着けた。彼は前の自分を想ひ、全體何を目がけてあれ程にも力瘤を入れ、あれ程にも一人先走りしたものか解らない氣がした。

勿論此變化は一つは登喜子の態度で導かれたものである。が、それよりも、彼は愛子との事で、から云ふ事には變に自信がなくなつて居た。そして、この自信なさが、知らず〳〵此の落ち着きに彼を滿足させようとして居るらしかつた。或る彼はもつと突き進みたがつて居る。然し他の彼がそれを怖れた。愛子との事で受けた彼の

相手はそれ程に未だ彼には生々しかつた。
　愛子の父は水戸の漢法醫であつた。そしてどう云ふ事情で左うしたかは謙作も知らなかつたが、愛子の母は謙作の母方の祖父母を養父母として、其處から其漢法醫に嫁入つたのであつた。謙作の母と愛子の母とは幼馴染で特に親しかつた。彼は母の死後、よく愛子の母から實母の事を聽いた。「いゝ方でしたよ。涙もろい、本統に親切な方でした」愛子の母はよくこんなにいつた。芝居好きで、一人で芝居の眞似をして祖母に叱られたといふやうな話もした。
　誰からも本統に愛されて居ると云ふ信念を持てない謙作は僅かな記憶をたどつて、矢張り亡き母を慕つて居た。其母も實は彼に左う優しい母ではなかつたが、それでも彼は其愛情を疑ふ事は出來なかつた。彼の愛されると云ふ經驗では勿論お榮からのそれもなくはない。又兄の信行の兄らしい愛情もなくはない。然しそれらとは又、度合ひの異つた、本統の愛情は何んと云つても母より外には經驗しなかつた。實際母が今も猶生きて居たら、それ程彼にとつて有難い母であるかどうか分らなかつた。然しそれが今は亡き人であるだけに彼には益々偶像化されて行くのであつた。

　そして彼は何んとなく亡き母の面影を愛子の母に見て居た。或る時——多分それは母の十三回忌の時であつた。彼は其日本郷の實家に行つて其處で、愛子の母が、舊式な大小小紋に黒繻子の丸帯を締めて來て居るのを見た。其姿が彼の心に不思議な懷かしさを起した。彼は何氣なく其姿に時々眼をやつて居た。すると、何かの機會に偶然並んだ愛子の母が其着物の袖を引いて見せて、
「これも、帯も、今日のお佛樣の御遺物ですよ」
と云つた。彼は妙な氣持になつた。一種の感じに打たれた。そして彼は默つて居た。少時すると愛子の母は手を袖の中で縮めながら、
「ゆきがもう出ないので、腕の方にあげをしてゐるの」こんな串戯を云つて笑つた。
　愛子の長兄は慶太郎と云つて中學は異つてゐたが、信行とは同年、謙作よりは二つの年上で、二人は子供の頃からよく遊んだ。然し信行も謙作も彼と左う親しくはなれなかつた。性質に何處か合ふ事の出來ないものがあつた。が、その割りには謙作だけは牛込の愛子の家へよく出入りした。彼は何よりも愛子の母に會ひたかつたからである。
　愛子は彼より五つ年下であつた。子供の頃は彼は何方かと云ふと愛子を少し五月蠅く感じてゐた。例へば慶太郎等と何かして遊んでゐる時に、何も出來ない癖に仲間入りをしたがつたり、又或時は愛子の母と割りに眞身り話し込んでゐるやうな場合、「もうねんねするの。もうねんねするの」こんな事をいつて母を自分の寢床に連れて行きたがつたりする事がよくあつたからである。彼は左う云ふ時代から知つてゐるだけに愛子が相當の年になつても妙に異性としては彼に左う強く來なかつた。
　そして彼が本統に愛子を可憐に思ひ出したのは彼女が十五六の時に彼女の父が死んで、其葬式に白無垢を着て、泣いてゐる姿を見た時からであつた。
　愛子の女學校での英語の試驗勉强の手傳ひなどした事もあつたが、左う云ふ時には彼は自分の氣持を出來るだけ現はさないやうに努めてゐた。一つは彼の臆病からも來てゐた。が、同時に彼の感情はそれ程燃えても居なかつた。其上未だ子供氣の脱けてゐない愛子にはそんな事が如何にも遠い事のやうに感じられたからでもあつた。けれども、これは彼の主觀の勝つた感じ方で、愛子が特別に年より左う云ふ感情で遲れてゐたわけではなかつた。愛子からすれ

ば、子供からの關係上、謙作には左ういふ感情で至極、さつぱりして居られたからでもあつたらう。

　愛子の女學校の卒業期が近づくに從つてぽつぽつ結婚の話が起つた。謙作は自分の申出が萬々一にも不成功に終る事はないと信じて居たが、それでも何か知れぬ不安か、迚も六ケしさうに私語く事もあつた。然し彼は此不安を謂はれないものと考へてゐた。自分の臆病からだと思つてゐた。彼はこれを愛子の母に打明けたものか、慶太郎に打明けたものかと考へた。愛子の母に打明けると云ふ事は如何にも彼女の好意につけ込むやうな氣がしていやだつた。然し慶太郎に一番先きに云ふのも彼には何となく氣が進まなかつた。仕事の相違、人生に對する考へ方の相違、それから互に相手を輕蔑する氣持が作られてゐた。慶太郎は今、大阪のある會社に出てゐる。そして彼は最近其會社の社長の娘と結婚する事になつてゐるが、それにも可なり不純な氣持があつた。慶太郎は彼にそれを平氣で公言してゐた。謙作は斷々斷られる事はないと信じながらも、かういふ慶太郎に打明けて行く事は何んだか氣が進まなかつた。

　彼は矢張り本郷の家の人に打明けて父の方から、向うに話して貰ふより他ないと思つた。

　一體彼は止むを得ぬ場合の外は滅多に父とは話をしなかつた。それは子供からの習慣で、二人の間では殆ど氣にも止めない事だつたが、偖て左う云ふ事を頼みに行かうとすると、それが矢張り妙に億劫な氣がした。然し或る夜彼は思ひ切つて父にそれを頼みに行つた。

「向うで承知すれば、よからう」と父は云つた。「然しお前も今は分家して、戸主になつて居るのだから、左う云ふ事も餘り此方に頼らずに、なるべく、自身でやつて見たらいゝだらう。俺はその方がいゝと思ふが、どうだ」

　謙作は最初から父の快い返事を豫期して居なかつた。然し豫期通りにしろ、矢張り彼は可成り不快な氣持がした。彼は悪い豫期は十二分にして行つたつもりでも、それでも萬一として氣持のいゝ父の態度を空想して居たのが事實だつた。所が父の答へは豫期より少し悪かつた。變に冷たく、薄氣味悪い調子があつた。何故本氣で進まうとする自分の第一歩に、父がこんな一寸躓かすやうな調子を見せるのだらう。彼には父の氣持が解らなかつた。

　彼は兄の信行に頼まうかとも思つた。この話をした時に兄は彼の爲めに喜んで吳れた。

「それがうまく行くといゝね。愛子さんは本統にいゝ人だよ」こんた事をいつてゐた事を憶ひ出した。然し、父にあゝ云はれて了ふと彼は今更、信行に頼むといふ事も出來にくい氣がした。どうせ同じ事だ。矢張り總てを自分一人でやらう。結局その方が簡單に濟む。彼はかう思つて、或る日自分で愛子の家へ出掛けて行つた。

　所が、愛子の母はそれを聽くと非常に吃驚したらしかつた。彼がそれを切り出した時のドギマギした樣子は寧ろ慘めな氣さへした。謙作の方も少しドギマギした。そして、これは自分の知らない許嫁があるのかしらと思つた。

「兎も角、慶太郎や、此方の親類方にも相談した上に本郷の方へ御返事をしませう」

　彼女は此申込は本郷とは全然無關係に自分が云ひ出すので、父も勿論知つてはゐるが、直接申込むと云ふのも實は父の意志から出た事だと話した。

「へえ。それは不思議ですネ」愛子の母は顏を曇らせて云つた。

　謙作は不快な氣持で歸つて來た。父の返事は兎も角豫期の内だが、此返事——返事の表面上の意味は至極當然で別に不思議はないが、これに含まれた變に冷たい調子は彼の豫期には全く

入り得ないものだつた。
　然し彼は望みを捨てなかつた。最近慶太郎が上京するなら、もう一度同じ事を慶太郎に申込んで、はつきりした事を聽けばいゝ。愛子の母はどうかしてゐるのだ。
　慶太郎はそれから十日程して出て來た。彼はそれを兄の信行の口から聽いて知つた。然し先きから何か知らせのあるまでは自分から出かけるのも變な氣がして、心待ちに待ちながら其儘四五日を過ごした。が、先きからは何の音沙汰もなかつた。謙作は侮辱されたやうな氣で焦々した。彼は思ひきつて慶太郎に電話をかけて見た。慶太郎は、
「君の處へも早速出たいと思つて居るのだが、今度は此地の支店の方へ用で來たので、それが一と通り片づくまでは何處へも御無沙汰なんだ」こんな風に如才ない調子で云つた。謙作は不快な氣持を自ら押しつけながら、
「今晩は在宅かい？」と訊いて見た。
「さあ。今晩は生憎宴會に招かれて居るんだがね」
「明日の晩は？」
「明日の晩か。――明日の晩、お待ちして居ませう。よかつたら晩飯に來て呉れ給へ」慶太郎は殊更快活らしく云つてゐるが、それが腹からのものでない事は顔は見えなくても露骨に感じられた。
　謙作は最初から愛子自身は出來るだけ此話の圏外に置いて、直接の交渉はしまいと決めて居た。その方が舊い習慣を尚ぶ彼女の母にもいゝ事だし、假りに直接の交渉をした所で、それは却つて愛子を當惑さすだけのものだと云ふ氣が彼にはあつた。愛子は何方かと云へばさう云ふ風の女だつた。然し今になれば彼は彼女を全然圏外に置いて餘りに樂觀してゐた自身の呑氣さが悔いられた。實際彼は萬々一にもこんなに扱はれる場合は想像出來なかつたのである。若しかしたら何かの理由で父が裏から邪魔をしてゐるのではないかと云ふやうに邪推も一寸起した。
　彼は此事を誰にも打明けない前にお榮に打明けた。其時お榮が喜びながら、一寸淋しい顔をした事を彼は憶ひ出して、神經質に考へればこれも何かであつたかも知れないと今更に思つた。然しお榮の境遇が境遇である。自分が結婚すればお榮は自然自分と別れて行かねばならぬ。お榮がそれを思ふ時、喜びながらも淋しい氣持になるのは、當然な事だと思ひ直した。
　翌日、日が暮れると、直ぐ彼は慶太郎を訪ねた。所が其處には二人の見知らぬ先客があつて、二人は慶太郎の高等商業學校の同窓と云ふ事だつた。
「實は晝間兩君と會ふ筈だつたが、急に用事が出來て會へなかつたもので、晩に來て貰つた。然し僕ももう二三日で全然暇になるから、さうしたら、僕の方から出よう。色々の事は其時ゆつくり話すとして、今晩はまあ、我々長松連の話でも聽いて何かの材料にして呉れ給へ」こんな事を云つて慶太郎は快活らしく笑つた。謙作は我れながら露骨にむつとした。こんな見え透いた事を平氣で云へる慶太郎の心持を不思議にさへ思つた。そして腹から腹を立てたが、然しこれ程にも自分と會ふ事を重荷にして居るとすれば此話は到底駄目に違ひないと思つた。
「君は何日まで居る？」
「さあ、彼方の仕事も忙がしいしね。用の濟み次第歸るつもりだが、それにしろ、明後日の晩はどうか都合して是非お訪ねしよう。君の方はいゝね？」
「いゝ」
　謙作は一時間程居て、歸つて來た。
　愛子と母親とは其日親類へ行つたとか、留守

だつた。此事も謙作には故意としか思はれなかつた。
　彼は其儘自家へ歸る氣がしなかつたし、今お榮と顏を合せて、何か訊かれる事も厭だつた。若しもお榮が彼の肉身の者であつたら、或は彼は其懷に抱かれるやうな氣持で、自分を投げかけて行けたかも知れない。が、彼にはそれが出來なかつた。彼は的もなく、人通りの少ない道を無闇と歩いた。今は物總てが彼には白けて見えた。
　十一時過ぎ彼は漸く自家へ歸つて來た。自家では兄の信行が待つて居た。そしていきなりかう云ひ出した。
―お前はどうしても愛子さんでなければ、いけないのか？　如何なんだ―
―それは、さうぢやない―
―本統にさうぢやないネ？―
―……―
―若しさうなら、俺は慶太郎や先方のお母さんと喧嘩をしてもやつて見るよ。出來るかどうか分らないが、兎も角やる所まではやつて見る。然しそれは、お前がどうしてもと云ふ場合だけだ。お前の愛子さんに對する氣持が其處まで突きつめて居ないのなら、思ひ斷る方が俺はいゝと思つて居る。何方なんだ―
―思ひ斷らう―
―うん―と信行は一寸お辭儀でもするやうに點頭いて默つた。
二人は少時默つた。
―思ひ斷れるのなら、思ひ斷つた方がいゝだらう―と信行がいつた。―お前の不愉快な氣持はよく解る。お前にとつてはこれは二重の不愉快だつたんだ。然し何しろ慶太郎があゝ云ふ男だし、お母さんもお前に好意はあるのだが、何しろかう云ふ時には女は手頼にならないものだから。―
―慶さんの態度がいけない。斷るなら斷るだけの明瞭した理由を何故云はないのだ。變に一時逃ればかりして此方に不愉快を與へる事で間接に斷る意志を仄めかして居る」
　信行は返事をしなかつた。
「する事が餘りに良心がなさ過ぎる」
―昔からさう云ふ奴だよ」と信行が云つた。
　暫くして信行は歸つて行つた。
　謙作はもう慶太郎の來る事をあてにはしては居なかつた。然し若し來て、明瞭した理由を云つて呉れたら、自分はまゐるとしても、兎も角今の一人泥田へ落込んだやうな此不愉快からは脱けられるのだかと思つた。慶太郎は矢張り愛子の結婚を手段として何かに利用する氣に違ひない。理由としてはそれ以外にない。然しそれでもはつきり云つて貰ふ方がいゝが、慶太郎もそんな事を云ふ筈はないとも思つた。
　謙作の豫期通り、慶太郎は來なかつた。其夜九時頃に謙作は慶太郎からの速達郵便を受取つた。
　大阪からの電報で、今から急に歸らねばならなくなりました。多分二週間程したら又出て來る心算です、然し君の話は母からよく聽いて居るから、大阪へ歸り次第、書面で御返事します。度々の破約は實に恐縮の至りです。何卒不惡。
　こんな事が走り書きにしてあつた。
　それから一週間程して大阪から今度は長い手紙が來た。こんな意味だつた。
　實は今度上京する一ト月程前に永田さん彼の方の課長で、謙作の父に引き立てられた男）から話があつて、矢張り會社の人だが、其人に愛子をやる事にして置いたのです。勿論僕だけの意見としてではあるが。それで、其用も兼ねて上京した所が、母から突然君の話を聽いて實は僕も驚いた次第です。僕は御承知の通り滅多に自家へは便りをしない方だし、何れ

近く會ふといふ氣があつたので、忙しさにまぎれ此事を早く母に知らせなかつたのも惡るかつたが、それは自分だけの考へとしてにしろ、兎も角永田さんや當人にはその事を承知した後なので、實に僕も當惑した。勿論僕としては舊い友達である君の所へ愛子を上げたい氣は十分にあるのですが、兎も角、向うが謂はゞ先約の話だ。僕は仕方ないから大阪に歸つて向うに十分な理解を求め、それを承諾さして、それから君の方の話を進めるより他ないと考へたのです。所が、永田さんはよかつたが、本人がどうしても承知しないのです。自分はもう親類だの友人にすつかり話して了つた。今更それだけの事で先約を破られては自分の顔が立たない。若しも君の方でどうしても呉れないと云ふ事なればそれ迄の話だが、僕にそれを同意させようと云ふのは君の方が餘りに勝手だと、以てのほかの見幕でした。これは此男として無理ない事と思ひます。元々結婚の問題は全然僕に任せると云ふ愛子の言葉を其儘に僕が實行して、よく相談もせずに、大體の約束を決めて了つたのが惡かつたが、かうなつては僕としては矢張り君の話をお斷りして先約を守るより仕方ありません。以上の次第ですから下阪の際など、色々君に不愉快を與へた事と思ひますが、僕の氣持も察して何卒總てを出來るだけ善意に解して頂きます。云々。

謙作は讀みながら、「嘘つけ！　嘘つけ！」と何度となく呟いた。よくも空々しくこんな事が平氣で書けるものだと思つた。

然し愛子はそれから三月程して實際大阪へかたづいて行つた。それは、或る金持の次男であつたが、慶太郎の居る會社の男ではなかつた。

謙作の心に受けた傷は案外に深かつた。それは失戀よりも、人生に對する或る失望を強ひられる點でこたへた。元々愛子は仕方なかつた。それに腹を立てる事は出來なかつた。それから慶太郎も仕方ない。今度のやり方でも腹は立つが如何にも慶太郎のやりさうな事と思はれる點で、段々それ程には思はなくなつた。只一番こたへたのは愛子の母の氣持であつた。日頃其好意を信じ切つて居ただけに、此結果になると、其好意とは全體如何云ふものだつたかが彼には全く解らなくなつた。斷られるまでも何か好意らしいものを見せられたら彼はまだ滿足出來た。所がそれらしいものも全で見せられずに彼は突き放された。彼は不思議な氣がした。

然し、「世の中とはこんなものだ」から簡單に諦める事も出來なかつた。若しさう簡單に片附けられたら、彼はまだしも樂だつた。が、これが出來ないだけに彼は一層暗い氣持になつた。

彼は書いて見る事で多少でも此事がらを明瞭さす事が出來るだらうと考へた。そして書いたが、矢張り或る所まで來ると、どうしても理解出來ないものに行き當つた。

人の心は信じられないものだと云ふ、俗惡な不愉快な考へが知らず〳〵自分の心に根下ろして行くのを感ずると、彼はいやな氣持になつた。それには近頃段々面白くなくなつて來た阪口との關係もあづかつて力をなして居た。

然しかう傾いて行く考へに總て人生の觀方をゆだねる氣は彼になかつた。これは一時の心の病氣だ、彼はさう考へようとした。が、それにしろ、新たに同じやうな失望を重ねさうな事には知らず〳〵心が用心深くなつて居た。寧ろ臆病になつて居た。

そして登喜子との事が既にそれであつた。彼は自分に盛上がつて來た感情を殺す事を恐れながら、扨て近づかうとして、それが最初の氣持には全で徹しない或る落着きへ來ると、それでも何、突き進まうと云ふ氣には如何してもなれなかつた。其處で彼の感情も一緒に或る程度

に並びて了ふ。

六

謙作が二度目に登喜子と會つてから二三日しての事であつた。其日は丁度十四五年前に死んだ親しい女の命日で、彼は其頃の親しかつた友達等と染井に其墓參に出掛けた。

墓參を濟まして巣鴨の停車場へ歸つて來たのはもう日暮れだつた。彼等はそれから賑かな處へ出て、一緒に食事をする筈だつたが、此電車で上野の方へ廻るか、市内電車で直ぐ銀座の方へ出て了ふかで、説が二つに分れた。謙作は何んと云ふ事なしに、上野の方へ出たい氣が強くして居た。上野から登喜子のゐる方へ行くと云ふ程の氣はなかつたが、只何んとなくその方へ心が惹かれるのだ。

然し結局銀座へ出る事になつた。そして銀座まで來ると今度は又、食事をする場所で説が分れた。皆は昔からの子供らしい我儘を出し合つた。それが面白くもあつた。近頃佛蘭西人が開いた西洋料理屋へ行かうと云ふ連中と、うまい肉屋へ行かうといふ連中とで、中々ゆづり合はなかつた。

「君、あの家の ードウブルには硝子のかけらが入つて居るよ」緒方と云ふ一人がこんな事をいつてけちをつけたりした。

結局別々に食事をする事になつて、其代り肉屋の連中が茶だけを其西洋料理屋へ飲みに行く事にして分れた。

皆が又一緒になつて、其家を出たのは九時頃だつた。そして、尚暫く夜店の出てゐる側を歩いたが、或る處で皆分れる事にした。

「今日はよさう　兄貴や嫂が來てるので、今、無斷で家を空けるのは不味いんだよ」緒方はかう云つた。然し一度思ひ立つて了ふと謙作には中中思ひ切れなかつた。

「第一、今頃出掛けても其藝者が居るか居ないか、分らないぢや、ないか」と緒方が云ふ。

「若し居たら行くかい？」

「まあ、待ち給へ、そんなに眞劍なのかい」

兎も角、電話をかける事にして二人は或るカッフェに入つた。

電話に出たのはお蔦だつた。

「登喜ちやんは今日は市村座で、小稲さんは昨日から遠出で未だ歸つて來ないんです」と氣の毒さうに云つた。

「然しはねたら歸つて來るだらう」

「さあ、歸るだらうとは思ひますが、今訊いて見ませう。そちらは何番ですか？　伺つて置いて、直ぐ御返事致します」

そして暫く待つて居ると電話が掛つて來た。

「芝居を見殘して、お客様と蔦多屋へ行つてるんですつて。今御飯を頂いて居るから、もう直きお暇が出さうだと云ふんですけど……」

「それなら行かう」左う謙作は云つた。

緒方は酒好きだつた。

「行くと決つたら、僕はもう少し飲むよ」かう云つて彼は其家に腰を落ちつけて、ウヰスキー・ソーダを續樣に二三杯飲んだ。

一時間程して二人は西緑へ行つた。

「先程、お電話がきれると直ぐ小稲さんが歸つて來たんですよ」かういつてお蔦は案内を他の女中に頼んで自分は直ぐ電話口に立つた。

間もなく小稲が來た。それから暫くして登喜子も來た。

謙作の眼には此前とは登喜子が又幾らか變つて見えた。初めての緒方が居るので多少改まつた氣持もあつた。それに疲れても居るらしく、元氣がなかつた。そして、出先から直接來た爲めに着物が小稲程にきちんとして居ないのを時時氣にして直さうとするのを謙作は可矢しく思つた。

其夜も子供らしい遊びで到頭夜明しになつた。然し一體こんな事を始終さしていゝのかしらと謙作は思つた。いゝ加減に切上げて歸るに越した事はないが、三時四時になつては歸る事も出來ない。左うかといつて、此處へ寝さして呉れと云ふのもいゝか惡いか知れなかつた。

戸外には秋らしい靜かな雨が降つて居た。その音を聽きながら二人がうと〳〵して居る間に女達は歸つて行つた。

十時頃眼を覺まして、二人は湯に入ると、幾らか氣分がはつきりした。又前夜の二人を云つたが、小稲だけ來て、登喜子は同じ家の表二階の客の方へ行く事になつて居た。

緒方は少し醒めかけるとは飲んだ。もう遊び事も話もなかつた。小稲は其だらけて行く座をもち兼ねて、只ぼんやりと淋しい眼つきをして、其處に仰向けに、長くなつて居る緒方の顔を凝つと眺めて居た。

緒方は閉ぢてゐた眼を不圖開いた。そして、小稲が凝つと自分の顔を見て居た事に氣がつくと、或る具合惡さから、氣のない調子で、

「どうだネ。何か面白い話でもないかネ？」と云つた。

「左うネ」と小稲も淋しさうな笑顔をした。「下谷の藝者衆が白狐に自動車の後押しをされたと云ふ話、御存じ？」

「知らない。何處で？」

「つい近頃の事なんですつて。大宮へ行つた時とか」

小稲は眞面目になつて其話をした。

「そりやあ怖かつたんですつて。お連れに云へばいゝつて云ふんですけど、そら、後でどんな仇をされるか知れないでせう？」

こんな風に話した。謙作は少し馬鹿々々しい氣がした。小稲が本統にそれを信じてゐるならいゝが、信じても居ない事を殊更眞顔でいふのが馬鹿々々しかつた。

「其話は餘り面白くないネ」と彼は云つた。すると、直ぐ

「左うネ」と小稲も自分から贊成して了つた。

「作り話さ」

「全く、ちつと怪しいわネ」と笑つて居る。眞顔で云ひ出して置きながら、左う云はれると何の不愉快も見せずに一緒に笑つて了ふ、何んでも客のいふ通りになるやうな此小稲を謙作は不愉快にも、亦可憐にも思へた。

「それは乾度三題噺の出來損ひか何ぞだらう」

「あゝ、乾度左うネ」と小稲は自分でも氣持よささうに持ち前の疳高い聲をあげて笑つた。「一白家のお酌さんが、伊豫紋か何處かで聽いて來たんです。本統の話かと思つてたわ。……本統に左うだわ。よくお解りになつてネ」

「それぢやあ別の話をし給へ」と緒方は眼をつぶつた儘物憂さうに云つた。

「面白い話なんて、そんなにないわ」と小稲は困つたやうな顔をして默つて了つた。そして二人がそれを忘れた頃に小稲は突然、

「ぢやあ今度は本統の話よ」といつて自分だけで笑ひ出した。

それは近頃此廓であつた心中未遂の男が裁判所で調べられた時に、大びけにあがつたと云ふと、判事だか檢事だかが大割引きにあがつたとは如何云ふ事だと訊き返したと云ふ話だつた。小稲は一人可笑しさうに笑つた。謙作は知つてゐたが、緒方は其裁判官同様に大びけを知らなかつた。折角の笑ひ話も笑ひ話にならなかつた。

何時か緒方は低い鼾を立てゝ眠つて了つた。謙作の方は然し疲れた儘で眠くはなかつた。彼は所在なさに碁盤を出さして小稲と五目並べをした。

時々向うの座敷から登喜子の聲が聽こえて來た。謙作は今はもう登喜子との關係に何のイ

リュージョンも作つては居なかつた。然しそれでも此處に登喜子が居ない事、そして向うの部屋で誰かと話してゐると云ふ事は變に淋し〳〵感ぜられた。居ないならば來たいゝ。向うに居ると云ふ事、それはどうしても彼の意識を離れなかつた。實際にも登喜子は謙作等の座敷の前を通る時には必ず何か聲をかけた。中へ入つて來る事もあつた。すると謙作の氣分は、自分でも不思議な位に生々した。

日暮れになつて漸く雨は上つた。表二階の客は中々歸りさうもなかつた。二人は此家を出た。扉を出ると直ぐ緒方は西洋料理屋に寄つてウヰスキーを飲んだ。緒方は酒なら幾らでもよかつた。謙作は可成り疲れて居た。然しそれまで何んとなく息苦しい氣持を續けて居た彼は、今、雨の上つた戸外の空氣に觸れると、急に氣分の晴々したのを感じた。

日本橋の方へ出る事にして、二人は三の輪まで歩いて、其處から人形町行きの電車に乘つた。

緒方は厚いなめし皮のやうな感じのする濃いオリーヴ色の中折れ帽子を其儘窓硝子につけて、腕組みをして眼をつぶつて居た。

車坂の乘換に來た。乘る人も降りる人も多かつた。眉毛を落した若い美しい女の人が、當歳位の赤兒を抱いて入つて來た。その後ろから十六七のおとなしさうな女中が風呂敷包を抱へてついて來た。二人は謙作の前の丁度空いた處へ腰かけた。

よく〳〵太つた元氣な赤兒だつた。綺麗な友禪の着物に矢張り美しいチャン〳〵兒を着て居た。然し身體が小さいので着物がよく〳〵着かぬかして、だらしなくそれがぬき衣紋になつて、其處から丸々と盛り上つた柔らかさうな背中の肉が白く見えて居た。赤兒は頭を振り、手足を切りに動かして、一人元氣に騷いでゐた。

女の人は二十一二だつたかも知れない。然し細君になつた人を見ると誰でも自分より年上のやうな氣のする謙作にははつきりした見當はつかなかつた。其人は友達と話しするやうな氣輕さと親しさで女中と何か切りに話して居た。

女の人から女中とは反對の方に一人措いて、四つ位になるお嬢さんをおぶつた女中が腰かけて居た。お嬢さんは子供らしい興味で切りに騷いでゐる赤兒の方を先刻から其大きい眼で凝つと見て居た。すると赤兒の方も氣がついて、其お嬢さんの方を見た。仕舞に赤兒はきい〳〵いふ聲を出して手を延べ矢鱈と身體をもがき出した。それでもお嬢さんの方はむつつりとした怒つたやうな顏をして見てゐた。

餘り赤兒がもがく〳〵ので話に氣を取られてゐた女の人も漸く〳〵氣がついた。そして至極輕快な首の動作でお嬢さんの方を振り向いた。それは生々とした視線だつた。

「おや、此人はお嬢さんとこへ行つて話し込みたいんだネ」と云つて女の人は笑つた。お嬢さんは平氣でむつつりとしてゐた。おぶつてゐる女中が何か鈍い調子でお愛想を云つた。

女の人は連れの女中との話を其儘ばつたり切つて、今度は急に――寧ろ發作的に赤兒の頬、だの、首筋だのへぶツ〳〵と口でお灸(とも少し異ふが)日本流の接吻を無暗とした。赤兒はくすぐつたさうに身もだえをして笑つた。女の人は美しい襟足を見せ、丸髷を傾けて、倘しつこく喉の邊りにもそれをした。見て居た謙作は甘つたるいやうな變な氣がして、今は眞正面にそれを見てゐられなくなつた。彼は何氣なく首を廻らして窓外を眺めて居た。そして此女の人は未だ甘つたれ方を知らぬ赤兒よりも遙かに上手に甘つたれてゐると思つた。

若い父と母との新しい甘つたるい關係が、無意識に赤兒對手に再現されて居るのだと思ふ

と、謙作は妙に恥かしくもなり、同時に餘りいゝ氣持もしなかつた。然し精神にも筋肉にも少しのたるみもない、そして何んとなく輕快な感じのする此女の人を謙作は非常に美しく感じた。彼は恐る〳〵自分の細君としてかう云ふ人の來る場合を想像して見た。それは非常な幸福に違ひなかつた。一時は他に何物をも欲求しない程の幸福を感じさうな氣さへした。

「さあ、今度おんりするのよ。君やにおんぶしてエッチャ〳〵つて行くのよ」美しい細君は赤兒を女中におぶせながらこんな事を云つた。そして電車の停まるのを待つて降りて行つた。

謙作は何んと云ふ事なし、幸福を感じて居た。此幸福な感じは其人の印象と共に後まで彼の心で尾をひいて居た。

二人は小傳馬町で降りると、人道を日本橋の方へ歩いて行つた。雨に濡れた往來が街の灯りを美しく照りかへして居た。日本橋の假橋を渡つて暫くいつた横丁の或る小綺麗な料理屋へ二人は行つた。

緒方は其處の酒を讃めながらよく飲んだ。飲むと彼は明瞭した氣分になる。そして初めて知つた仲の町藝者と新橋赤阪邊の藝者とを比較したりした。

緒方は赤阪の或る藝者との關係で散々面倒があつて、今は抱主から暇をせかれて居ると云ふ話をした。謙作は緒方が其ごた〳〵に對し少しも逃げる態度なしに、同時に變に力んだ氣持もなしに居る所を面白く思つた。其處に或る上品な餘裕が殘されて居た。かう云ふ話は兎もすると、聽手に幾らかの反感を起さすものだが、それなしに聽けるのはそれが爲めだ、と謙作は思つた。

九時頃二人は其家を出た。然し何んとなく未だ別れる事が出來なかつた。そして的もなしに尙銀座通りをぶら〳〵と歩いて行つた。

「清賓亭まで行けば僕のウヰスキーが置いてあるが、どうだい、行かないか」

「まだ飲みたいかネ」

「うん」

緒方は本統の酒好きだつた。親讓りの酒好きだつた。そして幾ら飲んでも少しも醉漢らしくならなかつた。

「元横濱で藝者をしてた女が居る」

「左う云ふ女を集めてるのかしら」

「そんな事はない。その女だけさ。藝者をしてるより其方がいゝんだらう。第一つき合が要らないし、衣裳も要らないし」

清賓亭では二人は二階の奥の一段下がつた、戸に鏡などを張つてある、一寸活動小屋のやうなケバ〳〵しい部屋に通された。

女中達は賑やかに立働いて居た。大きい笑聲が其處此處から響いて來た。

「いらつしやいまし」「○さん、いらつしやいまし」戸口でかう云つて、其儘忙しさうに走つて行く女が二三人あつた。

謙作は夜明かしと煙草のみ過ぎとで、眼が充血して氣持が惡かつた。彼は買つて來た眼藥をさしてから、テーブルに兩肘を突き、掌で瞼を支へた儘、しみる眼をつぶつて、凝つとして居た。流石にもう二人共に疲れて居た。

「此處の連中は皆、大變元氣だネ。此方が弱つて居るので尙そんな氣がする」

襟のかゝつた着物を着た二十三四の女が片手にウヰスキーの瓶を、もう一つの手にソーダ水の瓶を二本下げて笑ひながら入つて來た。

「これでせう？」とウヰスキーの瓶を上げて女中は首を傾けた。

「いらつしやいまし」女中は近寄りながら謙作に丁寧にお辭儀をした。そして緒方へは親しみを表すやうに默つてお辭儀をした。

ウヰスキーの瓶のはり紙に○にオの字が筆太

に書いてあつた。
「君の字かい？　下手だなあ」と緒方が云つた。
「下手でも解れば結構ぢやあ、ありませんか」
女中は帶の間から口ぬきを出してソーダ水を開け、起したコップに酒とそれとを割つて注いだ。そして空いたソーダ水の瓶を持つて驅けて出て行つた。
「あれぢやあないだらう？」
「うん。來なかつたら呼んで見よう」
其處に又異ふ女中が初めての謙作に多少遠慮する心持を見せながら靜かに入つて來た。身體の大きい美しい女だつた。謙作は此女だらうと思つた。女は少しはれぼつたい眼に媚びるやうな表情をして、「先日は」と云つて緒方の方へ近寄つて行つた。脣が冴えた美しい色をして居た。
緒方は默つて前のコップを一ト息に飲干すと自身で酒とソーダ水とを割つて、
「これを飲み給へ」と女の前へ置いた。
女は緒方の側の椅子へ腰を下ろして、其コップを透かすやうに見ながら、
「強さうネ」と云つて、其儘緒方の前へ置きかへた。
「これは君が飲むんだよ」から云つて緒方が又それを置きかへようとすると、女は、
「こんな強いのいやよ」と其手をおさへた。
「ぢやあ、半分づつ飲まう」から云つて又押しやると、其度酒はこぼれて厚いテーブル・クロースににじみ込んだ。
「Oさんからお上んなさい」女はきたない物でも扱ふやうに又置きかへた。
「屹度飲むネ？」
「飲むわ」
緒方は胸を張つて一ト息に半分程を飲んで、それを女の前へ置いた。然し實際は半分は飲めて居なかつたが、女は神妙に取上げて、それに紅い脣を當てた。
「本統に強い」故意らしく眉をしかめながら、女は幾口にも飲んだ。
前の女中が新しいソーダ水の瓶を下げて入つて來た。そして、其處へ立止まつて、
「駄目よ。お加代さん。そんな強いのを……」と眞面目に云つた。
「お餘りを半分だけ飲んだんぢや有りませんか」お加代といふ女は怒つたやうな眼を向けて早口に云つた。それには取り合はずに、
「Oさん本統に駄目ですよ。お加代さんを醉はさないで下さい」と云つた。
「女中頭はどうも嚴格で困るな」
女中は持つて來たソーダ水を開けて、緒方のコップへ注ぎながら、
「そちらはちつとも減りませんのネ」と云つて笑つた。
「だから、おあひを誰かして呉れなければ困るぢやないか。お加代さんが不可ければ、お鈴さん、君がするんだよ」と緒方が云つた。
「Oさんのおあひは迚も出來ませんわ」
お鈴といふ女中もお加代と並んで其處へ腰を下ろした。すると、お加代は突然、小聲で、
「年寄りでさばけたつもりかも知れないが、失禮だわ」とさも腹立たしさうに云つた。
「本統に厭味ねえ」とお鈴も眉を顰めた。
默つて居た緒方が
「その怒つてる所で自棄酒を如何だい」と云つた。
二人は一寸具合惡さうに顏を見合せた。そして一緒に笑ひ出した。
緒方は何の彼のと二人に飲ました。お鈴と云ふ女中も最初云つた程には八釜しく云はなかつた。
お加代は時々階下から呼ばれて降りて行つた。そして暇が出來ると又入つて來た。

物馴れない謙作は餘り口を利かなかつた。彼れは皆の話を聴きながら、葡萄の皿を抱へ込むやうにして、獨り其實を丹念に指の先から口の中へすべり込まして居た。

お加代が駈けて入つて來た。

「オヽ暑」自身の片袖を平たく兩手に持つて忙しく胸の所でバタ／＼やつた。醉つて居る。そして其うるんだ眼が電燈の光りを受けて美しく光つて見えた。

「お加代さん。本統にもうおよしなさいよ。又倒れると大變だから」

「私、倒れなんかしない事よ」お加代は左うつけ／＼いつてお鈴をにらんだ。

謙作は仰向いて、又眼藥をさした。

「僕にも呉れないか」と緒方が手を出した。謙作は眼を瞑つた儘それを手渡した。

「○さん、私が差して上げてよ」

「大丈夫かネ？」

「大丈夫よ」お加代はそれを受取つて緒方の背後へ廻つた。

「もつと仰向いて」

「かうか？」

「もつと」

其間にお鈴は手早く椅子を四つ並べて、

「○さん、これがいゝわ」と云つた。

お加代は其一つに腰かけて、「膝枕をさして上げるわ」と云つた。

お鈴がナップキンを取つて渡した。

「おや／＼水臭い膝枕だネ」こんな事を云ひながらお加代はそれを膝の上に擴げた。

緒方は並べた椅子の上に仰向けに寝た。

「私の指で開けても、よくつて？」

「自分で開けよう」緒方は兩指を使つて眼ぶたを擴げた。

お加代は差し損じた。藥は耳の方へ流れ落ちた。お加代は笑ひながら、

「もう一遍」と又眼ぶたを擴げさした。

「暗かないの？」お鈴が覗込むやうにして云つた。

「明るくてよ、此通り」とお加代はお鈴を見上げて云つた。そして又注意を集めて注さうとしたが、細い硝子管の藥が少なくなつて居るので、中々落ちなかつた。緒方は白眼をして待つて居たが落ちないので、眼ぶたを擴げた儘、見ようとした。

お加代は發作的な叫びをあげて立上つた。椅子が後ろへ、ガタンと倒れた。緒方も驚いて起上がつた。

「まあ、どうしたの？」とお鈴も驚いて云つた。

お加代は眼藥の壜を持つた儘、默つて立つて居た。そして少し嗄れた聲で、

「白眼だと思つて居ると、急にキョロリと黒眼が出て來たのよ。それが私を見たやうで、ないの……」と云つた。

「何を云ふの、此人は……」お鈴は一寸不愉快さうな顔をした。

お加代は少し青い顔をして默つて立つて居た。

其夜十二時近くなつて、二人は又西鶴へ行つた。葡萄酒に中々醉はれなかつた。夜が更けると却つて一時疲れた氣分もはつきりして來たが、それも長もちはしなかつた。三時頃いよいよ參ると、謙作はもう自分の寝床が無暗と戀しくなつた。それで思ふ樣の眠りに落ちて了ひたかつた。彼れは緒方に豫定通りに必ず來て貰ふ約束をして、一人いゝてらを借りに俥で歸つて來た。

途中で夜が明けて來た。雨後の美しい曙光が東から徐々に湧き上がつて來るのを見ると、十年程前の秋、一人旅で日本海を船で通つた時、もう薄く雪の降りてる劒山の後ろから非常な美しい曙光の登るのを見た。其時の事を

は憶ひ出した。

七

謙作が眼を覺ましたのはもう午頃だつた。二タ晩家を空けたと云ふ事で何んとなく彼はお榮と顏を合はすのが具合惡かつた。戸外では百舌のけたゝましい啼聲がして居た。彼は暫く其儘横になつて居たが、思ひ切つて床起きた。そして雨戸を一枚繰ると、隣りの梧桐の天邊から百舌が啼きながら逃げて行つた。

實にいゝ日だ。風もなく、秋らしい軟らかな日差しが濡れた地面に今百舌の飛立つた梧桐の影を斜めに映して居た。風呂の烟突からかすかな烟りが立登つて居る。彼は其朝未明に門を開けさせた女中に湯を沸かすやう云ひつけて置いた事を憶ひ出した。

「やつと起きたね」下から大きな信行の聲がした。お榮が段々を登つて來た。

「もう一時間も待つて居らしたのよ」

彼は急いで降りて行つた。信行は茶の間の長火鉢の側で烟草をすつてゐた。彼は二タ言三言立つたまゝ話して、そして、

「信さん、風呂は如何かな？」と云つた。

「俺は澤山だ」

「それぢやあ、一寸失敬するよ」かう云つて謙作は風呂場へ行つた。

彼は久しぶりで風呂へ入つたやうな氣がした。氣持のいゝ日光が硝子窓を透して箱風呂の底まで差込んでゐた。湯氣が日光の中で小さな無數の粒になつてモヤ〳〵と動いて居る。彼は兄が待つてゐるのでなければ長閑な氣持でゆつくりと浸かつて居たかつた。

「お前が家を空けるのでお榮さんが心配してられるよ」信行はそんな事をいつて笑つた。

謙作は曖昧な返事をした。

「昨日偶然山口に會つたら、お前の小説を〇〇〇に出したいと云ふんだが、何かないかい？」と信行が云つた。

「何月號に」

「來月號に欲しいやうに云つて居たが、それは何時でもいゝんだらうけど」

「そんなら何時か送らう」

「今、出來てゐるのはないかい？」

「此間中書いてゐたのは中止したんだ」

「うん」信行はそれを知つてゐるらしく只首肯いた。

「新しい、何か書けた時に送らう」

「前に書いたんで何かないかい？」

「あるけど、餘り出したくないから」

「左うか。ぢやあ、時は分らないネ。何んでも山口は切りにお前の物を紹介したがつて居るんだ」かう信行が云つた。

山口と云ふのは信行の中學の同級生で高等學校を中途で止して、今は純粹た雜誌記者になつて居る男である。

「どうしてだらう？」

「何んでも初め龍岡に勸められたらしい。それから山口は阪口の所へ行つて訊いたらしいんだ。すると阪口も切りにお前の物を讃めて居たと云ふんだがネ」

「うん」謙作は變な氣がした。「何時阪口に會つたのかしら？」

「昨日の話で昨晩とか云つてたよ」

「左う。約束は出來ないが、若しかしたら出して貰ふかも知れない」

座敷に食事が用意されてあつた。そして今日は珍らしくお榮も一緒に食卓に就いた。

謙作は緒方の事が氣になつて居た。それで食事が濟むと直ぐ近所の車屋へ行つて西緑に電話を掛けてみた。

「もう少し前、お歸りになりました」かう云つたお蔦は更に「一寸待つて下さいましよ」と云

つて引つ込んだ。

「昨晩は」と登喜子が出た。「誰か分つて？」

「うん」謙作は自分でも少し不愛想だと思ふやうな返事をした。一つは本屋の小僧だの客だのが近く居てそれとなく電話の話に注意して居るやうな気がしたからであつた。

「どうかしてらつしやるの？」から云つてからお蔦の方を向いて「どうかしてらつしやるやうよ」と云ふのまでが聞えた。

「緒方さんが其方へいらつしやるんですか？……いらしたら、昨晩二十一で怒つた事、お詫しといて下さいまし。よござんすか。……餘りお勝ちになるんですもの。私本統にちつとばかし怒つたわ」

謙作はいゝ加減にして帰つて来た。

緒方はそれから間もなく来た。彼はもう酒の気をさしてゐた。

「登喜子もいゝが、虐待されるんで弱るね」緒方は珍らしくこんな事を云つた。

「トランプでもやらないか？　今夜蔦に出て来て君にあやまつて呉れとか云つてゐたよ」

明方近くそれは丁度謙作が帰らうと思つて居る頃だつた。トランプの二十一をして居て、緒方にだけ不思議な程いゝ札がついた。そしてとんとん拍子に皆の財産を捲上げた。親貫をして、はいると又緒方がさらつて行つた。其時登喜子は口惜しがつて何か云つて居た。何を云つたか謙作は聴いてゐなかつたが、間もなく、緒方は急にごろりと仰向けに寝て、

「あゝあ。かう勝つちやあ、詰らんな」と云つて自分だけ勝負から抜けて了つた。謙作は気にも留めずに三人であとを続けてゐたが、先刻電話で登喜子が気にしてゐた事や、今緒方が何気なく左う云つた言葉などから想ひ合せると、此一寸した事が、二人の気持では可成りに妙なひつかゝり方をした事がらに違ひないと思つた。彼は一週間前、同じ場所で阪口に不愉快を感じた。それを龍岡が殆ど気づかずにゐたのを不思議に思つたが、今自分が其位置に置かれて見て、案外左う云ふ事には気づかない場合もあるものだと考へた。――それにしろ阪口が山日に自分のものを横領したといふのが若し本統なら、それは如何いふ気持からだらうと彼は今更に迷つた。

暫くして仲居は帰つて行つた。酒の気がなくなると緒方はしきりに寒がり出した。お蔦の不断しないに時々飲むシェリーがあつた。それを持つて来ると、緒方は其甘つたるい酒を不味さうに飲んでゐた。四時頃になつて二人は家を出た。そして芝の龍岡の家へ行つた。それから龍岡を誘つて日陰町を散歩しながら三人は又清賓亭へ行つた。然し其日は何故かお加代は遂に出て来なかつた。

翌日は起きた時から、謙作は何んだか気分が悪かつた。然し丸善まで行く用があつて出掛けると、途々無暗に嚔が出た。用を済ますと彼は直ぐ帰つて床へ入つた。不規律な生活で疲れた所に風邪をひいたので、彼は其翌日も、一日床の中で暮らした。彼はもう少し自分の生活をどうかしなければいけないと思つた。然し彼の気持は妙に落ちつかなかつた。其翌日も元気なく半日床の中で暮らしたが、誰もなかつたので、湯に入ると、もうどうしても家に凝つとして居られなくなつた。彼は夕方から龍岡を誘つて、西緑へ行つた。登喜子も小稲も来たが少しも其座ははずまなかつた。夜が更けるに従つて、彼は寧ろ苦痛になつて来た。登喜子との気持も二度目に会つて彼が自分のイリュージョンを捨てたと思つた時が寧ろ一番近かつた時で、それからは弾力を失つたゴム紐のやうに間抜けてゆるく二人の間は段々と離れて行くやうに感じられた。彼は今、登喜子を好きながら、それが熱情となつて少しも燃え立たない自分の心を

悲しんだ。愛子との事が自分をかうしたと云ひたい氣もした。然し實は愛子に對する氣持が既にかうであつた事を思ふと彼は更に淋しい氣持になつた。

彼は自身が如何にも下らない人間になり下がつたやうな氣がした。彼はそれを凝つと一人我慢する苦しみを味はひながら夜の明けるのを待つた。そしてつく〴〵自分にはかう云ふ場所は性に合はないのだと思つた。

次の日の午後、彼は緒方の訪問を受けた。緒方は緒方の親類の人が、信行と同級だつた人の妹と結婚する話があつて若し信行が先の家庭の様子を知つてゐれば聽いて置いて貰ひたいといふやうな用事を兼ねて來たのであつた。

「それは左うと一昨日は到頭歸らなかつたのかい？」と緒方が云つた。

「どうして？」

「お加代と云ふ人が一寸でもいゝから君を呼んで呉れと云ふので、十時過ぎに俥を迎へに寄越したが、聽かないかい？」

謙作は顏を赤くした。お加代が如何云ふ氣持でそんな事を云つたか？　それとも誰にも時々、左う云ふ調子を見せるのか？　左う云ふ事が彼にはさつぱり見當がつかなかつた。彼は初めて會つた時、既にお加代には多小遠をつけられた。只其何んとなく荒つぽい粗雜な感じは、一方では好き、他方では厭に思つてゐた。それは深入りした場合乾燥不愉快なものになると云ふ豫感からも來て居た。第一今の自分の手には餘る女と云ふ感じから、興味は持てたが、それ以上には何んとも考へてゐなかつた。其上に、お加代にとつての其日の自身を思ふと、プラスでもマイナスでもない只路傍の人に過ぎなかつたと思ひ込んでゐただけに今緒方からそれを聽くと變に甘つたるい氣持が胸を往來し始めた。然し彼はそれを出來るだけ隱さうとした。

彼は然し一方で、一寸不愉快を感じた。何故お榮でも女中でもそれを自分に云はないか。毎日單調な日暮らしをしてゐるお榮にとつて、俥を持たして迎へに寄越すといふ事でも或る一事件になり得ない事ではない。勿論これは云ひ忘れをしてゐるのではない。故意に默つて居るのだ。女中にまで口留めしてあるのだと思つた。

「今日四時から東海寺で先祖の法事があるんだが、それまでの時間によかつたら、飯を食ひに出ないか？」と緒方がいつた。

二人は左う遠くない山王下の料理屋に行つた。

晝で靜かだつた。綺麗に掃除の出來た小さい庭に面した座敷に、二人は暫らく座蒲團を持ち出して、氣樂な話をした。

「四五日したら自家の婆さん達を宰領して成田參詣に出掛けるんだ。それが晝間はおつき合ひをする代り、夜だけは自由行動を取る條件つきなんだ」緒方はこんな事を云つた。

きちんとしたなりの女中が床の活花を更へに來た。軒近くゐる二人からは遠かつたので、女中は床の前に坐つて仔細らしく其位置を、眺めては直し、眺めては直して居た。

「兎も角、例の婆さんを呼んで呉れないか」と緒方は女中に聲をかけた。「それから千代子かしら……」

女中は古い方の花を廊下へ出してから、又疊へ膝をついて默つて云ひつけを待つた。

「ちやあ、その二人」と緒方がいふと、女中はお辭儀をして出て行つた。

間もなく其婆さんと云はれた藝者が入つて來た。四十以上の痩せて小柄な少し青い顏をした如何にも酒の強さうな女だつた。そしてよく〳〵しやべる女だつた。

「飯を食つたら直ぐ歸るからネ。千代子の方も一寸催促して呉れ」膳を運ぶ女中に緒方はい

う云つた。
「ねえ。それは左うとお供は何時出來るの？」
と其老妓が云つた。
緒方はそれに答へずに謙作の方を向いて、
「今度、此婆さんと一緒に吉原へ行く約束をしたよ。此間の話をしたら、大變讃められたよ」
と云つた。
「仲の町の藝者衆でお遊びになればもう本物です」老妓はこんな事を云つて笑つた。
緒方と老妓とは謙作の知らぬ人の噂を二人でしてゐた。老妓はよくしやべつた。そして其間に時々甲高い眞鍮を叩くやうな笑ひ聲を入れた。それが變に人の氣持を苛立たせた。
緒方は話の運びからは全然、突然に、
「今、蕗子、居るかい？」と云つた。
老妓はフッと云ひつまつた。一寸表情が變つた。緒方の方も何氣なく見せてゐるが一種緊張した顔つきをして居た。謙作は此間話に出た其女の事だらうと思つた。
「旅行してます」老妓は漸く答へた。その調子は何で聞いても如何にも僞らしかつた。それでも緒方は、
「何處へ？」と訊いた。
女は又答へにつまつた。
「鹽原ぢやあないかと思ふの」そして老妓に不自然に話を外らし、鹽原や日光邊の紅葉が未だ早いとか晩いとかいふ事に拘つて行つた。緒方はそれ切り、忘れたやうに蕗子といふ女の事は云はなかつたが、謙作は其老妓が一トかどの苦勞人らしい高慢な顔をしながら、緒方の輕く訊く言葉に一々ドギマギした樣子を何んだか滑稽に感じた。
金持の所謂旦那と云ふ男が緒方との關係をよく知りながら、其儘で蕗子母子によくしてゐる。それを其男に使はれてゐる或る男が餘りにひどいと云ふので、强面に意見をすると、女は怒つて、其春に作つて貰つた晴着を其場で滅茶々々に引き裂き、泣きながら自動車で緒方の家へ來たが、公然と呼び出す事が出來ないので、前でまご／＼してゐると偶然緒方の弟が出先から歸つて來た。女はそれに會はして呉れと賴んだ。それはもう夜中の一時頃の事だ。其前から自動車の響きを聽きながら、大概そんな事だらうと思つてゐたが、
「一旦寢床へ入つた者が、直ぐ起出しても行けないぢやないか。ほつたらかして置いたら其內歸つて行つたよ」こんな風に四五日前緒方は謙作に話した。そして今は二人は二タ月以上も會へずに居る。
食事の濟む頃に漸く千代子といふ藝者が來た。前からゐる老妓とは反對に大きな立派な女だつた。一寸小稚の顔で總てがずつと豐かで美しかつた。そして何よりも其眼ざしに人の心を不思議に靜かにさす美しさと力がこもつてゐた。謙作は特にその眼に惹きつけられた。
暫くして二人は其家を出た。品川の東海寺へ行く緒方とは彼は赤坂見附けの下で別れた。それから彼は見附けを上つて、的もなく日比谷の方へ一人歩いて行つたが、其時彼の胸を往來するものは、今見た美しい千代子の事ではなくて、却つて今までそれ程思はなかつた清賓亭のお加代の事が切りに想はれた。「一寸でもいゝから君を呼んで呉れと云ふので」といつた緒方の言葉を彼は幾度となく心に繰返した。登喜子と云ひ、電車で見た若い細君と云ひ、今日の千代子と云ひ、彼は近頃殆ど會ふ女毎に惹きつけられて居る。そして今は中でも、そんな事を云つたと云ふお加代に惹きつけられて居る。
「全體、自分は何を要求して居るのだらう？」
から思はず思つて、彼ははつとした。これは自分でも答へる事のいやな、然し答へる事の出

来る問ひだつたからである。

八

暫く上方の旅をしてゐた宮本といふ謙作より年下の友達が、松井の鮨を下げて訪ねて来た。

二人が二階で話してゐると、夕方になつて、近所の仕出し屋から電話を取次いで来た。

「直ぐいらつしやいませんか？」それはお加代だつた。

「緒方は居るの？」

「いらしてよ」

「そんならね。別に御馳走はないが、京都の松茸があるから、直ぐ此方へ来て下さいと云つて呉れないか」

お加代は例の怒つたやうな早口で「そんな事、いやよ」と云つた。

「それから又一緒に其方へ行けばいゝぢや、ないか」と謙作は云つた。

「面倒臭い！ Oさんばかり御苦労だわ」

二三度押問答の末、

「よろしい。そんなら飯を食つてから出かけよう」から云つて謙作は電話を断つた。

それから二時間程して、謙作は宮本と一緒に清賓亭へ行つた。

緒方は小さな部屋で、お鈴とお加代を相手にウキスキーを飲んで居た。

「どうも怪しからんよ。折角の御招待を間で勝手に断つたりして」緒方は左う云ひながら並んでかけてゐたお加代の肩をグリ〳〵と摑んだ。

「本統にねえ」とお鈴がいつた。「どんなに御馳走があつたか知れないにねえ」

「御馳走はないがつて云つてらしたわ。ねえ時任さん」

「當り前さ」とお鈴は云つた。「誰が御馳走がありますからつて云ふ人がありますかね」

「眞に受けた方が都合がいゝからぢやないの」とお加代はお鈴を睨んだ。

「オイ、君々」と緒方はお鈴の膝を叩いて、「橋善の天ぷらで日本酒を飲まう」と云つた。

「天ぷらは見るのも苦勞らしいな」と内氣らしく宮本が云つた。

「いやかい？ そんならよさう」

「本統に左うですよ。陽氣の變り目ですから、若しもの事があるといけませんからね」

「何んだか、此人の云ふ事はお婆さん染みてるよ」左うお加代は傍白のやうに云つた。

宮本も酒は强かつた。そしてペッパーミントのやうな甘い酒を一緒に飲みながら少しも醉はなかつた。そして變に沈んだ顏をしてゐた。前夜の夜汽車でよく眠れず、宮本は元氣がなかつた。

「どうしたのよ」謙作と並んでゐたお加代は向ひ合つた宮本の俯向き顏を覗込んだ。「いやあね。さつきから一人で悲觀ばかりして……」そしてお加代は謙作を顧みた。「全體どうしたの？」

左う云つてお加代が身を起した時に謙作は何氣なくお加代の椅子に手をかけてゐた其指を背中で挾まれた。

「寢不足なんだ」から答へながら、謙作は指を靜かにぬかうとした。

「イキな寢不足ぢや、ないの？」お加代は却つて謙作に誘惑的な眼つきを向けながら心持、背中に力を入れた。

「イキなもんか。夜汽車の寢不足だ」謙作は不愛想に云つて、ぐいと指を拔いて了つた。其時彼はお加代が不快な顏をするかと思つた。が、お加代は如何にも無關心らしくしてゐた。

謙作には女から左う云ふ遣方で交渉される事は餘り氣持よくなかつた。それで不愛想に指を引き拔いて了つたが、矢張り一方ではそれを後悔してゐた。こんな事に變な潔癖を見せつけ

たやうな自分も氣に食はなかつたし、一つの機會を見す〳〵に逃がした事も惜しかつた。皆が醉つてゐる中で自分だけが醉はずにゐるからだと思つた。そして氣まぐれな心持で、

「その酒を呉れないか」と一度斷つたペッパーミントを注がして、それを一ト息に飲んだ。

「隅に置けないわ」

醉ふに從つてお加代の眼は又美しくなつた。脣も美しい色になつた。そして動作が段々に荒つぽくなつて行つた。

のりの利いた厚いテーブルクロースに綠色の酒がこぼれたのが白熱瓦斯の下で一層美しく見えた。

「まあ綺麗だこと、——」かういつてお鈴がそれへ顏を寄せると、

「もつと作つて上げよう。ねえ?」お加代はぞんざいにかう云ひながら、小さい盃の盞を取つて、矢鱈に其酒を撒散らした。

「又そんな亂暴をする」

「綺麗だつて讃めたからさあ」とお加代はお鈴をにらみ返した。

「不、綺麗だ」と謙作が云つた。

お加代は直ぐ謙作の方を振り向いた。そして、

「ねえ——」と顏と顏をつける位までに近づけて首肯くやうな事をした。謙作は今度は故意に、それに應じて、同じやうに首肯いて見せたが、それが自分ながら一寸調子がはづれて居た。氣が差してゐると、今まで黙つてゐた宮本が、

「仲のえゝ事」と京都訛りを眞似て冷やかした。謙作には妙に皮肉に響いた。彼はそれに抵抗しようとした。すると尚調子がはづれて來た。彼は椅子をずらし、お加代の方へ身を寄せながら、

「僕は君が好きなんだ」と云つて了つた。

「ありがたう」お加代は謙作の不意な變りやうに一寸まごつきながら、それでも今の荒々しい樣子とは、全く思ひがけない可愛らしい顏つきをした。

「どうしよう?」謙作の方は大膽になつて、肩でお加代の肩を押した。

「どうかしませうよう」とお加代は甘つたれた聲をした。其時は何時かお加代も自身を取返してゐた。そして、首を傾け、謙作の肩へ頰をつけて其儘凝つとして了つた。髮の毛が謙作の頰に觸れてゐた。

「こりやあ、たまらない」お鈴は大きな聲で笑ひ出した。

謙作はお加代の首へ腕を卷いて、顏を寄せて接吻する眞似をした。二人は額と額とを合して居た。然し脣と脣とは三四寸離れて居た。そして只凝つとしてゐると、醉つた皮膚からの溫かみが額と額の間に立迷つて居るのが感じられた。謙作に意識の鈍るやうな快感を感じた。

不圖、其連が急に靜かになつたので、彼は顏を擧げた。皆は何時か入口の厚いカーテンを下ろして何處かへ行つて了つた。お加代も少し汗ばんだ顏を擧げた。二人は不意に變に覺めた氣持に突きもどされた。笑談一ついへない氣持だつた。

「屹度隣りよ」

「行つて見よう」

二人は直ぐ其部屋を出た。隣りへ入つて見たが、誰れも居なかつた。

皆は其先の廣い部屋に居た。山崎と云ふ、元、同じ學校で三つ程上の級に居た、今、新聞記者をしてゐる男が緒方と宮本とを捕へて、何時にも豪傑らしい大聲で何か饒舌つて居た。お清といふ眉の濃い美しい小柄な女中が、山崎の傍に腰かけて居た。

謙作は前から此山崎といふ男が嫌ひだつた。そして會へば何時、知らず〳〵脅迫する態度を

取つてゐたが、今は其毛嫌ひをおさへて腰を下ろした。
　山崎はお清の手を握り、しつゝこく酒を飲まさうとした。お清もいやだ〳〵と云ひながら、平氣でそれを飲んだ。
　お加代も醉つてはゐたが、もう静かな氣分でお鈴と並んで腰かけてゐた。
　謙作は何んとなく落ちつかない氣持になつて、西緑へ行く事を小聲で緒方と宮本にすゝめた。宮本は明瞭した返事をしなかつた。
「電話で訊いて見よう」彼はかういつて立上つたが、いきなり椅子の足に躓いて其處へ倒れた。
「段々があぶなくつてよ。時任さん」とお加代がついて來た。
「大丈夫。君は來ない方がいゝんだ」
「憎らしい！」お加代は謙作の背中を平手で強く叩いた。彼は振りかへらずに默つて行からとしたが、其時の自分の頰の肉が氣の利かない笑ひを浮べてゐる事を感じた。彼はそれを面でも脫ぐやうにして、振り返つた。
「そんなら來ないか」
「行きたくなくつてよ」
　謙作は用心しながら、一人段々を下りて行つた。そして電話口へ立つたが、胸が惡く、直ぐは掛けられなかつた。
「登喜ちゃんは遠出ですが、小稻ちゃんの方はたしかにあります」
「左う……」
「いらつしやいましな」
　それが、あべこべだつたら行きたいがと彼は思つた。
　又靜かに段々を上つて來ると、山崎の大きな聲だけが聞えて居た。
　山崎はお清の首にかじりついて、接吻しようとしてゐた。お清は顏だけ反向けてそれを避けた。山崎は仕方なしに眞白に塗つた襟首へ顏を埋めて、そこへ脣をつけたらしかつた。お清はくすぐつたさうに顏をしかめて傍に立つてゐるお加代を見上げ、
「桑原々々」と云つた。
　お加代は憎々しさうに下脣を嚙み、山崎の頭の上で拳固を振つて居た。
　西緑へ行く事はやめにして、暫くして三人は其處を出た。

九

　その翌々日の朝、謙作が未だ寢てゐる所に信行が訪ねて來た。會社の出がけで、上つては居られないといふので、謙作は眠さうな顏をして玄關へ出て行つた。寒い朝で信行は元氣さうな赤い顏をしてゐた。
「咲子にこんなものを寄越した奴があるんだがね」
　かういつて信行は無造作に外套のポケットから草色の洋封筒に赤インキで書いた手紙を出して渡した。弱々しい安つぽい字で、裏には第○高等女學校寄宿舍より、志津子、封の所には「津ばん」と書いてあつた。
「此手紙は昨日、此處から廻した手紙ぢやないか」
「左うだ。お前の妹といふ事を知つてゐるんだ。それで此處にゐると思つてるらしい」
　謙作は齒の浮く不快な文字を豫想しながら讀んだ。其豫想があつた爲めか、思つたよりは厭味のない手紙だつた。「男女交際の眞正なるものは一向差支へなきものと私推仕り候。就ては少々御面談致度　明後六日貴孃之學校歸り途中(一時及び三時)氷川神社境内にて數分間拜顏致度候」こんな事が書いてあつた。「私は此夏某私立大學を卒業致し　只今は麹町區○○町○○子爵方へ止宿罷在候」そして繰返

し〳〵秘密にして貰ひたいと云ふ事、然し若しから云ふ事の爲めに結婚前の貴女に障りが起つては氣の毒に思ふから、左うなら遠慮なく斷つて呉れと云ふやうな事も書いてあつた。

「曖昧な態度で瀨踏みをしてる」と謙作に笑つた

「此前寄越した奴程不良性はないやうだ。然し兎も角、どんな奴か、お前見といて呉れないか。然し場合によつては嚇しつけてもいゝし」

「うん」

「俺がいつてもいゝけど、そんな事で會社を休むのもいやだから」

「それぢやあ僕が行つて見よう。○○町の○子爵といふのは松山のお祖父さんにあたる人だ。松山に訊けば直ぐ分るが、そんな事をする必要もないだらう」

「左うだ。こいつはそれ程惡い奴ではないかも知れないよ。然し嚇かす爲めにそれを云つてやるのもいゝや」

信行は直ぐ歸つて行つた。

其日は寒いばかりでなく時々思ひ出したやうに細い雨が止んだり、降つたりする日だつた。

謙作は二階に火を入れさして、久しぶりで机に向つた。彼は長い間怠つてゐた日記をつけ初めた。

——何か知れない重い物を背負はされてゐる感じだ。氣持の惡い黑い物が頭から被かぶさつてゐる。頭の上に直ぐ蒼穹はない。重なり合つた重苦しいものがその間に塞がつてゐる。全體此感じは何から來るのだらう。

——日暮れ前に燈ぼされた軒燈の灯といふ心持だ。青い擦硝子の中に橙色にぼんやりと光つてゐる灯が幾ら焦心つた所でどうする事も出來ない。擦硝子の中からキイ〳〵爪を立てた所で。日が暮れて、灯は明るくなるだらう。が、それだけだ。自分には何物をも燒き盡くさうと云ふ慾望がある。これはどうすればよいか。狹い擦硝子の函の中にぼんやりと燈ぼされてゐる日暮れ前の灯りには其慾望はどうすればよいか。嵐來い。そして擦硝子を打破つて呉れ。そして油壺を乾いた板庇に吹き上げて呉れ。自分は初めて、火になつて燃え立つ。そんな事でもなければ、自分は生涯擦硝子の中の灯りでゐるより仕方ない。

——兎も角、もつと〳〵本氣で勉強しなければ駄目だ。自分は非常に窮屈だ。仕事の上でも生活の上でも妙にぎごちない。手も足も出ない。何しろ、もつと〳〵自由に延びりと仕たい事をずん〳〵やつて行けるやうにならねば駄目だ。しどろ、もどろの歩き方でなく、大地を一歩一歩踏みつけて、手を振つて、いゝ氣分で、進まねばならぬ。急がずに、休まずに。——左うだ、燈を望む軒燈の油壺では仕方がない。

——或る處で諦める事で平安を得たくない。諦めず、捨てず何時までも追求して、其上で本統の平安と滿足とを得たい。本統に不死な仕事を仕た人には死はない。今の自分は藝術の天才に就いて左う思ふばかりでなく、科學の天才に就いても左う考へる。キューリー夫婦の事はよく知らないが、然し彼等が人類の間に落として行つたものの確かさは彼等にどういふ運命が來ようとも決して動搖する事のない平安と滿足とを與へてゐるに相違ない。自分は左ういふ平安と滿足とを望む。嘗て人の見た事のないものを見、嘗て人の聽いた事のない音を聽き、嘗て人の感じた事のないものを感ずる。

——人類の運命が地球の運命に乾度殉死するものとはかぎらない。他の動物は知らない。然し人類だけは其與へられた運命に反抗しようとしてゐる。男の仕事に對する、あく事なき本能的な慾望の奥には必ず此盲目的な意志がある。人間の意識は人類の滅亡を認めてゐる。然し

し此盲目的な意志は實際少しもそれを認めようとしてゐない。
　人類の發達は地球のコンディションと正比例する。地球のコンディションが人類に段々よくなつて來た。人類は發達して來た。が、ある時からそれが段々に惡くなつて行く。段々と寒く、乾いて來る。其時から人類は漸次に退化して行く。そして何某なる哀れな最後の一人が死んで、人類は絶えて了ふ。人類ばかりではない。總ての生物が段々に死に絶えて行く。そして總てが氷の下に入つて了ふ。此考へは誇張でも何んでもない。此儘で行けば當然これが人類其他總ての生物の恐ろしい運命だ。然し人類は――此苛々と、殆ど無目的に發達しようと焦つてる人類は左ういふ運命を素直に受け入れるだらうか。地球のコンディションが段々に惡くなつて、知らず〳〵に退化して了つてからは吾々の子孫も彼等の祖先がそれ程にも焦つた事すら知らず、焦り拔いて築き上げた發達の價値に就いても無關心に、今は何等利用する事も出來ない左う云ふ發達の遺物を、冷やかな眼差しで眺めながら希望のない空虛な眼で、結局、その運命を素直に受け入れるやう、餘儀なくされるかも知れない。然しそれは人類が左う退化し終つてからの事だ。左うなる前、地球のコンディションが未だ人類に惡くなる前、それ迄に人類は出來るかぎりの發達を遂げようとしてゐる。そしてそれで與へられた運命に反抗し、それから人類を救はうとしてゐる。
　女は生む事。男は仕事。それが人間の生活だ。人間が未だ發達しない時代には男の仕事は、自分の一家族、自分の一部落の幸福の爲めに働けばよかつた。それが段々發達して、一部落の輪が大きくなつた。日本なら男は其藩の爲めに働く事で仕事の本能を滿足させて居た。それが一國の爲め、一民族の爲め、そして人類の爲めといふ風になつた。
　例へば永生といふ考へでも、子供の頃は此身の永生でなければ感情的に滿足出來なかつた。然し今は、――今でも死は恐ろしい。然し永生は、個人々々のそれはどうでも差支へなくなつた。同時にその信仰も持てなくなつた。只自分は自分達の仕事を積み上げて行く、人類の永生、これだけはどうしてもあつて吳れなければ困ると云ふ感情になつてゐる。やがては此感情からも實證するかも知れない。實證した思想がある。然し今の人類一般の何んでも彼でも、發達しようと焦り拔いてゐる仕事に對する男の本能、或る場合それは盲目的で病的になる事すらある。本來の目的を見失つて却つて人類を不幸にするやうな發達へ入り込む場合もあるが、それにしろ左ういふ本能的な欲望の奧には矢張り人類の永生を願ふ、即ち與へられた運命に反抗し、それから遁れ出ようとする、共通な大きい意志を見ないでは居られない。自分はマースといふ飛行機乘りが始めて日本で飛行機を飛ばした日の事を想ひ出す。滑走から、機體が何時か地面を離れ、空へ浮んで行く、其瞬間、不思議な感動から泣きさうになつた。此感動は何から來たか。亢奮し切つた群集心理からも來たらう。然し何かしらそれだけでないものがあつた。其場合は假りに群集心理の支配を受けたとしても、異ふ場合、例へば、誰かが科學上の偉い發見をしたといふやうな新聞記事を讀む。其時にも自分は泣きたい程、感動する事がある。これは何から來るか。意識しない人類の意志が其處でそれに應ずるからではないか。そんな氣がする。
　人類が滅亡するといふ事を吾々は知つてる。が、それが吾々の生活を少しも絶望的にしない。それに想ひを潜める時に淋しい堪へられない感じを催すことはある。然しそれは丁度無

限を考へて變な淋しい氣持に導かれる、それと變りない感じである。實際吾々は人類の滅亡を認めながら感情的にこれを勘定に入れてゐない。此事實は寧ろ不思議だ。左うして一方吾々は出來るだけの發達をしようと焦つてゐる。これは結局吾々は地球の運命に殉死するものではないといふ希望を何處かに持つてゐるからではないか。そして左う云ふ大きな意志が誰にも無意識に働いてゐるからではないか。

十

半月程、つけ怠つてゐた日記に謙作はこんな事を書いた。此考へは此間中から漠然彼の頭に往來してゐた考へであつた。實際彼には今の人間が總て何かはつきりしない目的の爲めに焦りぬいてゐるやうに思はれた。何か知れない大きい意志に追ひ立てられてゐる。藝術でも宗教でも科學でも總てにこれが種々な形で現はれてゐる。左う思はれた。彼は現在の自身に就いても左う感じられた。謂はれなく苛々と焦り立つ時に彼は何か左ういふものに追ひ立てられるのを感じた。

彼は先刻から部屋の中を歩き廻つてゐた。

「謙さん。謙さん」階段の下でお榮の聲がした。「お晝はどう？」

彼は一寸夢から覺めたやうに感じた。朝寢の習慣から謙作は大概朝と晝とを兼ねた食事をしてゐた。然し其日は信行に起され、珍らしく九時前に朝飯を食つてゐた。

「左うだな」と、彼は少し不機嫌に云つた。「空いてもゐないが、行きませう」暫くして彼は階下へ降りて行つた。

食事中、お榮は「不良少年なんて、一人で出掛けて心配ないの？ 龍岡さんに一緒に行つて頂く方がよかないの？」と心配さうに云つた。

彼はさう〳〵と思つた。そして、「大丈夫です。不良少年といふ程でもなささうだし」と云ひながら、然し先の出やうでは殴りにかかつとする性質の自分に一寸不安を感じた。

食過ぎたので、彼は消化劑を飲んで、そして二階へ上ると机の下にあつた綴の新聞紙を枕にして、横になつた。充實し過ぎた後の淋しい氣分が來た。

間もなく宮本が來た。

「龍岡さんの送別會は何處がいゝかね。早く決めないともう日がないから」と云つた。宮本が其世話をする事になつてゐた。

「未だ決めてないのか？」謙作は非難するやうに云つた。「一週間ないぢやないか。何處でもいゝから、龍岡の空いてる日を聞いて早く決めたらいゝぢやないか」

「日は聞いてあるんだよ。だけど場所が未だ決まらないんだ。清賓亭とか西緑とか、左う云ふ家でない方がいゝだらう？」宮本は少し氣をひくやうに云つた。

「無論、そんな家でない方がいゝ」

「左う。さう君に聞けば安心なんだよ」と宮本は笑ひ出した。「あゝいふ家も惡くはないが、送別會は一寸いやだらう？ でも龍岡は其邊に無頓着で、よしあや惡いやうな氣がしたから」

二人は笑つた。

「僕は富士見軒か三橋亭にしようと思つてゐるんだ。料理はどうだか知らないが、何んとなく昔の洋行しやうでいゝだらうと思ふんだ。それから富士見軒も少し古い家でね、富士見軒なら武林なんかを呼ぶといゝと考へてるんだ」宮本は彼等仲間でのディレッタントだつた。

謙作は龍岡に手紙を寄越した青年のある事を話した。

「一緒に行つて見る氣はないかい？」

「所で、若しピストルでも出された日にはこれ

だからね」と宮本は両手を擧げて見せた。

「そんなら待つてたまへ――」

二時になつた。丁度雨は止んでゐたが、謙作は蝙蝠傘を突いて一人、二三町離れた氷川神社へ出かけて行つた。常には近所の子供の遊び場だが、雨で、今日は一人もゐなかつた。只神樂堂の裏に二十二三の顏色のよくない痩せた若者が石に腰かけ、此寒空に薄よごれた白がすり一枚で身を縮め、物怯したやうな眼で謙作の方を見てゐた。「あれではない」左う思ひながら謙作は其邊を一と通り歩いてみた。額堂に茶店を出してゐる男が、客がないのでもう床几を積み重ねてゐた。その他は誰も居ない。彼は暫らく、ぶら〳〵と歩いてゐた。時々境内を通り拔けて行く人があつた。然しそれらしい男は來なかつた。

其内不圖、やつれはてた清玄の聯想から、彼は其見すぼらしい若者を若しやと云ふ氣になつた。信じたわけではないが、先刻から同じ處に凝つとしてゐる。其樣子が人を待つて居ると見れば見られる氣がしたからであつた。彼は若者の方へ行つてみた。大きな銀杏があつて濡れた地面へ其黄色い葉が落ち散つてゐた。彼は蝙蝠の先で銀杏の落葉を一つ一つ差しながら二三度若者の前を往つたり來たりした。若者は不安さうに、時々眼だけで彼の方を見た。

到頭謙作は前へ行つて、

「誰か待つてるのか？」と訊いてみた。

若者は直ぐ返事が出來ない程の恐怖を現はした。其急にキョト〳〵し出した樣子で、謙作は矢張り此男だな、と云ふ氣になつた。

「何故、此處に居るんだ」

「まゝ待つて……」と息を切りながら、頭を振る事で後をおぎなひながら、「ゐるんぢやない」と漸く續けた。自然に身體が震へて居る。眼がおびえ切つてゐた。一寸位に延びた薄い髮の毛は營養不良から、まるで光澤がなく、手や足の皮膚はカサ〳〵になつて、白い粉を吹いてゐた。

「家はあるんです。箪笥町十九番地です」若者は謙作の怒つたやうな顏を凝つと見上げながら、あへぎ〳〵云つた。そして殆ど無意識に親指のさゝくれをむしり出した。さゝくれからは血がにじみ出て來た。それでも痛みを感じないやうに倚無暗とむしつた。若者は浮浪罪に問はれる事からすつかりおびえて了つたのだ。謙作を刑事と思つたのだ。

「失敬しました」からいつて謙作は一寸頭を下げたが、未だ怒つたやうな顏をして居た。

彼は鳥居の側へ來て立つてゐた。謙作は若者が恐る〳〵神樂堂の裏からそつと此方を覗いてゐるのを見た。

十八九の學生らしい若者が帽子も被らず着流しで、本を一冊持つて、時々それを見ながら歩いて來た。何か諳記物をしてゐる風だ。謙作はこれかなと思つた。諳記物をしてゐる風を粧つて、誰か他の人の來る場合に用心してゐるのかも知れないと思つた。じろ〳〵見てゐるので青年の方でも拘泥してゐた。訊いてみるより仕方がないと思つて彼は近寄つて行つた。前で懲りてゐたから今度は丁寧に云つた。

「失禮ですが、貴方は人を待つてるんですか？」

青年は至極穩やかな顏をしてゐた。そして、「いゝえ」と答へた。生意氣な所がなく如何にも良家の子弟らしかつた。

「左う」謙作は頭を下げた。

兎も角三時まで待つ事にして、額堂の茶店へ入つた。そして毛布も何も掛けてない積み殘しの床几に腰を下ろしたが、茶店の主は客扱ひにする氣がないらしく、

「いらつしやい」と云つて、其儘[illegible]を組み合せ

て作つた庭石の間に散り込んだ落葉を草箒で丹念に掃き出して居た。謙作は秋らしい靜かな氣持になつて、煙草を吸つて居た。手紙の主と會ふには丁度いゝ氣持だと思つた。兎も角三時まで待つて來なかつたら歸るつもりで時々時計を見て居た。先刻の見すぼらしい若者は未だ腰かけてゐる。血が出るまでに無暗とむしつたささくれが痛んでゐるだらうと思ふと何とか云つて慰めてやりたい氣がした。然し何故あんな風に何時までも凝つとしてゐるのかしら。病人でもない、乞食でもない若者が十一月の寒い日に白地の單衣一つであんな事をしてゐる。左ういふ人の生活が彼には一寸見當がつかなかつた。

餘り長くゐるので、茶店の主は茶と菓子を持つて來た。もう來さうもない、左う思つて彼は茶代を置いて立ち上らうとした時に石段をあがつて來るお榮の姿が見えた。何といふ事なし兩方で微笑した。

「此方から歸りませう」彼は直ぐ往來へ出られる小さい門の方へ足を向けた。彼は一寸先刻の若者に言葉をかけて行きたい氣がしたので、其方へ近よつて行くと、若者は急に首根を堅くして、顔を反向けて了つた。謙作は言葉をかける事をやめ、其儘お榮と一緒に往來へ出た。

「先が分つてゐるのだから手紙で云つておやりなさい」

「左うしませう」

歸ると直ぐ彼は宮本に待つて貰つて手紙を書いた。松山とは子供からの友達だと云ふやうな事も書いて置いた。

宮本は不意に、「不良少年もいゝなあ。不良少年にならうかしら」と云つて笑ひ出した。謙作も釣られて一緒に笑つたが、何んだか不快な氣がした。宮本が不良少年と云ふ言葉を使つて自分達に共通な一つの要求を露骨な調子で指摘したやうな氣がしたからである。

又霧のやうな雨が降り出した。二人は將棋をさした。そして五六度さして、もう疲れ、盤の上も薄暗く、少し不愉快になつた時に電氣が來た。暫く考へて、いゝ考へも出ずにゐた謙作は「よさうか」と云つた。

「よさう」宮本も直ぐ手の駒を盤の上へ投げ出した。そして倒れるやうに其儘仰向けに寢て了つた。

用意が出來てゐたので、食事を濟まして、二人は直ぐ戸外へ出た。謙作は風邪をひきやすかつたから、二重廻しを抱へて行つた。

溜池から電車に乘つて、日本橋から銀座へ出た。街燈と並んで立つた柳の細い葉が風に揺れながらキラ／＼と美しく光つてゐた。

宮本は袋物に興味を持つて、左ういふ店の前へ來ると、必ずショウ・ウインドウに顔をつけ、根氣よく眺めた。

「近頃は荒物趣味の方はどうだい？」

「勿論あるよ」と宮本は答へた。

「袋物は本統に凝つた物だと、どうしても古物で、前にどんな奴が使つたか知れない物だから、よくても或る意味では甚だ不潔だが、荒物の方はどれもこれも新しく安く、其割りに趣味があつて清潔だからいゝ。よごれたら直ぐ捨てゝ惜しくない所もいゝ。」歩きながら宮本はこんな説をはいて居た。

「今度の旅でも大分買つて來た。其内朝鮮へも行かうと思ふんだ。朝鮮のは中々いゝんだよ」などと云つた。

臺灣喫茶店の前を通る時、謙作は何んとなく緒方が居さうな氣がした。そして實際奥の方に帽子のふちを下ろし、雨外套を着た儘の其姿を見た。

「緒方がゐる」と注意すると、宮本は少し後もどりして入口から近視の眼を細くして見てゐ

た。
「歸らうか」
「よさう。蜘蛛猿が來てるよ。それより緒方を呼び出さうよ」左う云つて宮本は給仕女に緒方を呼び出して貰つた。出て來た緒方は直ぐ承知した。そして又入つて、ステッキを取つて出て來た。
三人は其儘京橋の方へ歩いた。
「君は蜘蛛猿が嫌ひなのかい。意氣地ない奴ぢやないか」と緒方がいつた。
「別に嫌ひでもないがネ。何んだか閉口ぢやないか」
「どうも君達は一體に氣六ケしくていかんな」
尾張町の乘換場へ來た時、
「あすこはどうだい？」と緒方は向う側のカッフェを指した。
「蜘蛛猿より閉口なのが居さうだな」と又宮本がいつた。
「どうしたんだい。大變氣六ケしいんだネ。酒はいやかい？」
「酒はいゝんだよ。だけど、何んだか急に人が可恐くなつちやつて……」と宮本に笑つた。
「人が居なくて、酒だけあるとこなんかないね」
結局引きかへして清賓亭へ行く事にした。

二階の小さい室のカーテンを下ろし、三人は其處へ落ちついた。お鈴は階下の掛りで餘り出て來なかつた。其處にはお加代の他にお牧といふ餘り美しくない女中がゐた。
謙作は此日割りに靜かな氣持でゐた。酒を飲むのもいやだつた。
お加代も幾ら緒方が勸めても飲まうとしなかつた。
「一寸譯があつて、お酒は止めちやつたのよ。――本統に散々叱られちやつたわ」左う腹立たしさうに附け加へた。
「又お酒で失策をしたんですの」
「又なんて、ひどいよ、お前さん」お加代は多少下品な調子でいつて、お牧の肩を突いた。そして、「出替前の者はお酒なんか飲むもんぢやないのよ」と獨りでいつた。
謙作は前日自家で不圖お加代が一トかは眼か二タかは眼かといふやうな事を考へて、それを緒方への端書の端に書いてやつた、それを憶ひ出した。所がそれと同時に緒方が其事を云ひ出した。
「おい／＼お加代さん、時任がね、君の眼が一トかは眼か二タかは眼か考へたさうだよ。一寸見せてやり玉へ」

今まで少しむつとしてゐたお加代は急に媚びるやうな眼をして謙作の方を向いた、
「兩方あるのよ。ね、此方が一ト重でせう？此方が二タ重」
「あべこべだ」
「おや、左うかしら」お加代は指の先で眼瞼を擦りながら、眼をぱち／＼さした。
「左うだわ」
そしてお加代はもう一度、嬉しさうな變に誘惑的な眼を向け、默つて微笑した。居ない所で一トかはか二タかはかを考へたといふ事は偶然效果の多すぎる世辭になつて居た。
然し其夜はとかく話が絶えがちだつた。謙作は氷川神社へ行つた時の話をしようかとも思つたが、後で皆との話の種にされても困る氣がしてやめた。皆が默つてゐると、お加代とお牧は勝手に自分達の話をしてゐた。
「ほら、運送屋の横丁さ」
「運送屋つて、あのいゝ男の坐つてる家かい？」
「あゝ」
こんな事をいつてゐた。
「怪しからんな。いゝ男がどうしたんだい」緒方は興味のない氣持で無理にそんな事をいつた。

お加代は直ぐ無雑作らしく答へた。
「いゝ男の話ぢやない事よ。いゝ男のゐる横丁の話よ」
「横丁なら尚怪しからん」緒方は出鱈目を言つて、つまらなさうに笑つた。
「此邊はそりやあ、いゝ男が多いんですよ」とお牧が云つた。
「つまり君達の岡惚れだな」
「Oさん、此間ね」といつてお加代は笑ひ出した。「お清さんが露月町の方にそれは〳〵いゝ男の散髪屋さんが居るつて云ふのよ。それを又、よくきかずに此人と出かけちやつたものよ。所がどうしても家が知れなくて、一軒々々散髪屋を覗いて歩いちやつた……」女二人は横眼を見合せ、顔を眞赤にして笑つた。其時のお加代の顔には、變に下等な感じが出てゐた。謙作は或る不安から宮本の方を見た。宮本も謙作の方を見て居た。其顔には意地悪いやうな同情するやうな笑ひを浮べてゐた。
お加代とお牧は圖に乗つて界隈の「いゝ男」の噂を始めた。運送屋の番頭も其一人だつた。八百屋の息子と云ふのもあつた。自轉車の運轉手と云ふのもあつた。それを聞きながら宮本は露骨ににが〳〵しい顔を女達に見せてゐた。

お加代は毎日朝十時頃お湯に行く、と丁度空いてゐる時で、誰もゐないと兩方に留桶を抱へてよく泳ぐといふやうな話をした。
「此人はそりやあ上手なんですよ」と傍からお牧が云つた。
肉づきのいゝ此大きな女が留桶を抱へて湯槽の中で泳ぐ樣子は、謙作には可成不恰好な姿で想像された。そして其不恰好さがいやに肉感的に感じられた。
お加代は瓦斯會社の工夫が大きな脚立を流しへ持ち込んで、損じた瓦斯燈が直つてからも何時までも愚圖々々してゐるので湯槽を出られなかつたといふやうな話を自身でも興味を持つて話してゐた。
謙作は最初からお加代を品のいゝ女とは考へなかつた。只投げやりな生々した所や、變にコケティッシュな所などに惹きつけられてゐたが、今日の餘りに安價な感じから、すつかり氣持を冷やされた。近よれば近よる程此感じは強くなりさうに思はれた。此點では初めて會つた時が一番よかつた。
間もなく二人は其處を出た。そして直ぐ別れ別れて家へ歸つた。
翌日起きると、前日出した手紙の返事が來てゐた。[illegible]に託つた手紙だつた。私は前略奥樣には寫眞で拝見したばかりで、自分にはそれ程の考へはなかつたのですがT病院の看護婦〇〇に勧められてあんな手紙を差出しました。若し此事が松山樣に知れでもしましたら私一身にとり由々しき事に相成るべく、御慈悲を以て何卒々々御放念被下たく云々。T病院といふのには一年程前咲子が入つてゐた事がある。そして其看護婦は謙作も覺えてゐる。一寸美しい女だつた。
謙作は簡單に前日の事を書き、其手紙を同封して信行へ出した。そして其男へは松山には決して云はないといふ約束をした手紙を出してやつた。

十一

謙作が自分から放蕩を初めたのはそれから間もなくであつた。或る曇つた薄ら寒い日の午前の事だ。彼は現在に少しも左う云ふ衝動なしに、寧ろ定めた事を決行するやうな心持で、深川の左う云ふ場所に一人で出かけて行つた。
其二年程前に木場からその邊、それから砂村を通つて中川べりに出た事がある。それ故、道は大概分つてゐた。彼は永代橋を少し行つた所

で電車を降りると、沈んだ不愉快な顔をしながら八幡前の道を歩いて行つた。どれ程陰鬱な、そしてどれ程醜い顔つきであるか、自身でも感じられた。道行く人々が皆、彼の目的を知つてゐるやうに彼には思へた。彼はそれらの人々に淡い一種の敵意をさへ感じた。そして急いだ。時々空つばを吞み〳〵彼は急ぎ足で歩いて行つた。

幾つ目かの小さい橋を渡つて右へ折れると直ぐ、泥溝をへだてゝ左ういふ家々が見えた。彼は今更に到頭来たと思つた。登喜子のゐる場所へ行く時とは目的が異ふだけに彼の氣持はぎごちなかつた。寧ろ非常に不愉快だつた。それでゐながら、中止しようと云ふ氣にはならなかつた。

向うから前どよなしに母衣だけをかけた俥が來た。其上の人が黒眼鏡をかけてゐた。それが却つて彼の注意を惹いた。田島といふ彼よりも三つ上の級にゐた男でかう云ふ場所で會ふにしては其職業からも誠に思ひがけない人間だつた。謙作は一寸迷つた。二三間歩く間彼は其男の顔から眼が放せなかつた。向うでも見てゐるらしかつたが、眼鏡の中でよくわからなかつた。間もなく彼は眼を反らした。其道は先の養魚場でなければ、曲輪からの一筋道だつた。無論曲輪から出て來たのだと彼は思つた。普段使はない黒眼鏡で猶左う思はれた。

これはお互にいやな所を見たものだと思つた。彼は苦々しい、腹立たしい氣持になつた。然し自分は未だ中へ入つてゐるのではないと思つた。若し養魚場を抜けて砂村の方へ出て了へば、それとも西線のやうな處へ行つて其儘歸つて了へば、といふやうな考へも一寸浮んだ。然しそれは田島が曲輪を出て來たのでない場合はいゝとしても、それを知りつゝ左う云ふ事をするのは何かしら卑劣な氣がした。そして、どうせ今日入らないにしろ、乾度自分は又來るに違ひないと彼は思つた。

一時間程して彼は往きとは全く異つた氣持で曲輪を出て來た。自身でも不思議な程氣安い氣持だつた。悔ゆるといふやうな氣持は全くなかつた。

女は醜い女だつた。色白くて、平つたい顔の、丁度裏店のかみさんのやうな女だつた。實に鈍く善良な女だつた。彼はもう二度と其女を見たいとは思はなかつたが、何かで、これからも好意を示したい氣が切りにした。爲替で寄附金をしてもいゝと考へた。女は一人の客毎に亭主から五錢づつを受取るのだと云ふ事を彼は聞いた。

彼は放蕩を初めてから變にお榮を意識しだした。これは前からも無い事ではなかつたが、彼の時々した妙な想像に道徳堅固にしてゐる彼に對し、お榮の方から誘惑して來る場合の想像であつた。其想像では常に彼はお榮に説教する自分だつた。左う云ふ事が如何に恐しい罪であるか、その爲めに如何に二人の運命が狂ひ出すか、そんな事を諄々と説き聽かす眞面目臭い青年になつてゐた。しかも、左う云ふ想像をさす素振りがお榮の方にあつたわけではなかつたが、彼は時々そんな風な想像をした。

それが此頃になつて變つて來た。夜中惡い精神の跳梁から寝つけなくなると、本を讀んでも讀んでゐる字の意味を頭が全で受けつけなくなる。只淫蕩な惡い精神が内で傍若無人に働く。追ひ退けても〳〵階下に寝てゐるお榮の姿が意識へ割り込んで來る。左う云ふ時彼は居ても起つてもゐられない氣持から、萬一の空想に胸を轟かせながら、階下へ下りて行く。お榮の寝てゐる部屋の前を通つて便所へ行く。彼の空想では前を通る時に不意に襖が開く。默つて彼は其暗い部屋に連れ込まれる。――が、實際は

何事も起らない。彼は腹立たしいやうな落ちつかない氣持になつて二階へ還つて來る。然し、段々の途中まで來て又立止る。降りて行かうとする氣持、還らうとする氣持が彼の心で撃合ふ。彼は暗い中段に腰を下ろして、自分で自分をどうする事も出來なくなる。

彼の放蕩は少しづつ烈しくなつて來た。其癖氣持は少しも所謂放蕩者らしくならなかつた。左うなれない所に放蕩しながら常に不愉快がついて廻つた。本統に夢中になれる女がゐるさうに思ひながら、彼は中々左う云ふ女に出會はなかつた。一寸そんな氣持になつても常に長もちしなかつた。自分も悪いし、對手も悪いのだと彼は考へた。

登喜子やお加代のゐる所へも前程は行かなくなつたが、それでも緒方や宮本と一緒になるとよく行つた。登喜子に對しても或る落ちつきからは進みも退きもしなかつた。寧ろ進む事が段々困難になつた。

或る程度に執着する事はあつても、それは登喜子の場合のやうに、或はお加代の場合のやうに、それでなければ又他の場合のやうに、彼の氣持はいつも反れて行つた。手軽く深入り出來る女は別として、左うでない女では或る程度に深入りしてからなら却つて夢中になれさうに彼には思へた。然し執着すると妙に、彼は深入りしようとするにはそれ程の熱情が自分にないといふ氣がした。これでは何時まで経つても駄目だと思つても、左う思つて敢て進めるのは如何にも図々しいやうな、不自然なやうな氣がした。感情が一番先立ちになつてゐて呉れなければ、彼ではそれは不自然だつた。誰とも夢中になれさうもないと思ふと、時々彼は自己嫌悪に陥入つた。然しそんな氣持でゐながら、身體だけは彼は益々放蕩の深みへ墮として行つたのである。

生活が亂れるにつれ、頭が濁つて來るにつれ、彼のお榮に對する悪い精神の跳梁は段々烈しくなつた。彼は此儘の状態を續けて行つたら、自分達はどうなる事か知れないといふ氣がした。殆ど二十も年の違ふ、其上祖父の長い間の妾だつたお榮との左う云ふ關係は何かの意味で自分を破滅に導くだらうと云ふ考への前に彼は立ちすくんだ。彼のお榮に對する衝動は、それは悪夢のやうなものだつた。白晝、氣樂な氣持で對坐してゐる場合、そんな氣持になる自分が不思議な氣がした。そして悪夢でなくて何んであらうと思はれるのだ。が、實際では其悪夢は段々頻繁に彼を襲つた。

或夜彼は夢を見た。寢てゐる所に宮本が變な笑顔をして入つて來た。そして、「阪口が旅先で死んだよ」と云つた。謙作は寢たまゝ、「あゝ到頭死んだか」と思つた。阪口が誰にも知らさず、家出同様に一人旅に出た事を夢として彼は知つてゐた。そして彼は阪口が旅先で左ういふ死に方をしさうな氣が何んだかしてゐたのだ。彼が黙つてゐると、「播摩をやつたんださうだ。——到頭やつたネ」と重ねて云つて宮本は、嫌な笑ひ方をした。「矢張り左うか」と謙作は思つた。

播摩といふのはどう云ふ事をするのか彼は知らなかつた。然し兎も角それは命がけの危險な方法で、阪口はそれを以前大阪で教はつて知つてゐるといふ事だけを彼は知つてゐた。そして宮本は阪口から聽いて知つてゐる筈だつた。

阪口は淫蕩の爲めにはあらゆる刺激を求めて來たが、到頭其播摩まで墮ちたかと思ふと謙作は身内の寒くなるやうな異様な感動を覺えた。播摩の恐しい事を百も千も承知の上で、遂に其處まで突きつめた阪口の淫蕩は彼の自由意志の外のものだつたに違ひないと思はれた。

「播摩と云ふのはどうするのだ」謙作はもう少

してから訊きかけて口を噤んだ。聽けば乾度自分もやる。此方へ彼はぞつとした。死なずに濟むかも知れない。然し大概は死んで了ふ。かう云ふ恐しい方法でも、百に一つ、千に一つ死なずに濟む機會が與へられてある以上、惡い精神の跳梁に打克てない場合は全く恐しいものになると思つた。知らぬが佛で、知つたが最後だと思つた。

宮本は彼がこれを乾度訊くだらうと思ふやうに意地惡い笑ひを見せながら默つてゐる。謙作は訊かなかつた。そして夢から覺めた。氣味惡いいやな氣持が殘つた。それを云ひに來た宮本が既に化物のやうな氣がした。宮本の形を借りた化物のやうに思はれた。――彼は便所へ立つて行つた。それが父夢だつたのである。便所の窓が開いてゐて、戸外は靜かな月夜だ。木の葉一つ動かない、しんとした夜景色で、廣い庭には（彼の家の庭より、それは餘程廣い庭だつた）屋根の影が山形にくつきりと映つてゐる。彼は不圖其地面で何か動いたやうに思つた。映つた屋根の棟でそれが動いてゐた。彼は先刻、どーんといふ鈍い響で何かが自分の寢てゐる屋根の上へ飛び下りたやうな氣がした事を憶ひ出した。

それは七八歳の子供位の大きさで、頭だけが大きく、胴から下がつぼんだやうに小さくなつた、恐しいよりは寧ろ滑稽な感じのする魔物だつた。それが今、聲もなし、音もなしに、一人安つぽく跳つてゐる。彼から影を見られてゐる事も知らずに、上を見、下を見、手を擧げ、足を擧げ、一人ではしやいでゐるが、動くものは其影だけで夜は前にも書いたやうにしつとりと月光の中に靜まり返つてゐた。彼はこれが跳つてゐる間、其棟の下にゐる者は惡い淫蕩な精神に苦しめられるのだと思つた。淫蕩な精神の本體がこんなにも安つぽいものだと思ふ事は却つて何となく彼を淸々しい氣持にした。そして今度は本統に眼を覺ました。

十二

仔山羊だと思つてゐる内に僅か二三ケ月の間に何時か角も三寸程になり、顋の下からは先の尖つた仔細らしい鬚が生えてゐた。

「此頃山羊が變に臭いの。洗つてやつたら、どうでせう」と茶の間で一緒に食事をしてゐる時にお榮は顏をしかめながら云つた。

「洗つても駄目でせう」

「左うかしら、それに段々氣が荒くなつて、由なんか可恐がつて中へ入れないのよ。突つかゝるものがないと、寢床をつくりかへしたり、棒杭と押しつこをしたり、一人で怒つてゐるの」

「何處かへやりませうか」

「鳥類、鳥類なら僕らかで引き取つて呉れるかも知れないのね」

「鳥類でもいゝが、あすこへやれば乾度傳染病研究所へ賣るから、殺しにやるやうなものですね」

「それもいやあね。――おかみさんを持たしてやればいゝのかしら」

「然し何處かへやつた方がいゝでせう。何故なら若しかしたら僕は暫く旅行しようかと思つてるの」

「何處へ？」お榮は一寸意外な顏をした。

「はつきり場所はきめてないんですが、半年か一年、何處か地方へ行つて住まはうかと思ふんです」

「又、どうして不意にそんな事を考へ出したの？」

「左うだな、左うはつきりした理由もないが、兎も角僕はもう少し生活をどうかしなければ駄目なんです」

「私も一緒に行くの？」

「いゝえ」

お榮は一寸不快な顏をした。謙作は何んと說明していゝかわからなかつた。少時して、
「信さんへはもうお話したの？」
「まだしません」
「だけども——全體何故なのかしら？　此處ぢやあ、勉強が出來ないんですか？」
「左うあんまり問ひつめられると困るが、そんな事でもして氣を更へる必要があるんですよ」
「左う。そんなら仕方がないけど。半年か一年したら乾度歸つて下さるんですか？」
「そりやあ歸りますさ。此處が自家だもの」
「氣を更へるだけなら一ト月かそこらでも十分だと思ふけど……」
「長い仕事を持つて行くんです。それを書き上げるまでゐるんです」
二人は暫く默つた。
「ぢやあ、此家はどうするの？　私一人だと、こんな大きな家を借りてるのに無駄ね」
「そんな事ないさ。僅か一年ばかり」
「何か理由があるんぢやないの？」
「理由といへば今僕が云つた通りの事です」
「何んだかはつきりしないのね」お榮は少し眼を曇らして默つた。お榮は謙作が女でも連れて行つて同棲する心算ではないかと疑ふ風だつた。
「一ト言にいへば純粹に一人になりたいんですよ。友達からも自家の人からも、それから誰からも」彼はわざと貴女といふ代りに自家の人といふ言葉を使つた。それだけでも多少お榮にはいゝ感じがした。そして笑ひながら、
「淋しくなりませんか？」と云つた。
「それは淋しくなるかも知れないが、何しろ勉強しますよ」
「私は隨分淋しくなるわね。あんまり淋しくなつたら家をたゝんで出かけますよ」
謙作は苦笑した。それから彼は前日から考へてゐた多分山陽道の何處か、海に面した處で、簡單な自炊生活をする事、その他幾らか具體的な計畫を話した。
「氣樂でいゝのね」と云つて、お榮は、本統に氣樂な人だといふやうな、いゝ眼つきをして凝つと謙作の顏を見た。
其晩彼は電話で信行の在宅を確めてから本鄕の家へ行つた。
「一寸羨しいな」信行は直ぐこんなに答へた。「尾の道へ行くといゝ。尾の道はいゝ處だよ」
「左うかね。何處でもいゝ、處ならいゝが、結局のつ、處だね」
「左うだ。お前は汽車が嫌ひだから、それもいいかも知れない」と云つて、「横濱から船で行くといゝ」
謙作はそれも面白いと思つた。そして最近に出る船を調べて貰つて、切符を買ふ事を信行に頼んで、そして翌日又會ふ約束をして別れて來た。
翌日午後四時少し前、彼は約束の角で、近くの火災保險會社から出て來る信行を待つてゐた。年の暮れ近い夕方の忙しい室町通りで、電車は北からも南からも絶えず來ては其前で留まり、車掌が同じ事を云つて、又動いて行つた。俥、自動車、荷馬車、自轉車、それからその間々を縫つて人間が四方へ勝手な速さで歩いてゐた。犬も通つた。彼は鼻先をかすめて通る男の肩の風を顏に受けながらもう直き自分は前に海を見晴らす遠い靜かな處へ行くのだと思つた。樂みでもあり一寸淋しい氣持もした。
彼はぶらぶら日本橋の方へ歩き出した。小さい郵便局の前を通る時に丁度四時が鳴つてゐた。間もなく、四方から圍んでゐる三越の建物から吐き出されるやうに大勢の人々が

出て來た。杖を小腋へ挾んで、卷烟草に火をつけてゐる者がゐる。先へ行く仲間を小走りに追ひかけて行く者がある。見る見る廣場は此連中で賑はつた。日本銀行からも出て來た。正金銀行からも、其他からも出て來た。そして三々伍々ぞろ／＼と通る。彼は直ぐ、其内に信行を見出した。信行は五十恰好の品のない太つた男と何か話しながら來る。信行は笑ひながら、片手に丸めて持つた雜誌で他の手の掌を叩きながらしきりに何かいつてゐる。太つた男は時々それに應じて點頭いて居た。
　信行は謙作を見つけると、足を早めて近づいて來た。
「待つたかい？」
「いや」
　背後から、
「おやあ、失禮します」と太つた男は聲をかけて、中折の帽子の縁に手だけかけて、脱がずに一寸頭を下げた。
「君は此方へ歸るんぢやないのかい？」
「今日は一寸」
「左う。それぢやあ、今の事ね、僅かな事だから、僕の方はどうでもいゝから、あんまり露骨にならないやうに御願ひします」
「承知しました」からいつてもう一度頭を下げて太つた男は外濠の方へ引きかへして行つた。
　電車通りへ出ると、
「兎も角、向う側へ渡らう」と、信行は厚い外套の肩で、謙作の背中を押すやうにして線路を越した。
「何を食ふ？」
「何んでもいゝ」
「鳥はどうだい？」
「鳥でもいゝ」
　日本橋の假橋へ來た。土臺を築くために圍ひをした、其中へ浸み込む水を石油エンヂンで絶えず汲み出して居る。亞鉛板の變に反りかへつた屋根から、細いのと太いのと二本の烟突が出てゐて、細い方はスポツ／＼と勢ひよく蒸氣を吐く度震へて居た。そして太い方は赤さびて、其頭から元氣のない烟を僅かにたてゝゐる。
　セメントに小砂利を混ぜたのを畚で陸から運ぶ者がある。頬鬚のいかめしい土方がそれをシャベルでならしてゐる。一方では其上へ蓆を敷いて、向ひ合つた二人が、堂突きで、よいさよいさと突いて居た。
　背廣に日本脚絆をはいた男が測量をして居る。其向うで、丸太を二本立てゝそれへ貫き板をX字なりに打ちつけてゐる者がある。そして、其下の油のギラ／＼浮いた水溜りで顏を洗つてゐる、女勞働者があつた。
　二人は一寸立止つて欄干へ倚り、それらを眺めた。そして又それを離れて歩き出した。
「働く事が其日々々の食ふ手段になつてゐる奴は未だいゝがね。俺のしてゐる事なんかそれだけの必然さもないからね」突然信行はこんな事を云ひ出した。「時々變な不安な氣持になつて仕方がない」
　謙作は一寸不思議な氣がした。信行にも左う云ふ事があるといふのが思ひがけない氣がした。
「會社をよす氣があるの？」
「うん」と信行は首肯いた。「俺は自分のしたい事がもう少し分明したら、直ぐよす心算だ」
「先によしたつていゝだらう」
「それでもいゝが……」かういつて信行は一寸不快な顏をして上を向いた。
　謙作は少し云ひ過ぎたと思つた。信行には弱い氣持があつた。放蕩などから父にも義母にも隨分心配をかけながら、彼は妙に親孝行の氣質が強かつた。それ

だけに愛されてもゐたが、から云ふ決心をするにも父を苦しめる事、父を失望さす事は妙に恐れた。

「どう云ふ事をするつもりなの―」から謙作は訊いたが、信行ははつきりした返事をしなかつた。

二人は間もなく或る小さい鳥屋に入つて行つた。

「先刻俺と話した男があつたらう？」と信行が云つた。「あれは俺の方の勸誘だが今日あの男に聽いて、中々ひどい奴があるものだと驚いたよ。二月ばかり前だが、河合といふ年寄の矢張り勸誘が、仲間の野口といふのお家族が病氣で弱つてゐるから、六ケ月で五十圓貸して貰へまいかと俺にいふんだ。其爺さんはいやな奴だが野口といふのは人のいゝ一寸勸誘なんか向かない方の奴なんで、子供が病氣だといふ事も聞いてゐたし、貸してやつたんだ。其時利子の事をいふから、それは要らないと云ふと、證書を書かせるといふから、それも要らないと云つて、左う云ふ男だから、返せない時、此方へ氣兼ねをして、會社へ出られなくなつても困るから、瞞からとして、俺の名を出さずにやつて呉れと云つたんだよ。所がどうだね。河合に其金を天引き十二圓の高利で其弱つてる野口へ貸しつけたもんだ。えらい事をやるぢやあないか」と信行は笑つた。「今日あの太つた男が野口の噂をしてゐる内に不圖わかつたんだが、勿論野口の方はとうに其金はつかつて了つて、五十圓の證書だけが河合の手へ渡つてるわけだ。今日の奴は河合をなぐります、とかひどく憤慨してるんだが、なぐつた所で始まらないから、證書と天引きした金だけ取り上げて、なるべく穩やかにするやうに云つといたがネ。又左う云ふ奴だから契約は中々よく取つて來るんだよ。追ひ出すわけにも行かないんだ」

謙作は信行の寛大な氣持を面白いと思つた。自身ならばもつとずつと廉を立てて、多分其年寄りを呼びつけて、逃路のないやうに追ひつめるかも知れないと考へた。

「一度思ひ切つて油を絞つてやるといゝんだ」

「そんな事をしたつて仕方がない。此方がうらまれるだけで、向うはどんな事をしたつて自分が悪かつたとは思はないからね」

「信さんはそんな風に考へてよくあきらめてゐられるね。腹は立たないかい？」

「腹は立つよ。然しそんな事をしたつて、結果が何んにもならないと分つてゐれば怒る氣もしなくなる」

「左うかな。それはその方が本統かも知れないが、僕なら中々それでは落ちつけない」

「然し追求すれば、するだけ不愉快になりさうだからね」

「それが分つてゐても、初めから許す氣にはなれない」

「其處は俺が呑氣に出來てゐるからかも知れないよ」

一時間程して二人は其處を出た。銀座まで歩いて、其處で信行は駱駝の襟巻を買つて、謙作への餞別とした。

十三

冬にしては珍らしく長閑な日だつた。謙作の乘つた船は何時か岸壁を離れて居た。下には群集に混つてお榮と宮本とが立つて居た。彼は神戸で降りるのに見送りは仰々しいからと止めたが、船が見たいからとお榮は宮本に頼んで連れて來て貰つたのだ。鐘が鳴つて見送人が船から降りねばならぬ時に、お榮は「身體を大切にね」とか「お便りは始終して下さいよ」とか云つた。

謙作は一寸感傷的な氣持になつた。

船は一方の岸壁で水を交へ、もう一つの

でそれを纏へやり、時々はそれを止めなどした
から段々と岸壁を離れて行つた。三人は時々微
笑しながら手を振り合つてゐた。其内謙作は左
うして両方で何時までも／＼見送つてゐるの
が苦しくなつた。船の方向が定まり船尾が岸壁
を三四十間離れた處で彼は口の中で「おやあ」
と云ひながら頭を下げ、具合悪いやうな氣持
で無理に二人へ背を向け、自分の室へ下りて来
た。

四人入りの小さい室だが、他に客がないので、
彼は一人でそれを占める事が出来た。彼は其處
へ置いてある、凭りかゝりのない小さい丸椅子
に腰を下ろしたが、扨て何をするか、別にする事
もなかつた。落ちつかない氣持で、立ち上ると
ベッドの下から小さい旅行鞄を引き出し、時計
の鎖についた鍵でそれを開けて見たりした。今
頃二人がどうしてゐるか、それが氣になつた。

彼は又甲板へ出て行つた。思ひの外、船は進
んでゐてもう人々の顔は分らなかつた。然し群
集を離れて、左の方に二人立つてゐる、それが
左うらしかつた。つぼめた日傘を斜にかざして
ゐるのはお榮に違ひなかつた。彼は手を擧げて
見た。直ぐ向うでも應じた。宮本が大業に帽子
を振ると、お榮も一緒に日傘を細かく動かして
ゐた。顔が見えないと謙作も氣樂な氣持でハン
ケチが振れた。そして船が石堤の陰へかゝる頃
には二人の姿も全く見えなくなつた。薄い霧
だか、煙だか港一杯に擴がつてゐて、船が進む
につれ、陸の方は段々ぼんやりと霞んで行つた。
そして一寸脇見をしても今出て来た岸壁を彼
は見失つた。船尾にミノタウリと書いた英國の軍
艦が煙突から僅かばかりの煙をたてながら海底
に根を張つてゐるかのやうにどつしりと海面に置
かれてあつた。其側を通る頃はもう、岸壁に添
うて建並んだ、大きな赤煉瓦の建物さへ見えな
くなつた。

彼は今は一人船尾の手すりにもたれながら、
旋推機にかき廻され、押しやられる水をぼんや
りと眺めてゐた。それが冴えて非常に美しい
色に見えた。そして彼は先刻自分達の通つて来
た、レールの縱横に敷かれた石畳の廣場を歸
つて行くお榮と宮本の姿を漠然と想ひ浮べてゐ
た。

下で鐘が鳴つた。降りて行くと晝めしの支度
が出来てゐた。テーブルには彼の他には英語を
話す若い外國人と、一等船客の守りと、それ
から船の方の役人が一人、それだけだつた。船
の役人と外國人とが、何か話してゐた。彼は黙
つて不味い牛肉を食つてゐた。すると並んでゐ
た外國人が英語で「貴方は英語を話しますか？」
と云つた。彼は英語で、「英語は話せません」と
答へた。そして横濱に居た西洋人ならまるで日
本語を知らない筈はないと云ふ氣がしたので、
彼は今度は日本語で「日本語は話せないんです
か」と訊いてみた。若い外國人は當惑したやう
に一寸首を傾けて紅い顔をした。

守りの女はそれからは一等の方へ行つたき
り遂に出て来なかつた。そして一等船室の空家
のやうな廣い所に二人だけになると、結局彼
は彼の不十分な英語で其若者と話す事になつ
た。彼が一人甲板の喫煙室にゐる時に其男はト
ランプを持つて入つて来た。そして勸めたが、
彼は自分の知つてゐるやり方と異つてゐると面
倒臭い氣がして斷つた。若者は仕方なしに一人
でテーブルにそれを並べては崩し、並べては崩
ししてゐた。

家は濠洲と云ふ事だつた。今まで亞米利加に
ゐて、三週間程前横濱へ來たが、母親が病氣と
云ふ電報で、これからシドニーへ歸る所だ。富
士山を是非見たいと思ふが、今日の天氣で、ど
うだらう。から曇つて來ては駄目かしら。など
と云つた。實際午前の長閑な澄んだやうな天氣

は曇りの前兆だつた。今はどんよりと薄ら寒い曇り日になつてゐた

三崎の沖を廻る頃から、彼は和服に着かへ寝床へ入ると、直ぐぐつすりと眠つた。そして再び眼を覺ました時は四時過ぎてゐた。和服の上に外套を羽織つて、甲板へ出た。夕方の曇つた灰色の空に富士山がはつきりと露はれてゐた。それが、海を手前に、伊豆の山々の上に聳え立つた具合が如何にも構圖的で、北齋の左う云ふ富士を憶ひ出さした。

喫烟室では下手なピアノが響いて居た。そしてそれが止むと若い外國人が其處から出て來た。其男は「始めて富士山を見た」と滿足らしく云つた。

大島はもう後ろになつて居た。風が寒いので彼は喫烟室から外の景色を見てゐた。伊豆の七島が一つ〳〵其數を増して行つた。若い外國人は又下手なピアノを彈き始めた。そして、ブライアーの烟管を横ぐはへにしたまゝ何か小聲で唄つてゐた。その間々にパデレウスキーを聽いたとか、自分の女同胞にヴァイオリンの名手がゐるといふやうな事を話した。

彼は未だ睡かつた。四五日續いた寝不足に二時間ばかりの熟睡では何んにもならなかつた。

彼は又寝床へ入つた。船は可成りに揺れてゐた。それに船室が船尾である爲めに、舵を動かす太い鎖が絶えず、ガロツ〳〵と變な響をたてる、それが耳について彼は眠れなかつた。ダン〳〵〳〵と云ふ汽鑵の音に混つて、旋推機に押される、シャアー〳〵と云ふ水音も聽えた。

彼は多少船暈を感じた。それが酒に酔つた時のやうに手などが赤くなつて居る。寝床の向うが鏡になつてゐて、白い枕に半分埋まつた彼の顔が丁度額縁にはまつたかのやうに具合よく寝ながら見えた。そして其顔も赤くなつてゐた。甲板へ出るとよく船暈をする方で、もう風邪をひいたかしらと彼は思つた。うと〳〵してゐる内に又晩飯の鐘で彼は起された。

若い外國人が、本を忘れて來て弱つた、然し明日は船のライブラリーを開けて貰ふ筈だと云つた。謙作はガルシンの短篇集を持つてゐたので、それを貸してやつた。

寒い晩になつた。晩になると、晝間から眠つて謙作の眼はさえて來た。彼は大きな静かな淋しい氣持で、今日新橋まで送つて呉れた人達、信行、咲子、妙子達、それから、お榮と石本と、それから今頃丁度ペナンあたりまで行つてゐるだらう龍岡に巴里の大使館氣付で端書を書いた。

龍岡と分れた事は何といつても彼には淋しい事だつた。龍岡は或る意味では門外漢らしい顔を何時もしてゐたが、自身の仕事、飛行機の發動機、殊に其發動機の研究に就いては、そしてそれに對する野心的な計畫を話す時などには彼は何から熱意を示し、よく亢奮した。謙作は仕事は異つてゐたが左う云ふ龍岡を見る事で常にいゝ刺戟を受けてゐた。今、左ういふ友を遠くに失つた彼は本統に淋しい氣がされたのである。

[illegible]を穿いた[illegible]の足には[illegible]て居た。其[illegible]彼の[illegible]の上には大きな[illegible]を見下ろしてゐた。それは此航海中の[illegible]、マニラ邊へ行くと廻り出す筈の旋風器だつた。

彼は何枚かの端書を書き終ると、寝る前にもう一度、外の景色を見ようと思つて甲板へ出て行つた。眞暗な夜で、見えるものは何んにもなかつた。只マストの高い處に小さな灯りが一つ、最初星かと思つた程に遠く見えただけだつた。人つ子一人ゐない。ヒュー〳〵と風の叫び、[illegible]に[illegible]を折られる、さあ——といふやうな水音。それだけで汽鑵の響きも、[illegible]の音も今は聽えなかつた。[illegible]つて[illegible]。それは何か大きな[illegible]

うに思はれた。
　彼は外套にくるまつて、少し両足を開いて立つてゐた。それでも、うねりに従ふ船の大きい動搖と、向ひ風とで時々よろけさうになつた。風は帽子を被らずにゐる彼の髪を穿つやうに吹きつけた。そして、睫毛が風に吹き倒されるので眼がかゆくなつた。彼は今、自分が非常に大きなものに包まれてゐる事を感じた。上も下も前も後ろも左も右も限りない闇だ。其中心に彼はかうして立つてゐる。總ての人は今、家の中に眠つてゐる。其中で自分だけが、一人自然に對し、かうして立つてゐる。總ての人々を代表して。と、左ういつた誇張された氣分に彼は捕へられた。それにしろ、矢張り何か大きな〳〵ものの中に自身が吸ひ込まれて行く感じに打克てなかつた。これは決して悪い氣持ではなかつた。然し彼は自身の存在をもつと確めようとするやうに殊更下腹に力を入れ、精一杯の呼吸をしてゐた。然しそれをゆるめると直ぐ、又大きなものに吸ひ込まれさうになる。
　眞黒い人影が近寄つて來た。ボーイだつた。何か云つてゐるが、風にさらはれて少しも分らなかつた。ボーイは歸つて行つた。それから暫くして彼は下へ降りて行つた。身體がすつかり冷えてゐた。
　彼はかなり疲れてゐた。然し習慣から、雜誌を持つて寢床へ入つた。然しそれは十分しない内に文句の意味が彼から遠のいて行つた。半分眠つたやうになつて、それでも彼は切りにそれへ追ひすがらうとし、そして無理に意識をはつきりさすと、字は讀みながら、もう意味は勝手な夢になつてゐた。何時か目蓋が眼を被ふ。彼は快く眠りの中へ沈んで行つた。が、まだ彼は何かしら考へてゐた。此二三ケ月の眼まぐろしい、いやな生活、その後に漸く來た、これは安らかな大きい眠りだ。こんな事を思つてゐた。
　彼が眼を覺ました時には船室の丸い小さな窓の厚い硝子を透して白つぽい外の光りが差込んでゐた。彼は枕から頭をあげた。海は前日のやうに、灰色をした寒さうな空の下で荒れて居た。八時だつた。彼が起きた時に若い外國人は食事を濟ましてもう其處にはゐなかつた。そして彼も食事を濟ますと外套を羽織つて甲板へ出て行つた。風は幾らか凪いで、船は紀州の海岸に添うて進んでゐた。
　若い外國人は船尾の方で息を切らし〳〵、鼻歌を唄ひながら、一つ處を行つたり來たりして居た。彼を見ると、「お早う」と云つた。そして、「温かくなるから一緒に歩かないか」と勧めた。彼は着流しに厚い毛のズボン下を穿いてゐたので、尻端折りでもしなければ左う早くは歩けなかつた。彼は斷つて、喫煙室に引きかへした。間もなく若い外國人は貸したガルシンの本を持つて入つてきた。そして「四日間」といふ短篇をモルビッドとかテリブルとかいふ言葉を使つて頻りと讃めた。
「神戸へ何時頃に着くかしら」其處へ入つて來たボーイに彼は訊いた。西行きの汽車を調べるつもりだつた。「昨晩は少し荒れたので遅れましたが、浬を一杯にかけてますから、左う遅れは致しますまい」とボーイは答へた。「三時頃には着きませう」
　實際船は三時に止つた。止らない内から、ホテルのランチが何隻か乘客を爭ふ車夫のやうに船のまはりをうろついた。彼は遲れ走せに來た、郵船會社の大きいランチで岸へ上つた。そして稅關で何か白墨でしるしをされた旅行鞄を膝の間に立てゝ俥で三の宮の停車場へ向つた。

十四

　須磨、舞子の海岸は美しかつた。夕映えを映

した夕なぎの海に岸近く小舟で輕く搖られながら、胡坐をかいて、網をつくろつてゐる船頭がある。白い砂濱の松の根から長く網を延ばして、もう夜泊の支度をしてゐる漁船がある。謙作は樂しい氣持で、これらを眺めてゐた。そして汽車が進むに從つて夜が近づいた。彼は又眠くなつた。眼まぐろしい、寢不足續きの生活の後では幾ら眠つても眠足りなかつた。彼は食堂へ行つて、簡單な食事を濟ますと、和服に着かへて空いてゐる座席に長くなつた。そして十一時頃ボーイに起され、尾の道で下車した。

旅行案内に出てゐる宿屋は二軒とも停車場の前にあつた。彼は其一軒へ入つた。思つたより落ちついた家だつたが、三味線の音が聴えてゐたので、彼は番頭に、なるべく奥の靜かな部屋がいゝと云つた。

二階の靜かな部屋に通された。彼は起つて、障子を開けて見た。未だ戸が閉めてなく、向からさす電燈の明りが前の路を照らした。其路と云つても、一寸した往來で直ぐ海だつた。海と云つても、前に大きな島があつて、河のやうに思はれた。何十艘といふ漁船や荷船が所々にもやつてゐる。そしてその赤黄色い灯りが美しく水に映るのが、如何にも賑やかで、何んとなく東京の眞夜中の町を想はせた。

金火鉢を持つて入つて來た女中が縁側にゐる彼に、

「おあぶりやす」と云つた。彼は默つて入ると、障子を閉め、火鉢の前へ坐つた。女中は薄茶と菓子を彼の前へすゝめた。

「今からでも按摩を頼んで貰へるかい？」

「えーえ、あんさんの爲めなら」と慣々しく云つて女中は出て行つた。餘り慣々しいので彼は普通の宿屋でない家へ入つたかしらと一寸思つた。

彼は按摩から、西國寺、千光寺、淨土寺、それから、講釋本にある對潮樓外の話、近い處では鞆の津の福禪寺、阿伏兎の觀音、四國では道後の湯、讃岐の金刀比羅、高松、屋島、淨瑠璃にある志度寺などの話を聽いた。彼は東京から夜着其他の荷の着くまで一週間程何處か遊してもいゝと考へた。

按摩は話に氣をとられると、段々弱くなつた。

「もう少し強くやつてくれないか」

按摩は急に強くし出した。丁度水車の杵が米をつくやうに肩の上でぐりぐりと亂暴に臂で肉をつき下ろした。

「何んと云ふ流儀だね？」

「長崎の緒方流と申しやんすけ」

彼は前日新橋で別れて來たハイカラな緒方と、此薄ぎたない按摩の緒方流とで、何んと云ふ事なし、一人微笑した。

海の方で、ヒヨコン／＼と寂しい、汽笛だか何だかがしてゐる。丁度芝居で使ふ千鳥の啼聲だ。もう人々の寢靜まつた夜更け、默つてこれを聽いてゐると何んとなく、淋しいやうな快い旅情が起つて來た。

「あれは何んだい？」

「あの音かえな。ありやあ、[illegible]」

翌日十時頃、彼は千光寺と云ふ山の上の寺へ行くつもりで宿を出た。其寺は市の中心にあつて、一ト目に全市が見渡せるといふので、其處から[illegible]の住むべき位置を決めようと彼は思つた。

いゝ加減な處から左へ鐵道線路を越して、前に高い石段があつて其上の山門に[illegible]とよく書いた大きな行燈が下つてゐた。光明寺といふ寺で、彼は寺内を抜けて山へかゝつたが、うねり、くねつた分りにくい小路が幾つもあつて、其どれを進んでいゝか見當がつかず、或る分れ路に立つて休んでゐた。

一寄せ來る敵を、みな〳〵殺せえ——」突貫喇叭の節で大聲に唄ひながら、十二三になる男の兒が上の方から元氣に細い竹の棒を振りながら駈け下りて來た。

「千光寺へ行くのはこれでいゝの？」——彼は行手を指して其兒に訊いた。立止つた子供は彼と一緒に山を見上げて居たが、どう敎へていゝか迷ふ風だつた。

一口で云うても分らんけえ。俺が一緒に行きやんせう」

子供は彼の返事も待たずに、今降りて來た細い坂路を前こごみの身體を快活に左右に振りながら、先へ立つて登りだした。斜めに右へ右へと登つて行つた。暫く行くと左手に高く、二三寸に延びた麥畑があつて、その上に屋根の低い三軒長屋があり、その左の端に貸家の札が下つてゐた。彼は子供に禮を云つて別れ、其家を見に行つた。日向で張物をしてゐたかみさんが、色々と親切に敎へて吳れた。

それから斜に一丁程登つて行つて、彼は又三軒長屋で、東の端が貸家になつてゐるのを見つけた。見晴しは前の家よりよかつた。此處にも親切な婆さんがゐて、彼の聞く事に親切に答へて吳れた。彼には今の子供でも、かみさんでも、此婆さんでも、皆いゝ人間に思へた。かういふ側々出會つた二三人からの印象で直ぐ、左う思ふのは單純すぎる氣もしたが、矢張り彼はそれらから此初めての土地に何となくいゝ感じを持つた。

漸く千光寺へ登る石段へ出た。それは幅は狹いが、隨分長い石段だつた。段の中頃に二三軒の硝子戸を閉め切つた茶屋があつて、どの家にも軒には千光寺の名所繪葉書を入れた額が下つてゐた。段を登り切つて、左へ折れ、又右へ少し幅廣い石段を上ると、大きな松の枝に被はれた掛け茶屋がある。彼は其床几に腰を下ろした。

前の島を越して遠く薄雪を頂いた四國の山々が見られた。それから瀨戸海の未だ名を知らぬ大小の島々、左ういふ廣い景色が、彼には如何にも物珍らしく愉快だつた。烟突に白く大阪商船の印をつけた汽船が、前の島の靜かな岸を背景にして、時々湯氣を吐き一寸間を措いて、ぼーつといやに底力のある汽笛を響かしながら、靜かに入つて來た。上ゲ汐の流れに乘つた小船が思ひの外の速さで其横を擦れ違ひに漕いで行く。そして、幅廣い不恰好な渡し船が流れを斜めに悠々と漕ぎ上つてゐるのが見られた、

然し彼はかう云ふ見馴れない景色を眺めて居ると、やがてはこれにも見厭き、それがいゝ景色だけに却つて苦になりさうだと云ふやうな氣がした。

彼はうで玉子を食ひながら、茶店の主から、前の島が向ひ島、その間の小さい海が玉の浦、と云ふやうな事を聽いた。玉の浦に就いては、此千光寺にある玉の岩の頂邊に昔、光る珠があつて、どんな遠くからでも見られ、その光りで町は夜戶外に出るにも灯が要らなかつたが、或る時、船で沖を通つた外國人が、此岩を見て賣つて吳れと云ひに來た。町の人々は山の大きな岩を賣つた處で眞逆に持つては行かれまいと、承知をすると、外國人は上の光る處だけを刳拔いて持つて行つて了つた。それからといふもの、此町でも、月のない夜は他土地同樣、提灯を持たねば戶外を步けぬやうになつたと云ふ話である。

一今も、岩の上には醬油樽に二タ廻りもあるほけえ穴があいとりますがのう。まあ今日らで申さば、ダイヤモンドのやうな物ぢやつたらう云ふことです一

彼は町の人々が祖先の間拔けだつた傳說を其儘云ひ傳へに居る所が、何んとなく呑氣で、面

白い氣がした。
　彼は茶店の主から聽いて、先頃死んだ商家の隱居が住んでゐたと云ふ空家を見に行つた。枯葉朽葉の散り敷いたじめじめした細道を入つて行くと、大きな岩に抱き込まれたやうな場所に薄暗く建てられた小さな茶室様の一棟があつた。が、それが如何にも荒れはてゝゐて、修繕も容易でないが、それより陰氣臭くて迚も住む氣になれなかつた。彼は又茶店まで引きかへして、石段を寺の方へ登つて行つた。大きな自然石、その間々に巖丈な松の大木、そして所々に碑文、和歌、俳句などを刻りつけた石が建つてゐる。彼は久しい以前行つた事のある山形の先の山寺とか、鋸山の日本寺を憶ひ起した。開山が長崎の方から來た支那の坊主といふだけに岩や木のたゝずまひから、山門、鐘樓、總てが、山寺日本寺などよりも更に支那臭い感じを與へた。玉の岩といふのは其鐘樓の手前にあつた。小さい二階家程の孤立した一つの石で、それが丁度、珠の玉の形をしてゐた。
　鐘樓の所からは殆ど完全に市全體が眺められた。山と海とに挾まれた市は其細い幅とは不釣合に東西に延びて居た。屋並もぎつしりつまつて、直ぐ下にはづんぐりとした煙突が澤山立つてゐる。酢を作る家だ。彼には人家の少しづつ薄らいだ町はづれの海邊を眺めながら、あの邊にいゝ家でもあればいゝがと思つた。
　暫くして彼は再び長い／＼石段を根氣よくこつ／＼と町まで降りて行つた。其朝、宿の者に買はした下駄は下まで降りると、すつかり鼻緒がゆるんで了つた。
　不潔なじめ／＼した路次から往來へ出る。道幅は狹かつたが、店々には割りに大きな家が多く、一體に充實して、道行く人々も生々と活動的で、玉の岩の玉を敲かれた間拔けな祖先を持つ人々には見えなかつた。
　彼は又町特有な何か臭ひがあると思つた。酢の臭ひだ。最初それと氣附かなかつたが、酢と看板を出した前へ來ると一層これが烈しく鼻をつくので氣附いた。路次の不潔な事も特色の一つだつた。瓢箪を下げた家の多い事も彼には物珍らしかつた。骨董屋、古道具屋、又それを專門に賣る家は素より、八百屋でも荒物屋でも、駄菓子屋でも、それから時計屋、唐物屋、印版屋のショーウインドウでも、彼は到る所で瓢箪を見かけた。彼は歸つて女中から宿の主も丹波行李に幾つかの瓢箪の持主だと云ふ事を聽いた。
　其晩彼は早く寢た。そして翌朝未明に起きると、未だ電燈のついてゐる掃いたやうな往來を番頭に送られて近い船つき場へ行つた。霜が下りて寒い朝だつた。
　内海の景色は彼が想像した程にはよくなかつた。丁度上げ汐時で、濁水が東へ東へと落ちつきなく苛波を立てゝ／＼流れて居る事などが一寸不思議に思へた。
　高濱と云ふ處で下りて、汽車で道後へ行つて、彼は其處で一泊した。そして又同じ處から船に乘り、宇品で降り、廣島から嚴島へ行つた。尾の道より氣に入つた處があれば彼は何處でもよかつたが、結局四日目に又尾の道へ歸つて來た。淡い疲れで、彼は氣分も頭もいゝ位にぼやけて居た。荷は未だ着いて居なかつたが、翌日千光寺の中腹の二度目に見た家を借りる事にして、彼は町から疊屋と提灯屋を呼んで來て、疊表や障子紙を新しくさせた。

十五

　謙作の寓居は三軒の小さい棟割長屋の一番奥にあつた。隣りは人のいゝ老夫婦で其婆さんに食事、洗濯その他の世話を頼んだ。其先きに松川といふ四十ばかりのノラクラ者がゐて、自分の細君を町の宿屋へ仲居に出して、それから働

日少しづつの小使錢を貰つて酒を飲んでゐると云ふ男だつた。

景色はいゝ處だつた。寢ころんでゐて色々な物が見えた。前の島に造船所がある。其處で朝からカーン〳〵と鐵槌を響かさせて居る。同じ島の左手の山の中腹に石切り場があつて、松林の中で石切りが絶えず唄を歌ひながら石を切り出してゐる。其聲は市の遙か高い處を通つて直接彼のゐる處に聽えて來た。

夕方、延び〳〵した心持で、狹い濡緣へ腰かけて居ると、下の方の商家の屋根の物干しで、沈みかけた太陽の方を向いて子供が棍棒を振つて居るのが小さく見える。其上を白い鳩が五六羽忙しさうに飛び廻つて居る。そして陽を受けた羽根が桃色にキラ〳〵と光る。

六時になると上の千光寺で時の鐘をつく。ごーんとなると直ぐゴーンと反響が一つ、又一つ、又一つ、それが遠くから歸つて來る。其頃から、晝間は向ひ島の山と山との間に一寸頭を見せてゐる百貫島の燈臺が光り出す。それはピカリと光つて又消える。造船所の銅を熔かしたやうな火が水に映り出す。

十時になると多度津通ひの連絡船が汽笛をならしながら歸つて來る。舳の赤と綠の灯り、甲板の黄色く見える電燈、それらを美しい縺でも振るやうに水に映しながら進んで來る。もう市からは何の騷がしい音も聽えなくなつて、船頭達のする高話の聲が手に取るやうに彼の處まで聞えて來る。

彼の家は表が六疊、裏が三疊それに土間の臺所、それだけの家だつた。疊や障子は新しくしたが、壁は傷だらけだつた。彼は町から美しい更紗の布れを買つて來て、そのきたない處を隱した。それで隱しきれない小さい傷は造花の材料にする繻子の木の葉をピンで留めて隱した。兎も角、家は安普請で、瓦斯ストーヴと瓦斯のカンテキとを一緒に焚けば狹いだけに八十度までは溫める事が出來たが、それを消すと直ぐ冷えて了ふ。寒い風の吹く夜などには二枚續きの毛布を二枚障子の内側につるして、戶外からの寒さを防いだ。それでも雨戶の隙から吹き込む風で其毛布が始終動いた。疊は表は新しかつたが、臺が波打つてゐるので、うつかり坐りを見ずに平つたい薤の瓶を置くと、倒した。其上疊と疊の間がすいてゐて、其處から風を吹き上げるので彼は讀かけの雜誌を讀んだ處から、千切り〳〵、それを卷いて火箸で其隙へ押し込んだ。

から云ふ東京とは全く異つた生活が彼を樂ませた。彼は久し振りに落ちついた氣分になつて、計畫の長い仕事に取りかゝつたのである。それで彼は自分の幼時から現在までの自傳的なものを書かうとした。彼は父が海外留學中に生れた兒だつた。そして父が何時歸つて來たか、それは覺えないが、父の留守中、祖母や母や兄や姉などと住んでゐた茗荷谷の小さい古ぼけた家を憶ひ起すことが出來た。みし〳〵いふ狹い階子段を登ると、屋根裏のやうな天井の低い部屋があつて、其處で祖母がよく機を織つて居た事、夜は又茶の間の薄暗い釣洋燈の下で、祖母や母が、眞綿から絲を引き出し〳〵してゐた事、その絲を紙を張つて澁をひいた味噌漉に溜めてある、それをいぢつて叱られた事、ぶん〳〵云ふ絲車の響、それらが前の世の事のやうに淡く憶ひ浮んで來た。

或日、狐が振りかへり〳〵悠々と生垣の間から出て行つた事、（それが狐といふ事は緣側で一緒に見てゐた祖母から敎へられたのだが）又或時、柿の木の高い枝にゐる油蟬を見て、非常に大きな蟬だと思つた事、それから多分同じ柿の木の下で近所の同年位の子供と、坊や—というのは自分の事だと互に主張し合つた事な

どを憶ひ出した。
　本郷龍岡町の家へ引移つたのは父が歸朝して間もなくの事だつた。或時女中に負ぶさつて父の食パンを買ひに上野の山下の方へ行つた歸途、池の端で龜の子を見てゐると、通りすがりの綺麗な奥さんが、彼が女中の背中で持たされてゐた食パンを包みのまゝツイと引き拔いて持つて行つて了つた事、それから舊藩主が死んだ時に、おかくれになつたといふのを「隠れん坊」と解つて、棺の後ろへ立て廻した金屏風の裏を切りに探し廻つた事、其葬式が傳通院であつた時に、撞木で叩く小さい釣鐘の響に震へ上つた事、それを叩いてゐる坊主を、無慈悲な奴だと腹から憎らしく思つた事等、かういふ斷片的な記憶が、丁度沼水の底から沼氣のぶかり〳〵と浮んで來るやうに浮んで來た。そしてそれらは、何れも毒にも藥にもならないやうなものが多かつたが、只一つ、未だ茗荷谷に居た頃に、母と一緒に寢て居て、母のよく寢入つたのを幸ひ、床の中に深くもぐつて行つたといふ記憶があつた。間もなく彼は眠つて居ると思つた母から烈しく手をつねられた。そして、邪慳に枕まで引き上げられた。然し母はそれなり全く眠つた人のやうに眼も開かず、口もきかなかつた。彼は自分のした事を恥ぢ、自分の仕た事の意味が大人と變らずに解つた。此の憶ひ出は、彼に不思議な氣をさした。恥づべき記憶でもあつたが、不思議な氣のする記憶だつた。何が彼に左う云ふ事をさせたか、好奇心か、衝動か、好奇心なら何故それ程に恥ぢたか、衝動とすれば誰にも既に其頃からそれが現れるものか、彼には見當がつかなかつた。恥ぢた所に何かしら左うばかりは云ひきれない所もあつたが、三つか四つの子供に對し、それを道德的に批判する氣はしなかつた。前の人の左う云ふ惰性、そんな氣も彼はした。こんな事でも因果が子に報いる、と思ふと、彼は一寸悲慘な氣がした。
　彼は左ういふ幼時の記憶から段々に書いて行つたのである。主に夜中から明け方までを仕事の時間にした。
　一ト月ばかりは先づ總てが順調に行つた。生活も、仕事も、健康も。然し一ト月も終りの頃からは少しづつそれが亂れて來た。
　彼は東京を出てから故意にお榮には餘り便りをしなかつた。それは一時彼の頭にこびり着いた妄想を振落としたい氣持からもあつたが、一つは孤獨から弱々しくなつた自分に自分で抵抗するやうな心持もあつた。が、信行の方には割りに便りをした。然しそれにも彼は―これは東京ならば友達と雜談してゐる時間にその心持で書くのです―といふやうな云譯けを書いた。お榮からはよく長い手紙が來た。お榮は信行への手紙を大概讀んでゐるらしかつた。
　仕事がうまく行かなくなるに從つて、生活の單調さが彼を苦しめ始めた。彼の一日々々は總て同じだつた。昨日雨で、今日晴れたといふ他は一日々々が少しも變らなかつた。彼は原稿紙の一角等に日を書き、それを壁へはつて置いて、一日々々と消して行つた。仕事が出來る間はまだよかつたが、氣持からも健康からもそれが疲れて來ると、字義通りの消日になつた。誰からも一人になることが目的であつたにしろ、今は其誰もゐない孤獨さに、彼は堪へられなくなつた。下の方を烈しい響をたてて急行の上り列車が通る。燈だけが見える。そして其響が聽えなくなると、暫くして、遠く弓なりに百足のやうな汽車が見え出す。黑い煙を吐きながら一生懸命に走つてゐる。が、それが、如何にものろ臭く見えた。あれで明日の朝は新橋へ着いて居るのだと思ふと、一寸不思議なやうな、嫉ましいやうな氣がした。無爲な日を送つてゐる彼自身の明朝までは實際直ぐだつた。間もなく

汽車は先の出鼻を挫いて彼を嘲す。

然し彼は東京へ歸らうとは却々思はなかつた。歸れば又來る事はなささうに思へた。今歸れば矢張り元の木阿彌に思へた。出來る事は兎も角、兎も角も此仕事を仕遂げねばと彼は決心した。彼はよく無意味に郵便局や、停車場へ入つてはぶら〳〵して居た。それは東京に一番近い場所といふ氣持があつたからである。彼が來た時に二三寸しかなかつた髪が今は六七寸に延びてゐた。

彼は自分の頬の筋肉が既に緩んで了つたやうな氣がした。そして、今は眼もはつきりと開いてゐられなくなつた。彼は何十日といふ間、朝から晩まで、絶えず陰氣臭い厭な顔をしてゐた事に心付いた。笑ふ事も、怒る事もない。第一胸一つぱいの呼吸すらしなかつた。

或る北風の強い夕方だつた。彼は何處か人のゐない處で、思ひ切り大きな聲を出して見ようと思つた。そして市を少し出はづれた濱へ出掛けて行つた。其處には瓦焼きのかまどが二つ程あつて、それが烈しい北風を受け、松の脂がジリ〳〵と音を立てながら燃えてゐた。強い光りが夕闇の中で眼を射た。彼は暫くぼんやりそれを眺めてゐたが、暫くして海邊の石垣の方へ行つて、海へ向つてその上へ立つた。然し彼には歌ふべき唄はなかつた。彼は無意味に大きい聲を出して見た。が、それが如何にも力ない悲しげな響になつて居た。寒い北風が背中へ烈しく吹きつける。瓦焼きの黒い煙が風に押しつけられて、荒れた鉛銀の海の上を、千切れ〳〵になつて飛んで行く。彼は我れながら腹立たしい程意氣地ない氣持になつて歸つて來た。

「旦那さん、錢は俺が出しますけえ、どうぞ、何處ぞへ連れて行つてつかあさい」こんな上手な事をいふ百姓娘のプロスティチュートがあつた。丸々と肥つた可愛い娘で、娘は愛されてゐるといふ自信から、よく〳〵偽りの悲しげな顔をして、一圓、二圓の金を彼から巻き上げた。

或る長閑な日の午後だつた。彼は向ひ島の鹽田を見に、渡しを渡つて行つた歸り、島の向う岸まで出て、日頃頭だけしか見て居ない百貫島を全體見るつもりで、その方へぶら〳〵と歩いて行つた。或る丘と丘との間のだら〳〵坂へかゝると彼は上から下りて來る男と女の二人連れを見た。その一人がプロスティチュートらしかつた。彼は何氣なく竹藪について細い路へ曲つた。そして十間程行つた處で立止り、振りかへつて、往來の方を見てゐた。其娘だつた。長い袖の派手な絣を着て、顔を醜い程に眞白く塗つてゐた。そして何か浮かれた調子で男へ話しかけながら通り過ぎた。男は中折れ帽を眼深く被つた番頭といふ風の若い男だつた。

健康も氣分も、そして仕事も段々に面白くなくなつた。第一に肩が無暗と凝つた。頭が重く、頸筋を揉むと、ジャジキと氣持の悪い音がした。食慾も衰へたし、睡眠も十分に出來なくなつた。うつら〳〵と何かしら不快な夢を見つゞけた。

然し夜中仕事にかゝつてゐる時は、仕事は殆ど捗らぬまゝに妙に氣分だけが冴え〳〵と、異状の亢奮を覺える事が却つて多くなつた。彼は亢奮から狭い六疊間を、疊の下で根太板ががた〳〵音をたてる程に無暗と歩き廻つたりした。左ういふ時彼は總てと差し向ひになつたやうな、自分が非常に偉大な人間になつたやうな氣持になる

夜の生活は多く左うであつたが、晝間は丁度反對に、彼は全くみじめな氣持に追ひつめられてゐた。それは肉體からも精神からも半病人だつた。物憂く、眠く、眼は充血して、全で元氣がなくなつた。

或る時、隣りの婆さんに勸められて、寶土寺

の石段下にゐる岩兵衛按摩といふ以前、濱で小揚人足をしてゐた盲人の處へ行つて見たが、其腹の立つ程の荒療治も彼の肩には何の利き目もなかつた。彼は矢張り今は仕事を中止するより仕方なくなつた。

十六

春めいた長閑な日だつた。前の石垣の間から、大きな蜥蜴が長い冬籠りの大儀さうな身體を半分出して、凝然と日光をあびてゐる、左ういふ午前だつた。彼も幾らか輕い心持で、前の障子を一ぱいに開け、お豊と一緒の食事をしてゐた。向ひ島の山の上には青く、うつすりと四國の山々が眺められた。彼は不圖旅を思ひ立つた。そして旅行案内を出し、讃岐行きの船の時間などを調べてゐると、隣りの婆さんが、

「よう、嗅ぎつけをる」こんな事をいひながら前の縁へ來て腰を下ろした。飯時に何時でも來る近所の小犬が二疋濡縁の先に黒い鼻の先だけを見せてゐた。そのヒクヒクと動く鼻の先だけが何か小さい二つの生物のやうに見えた。

「金ン毘羅さんへ行くには連絡の方がいゝのかしら？」

「へえ、今日らは大方御本山さんへ參られる者が仰山出やんせうでの、商船會社の船はこんでいけやすまい」

「二時ですネ」

「へえ、——あゝんさん、金ン毘羅さんへ參られやんすか」

「あゝ。それから部屋は此儘にしといて下さい。盗られても困らないものばかりだから」

「へえ。しやあごぢやんせん」と婆さんは笑つた。

「大事なものは鞄へ入れとくから、それだけ預つて下さい」

「へえ。——今日らは滿のお月様がよう見えやんせうの」

「お婆さんは行つて見たことがあるの？」

「えーえ」と否定して「先年お四國遍路に出やしての。其歸り船で通つただけムんすけ」

「左う。今晩舟でお月見をして、あした金ン比羅さんへ行つて、それから、あさつて、高松で、今度開くといふお城の庭を見て來ませう」

「立派なものぢやさうにごぢやんすのう。岡山のよりえゝんぢやいふとをられやんした」

彼は食事の餘りを一つ皿に集めてそれを犬にやつた。一疋が切りに唸つて他を威嚇した。

「しつ、しつ」婆さんは腰かけた儘、藁草履をはいた足で寄る犬を蹴る眞似をした。

下の方から、隠居仕事に毎日商船會社の船つき場に切符きりに出てゐる爺さんが細い急な坂路をよちよちと登つて來るのが見えた。

「歸つて來た」

「へえ」かういつて婆さんは笑つてその方を見てゐた。近所の六つばかりになる女の兒が自分の家の小さい門の前に立つて、

「お爺さーん」と大聲に呼んだ。爺さんは立止り、腰をのして此方を見上げた。ぶくぶくに着ぶくれた爺さんの背中は、幾ら腰をのしても未だ屈つてゐた。そして、

「芳子さあ——」幅のある氣持のいゝ濁聲で呼びかへした。

「お爺さ——ん」

「芳子さあ——」

かう甲高い聲と幅のある濁聲とが呼び交はした。そして爺さんは又前こゞみの姿勢に變つてよちよちと登り出した。婆さんは隣りへ歸つて行つた。

暫くして、謙作は金を取りに山を下りて行つた。市の郵便局は近かつた。貯金爲替と書いた口へ、彼は持つて來た爲替の紙を出すと、

「今日は午前中だけですがのう」と云はれた。

日曜を彼は忘れてゐた。今、決算を濟まして渡した所です」と局員は氣の毒さうにいつた。

彼は未練らしく二三歩下つて頭の上の大時計を見た。二十分程過ぎてゐた。仕方なし、彼は旅を一日延ばす事にした。

翌日は薄日のさした、寒い、いやな日だつた。空模樣も不穩でなく、風もあつた。彼は一寸迷つたが、矢張り出かける事にして、一時半頃汽船の出る處へ行つた。

着くのが三十分遅れた爲めに、それだけ二時發から遅れて、船は出發した。彼は祖父の着古した、きたない二重廻しをきて、甲板へ出てゐた。船は細長い市に添うて東へと進む。千光寺の山の中腹に彼の小さい家が一層小さく眺められた。先刻まで着てゐた、綿入れと羽織とが軒の物干竿に下つてゐる。それも如何にも小さく眺められた。其前に婆さんが腰かけて此方を見てゐる。彼は一寸手を擧げて見た。婆さんも直ぐ不器用に片手を擧げた。そして笑つてゐるらしかつた。

山と山との間の一番奧にある西國寺といふ寺が見え出した。間もなく、船は淨土寺の前を過ぎ、市をはづれて、舵を南へ南へととり、向ひ島を廻つて、沖へ出て行つた。彼は因の島、百貫島、その位で島の名を知らなかつた。然し島は一つ通り越すと又一つと並んでゐた。島と島との間を見通せないので、只船で通つては彎曲の多い海岸を見ると餘り變りなかつた。

先刻まで薄日のさしてゐた空は何時かどんよりと曇つて、寒い風が西から吹いてゐた。彼は船室へ入らうかと思つたが、何かしらそれも惜しい氣持から、二重まはしの羽根をかき合せ、立てた襟に頤を埋めて、尚甲板のベンチへ腰を据ゑてゐた。

船は島と島との間を縫つて進んだ。島々の傾斜地に作られた麥畑が、一と畑毎に濃い綠、淡い綠と、はつきりくぎりをつけて、曇つた空の下にビロードのやうに滑らかに美しく眺められた。それから、島々の峯の線が如何にも力強く美しく眺められた。曇り日を背にした方が殊に輪廓がくつきりとよく見えた。彼は市の瓢箪屋で見た割れ瓢の割れ目の線を想ひ出した。自然の作る線、これには矢張り共通な力強さ、美しさがある事に感服した。

或る島は遠く、或る島は直ぐ側を通つた。少し人家のある濱邊には出鼻の鹽風に吹き曲げられた一二本の老松の下に屹度常燈明と深く刻りつけられた古風な石の燈臺が見られた。他の島の若い娘が毎夜其燈明をたよりに海を泳ぎ渡つて戀人と會ひに來る。或る嵐の夜、心變りのした若者は故意に其燈明を吹き消して置いた。娘は途中で溺れ死んだ。かういふよくある傳説にはどれも似合はしい燈明だつた。

阿武兎の觀音といふのが見え出した。それは陸と島との細い海峽の陸の方の出鼻にある、拜殿が陸にあつて、奧の院は海へ出ばつた一本立ちの大きな石の上に、二間程に石垣を積み上げて、その上に建つてゐた。其間五六間が、かなりの勾配の廊下でつながつて居る。その他は自然のまゝで、人家もなく、如何にも支那繪を見る心持であつた。

其處を廻つて汽船は陸添ひに進む。庭に取り入れていゝやうな松の生えた手頃な小さい島が幾つかあつて、やがて鞆の津に船は止つた。仙醉島が靜かに横はつてゐる。繪葉書で勝手に想像してゐた向きとは全く反對側にそれがあつたので多少彼は物足らなかつたが、兎も角それは氣持のいゝ穩やかな島であつた。町の方は人家でごちや／＼してゐた。保命酒釀造元とか、元祖十六味保命酒とかペンキで塗つた烟突が所々に立つてゐた。

彼は其晩此處で月見をするつもりだつたが、

空模様が逆も見られさうもないので、其儘乗り越す事にした。

段々身體が冷えて不愉快になつて來た。彼は船室へ降りて行つた。二等といふので客は五六人しか居なかつた。その中に混つて彼も横になつた。船は少しづつ搖れて、ばたん〳〵と胴を打つ波の音が聽えた。彼は少し睡かつたが、眠れば風邪をひきさうなので又起きて、持つて來た小説本を讀み初めた。

「御退屈でムります」洋服の腕に二本金筋を巻いた船員が自分はレコード、蓄音機は水夫に持たせて入つて來た。「どうぞ、御自由に御散財下さりませ」笑ひながら、こんな事をいつて、大概は寢てゐるので、起きてゐた謙作の前にそれを置いた。

謙作は其儘本を讀んで居たが、誰も手を出す者がないので、レコードの函を引き寄せて見た。浪花節が多かつたが、義太夫もあつた。義太夫は好きだつたので、彼はそれらを三四枚續けてかけた。

「呂昇の奴は別ちやのう」二人で寢ながら株の話をしてゐた一人がこんな事をいつた。其男は又謙作の方を向いて、「浮かれ節はありやんせんかえなあ」といつた。

「うゝ？」謙作は浪花節の事だらうとは思つたが、よく通じないやうな、そして故意に無愛想な顔をして、又義太夫をかけた。其男はそれなり默つた。一寸氣の毒な氣がして、彼は其次に「吉原雀」「四季の唄」といふのをかけた。「春は花、いざ見にごんせ、東山」といふ唄だらうと思つてゐると、最初シャン〳〵いつてゐた喇叭から、突然、突拍子もない浮かれ調子で「春は嬉しや、二人揃うて……」といふ唄が出て來た。氣六ツかしい不機嫌らしい顔の自身見えるだけに此浮かれ唄との滑稽な對照が自分でも一寸可笑しくなつた。其儘にしてゐると、「夏は嬉しや秋は嬉しや」と蓄音機は不遠慮に浮かれた。「ダン〳〵〳〵〳〵」といふ汽罐の響き、ぼう〳〵と甲板で鳴らす汽笛、船の胴を打つ波音、それらと入れ混つて、凡そ不調和に「雪見の酒」と浮かれてゐる。彼は蓄音機をやめて、又甲板へあがつて行つた。

いつか、もう讃岐の海岸が遠く見えてゐた。其處には三四人の客が立つて居た。

「事務長さん、金ン毘羅さんのお山はどれですかいなー」

「あれでムります」先刻蓄音機を持つて來た金筋を腕に巻いた男が指さして答へた。「あれが、その、象の頭に似とるといふので、それで象頭山、金ン毘羅、大權現、ですかいな、など申すのぢやさうにムんす。あのこちら側に黒う見えとりますの。此處からはほんこまい森のやうにムんすけえ、そら、いたらエライ森でムんすぱ」

帆を張つた漁船が四五艘、黒ずんだ藍色の海を力強く走つてゐた。事務長は此邊が内海の眞ん中で西からも東からも汐が上げて來て、此處で又別れて兩方へ干いて行くのだと説明した。

「來月は善通寺さんの御開帳で又一段と賑ふ事でムんせう」こんな事もいつた。

謙作は一人船尾へ行つて、其處のベンチに腰かけた。彼は象頭山、それから、それに連なる山々を眺めた。彼は今事務長が云つた山よりも其前の山がもつと象の頭に似てゐると思つた。そして彼はそれだけの頭を出して、大地へ埋まつてゐる大きな象が、全身で立ち上つた場合を空想したりした。それから起る人間の騷ぎ、人間が其爲めに滅ぼし盡されるか、人間がそれを何すかと云ふ騷ぎ、世界中の軍人、政治家、學者が、智慧をしぼる 大砲、地雷、左ういふものは象皮病といふ位で、其象では皮膚の厚みが一町位ある爲めに用をなさない。食糧攻

めにするには朝めしと晝めしの間が五十年なので如何する事も出來ない。賢い人間は怒らせなければ惡い事はしないだらうと云ふ。印度の或る宗旨の人々は神だと云ふ。然し全體の人間は如何かして殺さうと樣々な詭計を弄する。到頭象は怒り出す。……彼は何時か自分が其象になつて、人間との戰爭で一人亢奮した。

　都會で一つ足踏みをすると一時に五萬人がつぶされる。大砲、地雷、毒瓦斯、飛行機、飛行船、左ういふあらゆる人智をつくした武器で攻め寄せられる。然し彼が鼻で一つ吹けば飛行機は蚊よりも脆く落ち、ツェッペリンは風船玉のやうに飛んで行つて了ふ。彼が鼻へ吸ひ込んだ水を吐けば洪水になり、海に一度入つて、駈け上つて來ると、それが大きな津浪になる。……

「御退屈でムりました。もうあれが多度津でムります。十分で着きますで、御支度を……」かう、事務長が知らせに來た。彼は退屈どころではなかつたのである。

　ぼう／＼と耳の底へいやに響く汽笛を切りにならしながら船は屋根の澤山見える多度津へ向つて進んでゐた。

　彼は他愛ない想像から覺めた。然しそれを左う滑稽とも彼は感じなかつた。人類を對手取る所に、變な氣がしたが、子供からの空想癖が、一人になつて話し相手もない所から段々に高じて來た此頃、彼は今した想像に對しても別に馬鹿々々しいとも感じなかつた。

　彼は別に支度もなかつたので、洋傘を取りに一度船室へ降りて又出て來た。夕日が沖の島といふ上に赤く輝き出した。甲板には十四五人の客が立つてゐた。

「金ン毘羅さんへ參られますか」

「えゝ」

「お一人ですか」

「左うです」

「お淋しいですの」

「えゝ」

「お宿は？」

「何といふ家がいゝんですか」

「先づ虎屋。それから備中屋ですが、これらはお一人で行かれても、どうですか」と其男が云つた。

　謙作は只點頭いて見せた。

「よし吉と云ふのがよろしいでせう。俺も用は多度津ですが、今夜は其處へいつて泊らうと思うとります。何んでしたら、御一緒に――」

顏でも手でも甚くきたない皮膚をした下品な二十五六の商人風の男だつた。其男はもう自分から一緒に泊る事に決めて、「よし吉」のあり場所などを說明した。

　多度津の波止場には波が打ちつけて居た。波止場の中には達磨船、千石船といふやうな荷物船が澤山入つて居た。

　謙作は誰よりも先に棧橋へ下りた。横から烈しく吹きつける風の中を彼は急ぎ足に歩いて行つた。丁度汐が引いてゐて、浮き棧橋から波止場へ渡るかけ橋が急な坂になつてゐた。それを登つて行くと、上から、その船に乘る團體の婆さん達が日和下駄を手にさげ、裸足で下りて來た。謙作より三四間後を先刻の商人風の男が、これも他の客から一人離れて謙作を追つて急いで來た。謙作は露骨に追ひつかれないやうにぐん／＼歩いた。何處が停車場か分らなかつたが、訊いてゐると其男に追ひつかれさうなので、彼はいゝ加減に賑やかな町の方へ急いだ。

　もう其男もついて來なかつた。郵便局の前を通る時、局員の一人が暇さうな顏をして窓から首を出してゐた。それに訊いて、直ぐ近い停車場へ行つた。

　停車場の待合室ではストーヴに火がよく燃えてゐた。其處に二十分程待つと、普通より少

し小さい汽車が着いた。彼はそれに乘つて金刀毘羅へ向つた。

十七

其夜彼は金刀毘羅で、一人では泊めまいと云はれた宿屋へ行つて泊つた。そして翌朝金刀毘羅神社へ行つた。其處の寶物の或物が彼を樂ました。伊勢物語、保元平治物語などの昔の裝幀を彼は美しく思つた。それから日頃嫌ひな狩野探幽の雪景色を描いた襖繪の屛風もいいと思つた。それ程に左ういふものに餓ゑてゐたやうにも彼は感じた。本社へ行くまでの道にも人工の美を見出した。

本社へ上る急な石段がある。その前が殊にいいやうに思つた。然し本社から奥の院までの道は、最近に作つたものらしく、人工の美は皆無だつた。只尾の道で松ばかり見てゐた眼に色々繁つた山の大きい木が物珍らしかつた。が、其内不圖その木の肌を氣味惡く思ひ出すと、彼の張つた神經は、それから甚く劫かされた。

午後、豫定に從つて彼は高松へ行つた。的てにして居た城内の庭は見られなかつたが、栗林公園といふのを見た。それから彼は町を少し歩いた。或る角に洋酒洋食品を賣る軒の低い、然し割りに充實した店があつた。其處へ入つた尾の道にはいゝ左ういふ店がないので何か鑵詰を買込んで行くつもりだつた。彼は默つて棚を探し歩いた。然し大和煮、五三燒、左ういふ尾の道にもある物ばかりで欲しいやうなものはなかつた。

「何が御入り用ですか」髮を油で光らした番頭だか、若主人だかが出て來た。

「舶來の肉の鑵詰がありますか？」

「ございます」からいつて若い男は直ぐ奥から大きい濃藍色の鑵詰を持つて出て來た。貼紙には Puro english outs と書いてある。

「これは肉だね？」

「左うです」と其男は何の遅疑なしに答へた。

謙作は鑵を振つて見た。中で乾いたゴソッといふやうな音がした。彼はそれを返しながら、

「肉かい？」と又云つた。其男は受取つた鑵の貼紙を見ながら、至極流暢な發音で、

「えゝ、ピューワ・イングリシュ・ナーツ」と云つた。

彼は默つて其店を出た。一寸腹も立つたが、其若者の眼に映つた自分がどんな者だつたらうと思ふと、彼は始めて自分の見すぼらしい姿に心づいた。きたない鳥打帽、二十年も前に出來た黑綾羅紗の二重廻し、鼻緒のゆるんだ安下駄、太卷きの洋傘、それに不精鬚を生やした物憂氣な顏……肉の鑵詰に選り好みをする柄でなかつたに違ひない。然し彼はもう一度還つて、其處でそれを開けさして返してやらうかしらといふやうな小さな餘憤も感じた。

屋島へ行く事にして、俥で電車の出る處へ向ふ。志度寺行きの電車に乘る。彼が乘つた電車は空いてゐたが、歸つて來る電車はどれも一杯の客だつた。それは市の新聞社と電車の會社とが一緒になつて、屋島で寶探しとか、藝者役者の變裝競爭とか云ふ催しをした、其歸り客だつた。彼が屋島で下りてからも未だ歸り客がゾロ〳〵と通つた。鬱金木綿の揃ひの手拭を首へかけたり鉢卷きにしたりした番頭小僧の連中、藝者を連れた醉漢、帽子のリボンから風船玉を上げてゐる子供連れの男、十日戎のほいかごのやうなかごに乘つた連中、書生、職工、その他荷をかついだ緣日商人等、種々雜多な連中が大概は赤い顏をして、疲れた身體を互にもたれ合つて、歸つて來た。彼は一人それらの連中とは全く異つた氣持で擦れ違ひに歩いて行つた。が、彼の心は淋しい情緒を樂しんでゐた。子供の頃、龜井戸の藤見、大久保の躑躅見、

それでなければ駒場の運動會の歸途、何かしら不安といふ漠然とした淡い情緒が起つてゐた。平地の塵埃つぽい處から、漸く坂道にかゝる頃から歸り客も段々疎らになつて行つた。彼は松林の中の坂道を休み〳〵靜かに登つて行つた。高松からずつと續いてゐる鹽濱が段々下の方に見えて來た。鹽焼きの湯氣が小屋の屋根から太い棒になつて夕方の穏やかな空氣の中に白く立つて居る。それが點々と遠く續く。彼の物憂い沈んだ氣分も流石に慰められた。

彼が上の平地へ上つた頃は、其處にはもう殆ど人影もなく、折の壞れ、蜜柑の皮、そんなものが落ち散つてゐるばかりだつた。繪葉書や平家蟹の干物を賣る小さい家が店を仕舞ひかけてゐた。彼は歩いてゐる内に自然に、下の方に海を望んだ、小松林の前の宿屋へ出た。一組歸り遅れた客が離れの一つで騒いでゐたが、女中達は忙しく後片づけに立働いてゐる所だつた。

彼は海を見下す、崖の上の小さな風雅作りの離れに通された。右の方に夕もやに包まれた小豆島が靜かに横たはつてゐる。近く遠く名を知らぬ島々が眺められた。遥か眼の下には、五大力とか千石船とかいふ昔風な和船がもう帆柱に灯りをかゝげて休んでゐる。夕闇は海の面から湧き上つた。海から寄せるうねりの長い〳〵弓なりの線が、それでも暗い中に眺められた。――電も何もない景色だつた。が、彼の心は不思議にそれを樂しまなかつた。

女中が食事を持つて來た、彼には殆ど食慾がなかつた。膳を下げる時に女中は、

「お床はあちらへお延べ致しますから」といつた。

「支度が出來たら直ぐ知らして下さい」

彼の氣持は變に沈んで行つた。それは旅愁といふやうな淡い感じのものではなく、もつと暗い重苦しい氣持だつた。

間もなく女中が迎ひに來た。彼はそれに導かれて庭から直ぐ座敷の方へ行つた。裏の松林の上に、大きなバラ色の月が出て居た。庭へ入らうとする處に屋根のついた小さな門がある。その側に、彼が通る殆ど足下に、一人の男が死人のやうにぐつたりと俯伏して倒れてゐた。髪はのぼう〳〵と延びた、乞食のやうな男で、寝たまゝ小便をしたらしく、腰の邊の地面が黒く濕つてゐた。

女中は、殆ど注意を拂はなかつた。然し彼は何となく氣になつた。座敷へ入ると、彼は、

「今の人は病氣ぢやあるまいね？」と訊いた。

「醉うとりますの」

「此邊の人かい？」

「青太さんといふ獨者の乞食で厶います。今日のおふれまひで御酒飲みましたので」

宮德火鉢によく火がおこつてゐた。謙作はそれにあたりながら女中が部屋を出て行くのを待つてゐた。それは其處に出してある宿屋の寝間着を着るのが厭だつたからである。女中は手持無沙汰に未だ其處にゐた。暫く彼は、

「もうよろしい」と云つた。

「お召物をたゝんで參りませう」と女中が云つた。

「さうだな。……たゝまなくてよろしい」

女中は起ちながら出て行つた。彼は直ぐ立つて羽織だけを脱ぎ、着のみ着のまゝ、帯の結目を前へ廻して寝床へ入つた。

彼は寝ながら持つて來た本を擴げたが、どうしても、それに惹き込まれて行かなかつた。暗い淋しい氣持が廻りから締めつけて來る。彼はそれにおさへられ、身動きもならず、只凝然としてゐるより仕方ない氣持だつた。實に靜かな夜だ。そして寒く、火のある部屋でも體は冷え冷えと、未だ足の先は温まりきらずにゐた。

戸外から先刻の乞食の鼾がかすかに聞えて

來た。

彼は眠れぬまゝに、歸る家もなく、それを待つ人もない乞食の身の上を想ひ、それが丁度自分の身の上だと思はずにゐられなかつた。自分の仕事が成功しようが失敗しようが、それを心から喜ぶ者も悲しむ者もない。父や母や、同胞や、然しそれらは自分の家族ではない。それは差支へないが、……こんな風に思つた。

彼は心から自分の孤獨を感じた。それは今宵の廂の下に靜かに眠れてゐる乞食の孤獨と變りない孤獨だつた。——彼は急にお榮に會ひたくなつた。

何といつても感情的に、一番近い人間はお榮だ。其お榮が何故もつと本統に自分の生活に結びついては來ないのだらう。そして、結びついてはいけないのだらう。自分にとつてもお榮にとつても、寂しい上では殆ど肉身の近さになつてゐる。祖父の父が[illegible]めた關係、依然雇人、そして、自分の[illegible]時に身を[illegible]の女として、[illegible]無條件に認めてゐるのだ[illegible]同時に[illegible]變な事だつた[illegible]

祖父の妾だつた女と結婚する事は[illegible]な事だ。然し心にお榮を輕蔑して居る事からすれば、實際の關係に進まない前に正式に結婚して了ふ事の方がどの位氣持がいゝか知れないと思つた。嘲罵の的となる事、それも自分の氣持をひきしめて呉れる。年の餘りに違ふ事、曾て祖父の妾だつた事、此二つを別にすれば此結婚は自分にもお榮にも一番いゝ事だ。自分も落ちつけるし、お榮も本統の安定が得られるわけだ。何故自分は此事をもつと早く考へなかつたらう。

お榮と結婚するといふ考へは彼の氣持を明るくした。此決心が尾の道へ歸るまで變らなかつたら、早速手紙を書かうと思つた。然しお榮が承知するかどうかが疑はれた。若し承知しないとすれば歸京しよう。そして自身信行を勇氣づけよう。左う彼は考へた。

十八

翌日彼は尾の道へ歸つて來た。割りにいゝ天氣で、往きに見られなかつた備前の海の景色を見るにはいゝ日だつた。が、彼は左う落ちついては居られない氣持から直ぐ尾の道へ歸つて來た。

そして、其晩早速手紙を書かうとしたが、扨て、どういふ風にそれを切り出したものか、一寸迷つた。短刀直入に書いて了へば、一番簡單だつたが、餘りにそれは[illegible]に水に[illegible]なかつた。[illegible]に水をさゝれた人が[illegible]して起き上る時に、此方が幾ら落ちついて理屈の行くやう説明した所で、耳を傾す筈はない。そのやうなものだと思つた。これは矢張り信行に書いて、信行から靜かに話して貰ふより道はないと考へた。

謙作は信行にあて、これまでお榮に對した左う云ふ衝動で[illegible]分落ちこんだ事から、尾道で結婚を想ひ立つまでを正直に書いた。

そして、然し此事は父上や義母上や、其他の人達には[illegible]た不愉快な事であるのは勿論だが、愛子さんとの場合には父上は左ういふ事は自身するようと云ふお考へだつたから、此の度は誰にも相談はしないつもりです。相談する事で、思はぬ邪魔が入つても面白くないし、それに若し此事の爲めに今後本家へ出入りを差し止められるやうな事があつても、それは父上や義母上としては無理ない事だから、僕は素直な心持でそれをお受けするつもりです。——といふやうな事を書いた。

恐らくお榮さんは吃驚する事でせう。然し事を[illegible]からよく理解の行くよう話して承知させて欲しいと思ひます。そして此事に關しては誰にもお話

へがあると思ひますが、同時に僕の性質も知つてゐて下さるのですから、甚だ氣のいゝ事ですが兎も角僕の心持をそのまゝにお榮さんに傳へて頂く事をお願ひします。――と書いた。

彼は此手紙の他にお榮にも書いた。

大變御無沙汰してゐます。御變りない事と思ひます。……僕は此手紙で何んにも書きません。精しい事は總て信さんの方へ書きました。それはこれと同時に出しますから、恐らく此手紙を御覽になる翌日には信さんが行つて色々お話しする筈です。そしてそれはあなたを吃驚さす事です。然しどうか只驚いてゐずに、よく僕の心持を汲んで靜かに考へて下さい。そして感情的にならぬよう、何者も恐れぬよう、此事切にお願ひして置きます。彼はこんな風に書いた。

彼は此の二つの手紙を書き終ると、却つて變な氣落ちを感じた。これで自分の左う云ふ運命も決つて了つたと思ふと淋しい心持になつた。然しもう其事を迷ふ氣はしなかつた。そして、其時はもう夜も十二時過ぎてゐたが、此手紙を未だ投凾しないといふ事で躊躇ふやうでは不愉快だと云ふ氣持から、提灯をつけ、それから彼は停車場まで、それを出しに行つた。

返事の來るまでが不安であつた。直ぐ返事を書くとしても間が三日かゝる。然し何かと愚圖愚圖してゐれば四日位はかゝるに違ひないと思つた。此四日間の不安な氣持が今から想ひやられた。彼はお榮に、一圖くなれ、恐れるなと書きながら、自身時々暗々しい氣持に陷る事を情なく思つた。信行に對しても、自分の性質は知つてゐて呉れるのだからと、他人の考へでは動かされないからといふ氣勢を見せながら、未だに二つの反對な氣持が、自身の中でぶつかり合ふのを腹立たしくも情けなく感じた。

實際彼には同じ位に二つの反對した氣持があつた。此事がうまく行つて呉れゝばいゝといふ氣持と、うまく行かないで呉れ、といふやうな氣持と。何方が彼の本統の氣持かよく分らなかつた。何方にしろ決定すれば、彼はそれに順應した氣持になれるのだつた。然し左うはつきり決定しない内は、變にかういふ反對した二つの氣持に惱まされる。それは嫌で、又一種の病氣だつた。そして、結局はお榮の意志で運命を決める。それより他はないといふ受け身な氣持にをさまるのであつた。

彼は心ではそんな狀態に居ながら、一方、急に肉情的になつた。お榮との結婚、此豫想は樣樣な形で彼の左う云ふ肉情を刺激し出した。そして實際にも彼は其間に幾度か放蕩した。

六日目、漸く信行からの返事が來た。

お前の手紙見て、一時はかなり驚いた。自分として正直な事を云へば色々な理由で此事は思ひ止る事が出來れば思ひ止つて貰ひたいと思つた。然し前の事もあるし、又お前の性質として、行く所まで行かずに、そんな事を云つた所で、聽きさうもないし、一應お榮さんにお前の手紙を見せ、そして或る所まで自分の口から補ひ、お前に頼まれただけの事をはたした上で、其結果と一緒に自分の考へもお前に書いてやるのが本統だと考へ直した。今日會社の歸り兩吉町へ行つて來た。

一ト言に云ふとお榮さんは承知しなかつた。お前がお榮さんに出した手紙も見せて貰つたが、お榮さんはあれで、大體想像して居たらしくお前の手紙を見てそれ程驚かなかつた。そして寧ろ立派な態度で、それはいけない、と云ふ意味を云はれた。俺は感心した。かういふとお前は俺を如何にも賴み甲斐のない、お榮さんが左ういつて呉れるのを待つてゐたやうに思ふかも知れないが。――實際左ういふ氣持もあつたが、それにしろ、お前の手紙の意味を説明して一ト通りは勸める氣で行つたのだ。所が、お榮

さんの態度は左ういふ隙を全で見せない程きつぱりしたものだつた。
　お榮さんとは色々話した。お榮さんは風邪で二三日前から寢てゐたのだが、俺が行つたので起きられたのだ。
　俺は今、此手紙で何も彼もお前に書かねばならなくなつた事を非常に心苦しく思ふ。俺はお前に對し今まで本統に濟まない事をしてゐたのだ。そして今でもそれを打明けるのは非常に心苦しい。然し默つてゐて、此後何時までもお前を苦しめる事を思ふと、一時は崖から突落とすやうな事ではあるが、思ひ切つて書かねばならぬと決心した。
　お前は母上と祖父上との間に出來た子供なのだ。精しい事は知らない。俺も中學を出る頃、神戸の叔母さんに聽いて始めて知つたので、俺がそれを知つてゐる事は父上でも義母上でも恐らく今だに知つてはゐられまい。それ故、俺にも精しい事を知る機會がない。又知りたくない氣持もあつて、その儘でゐるが、兎も角茗荷谷に自家があつた頃、父上が三年獨逸へ留學された、其間にお前は生れたのだ。そして、こんな事まで書くのはお前を一層苦しめるばかりだとは思ふが、知つてるだけは總て云ふ決心で書き出したから書く。自家の祖父上祖母上は父上へ秘密に墮胎して了はうとしたのださうだ。然し芝の祖父上が―あなたは此上にも罪を重ねるおつもりですか―と非常に怒られたさうだ。それ故左ういふ事なしに濟んだが、母上は直ぐ芝へ引とられて行つた。そして、芝の祖父上は何から何まで正直に書いて獨逸へ送られたといふ事だ。勿論離婚を覺悟してだ。然し父上からは、總てを許すといふ返事が來た。そして其手紙が來ると間もなく、自家の祖父上は一人自家を出て何處かへ行つて了はれたのださうだ。
　俺はお前が左ういふ呪はれた運命のもとに生れたと聽いた時、隨分驚きもし、暗い氣持にもなつた。そして同じ同胞でどうしてお前だけが別に扱はれてゐるのかといふ漠然とした子供からの疑問も解けた。そして俺は此事はお前も屹度今は知つてゐるに違ひないと考へてゐた。長い間には何かでお榮さんがそれを知らさない事はあるまいと思つたし、それでなくてもお前自身左ういふ疑問を起したかも知れないと考へてゐた。所がお前が全くそれを知らずにゐる事を知つて實は俺も不思議に感じたのだ。俺は今日お榮さんと會つて此事でも感心した。お榮さんは父上との約束を守つてお前に話さなかつたのだ。―可哀想にそんな事、云へませんわ―とお榮さんは云つてゐられた。或はそれが本統かも知れない。然し何れにしろ、此長い年月、遂に饒舌らないといふ事は普通の女には中々出來難い事だ。
　今になつていふが、愛子さんとの事も、調はない原因は全く其處にあつたのだ。先方のお母さんは一方お前に同情してゐながら、いざとなると、其處までは出來なかつたらしい。これは然し慣習に從つて考へるあゝいふ人としては仕方がない。
　あの時俺はお前が少しもそれを知らずに一人苦しんでゐるのを見て、これは苦しくても知らさねばならぬといふ氣持にもなつた。今云はなければ屹度後でお前に怨まれるとも思つた。然し一方では實に知らしたくなかつた。姑息といへば姑息な氣持だ。それを知つたお前が、只でも苦しんでゐる上に又それで苦しむ事も堪らなかつた。それから亡き母上の左ういふ事を暴露する事もつらかつた。其上に一番俺に問題だつたのはお前が小說家である以上、若し知れば、そして其事で苦しめば尙の事、屹度それがお前の作物に出て來ない筈はないと思つたからだ。かういふとお前の仕事に如何にも理解がないと

思ふだらうが、俺としては今更に母上のさういふ過失を世間に知らして、今、漸く老境へ入られようとする父上に又新しく苦痛を與へる事が如何にも堪へられなかつたのだ。父上が獨逸で其事を知られてからの苦しみ、そして其苦しみから卒業されるまでの苦しみは恐らく想像以上に違ひない。其古傷を再び赤肌にする、これは考へても堪らない事だ。これは全く俺の弱い所から來た考へかも知れない、實際俺は段々年寄つて行かれる父上をどう云ふ事でも苦しめるのは非常にこはいのだ。

然し同時にお前にも非常に濟まない氣でゐた。殊にお前のやうな仕事をする者に其者の持つて生れた運命を故意に知らさずにゐるといふのは悪い事に違ひない。愛子さんの事があつた時にもお前がどうしても愛子さんを貰ひたい、と云ひ張つたら、出來るだけの事をして掛合つて見て、それで若し駄目なら、其時は仕方がない、本統の事を打明けてお前に斷念して貰はうと思つたのだ。所が、幸にお前が思ひきるといふので實はほつとしたのだ。

神戸の叔母さんが俺にそれを打明けた時に「呪はれた運命」といふやうな言葉を使つた。そして俺もそんな風に矢張り考へてゐたが、後には段々、お前の運命をさういふ風に考へるのは少し邪氣のある小説趣味から來た考へ方だと思ふやうになつた。今後來るお前の運命がその爲めに必ずしも呪はれると決つた事はない。總てが無邪氣に順調に進んだならば、さういふ風にして生れた事も呪はれた事にはならないのだ。俺は氣輕に考へようとした。總ては過ぎ去つた事だ。過去は過去として葬らしめよ。そして新しくよき運命を開いて行けばいゝのだ、と思つた。所が矢張り愛子さんの事などではそれが祟つたので、少しは變な氣持にもなつた。然しそれとても左う大きく考へる必要はないと思つてゐたのだ。が、今度お前のいひ出した事で、若しそれをお前が押し通せば、これは少し危險だといふやうな氣がして來たのだ。さういふ事が二重になる。それが何んとなく恐ろしい氣がしたのだ。

お榮さんが、いふのも、他の理由は兎も角、致命的にそれを否定される所は、さういふ事が二重になるのを恐れてなのだ。

俺は大概の事は贊成したい。實際贊成出來た。然し今度の事はどうしても俺には贊成出來ない。何か暗いものが向うに見えてゐる。見す見すにその中へ進んで行くのを見るやうな氣がする。お前のお榮さんに對する氣持には同情する。それを不道徳といふ風には考へない。然し道義的の批判は別として、何んだか恐しい。此感じは輕蔑出來ないもののやうに俺は思ふ。

以上で大概書くべき事は書いた。俺は只此手紙がお前にどれ程大きい打撃を與へるか、それが心配だ。

直ぐ東京へ歸つて來ないか。それが一番いい。俺が行つてもいゝが、歸る方が早い。然し俺に來て欲しかつたら遠慮なく電報を打つて呉れないか。一緒に九州の方へ旅しても面白い。然しなるべく歸つて來ないか。

自暴自棄を起すお前でない事は信じてゐるが、隨分參る事と思ふ。何事も一倍強く感ずる性には一層の打撃だ。然しどうか勇氣を出して打克つてくれ。

お榮さんからは別に返事は出さない筈だ。未だ風邪も本統でないし、然しお前が歸ればお榮さんは隨分喜ぶ事と思ふ。俺も會ひたい。直ぐ歸る事望む。

かう書いてあつた。

讀みながら、謙作は自分の頰の冷たさを感じた。そして、不知手紙を持つて立ち上つて居た。

「どうすればいゝのか」彼は獨り言を云つた。

狹い部屋をうろ〳〵と歩きながら、「どうすればいゝんだ」と又云つた。殆ど意味ない、彼はそんな言葉を小聲で繰返した。「そんなら俺はどうすればいゝのか」

　總てが夢のやうな氣がした。それよりも先づ、自分と云ふものが――今までの自分と云ふものが、霧のやうに遠のき、消えて行くのを感じた。

　あの母がどうしてそんな事をしたか？　これが打撃だつた。其結果として自分が生れたのだ。其事なしに自分の存在は考へられない。それはわかつて居た。が、左う思ふ事で彼は母のした事を是認出來なかつた。あの下品な、いぢけた、何一つ取柄のない祖父、これと母と此結びつきは如何にも醜く、穢らはしかつた。母の爲めに穢らはしかつた。

　彼はたまらなく母がいぢらしくなつた。彼は母の胸へ抱きついて行くやうな心持で、「お母さん」と聲を出して云つたりした。

十九

　氣持にも身體にも異常な疲勞が來た。彼はもう何も考へられなかつた。彼はそれから二時間ばかり、ぐつすりと眠つた。

　四時頃眼を覺ました。其時は氣分も身體も殆ど日頃の彼になつてゐた。彼は顏を洗つて、少時、緣へしやがんで、ぼんやり前の景色を眺めてゐた。其内彼はお榮や信行が心配して居るだらう事を想ひ出した。そして早速返事を出す事にした。

　お手紙拜見しました。一時はかなり參りました。日頃の自分を見失つた程でした。然し一ト寢入りして今はもうそれを取りもどして居ます。君が云ひにくい事を打明けて下さつた事は本統にありがたく思ひました。

　母上の事、今は何も書きたくありません。然し左ういふ事の母上にあつたといふのは何より淋しい氣をさす事でした。尤もそれで母上を責める氣は毛頭ありません。僕には母上が此上なく不幸な人だつたといふ事きり今は考へられません。

　父上に對しては、多分、この事を知つたが爲めに僕は一層父上に感謝しなければならぬのだらうと云ふ氣が漠然してゐます。實際父上がこれまで僕にして下さつた事は普通の人間には出來ない事だつたに違ひありません。それを感謝しなければならぬと思つてゐます。そして父上がこの事から受けられた永いお苦みに就いても、想像はつきます。隨分恐しい事だつたに違ひありません。只僕としては、これから先、父上とどういふ關係をとるか、これを疑問にしてゐます。父上に御苦痛を與へる事なしに、矢張り今度を機會として、無理のない處まで關係をはつきり落ちつける方がいゝやうに考へます。

　然し君との關係は別です。それから出來る事なら、咲子や妙子との關係も別だと云ひたい氣が實に強くしてゐます。

　自分に就いては、どうか餘り心配しないで頂きます。一時は隨分まゐりましたし、今後もまゐる事があるかも知れません。然し回避かも知れませんが、自分が左ういふ風にして生れた人間だといふ事を餘りに大きく考へまいと思つてゐます。いやです。それは恐しい事かも知れません。然しそれは僕の知つた事ではありません。僕には關係のない事がらです。責任の持ちやうのない事です。左う考へます。左う考へるより仕方ありません。そしてそれが正當な考へ方だと思ひます。

　そんな風にして自分が生れたといふ事は不愉快な事です。然し今更に左ういふ意識で苦しんだ所で何にもなりません。無益で馬鹿氣てゐます。そして僕はそれを呪はれたものとも考へません。肺病を遺傳される方が餘程呪はれた事で

す。君は愛子さんとの事でそれが祟つたといはれますが、あれは何方かと云へば、僕が斷られる原因を知る事が出來なかつた所に、變な暗い苦みがあつたのです。原因が分つてゐれば、あれ程は弱らずに濟んだのです。然し左ういつて君を責める氣ではありません。君の打明けられないお氣持よく分りました。少しも無理とは考へません、殊に父上想ひの君としては當り前な事です。そして僕は今度の機會に又それを繰返さず、打明けて下さつた事を心から感謝して居ます。君が打明けて下さらなければ、僕はまだまだ知らずにゐなければならなかつたのです。しかも知らぬまゝに其事は不思議な重苦しいものとして、僕の頭に被ひかぶさつてゐたかも知れません。どうか僕の事は心配しないで頂きます。僕は知つたが爲めに一層仕事に對する執着を強くする事が出來ます。それが僕にとつて唯一の血路です。其處に頼つて打克つより仕方ありません。それが一擧兩得の道です。

歸京の事、もう少し延ばします。然し此先き餘りに参る場合があれば、左う我慢はしません。君にもお榮さんにも隨分會ひたくなる事あります。弱音を吐けば弱音は幾らもあります。然しもう少し落ちつく考へです。仕事の收穫が餘り少な過ぎます。然し歸るべき時が來ればなるべく素直に歸ります。

それから創作に自家の事の出る事、心配されるお氣持、同感出來ます。それは何かの形で出ない事はないかも知れません。然し不愉快な結果を生ずる事には出來るだけ注意します。

咲子妙子によろしく。

お榮さんも餘り心配しないよう願ひます。

それからお榮さんの事はもう少し考へさして頂きます。然しお榮さんにはつきり斷る意志あれば止むを得ませんが、僕としてはもう一度申出をするか、此儘斷念するか、此事もう少し考へたく思ひます。

書き終ると、彼は完全に今は自分を取りもどしたやうに感じた。彼は立つて柱に懸けて置いた手鏡を取つて、自分の顔を見た。少し青い顔をしてゐたが、其處には日頃の自分が居た。亢奮から寧ろ生き〳〵した顔だつた。何といふ事なし彼は微笑した。そして「いよ〳〵俺は獨りだ」と思つた。彼には自由ないゝ氣持が起つた。

外から聲をかけて、隣りの婆さんが恐る〳〵障子を開けた。夕食の飯を持つて來たのである。そして彼が何も菜の支度をしてないのを見ると、

「でべらないと燒きやんせうかの」といつた。

彼には殆ど食慾がなかつた。

「後で食ふから、其處へ置いてつて下さい」

婆さんはお櫃を其處へ置いて歸ると、又湯がいたほうれん草を山盛りにつけた皿を持つて其處へ置いて行つた。

彼は矢張り何んとなく家へ落ちついてゐられない氣持になつた。丁度新地の芝居小屋に大阪役者が來てゐる時で、彼は隣りの老人夫婦を誘つて其處へ行つて見ようと思つた。然し隣りでは其晩三原といふ處へやつてある孫娘が泊りがけで來る筈だつたので行けなかつた。爺さんは婆さんにお前だけ行けと切りに勸めたが、婆さんは「へえ、わしもやめやんせう」こんな事をいつて笑ひながら中々應じなかつた。婆さんは後妻で子がなかつた。それ故それは義理の孫娘だつた。

「折角ぢや、お前だけ供をせえ」爺さんはいゝ機會を逃すことを惜しむやうに押して云つた。が、婆さんはどうしても應じなかつた。切りがないので、

「そんなら又此次ぎにすればいゝ」かういつて謙作は婆さんのつけて呉れた小さいぶら提灯を下げて一人坂路を下りて行つた。

盛綱の芝居をしてゐた。それは今までとは異つた平舞臺に澤山の金屏風を立て廻してする首實檢で、盛綱になつた役者が、淨瑠璃の三味線に乘つて寧ろ〳〵踊つてゐた。少しも內面的な所がなく、然し氣樂に見てゐるにはそれも面白かつた。そして三幕程見て其處を出た。彼はぶら／＼と一人海添の往來を歸つて來た。彼の胸には淋しい、謙遜な澄んだ氣持が往來してゐた。お榮でも信行でも、咲子でも、妙子でも、其姿が丁度双眼鏡を逆に見た時のやうに急に自分から遠のき、小さくなつて了つたやう感ぜられた。そして誰も彼もが。それは本統に孤獨の味だつた。しかも彼にはそれらの人々に對し、實に懷かしい氣持が湧き起つてゐた。そして彼は又亡き母を憶ひ、何んといつても自分には母だけだつたといふ事を今更に想つた。幼時の樣々な記憶が甦つて來た。彼は臆面なく感傷的な氣持に浸つてそれらへ振り返つた。それがせめてもの安全辨だつた。彼は此處でも屋根に乘つた時の記憶を想ひ浮べ、淚ぐんだ。然し母の床に深くもぐつて行つた時の事を憶ふと、彼は不意に何かから突き返されたやうな氣がした。其時の母の情けない氣持が彼に映つたのだ。母にはそれが自身の罪を突きつけられる事だつたに違ひない。罪の子、自分は本統に罪の子なるが故に生れながらにして、左う出來てゐたのではなかつたか。こんなに考へられた。

彼は段々自分が、左ういふ氣分に惹き込まれつゝある事を意識した。坂路を惰性のまゝに段段早くなる、それを踏み止るやうな心持で、寧ろ意志的に彼は氣分を惹きもどさうとした。手段として、彼は廣い／＼世界を想ひ浮べた。地球、それから、星（生憎曇つてゐて、星は見えなかつたが）宇宙、左う想ひ廣めて行つて、更にその一元子程もない自身へ想ひ返す。すると今まで頭一杯に擴がつてゐた暗い慘めな彼だけの世界が急に芥子粒程のものになる。――これは彼のかういふ場合の手段で、今も、或る程度には成功した。

少し腹が空いて來た。彼は時々行く西洋料理屋まで引きかへさうかと思つたが、新地を又通つて、行く事がいやに思へた。そして暗い海添ひ道を一寸後もどりして蠣船料理へ行つた。

棧橋からかけ橋を渡つて入ると紺の青くはげ落ちた法被を着た十四五の生々した子供が中腰でないと歩けない小さな廊下から、彼を座敷へ案內した。座敷には低い天井から暗い電燈が只一つ下つてゐるばかりだつた。

彼は食ふものを云ひつけた。そして、それを待つ間に座敷の陰氣臭さが、又彼の氣分に影響して來た。彼は殊更に自分の頭を仕事へ向けようとした。それは本統に今の彼には唯一の血路に違ひなかつた。然し左う思つても、努めても、彼の氣分は却々其方へ入つては行かなかつた。變な淋しさ、そして、暗い何か知れぬものが四方から被ひかぶさつて來る。そして今はそれを跳返すだけの力は、身中の何處にも潜んでゐなかつた。頭も胸も全で空虛だつた。左ういふものは浸み込み放題だつた。彼は浪に捲き込まれた者が浪に身を任かせ、その過ぎ去るのを待つやうな心持で、今は素直にされるまゝになつてゐた。それより仕方がないと考へた。

彼は低い窓障子を開けて、其處から外の景色を眺めた。石垣の上が暗い往來で、向側に五六軒破風を並べて、倉庫がある。新地から宿屋へ呼ばれて行く藝者だらう、三四人續いた俥の上で互に浮かれた高調子で、何か云ひ合ひながら通つて行くのが其暗い中に見られた。

自分のやうな運命で生れた人間も決して少なくないに違ひない、謙作はそんな事を考へた。道徳的缺陷から生れたといふ事は何かの意味で

それは悲しい遺傳となりかねない氣もした。左ういふ芽は自分にもないとは云へない氣がした。然し自分には同時に其反對なものも惠まれてある。それによつて自分は其惡い芽を延ばさなければいゝのだと思つた。本統につゝしまう。自分は自分の左ういふ出生を知つたが爲めに一層つゝしめばいゝのだ。少しもそれに致命的な要素は含まれて居ないのだ。寧ろ親の泥醉中に出來た子の生涯現はれた生理的の缺陷などに較べると、それは遙かに仕合せに思へた。淫蕩な氣持、これを本統につゝしまねばならぬ。そんな事を思つた。

食事をのせた大きな盆を持つて、先刻の子供が大股に入つて來た。そしてそれをぐら〳〵する小さな餉臺の上に置くと元氣に一寸頭を下げ、出て行つた。

腹が空いてゐるつもりだつたが、彼は餘り食へなかつた。酢にした蠣だけが食へた。

何か小さな物が舌の上に殘つたので、彼はそれを指の先に落として見た。それは目高の眼程の小さい眞珠だつた。勿論大きさからいつても別に價のあるものではなかつたが、口へ入れたものから、そんなものゝ出た所に何かしら幸運らしい氣持が感じられた。

二十

十日程經つた。其間彼は幾度か參り、又元氣になつた。元氣になつた時はもう參らないぞ、と思つた。が、其元氣――亢奮が去ると、又ジリジリと參つた。それは熱のやうなものだつた。今は「時」によつて自然それのうすめられるのを待つよりなかつた。

彼は蠣船から持つて歸つた小さい眞珠を咲子へ送つてやつた。そして咲子から其禮手紙が來た時に、一緒に信行からも一通來た。

困つた事が起つた。俺はお前に濟まない事をして了つた。自分の淺慮からお前に思はぬ不快と迷惑を與へる結果になつた事をあやまらなければならない。俺はその事で生れて始めてといつていゝ位烈しい衝突を父上とした。その結果は矢張り思はしくない。

實際それは云はなくてもいゝ事だつたが、深い考へもなしに俺はお前がお榮さんに對してした申出の事を父上に話したのだ、所が直ぐそれが父上へ傳はつた。父上は非常に怒られた。最初俺は何がそれ程に父上を怒らしたか解らなかつた程だ。俺はそんな父上を初めて見た氣がした。「そんな事は斷然ならんから、お榮は今から直ぐ解雇して了へ」――こんな風に云はれた。今になれば、俺にも父上の氣持はよく解る。何がそれ程に父上を激怒さしたか、それを想ふと、涙が出て來る。お前に對する怒りでも、お榮さんに對する怒りでも、それはない。さういふ間違つた事（此言葉は父上の言葉だが）に對するそれは激怒なのだ。が、俺は其場にあつて、其處まではつい考へられなかつた。其時の俺の氣持を云へば先づ何よりも父上の激怒に度膽を拔かれて了つたのだ。次に俺はお前に對し、これは大變濟まない事をして了つたといふ氣がした。さうしてこれはどうしても父上を說いて、お榮さんを出して了へといふやうな今となれば最早父上としても僭越過ぎるさういふ命令的な言葉を取消して貰はねばならぬと思つたのだ。面食つてゐる俺には其場合それだけしか考へられなかつた。しかも、俺として、近頃段々好意を感じて來たお榮さんを、そんな調子で出して了ふと云ふ事は甚い冒瀆な世話になつた人に對する如何にも道でない氣がしたのだ。其處で俺はお前の爲にも辯じたが、それよりもお榮さんの爲めに辯じて、かなり烈しく反對したのだ。

「貴樣までがそんなことをいふか」父上は机の筆筒を、いきなり俺の膝の前へたゝきつけられ

た。其時万年筆の底にあつたペン先きが、どうしたはずみか一本疊へさゝつた。俺はそれを見詰めながら、これは迚も今話した所で駄目だと思つた。それでも俺は、「そんな事を仰有つても、謙作が承知しますまい」といつた。「いや斷然それは俺が許さん」と父上は云はれた。仕方がない、俺は其儘其場を切り上げたが、後で亢奮が少し靜まると、始めて俺には父上の氣持がハッキリ映つて來た。俺は何年振りかで泣いた。そして自分でつくづく馬鹿だと思つた。俺の淺慮は一度にお前やお榮さんに思はぬ迷惑をかけ、父上には漸く忘れかけた苦痛を呼び起して了つたのだ。どうか俺を餘り責めないで呉れ。云ふまでもなく、それは全く惡意からではなく、淺慮からの過失だつたのだ。

——俺は本統に此手紙が書きにくい。何一つお前に氣持のいゝ事が書けず、又自分としても、何一つ頼み甲斐のある兄らしい事——事實はどうあらうと、俺はお前を何時までも弟と思つてゐる——が出來ず、却つてお前を失望さす事ばかり續けてゐる事は實に俺も心苦しい。俺はお前に愛想を盡かされるだらう。

俺は同じ晩又父上と會つた。其時は父上も俺も前とは全く變つてゐたが、それは氣分の上の事で、平靜ではあつたが、父上の云ひ分は前と少しも變つてゐなかつた。もう俺はそれに反對出來なかつた。そして俺は父上の云はれる通りを承知してしまつたのだ。

表面上の理由はかうだ。お前が左うして其の道にゐる以上、別に東京に家を持つてゐる必要はないし、お榮さんとしても、永久に一緒にゐる筈の人でないのだから、早く一人になつて、生涯安心の道を立てた方がいゝだらうと云ふのだ。で、お榮さんの爲めには父上は前から其つもりでゐたやうに、二千圓だけの金をあげると云ふのだ。俺は二千圓だけ、今時どんな商賣をするにしても足りはしないから、五千圓位出して頂きたいと云つたのだ。父上は中々承知されなかつたが、仕舞に三千圓だけ出すといふ事になつた。こんな事まで書くのはお前の氣を惡くする事に違ひない。然し萬々一、お前の氣持が變つて、これを承知する場合がないとも云へないので、こんな事も決めたわけだ。

母上は俺と同樣、父上にこれを話した事を後悔してゐられる風だ。然し一切、此話の中に入られないのは、却つて吾々の爲めに好都合だ。で、俺は昨日兎も角、此事を云ひに福吉町へ行つた。勿論、此事は父上の意見だけで決められる事ではない。だから、俺のは寧ろ只其報告に行つたのだ。——其處で露骨に云へばかういふ事になる。父上の命令的な云ひ條は、それを認める認めないは實はお前達の勝手なのだ。只認めないとなると、お榮さんの[illegible]を要求する事は一寸困難になりさうだ。これだけだ。俺は其事も、少し露骨だつたがお榮さんにハッキリ云つたのだ。然しお榮さんはそれに對し、何もハッキリした返事はされなかつた。無論大した金ではないが、お榮さんのやうな境遇の人にとつて、左う冷淡ではゐられなかつたに違ひない。お榮さんからすれば、自分がお前と結婚しようとは思つてゐないから、早晩お前が誰かと結婚した場合、別れる事に變りはないと考へられるのが本統らしい。只それは時期の問題だ。今、直ぐ別れるか、他日かといふ、然し金の方は今なら受取れるが、他日では駄目だとなると、これは同時に續いて來る。それ故お榮さんは自身のこれからを考へれば、父上の云はれるやうに今お前と別れるのがいゝ事にもなるのだが、又まるで異ふ氣持から、今お前と引き離される事は隨分つらいらしく、それは俺の眼にも見えた。「私には解りませんわ。何事も貴方と謙さんにお任せ致します」かうお榮さんは云はれた。實

際左うとよりお榮さんとしたら云へない事だ。結局ハッキリした事は何も聽かずに歸つて來たが、お榮さんはお前がまだ尾の道に居るやうならば、一人でこんな家に住んでゐるのは贅澤過ぎるから、兎も角最近、もつと小さい家に引越したいと、それを切りに云つて居られた。で、俺も其事は贊成して來た。

そして夜おそく（一つは父上と會ふのがいやだつたので）歸つて來ると、二十八日出しのお前の手紙が來てゐた。俺はそれを讀みながら、流石お前らしく、參りながらも、其苦みから拔け出す路を見出さうとする氣持に感心した。本統に隨分苦しかつた事と思ふ。然し其苦みに又添へて今度のやうな問題を云つてやらねばならぬ事を考へると俺は全く氣が滅入つて了つた。のみならず、俺はお前がお榮さんに對する申出を未だ斷念してないのを見ると、これは若しかすると今度の問題でお前が一層その決心を堅くしはしまいかといふ不安を感じた。不安と云つては濟まぬ氣もするが、實際俺にはそれは不安だ。お前の爲めにも不安だが、父上がそれから受けられる苦痛を考へると、變に不安になる。全く俺は本統に自分の無力を齒がゆく思ふ。若し自分に力があればこんな事もどうか出來る事かも知れない。然し俺にはどうする事も出來ない。父上は父上の思ひ通りに主張される。お前はお前の考へに從つて何んでもしようとする。兩方それは正しく、兩方に俺はよく同情出來る。が、扨て自分の立場へ歸つてそれを考へる時に、俺は本統にどうしていゝか分らなくなる。

全く俺は臆病なのだ。二三年前一年程家を持たした事のある或る女とも、約束しながら、仕舞ひに俺はそれを破つて了つた。これは恥づべき事とは思ふが、迚も承知する筈のない父上との衝突が考へてもいやだつたからだ。衝突はいゝが、俺が勝つたとしても父上がそれで弱られる事を考へると、俺にはこれを押してやる氣にはなれない。幸に其女も簡單に納得したからいゝやうなものゝ、かういふ事はお前としては考へられない事かも知れない。それからお前がたつ前日にも一寸いつたが、俺は今の生活をどうかして變へねばならぬといふ氣を隨分強く感じてゐる。精しい事は長くなるから書けないが、あの時お前は「そんなら直ぐ會社をよしたらよからう」といつたが、それすら俺には出來ない。——今更にこんな事を書くまでもないが、どうしてかう弱いか自分でも齒がゆくなる。

其處で仕方がない。俺は俺の希望を正直に書く。出來る事なら、どうかお榮さんの事を念ひ斷つてくれ。これは前の手紙にも書いた通り、必ずしも父上を本位にしていふのではない。その事は何故かお前の將來を暗いものとして思はせる。そして尚出來る事なら、此機會に思ひ切つてお榮さんと別れてくれ。これは後になれば皆にいゝ事だつたといふ風になると思ふ。それはお前の意地としては、中々承知しにくい事とは思ふ。が、それを若しお前が承知して呉れれば吾々皆が助かる事だ。俺は俺の過失に重ねて、こんな蟲のいゝ事をいへた義理でない事をよく知つてゐる。が、俺の希望を正直に現はせばかういふより他ない。重ね〴〵俺はお前に濟まぬ氣がしてゐる。

此手紙もつと、ずつと前に出せたのだが、續け樣にいやな事を聽かす事も恐れたし、それに、俺もいひたくない事を書かねばならぬので、つい今まで延ばして了つた。俺は其後氣にしながら未だ麴町へも行かない。そして父上ともあの晩以來何んだか會ふのがいやで、會はぬよう避けてゐる。云々。

謙作は漸くこの彼には不快な手紙を讀み了つた。そして矢張り彼は何よりも父の怒りに對

する怒りで一杯になつた。しかも彼は自分の怒りが必ずしも正しいとは考へなかつた。同様に父の怒りも正しいとは考へられなかつた。

兎も角彼は腹が立つた。愛子の事に、さう云ふ事は自分でやつたらいゝだらう」と變に冷たく云ひ切つた父が、何時か彼には浸み込んで居た。そして其時はそれを可成り不快に感じたが、段々には彼は「それもいゝ」といふ風に考へるやうになつた。それ故、今度の場合でも父が不快を感ずる事は勿論豫期してゐたが、それ程に怒り、それ程に命令的な態度を取ると云ふ事は、兎も角腹立たしかつた。

彼は信行に對しても餘りいゝ感じがしなかつた。事の決まらぬ内に義母に話したといふ事も、義母に相談する必要はないのだから、雑談以上の事でなかつたに違ひないと思はれる點で、全くそれは要らざる事だつた。そして、信行は自分に同情して居るやうに云ひながら、結局は父の氣持を絶對にしてゐる所が氣に入らなかつた。

然し謙作にも信行の氣持、同情出來ない事はなかつた。同情しなければ、いけないといふ氣持すらあつた。が、同時に其處まで同情したら、自分の方はどうするのか？　といふ氣がした。

それに信行は自分がお榮に申出でをした事だけを話したらしく書いて居るが、自分に自分の出生を打明けた事を話したか話さないか、まるで書いてゐない。此事も彼は一寸不快に感じた。それは勿論話したのだ。只自身の體裁を繕つても云ひたくない氣持から、それが書けなかつたに違ひないと彼は思つた。其處まで話したとすれば猶の事、自分の事は自分だけで處理さすやう徹底的に父を納得させるがいゝのだ。三千圓に執着してゐるやうな所も、感心出來なかつた。

彼は直ぐ返事を書いた。

お手紙只今拝見、父上のお怒り、僕には不愉快でした。此問題は前の手紙にも書いた通り、父上との關係が本統の所まで、はつきり落ちついてゐない所から起つた事です。それがはつきりしないうちに父上のお耳に入れたのは面白くない事でした。然し今更それもいつた所で始まりません。が、僕としては——僕の行動としては關係がはつきりした後にとるべき行動と、同様のものを今もとるより仕方ありません。いひかへれば僕は僕の考へ通りにするより仕方ありません。

結婚の事は勿論僕だけの勝手には行きません。然しお榮さんと別れる、別れないは、（或る時別れる場合があるとしても、）それは二人の間だけの問題にしたいと思ひます。然し只これだけの事は云へます。僕はこれからお榮さんと正式に結婚すればよし、若しそれが出來ないとすれば、出來ない儘に今までと全く同じ關係を續け、決して深入りはしまいと決心してゐるといふ事を。それなら父上にも今までと同じわけです。尤もこれは父上の爲めにした決心ではなく、僕は僕の運命を知る事で、一層さういふ事につゝしみ深くならねばならぬと云ふ氣が強くしてゐるからの事です。

それから金の事は僕直接の事ではありませんが、お斷りします。僕の金も元々父上から貰つたものですが、お榮さんにはそれから分けます。

それから家を引越す事、これもそんな必要ないとも思ひますが、お榮さんが氣になるなら、引越す事賛成します。何處か郊外へでも行つたらいゝでせう。

父上が怒られたお氣持僕にも解ります。然し僕には君のやうに父上のお氣持を全然主にしては、自分の事だけに考へられません。君の板ばさまりの立ち場についても同様です。これは僕の我儘かも知れません。然し君の望まれる通りになる事は僕には性格的に不自然です。どうか

惡しからずお思ひ下さい。

二十一

信行へ出した手紙の返事を受取らぬ内に謙作は到頭尾の道を引き上げて了つた。それは輕い中耳炎にかゝつたからで、土地には專門醫がなく、かゝつた醫者から若し最近歸る氣でもあるなら、なるべく早く歸つた方がいゝだらうといはれたからである。實際左ういふ事がなくても恐らく謙作は間もなく此地を引き上げたに違ひない。只彼には歸つてからの生活が想はれた。又前と同じやうな生活を繰返すことかと考へると、それだけでも進んで歸る氣にはなれなかつた。仕かけた仕事も餘りに半端だつた。彼は落ちついて居られさうになく、又、引き上げた後の生活が如何にも不滿に想ひ浮ぶのであつた。出發前の二三ケ月間のあの眼まぐるしい、其癖、何となくうぢ／＼した不快な生活――それも前は未だあれでいゝとして、あの頃とは又自分も變つてゐた。今のやうな自分にして猶且、あゝいふ生活を繰返すとすれば、それは益々落ちつけない不安な氣持に追ひやられる事が如何にも見えてゐた。それなら、あんな生活を再び繰返さないやうにすればいゝとも思ふ。歸るとすれば勿論、其決心を堅くして歸るのである。所が、事實、其決心はどれだけ堅いか？ どれだけ續くか？ それが彼では我ながら心元なかつた。左ういふ事では絶望的に自分で自分が信じられなかつた。

或る夜、それは宵に曇つてゐて、夜中から急に晴れ渡つた夜があつた。蒸暑かつた夜が明け方になつて急に冷え／＼して來た。薄い搔卷一つで寢てゐた彼は寒さの爲めに眼を覺ました。然し睡く、起きるのが面倒だつたので、彼は其儘又眠つたが、矢張りそれで風邪を引いて了つた。翌日は終日水洟をかんで暮らした。そしてそれを強くかんだのが少し耳の方へ入ると、其晩から耳は痛みだした。鈍い、重みのある痛みで、眠れぬ程ではなかつたが、それでも彼は時々その爲めに眼を覺ました。夜の明けるのが待たれた。

翌朝、醫者へ行くと、中耳炎のなりかけだといはれた。醫者は早く、專門醫に見て貰ふ方がいいだらうといつて、少量のオリーヴ油と罨法の藥とを呉れた。歸りたくもあり、歸りたくもなし、左ういふ曖昧な氣持でゐた彼はこんな事でも歸ると決定出來た事を却つて喜んだ。そして歸ると決まると、急に所謂歸心矢の如くといふ風な氣持になつて了つた。

支度は早かつた。隣りの老夫婦も手傳つて一時間たらずで總ては片付いて了つた。婆さんが荷造りを手傳ひ、爺さんが、電燈會社、瓦斯會社などの拂ひに廻つた。

尾の道は市でありながら、急行が止らなかつた。彼は普通の列車で、姫路まで行き、其處で急行を待つ事にした。

午少し前の列車に乘る事にした。停車場へは老夫婦、それから松川が、可成りに重い旅鞄を下げて送つて來た。

大袈裟に三角巾で頰被りをした謙作が窓から顏を出してゐると、爺さん、婆さんは重い口で切りに別れを惜んだ。彼もこの人達と別れる事は惜しまれた。然し此尾の道を見捨てゝ行く事は何となく嬉しかつた。それはいゝ土地だつた。が、來てからの總てが苦しみだつた彼には其苦しい思ひ出は、どうしても此土地と一緒にならずには居なかつた。彼は今は一刻も早く此地を去りたかつた。

客車の中は割りに空いてゐた。それは春としては少し蒸暑い日だつたが、外を吹く強い風が氣持よく窓から吹込んで來た。彼は前夜の寢不足から、窓硝子に頭をつけると間もなく、うつらうつらし初めた。やがて騷がしい物音に物憂く、

眼を開くと、いつか岡山の停車場へ來て居た。前の席に坐つてゐた、二三人連れの素人か玄人か見當のつかない女達が降りて行くと、其あとに二人の子供を連れた若い軍人夫婦が乘つて來た。軍人は脊の高い若い砲兵の中尉だつた。荷の始末をすると、膝掛けを二つに折つて敷き、妻と、六つ位の男の兒、それから其下の髪の房々した女の兒とを其處へ坐らせた。そして自身は其處から少し離れて腰かけの端へ行つて腰を下ろした。

謙作は疲れてゐた。彼は又いつか眠つてゐた。姫路へ着く一時間程前から漸く彼は本統に眼を覺ました。其汽車は京都止りの列車だつたから、彼は京都で急行を待ち合せてもよかつたのだ。然し、姫路の白鷺城を見る事も興味あつたし、それに出掛けにお榮から明珍の火箸を買つて來て吳れと賴まれた、それを想ひ出してゐたからであつた。

前の席にゐた男の兒は二つ折の毛布の間に挾まつて、寢ころんだ。すると、女の兒も左うして寢たがつた。若い、然し何處か落ちついた感じのある母親は窓硝子に當てゝゐた自身の空氣枕を娘の爲めに置いてやつた。男の兒は父親の方を、女の兒は母親の方を枕にして寢た。女の兒は喜んだ。母親自身は空氣枕の代りに小さいタウルを出し、幾重にもたゝんで又窓硝子へ額をつけた。

「お母樣、もつと低くして」と娘が下からいつた。

母親は物臭さうに手を延ばし、枕の空氣を少し出してやつた。

「もつと低く」

母親は又少し出した。

「もつと」

「さう低くしたら枕にならんがな」

女の兒は默つた。そして眼をつぶつて、眠る眞似をした。

軍人は想ひ出したやうにポッケットから小さい手鏡を取り出した。それから又小さいチューブを出し、指先きに一寸油をつけて、さも自ら樂しむやうに手鏡を見つめながら、短く刈つて、端だけ細く跳ね上げた赤い其口髭をひねり初めた。

細君は最初、タウルの枕に額をつけた儘、ぼんやり見るともなく見てゐたが、軍人が餘りに何時までも髭を愛玩してゐるのに、細君の無表情だつた顏には自然に微笑が上つて來た。細君は肩を少し搖すりながら聲なく笑つた。が、軍人は無頓着に尚油をつけ、髭の先を丹念に撚り上げてゐた。

眠れない子供達は眼をつぶつた儘、毛布の中で蹴り合ひを初めた。もく〳〵と其處が持上つた。女の兒の方が一人忍び笑ひをした。

軍人は鏡から一寸眼を移し、二人を叱つた。細君は默つて微笑してゐた。

然し男の兒は尚執拗に女の兒の足を蹴つた。毛布がずり落ちて、むき出しの小さい足が何本も現はれた。二人はたうとう起きて了つた。

二人はそれから二つの窓を開け、其一つづつを占領して外を眺め初めた。外には烈しい風が吹いて居た。男の兒は殊更窓の外に首を突き出し、大聲に唱歌を唄つた。女の兒は首を出さずにそれに和した。風が強く、聲はさらはれた。男の兒は風に逆らつて尚一生懸命に唄つた。それでもよく聽えないと、わざ〳〵野蠻な聲を張上げたりした。風に打克たう〳〵と段々熱中して行く、其處に子供ながらに男性を見る氣が謙作にはした。彼はそれが何となく愉快だつた。

「八釜しいな！」と不意に軍人が怒鳴つた。女の兒は吃驚して、直ぐやめたが、男の兒は平氣で、やめなかつた。細君は只笑つて居た。

五時頃姫路へ着いた。急行までは尚二時間程

あつた。彼は停車場前の宿屋に入り、耳の罨法を更へ、夕食を済ますと、俥で城を見に行つた。老松の上に聳え立つた白壁の城は靜かな夕靄の中に一層遠く、一層大きく眺められた。車夫は土地自慢に、色々説明して、もう少し側まで行つて見る事を勸めたが、彼は廣場の入口から引き返さした。それから、彼はお菊神社といふのに連れて行かれた。もう夜だつた。彼は歩いて暗い境内を只一と廻りして、其處を出た。

お菊蟲といふ、お菊の怨靈の蟲になつたものが、毎年秋の末になると境内の木の枝に下るといふやうな話を車夫がした。

明珍の火箸は宿で賣ると聞いて、彼は其儘俥を宿の方へ引き返さした。彼は宿屋で何本かの火箸と、お菊蟲とを買つた。その蟲に就いては口紅をつけたお菊が後手に縛られて、釣下げられた所だと番頭が説明した。

急行は九時だつた。寝臺をとる事が出來て彼は直ぐ横になつた。そして起きたのはもう靜岡近くで、日が昇つてゐた。靜岡で東京の新聞を買つたが、出てから全で見ない東京新聞が變に懷かしかつた。富士を見、襞積の多い函嶺の山山を見ても彼は何んとなく嬉しかつた。沼津から乗り込んだ一ト家族の東京辯も氣持よかつた。

彼は早く東京へ入りたい氣持で一ぱいになつた。近づく程に待ち遠しくなつた。國府津、それから、大磯、藤澤、大船、から、段々近づくと、彼は寧ろ短氣な氣持になつて行つた。時間つぶしに困つた彼は、羽織の紐の縒り返しになつてゐる房の一本々々を根氣よく數へる無意味な事で、漸く氣紛らしをした。

お榮には前日姫路から電報を打つて置いた。多分新橋へ迎ひに出てるだらうと思つた。彼にはお榮と顔を合す瞬間の具合悪さが一寸想ひ浮んだ。が、何れにしろ、もう二三十分で會へる事は嬉しかつた。

間もなく、汽車は速力をゆるめ初めた。プラットフォームへかゝる前から、彼は首を出し、それらしい姿を探した。そして、彼は直ぐそれを見出した。お榮も此方を見てゐるので、手を振つたが、見てゐると思つたお榮は間抜けな顔をして、直ぐ見當違ひの窓をしきりに眼で追つてゐた。彼は幾つかの小さい荷物を赤帽へ渡すと、急いでその方へ歩いて行つた。

五六歩の近さで漸く氣がつくと、お榮は今までの不安さうな様子から急に變つて駈け寄つて來た。「よかつた。よかつた」とこんな事を云つた。そして、

「まあ、如何して？」とお榮は彼の罨法の頬被りに驚いて訊いた。

「一寸耳が悪かつたが、もう今は痛くないんです」謙作は豫期通り嬉しかつた。會つて具合悪いやうな事もなかつた。いつものお榮だつた。そしてさういふ事は少しも念頭にない風に見えた。殊更左うしてゐるとも見えなかつた。

一緒に人込みを歩きながらお榮は尚二タ言三言耳の事を訊いた。「でも、早く歸つて來て下すつてよかつたわ」讃めでもするやうにいつた。が、急に聲を落として、「謙さん、瘠せましたよ。もう、これからそんな處へ一人で行くのはおやめですね」ともいつた。謙作は只笑つてゐた。

「信さんへは先刻會社の方へ電話をかけさしたの。歸りに寄るといふ御返事でした」

「左う」

改札口に腰掛けを拵へた、出入りの車夫が待つてゐた。彼はそれに赤帽の荷を渡し、チッキの荷も頼んで、お榮と一緒に電車で歸る事にした。

「お晝は未だでせう？」

「えゝ」

「自家にも何か取つてあるけど、何處かへ行き

ますか？」
「僕は何うでもいゝが」
「尾の道は御馳走がありまして？」
「魚はいゝのがあるんだが、何しろ自分ぢゃあ作れませんからネ」
　二人は清賓亭の前を通つて行つた。謙作はお加代でもお鈴でも左らいふ連中に見られたくない氣持から、なるべく俯向き勝ちに歩いて行つた。
　電車通りに出ると、お栄はもう一度
「どう？　何方がいゝの？」と云つた。
「そんなら、行きませう。久しぶりで、西洋料理が食ひたい」
　二人はそれから左う遠くない、風月堂へ行つた。
　お栄はしきりに尾の道の生活に就いて訊きたがつた。謙作は其處から信行へ電話をかけた。そして、間もなく二人は歸つて來た。
　謙作は先づ二階の自分の書齋へ入つて行つた。机も机の周圍も總て彼が出かける前の通りだつた。寧ろきちんと片づいてゐた。床に椿などの生けてあるのが、却つて自分の部屋らしく見せなかつた。
「矢張り自家が一番いゝでせう？」こんな事を云ひながらお栄も昇つて來た。
「大變立派な家へ來たやうな氣がする」
「尾の道では きたなくしてた事でせうネ。男鰥に蛆が湧くといふから、蛆が湧かなかつたこと？」
「隣りの婆さんがよく掃除をしてくれるので割に綺麗でした」
「あゝお風呂が丁度いゝの。直ぐお入りなさい」

二十二

　謙作は風呂へ入ると、左う遠くない、耳鼻咽喉專門のT病院へ往つた。前に暫く入つてゐた事のある病院で、時間外でも若しゐれば見て貰へるだらうと思つたのだ。
　彼の耳は一と晩痛んだだけで、今はもう痛みはなくなつてゐた。只、耳のわきで、指先を擦合せると、いゝ方ではサリ〳〵とよく聞えるが悪い方ではそれが少しも聞えなかつた。そして何となく重たい、鬱陶しい氣持があつた。
　醫者は和服のまゝ、反射鏡をくはへて直ぐ診てくれた。
「えゝ……大分充血してます。大した事はありますまい。中に少し水が溜つてるやうですから、切つて一寸出して置きませう」から手輕さうに云つた。
　醫者は壁の帽子掛から白い仕事着をはづし無雜作に和服の上から着た。
　太つた、若い看護婦が昇汞水を湛へたヴァットから小さい矛のやうなメスや、細いピンセットなどを、ガーゼの上へ並べてゐた。
「電氣はまだ來ないかネ？」
　看護婦は壁のスウイッチをひねつたが、未だ來てゐなかつた。
「よし〳〵」と醫者は云つた。實際、西向きの窓には未だ、陽があつた。看護婦は柄のついた短い針金の先に何本も綿を巻きつけた。
　手術は直ぐ濟んだ。鼓膜にメスの觸れた時、ゴソッといやに大きな音がした。同時にチクリとした。そして、最初、其メスが觸れた時に彼はそれを大きなものに感じた。それだけだつた。いやに手輕さうにいひながら實際には難い事をするのではないかといふ氣もしたが、醫者の言葉通り、それは手輕く濟んだ。
「思つたより澤山出る」醫者は綿を巻いた針金を差し込んで、中の水を何本もそれへ吸ひ取らせた。綿には血がついて來た。醫者は薬をつけ、罨法をすると、翌日午前中、又來るやうに云つ

た。彼は待合室で、藥の出來るのを待つてゐた。

彼は去年の青年をおだてゝ咲子へ手紙を寄越させたあの女の事を憶ひ出してゐた。來るまで、彼はそれを全く忘れてゐたが、今の看護婦が其女でないので、初めて憶ひ出した。

「あの女はどうしたかしら？」かう思ひ、彼はそれと會ふ事を何といふ事なし、恐れた。幸に、其女は出て來なかつた。

彼は其女を嫌ひではなかつた。一寸美しい女だつたばかりでなく、何處か賢さうな所があり、一方食へない感じもあつたが、彼に對しては割りに愼み深く、彼が話しかけるやうな場合にも、よく看護婦などにある型の、いやにハキハキ切口上で返事をする、左ういふ方ではなかつた。笑ひながら寧ろ好んで曖昧な返事ばかりしてゐた。其頃彼は大學で同じ科にゐた人々の始めた或る同人雜誌に二三度、短い小説を出した。それを咲子が話したと見え、或時、看護婦は咲子の口を通して、その雜誌を貸して貰ひたいといつた。左ういつたのは其女が謙作の書いたものを見たいといつてゐる事――自身のついてゐる病人の兄の書いたものを見るといふ興味――とはわかつてゐた。が、謙作は他から借りて見るのは差支へないが、自身で自身のものをわざ〳〵見せに持つて行く氣はしなかつた。彼は自身の物のある號だけを除き、七八册の雜誌を置いて來た。其次ぎ行くと、默つて笑つてゐる看護婦の代りに咲子が、不平をいつた。そして間もなく咲子は退院し、それから一年程して、前に書いたやうに或る青年が咲子に手紙を寄越したのである。彼がそれに小言をいつてやると、其看護婦に勸められて出したものだと、其青年は半詫りに詫つて來た。其時、彼は其女が見かけによらず所謂不良性のある女だつたと思つて、一寸いやな氣がした。自分の書いたものなど見せずによかつたとも思つた。

彼は子供等の立騷いでゐる夕方の往來を歸りながら、そんな事を憶ひ出してゐた。あの女は今もあの病院に居るかしら？　全體、あの青年は自分のやつた手紙をあの女に見せたらうか？　あの女が何も知らなければいゝとして、左うでなければ、兩方で具合惡さうだと思つた。そして左う思ふ裏に、彼は知らず〳〵其女に對する漠然とした下等な興味を起してゐた。その女に不良性のある所に起る興味であつた。

自家では信行が彼の歸りを待つてゐた。

「耳が惡いつて？」玄關へ出て來た信行は挨拶の代りにこれをいつた。

「水が溜つて居たので、直ぐ出して呉れた」

「大した事はないね？」

「何でもなかつた」

二人は信行を先きにして、茶の間へ入つて行つた。其處には既に始めかけた信行の食事が出てゐた。信行は坐ると改めて、

「やあ……」と云つて頭を下げた。謙作も默つて頭を下げた。

「先へあがりかけた所なのよ。謙さんも直ぐあがりますか？」

「左うね。――どうでもかまひません」

「どうでもつて、あなたのおなかの都合よ」

「そんなら、食ひませう」

お榮は甲斐々々しく謙作の食事の支度をした。

「お榮さん。十歳位年を取つたつて、そんなでもないぢやありませんか」と信行が云つた。

「いゝえ。お爺さんになりましたわ」とお榮は謙作の顏を見返しながら云つた。

「そんなにも思はないが、左うかな。痩せたには痩せたが……」

「今は少し見なれたんで、それ程に思ひませんが、新橋でひよいと、前へ出て來られた時には、思はず、お祖父さんが……と思ひましたのよ」

お榮さんが何時かお祖父さんになつてゐた。謙作は不意に脾腹を突かれたやうな氣がした。信行は直ぐ氣がついたが、お榮は無頓着に續けた。

「俺で頭を巻いてゐるに、額だけしか見えないので、何、似て見えたのかも知れないの―」

あの安つぽい、下等な祖父に似てゐると云はれた事は謙作には致命傷の氣がした。彼は平氣でそんな事を饒舌つて居るお榮の無神經さに腹が立つた。が、同時に一方思ひがけない氣持の自分に起つて居る事に心附いた。實際それは自分ながら思ひがけない氣持だつた。彼は嘗て、祖父に對して、肉親らしい愛情を感じた事はなかつた。六歲の時初めて見た祖父の、いやな印象は、その儘變らず彼に殘つて行つた。その印象は迚へやうがなかつた。彼の祖父は生れながらに下賤の質に出來上つてゐた。する事、なす事、妙に下品な調子がつきまとつてゐた。それ故、彼は自身が不義の兒である事を知つた場合にも、寧ろ喜んだ、―それが祖父でない點かであつたら、まだよかつたと云ふ氣がした。母と祖父と、此結びつきが何よりも堪へられなかつた。實はそれ程に迄それを嫌つてゐた。それ故、今もお榮の言葉に、堪らず、腹立たしい氣持にもなつたが、同時に全く思ひがけない反對な氣持が不意に湧き起つて來た事を感じた。何と云つていいか、よく分らなかつた。が、兎も角、それは矢張り肉親の愛情だつた。それは嫌つてゐながら、父親としての或る懷かしさだつた。似てゐると云はれた事を致命的の打撃に感じたから、何處か心の奥に或る嬉しさを感じたのである。これは彼ではあり得べからざる事だつた。それが不意に心へ入つて來た。彼は心の混亂を感じた。

食事中、信行は尾の道での生活などを色々訊いた。謙作も出來るだけ氣樂な調子でそれに答へた。そして、食事が濟むと、彼は、

「二階へ行かうか」と信行を誘つた。

「うん」信行は何氣ない顏をして一緒に立ち上つたが、これから二人だけで又、いやな問題を話さねばならぬかといふ、何となく降參したやうな樣子を見ると、謙作は自分の事ながら却つて兄が可哀想になつた。可笑しい氣もした。

二人は火のない火鉢を間にして、坐つたが、直ぐには話も出なかつた。

「一昨日出した俺の手紙は見まいね」

「見ない―」

「俺には今度の事は全く手に餘る。色々書いて置いたが、矢張り、此事はお前はお前の思ふ通り、お父さんは、お父さんの思ひ通りをされるより仕方がないと思つたよ。間に入つて調停しようとした所で、お父さんとお前では、結局はさういふ結果になるに決つてゐる。俺が間へ入らうとしても、入る餘地がない。俺の輕はずみから、こんな事になつてお前には濟まないと思ふが、一ト先づ俺は此問題には沈默しようと思ふんだ。お父さんにも、一昨々日それを云つたよ。無責任なやうだが、仕方がない。又俺が出ていゝ時もあると思ふから、それまでは暫く左ういふ事にしようと思ふ。どうだらう？」

「どう云ふ話になつてゐるのか、知らないが、それがいゝよ。君が間に入つてゐると、兩方が徹底出來ないから、何時まで經つても關係が、きちんとした所まで落ちつかないよ」

「うん―

「君には出來るだけ今までの關係を其儘殘して置きたい氣があるが、何も知らない間はいゝが、これからも續けようと云ふのは少し無理だ。破れる部分は破して了ひ、破しても破れない部分だけ殘して、其處に不安のない關係を作れたら作るより仕方がない。若し根こそぎ、打破はれて了ふやうなら、それも止むを得ないし―お前の氣持が其處まで決つてゐれば、何にも

云ふ事はないが……信行は一寸不愉快さうな眼をして謙作を見た。

「然し俺はどうかして、調停したいと云ふ氣があつたのだ。調停が、いつも不徹底なら、仕方がないが、左うばかりも云へないからね……」

謙作は默つてゐた。謙作は自身の云つた事が違つてゐるとは思はなかつたが、父との關係に殆ど執着のない自分が、何處までもそれを離れられない信行に、そんな風にはき〳〵云つて了つた事は濟まない氣も一寸した。第一、同じく父と呼んでゐるが、信行には父で、自分には左うでない、其處からも、兩方の氣持が離れ離れになつてゐるのだと思つた。

女中が茶と菓子とを持つて入つて來た。女中が茶をついで、二人の前へ置く間、二人は默つて居た。

「由！　果物を此處へ置いとくからね。差し上げてお呉れ」かういふお榮の聲が段々の下から聞えた。

女中は返事をしながら部屋を出た。

「暗い處で、ふんづけるな」と謙作が注意した。

女中は笑ひながら降りて行つた。

「手紙に書いたことを繰返せば、お父さんは前と少しも考へは變へられないよ。尚、困るのは、お前が小說を書く時、決して自家の事を書いてはならぬといひ出したのだ。俺は手紙にもあつた通り、不愉快な結果を生ずるやうな事は出來るだけお前も、避ける筈だと云つたが、お父さんはそんな事を云つても、それは謙作の標準で云ふ事で、謙作は不愉快でないつもりでも俺の方が迷惑する場合がないとはかぎらない。絕對に自家の事は書かぬといふ堅い約束をして貰はぬ事には俺としては安心出來ない、とかう云はれるのだ。心配しだせば其處まで用心しとく必要があるのかも知れないが、餘り勝手だからね。それにお前も、何かの形でそれが出ないとは云へないと云つてゐるし、俺はそれまで制限する事は出來ないと云つたのだ。仕事の性質上、全然それに觸れるなと云ふのは無理な要求だと云つたのだ。お父さんは家庭小說だけが小說でもあるまい、とか云つてゐたが、兎も角お前の仕事に對する理解とか、同情とかいふものはまるでないからね。話が仕にくいんだ。其處で、俺も——今から思ふと、如何にも鼻元思案な話だが、そんならお父さんは謙作が創作の仕事をする事に就いてはどうお考へですかと訊いて見たんだ。それは自分の仕事として、謙作がそれをやるのに少しも不服はないと、かう云はれる。それなら、謙作も自分の生涯を打込んでやる仕事なのだから、多少の迷惑があるとしても出來るだけ寛大に、そんな制限はつけてやらない方がいゝでせう。何故ならお父さんでも、鐵道を高架線にするか地上線にするかの問題が起つた時、仕事の都合で地上線を主張された事もあるのだし、仕事の上では他人の多少の迷惑は構つてゐられない場合もあるものですから、とかういつたのだ。これは實際俺の云ひ方も惡かつたが、滅茶苦茶に怒鳴りつけられたよ——」

鐵道の話は、嘗て信行の父が或る鐵道會社を起した場合、或る町を貫通さすのに經費の都合から地上線を敷かうとして、町民からの反對を受けた事があるからである。地上線に決めるか高架線に決めるかは云ひかへれば、何十人——永い間には何百人の生命を犧牲にするか、しないかを、決める事だと町民はそれに反對した。結局餘り八釜しくなつたので、會社側が讓歩して高架線を敷く事になつたが、信行はこれをいつたのである。

「そんな事を云へば怒るに決つてゐる」と謙作は笑つた。「然し僕にはそんな約束は出來ないよ。第一高架線の場合とは異ふ話だし、兎も角僕は此機會に本鄉の家とはつきり關係を斷つ

のが一番いゝと思ふ。左うしなければこれから
も色々と切りのたい事だ。一時の世間態を考へ、
曖昧にして置くのは兩方の爲めによくない
よ」
「うん。それが本統かも知れない。然しどうい
ふものか、お父さんは左うはつきり、かたづけて
了ひたくない氣があるんだ。それから、これが
ある。俺も今度初めて知つたが、お前の貰つた
金は、あれは總て、芝のお祖父さんから出たもの
ださうだ。表面上、お父さんが出した事になつ
てるが、實際は一文も出してないのださうだ」
「……………」謙作は眼を見はつた。そして一寸
淋しい顏をした。彼は父が自分の本統の父でない
事を知つた時から、此事には拘泥してゐた。本統
の父の家と、はつきり關係を斷つと云ひながら、
貰つた金だけを返さずに置くのは如何にもそれ
だけに眼をつぶつてゐる、ずるい事のやうで、氣
がとがめて居た。そして二度出した信行への手
紙の中でも、それへ觸れようと一方、しながら、
遂に觸れずに了つた。彼にとつて其金を返して
了ふのは甚しく實際に困ることだつた。それ
が彼はいやだつた。然し、彼は、もつと、其金
を返すことが必然になつた場合、何それに眼を
つぶつて平氣でゐられる自身でない事を知つて
ゐる點で、其處に或る安心を持つて、その事を
放つて置いたのであつた。
二人は暫く默つて居た。
「俺はね」信行はこんな風に今度は自分の事を
話し出した。「矢張り、最近會社をよすつもり
だ。お父さんにも一寸云つて見たが、案外、
簡單に承知しさうなんだ」
「左う。それはいゝね。で、何をするつもりな
の？」
「禪をやるつもりだ」
謙作は思ひがけない氣がして默つてゐた。
「近頃俺は、つくづくお前を羨しく思ふ。或
る意味で、――運命的にといふのか、境遇的に
といふのか知らないが、左う云ふ意味ではお前
は俺より不幸な人間だ。然し性格的にいふと、
遙かに幸福な人間だと思ふ。しかも、何方が、
より幸福かといへば勿論性格的に幸福な方が本
統の幸福だと思つたよ」
「僕が性格的に少しも幸福なものか。同時に境
遇的にも君のいふやうに不幸な人間ぢやあない
よ」謙作は柄にない信行の斷定的な言葉に一寸
苛々して言葉を挾んだ。
「俺の云ひ方が惡いのかも知れない。左ういふ
言葉をよく知らないから言葉が間違つてゐるん
だ。が、兎も角、俺はお前が俺より惠まれた人
間だといふ氣がして羨しい。お前は强い。お
前は何でもお前の思ふ通りにやつて行かうとい
ふ强い自我を持つてゐる。所が俺にはそれがな
い。ない事もないが、それが非常に弱いのだ。
禪をやるといふのは最近にきめた事だが、今の
生活に不滿を感じ出したのは隨分久しい事だ。
所が、どうしても、それを直ぐよす氣になれな
かつた。いつかお前は直ぐよしたらいゝだらう
と、簡單にいつたが、それが俺には中々出來な
かつた」
「然し何故會社がそんなにいやになつたのかし
ら？」
「元々いやな處なのだ。只、入りたてには無我夢
中で、兎も角、自分が一つの仕事にたづさはつ
てゐるといふ意識でだまされてゐたのだ。今で
も新しく入つて來る若い連中を見ると皆、左
うだ。親の臑を嚙つて、小さくなつてゐた連中が、
自分の手で金が、得られるやうになると、急に
一人前になつた氣で、妙に嬉しいんだね。中に
はそれで家族を養つて行かねばならぬ者もある
が、左ういふのはそれ程迷はないが、それだけ
の必然さもない俺達のやうな人間になると、直
ぐ仕事の興味はなくなるし、云はゞいつまで經

つても町人の生活だからね。――百姓になつた所で同じ事だ。こんな事をして居て、一體、一生どうなるのだ、といふ氣に段々なつて來る。四十にして惑はずといふが、四十位になると、大概、一寸左ういふ氣になるらしい。俺なんか、早い方だ―」
「禪をやる事もお父さんに話したの？」
「話した。迚も承知しまいと思つたが、俺の考へて居るやうだから、大概いゝだらうと思ふ。お前の事もあるし、重ねて、そんな話をするのは氣の毒だつたが、絶えず左ういふ氣持で煮え切れない自分がいやで堪らなくなつたのだ。今度の場合でもお前にはいつも或る一つの焦燥があつて、他にこの目的が有るのだ、それを持すのが、俺には非常に羨しかつた。所で、俺にはその焦燥がないのだ。かうしたら惑ひも來てゐるが、今の俺の生活が悪いのだ。どうしても其處から建て直して行かなければ駄目だと思つたのだ―」
 謙作は父の信行に對する案外寛大な態度が、自分に對するそれと全く違ふのを一寸不快に感じた。然しそれは當然な事とも思つた。不快に思ふのが間違つてゐるとも思つた。そして信行が自身の苦しさから、謙作の氣持に顧慮する餘裕もなく寧ろ自分の左うなる事で謙作を喜ばさうといふ、子供らしい、一種のフラッタリーさへあるのを見ると、謙作は信行に好意を感じないではゐられなかつた。然し禪をやれば左ういふ點で傳統に安心出來る氣でゐさうな所が危なつかしい氣もした。謙作は近頃（其頃）の禪流行には或る反感を持つてゐた。
「行く寺は決めたの？」
「圓覺寺へ行かうと思ふ。何んといつても、S・Nは當代隨一の人だからね」
 謙作は默つてゐた。彼は何んとなく其S・N和尚を好まなかつた。三井集會所あたりでよく話をするS・Nを荒地に稀薄な人間のやうな氣がして好まなかつた。然し信にどう云ふいゝ點があるかも全で知らなかつたから、彼は默つてゐた。

二十三

一ト月經つた。
 信行は望み通り會社を辭め、鎌倉の西御門といふ處に百姓屋の小さい離れを借り、毎日圓覺寺の僧堂に通ふやうになつてゐた。一度謙作は其處を訪ねて見たが、山の出鼻の直ぐ横に崖に添うて建てられた新しい家で、悪くない家だつた。床の間には近頃買ひ集められた古々しい禪宗の本が澤山積んであつた。
 父との交渉は信行が鎌倉へ住むやうになつて自然有耶無耶になつたが、これは謙作には却つてよかつた。はつきりした解決をつけようとすれば二人の性質では却つて面白くない事を惹き出したかも知れない。有耶無耶の内に却つて謙作の思ひ通りの解決が出來てゐた。彼は今は全く本郷の家へ出入りしなくなつた。そして、お榮とは前通り一緒に暮らしてゐる。が、これを父が平氣でゐる筈はなかつたから、其不服を聽かされるのは矢張り時々上京する信行だつたに違ひない。然し信行はそれに就いて何も云はなかつた。謙作の方でも、よりよき解決を得られる的もなかつたから默つてゐた。
 それにお榮に對する心持も既に前とは幾らか變つてゐた。何故變つたか。それは明らかに云ふ氣はしなかつたが、丁度信行が彼に書いたやうに運命に對する或る恐れ、――祖父と母と、そして又、祖父の妾と自分と、かう重なつて行く暗い關係に何かしら恐ろしい運命に自分を導きさうな漠然とした恐怖が段々心に擴がつて往つたのである。實際彼は信行の云ふやうに強くはなかつた。反對される事がらには否

應なしに、はつきりした態度を示す割りに、心持もその様に何時、はつきりした態度を持つてゐるのではなかつた。反撥が薄らぎ、自由が來ると却つて彼は迷つた。

　自分が不義の子であつたといふ事に就いても、肯定的な明るい考へを彼は持つたが、時が經つにつれ、心の緊張が去るにつれ、彼は時時參る事が多くなつた。

　彼は妙に落ちつけなくなつた。

　彼は移轉と云ふ事を考へた。前にお榮が此事をいひ出し、尾の道から彼がそれを賛成した時に、火災保險にゐた便宜から信行が會社の者に家を探さした事がある。然し謙作の歸京と共にそれも立消えとなつてゐたが、今又、そんな事ででも氣持を新しくし、もつと落ちついた氣持で仕事にかゝれさうな氣がすると、彼は又貸家探しの事を信行に頼んだ。

　そして或る日、信行は珍らしく石本と連れ立つて訪ねて來た。

「あした一緒に見に行かう。五反田の方に二軒、大崎の自家の地所の近所に二三軒あるさうだ。それから今晩はお前の所へ泊るよ。いゝかい？」――こんな風に信行はいつた。

　三人は暫くして、福吉町の家を出た。

　そして其晩彼等は柳橋の或る待合で食事をしてゐた。若い藝者が二人、それと其家の女中が其處にゐた。もう一人桃奴といふ藝者を先刻から呼びにいつてゐたが、いつも、もう直きといふ返事だけで却々來なかつた。

　桃奴をいつたのは謙作だつた。

「一應、榮花と云つた女義太夫が此處で藝者をしてゐるさうだ。わかつたらそれを呼んで貰ひたい」かういつたのだ。

「榮花といふのは昔[illegible]に連れて行かれて聽いた事があると。可愛い娘だつた。何んでも今川燒屋の娘だとか云つてた」石本も其女を知つてゐた。

　丁度來てゐる藝者の一人が路次の中で向ひ合せに住んでゐるとか、桃奴の消息は精しかつた。幾度か電話をかけて來ない所から、其女の噂がよく出た。そして藝者も女中も桃奴には好意を示さなかつた。謙作達が個人的に其女を知つてゐるのでない事がわかると、女達は少しづつ惡意をさへ示した。おさらひの會で土地での古株の藝者と喧嘩をしたとか自動車の中で醉つた客の指環をぬき取つて了つたとか、――古い事では生れたての赤兒をキリ／＼と押し殺したとか、そして今も其男と離れられずにゐるのだとか、――現在一人の若い人を有頂天にさしてゐるとか、その若い人が自動車を持つてゐて、いつもそれを迎ひによこし、又自分で會へない時にはよく品物に手紙をつけて送り届けるとか、そんな噂をした。

　兎も角昔の榮花、今の桃奴が藝者の中でも最も惡辣な女になつてゐて、仲間でも甚だ評判の惡い女である事がわかつた。

　一體、謙作は子供のうちから寄席とか芝居とか、左ういふ場所によく出入りした。それは祖父やお榮が行くのについて行つたので、然し後に中學を出る頃からは段々一人でも左ういふ場所へ行くやうになつた。殊に女義太夫をよく聽きに出掛けた。

　其頃十二三の榮花は、小綺麗な娘だつた。美しくなる素質は見えてゐたが、それよりも何か痛々しい感じで謙作は此小娘に同情を持つてゐた。瘠せた身體、眉毛が薄いので白狐を聯想させる、青白い顔。聲は子供としても甲高い方で、それに何處か悲しい響を持つてゐた。

「あれは斃れて後、やむ、といふ女だね」――こんな事をいつた彼の仲間があつた。はつきりしない詞ながら、悲し氣な、痛々しい感じの中にも何處か負けん氣らしい變な鋭さのある事を感ず

ると、謙作は此許を大變適切に思つた。後でも榮花を考へるとよくこれを憶ひ出したものである。

同級生の間に寄席行仲間が段々に多くなると、その一人の山本といふのが、或る時高座の彼女を見て、「知つてる娘だ」と云ひ出した。

山本の家の一軒措いて隣りの、然しそれは表通りでいふので、裏では堺一重の隣りに住んでゐる今川燒屋の娘だといふ事だつた。此事は彼等の間に一種の興味を惹き起した。が、山本と小娘との間には何の交渉もなかつた。然し半年程經つて夏になると、丁度山本の屋敷に非常にいゝ掘井戸があつて、界隈での名水といふ位、近所の者がよくそれを貰ひに來る、そして榮花も其一人として時々山本の屋敷へ來るやうになつたといふのである。

井戸は湯殿の前にあつた。夏の事で窓は開け放たれ、細い葭すだれが其處へ下げてある。或る夕方山本が入つてゐると、すだれ越しに水を汲みに來た榮花が見えた。此方からだけ見えるつもりでゐると、榮花は汲み込んだ手桶を上げるなり、山本の方を向いて禮をいつて行つた。そしてからいふ事が二三度續いて二人は段々話すやうになつたと云ふのである。山本は風呂の縁へ腰掛け、榮花は井戸側へ後手に倚りかゝりながら、汲んだ水の溫むまで話し込む事もあつた。寄席の内幕話だつた。暫くして、謙作は山本がやつたといふ湯呑を高座に見た。

山本と榮花との交渉は然し少しも深くなつては行かなかつた。山本は華族だつた。山本の家には謙作達がチャボと綽名した小さくて頑固で氣の強い、年寄りの三太夫がゐた。これだけでも深入りするには厄介だつたらう。まして、深入りする程の氣もなかつたらしいので、二人の間には何事もなく一年餘り經つた。

榮花は其間にめき／＼と美しくなり、肥りはしなかつたが、兎も角身體も女らしく發達して行つた。藝も上り、人氣も段々出て來た。

其頃丁度三代目の早之助といふのが廢める爲めに、榮花が其三代目を繼ぎ、眞打ちになる事になり、暫く寄席を退き初代早之助の家へ通ひ、專心、藝を勵んでゐる筈の時だつた。不意に榮花は家出をした。近所の本屋の息子と何處かへ隠れて了つたといふのであつた。

隠れ家は直ぐ知れた。榮花の家から三丁と離れない處で、若者は直ぐ連れ歸られたが、榮花の方はその爲めに、今川燒屋の家から絶縁されて了つた。元々曹長の私生兒とかで、本統の子ではなかつたのである。

若者から引き離され、養家からは離縁され、同時に三代目早之助になる望を失つた榮花が自暴自棄になつたのは云ふまでもない。

殊に其時は既に姙娠してゐた。若しもそれが、所謂惡阻の時期とかち合つてでもゐたら、榮花はどれ程自暴自棄になつても未だ足りない氣持だつたに違ひない。そして實際榮花はかなり自暴自棄になつた。溺れんとする者が選まず物を掴むやうに――或はもつと本統に愛情を感じたか、それはよく分らないが、其處に出て來た一人の男に榮花は直ぐ身も心も任せて了つたのである。

腹の兒は墮胎された。――さうではない、生れたてを押し殺したのだといふ噂を謙作は其頃聞いた。兎も角赤兒はどうかされ、榮花はその爲め全く聲をつぶして了つたといふ話だつた。

間もなく榮花は其男に連れられ新潟へ行き、其處で藝者になり、それから又暫くして、北海道へ移つて、其處で出てゐるといふ噂を謙作は聞いた。いつも、所謂惡足といはれる其男が一緒だといふ事だつた。其男に罪の秘密を握られてゐるので離れられないのだと云ふ事だつた。然し謙作の耳へ入る程度の秘密なら、かなり公

然の祕密でもあるらしかつた。
　そして三四年經つて、今になり、謙作は或る日何氣なく演藝畫報を見てゐると其消息欄に榮花が柳橋から桃奴といふ名で出たといふ事が書いてあつた。
「場所が始まると、それは忙しくなるんですよ」こんな事を女の一人が云つた時である。
「よく行くのかい？」と石本が訊いた。
「大概行つてますよ」
「棧敷は何の邊？」石本も角力へはよく行く方だつた。
「正面」
「ふむ。石本さんの棧敷の近くかい？」石本も仲間と棧敷を持つてゐたが、左ういつたのは石本の本家の棧敷の事である。
「えゝ、あの少し上……こちら何んだかお見かけした事があるわ」こんな風に女も調子を合せた。
「石本さんの誰か、此邊へ來る人があるかい？」石本は何氣なく訊いた。本家の方に甥が澤山あつた。そしてそれらは道樂者が多かつた。
「えゝ、あるわ」かういつて、女は女中と眼を見合せて變な笑ひ顏をした。
「幾つ位の人だい？」
「軍人さん。幼年學校といふのがあるんですか。其處の生徒さん——桃奴さんの人つてその方の事よ」女は急に笑ひ出した。
　先刻からの話で何んといふ事なし木綿問屋か何かの息子といふ風に謙作は考へてゐたが、それが石本の甥だつた事は一寸不思議な氣がした。
　石本はそれとなく尚色々と訊いてゐた。
「石本さんの子供も左ういふのに掛り合つちやあよくないね」
「全くよ」と女もいつた。
　遂に榮花の桃奴は來なかつた。來られなければ左うとはつきり云ふがいゝのだと女中が不服を云つた。九時頃三人は其家を出た。
「不思議な事があるぢやないか」と歩きながら石本は此偶然を面白がつた。「實は姉に左ういふ話を聽いたが、何處で遊んで居るのかわからなかつた。最初は決して遊ばない代り自動車を買つてくれといふので、五萬圓だけ貰ふ事になつた中で一萬圓の自動車を買つたもんだ。馬鹿な話さ。遊ばないからと、それを眞に受ける奴も受ける奴だし……」
　信行も謙作も笑つた。
「然しいゝ小說の材料ぢやあないか」と石本は謙作を顧みた。「君は榮花の經歷を知つて居るんだし。今日の處も面白い材料ぢやないか」
「うむ。いゝ話の種だね」と謙作は云ひ變へた。左う云つて置かないと彼は氣が濟まなかつた。左ういふ出來事とか、今日のやうな偶然とか、雜談の種にはいゝが、これだけで直ぐ小說になると思ふ事には不服だつた。
　三人はそれから散歩して、銀座の方へ行き、其處で石本と別れ、十一時頃二人は福吉町の家へ歸つて來た。
　お榮は二人を待つてゐた。そして三人はそれから又暫く茶の間で話した。
　信行は其日の事をお榮に話した。信行の話し方はそれ程の經歷を持つた、そしてそれ程に惡辣な女だといふ所を幾らか强調した話し振りなので、傍で謙作は餘りいゝ氣がしなかつた。すると、今度はお榮が如何にも、いまはしさうな顏つきをしながら「ひどい女もあるものね」と云つた。
　謙作は急に腹が立つて來た。彼は「惡いのは榮花ではない」かういつてやりたい氣がむらむらとした。彼には十二三の靑白い顏をしたいたいたしい高座の榮花が浮んで來た。「あの小娘がどうして、ひどい女だらう……」彼は變に苛

苛して來た。そして不圖其時、あゝこれは書く事が出來る」と思つた。

二十四

翌日二人が家を出たのはもう二時過ぎてゐた。五反田の方から先に見た。小さい鐵工所の側から狹い坂を登り、下に四五百坪の草原になつた空地を見下ろしながら廻つて行くと其一軒があつたが、きたない平家で、前は割りに廣い庭になつてゐるが、日當りは餘りよささうでなく、餘程手を入れなければ住めさうもない家で、彼は氣乘りがしなかつた。それにかういふ家を餘り見た事のない謙作は、自分が住めばこれが何の程度に居心地よくなるのか見當がつかなかつた。何んとなく此がらんとした、きたない家に此儘自分が入るやうな氣がされて一層氣乘りがしなかつた。もう一軒は周圍が狹苦しくつて迚も入る氣のしない家だつた。二人はのんびりした心持で樫の芽の強い香りを嗅ぎながら街道路を大森の方へぶら／＼と話しながら歩いた。信行はもう一トかどの禪居士になり濟ましてゐた。そして、丁度高等學校時代の知識慾のやうな知識慾で、碧巖錄に凝つてゐる話を次から次とよく覺え込んで居て話した。

「左うだ、此道は自家の地所のある處へ出る道だよ」信行は立上つて往來の前後を見較べながら、から云ひ出した。「一寸寄つて見るかね。生垣を作らして、未だ誰も見に行かないんだ」

「うん」

「お前はあの植木屋の龜吉を知つてゐるかい？」

「本郷の家でいつか見たやうに思ふ。脊の低い頭の大きい馬鹿見たやうな奴だつた」

「左うだ。全く善良そのものといつたやうな奴だよ。手前事は天理教祖樣のお見出しにあづかりまして……そんな事を云つてゐる」

謙作は或時皆と茶の間で茶を飲んでゐると其處へ其植木屋が入つて來た、その樣子を憶ひ出した。腰を曲げ、膝をくの字なりにして、實際信行のいふやうに其樣子は善良そのもの、正直そのもの、そして、低能そのもののやうな感じを與へた。妹達はクス／＼笑つたが、植木屋は少しも氣がつかないやうな顏をしてゐた。話振りでも、恭しく茶を戴いて飲む、左ういふ樣子でも總てが馬鹿丁寧で、此者に任して置いて、ずるい事をされる心配はないと、誰でも思はないわけに行かないやうな男だつた。

「然し見た通りが本統だらうか？」謙作は其時何となく疑ふ氣がしたのであつた。餘りに見かけが好人物すぎた。其處に眼に見えない一種の不自然さが感じられた。謙作は歸つて其事を日記に書いて置いた。

「あれは君」謙作はそれを憶ひ出して云つた。「見かけだけの人間ではないかも知れないよ。餘り見かけが好人物すぎる」

信行はそれに反對した。二人は間もなく其處へ出た。長方形に往來に添うた二千坪ばかりの地所で、今まで畑にしてあつたのを宅地に直し、四つ目垣に結び、これに檜の苗木を植込ましたのである。

「何處から入るのだ」信行は入口を探して歩いた。「入口がないぜ」

「そんな事はあるまい」

「何處にも入る處はないよ。左ういへば、俺が龜吉に見積りを出さしたのだが、入口の事を云ふのを忘れたのかも知れない」

二人は笑つた。そして猶、探したが完全に四つ目垣を結び廻してあつて、何處にも入る處はなかつた。

「作りながら氣がつかなかつたかね」

寧ろ愛嬌だつた。二人はそれから、土地を管理して貰つてゐる百姓の家へ寄つて入口の事

を倉吉へ云ひつける事を頼んで來た。(そしてこれはそれから二三ケ月後の話であるが、倉吉は實際謙作が云つたやうに本統の正直者でない事がわかつた。草刈りをしたからと、土地の相場に比しても多過ぎる手間賃を本鄕の家から受取つて置いて、草は草で、生えなりに馬の飼ひ葉として賣り、而もそれをしながら、兩方から金をまうけしてゐたのであつた。)

日がくれかゝつて來た。大井の山王寄りに一軒建ての二階家があつた。外から見た所では一寸氣の利いた家だつた。謙作はもう疲れてゐた。そして、これで十分だと思つた。

「新しいだけでも氣持がいゝ、間どりもよささうぢやないか」と信行もいつた。

で、二人は山王の大家の家へ寄つて借りる事に話をきめた。

大森の停車場へ來ると(院線電車のない頃で)上りは少し間があつて、下りが先へ來た、鎌倉へ歸る信行を送りがてら、横濱まで支那料理を食ひに行く事にして、そして晩くなつて謙作だけ東京へ歸つて來た。

五日程して、謙作は其處へ引移つた。

然しその家は夕方、氣忙しく見て、思つたよりは遙かにいやな家だつた。本統の貸家向きに建てた家で、二階で少し烈しく歩くと家が搖れた。そして誰か下の部屋で新聞でも擴げてゐれば、其上にバラ〲と音がして天井のごみが落ちて來た。

「此方へ來てから髪がよごれて仕樣がないのよ」下の部屋にばかりゐるお榮はこんな事をいつてこぼした。

謙作の氣分は幾らか變つた。彼は此機をはづさず仕事をしようと考へた。尾の道で書きかけてゐた長いものには一寸手がつかなかつたから、彼は榮花の事を書く事にした。

實際會へばどうだかわからなかつたが、離れてゐて考へると彼は心から榮花に同情出來た。それには、一方不確かな感じもあつた。會つてどうだか知れない人間に對し、離れてゐる爲めに同情出來るのだといふ事は仕事の上からも面白い事ではなかつた。然し實際會へば、そして第三者よりも何かの意味で近づけば、それでも自分は現在の榮花に對し同情が持てるかどうか、彼は甚だ心元なかつた。元々書かうと思ふ動機が同情――お榮が少しも同情なしに何かいつたのに對する腹立ちにあつただけに此事は無視しないではゐられなかつた。彼は或る時榮花に會つて見てもいゝと思つた。然し妙に億劫な氣もし、中々實行に出來さうもなかつた。

そして彼は自分が榮花に會つた場合を想像して見て、榮花がどういふ調子で自分に對するか? 左うなる前の榮花を知る自分に對し、榮花も多少其頃の氣持を呼び起すであらうか? それとも、左う見せかけ、其頃をなつかしむやうな風を見せ、心は現在を少しも動かない、左う云ふ荒んだ調子であるか? 何方とも想像出來た。然し何れにしろ、彼は左ういふ絶望的な榮花に矢張り同情出來さうに思へた。絶望的な境遇から榮花を救ふ、かういふ氣持も彼には起つた。兒殺し、それから數々の何か罪、左ういふものを總て懺悔し悔改めた榮花。が、それを考へて見て、彼は矢張り何處か虚ろな榮花しか考へられなかつた。若し自分が榮花に會ふ場合、かういふ風に、所謂基督信徒根性で簡單にこんな惱みを消すとすれば、それは餘り感心出來ない事だと考へた。

本統に一人の人が救はれるといふ事は容易な事ではないと思つた。

彼は先年京都で、蝮のお政といふ女を見た事がある、それを憶ひ出した。祇園の八坂神社の下の場末の寄席といつたやうな小屋で自身の一代記を芝居にしてゐた。それを見物したので

はなかつたが、夜おそく其前を通ると、入口に頭を綺麗に丸めた女が口上をいつてゐる繪看板が上げてあつた。口上には懺悔する意味で自身、一代記を演ずると書いてあつた。彼はそれを見てから何氣なく其處を立去らうとすると、中から數人の若い女の騒かして、其一番先に立つて來たのが、長いマントを着、坊主頭にナイトキャップを被つた、大きな一見男と思はれる、—その繪看板を見てゐなければ勿論、男と思つたらう、五十餘りの蝮のお政であつた。

繪看板をはづしに來た若い男が、挨拶をすると、お政は一寸顔をあげて點頭いた。丁度電燈の下で謙作は其顔をよく見る事が出來た。それは氣六ケしさうな、非常に憂鬱な顔だつた。心で樂しむ事の決してないやうな顔だつた。

彼は蝮のお政については何も知らなかつた。長い刑期を神妙にして、そして悔改めた事を認められ、何かの機會に出獄して、そして、今は生活の爲めに一座を組織し、旅から旅と自身の過去の罪を賣物に、芝居をして廻つてゐる。—これだけの事が考へられるのであつた。

そしてこれだけでも彼は其時見たお政の顔つきから其心持を察するには十二分だつた。それが妙にはつきり映つて來た。彼は淋しい、いやな氣持になつた。彼はお政のした惡い事を知らなかつたし、それに何の同情も持てなかつたが、それでも左ういふ惡事を働きつゝあつた時の心の狀態に比し、今が、よりいゝ狀態だとは云へない氣がして、變に淋しい不快な氣持になつた。それは何れもいゝ狀態でないに違ひない。然しお政自身の心として何方がより幸福な狀態であるかを想像すると、惡事を働きつゝあつた頃の生々した張りのある一種の心の上の幸福は今は全く彼女から消え去つたに違ひないと思はないわけに行かなかつた。そして、其代りに今何があるか。自身の罪を芝居にして廻つてゐる。それは全く芝居に違ひなかつた。懺悔でも何んでもが芝居に違ひなかつた。しかも見物はそれが當の人物である所に何等かの實感を期待するだけに一層彼女には苦しい僞善が必要となるに違ひなかつた。かういふ生活が彼女をよくする筈はない。そして、一度罪を犯した者は悔改めてからも、假令お政程罪に露骨な關係を持つた生活をしないまでも、屹度かういふ心の不幸に苦しめられないものはないだらうと彼は思つた。

お政は脊の高い男性的な強い顔をした女だつた。若い頃は押し出しの立派な女だつたらうと思はれる所がある。

謙作は今、榮花の事を書かうと思ふと、嘗て見た其女を憶ひ出さずにはゐなかつた。彼は現在の榮花を考へ、氣の毒なそして息苦しいやうな感じを持ちながら、然し所謂悔改めをしてお政のやうな女になる事を考へると一層それは暗い絶望的な不快な氣持がされるのであつた。本統の救ひがあるならいゝ。が、眞似事の危つかしい救ひに會ふ位なら矢張り「斃れて後やむ」それが榮花らしい、寧ろ自然な事にも考へられるのであつた。

彼は會ひに行く機會を作る事が億劫だつたので、其儘書き出した。

或る時彼は山本に會つた時、その事を話すと、山本は、

「あゝ、先日ネ、家内と牡丹を見に行く時、兩國で船に乘らうとして待つてゐると路次の口に立つて此方を見てゐるのが、どうも榮花ぢやあないかと思つた。矢張り左うだつたのだネ」と云つた。實際その路次に榮花の桃奴の家はあつたのである。

「會つて見る興味もないかい？」

「左うだネ、ない事もないが……」山本は言葉を濁し、乘氣な風を見せなかつた。

二十五

謙作は又段々と參り出した。氣候も惡かつた。濕氣の强い南風が烈しく吹くやうな日には生理的に彼は半病人になつてゐた。そして生活も亦亂れて來た。彼は榮花の事を書かうとすると、勢ひ女の罪と云ふ事を考へなければならなかつた。男ではそれ程追つて來ない罪の報いが女では何故何時までも執拗につきまとつて來るか。或時、元、榮花のゐた邊りを歩き、其本屋の前を通つて、彼よりも若い其男が、何時か赤坊の父となつてゐるのを見て一寸變な氣がした事があつた。赤坊を膝に乘せ、ぼんやり店から往來を眺めてゐる其樣子は過去に左ういふ出來事のあつた男とは思へぬ程、氣樂に落ちついて見えた。それは左ういふ男でも或る時過去の記憶で心を曇らす事はあるだらう。殺された自身の初兒、こんな事を憶ひ出す事もあるだらう。が、それにしろ、それらは皆其男にとつて今は純然たる過去の出來事で、その苦しかつた記憶も今は段々薄らぎ遠退きつゝあるに違ひない。所が、榮花の場合、それは同じく過去の出來事ではあるがそれに現在の生活と未だ少しも切り離されてゐないのはどうした事か。今の生活は寧ろ其出來事からの續きである。——かういふ事は必ずしも女にかぎつた事ではないかも知れない。一つの罪から惰性的に自暴自棄な生活を續けてゐる男は幾らもあるだらう。が、女の場合は男の場合に較べて更にそれが絕望的になる傾きがある。元々女は運命に對し、盲目的で、それに惹きずられ易い。それ故周圍は女に對し一層寛大であつてい丶筈だ。子供の事だからといふやうに、女だからといつて許さうとしてもい丶筈だ。所が周圍は女に對して何故か特に嚴格である。嚴格なのは未だいいとして、周圍は女が罪の報いから逃れる事を喜ばない。罪の報いとして自滅するのを見て當然な事と考へる。何故女の場合特に左うであるか、彼は不思議な氣がした。

彼はこんな事を想ふにつけ、亡き母は未だしも幸福な女だつたと思はないわけに行かなくなつた。母の周圍が、もつと愚かな人々でとり卷かれてゐたら母はもつと／＼不幸な女になつてゐたに違ひない。ひいては自分の存在もどうなつてゐたか分らない。幸ひに芝の祖父でも、本鄉の父でも、賢い人々だつた。自分は此事だけでも本鄉の父へは心から感謝しなければ濟まないわけだと彼は考へた。——彼の感情は却々其處まで行かなかつたけれども。

彼は榮花の事を書き出した。榮花の[illegible]を書くのに彼自身の立場から書くと餘りに材料が少なく、あつさりしすぎるので、彼は榮花の立場から、自由に想像を入れて書く事にした。榮花が或る時蝮のお政に會ふ事を書いてもい丶かも知れないと思つた。それから、其頃丁度矢張り寄席藝人として出てゐた、箱屋殺しの花井お梅といふ女を見る事なども書いてい丶かも知れないと考へた。謙作は實際或時高座に其女を見て、慘めな、不快な感じを受けた事がある。寧ろ罪を罪のまゝに押し通してゐる女の心の張り、その方に彼は遙かに同感が起るのであつた。

彼はこれまで女の心持になつて、書いた事はなかつた。その手慣れない事も一つの困難だつたが、北海道へ行くあたりから先が、如何にも作り物らしく、書いて行く内に段々自分でも氣に入らなくなつて來た。

そして、彼は何んといふ事なし氣持の上からも肉體の上からも弱つて來た。心が妙に淋しくなつて行つた。彼が尾の道で自分の出生に就いて信行から手紙を貰つた、其時の驚き、そして參り方は可成りに烈しかつたが、それだけにそれをはね退けよう、起き上らうといふ心の緊

張は一層強く感じられた。然し其緊張の去つた今になつて、丁度朽ち腐れた土臺の木に地面の濕氣が自然に浸み込んで行くやうに、變な淋しさが今ジメ／＼と彼の心へ浸み込んで來るのをどうする事も出來なかつた。理窟ではどうする事も出來ない淋しさだつた。彼は自分のこれからやらねばならぬ仕事――人類全體の幸福に繋りのある仕事――人類の進むべき路へ目標を置いて行く仕事――それが藝術家の仕事であると思つてゐる。――そんな事に殊更頭を向けたが、彈力を失つた彼の心はそれで少しも引き立たうとはしなかつた。只々下へ／＼引き込まれて行く。「心の貧しき者は福なり」貧しきといふ意味が今の自分のやうな氣持をいふなら餘りに惨酷な言葉だと彼は思つた。今の心の狀態が自身これでいゝのだ、これが福になるのだとはどうして思へようと彼は考へた。若し今一人の牧師が自分の前へ來て「心の貧しき者は福なり」といつたら自分はいきなり其頬を撲りつけるだらうと考へた。心の貧しい事程、惨めな狀態があらうかと思つた。實際彼の場合は淋しいとか苦しいとか、悲しいとかいふのでは足りなかつた。心が只無暗と貧しくなつた――心の貧乏人、心で貧乏しきる――これ程惨めな事があらうかと彼は考へた。

　これは確かに生理的にも來てゐた。尾の道に居た頃、既に彼は左うなりかけてゐた。其處に自身の出生に就いて知つた。此事に然し一時的に彼の心を緊張させる上に却つて有效な刺激となつた。が、その刺激がなくなり緊張が去ると其處には一層惡いものが殘された。これなしにさへ弱つて行きつゝあつた彼の心はその爲めに不意に最も惡い狀態まで沈められて了つた。

　信行は時々彼を訪ねて來た。彼の方も近頃は今までになく信行に親しみを感ずるやうになつた。そして彼は信行から色々禪の話を聽く事を喜んだ。

　〝ぐてい一指頭の禪とか、南泉猫兒を斬る話とか、石革の毒箭を向ける話とか、船子和尚と夾山の話とか、德山が龍潭の所で悟る話とか、それから百丈、潙山、黄檗、睦州、臨濟、普化、左ういふ連中の色々な話など、總てが、現在の謙作には理想的な心の境地であつた。「何々、こつ然大悟す」其處へ來ると彼はよく泣きさうになつた。殊に德山托鉢といふ話などでは彼は本統に泣き出して了つた。其話が彼の貧しい心に心の糧として響くからばかりでなく、一方それの持つ一種の藝術味が烈しく彼の心を動かした。

彼が左ういふ話に腹から感動するのを見ると信行は遠慮しながら、鎌倉へ來る事を勸める事もあつた。然し左うなると謙作は素直になれない方だつた。師につくといふ事が、いやだつた。禪學は惡くなかつた。が、悟り濟ましたやうな高慢な顏をした今の禪坊主につく事は閉口だつた。

　若し行くなら高野山とか叡山の横川あたりに行きたい、左う彼は考へた。（然し後年彼は高野山へ登つて見て、こんな處ならあの時來ないでよかつたと思つた。）

　彼は四十枚近く書いて又行きづまつて了つた。今のやうな氣持で、内の力を外へ働きかける、書くといふやうな仕事のうまく行く筈はなかつた。

　無爲な、然し彼には息苦しい淋しい日が何週間か經つて、或日の事である、それは蒸暑い風の吹くいやな日だつた。彼は晝の食事を濟ますと急に氣が重くなり、何をするのも億劫なやうな氣持で、茶の間に寢ころんで其處にあつた講談小説を別に見る氣もなく二三頁讀んでゐた。

「それは左うと由を博覽會へやるのは何日がいいでせう？」南洋館といふので土人の踊りがある、宮本が喜んでよくそれを見に行くといふ、

左う其朝桝本といふ友達からの便りがあつた。それを憶ひ出して、彼は傍で針仕事をしてゐたお榮に話しかけた。

「何日でもかまひませんよ。一人でやるんですか、それとも誰か連れて行つてやるの？」

「一人で行けるでせう」からいひながら彼は直ぐ「少し無理かな」と考へた。そして何日やらうかと考へると、それも却々決められない、何かしら六ケしい事のやうに彼には思はれるのだ。これは前からもあつたが、近頃になつて段々烈しくなつた一つの癖である。決めて了ふと何か其處に困る事が起りさうに思はれるのである。何の根據もない單に自身の心の病氣から來てゐる事と承知しながら、それで却々彼には超越して考へられなかつた。いつそ、これから自分で連れて行つてやつてもいゝ、と彼は考へた。それを云ふと、お榮は、

「でも、今日は信さんがお見えになる筈ぢやないんですか」と云つた。

「此前來た時そんな事をいつてたやうな氣がするんですがね。或は僕だけ左う思つてるのかも知れない」からいひながら、今日由を連れて行かずに濟む事を何かしらほつとするやうな氣持で彼は感じるのである。

三時になつた。三時七分に横須賀からの汽車が着く。來ればそれだ。それで來なければ今日はもう來ない。左う思つて彼は何んとなく落ちつかない心持で其邊まで出て見る事にした。一重羽織を着て、時計を帶へ卷くと、財布も懷へ入れた。信行に會へば否應なし其日の行動は決まるが、若し來ないとすると、それから先がどうなるか自身でも全でわからなかつた。然し實は漠然とした心持はあつた。が、それを左うとはつきりさすと、同時に厭になる近頃の癖から、一方はつきりしてゐる事すら、はつきりさせないで置くやうになつて居た。

「一寸出ます。めし迄には大概歸ります。信さんに會へば一緒に直ぐ歸つて來ます」左ういつて家を出た。

信行には會はなかつた。あてにして居た列車は鹿島谷と云ふ處を歩いて居る時に姿は見えなかつたが、烈しい地響だけをさして東京の方へ走つて行つた。

大森の停車場へ來たが新橋行までは尚三十分程あつた。彼は品川行の電車の方へ廻つた。間もなく電車は來た。

彼は懷から西鶴の小さい本を出して本朝二十不孝の仕舞ひの一節から讀み出した。彼は二日前お榮から日本の小説家では何んといふ人が偉いんですか、と訊かれた時、西鶴といふ人ですと答へた。左ういつたのは丁度その前讀んだ二十不孝の最初の二つに彼は悉く感服して居たからであつた。それは餘りにと云ふ程徹底してゐた。病的といふ方が本統かも知れない。彼は若し自分が書くとすれば、あゝ無反省に慘酷な氣持を押し通して行く事は如何に作り物としても出來ないと考へた。親不孝の條件になる事を並べ立てゝ書く事は出來るとしても、それをあの強いリズムで一貫さす事は却々出來る事ではないと思つた。——弱々しい反省や無益な困惑に絶えず苦しめられてゐる今の彼が左う思ふのは無理なかつた。で、實際西鶴には變な圖太さがある。それが、今の彼には羨しかつた。自身左ういふ氣持になれたら、如何に此世が樂になる事かと思はれるのであつた。

彼は仕舞ひから見て行くと、どれも最初の二つには較べ物にならなかつた。

品川で市の電車に乘換へると、もう讀むのも少し面倒臭くなつた。彼は只ぼんやりと車中の人々の顏を見てゐたが、其内不圖前にかけてゐる人の顏が、寫樂の描いた誰かに似てゐるやうに思ひ出すと、どれもこれもが、寫樂の眼に映つ

たやうな一種のグロテスクな面白味を持つて、彼の眼にも映り出して來た。
薩摩原の乘換へ來ると、本郷の家へ行つて見ようかしらといふ氣を一寸持つた。暫く會はない咲子や妙子に會ひたい氣が急に起つたのである。然し父がゐるかも知れないし、それに咲子とでも氣持がしつくり行きさうもない氣が直ぐして來ると、彼は矢張りその儘乘越して了つた。宮本か榊本かの家へ行つてもいゝと思ふが、妙にゐさうもなく、假りにゐても今の氣分で行けば、屹度氣まづい事をするか云ふかしさうで彼は氣が進まなくなる。氣まづい事を避けようと氣持を緊張さすだけを考へてもつらくなるのであつた。打克てない慘めな氣持を隱しながら人と會つてゐる苦み、そしてへと／＼に疲れて逃れ出て來る憐れな自分、それを思ふと、何處へも行く處はないやうな氣がするのであつた。結局只一つ、彼が家を出る時から漠然頭にあつた、惡い場所だけが氣輕に彼の爲めに戶を開いてゐる。左う思はれるのだ。彼の足は自然其方に向ふのである。

そして彼は同じ電車の誰よりも自身を慘めな人間に思はないではゐられなかつた。兎も角、彼等の血は循環し、眼にも光を持つてゐる。が、自分はどうだらう。自分の血は今ははつきりした脈搏を打つて流れてゐる血とは思へなかつた。生溫く、只だら／＼と流れ廻る。そして眼は死んだ魚のやう、何の光もなく、白くうぢやぢやけてゐる、そんな感じが自分ながらした。

二十六

小さい女は髮結ひの處で丁度解いた所を呼ばれたのだと云つて、その澤山ある髮の毛を紅い球のついた髮差で襟首の上に輕く留めて置いた。「朝鮮の女のやうでせう？」こんな事を云つて橫を向いて見せたりした。戶外は未だ明るかつたが、天井の電燈がひとりでについた。風の音がして、それで部屋の中は甚く蒸々してゐる。

小さい女は彼に早く歸つて貰ひたいやうに如何にも落ちつかない樣子をしながら、何かしら絕えず饒舌つてゐた。

彼は起ち上つた。そして部屋を出ようとすると、小さい女は失敬と云つて手を擧げた。彼も一寸手を擧げて、一人先に段々を降りて來た。そして出ようとすると、彼は其處に若い女が坐つてゐるのを見た。美しい女だつた。何處か感じのいゝ處があると彼は思つた。

戶外へ出た。そして電車路の方へ步きながら、今からならお榮に云つて來たやうに、明るい內に歸れさうだと思つた。それは左うと、何故あの女はあんな處に坐つて居たらう。客が來てゐてあんな處にゐるのも變だと思つた。此次行けば、あの女を自分は望むだらう、と彼は思つた。どんな人でしたと訊かれる。その時どう云へばいゝか。云ふやうな事は何もない。實際何の特徵らしい特徵も自分は見てゐなかつた。俺が歸る時、下に坐つてゐた女だ。美しい女だ。せいは？ それは分らない。肥つてゐましたか？ 痩せた方ではなかつた。こんな事で結局要領を得さうもない。

彼は此儘電車に乘つて了ふのが惜しい氣がした。今の小さい女が未だゐるかも知れない。或は近所で會ふかも知れない。「忘れ物をした」かういへばいゝ。左う思つて彼は又、前の家の方へ引きかへして行つた。

彼は格子の中に立つて女中と話した。

「今其處に居たのは、お客さんで來てゐるのか？」

女中にはこれだけで通じた。

「今、上に一人呼んで居るんです。それと交代で上るんです。直ぐですから、お上りなさい」

「俺を先にしないか」
女中は顏をしかめて見せた。そして又、直ぐですと云つた。
彼は下駄を脱いだ。次の間を通る時、其襖のかげに今の會話を聽いてゐた女が隱れるやうにして立つて居た。彼は見ないやうにして二階へ上つて行つた。が、上ると直ぐ矢張り後は困ると思つて、彼は手を叩いて女中を呼んだ。隣りには其客といふのがゐるので彼は小聲で云つた。
「隣りは別の奴を呼べばいゝぢやないか」
「いゝえ、名ざしなんです。それに先刻顏を見ちやつたんです」
「困るな」彼は氣六ケしい顏つきをして默つて了つた。
彼は別に根據もなしに其女をおとなしい、素人臭い、善良な女と云ふ風に何時か心で決めて了つてゐた。
隣りから一人の女が出て行つた。間もなく其女が其部屋に入つて行つた。彼はおつとしてゐられない氣持になつた。そして又手を叩いた。
女中は入つて來て、彼が何も云はない先に、「今入つた所です。直ぐです」と、なだめ顏に云つた。彼は、
「硯を貸して呉れ」と云つた。
懷から白紙を出し、それを餉臺の上に延べて彼は下腹に力を入れて習字を始めた。慈眼視衆生、福聚海無量、こんな文句を書いた。が、こんな文句をこんな場所で書くのは勿體ない氣がしてそれは直ぐやめたが、兎も角彼は隣りを頭に浮べたくなかつたのである。
女が入つて來た。笑ひ顏をした。いやな顏ではなかつたが、彼が勝手に決めて居た顏とは大分異つてゐた。
「ありがたう」少し斜めに向いて膝を突き、彼の顏を見ながら高いお辭儀をした。それが如何にも只のプロスティチュートだつた。先刻の神妙らしい樣子とは別人だつた。
「何時から出てゐるんだ」
「二タ月程前から」女はあやふやな調子で答へた。
「お前ははたちだらう？」
「十九よ」
「本統か？」
「本統。ほんまどつせ」
彼は女を膝へ抱き上げてやつた。女は自由になつて居た。そして物憂さうに首を傾け、彼の肩へ其頬を押當て、休んでゐた。
「俺と一緒に何處かへ行く氣はないか？」
「何處へ？」
「遠くへだ」
「連れてつて下さい」
「俺は笑談で云つてるんぢやないよ」
「私だつて笑談ぢやないよ」
女は頬をつけ、眼を閉ぢた儘、だるさうに云つた。彼は肩を搖すり、
「オイ」と起してやると、女も、
「オイ」と眼を開きざま、彼の鼻先でその二タ重になつた白いあごを突き出した。
「貴樣は俺が出鱈目を云つて居ると思つてるな。馬鹿な奴らしいから、解るまいな」
「馬鹿だから解らない」
女は彼の膝に腰かけたまゝ恥づかし氣もなく、彼の顏を上から凝然と見下ろしてゐた。
女は少し本氣になり出した。實は半年ばかり前から出てゐる事、自家は深川で、母と姉だけだか、母は姉夫婦が見る事になつてゐるから自分は只、それを助けるだけでいゝのだといふやうな話をした。
「姉さんの御亭主は何をして居るんだ」
女は暫らく默つてゐたが、
「納豆屋」といつて笑ひ出した。うそか本統か

はつきりしなかつた。
　女は今居る家に、七十圓ばかり借金をしてゐるが、それさへ返して貰へば、何處へでも行けるのだと云つた。女は何故か時々京都訛りを眞似た。「きつたいな事を云ひなはる」などいつた。「奇體」と「怪體」を混同してゐると彼は思つた。
「京都は好きか？」
　女は乘氣らしい返事をした。
　何もはつきりした話はせず、間もなく彼は其處を出て、眞直ぐに自家へ歸つて來た。
　そして翌日になり、夕方になると、又彼は前日と同じやうな氣持で、妙に落ちついてゐられなくなつた。彼は用意の出來かけた食事を待つ間も苦しいやうな氣持で家を飛び出した。鎌倉の信行は今日も來なかつた。乾度素通りをして本郷の家へ往つたのだと思ふと、一寸不愉快な氣分に彼はなれた。輕蔑されたやうな氣がした。いゝひがみだとは知つてゐた。が、左う思つても何んだか彼は愉快でなかつた、彼は前から總ての人が自分に惡意を持つてゐる、から感ずる事がよくあつた。それは然し、本統のひがみで何の根據もないものだと打消してはゐたのだが、今自分の出生を知り、それを若し却つて皆が前から知つてゐたとしたら、皆は自分の背後に何時も何か醜い亡靈を見、それに顏を背向ける氣持を持つてゐたのではなかつたらうか、左う今更に彼には想ひ起されるのであつた。皆のその氣持が自分に反映する。自分は知らず〳〵に意固地な氣持を又皆へ投げ返す。そして人々から更に何かしら惡意らしいものを感ずる。こんな事ではなかつたか。
　實際近頃の彼にとつて接するもの總てが屈辱の種でないものはなかつた。何故左うか。左う思つても自分でも分らなかつた。只、彼はもの皆が左う云ふ風に感ぜられるのであつた。彼にとつては、根こそぎ、現在の四圍から脱け出る。これより道はない氣がするのだ。二重人格者が不意に人格が變つて了ふ。そのやうに自分も全く別の人間になる。どんなに物事が樂になる事か。今までの自分、――時任謙作、そんな人間を知らない自分、左うなりたかつた。
　そして、今まで呼吸してゐたとは全く別の世界。何處か大きな山の麓の百姓の仲間、何も知らない百姓、しかも自分がその仲間はづれなら一層いゝ。其處で或る平凡な醜い、そして忠實なあばたのある女を妻として暮らす、如何に安氣な事か、彼は前日の女を想つて少し[illegible]し過ぎると思つた。然しあの女が若し罪深い女で、それを心から苦んでゐるやうな女だつたら、どんなにいゝか。互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で靜かに一生を送る。笑ふ奴、憐む奴、などがあるにしても、自分達は最初から左ういふ人々には知られない場處に隱れてゐるのだ。彼等は笑ふ事も憐む事も出來ない。そして假令笑つても憐んでもそれは決して自分達の處までは聽えて來ない。自分達は誰にも知られずに一生を終つて了ふ。如何にいゝか――
　汽車で新橋へ着くと、兎も角彼は自動電話に入つた。前日榊本からの手紙で、一昨日三造の前で宮本に會つて、君が郊外に引移つた事を初めて聞いた。近くお訪ねしたいが、いゝ日を知らして貰ひたい――から書いてあつた。それを憶ひ出し、榊本を訪ねて見てもいゝと思つたのである。が、ベルを鳴らすと、もう彼は迷ひ出した。幸ひ交換手が直ぐ出なかつたので、彼は其儘受話器をかけて出て了つた。
　銀座に夜店あきうどの出始める頃だつた。彼は夜店のない側の人道を京橋の方へ歩いて行つた。出來るだけしつかりした足どりで歩かう。彼は下腹に力を入れて、口を輕く結んでみた。そして毎時のやうに、きよろ〳〵せずに穩やかな眼で行く手を眞直ぐに見て歩かう、左う思つ

た。松が叫び、草が啼いてゐる高原の薄暮を一人、すうつと進んで行く、左うありたかつた。現在銀座を歩きながら左う云ふ氣持で居たかつた。多少そんな氣持がしないでもなかつた。これは何んでも寒山詩か何かにあるのだと信行から聞いた。今の彼には實に理想的な心の境地であつた。

寒山詩を買はう。日本橋へ行くまでに二三軒漢籍を賣る家があつた筈だと思ふ。

間もなく彼は彼より五つ程年上の舊い友達が若い細君らしい女と一緒に向うから來るのを見た。左ういへばもう少し前にも彼は彼より年下の知人が内端のいゝ矢張り細君らしい若い人と往來の向う側を歩いてゐたのを知つてゐた事を今更に心附いた。

三間程の近さに來て友は漸く氣がついた。兩方で立止つた。

「僕は今、我善坊の××と云ふ番地に居る。夜は何時でも居る。遊びに來給へ」と云つた。

彼は素より行く氣はなかつた。然し我善坊と云ふと何邊だつたかなと考へた。知つてゐるやうで思ひ出せなかつた。あれは狸穴だつたかな、など心で迷つた。そして、「我善坊といふ、どの邊だつけ」から云はうとしたら、「私、を二がん」と云ひかけて、ドギマギして了つた。

「芋洗坂の下だつたかネ」こんな事をいつた。

「まるで異ふさ」

後ろにゐた細君が何か注意すると、「あゝ電話を教へて置かう。芝の三千七百四十六だ」と云つた。

「迚も覺えられない」

「ミナヨムと覺えて置き給へ。いつでも夜はゐるよ」

別れる時細君は丁寧にお辭儀をした。其時彼は何處かで見た事のある人だと思つたが、憶ひ出せなかつた。

彼は一寸氣持を亂された。こんな事では駄目だと思つた。

松山書店と書家の書いた看板をあげてゐる古本屋へ來た。顏眞卿の千字文の楷書かあつた。然し餘り上等でないので、彼はそれから、兩端の高い書棚を丁寧に見て廻つた。聞いたことのあるやうな、ないやうな本が一杯につまつてゐた。一休何とか双紙といふ紙切れを見て、一休の隨筆のやうなものかと思つて下ろして見たが、それは柳下亭種員の戯作だつた。

「寒山詩はないかい」

「一丁度持合しませんでしたな」

「宗門葛藤集は？」

「へえ、それも生憎持合しませんでした」

丸善の前へ來た。店を仕舞つて、小僧達が横手の口から歸る所だつた。飾窓には泥皮燒樣をつけた惡趣味の書棚が飾つてあつた。

青木嵩山堂といふ本屋に來る。その前に小林嵩山堂といふ、矢張り古い本屋があつた筈だがと思つたが、見落したのか、もうなくなつたのか氣がつかなかつた。彼は青木嵩山堂で李白の小さい詩集を買つた。十年程前にも同じ本を此店で買つた事がある。然しあの本などは何處へ行つて了つたらうと考へた。

腹は空いてもゐなかつたが、食事をするなら、此邊がいゝやうに思ひ、彼は魚河岸の中へ入つて行つた。顏馴染のある怠け者のすし屋が珍らしく屋臺を出してゐたが、彼はその前を素通りにして、先の天ぷら屋へ行つた。彼はすし屋が其前を素通りにする自分を怒つて、どうかしはしまいかといふ不安を一寸感じた。そして、少時して天ぷら屋を出る時にも、其處にすし屋が待伏せしてゐて自分を袋叩きにしはしまいかといふ愚にもつかぬ不安を感じた。自分ながら馬鹿氣た不安と氣がついたが、

それから橋を二つ渡つて、彼は右へ折れて行

つた。前日彼は其處を少し行つた處の時計屋で、多分プラチナだらうと思ふ時計を見て、一寸欲しい氣を起した。百九十圓といふ札がついて居た。彼はそれをもう一度見て、若し今日も欲しい氣がしたら買つてもいゝと考へた。三ケ月程貧乏暮しで我慢すればいゝのだと思つた。が、今日見ると前日程欲しい氣はしなかつた。それは一寸淋しい氣持でもあつた。五六年前までは欲しいと思ひ出すと、例へば浮世繪のやうなものでも、手に入れるまでは氣になつて仕方ない方だつたが、段々に近頃は一つ物に妙に執着が感じられなくなつた。物を欲しいと思ふ、前日既にそれを珍らしい事だと思つてゐたが、案の定、今日はもうそんな氣がしなくなつてゐる。これは彼には矢張り淋しい事だつた。が、同時に貧乏せずに濟んで却つてよかつたとも思つた。

彼は尚暫く、其飾窓を硝子越しに眺めて居た。其内不圖、店の者が自分を泥棒と思ひはしまいかといふ氣がした。彼は一寸顏の赤くなるのを感じた。そして歩き出した。

前日の家へ來た。下の部屋では、三味線を彈いて騒いで居た。彼は二階へ上ると、

一昨日の人を呼んで呉れないか―と云つた。女中は降りて行つた。彼は本屋で包んで呉れた李白の詩集をほどいて見始めたが、「一昨日の人」だけでは不十分だつたと氣がついた。手を叩くと異ふ女中が登つて來た。

一昨日の後の人だ―

女中もそれを呼びに行つたのだと云つた。彼は安心したが、家にゐればいゝがと、一寸不安な氣もした。

詩集の初めに傳記が二つついてゐた。それは現在の彼には實に理想的に思へる生活だつた。が、餘りに性格が異つてゐる。――階下の騒ぎが八釜しい。尤も―白猶與飲徒醉於市―こんな事が書いてある。李白ならこんな中でも平氣に自分だけの世界にして呼吸してゐたらうと思ふ。

一甕中自から錢あり―こんな事をいつて酒屋で仰向けになつてゐる李白を杜甫か誰かがうたつてゐるのを想ひ出す。李白が酒好きだつた事は鬼に鐵棒に違ひなかつた。然し六十餘歳で死んだのは酒の爲めである所を見ると、酒から來る不快もあつたにはあつたらう、など考へる。

彼は酒はどうしても好きになれなかつた。それ故その鐵棒は別に羨しくも感じなかつた。――

女は却々來ない。

雜に本文を見る―莊周夢蝴蝶。蝴蝶爲莊周―

何んといふ事なし、こんな句が彼の心を惹いた。

漸く女が來た。前日とは大分異つた印象を彼は受けた。前日程女のいゝ處が彼に映つて來なかつた。何か表情をすると矢張り美しかつた。笑ふ時八重齒の見えるのが妙に誘惑的だつた。然し澄してゐると、如何にも平々凡々だつた。多少裏切られたやうな心持で彼は一切前日の話は持ち出さなかつた。女も忘れたやうに云はなかつた。

彼は然し、女のふつくらとした重味のある乳房を柔かく握つて見て、云ひやうのない快感を感じた。それは何か價うちのあるものに觸れてゐる感じだつた。輕く搖すると、氣持のいゝ重さが掌に感じられる。それを何と云ひ現はしていゝか分からなかつた。彼は只、

一豐年だ！　豐年だ！―と云つた。

左う云ひながら、彼は幾度となく、それを搖す振つた。何か知れなかつた。が、兎も角それは彼の空虚を滿たして呉れる、何かしら唯一の貴重な物、その象徴として彼には感ぜられるのであつた。（前編了）

或る朝

祖父の三回忌の法事のある前の晩、信太郎は寝床で小説本を讀んで居ると、並んで寝て居る祖母が、

「明日坊さんのおいでなさるのは八時半ですぞ」と云つた。

暫くした。すると眠つたと思つた祖母は又同じ事を云つた。彼は今度は返事をしなかつた。

「それ迄にすつかり支度をして置くのだから、今晩はもうねたらいゝでせう」

「わかつてます」

間もなく祖母は眠つて了つた。

どれだけか經つた。信太郎も眠くなつた。時計を見た。一時過ぎて居た。彼はランプを消して、寝返りをして、而して夜着の襟に顔を埋めた。

翌朝（明治四十一年正月十三日）信太郎は祖母の聲で眼を覺ました。

「六時過ぎましたぞ」驚かすまいと耳のわきで靜かに云つて居る。

「今起きます」と彼は答へた。

「直ぐですぞ」左う云つて祖母は部屋を出て行つた。彼は歸るやうに又眠つて了つた。

又、祖母の聲で眼が覺めた。

「直ぐ起きます」彼は氣安めに、唸りながら夜着から二の腕まで出して、のびをして見せた。

「此お寫眞にもお供へするのだから直ぐ起きてお呉れ」

「お寫眞」と云ふのは其部屋の床の間に掛けてある擦筆畫の肖像で、信太郎が中學の頃習つた畫學の教師に祖父の亡くなつた時描いて貰つたものである。

默つて居る彼を「さあ、直ぐ」と祖母は促した。

「大丈夫、直ぐ起きます。——向うへ行つてゝ下さい。直ぐ起きるから」左う云つて彼は今にも起きさうな様子をして見せた。

祖母は再び出て行つた。彼は又眠りに沈んで行つた。

「さあ／＼。どうしたんだつさ」今度は角のある聲だ。信太郎は折角沈んで行く、未だ其底に達しない所を急に呼び返される不愉快から腹を立てた。

「起きると云へば起きますよ」今度は彼も度胸を据ゑて起きると云ふ様子もしなかつた。

「本當に早くしてお呉れ。もうお膳も皆出てますぞ」

「わきへ來て、左うぐづ／＼云ふから、尚起きられなくなるんだ」

「あまのじやく！」祖母は怒つて出て行つた。

信太郎ももう眠くはなくなつた。起きてもいゝのだが餘り起きろ／＼と云はれたので實際起きにくゝなつて居た。彼はボンヤリと床の間の肖像を見ながら、それでもう起こしに來るか來るかといふ不安を感じて居た。起きてやらうかなと思ふ。然しもう少しと思ふ。もう少しかうして居て起こしに來なかつたら、それに免じて起きてやらう、左う思つてゐる。彼は大きな眼を開いて未だ横になつて居た。

いつも彼に負けない寝坊の信三が今日は早起きをして、隣の部屋で妹の芳子と騒いで居る。

「お手玉、南京玉、大玉、小玉」とそんな事を一緒に叫んで居る。而して一段聲を張り上げて、

「其内大きいのは芳子ちやんの眼玉」と一人が

云ふと二人が「信さんのあたま」と怒鳴つた。

二人は何遍も同じ事を繰返して居た。

又、祖母が入つて來た。信太郎は又起きられなくなつた。

「もう七時になりましたよ」祖母はこはい顔をして反つて丁寧に云つた。信太郎は七時の筈はないと思つた。彼は枕の下に滑り込んで居る懐中時計を出した。而して、

「未だ二十分ある」と云つた。

「どうしてかうやくざだか……」祖母は溜息をついた。

「一時にねて、六時半に起きれば五時間半だ。やくざでなくても五時間半ぢやあ眠いでせう」

「宵に何度ねろと云つても諾きもしないで……」

信太郎は默つて居た。

「直ぐお起き。おつつけ福吉町からも誰れか來るだらうし、坊さんももうお出でなさる頃だ」

祖母はこんな事を云ひながら自身の寢床をたたみ始めた。祖母は七十三だ。よせばいゝのにと信太郎は思つて居る。

祖母は腰の所に敷く羊の皮をたゝんでから、大きい敷蒲團をたゝまうとして息をはずませて居る。祖母は信太郎が起きて手傳ふだらうと思つて居る。所が信太郎は其手を食はずに故意に冷淡な顔をして横になつたまゝ見てゐた。とうとう祖母は怒り出した。

「不孝者」と云つた。

「年寄りの云ひなり放題になるのが孝行なら、そんな孝行は眞つ平だ」彼も負けずと云つた。

彼はもつと毒々しい事が云ひたかつたが、失敗つた。文句も長過ぎた。然し祖母をかつとさすにはそれで十二分だつた。祖母はたゝみかけを其處へはふり出すと、涙を拭きながら、烈しく唐紙をあけたてして出て行つた。

彼もむつとした。然しもう起こしに來まいと思ふと樂々と起きる氣になれた。

彼は毎朝のやうに自身の寢床をたゝみ出した。大夜着から中の夜着、それから小夜着をたたまうとする時、彼は不意に「えゝ」と思つて、今祖母が其處にはふつたやうに自分も其小夜着をはふつた。

彼は枕元に揃へてあつた着物に着かへた。

あしたから一つ旅行をしてやらうかしら、諏訪へ氷滑りに行つてやらうかしら。諏訪なら、此間三人學生が落ちて死んだ。祖母は新聞で聽いてゐる筈だから、自分が行つてる間少くも心配するだらう。

押入れの前で帶を〆ながらこんな事を考へて居ると、又祖母が入つて來た。祖母はなるべく此方を見ないやうにして亂雜にしてある夜具のまはりを廻つて默つて押入れを開けに來た。彼は少しどいてやつた。而して夜具の山に腰を下して足袋を穿いて居た。

祖母は押入れの中の用簞笥から小さい筆を二本出した。五六年前信太郎が伊香保から買つて來た自然木のやくざな筆である。

「これで如何だらう」祖母は今迄の事を忘れたやうな顔を故意として云つた。

「何にするんです」信太郎の方は故意と未だ少しむつとしてゐる。

「坊さんにお塔婆を書いて頂くのさ」

「駄目さ。そんな細いんで書けるもんですか。お父樣の方に立派なのがありますよ」

「お祖父さんのも洗つてあつたつけが、何處へ入つて了つたか……」左う云ひながら祖母は其細い筆を持つて部屋を出て行かうとした。

「そんなのを持つて行つたつて駄目ですよ」と彼は云つた。

「左うか」祖母は素直にもどつて來た。而して丁寧にそれを又元の所に仕舞つて出て行つた。

信太郎は急に可笑しくなつた。旅行もやめだ

と思つた。彼は笑ひながら、其處に苦茶々々にしてあつた小夜着を取上げてたゝんだ。敷蒲團も。それから祖母のもたゝんでゐると彼には可笑しい中に何んだか泣きたいやうな氣持が起つて來た。涙が自然に出て來た。物が見えなくなつた。それがポロ〳〵と頰へ落ちて來た。彼は見えない儘に押入れを開けて祖母のも自分のも無闇に押込んだ。間もなく涙は止まつた。彼は胸のすが〳〵しさを感じた。

　彼は部屋を出た。上の妹と二番目の妹の芳子とが隣の部屋の炬燵にあたつて居た。信三だけ炬燵櫓の上に突つ立つて威張つて居た。信三は彼を見ると急に首根を堅くして天井の一方を見上げて、

「銅像だ」と力んで見せた。上の妹が、

「左う云へば信三は頭が大きいから本當に西郷さんのやうだわ」と云つた。信三は得意になつて、

「偉いな」と肩を張つて髭をひねる眞似をした。和いだ　然し少し淋しい笑顔をして立つて居た信太郎が、

「西郷隆盛に髭はないよ」と云つた。妹二人が、「わーい」とはやした。信三は「しまつた！」といやにませた口をきいて、櫓を飛び下りると、いきなり一つでんぐり返しをして、おどけた顏を故意と皆の方へ向けて見せた。

（明治四十一年一月）

網走まで

宇都宮の友に、「日光の歸途には是非お邪魔する」と云つてやつたら、「誘つて呉れ、僕も行くから」と云ふ返事を受取つた。

それは八月も酷く暑い時分の事で、自分は特に午後四時二十分の汽車を選んで、兎も角その友の所まで行く事にした。汽車は青森行である。自分が上野へ着いた時には、もう大勢の人が改札口へ集まつて居た。自分も直ぐ其仲間へ入つて立つた。

鈴が鳴つて、改札口が開かれた。人々は一度にどよめき立つた。鋏の音が繁く聽え出す。改札口の手摺へつかへた手荷物を口を歪めて引つぱる人や、本流から食み出して無理に復、還らうとする人や、それを入れまいとする人や、いつもの通りの混雜である。巡査が厭な眼つきで改札人の背後から客の一人々々を見て居る。此處を辛うじて出た人々はプラットフォームを小走りに急いで驛夫等の「先が空いてます、先が空いてます」と叫ぶのも聞かずに、吾れ先きと手近な列車に入りたがる。自分は一番先の車客に乘るつもりで急いだ。

先の客車は案の定、すいてゐた。自分は一番先きの車の一番後ろの一ト間に入つた。後方の客車に乘れなかつた連中が追々此處までも押寄せて來た。それでも七分しか入つて居ない。發車の時がせまつた。遠く近く戸をたてる音、そのおさへ金を掛ける音などが聞える。自分の居る間の戸を今閉めようとした帽に赤い筋を卷いた驛員が手を擧げて、

「此方へいらつしやい。こちらへ」と戸を開けて待つて居る。所へ、二十六七の色の白い、髮の毛の少ない女の人が、一人をおぶひ、一人は手を曳いて入つて來た。汽車は直ぐ出た。

女の人は西日のさす自分とは反對の側の窓の傍に席を取つた。又其處しか空いて居なかつたので。

「母さん、どいとくれよ」と七つ許りの男の子が眉の間にしわを寄せていふ。

「こゝは暑ござんすよ」と母は背の赤子を下ろしながら靜かに云つた。

「暑くたつていゝよ」

「日のあたる所へ居ると、又おつむが痛みますよ」

「いゝつたら」と子供は恐ろしい顏をして母をにらんだ。

「瀧さん」と靜かに顏を寄せて、「これからね、遠い所まで行くんですからね 若し途中で、お前さんのおつむでも痛み出すと、母さんは本當に泣きたい位困るんですからね。ね、いゝ兒だから母さんの云ふ事を聞いて頂戴。それにね、いまに日のあたらない方の窓が空くから、さうしたら直ぐいらつしやい。ね？ 解りまして？」

「頭なんか痛くなりや仕ないつたら」と子供は尙ケン／＼しく云ひ張つた。母は悲しさうな顏をした。

「困るのねえ」

自分は突然、

「此處へおいでなさい」と窓の所を一尺許りあけて、「此處なら日が當りませんよ」と云つた。

男の子は厭な眼で自分を見た。顏色の惡い、頭の鉢の開いた、妙な子だと思つた。自分はいやな氣持がした。子供は耳と鼻とに綿をつめて居た。

「まあ、どうも恐れ入ります」女の人は悲しい

顔に笑を浮べて、「瀧さん、御禮を云つて、あそこを拜借なさい」と子の背に手をやつて此方へ押すやうにする。

「いらつしやい」自分は男の子の手を取つて自分の傍に坐らせた。男の子は妙な眼つきで時々自分の顔を見て居たが、少時して漸く外の景色に見入つた。

「なるたけ、其方ばかり見て居たまへよ、石炭殻が眼に入るから」

こんな事をいつても男の子は返事も仕ない。やがて浦和に來た。此處で自分と向ひ合つた二人が降りたので、女の人は荷と一緒に其處へ移つた。荷といつた所で女持の信玄袋と風呂敷包が一つだけだ。

「さ、瀧さん、こちらへ御いでなさい。どうもありがたう御座いました」女の人は左う云つてお辭儀をした。動いたので今までよく眠つて居た赤子が眼を覺して泣出した。母は

「よし／＼」と膝の上でゆすりながら「チ、カ、チ、カ」とあやすやうに云ふが、赤子は踏反りかへつて益々泣く。「おゝよし／＼」と同じやうな事をして、「今度はうまゝ上げよう」と片手で信玄袋から「闇の露」を一つ出してやる。それでも赤子は泣きやまぬ。わきからは、

「母さん、あたいには」と左も不平らしい顔をして云ふ。

「自分で出して、おあがんなさい」といつて母は胸を開けて乳首を含ませ、帶の間から薄よごれた絹のハンケチを出して自分の咽の所へ挾んでたらし、開いた胸を隱した。

男の子は信玄袋の中へ手を入れて探つて居たが、

「うゝん、これぢやないの」と首を振る。

「それでないつて、どんなの？」

「玉の」

「玉のはない。あれは持つて來なかつたの」

「いやだあー、玉のでなくちや、いや」と鼻聲を出す。

「其下にドロップが入つてますから、それをおあがんなさい。ね、いゝ兒、ドロップでもおいしいのよ」

男の子は不承々々うなづく。母は又片手でそれを出して子の手へ四粒許りそれをのせた。

「もつと」と男の子が云ふ。母は更に二粒足した。

乳に厭きた赤子は、母の髮から落ちたバラフの櫛をいぢつて、仕舞にそれを口へ入れようとする。

「いけません」と母が其小さな手を支へると、赤子は口を開いて、顔を其方へもつて行く。下の齒ぐきに小さく白い齒が二つ見えた。

「さ、うま／＼」膝の上へ落ちた「闇の露」を顔の前へ出すと、あー／＼と云つて居た赤子は眼を寄せて暫く見つめて居たが、櫛を放してそれを取る。そして握り拳のまゝ口へ入れようとする。其口元からタラ／＼と涎水がたれた。

女の人は赤子を少し寢せ加減にして、股の間へ手をやつて見た。濡れて居たらしかつた。

「おむつを更へませうね」から獨言のやうに云つて更に男の子に

「瀧さん、少しそこを貸して頂戴、赤ちやんのおむつを更へるんですから」

「いやだなア——母アさんは」と男の子はいやいや起つ。

「此處へお掛けなさい」と自分は再び前に掛けさせた場所を開けてやつた。

「恐れ入ります、どうも氣むづかしくて困ります」女の人は淋しく笑つた。

「耳や、鼻のお惡いせゐもあるでせう」

「御免遊ばせ」と女の人は後を向いて包から乾いたおしめと濡れたのを包む油紙とを出し

ながら、
「それもたしかに御座います」といふ。
「何時頃からお惡いんですか」
「是のは生れつきで御座いますの。お醫者樣は是の父が餘り大酒をするからだと仰有いますが、鼻や耳は兎も角つむりの惡いのはそんな事ではないかと存じます」
腰掛に仰向けに轉がされた赤子は的もなく何か見詰めて、手を動かして、あー〳〵と聲を出してゐた。間もなくおしめを更へ濡れたのを始末して母は赤子を抱上げると、
「ありがたう御座いました……サア瀧さん、此方へいらつしやい」と云つた。
「かまひません、此處へおいでなさい」と云つたが、男の子は默つて立つて向う側へ腰かけると直ぐ窓へよりかゝつて外をながめ始めた。
「まあ、失禮な」女の人は氣の毒さうに詫を云つた。
少時して自分は
「どちら迄おいでですか」と訊いた。
「北海道で御座います。網走とか申す所ださうで、大變遠くて不便な所ださうですの」
「何の國になつてますかしら?」
「北見だとか申しました」
「そりやあ大變だ。五日はどうしても、かゝりませう」
「通して參りましても、一週間かゝるさうで御座います」
汽車は今、間々田の停車場を出た。近くの森から蜩の聲が追ひかけるやうに聞える。日は入つた。西側の窓際に居た人々は日除け窓を開けた。涼しい風が入る。今しがた、母に抱かれたまゝ眠入つた赤子の一寸許りに延びた生毛が風にをのゝいて居る。赤子の輕く開いた口のあたりを蠅が二三疋うるさく飛びまはる。母はぢツと何か考へて居たが、時々手のハンケチで蠅をはらつた。少時して女の人は荷を片寄せ、其處へ赤子を寢かすと、信玄袋から端書を二三枚と鉛筆を出して書き始めた。けれども筆は却々進まなかつた。
「母アさん」景色にも厭きて來た男の子は、ねむさうな眼をして云つた。
「なあに?」
「まだ却々?」
「えゝ、却々ですからね、おねむになつたら母アさんに倚りかゝつて、ねんねなさいよ」
「ねむかない」
「左う、ぢや、何か繪本でも御覽なさいな」
男の子は默つて首肯いた。母は包の中から四五冊の繪本を出してやつた。中に古いパックなどが有つた。男の子は柔順しく、それらの繪本を一つ〳〵見始めた。其時自分は、後ろへ倚りかゝつて、下目使ひをして本を見て居る男の子の眼と、矢張り伏目をして端書を書いて居る母の眼とが、そつくりだといふ事に心附いた。
自分は兩親に伴はれた子を──例へば電車で向ひ合つた場合などに見る時、よくもこれらの何の類似もない男と女との外面に顯れた個性が小さな一人の顏なり身體つきなりの內に、しつとりと調和され、一つになつて居るものだと云ふ事に驚かされる。最初、母と子とを見較べて、よく似て居ると思ふ。次に、父と子とを見較べて矢張り似て居ると思ふ。左うして、最後に、父と母とを見較べて全く類似のないのを何となく不思議に思ふ事がある。
今、此事を想ひ出して、自分は此母に生れた此子から、その父を想像せずに居られなかつた。さうして其人の今の運命までも想像せずに居られない。
自分は妙な聯想から此女の人の夫の顏や樣子を直ぐ想ひ浮べる事が出來た。自分が元ゐた學校に、級はそれ程違はなかつたが年はたしか

に五つ六つ上で、曲木といふ公卿華族があつた。
自分は其男を想ひ出した。彼は大酒家であつた。大酒をしてはいつも、大きな事を云つて居た。鷲鼻の青い顔をした、大柄な男で、勉強は少しもしなかつた。二三度續けて落第して、たうとう自分で退學して了つたが、日露戰爭後、上州製麻株式會社とかいふものの社長として、何かの新聞で其名を見たぎり、今はどうして居るか更に消息を聞かない。
自分は不圖、此男を想ひ浮べて、あんな男ではないかしらと思つた。然し彼は大言壯語をするだけで別に氣六ケしいといふ男ではなかつた。何處か快活で、ヘウキンな所さへあつた。尤も、そんな性質はあてにならぬ事が多い。如何に快活な男でも度々の失敗に會へば氣六ケしくもなる。陰氣にもなる。きたない家の中で弱い妻へ當り散らして、幾らか憂ひをはらすと云ふやうな人間にもなる。
此の子の父はそんな人ではないだらうか。
女の人は古いながらも縮緬の單衣に御納戸色をした帶をメて居る。自分には、それらから、女の人の結婚以前や、其當時の華やかな姿を思ひ浮べる事が出來る。更に其後の苦勞をさへ考へる事が出來た。

•

汽車は小山を過ぎ、小金井を過ぎ、石橋を過ぎて進んだ。窓の外は漸く暗くなつて來た。
女の人が二枚端書を書き終つた時、男の子が、
「母アさん、小便」と云ひ出した。此客車には便所が附いてない。
「もう少し我慢出來ませんか？」母は當惑して訊いた。男の子は眉根を寄せてうなづく。
女の人は、男の子を抱くやうにして、あたりを見廻したが別に考へもない。
「もう少し、待つてネ・・」切りとなだめるが、男の子は身體をゆすつて、もらしさうだといふ。
間もなく、汽車は雀の宮に着いたが、車掌に訊くと、其間はないから此次になさい、といふ。
此次は宇都宮で八分の停車をする。
宇都宮まで、どんなに母は困らされたらう。其内に眠つて居た赤子も眼を醒ました。母はそれへ乳首を含ませながら、只、
「もう直ですよ」といふ言葉を繰返して居た。
此母は、今の夫に、いぢめられ盡して死ぬか、若し生き殘つたにしても此兒に何時か殺されずには居まいと云ふやうな考へも起る。
やがて、ゴーウと音をたてゝ、汽車はプラットフォームに添うて停車場へ入つた。未だ停らぬ内から、
「早く〱」と男の子は前こごみに下腹をおさへるやうにしていふ。
「さあ、行きませう」母は膝の赤子を腰掛けに下ろし、顏を寄せて、「柔順しく待つてて頂戴よ」といひ、更に自分に、「恐れ入ります、一寸見てて頂きます」
「よう御座います」と自分は快く云つた。
汽車は停つた。自分は直ぐ扉を開けた。男の子は下りた。
「君ちやん、柔順しくしてるんですよ」と其處を離れようとする、背後から、手を延べて赤子は火のついたやうに泣き出した。
「困るわねえ」母は一寸ためらつたが、包から、スル〱と細い、博多の子供帶を出すと、赤子の兩の腋の下を通して、直ぐ背負はうとしたが、袂から木綿のハンケチを出して自身の襟首へかけ、手早く結ひつけおんぶにして、プラットフォームへ下り立つた。自分も後から下りて、
「おやあ、私は此處で下りますから」といつた。
女の人は驚いたやうに、
「まあ、さうで御座いますか・・・」と云つた。さうして、

「色々、ありがたう御座いました」と女の人は丁寧にお辭儀をした。
人ごみの中を竝んで歩き出した時、
「恐れいりますが、どうか此端書を」かういつて懷から出さうとするが、博多の帶が胸で十文字になつて居るので、却々出せない。女の人は一寸立止つた。
「母アさん、何してんの」と男の子が振りかへつて小言らしく云つた。
「一寸、待つて……」女の人は頤を引いて、無理に胸をくつろげようとする。力を入れたので耳の根が、紅くなつた。其時、自分は襟首のハンケチが背負ふ拍子によれ〳〵になつて、一方の肩の所に挾まつて居るのを見たから、つい、默つてそれを直さうと其肩へ手を觸れた。女の人は驚いて顏を擧げた。
「ハンケチが、よれてゐますから……」から云ひながら自分も顏を赧らめた。
「恐れ入ります」女の人は自分がそれを直す間、ヂッとして居た。
自分が默つて肩から手を引いた時に、女の人は「恐れ入ります」と繰返した。
吾々は、プラットフォームで、名も聞かず、又聞かれもせずに、別れた。
自分は端書を持つたまゝ停車場の入口へ来た。其處に函のポストが掛つてあつた。自分は端書を讀んで見たいやうな氣がした。又讀んでも差支へないといふやうな氣もした。
自分は一寸迷つたが、函へよると、名宛を上にして、一枚づつそれを投げ入れた。入れると直ぐもう一度出して見たいといふやうな氣もした。何しろ投込む時ちらりと見た名宛は共に東京で、一つは女、一つは男名であつた。

（明治四十一年八月）

荒絹

昔々或る山に美しい一人の女神が住んで居た。女神は美の神で、戀の神で、さうして嫉みの神であつた。

晴れた日に此山の頂きを望み得る程の地方に住む若者は、戀人の出來た日に皆其戀の成就を此女神に願はぬ者はなかつた。戀は成就する。二人は女神に感謝する。然し間もなく二人は有頂天になる。二人は今は二人だけになる。二人はもう女神の恩惠を忘れて居る。此時に戀の神は嫉みの神に變る。思はぬ禍が不意に二人の上に落ちて來る。其戀は遂に悲劇に終る。かう云ふ例を幾度か見て居る老人等は悲し氣に頭を振つて溜息をつく。彼等は有頂天になつて行く二人を見る時に既に其悲しい終りをも見て居た。然し有頂天になつて行く若い二人をさゝへる力はもう老人等にはなかつた。老人等は斷崖へ急ぐ二人を見す〳〵に只腕を拱いて見てゐるより仕方なかつた。さうして斷崖から逆落としに落ちて行く二人を見ながらも、只悲し氣に頭を振るより仕方なかつた。

茲に此山の麓に阿陀仁と云ふ美しい一人の牧童が居た。毎朝阿陀仁は七八頭の牛を連れて山へ登つて來る。牛が草を食ふ間、阿陀仁も一緒に草を刈つた。牛が寢て、靜かに反芻をする時に阿陀仁は快く其處に晝寢をした。日が山の頂きに隱れる頃、牛は互に呼び交す。其聲に阿陀仁は眼を醒まして、刈つた草を或る牛の背に積み上げる。而して日の暮れきらぬ内に麓へ歸つて行く。

山には美しい花が多かつた。木の花も、草の花も。阿陀仁は左ういふ花を澤山につみ取つた。而してそれで美しい花束を幾つも作り、中で最も美しい一束を女神の祭壇に生けて、あとを麓の若い娘達に持つて行くのを例として居た。

三四年經つた。阿陀仁は段々に美しくなつた。山の女神はいつか此若者を戀するやうになつた。然し其時は既に若者にも一人の戀人が出來て居た。それは荒絹と云ふ機の名人で、年は阿陀仁より一つ二つ上で、山の女神にも劣らぬ程美しい娘であつた。

阿陀仁が荒絹を戀するやうになつてからは朝の内だけは草を刈り、花を摘みなどしてゐても、晝過ぎるといそ〳〵と牛を追ひ〳〵麓へ下つて行くやうになつた。それまでは摘んだ花の一番美しい一束を毎時女神へ捧げて行つたのが、今は一番美しい一束を別にして、次の一束を捧げて行くやうになつた。

女神の心は樂しまなかつた。さうして女神は或る日、使つて居る岩頭と云ふ山男　此山男はかなりの年をした惡戲者で、夜になるとよく麓の村々をあさり歩き、羊や鷄や、或時は魚の肉などを盜み、又或時は酒をも盜んで來るのを仕事のやうにしてゐる奴であつた。―女神は此山男から阿陀仁と荒絹との戀を聞いた。左うして荒絹の伯父にあたる年老いた隱者の入智慧で此戀は最初から絕對に女神には秘めて居ると云ふ事を聞いた。其上今荒絹は一心を凝らして美しい〳〵一帳のとばりを織つて居ると云ふ事、そのとばりの中に阿陀仁と二人入る爲め、その美しいとばりに包まれた二人は世の如何なる美しい物にも再び眼をまどはされる事のない爲めに、今荒絹は一心にそれを織つて居ると云ふ事を聞いた。女神には强い嫉み

の心が起つた。
女神は荒絹の織つてゐる其美しいとばりと云ふのを見たいと思つた。或晩、それは月のいい晩であつた。女神は岩頭の案内で、初めて山を降りて往つた。
夜は更けて居た。森々ではふくろふが啼いて居た。村の家々では皆灯を消してもう寢靜まつて居た。只一軒、彼方に窓一ぱいにあか／＼と灯の映つてゐる家があつた。それが荒絹の家である。
女神は岩頭を其處に殘して一人靜かに進んで行つた。近よるにつれ、女神は美しい唄の聲を聞いた。機のトン／＼と云ふ響がそれに伴奏してゐた。魅するやうな調子で戀の切ない心を唄つて居る。女神は暫くそれに聽惚れた。然し女神の心は一層强い嫉妬に燃えて來た。
女神は跫音を忍ばせて窓の下に近よつた。左うしてそつと隙間から中を覗いて見た。女神は先づ機から流れ出て、床を敷き、更に向うの壁へ其端をかけられた、幅の廣い美しい／＼織物を見た。それにはあらゆる美しい花と美しい小鳥とで、少女の戀する心が織り込まれてあつた。
女神は次に夢見るやうな、うつとりとした眼の美しい少女の姿を見た。豐かな頰、張切つた胸、丸味を持つた長い指、其若々しさには女神の美も到底及ばないやうに思はれた。
女神は最後にその邊、床一ぱいに撒き散らされた山の美しい花々を見た。
女神の心は二重三重の嫉妬に燃えた。女神はこんな美しい少女を初めて見た。こんな美しい織物を初めて見た。而して阿陀仁との戀。女神は若し此美しいとばりが完成すれば、もうどんな事をしてもあの牧童を再び此少女から引き離す事は出來ないと考へた。而して女神はどうにかして此とばりを完成させぬやうにせねばならぬと決心した。
何事も知らない荒絹は夜となく日となく、心に戀の燃え立つ時、直ぐ機に坐つた。とばりはもう三分の二以上出來て居た。あと三分の一、それが出來上つた日に伯父の隱者は阿陀仁と自分をめあはせて呉れる。それを想ふと荒絹の心は何時も燃え立たずには居なかつた。
阿陀仁は毎日山からの最も美しい一束の花を窓から投込んで往つて呉れる。然し隱者の言葉でとばりが完成する迄は一ト言でも二人は話しする事を禁じられて居た。阿陀仁にはとばりを隙見するさへ禁じられて居た。
或夜、もう村中寢靜まつた頃、荒絹は一人靜かに機を織つて居ると、不意にいやな寂しさに心を襲はれた。荒絹は機の手を止めて眼を閉ぢた。すると遙か／＼遠い所で何か唄つて居る男のしやがれ聲が聽えて來た。それはかすかで何を云つて居るかは解らなかつた。然し解らぬ儘に何んだかいやな氣持をさす節だつた。
それから毎夜其聲は聽えた。其聲は段々に近く聽えて來た。風の向きで時々其文句も聽えた。それは呪ひの不吉な文句だつた。其とばりを織る事を今止めなければ必ず不吉な事が其身に起るぞ、と云ふやうな意味だつた。
呪ひの唄は夜毎に近づくやうに思はれた。身の程もわきまへず、その樣なとばりを織り續けるなら、お前はいまに蜘蛛になる。そんな意味を唄つて居る。
荒絹は段々に苦しくなつて來た。
荒絹はそれが女神の妬みからである事を悟つた。然し荒絹はそれを伯父にも阿陀仁にも打明けようとは思はなかつた。若し伯父に打明ければ伯父は機を織る事をとめるだらう。阿陀仁に打明けてもそれは同じであらう。而して阿陀仁は機を止めて直ぐ結婚しようと云ふに違ひないと思つた。然し荒絹には此とばりな

しの結婚では何時阿陀仁を山の女神に奪ひ取られるか知れないと云ふ不安があつた。荒絹はどうしても誰にも打明けずに此とばりを完成させねば置かぬと決心した。

荒絹は兩方の耳の穴に絲くづを堅く〳〵詰め込んだ。荒絹は殆んど聾者と變りなくなつた。然し一度其耳の底に浸み込んだ不愉快な呪ひの節は耳の中で勝手に何其唄を續けた。或時は意識せずに荒絹自身口の中で其いやに〳〵思つて居る唄を唄つて居る事さへあつた。

荒絹の身體も精神も段々に衰へて來た。然し荒絹は一日も機を織る事を止めなかつた。荒絹には阿陀仁に對する堪へ性のない戀しい心が發作的に起る事が多くなつた。然し荒絹はそれをヂッと堪へた。而して其苦しい心の儘にとばりの完成を急いだ。荒絹は苦しい戀を紫色の花に織り込むやうになつた。

呪の唄は夜毎に烈しくなつて行つた。紫色の花は段々黒味がかつて來た。此頃から荒絹の樣子が少しづつ狂はしくなつて行つた。而して今は毎日々々黒い花ばかりを織り込んで居た。小鳥の色も黒かつた。華やかだつたとばりは見るかげもない物に變つて行つた。それは丁度美しい布れが半分溝泥につかつたやうに見えた。

荒絹にはあせる心はあつても機を織る氣力がなくなつた。夕方になると、よくをさを兩手に持つてぼんやりと軒下に立つて空を見上げて居るやうな事が多くなつた。然し阿陀仁は一度も荒絹の左う云ふ姿を見なかつた。而して毎日山を下ると直ぐ美しい花束の一つを窓から投げ込んでは歸つて行く。美しい花束は徒らに溜るばかりであつた。

やがて二タ月程經つた。餘りにとばりの出來上る事の遲いのを阿陀仁は不思議に思つた。阿陀仁は隱者を訪ねて、見に行く事を頼んだ。隱者も半年餘りして未だ出來ないのは少し長過ぎると考へた。

隱者は中へ入つて見て驚いた。其處には荒絹の姿は見えなかつた。而して部屋の中は蜘蛛の巣で一杯になつて居た。しかも美しいとばりは途中から段々にきたない色に變つて行つて仕舞は全く泥につかつたやうなひどい色に織出されてあつた。

窓の隙間から細い絲が戸外へつながつて居た。隱者はそれを頼りに出て見ると何處までも何處までもそれは續いて、段々に山の方へ延びて行つた。隱者はついて山へ登つた。而して女神の社まで來ると、其處にむしり取られたやうな荒絹の着物の切れ端が落ちて居るのを見た。絲は更に山の裏側へ延びて行つた。山の裏側は北向きの日もあたらねば、花も咲かず、小鳥も啼かぬ荒涼たる景色をした處だつた。隱者は岩角や木の根につかまりながら中腹まで下りて來た。而して其處に一つの大きな洞穴を發見した。而して絲の續きはその洞穴へ入つて居た。

隱者は其洞穴の薄暗い奥に荒絹が恐ろしい眼をして此方を見て居るのを見た。荒絹の前には穴一杯の大きさに大きい蜘蛛の巣が張つてあつた。荒絹は未だ何かを織らうとするかのやうに、もう絲のなくなつたをさを持つて其手を兩方に廣げて居た。ギロリと大きく見開いた眼、疲れ衰へて妙に細長く見える手足、薄よごれた皮膚の色、荒絹はもう蜘蛛のやうに見えて居た。

（明治四十一年十二月）

濁つた頭

（自分はいつも餘り物を云はない津田君の今晩の調子に驚かされた。而して二年間も瘋狂院で絶えず襲はれて居たと云ふ此人の恐しい夢を其コケた頬やウルんだ落着のない眼から想像して、濟まぬながら、一種の好奇心も持つたけれど、未だ常人とは行かぬ人を興奮させる恐れから、なるべく其話から遠のからとした。然し津田君は單刀直入に聞いて異れと云つて語り出した。）

一

私も弱い人間です、もうこんな體になつたら、そんな事は如何でもよささうなものですが、それでも矢張り自分を何かの意味でジヤスティファイ仕ようと云ふ氣はあります。この儘衰へて死ぬにした所で、親類や友達や、殊に自家の者等の見てゐる私で終つて了ふんぢや、浮びきれません。

或る時代、私も小説家にならうと思つた事があつて、二ツ三ツつまらぬ物を作つた事もありますから、自分の事も小説のやうに書いて見たいとは思ふんです、然し駄目です。迚もそんな根氣はありません。貴方のやうな方に聽いて頂けるといふのが今に望み得る最上です。

貴方のやうな清淨な人――妙な形容ですが私のやうな人間からは左うきり云へません――清淨な貴方が私のやうな人間に親しくして下さるのは私にどれだけ嬉しい事かお解りになりますか。貴方の此宿屋へ來られた翌晩の事は貴方もよく知つてゐられる筈です。あんな醜態を演じた私を許して下さつた貴方に自分の事を御話しするのはどんな喜びかお解りになりますか。

（津田君の云ふ「貴方の此宿に來られた翌晩の事」と云ふのは最後に附記として簡單に書く。）

私は十七歳の時から丁度七年間溫順な基督信徒だつたのです。

盜む勿れ、殺す勿れ、いつはりのあかしをたつる勿れ、から云ふ種々の禁制がありますが、平和な家庭に育つた私の身には、かういふ掟の大概のものは殆ど何の矛盾も起しませんでした。然し只一つ姦淫する勿れ、この掟だけにはいつもいつも私の陽氣な心も苦しめられました。

基督教に接する迄は私は精神的にも肉體的にも延び延びとした子供でした。運動事が好きで、ベイスボール、テニス、ボート、機械體操、ラックロース、何でも仕ました。水泳では鎌倉と江の島の間を泳いだ事もあります。學校の放課後も雨さへ降らなければ夕方迄は屹度運動場で何かして居ました。

此時分は誰も延びる盛りですから年々夏になると單衣は皆アゲを下さねば着られないので、母が笑ひながらよく愚痴をこぼしたものです。

然し學問の方はそれだけに怠けて居ました。夕方歸つて來ると腹が空ききつて居ますから、六杯でも七杯でも食ふ。で、部屋へ入ればもう何をする元氣もない、型ばかりに机には向つても直ぐ眠つて了ふと云ふ有樣です。これが當時の日々の生活でした。

それが基督教に接して以來、マルデ變つて了ひました。

基督教を信ずるやうになつた動機と云へば、

極く簡單です。自家の書生の一人が大學傳道という運動のあつた時に洗禮を受けたからで、これが動機の總てでしたらう。

然しそれからの私の日常生活は變つて來ました。運動事は總てやめて了ひました。大した理由もありませんが、左ういふ事が如何にも無意味に思はれて來たのと、一方にはみんなと云ふものと、自分を區別したいやうな氣分も起つて來たからです。

私の往つて居た學校は一體に暢氣な氣風の所でしたが、それでも本郷通りを歩いてゐる高等學校生徒のキタナイ風姿を羨む一團があつて、異風會といふものを起した事がありました。私も入れられる事になつて最初の會へ出て見ましたが、其時の決議がかうです。髮の毛を分けてはならぬ。何分以上、カラーを出してはならぬ。學校の往復にはなるべく俥に乘らぬ事。かう云つた事です。私は其發起幹事といふ男に會つて退會させて貰ふといつたのです。校風改良といふやうな事も、今日の決議のやうな、總て外側から改革して行く求心的の改良法で出來る筈のものではない、中心に何ものかを注ぎ込んでそれから自然遠心的に改革さるべきものだ、これは其人の此會改良策の演說中にあつた句ですが私はそれをいつて、遂に脫會して了つたのです。これは今まで味はつた事のない誇りでした。得意でした。當時宗教によつて慰安されなければならぬやうないたいでも何もない私にはこれが宗教から與へられる唯一のありがたい物だつたのです。皆の仕てゐる事が益々馬鹿氣て見える。私は學校が濟むと直ぐ歸つて、色々な本を見るやうになりました。傳記、説教集、詩集、こんなものをカナリ讀みました。以前も讀書癖のないと云ふ方ではなかつたのですが、それは皆小說類で、眞面目な本は大嫌ひだつたのです。

暫くはそれでよかつたのです。然し間もなく苦痛が起つて來ました。性慾の壓迫です。

何しろいゝ身體をして、食ふ物と云へば肉類其他總て左う云ふ慾望の燃料のやうな物ですし、しかも運動事を廢して毎日一室にヂッとしてゐるのですもの。初めの一年程はそれでも小說類を全廢して居たからまだよかつたのですが二年目程からは又それに讀み耽けるやうになりました。

當時同じ教會へ行つてゐた文科大學の學生で、その時分から小說や戯曲を公けにしてゐた人ですが、それから私は色々と外國の新しい文學の話を聞いて、新しい小說を讀む事を覺えたのです。殊に肉慾的な事を書いた本を讀みましたが、それが私の宗教と大した矛盾も起さなかつたと云ふものは、其人から左ういふ作家の傳記とか批評とかを聞かされて、一途に尊敬を拂つてゐたからで、どんな事が書いてあつても、私はそれに立派な意味をつけて讀んで居ました。けれども、變な意味をつけても私がそれから受ける刺戟に變りはありません。寧ろ強い位です。

一方には左う云ふ刺戟を受け、他方には肉食から來る同じ刺戟を受け、而も肉體を使ふ運動事はやめて了ひ、しかも、考へとしてはそれを全然否定しないでは居られない私と云ふものは、何の事はないうつゝゝ攻めの拷問にあつて居るやうなものでした。行く所は如何しても獨りでする恥かしい行ひです。この爲にはどれだけ苦しんだでせう。ナイフを腿へ突きたてようとした事もありました。マッチを擦つて腿へのせた事も二三度ではありませんでした。

然し當時の私は宗教上の問題などには全く自信のない人間だつたのです。何しろ遊ぶ事以外、小說を讀む位で、何の得意もない身で、左う云ふ大きな問題をかれこれ云ふ資格はマル

デないと信じ切つてゐた時分ですから、只々教會で教へられる事を其儘に信じて何でも彼でも自分自身をそれへハメ込んで行かうと努力したのです。然し性慾の事ばかりはどうにも自由になりませんでした。

仕舞には自分は特別に強い肉慾を持つて生れた不具の人間ではないのかしらと思つても見ました。と云つて、だから仕方がないとは當時の私の頭には決して浮ばない考だつたのです。

教會の牧師さんは實にいゝ人でした。六十を少し越した、せいの低い、猪首の丸々と肥つた人です。表情には乏しい人ですが、聲は割に大きくて時々澄して冗談などを云ふ、極く穏かな人でした。

私は此牧師さんの下に、從順な、然しなまい、ぬるい信仰でズル〳〵と四五年間は毎日曜の説教に出席して居ました。其間絶えず今云つた矛盾はあつたのですが、積極的に思ひ切つた解釈を加へる事も遂に出來なかつたのです。

二

只こんな事がありました。

或日、牧師さんが、姦淫の罪悪だと云ふ事を本當に強く云ひ出したのは基督教だけだと云つて、姦淫罪は殺人罪と同程度に重いものだと切りに説いた事がありました。

それはいやしい行をやめられない私には、「お前は人殺しの罪人だぞ」といはれてゐる事になるのです。私は自分のいやしい行を罪悪だとは思ひますが、殺人罪と同程度のものだとはどうしても考へられなかつたのです。吾々の様ないゝ身體をした青年を集めて平氣で左ういふ事を説かれる牧師さんを恨みました。現在姦淫罪を犯す妻のない、奥様のある牧師さんを恨みました。年の若い美しい奥様は天使だ。此天使によつて牧師さんは殺人罪に等しい罪悪から僅に救はれてゐるのぢやないか？ 全體姦淫とは何だ？

性慾を滿足させる同じやうな行で、姦淫になる場合と、ならぬ場合と其處にはどれ程の界があるのだ？ 詮ずれば結婚といふ形式以上何にもありはしないぢやないか。

こんな事を思つて二三日して私は此問題を「關子と眞造」といふ小説に作りました。

これらは當時、教に對する出來得るかぎりの反抗だつたのです。

その筋は、關子と眞造といふ從姉弟が關子の繼母に其間を疑はれる事によつて仕舞には事實左うなつて行く〳〵と云ふので、關子の父は軍人で、男女の關係などには、非常に嚴格な考へを持つた所謂道徳家で、其以前五つになる眞造が泊りに來た時に七つになる關子と一緒に寢せる事にすら小言を云つたと云ふ人なのです。

此道徳家は都合三度妻を持つたが、何れも兩親のお眼鏡に從つたので、第一の妻は母との折合が悪い爲に別れろと云はれて出して仕舞ひ、第二の妻――これが關子の生母ですが、體質が弱く貧血から肺病になつて死に、第三番目に今の人が來た。これは非常に身體がいゝ強い肉慾を持つた女で、關子の父は初めて好配偶を得た理です。

關子の生母の貧血と云ふやうな事もつまりは…………になつたと云ふ心算で左うしたのですが、かういふ…………は如何いふ場合も罪悪にはならず、結婚の式を取つてゐない…………はどれ程互に愛情を持つてゐても、罪悪――殺人罪に等しい罪悪になるといふのは何故だらうと云ふつもりなのです。道徳家なる父は或る間其操を自分のものとしてゐた、罪もない妻を、母の異議だけの理由で直に出して仕舞ひ、次の妻は殆ど…………として殺しながら、尚男女間の事には清廉な道

徳家であつて、心から相愛するやうになつた、若い二人の戀が未だ‥すらない内に既に猥らな事として道徳家から迫害される。迫害されゝばされる程倘二人は近よつて來る、遂には反つて皆の疑つてゐたやうな關係に事實なつて行く。大體かういふ事を書いたものです。若し今見たら、下らない觀念でせうが、當時の私には我ながら氣味の惡い謀叛だつたのです。

又こんな事もありました。正月の事でした。或る夕方から牧師さんの私宅に集まる會がありまして、其會の例で、食事の前、順に三分以内の感話をやるのですが、私はさういふ事は最も下手でしたから、會はいゝが、それが苦勞で氣の進まぬ事がよくありました。此日も進まぬながら四時頃から家を出ました。

何にも云ふ事がありません、私はさらはずに試驗場へ出る時のやうな一種寂しい氣をしながら電車の中で何をいはうかと考へ考へ行きました。

氣持の惡い風の吹く日で窓はすつかり閉めてあります。硝子を透す冬の夕日は車内を丁度斜かひにしきつて射し込んでゐる。日光の射す側には無數のホコリの漂ふのが見える。すると、其側の人達は皆それを氣にして、ハンケチか袖で口や鼻を被うてゐます。私はそれに向きあつた光の射さぬ方にゐたのです。で、其時私は、ホコリが同じ密度で自分の眼や口や鼻のまはりに飛んでゐる事を知つてゐて、それで全く氣にならないのを面白く思ひました。見ると此方側の人達は皆平氣でゐる。更に向う側の連中を見ると、滑稽な位にホコリを氣にしてゐる。

どうせ、ホコリの中にゐるのなら、知らずに平氣でゐる人の方が、幾ら幸福か知れないと思ひました。私はこれを感話の材料にしました。

日光をあびてゐる人々は教に接した人で總て汚れた物を明らかに見る事が出來る樣になつてゐて、何左う云ふ空氣から出る事が出來ずに、口にハンケチを當てたり袖を當てたりして、吸ふまいとアセる、その如何にも餘裕のない態度が、私には誠に賤しく見えた事を話して、其位なら寧ろそれらを知らずにユックリと日かげにゐる人の方が幾らいゝか知れない。とかう云ひました。が、矢張り意氣地がなかつたのです。だから、吾々は、教を信ずると云ひながら不信者と同じやうな生活をしてゐるから不可いので例へば、それを見る眼が開いてゐながら、ホコリの滿ちた電車にゐるから不可いのだ。見えたらそんな場所からは直ぐ出て仕舞はなければならぬ筈である。こんな風に仕舞を誤魔化したのです。

歸途或る人が寄つて來て、君の感話は面白い例へだと思つたが、自分の考へにすれば、假令其人が其電車から出る事は出來ないにしても、ホコリの見える事、それが既にカナリの惠みだと僕は思ふ。なぜなら知つてゐれば、それだけでも、マルデ知らない人から見れば、遙にホコリは吸はずに濟むからね、と、こんな事を云ひます。

そんな事を云つたらキリがない、と思ひました。が、其人は一錢でも一厘でも徳をしたいと願ふ人のやうな、いやしい表情をしてゐました。

此時分は兎も角、前に云つた小說を書くとか、こんな感話をするとか、内にはカナリ反抗的な考へもキザシてゐたのですが、今思へば、それが飼犬が主人に尾を踏まれた時、ギャッと鳴いて顏をしかめる、その程度の反抗で、それ以上主人に立ち向ふ勇氣のないのは勿論、コイ〳〵と手を出されゝば心ならずも、尾を振り、腹を地にすつて這ひよる、その位のものでしたらう。

三

當時、お夏と云ふ母方の親類で私からは四つ年上で、十八から二十五まで七年間或る家へ嫁に行つてゐたのが、夫に死なれて、一人も子のない所から、再び實家へ歸つて再緣の口を探してゐる內、丁度私の家で人手の足らぬ時だつたので、遊び旁々手傳に來てゐた女がありました。

器量のいゝといふ女ではありませんでしたが、色の淺黑い、からだの大きい、肉つきのよい、血の氣の多さうな、快活な女でした。廿六ですが、子を持つた事のない爲か、氣の若々しい、又勝氣な所もある女で、死んだ夫の意氣地なしだつた事を平氣で人に話すやうな女でした。

私は一體此女を好みませんでした。けれども、相應に敎育もあつて、殊に文學といふやうな事も幾らかは解る方でしたから、嫌ひながら、よく話はしました。

「淸松さんの書いた何かあるんでせう？」と云つた事があります。

「あるよ」

「見せて頂戴。何？　小說ですか—

「小說だけど、キタナク書いてあるから迚も讀めやしないよ。讀んでやらうか？」

「讀んで頂戴。—何時？」

「今晩でもいゝ」

「おや、用を仕舞つたら行きますよ」

其晩、私は二階の書齋で「闇子と眞造」を出して待つてゐると、十時頃になつてお夏は登つて來ました。「おそくなりました」と笑ひながら寄つて來て、机の橫にペッタリと何だか甘つたれるやうなしなをして坐ります。

湯から上りたてで、ポーッと上氣した所へ薄く化粧したのが、私にはいつになく美しく見えました。

「餘り晩いから、寢ようかと思つてたんだ」

「お氣の毒樣—未だ床が敷いてありませんネ。ぢやア、直ぐおよれるやうにしといて上げませう」

お夏は次の間の押入から私の夜具を出して其處へ敷いてくれました。

「サ、これでいゝわ、どれ、原稿は」

かう云つて今度は私と並んで坐ります。妙にはしやいでゐると思つたが、何んとなく美しく思つた其晩の事で私も左してそれを不快には思はなかつたのです。

「綺麗に書いてあるぢや、ありませんか。これなら讀めてよ」

「讀めれば自分で讀むといゝや」私は其時、或る危險が近づきつゝあると云ふ漠然とした豫感から故意とから冷かに云ひました。

「いやですよ—讀んで頂戴。私もかうして一緖に字を見てゐるから」それが如何にも若々しい調子です。

秋の事で私は、フランネルに袷羽織をはおつてゐましたが、それを通して血の氣の多いお夏の身體の溫さを感ずるやうな氣がしました。

「さ、讀んで頂戴よ、—お白湯でも持つて來ませうか」

「いらない」と云ひましたが、

「マア、持つて來て置きませう」と間もなく湯呑に白湯をついで持つて來ました。

私は讀み初めました。

闇子の繼母と闇子の學校の敎員との會話から書き始めてあるので、事々しくいつて、相談をしかける繼母を慰めて敎員が切りに闇子を辯護し、若い男と女とが親しくするのを一途に妙な關係でもあるやうに疑ふのは惡からうと云つて、左うハタで疑つたりすると反つて後にはそんな關係などを生ずる事もあるもの

だからと云ふやうな說を立てると、繼母がそれに對し不平を起す事などがあつて、第二に其晩眞造——此子供は家が大阪で關子の家へ寄食して中學校へ通つてゐるのですが、ぐつすり寐込んでゐるし、關子は翌日學校へ出さねばならぬ裁縫で夜なべをしてゐる時、與一は妻が夫に教員との間の不平を散々並べて後、二人床へ入ると云ふやうな事が書いてあるのです。

當時の私の事にすれば、左う云ふ事を書いて一寸平氣では居惡く、何とかそれに云ひ譯をしないと氣が濟まなかつたのです。

「變な事が書いてあるけどネ—」から云つて顧みると、今までハシャイでゐたのが大變眞面目な顏をして、私の眼を見て默つて首肯きました。

「—から云ふ事を書かないと、云ひたい事が強くならないんだよ」私は左う斷つて、更に讀み續けました。

——

……………………………、……………………………

…………………。……………………。

……………………………。……………………………。

其夜獨りになつてからの私の心持は今思つても實に變なものでした。大罪を犯したと云ふ苛責の苦みもありましたが、實はそれ以上に神秘を識つたと云ふ驚愕を感じてゐたのでした。然し其時分の私としてそんな事は詳に意識的に考へられる事ではなかつたのです。只々大變な罪を犯した、といふ後悔の念が其時の全心理を支配してゐるもののやうに感じてゐたのです。

で、此行の唯一の逃げ道は、愛情に依つて二人は左う云ふ事をしたのだといふ事です。それなら關子と眞造に書いた自分の考へから許さるべき行になるけれども、自分がお夏を愛してゐたと考へるのは我ながら空々しいやうな氣もするのです。然し少くとも其晩はお夏を美しいと思つて、或る程度の愛情は有つてゐたとも考へて見ました。

四

其晩は四時を聞いて漸く眠りましたが、二時間程したら眼が覺めて仕舞ひました。知らぬ間に書生が雨戶を開けて行つて、朝日が部屋一ぱいに射し込んでゐる。いつもいつものやうな穏かな朝です。私は前夜の事が、恐しい一夜の夢で——と左う思ひきらない内にもう、それを否定する考へが湧いて來ますが、然しそれでも能、ウッといふやうな心持もしないではありません。

が、思ひ切つて起き上つた時に其處に落ちてゐた、……………………、……………………………

……………………………。

[illegible]を机の抽斗に仕舞つて部屋を出ました。然しお夏が居るだらうと思ふ茶の間へは行く氣になれないので直ぐ庭へ出ました。[illegible]庭と云ふ作りの、木の繁つた、千坪餘りの庭は人に姿を見られたくないかう云ふ場合は最いゝ隱れ場所でした。未だ蟬が鳴いてゐます。私は黃色い櫻の葉の散り敷いた中を歩きながら考へました。考へれば、どうしても前夜の事は矢張り罪だと云ふ氣がしてなりません。何故なら私は前夜も今朝も、いつも必ずする祈りを仕ませんでした。それが口では何と理窟をつけようと、自らそれの罪だつた事を認めてゐる證據ではあるまいか。

青桐で百舌がけたゝましく鳴きました。私は全く一人秋の中に取り殘されたやうな孤獨を感じました。私は何を考へるともなし暫く木立の中をブラ／＼と歩いた後、盆栽へかける水を入れた大きな瓶の處へ來ました。水は澄

切つてゐます。小さな錦魚や緋鯉が私の影に驚いて底の方を忙しく泳いでゐます。ぼんやり瓶の緣へ手をついて中を見てゐると、夏の初めに買つて來た時に眞黑かつた錦魚で背中の方からまばらにはげて黃色くなりかけたのや、大概は赤くなつて只腹の所だけが、僅に黑く殘つてるのなどがある。私は植木室の棚から麩を取つて來て、入れてやりました。喜んで食ひます。私は今度はバラの插し木を作つた仕立鉢を一つ〳〵丁寧に上げてはミヽズを取つて、それを入れてやりました。一口には呑み込めませんから口へ入れては、はき出し、はき出しては又呑みして騷いでゐます。

足駄の音がして誰か來たが、振り向かずに居ると、

「もう皆さん、お膳におつきですよ」と云ふ。お夏です。

お夏の顏には「先日は――」と云つて會釋する人の表す樣な表情があります。私は急に遣瀨ない悔と怒とを一時に感じました。其心持はお夏も直ぐ私の顏から讀み取つた樣でした。サッサッと歸つて行きます。する首をして、尻を左右へ動かして小走りに急ぐ、其後姿を見ると私はたまらなく醜く感じました。

茶の間へ來ると、母が直ぐ

「如何したんだらう、大變顏色が惡いよ」と云ひます。

と、給仕に坐つてゐたお夏が直ぐ引きとつて、

「書き物で、夜明しをなすつたんですつて」と空空しくチラッと私の顏を見ました。私は息のはずむ程腹が立つた。「ア、いやな女だ」もうつく〴〵左う思ひました。…、…………………………。…………。

かうなると、私のやうな自己のない、弱い、思ひ切つて信ずる事も、思ひ切つて反抗する事も、左うかといつてボンヤリと平氣でゐる事も出來ない人間には、唯一の逃げ場は絶望的になる事より他はありません。

總ての力を盡し、力盡きて遂になると云ふのが本當に絶望的な絶望でせうが、私にはそれだけに力を盡す氣力は第一にありません。寧ろ、それを以つて申し譯とする絶望です。問題の解釋とする絶望です。誇張です。宗教もない、道德もない、社會もない、家庭もない。――今から思へば實に無意味な事です。其當時でも、一方にはそんな氣分を笑ふやうな心持も、どうかすると出ては來ますが、私はそれを無理におさへて、緊張した、多少人工的なイラ〳〵した氣分の中に生活してゐました。然し左ういふ氣分も止む時なしに續ける事に到底出來ません。やゝもすると錦魚の爲にミヽズを探してやる時の氣分にもなるのです。

或る午前の事でした。部屋でボンヤリしてゐると、女中が手紙を持つて來ました。田島といふ、米國のアマーストの學校にゐる友達からの便りで、開くと押し花が入つてゐました。櫨のやうで、もう少し大きい葉で、その葉の間に小さな白い花が五つ六つかたまつてついてゐます。

「これは May flower であります。晩春になると近所の山野に咲き亂れて居ます。命は僅か二週間位であります。木の大さは三寸位で、根が深く岩や古木にシッカリくつついて匐つて居ります。これは去る日曜日獨りで Notch を散步した時に取つた狂咲です。どんなになりますか知れませんが御眼にかけます。」

かう云ふ書き出しで、これを帽子のリボンに差して夕方の田舍路をブラ〳〵歸つて來ると、後で口笛を吹く者がある。振りかへると、誰もゐなくて、急に口笛も止む、步き出すと又口笛を吹く者がある。

「僕は呼吸を計りまして、不意に振り向いて見ました。」と書いてある、其時田島君の瞳孔を通して網膜の中で赤いものが一分といはず、一厘の何十分の一ばかりずつたといふのです。路傍に一軒ポカンと建つてゐる萬屋のアッティックの窓で、その赤い物は動いたのだといふのです。

倘田島君はセマラナイ筆つきで、此店にゐる十六七の可憐な娘の事を細々と書いて、兼てから、話を仕た事も物を買つた事もないけれど、何となく此娘が好きで、毎日曜日の散歩にも娘の姿が見える時には其週間はいゝ週間で、見えなければ惡いと、さうきめてゐた、其娘だつたのだと書いてゐます、讀みながら久しぶりで私は延々した氣分になりました。

私は直ぐ返事を書いて、君のユッタリとした今の生活が、それだけで既に詩とか音樂のやうに僕の荒んだ寂しい心を慰めて吳れるといふ事から、僕も君のゐる處へ行つて同じやうな生活に入りたい。そんな事を書いてゐると、階下の庭で、「をぢちやま」と細い、然し澄んだ聲でいふものがある。私はまき子が來たなと思つて、

「マーヤン」と呼んでやりました。私の姉の一番末の娘で黒眼勝な眼の大きい、可愛い子供です。皆「マーチャン」とか「マーヤ」とか呼ぶのですが、私はもつと可愛く「マーヤン」といつてやるのです。

「ハアイ」と云ひます。

「母アちやんと來たのかい」私は手紙を書きながらいひました。と、誰かその返事を小聲で教へるやうでしたが、

「さうでちゆよ」といふ。私は姉が一緒だな、と思ひましたから、ペンを措くとイキナリ、障子を開けて、欄干へ出ました。所がマーヤを抱いてゐるのはお夏でした。

「をぢちやま」と大きい眼を見張つて又いひます。

「オイ」かう云ふと私は直ぐ欄干を離れずには居られませんでした。

お夏はワザと此方を見ずに頸足を見せて、抱いてるマーヤの顔を覗き込んでゐます。其頰に浮ぶ微笑からお夏が現在頭に浮べて居る考へ――つまりマーヤといふ小さな兒で暗示する厭味な戀の串戯を殆ど直覺的に感じたやうな氣がして私は直ぐ不機嫌に部屋へ入つて仕舞ひました。

半月程經ちました。自家の者は私の樣子の變つたのを心づいたやうでしたが、何も云ひませんでした。母などは何となく心配してるやうでした。然し誰一人お夏との關係を氣附いた者はありません。この關係が生じてから變つたのは私ばかりで、自家の人の眼にはお夏は全く變らなかつたものと見えます。私の眼には隨分際どい所まで平氣で出してゐるやうでしたが、さう云ふ方面には家庭の人は案外鈍いものだと思ひます。一番先に氣がついたのは女中の中で一番年の少い賢い中働でした。

私の感情は段々に荒んで行つて、お夏には隨分ひどく當つてやりました。初めはお夏も不快な顔をする位のものでしたが、其内にいくらか荒んだ氣分になつて行つて、自家の人々へも時にはそれを現すやうになりました。或る時、

「もう皆さん知つていらつしやるやうだ」とお夏が云つた事があります。

「知れたら、如何するつてえんだ」私はワザと荒々しく云つて冷かに笑つてやつたのです。

「貴方が下手だから駄目だ」

「ぐづ〳〵云へば乃公一人飛び出せばいゝんだらう」

「それで、いゝでせう」お夏も負けずにこんな事を云ひます。

此時分二人は如何にも絶望的な、氣違ひじみ

た事を云つて居たのですが、それらは要するに誇張だつたと思ひます。自分ではさうは考へませんでしたが、今から思へば決して眞劍ではなかつたのです。

それと、一つの大きい不思議は私の基督教的の考へといふものです。姦淫罪といふ掟は何年といふ長い間私を苦めぬいたものでした。一度の恥しい行すらが、腿を小刀で刺さうとした程に私を煩悶させた宗教といふものが、現在愛情もなしに續けてゐる姦淫に、殆ど何の宗教的煩悶も與へない。大怪我をした人の神經が其部分だけ一時麻痺して了ふ事實と似た現象とも考へられますが、兎も角、あれ程長くつきまとつてゐた、教へと云ふものが、餘りに他愛なかつたのは今から思つても不思議に堪へません。

然し尚不思議な事は、それ程宗教とは離れて仕舞ひながら、しかも益々私が絶望的になつて行く事です。私は自分の理性の不明な事、初めの考への惰性になつてゐる事などにも歸する事が出來ますが、一方には今までの停滯した、單調な生活に厭々して何か新しい强い刺戟を欲する所から寧ろ遊戲的な氣分までが加はつて、益々左う傾いて行つたものではないかと思ひます。

五

自家の者が氣附いたやうだとお夏が云つてから、凡そ一週間程して、滅多に來る事などのない母が突然私の部屋へ入つて來ました。

「大變汚なく仕とくんだね」微笑しながら散らかつた部屋を見廻して云ひます。私は默つて居た。

「近頃はちつとも學校へ行かないやうだが、いいんですか？」と火鉢の向ふへ坐りながら私の顏を見ていひます。他から問題を惹いて來る心算だなと思ひながら、

「いゝつて事もありませんが、行つてもつまりませんからね」と殆ど意味のない言葉で答へました。

「つまらないつて、卒業する迄は眞面目に通つて貰はないとお父さんでも私でも安心して居られないからね——お前、自家に居て勉强出來ますか」

「やらうと思へば出來ますよ」

「どうだらう、何處か下宿でも仕て見たら」

「何故ですか」

「何故つて事もないが、其方が勉强が出來やしないかしら」

「下宿はよしませう」私は不快な顏をしてかう云つた。

お夏と分けようとするなら、何故お夏を還して了はないのだらうと思ひました。兎も角、父と母と相談した結果、そんな事にして、事件の本題には全然觸れずに片附けようといふ方針らしいのです。

母は切りに下宿屋へ移るやうに勸めましたが、私はどうしても承知しませんでした。

「此頃のやうにクサ〳〵してたらお前、腦を惡くする許りですよ。ちと上方の方でも旅行をして見たらどうです」仕舞にはこんな事を云ひ出しましたが、

「考へて置きませう」といひ捨てゝ、私はサッサッと部屋を出て仕舞つたのです。

お夏との關係が生じてから、私は餘り友達と往き來をしなくなりました。殊に親しい、眞面目な事などを語り合つた友達とは會ひたくなかつたのですが、其時ブラリと家を出ると、行かうか、行くまいか、と迷ひながら、遂に其決心をしない内に芝のある友達の家の前まで來て仕舞ひました。

快活な友は、自分で茶をいれながら、

「近頃は如何してる？」といひます。

「元氣がなくて、いけない」

「どうかしたの？」

「氣分が惡くて何處へも出る氣が仕ない」

私は暗に此一ト月ばかり、まるで教會へ顔を出さぬ云ひ譯をしたのです。此友は中學時代の友で今は同じ教會員でもあるからです。

「學校も休んでるさうぢやないか、いつものかと思つて居たがからだが惡くちや、いけないね」

「いゝからだが惡いと云ふ程でも無いんだけど」私は曖昧にして、それが一トかどの宗教上の煩悶とでも聞きなされるやうに云つた。

一時間程話して此處を出ました。友は私の苦悶を矢張り宗教上の疑惑と釋つて色々と其方面の話で慰めてくれましたが、それが私に何の興奮も與へませんでした。如何にも空虚な言語を聞かされてるやうに感じたのです。殆ど何の響をも私の胸に起しませんでした。宗教といふ木は私に插し芽にされてゐて何年といふ時を經つたけれども遂に根を下しては居なかつたものかも知れません。

外は風が吹いて、ホコリが立つてゐました。秋も段々深くなつて路傍には落葉の風に集められた處などがあります。私はブラ〳〵と自家の方へ歩きました。

途々、私の頭には、お夏が病氣ででも、怪我ででもいゝから不意に死んで呉れないかしらと云ふ考へが切りに浮びました。一方には、人の死を願ふと云ふ、殺さうと考へるよりも恐しい心を我ながら可恐く感じて、そんな事を願ふ位なら、お夏に對しどんな無情な事を仕ようと幾らましだか知れないと思ひながら矢張死んで呉れるといゝなと云ふ考へは頭を離れませんでした。

仕舞にはこんな事までが浮びます。私がそんな事を夢にも思はないのに突然お夏が病死する。私は心からお夏の死を悲む。而してお夏との關係が純然たる過去となつて詩のやうに、小説のやうに、私の心に殘る、……然しこの横着な空想を憎む心、暗い二人の未來に對する恐れの情などもこんぐらかつて、私の胸は益々重くなつて行きます。

―もう、考へるといふ事はいけない」と私は獨り、首を振つていつたのです。考へてすれば、其處に責任が生ずるやうで、今は考へるといふ事が何となく恐しくなつて來たのです。絶望的になつた人間のする事、理性を失ひかけてる人間のする事――何の責任もない、何でも出來る。こんな氣がするのです。だから其夜お夏が、

「貴方、今日、阿母さんに何か云はれましたネ」

と云つた時、

「旅行しろとさ、――お夏さんと駈落をしろと云ふのかも知れない」と云つたのです。

默つて私の顔を見てゐるのに、

「オイ、駈落をしろとさ」と重ねて云ひました。

今思へば、これも其場の調子に出た言葉だつたのですが、然し殆どこれだけが動機で其翌朝未明に二人は家を飛び出したのです。

六

それからの生活は殆どお話になりません。お夏が婚家を去る時貰つた二千圓ばかりの金が或る銀行へ預けてありましたが、それを引き出して、二人は海水浴場や、温泉場を、先々と廻り歩いてゐたのです。

お夏に接する迄は私は先づ澄んだ頭腦と澄んだ心とを持つた青年でした。然し其後段々と私の心は濁つて來ました。でも頭までは濁らなかつたのです。然し旅へ出てからの生活の荒み方、――その始めと云へば前にも云つた、「誇張された絶望」からなのですが、不知それが

恐しい習慣となつて、今は二人の間にコビリ着いて了ひました。かうなると、今まで澄んでゐた頭腦迄が段々に濁つて來ました。冬の弱い日光にすら眼をハッキリとは開いて居られないやうな心持になつて來ました。頭は常に重くて、物を云ふにも云ひたい事が、直ぐ口へ出て來ず、それより先に癇癪が起つて了ふと云ふやうになりました。

身體のいゝお夏は其時分は未だ私のやうな事はありませんでした。で、時々妙に浮かれたりする事があるのです。左ういふ時は言葉までが變つて、今の若い女學生の使ふやうな語尾を用ゐます。歯が浮くと云ひますが、私は擽りたい程に腹が立つのです。

又見えすいた無邪氣な眞似をする事もあります。

「オイ、お前は幾つ年上だつけ」

私は我慢が出來ずに、かう云つてやつた事もありました。ハシヤイでゐたお夏は急に不快な顏をします。

其内、お夏の頭も濁り出しました。ヒステリー的になつて行くのがよく解ります。

荒んだ、無爲な日——左うです、其頃の二人の生活には此言葉が最も適當です——左ういふ日を送つてゐる私には女が段々とヒステリー的になつて行く事が、どう云ふものか一種の興味になつたのです。

……………………。……………………………………………………………。……………、それからはお夏の病氣の進むのが眼に見えて、ハッキリして來ました。一寸した事に非常に喜ぶかと思ふと、一寸した事で非常に腹を立てます、笑ふかと思ふと直ぐ泣く、又つまらぬ事に、ビックリするやうな事も度々になりました。

かういふ間にも、私自身、矢張り頭の濁りが濃くなりつゝあつたのである。

或る市へ來て、宿をとつて、もう寐ようといふ時でした。

「町を歩かない？」とお夏がいひます。旅へ出る前から毎晩寐る前に飲んでゐた藥を買ひに行くんだなと思ひながら、

「いやだ」といひました。

「ぢやあ、出て來ますよ」

衣桁に掛けてあるコートを羽織ると默つて出て行きます。

「小說でも雜誌の古でも貸して呉れつて云つて貰はうか」

お夏は障子の緣へつかまつてスリッパを穿きながら此方へ背を見せたまゝ、

「買つて來ませう」といふ。

「買はなくてもいゝよ」

「左うですか」と其儘後手に障子を閉めると靜にスリッパを曳きずりながら行きます。

「誰の小說を買つて來られたつて、たまるものか」

少時して、

「面白い物は厶いません」と女中が薄よごれた小說、雜誌、講談本などを一ト抱へ持つて來ました。一つ〱選つて見たが、何も面白くなささうな物ばかりで、中に二葉亭譯の「片戀」といふのが、汚れ切つてある。未だ讀んだ事もないし、面白さうでもあるが、いかにもきたないので其氣も出ません。

「御覽になれるやうな物が厶いますか」障子の側に膝をついてゐた女中が云ふ。

「あるよ、これで結構、……それから床を敷いて貰はう」

女中が床を敷く間、私は本を選びました。積んである下の方に昔の草雙紙の妙に濕氣を帶びたのが七八册ありました、「田舍源氏」の端本

です。頁の下の隅が字も何も見えない程によごれて紙が毛ば立つてゐます。然しそれを繰つてゐる內にいつか私は五つ六つの頃「妙々車」と云ふ、種貞か誰かの草雙紙が帙に入つて祖母の部屋の違ひ棚に乘つてゐたのを、紙にのせた菓子を食べながら、寐そべつて、見た事がある、私には其時分のやうな一種のなつかしい氣分が湧いて來ました。

「おやすみなさいまし」と女中は丁寧に手をついて、出て行きました。

私は他のきたない本を片寄せて、緣側へ出して了つて、「田舍源氏」だけを枕頭に置き、電燈のひもを延して、衣桁に下つたお夏の細いしごいで、額の釘へ引つぱり、燈を丁度頭の上へやつてから、寢床へ入りました。

大變脫けてはゐたが大體、編の順序をつけてから見始めると、暢氣だつた幼時のなつかしい氣分の再生と此小說の昔風な氣樂な內容とから來る氣分で、(傍にお夏は居ず、私は久し振りで何ともいへない胸が輕くなつたやうな氣持がして來たのです。光氏といふ美しい男が、色々な美しい女と識り合ふ所が、種彥の作を讀んだ事はありませんが國貞の繪だけでよく解ります。○の中に藤とか阿とか紫とか桂とかたそとかあやとか書いた印が袖や裾についてゐます。眉毛のあるなし、着物の異ひ位はあるが、どれも同じやうな美しい顏をした、それらの女と光氏が次々と識り合つて行きます。前の頁で或る女と會つてると直ぐ次の頁で異ふ女といいあひびきをしてゐます。其他繪で見た所では家來でも女中でも小姓でも坊主でも皆光氏の戀の爲に一生懸命になつて働いてゐる樣に見えます。私は見て行く內に光氏の極端に自由な戀が何だか可笑しくなつて來ました。と同時に極端に不自由な自分とお夏との關係についても何となく滑稽な感じが起つて來たのです。

私は何といふ事もなしに愉快になつて來ました。往來へでも飛び出して力一杯駈けてでも見たいやうな氣がして來ました。今にもお夏が歸つて來たら、もう今からお前とは別れるから、と快活にいつて此家を出て了はうかしらとも思ひました。お夏が笑談位にとつて、別れませうといふと、自分は出たぎり歸つて來ない、お夏はどうするだらう？　然しそれでお夏も救はれるのだ。

こんな事を考へてゐる內に、身體中がポッポッと溫くなつて來ました。私はカナリ厚い毛のシャツを着たまゝ寢てゐたので、それをすつかり脫ぎ捨てゝ素裸に袷だけになつて了はう、かう思つて起き上ると、私は何うしたのか、手を延べてパチッと電燈のヒネリをねぢつたのです。暗くなつてアッと聲を出しました。私は闇の中に坐つたまゝ、少時くボンヤリして了つたのです。シャツを脫がうと思つて起上つたものが、何故電燈を消したらう……

たしかに自分の考へてゐたのはシャツを脫がうといふ事だけで、シャツを脫いでからどうしよう、シャツを脫ぐ前に何をしようといふやうな、素袷になつて又寐ようといふシャツを脫ぐといふ行爲とは時間的に一直線上で後に續く考への他には何にも思つた事はなかつたのです。それがどうして、何の連絡もない、燈りを消すといふ行爲に變つたのだらう？　運動神經が中樞の命令を途中で變へるといふ事は考へられません。私はこれは頭が狂つて來たんだ、と思はないわけには行かなくなりました。輕くなつた胸には急に重い鉛の塊を投げ込まれました。光氏も、自由戀愛も、駈けたい氣分も、何も彼も今は影を隱しました。

暗い中に坐つてゐると不安は段々擴がつて行きます。電燈をつけて其儘床へ入りましたが、田舍源氏は今は側に置くさへ不快な氣がしまし

た。夜着の襟に顔を埋めて眠らうとするが中々寐つかれません。間もなくお夏が歸つて來ました。お夏は何にもいはずにカタコトいはして藥を飲む樣子でしたが、其儘眠つて了ひました。

七

或る夜の事です。或る入江になつた穩かな海岸の宿屋でしたが、五月の事で未だ避暑客も來ない頃で、海に面した細長い平家の一棟には私等二人だけしか客はありませんでした。

お夏を厭ふ私の心持は大概お解りの事と思ひますが、それなら何故、それを振捨てゝ一人逃げて了はないとお思ひかも知れませんが、其頃の私にとつてお夏といふものは、丁度アルコール中毒にかゝつた人が一日も酒を離せないやうに、……………………………………………………。

で、此事は其夜以後初めて心づいた事ですが、正直にいへば私は矢張りお夏を愛して居たのでした。私の頭にある戀の種類には入らない、或る戀の形だつたのかも知れません。それに、お夏は何といつても私には最初の女です。初戀の女と云ふものが、その人に一種特別な價値を持つて居るやうに、初めて識つた女と云ふものも、其男には一種特別な力を持つてゐるやうに思はれます。厭だ厭だと思つてゐるお夏にも此特別な力があつて、私はそれによつて束縛されて居たのです。

其夜は靜な晩でした。部屋の直ぐ前が海で、石垣を洗ふ入江の靜な波がザブリ〳〵と音を立てる、それに混つて折々臺所の方で高聲で話す男の聲が聞える許りです。二人はいつものやうに同じ部屋で默つてゐます。私は何を考へるともなく仰向けにねころんで居ました。お夏は菓子盆の乘つた食臺にダラシなく横坐りに倚りかゝつて、宿から貸して呉れた其日の地方新聞を展げて……見てゐるのか、ゐないのか、兎も角眼をさらしてゐます。

其時分の私の頭と云ふものは實に變でした。或時は溶けた鉛のやうに重く、苦しく、ドロドロしてゐる事もありますし、或時は乾いた海綿の樣に、輕く、カサ〳〵して、中に何にもない樣に感じられる事もあるのです。乾いた海綿のやうになつた場合には自分自身の存在すら、あるか、ないか、解らなくなつて頭には何の働きも起さなくなるのです。若し死人に極く少しの意識が殘る事があつたらこんな心持が仕やしないかと思はれる樣な心持です。又前のやうな場合にはどうかすると色々な事が浮んで來て覺めながら夢を見てゐる樣です。後から〳〵妄想が恰も現在の出來事のやうにハッキリとして頭の中を通つて行きます。

最初は私は何方の場合も堪らなくいやだつたのですが、習慣になつた爲もありませうが、後には底疲れのした身體をグッタリと横たへて、頭の中で演じられるその色々な芝居を眼球の内側で視凝めてゐるのが一つの樂みになつて來たのです。

今、仰向けに寢ころんでゐる私の頭は左ういふ狀態になつてゐたのです。

其時お夏は不意と身を起すと、默つていきなり倒れるやうに私の身體の上に被ひかぶさつて來ました。發作的にこんな事をするのはお夏には始終の事でしたが、其時は私もビクッとしました。何故なら私は自分がお夏に殺される事を想つてゐたからです。

お夏は起上りかけた私を抑へ付けるやうにしてます。ヂッと動かずにゐる内に私は段々不安になつて來ました。……………………………………………………………………。左うなると、もう堪りません、私はヤニハにお夏をはねのけようとしましたが、お

夏は大きい身體に力を入れて抑へつけます。

私は後先の考へもなく、お夏の顔へ手をかけると、力を入れて押し上げた。…………………………キャッと云ふ聲で氣がついた時には私はお夏の顔をしたたかに撲つてゐたのです。

鼻血が大變出ました。どう云ふものかお夏は何にも云ひません。默つてハンケチや鼻紙で其始末をしてゐます。左うなると私も急に妙な氣がして來て洗面所から金だらひに水を持つて來てやりました。私にも云ふ言葉がなかつたから默つてゐましたが氣の毒な事をしたと云ふ考へが切りに起ります。然し氣の勝つた女がそんな事をされて默つてゐるのは不思議だと思つてゐる内に、お夏は急に烈しく泣き出しました。

私は出來るだけ優しく色々な事を云つて慰めて見ましたが、お夏の心は妙に冷かになつてゐて、それを受け入れません。さうなると私自身矢張りいやに冷かになつて慰める言葉も腹からは出なくなつたのです。

何といふ事もなしに其夜の事件から二人は急に赤の他人になつたやうな氣がしました。二人の間にはどうしても飛び越せない深い谷が出來て了つたやうに思はれました。私は急に堪へられない寂しさに襲はれました。而して、初めてお夏は最初の女で自分はそ　に對して一種のカナリ深い戀をしてゐたのだと云ふ事を知つたのです。

私はどうでもしてお夏を再び自分のものにしたいと願ふやうになりました。私はお夏の爲に總てを捨てたのです。而して其時から、憎みながらもお夏といふものが私の手にある「總て」になつたのです。今お夏を離れゝば私には何にもなくなります。私はどうにでもして、再びお夏を自分のものにしなければ置かぬと思つたのです。

然しお夏の心は妙に冷えて了ひました。お夏ばかりではありません。私の心も同じ程度に冷えて了つたのです。一方には元通りにならうとあせる心はありながら他方に冷えて行く自分の心を如何する事も出來ませんでした。

…………………………………………………………………、…………………………。然し二人の間の谷は依然深い谷で、其處には冷べたい、きびしい風が吹いてゐました。私は以前の憎みながらも狂はしいやうに相抱く事の出來た氣分の方が遙に遙に自分を喜ばして居たといふ事を痛切に感じました。

かういふ氣分で尚二人は的もなく先々と歩いてゐました。其間に二人の氣の濁りは何にもおかまひなしに進んで行きます。お夏は純粹な、かなり烈しいヒステリーになつて了ひました。私も同じです。二人は益々荒んだ氣分になつて今は心から互を憎むやうになりました。

八

私共は或る山の温泉場へ來ました。門を入ると私はブラ〳〵と先へ立つて玄關の所へ來ましたが如何にも森閑としたものです。袖垣で仕切られた庭では夏の支度と見えて疊屋が切りに表の裏を返してゐます。此男が私共の入つて來たのを見て少時刺す針の手を止めてゐましたが、客と見て、

「オイ、お客様だよ」と家内へ向いて呼んで與れたので女中が出て來て、二人は一番突き出した見晴しのいゝ十疊に通されました。

湯から上ると私は庭下駄を穿いて庭へ下りました。お夏もついて來ました。日は入つて薄ら寒い空氣の中に二人は宿の浴衣に懐手をして、ボンヤリと疊屋の仕事を見て立つてゐました。其處へはふり出してある長い鋭い針や

錐が白つぽい薄暮の光りを受けて冷かに光つてゐます。

「恐い」獨語のやうにから云つて、お夏はだらしなく下駄を曳きずつて、部屋へ入つて行きました。

私は何を考へるともなく、疊屋がブツリブツリと刺す長い錐を見つめてゐる内に妙に胴震ひがして來ました。柄の所までブツリと深く刺す。鋭い錐が氣持よく臺を貫す。それを見てゐると何といふ事なしに息がはずんで來て、私はもう、ヂッとして居られなくなりました。——けれども、其錐でお夏を殺さう。左う思つたわけではないと思ひます。無理な解釋かは知れませんが、荒んだ無爲な生活にある私にとつて鋭い光つた長い錐が厚い臺をブツリ〳〵と貫す——其感じ、左ういふ痛快な感じのする生活に入りたい、そんな心持からではなかつたでせうか。然し、それは解りません。私は其晩其錐でお夏の咽を突いて殺したのです。

而してはつきり我に還つたのは翌朝ある峠を越した途中の穢い宿屋の二階ででした。

九

緣のない、やけて赤くなつた疊に晩春の穏かな朝の光りが一杯に差し込んでゐる。その日の當つてる處に蠅が群つて騒いで居る。流の音、鶯の聲、これらが絶えず聞える。日を背にした向うの山の側面が煙つたやうに紫色をして居ます。風もなく、妙にぼわんとした、眠たげな朝です。私の頭も眠つたやうに靜まつてゐます。只時々微な不安に襲はれます。綿のやうに疲れて、柱に背をもたせたまゝグッタリと自分で自分の身體が一寸も、もう動かす事の出來ない物のやうな氣がしてます。

「何しろ大變な事をして此處へ來てるんだ」左う思つて見ても、それが如何いふ順序でなし遂げられ、現在とは如何いふ順序で、つながつてゐるのか解りません。それを思ひ出さねばならぬといふ氣はカナリ強くありながら、扨てサッパリそれが浮んで來ません。しかも浮ばぬものを靜に考へ出さうと云ふのは其時の氣分で迚も出來ない事だつたのです。

私は手を拍いて女中を呼びました。女は袖のない襦袢と腰卷に前掛をしめただけの姿で階子段をミシ〳〵云はして上つて來ました。

それに私は自分は何時此處へ來たかを聞いて見ました。女中は田舍調で、其儘未だ暗い内に雨戸をドン〳〵叩いて來たといふ事を驚いたやうに、默つて暫く私の顏を見つめた後で云ひました。

「矢張り左うだ」私はかう思ひながら女中を下げて、

「何んでもお夏を殺すと矢張り夜つぴて此處まで逃げて來たんだ」と思ひました。然しそれは確に昨日の出來事だつたかしら？　何だか遠い以前に起つた事のやうな氣もして、ハッキリと時が浮びません。のみならず其場所も如何にも漠然として頭に映つて來ませんでした。が、暫くして漸く、兎に角あの山の温泉場だつた事だけは憶ひ出したのです。續いて懐手をして疊屋の仕事を見てゐた、あのシーンが頭へ浮んで、あの長い錐で其晩　と思つたら、私の身體はブル〳〵ッと震へました。

あの錐でブツリと咽を突き貫したのだ。

實際私はお夏を殺さう、そんな事はハッキリと考へた事は嘗てなかつたのです。死んでくれたら、とはよく思ひました。又自分が殺されはしないか、左うも考へた事はありますけれど、自身手を下してお夏を殺さう〳〵左うハッキリ考へた事は遂になかつたのです。それは取りとめもない空想ではよく此女を殺す所、又殺した後の事なども考へましたが、事實やらう

と計畫した事は言てなかつたのです。それが如何してそんな事をして仕舞つたらう？
―と月程以前、或る海岸の波打ち際を歩いてゐる時に、
―そんなに厭ならお殺しなさい―とお夏がいゝさも憎さ氣に云つた、その時の事を私は想ひ出しました。
―四つも上のお婆さんに見込れて災難ね」と續けて云ふ。
「默れ」と怒鳴つたのです。
―本當に殺しちや、どう？ 本望ですよ。……
……殺せないの？」こんな事を云つて、ヒステリー的に笑ひます。
―自分で死ね」私は出來るだけ冷かに云つたつもりでしたが、それに泣くやうな調子がありました。こんな場合にも殺すとか、殺されるとか、そんな考へは互になかつたのです。
から思つた時に、
―けれども自分は遂にお夏を殺して仕舞つた」
私は拳固で卓を叩くやうに、からキッパリと腹の中で云つて見たのです。
然し、どう云ふものかそれに何の手答もないやうな感じがしました。私は何故そんな大きな事實でありながらそれを痛切に肯定する事が出來ないだらうと不思議に思ひました。事實の餘りに大きかつた事が反つて夢のやうな漠然とした印象きり殘さなかつたのかしら、とも疑つて見たのです。
が、兎も角あの錐でブツリと咽を突きさしたのはよく覺えて居る。お夏は他愛なく直ぐ死んで了つた。其姿もあり〳〵と覺えてゐます。で同時に大變な事を仕て了つたと思つたのも、もう仕方がないと其儘雨戸を開けて外へ出たのも、戸外は月夜で青白い月光が夢のやうに其邊の風物を包んでゐた事も、冷やりとする風が頬へ當つた事も、皆私はカナリ明かに覺えてゐたのです。それからやにはに山路を逃げて此處まで來たものに相違ない。
左う思つて、身のまはりを見ると足から脛の邊り、所々に傷をして、それから流れた血が黒味を帶びてコビリ着いて居ます。然し如何しても昨夜の出來事は夢のやうでなりません。が、それが若し夢なら、現在からしてる、これは何だ。猶且夢を見てゐるのかしら？
それとも今此處にお夏も一緒に來てゐるのではないかしら。そんな氣もしてもう一度女中を呼ばうかと思ひましたが、やめて、尙精しく昨夜からの出來事を靜に繰返して見ようと努めました。
殺した場所を想ひ浮べようとしましたが、何處となくボーッとしてゐて浮びません。其內、夫は何でも溫泉宿のあの部屋ではなかつたと云ふ氣がして來ました。考へる內に段々に其場が浮び出して來ましたが、若しかすると夫は今自分の想像で作り上げた場面ではないかしらといふやうな疑念も湧くのです。
それは酒場のやうな所です。私は冬帽子の値段を聞いて見ると、バアの向うにゐるのがお夏で、
―三圓五十錢よ―と云ひます。其調子が如何にも氣に食はなかつたのを覺えてゐます。
―先刻二圓五十錢だつて云つたぢやないか―といふと、
「いゝえ、貴方の聞違ひでせう―と笑つてゐます。これでカナリ腹が立ちましたから、罵ると、
―そんなら、聞違ひぢやなくつて、私の云ひ違ひかも知れません――けど兎も角これには三圓五十錢よ」切り口上です。私はかッとなつて了ひました。いきなりお夏の兩手を摑むと、力任せにバアの此方へ引張りました。お夏の身體は他愛なくズル〳〵とバアを越して私の足許に落ちました。私は滅多打ちに仰向いてゐるお夏

の顔を摸つたのです。お夏は默つて居ます。その平氣なのが又堪らなく腹が立つて、どうしてやらう……と見廻すと、——……………
……………。——……………。……
………………………………………
、……………………………。

直ぐ、逃げようと云ふを考へ起して外へ出ると、戸外は微かの月夜で冷たい風が額を吹きます。私は兎も角山の方が安全だと思つたので、其方へ逃ける足を向けました。

此邊まで記憶をたどると後は樂にずる〲と出て來ました。

暫く走つて、急に暗くなつたと思ふと杉の大木が空を隱してゐます、其下を行く時はジメジメした苔が濕つた綿の上を歩くやうな心持をさせました。私は猶上へ上へと走つたのです。

その間絶えず背後に追つて來るものがあるやうな氣がして、私はうねつた道を尋常に廻つて行くのが恐しく、不意に道を外れて急な道も何もない處を攀ぢ登つて行きました。咽は乾着く、只さへ疲勞してゐた身體に不意に烈しい運動をさせたので、動悸は甚く、腿は張り、汗はかきながら頬がすつかり冷えて、今にも貧血で倒れるかと思ひました。だのに、追ふ者は樂々といつ迄も直ぐ背後について來るやうな氣がします。私は突然振りかへつてそれへ立向つて見ました。勿論何にも居ません。それは其時でも知つて居たのですが、さうでも仕ないといつまでも左ういふ者がついて來るやうでかなはなかつたのです。

暫く來た所で私はたうとう倒れて、何か鼻の奥にしみるやうな物をもどしました。

起き上つた時に私は木の間から月あかりにボーッと淡く下の方に見える温泉場を眺めましたが燈りの動く樣子もなく何も彼も靜に眠つてゐます。

「まだ氣がつかない」かうは思つても然しぢつとはしてゐられません。再び登り出すと直ぐ又背後から誰かついて來ます。私は何遍立ち向ふ氣で振りかへつたか知れません。

高山の癖で未だ草は茂つて居ませんが、急な坂はいくらあせつても捗どりません。

一間程土がなだれた處へ來て力のない足にはずる〲と中々踏みしめられずなやんで居ると、傍に細い木の根がさらされたやうになつて白く現れてゐます。夫れを手賴りに登らうと、不圖上を見ると其處に洋服を着た大きな人が立つて居ます。色々な意味で久しい間御世話になつた土村先生です。濃い眉の下に深く落ち窪んだ、力のある眼で默つて私を見下して居られる。私はもう、ぞつとしました。

それから何でも其腋の下をくゞるやうにして偖登つて行つたやうに思ひましたが、私は此處まで記憶をたどつた時に急に氣の拔けたやうな心持がしたのです。あの眞夜中にあの山中に土村先生が立つてゐられる。そんな事はあり得ないと思つたのです。今まで自分の繰返して來た記憶は何なのだ？ 何しろ、それは現實に起つた事の記憶ではないと思はれて來ました。夢の記憶かしらと思つても見ました。そんなら今かうしてゐるのは何なのだらう？ 足は傷をしてゐる、我れながら持ちあつかふ程に身體も疲勞してゐる、此現在はどうしたのだらう？ これが夢ならいゝとして若し現實なら、あの山の中の事は何だらう……いよ〲自分は氣が違つたのかしら

偖、前の事を考へると、帽子の價を聞くあたり、其場面からいつても、總てあの温泉場ではどうしてもない。若しかするとお夏を殺したのも現實の出來事ではなかつたかも知れぬ、と思ふやうになりました。然しそれにしては餘り

に明かである。戸を開けて外へ出る、其處は[illegible]疊屋が仕事をしてゐた庭で、黒い緣のたちくづが白い飛石の上へ落ちてゐたのさへ覺えてゐます。淡い月光に包まれた冷たい夜——どうしたつて、夢ではありません。

私はもう何が何だか解らなくなりました。前年からのお夏との關係、それ全體が夢ではなかつたかしら——それとも人格の分裂——左ういふ現象かしら。

何しろ今は殺人と云ふ大きな意識もボヤケた影を私の心に映して居る許りで、何の強い刺戟をも與へなくなりました。身體は鉛のやうに重く、頭の中は溶けてドロ〳〵になつて、私はもう此疑問を考へる氣も根も盡きはてて其儘ゴロリと横になると、小一時間は何を考へるともなく、只ウト〳〵として居たのです。

もう前夜のやうに恐怖でぢツとして居られないと云ふやうな氣もありませんが、かうして居るのも何となく危險に思はれます。私は疲れ切つた身體を起して兎も角此家を出る事にしました。

十

春の日光は山の小路を穩かに照して居ます。山蔭には未だ夜の露が殘つて居ますが、上から半分現れた路の石は白く乾いて日光を反射して居ます。その強くもない光も私にはまぶしかつたのです。痩馬を背負つた山の勞働者が四五人高聲に何か話し合ひながら、すれちがひに臭い煙草のにほひを殘して登つて行きました。

私はふら〳〵と路を下へ向ひました。

此小さな部落を出る處に路からは高く石垣で積んだ上に廣くもない畑が作つてあります。其處から汚れた手拭を被つた若い女が二人立つて此方を見て居ました。私はよろけるやうに其處を過ぎました。私の頭には今は何物もありません。

暫く來た處に小さな流れがあつて、其處に子供が三四人小さな水車を仕掛けて遊んでゐました。私はぼんやりと立つて、それを見てゐました。鶯の聲が絶えずあたりに聞えます。私は泥醉した人のやうに眼を据ゑて廻る小さな水車を見詰めてゐました。見詰めてる内に頭がボーツとして來たと思ふと、水車の車が段々に早く廻つて來ました。——段々と早くなる。クツクツと角が立つて廻ります。間もなく、その角立つのがなくなつてクル〳〵と更に早くなつたと思ふと、その邊の子供は皆何處かへ行つて了ひました。流れの音も、鶯の聲も總てのものの音は聞えなくなりました。私には今は只眼に映る水車の車だけになりました。車は非常な早さでキリ〳〵と轉ります。其内それは段々大きくなつて、私の眼に迫つて來ます。もう見詰めては居られません。私は其儘其處へ昏倒して仕舞つたのです。

——それが醒めて氣がついた時には私はいつかもう東京の癲狂院に入れられてゐました。

（附　記）

自分は歲暮と正月は東京にゐては、何にも出來ないと思つたので、讀みたい本を少し持つて、寒からうが、それだけに靜かだらうと思はれる小涌谷へ來たので、一番日當りのいゝ蔦屋で丁度津田君と隣り合せの部屋を取つたのである。津田君は三十日程前から一人で來てゐるのださうだ。

隣室とは怪し氣な竹の繪に、竹是隱君子といふ贊を氣持の悪い書體で書いた唐紙一重で境されてゐるが、津田君はゐるのかゐないのか解らぬ程にいつも靜である。只夜、

寐付きに乾度うなされるのが、此方にゐても氣味の悪い程で、餘り長い時には聲をかけようと思ふ事もあつたが、大概は自分で氣がついて、暫くは物に驚いた人のするやうな深い呼吸をしてゐるが、間もなく起きて十分も廊下を行つたり來たりするのが例であつた。左うすると後は多くの場合、よく眠れるらしかつた。

冬場は人を減らすとかで、吾々の所へ來る女中は廿五六の感じの悪いよく饒舌る女と、ロセッティの繪にでも見るやうな、メランコリックな顔をした赤襟をかけた十六七の女との二人であつた。

此處へ來た翌日の晩めしの時はよく饒舌る方が自分の方へ出た。東京者で麻布の自分の家の近所にも居た事があるとかで、その邊の事は何でもよく知つてゐた。氷川町の魚松といふ自家へも來る魚屋の主が放蕩者でたうとうあの家を抵當流れに人手に渡した事などを精しく話して居た。隣では若い方を相手に酒を飲んでゐるらしかつた。

「一チョンビリしか、いけないんですけど」と自分の方の女中は一寸隣りを指して、毎晩うなされるとかで、今晩は醉つた勢でグッスリおよりたいんですとさ」といつた。

食後、自分は球場へ行つて、ランプを持つて來る若者を對手に二ゲーム許りやつて還つて來たが、隣では未だ飲んでゐる樣子だつた。大分元氣らしく、若い女をつかまへて何か切りと云つてゐる。聲も小さし、舌もよく廻らないので、云つてる事は解らなかつたが、其内突然、

「貴方、人違ですつたら」と鋭い聲がして女の立上る氣勢がした。

「馬鹿」と男の鋭い聲もして、これも起上つたらしく、何かもみ合ふやうな物音がすると、不意に境の唐紙がゴトッと此方へふくらんで、それが外れると、フウハリと自分の部屋へ倒れて來た。その隙に眞赤な顔をした、若い女中は、自分の部屋を拔けて出て行つて了つた。

自分は殊更に冷かさを裝うて、机に凭つて其光景を見てゐた。隣の人は一種の憎みを含んだ眼差して自分を見据ゑてゐたが、ブツ〳〵解らぬ事を云ひながら自分の所から唐紙で見えない元の席へ腰を下すと、酒のない杯をすゝるやうな音が聞えた。

年上の女中が入つて來て境の唐紙をはめると、切りと詫をいつて、明日は御部屋を變へませうと云ふやうな事を云ふ。それが如何にも隣に聞えよがしなのが自分に不快な氣をさせた。然し隣の人に對しても自分は不愉快な感じを持たずには居られなかつた。其晩は身邊にキタナイ物でもある樣な心持をしながら寢たのである。然し翌朝又其女中が手柄顔に「あちらで御引つ越しになるさうです」といつたので、其人が何だか急に氣の毒になり、此いやな女中へ面當でもいくらかはあつて、自身出かけて、夫を留めたのである。夫から自分は津田君と話すやうになつた。

津田君のうなされる事はそれからも毎晩であつた。

（明治四十三年九月）

老人

五十四歳で彼は妻を失つた。それは秋で、長男が工科大學へ入り、長女が三人目の娘を生んだ時であつた。彼は俄かに五つ六つ年寄つたやうに見えた。勇敢な事業家にも何所か衰への影がさした。――少なくも他からは左う見えた。

四月して、彼は十年餘り御殿女中をして居た女を後妻に貰つた。後妻は彼の長女より一つ年下で毎朝襟白粉を忘れぬ女であつた。

若い妻を得た彼は先妻を失つて老込んだだけの年を取りかへして、尙其上にも若返つたやうに思はれた。彼は十何年ぶりで妻と共に芝居を見た。相撲も見た。山の溫泉場に避暑もした。が、それも半年とは續かなかつた。彼は何時か元の勇敢な事業家に還つて居た。

彼の仕事は請負で井戶を掘る事であつた。水利に乏しい地方で彼の鋭い觀察と深い經驗から掘當てられた吹きぬきが何れ程あるか知れない。彼の發見した鑛泉の爲めにマテヌ村が有名な土地になつた所も一二ケ所ではない。

勇敢な事業家に還つた彼は再び暇なく地方へ出張する身となつた。最初妻はそれをイヤがつて居た。當時長男は大學の近くに下宿して居たが、高等商業學校に通ふ次男は窮屈さうに已れと餘り年の異はない新しい母と共に住まつて居た。

一年程して、彼は或る石油會社の顧問として少なからぬ報酬を受ける身となつてからは、時時北の其地方へ行くばかりで他へは餘り出なくなつた。

然し五年目に彼は此會社を辭して了つた。それは其所の若い技師が彼の意見を尊重しなかつたからで、重役までが彼よりも新しい學問をした技師を信用するらしく思へたからであつた。此技師は彼の長男より二年後に工科大學を出た男で、その意見を信用する事は彼にはどうしても出來なかつたのである。

其時彼は六十五歲になつて居た。

後妻には子がなかつたから、二人は長男の娘を手元へ呼んで育てた。彼は祖父らしい心になつて其孫娘を慈しんだ。

隱居してから彼は前から好きだつた普請道樂に憂身をやつした。それから七年間に僅か二百坪足らずの屋敷に、建てては、こわして賣拂ひ、又建てては、こわして賣拂ひ、三度も左う云ふ事をして、其度の損耗は少しも厭はなかつた。

これが最後だと云つて、彼は一年計畫で又新築をくはだてた。それが未だ出來上らない內に妻が死んだ。其の病氣は貧血から來た肺結核で、それと決定つた時に孫娘は長男の方へ還したから、今は全く孤獨で暮らす身となつた。六十九歲になつて居た。

――其後、彼はよく待合に出入するやうになつた。

待合の者も藝者も金使ひ以上に彼に親切だつたが、時には彼自身で不快を感じないではゐられない事があつた。夜歸る時、電車まで送ると云つて若い藝者がついて來た。並んで步いてゐると、擦れ擦れに若者が行違つた。若者は妙な眼をして二人を見て往つた。かういふ時、若者の心に思ふ事が彼の心に直ぐその影を映すのである。のみならず、並んでゐる若い女が同じ影を受けて感ずる心持をも彼は感じないではゐられなかつた。そんな感じも靑年のやうに

烈しくはないが、淡いたから彼の氣分を曇らすには充分であつた。而して彼は停留場の遙か手前で藝者を無理に歸す。藝者は切りにもつといゝと行くといつたが、彼には人々の待合せてゐる明い電燈の下まで、自分と行く事が此若い女にどれ程の苦痛であるかが解つて居た。

間もなく彼は下町の或る横丁に小ヂンマリとした名古屋普請の家を建てた。出來た時に彼は彼に最も親しかつた出たての若い藝者を落籍して妾とした。而して其時、三年經つたら手を斷つて其家を其儘やると云ふ事を申渡した。

二十代の頃彼が馴染んでゐた遊女に二人の金持の客があつた。一人は金鑛を持つた四十五六の男であつた。一人は老舗の隱居で七十二歳の老人であつた。二人共其遊女を身受けしようと云ひ出したが、前に一度身受けされて懲りてゐる女は今度は自分でひくといつてそれを斷つた。が、暫くして女は急に現在の生活がイヤになつた。女は僅かに身受けをして貰ふ事にした。其時女は七十二歳の老人の方を選んだのである。

いつそ老い先の短かい人を選ぶと云ふ事は此社會に普通な事で女に特別な惡意があるとは思はなかつたが、それを打明けられた時彼は寂しい氣がした。殘つた年期とその餘生とを比較概算されてゐる老人を彼は心から憐んだ。

而して僅か四十何年か經つた今、何時か其老人の立つた所に自分も立つて居たのである。――かう思つて、顧みれば四十何年も彼には僅かとして考へられなかつた――

當時の彼はその事でカナリ烈しく女をせめたが、今の彼は老人の死期を待つ若い女の心をせめる事が出來なくなつて居た。けれども自分の死期が待たれると考へる事は流石に堪へられなかつたので、彼は妾に三年間と期限を切つたのである。三年目は七十二歳で丁度前の老人が遊女を身受けした年である。

妾は彼の一番上の孫娘と同年で、下ぶくれの眼のウットリとした、肉づきのよい女であつた。

彼は木の香の高い明るい家に、總て新らしい世帶道具に圍まれてゐると、不圖二十代か三十代の心持になる事があつた。それも纔かの中だけで、やがて三年經つて彼は七十二歳になつたが、女と別れるのは堪へられなく寂しい氣がした。

女も情夫があつたにかゝはらず、此老人と今、約束通り別れるのが何んだか慘酷の樣に思へた。のみならず何も彼も纔つた老人と別れるのは、自分にとつて危險のやうにも考へられたのである。だうして義理からでなく、もう一年此儘で居たいと申出した。老人は喜んだ。

老人は火鉢を間にして女と向ひ合ふやうな時も、女の關節の所だけが少し凹んでゐるフックリとした柔かい手の前に自分の皮の下の肉の去つたカサカサした手を出す事が出來なかつた。彼はヂッと強く女を抱き締めてやるだけの力のない腕を悲んだ。さうして、なぜ他の老人のやうに自分の心が老人らしくなつて呉れぬだらうかと悲んだ。

一年は經つた。その間に女は男の子を生んだ。それが自分の子でない事はよく知つて居たが、彼は腹を立てる勇氣も、心に女を怨む事さへも出來なかつた。而して女はもう一年かうして置いて呉れと云ひ出した。それを聞いた時に老人の眼には涙が浮んだ。

次の一年には老人は死を願ひ出した。女は情夫の二人目の子を腹に持つた。彼は其情夫と云ふ若者を見た事がある。生々とした見るから氣持のいゝ男であつた。彼は孫程の若者に對して嫉妬も起らなかつた。然しその子の生れる迄には死なるやうに祈つて居たのである。

其内其一年は經つて、赤子は生れたが、老人は死ななかつた。而して今度は彼の方からもう一年と云ひ出した。女は快く承知した。

又その一年も終らうといふ秋であつた。彼は風邪氣で床についたがインフルエンザで重體に變つた。女は本宅へ來て、彼の子供等や孫等と一緒に心からの介抱をした。一週間して彼は望み通り女や孫子の中で七十五歲で靜かに永眠した。

遺言によつて、女は其家の他に少からぬ遺産を受けて、二人の子供を育てる事になつた。

兩月の後、曾つて老人の坐つた座布團には公然と子供等の父なる若者が坐るやうになつた。其背後の茶の間の床の間には羽織袴でキチンと坐つた老人の四ツ切りの寫眞が額に入つて立つてゐる………。

（明治四十四年二月）

母の死と新しい母

一

十三の夏學習院の初等科を卒業して、片瀬の水泳に行つて居た。常立寺の本堂が幼年部の宿舍になつて居た。

午後の水泳が濟んで、皆で騷いで居ると小使が祖父からの手紙を持つて來た。私は遊びを離れて獨り本堂の緣に出て、立つたまゝそれを展いて見た。中に、母が懷姙したやうだと云ふ知らせがあつた。

母は十七で直行と云ふ私の兄を生んだ。それが三つで死ぬと、翌年の二月に私を生んだ。それつきりで十三年間は私一人だつた。所に、不意に此手紙が來たのである。嬉しさに私の胸はワク〳〵した。

手紙を卷いて居ると、一つ上の級の人が故意と顏を覗込むやうにして、

「お小遣が來たね」と笑つた。

「いゝえ」

答へながら、賤しい事を云ふ人だ、と思つた。

私は行李から懷中硯を出して、祖父へと母へと別々に手紙を出した。

——旅に出ると私は家中——祖父から女中までに何か土產を買つて歸らねば氣が濟まなかつた。仕舞には「今度はおよしよ」と云はれるやうになつた。それで矢張り買つて來る。と、祖母や母も「それ〴〵うまい物を見立てゝ」と讃めた。

此水泳でも、來るとからそれを考へて居た。然し手紙を見ると「今度は特別に母だけにしよう」と急に氣が變つた。「褒美をやる」かう云ふつもりであつた。

江の島の貝細工では蝶貝といふ質が一番上等となつて居たから、それで頭の物を揃へようと思つた。櫛、笄、根掛け、簪、これだけを三日程かゝつて丁寧に見立てた。

片瀬も厭きて來ると、歸れる日が待遠しくなつた。

日淸戰爭の後で、戰地から歸つて來た豫備兵が自家にも二十何人か來て泊つて居ると云ふ便りが暫くすると來た。私は賑やかな自家の樣子を想像しても早く歸りたくなつた。

二

歸ると、土產を持つて直ぐ母の部屋へ行つた。母は寢て居た。惡阻だと云ふ事で、元氣のない顏をして居た。

その部屋の隣りは十七疊のきたない西洋間で、敷物もなく、普段は簞笥や長持の置場になつて居たが、片附けられて兵隊が十何人か其所に入つて居た。其騷が元氣なく寢て居る母に一々聽えて來る。それが嘸いやだらうと思つた。

母は夜着から手を出して、私の持つて來た品を一つ一つ桐の函から出して眺めてゐた。

——翌朝起きると直ぐ行つて見た。母は不思議相に私の顏を見つめてゐたが、

「何時歸つて來たの?」と云つた。

「昨日歸つたんぢやありませんか。持つて來たお土產を見たでせう」かう云つても考へる樣子だから、私は其品々を父の机の上から取下ろして見せてやつた。それでも母は憶ひ出さなかつた。

其時は氣にも掛けなかつたが、段々惡くなるにつれ、頭が變になつて行つた。而して暫くすると頭を冷やす便宜から母はざんぎりにされ

て了つた。
　病床を茶の間の次へ移した。隣室の兵隊が八釜しくてか、それは忘れた。若しかしたら其時はもう兵隊は居なかつたかも知れない。
　大分悪くなつてからである。母が仰向きになつて居る時、祖母が私に額を出して見ろと云つた。ぼんやり天井を眺めてゐる額の上に私は自分の額を出して見た。傍で祖母が、
「誰かこれが解るか？」と訊いた。母は眸を私の額の上へ集めて、少時ヂッと見て居た。其内母は泣きさうな額をした。私の額も左うなつた。さうしたら、母は途断れ〳〵に、
「色が黒くても、鼻が曲がつて居ても、丈夫でさへあればいゝ」こんな事を云つた。
　次に、根岸のお婆さんと云ふ、母の母が私のしたやうに額を出して、自分で、
「私は？」と云つて見た。
　母は又眸を集めて見て居たが、急に額を顰めて、
「あゝいや〳〵、そんな汚いお婆さんは……」
と眼をつぶつて了つた。

三

　かゝりつけの醫者は不愛想な人だが、親切で、其上自家中の人の體を診込んで居ると祖母などは信用しきつて居た。所が其二年程前、舊藩主の氣の違つた殿様を毒殺したと云ふ嫌疑で、私の祖父等五六人と共に二ケ月半此人も未決監に入れられた。それ以来どう云ふ理か縁を切つた。（今は又かゝるやうになつたが。）で、母の病氣は松山と云ふ世間的には此人より有名な近所の醫者に診察して貰つて居た。然し祖母は何かとそれに不平があつた。殊にノッペリした代診のお世辭のいゝのを不快に思つて居た。
　病氣は段々と進んで行つた。絶えず頭と胸を氷で冷やした。
　これも理由を知らないが、病床は又座敷の次の間へ移された。で、二三日するといよ〳〵危篤となつた。
　汐の干きと一緒に逝くものだと話して居た。それを聴くと私は最初に母の寝て居た部屋へ馳けて行つて獨りで寝ころんで泣いた。
　書生が慰めに入つて来た。それに、
「何時から干くのだ？」ときいた。書生は
「もう一時間程で干きになります」と答へた。
　母はもう一時間で死ぬのかと思つた。「もう一時間で死ぬのか」左う其時思つたと云ふ事は何故か其後も度々想ひ出された。
　座敷へ来ると、母はもう片息で、皆が更る更る紙に水を浸して唇を濡らして居た。――髪をかつた母は恐しく醜くなつて了つた。
　祖父、祖母、父、曾祖母、母の上の伯父、醫者の代診、あと誰れが居たか忘れた。これ等の人が床のまはりを取巻いて居た。私は枕の直ぐ前に坐らされた。
　散切になつた頭が枕の端の方へ行つて了つてゐる。それが息をする度に烈しく揺れた。
　前は三つ呼吸する間に、母は頭を動かして、一つ大きく息を吐いた。三つ呼吸する間が二つする間になり、一つする間になり、段々間があいて行く。並んで、脈を見てゐる代診は首を傾けて薄眼を開いて居る……。もう仕なくなつた。かう思ふと、暫くして母は又大きく一つ息を吐いた。其度に頭の動かし方が穏やかになつて行つた。
　少時すると不意に代診は身を起した。――母はたうとう死んで了つた。

四

　翌朝、線香を上げに行つた時、其處には誰れも居なかつた。私は額に被ぶせてある白い布れを静かにとつて見た。所が、母の口からは蟹の

吐くやうな泡が盛り上がつてゐた。「未だ生きて居る」フッと左う思ふと、私は椽側を飛んで祖母に知らせに行つた。

祖母は來て見て、

「中にあつた息が自然に出て來たのだ」と云つて紙を出して丁寧に其泡を拭き去つた。

江の島から買つて來た頭の物は其儘骨箱へ納めた。

棺をメめる金槌の音は私の心に堪へられない痛さだつた。

坑に棺を入れる時にはもうお終だと思つた。ガタン〳〵と赤土の塊を投込むのが又胸に響いた。

「もうよろしいんですか？」から云ふと、待ちかねたやうに鍬やシャベルを持つた男が遠慮會釋なく、ガタ〳〵〳〵と土を落して埋めて了つた。もう生きかへつても出られないと思つた。

母は明治二十八年八月三十日に三十三で死んだ。下谷の御成道に生れて、名をお銀と云つた。

五

母が亡くなつて二月程すると自家では母の後を探しだした。四十三の父が又結婚すると云ふ事が其時の私には思ひがけなかつた。

お絲さんといふ人の話が出た。これも思ひがけなかつた。此人は七つ迄の友達だつたお清さんと云ふ人の姉さんの又姉さんである。が、其話はそれつきりで、却つてお絲さんの父から他の話が起つた。而して寫眞が來た。

その翌日祖母は私に其寫眞を見せて、「お前は如何思ふ？」と云つた。不意で何といつて可いかわからなかつた。只、「一心さへいゝ方なら」と答へた。

この答は祖母をすつかり感心させた。十三の私から此答を聴かうとは思はなかつたやうに祖母は祖父にそれを話して居た。聞いて居て片腹痛かつた。

暫くして話は決まつた。話が決まると私は急に待遠しくなつた。母となるべき人は若かつた。而して寫眞では亡くなつた母より遙かに美しかつた。

實母を失つた當時は私は毎日泣いて居た。——後年義太夫で「泣いてばつかり居たわいな」といふ文句を聽き、當時の自分を憶ひ出した程によく泣いた。兎も角、生れて初めて起つた「取りかへしのつかぬ事」だつたのである。よく湯で祖母と二人で泣いた。然し私は百日過ぎない内にもう新しい母を心から待ち焦れるやうになつて居た。

六

一日一日を非常に待遠しがつた末に、漸く當日が來た。赤阪の八百勘で式も披露もあつた。

式は植込みの離れであつた。四つ上の伯父、曾祖母、祖母、祖父等と並んでお杯を受けた。其時私は不器用に右手だけを出して臺から杯を取上げた。武骨な豪傑肌の伯父さへも、謹んでして居る中で自分だけ態と左う云ふ事をした。しながら少し變な氣もしたが、勇ましいやうな心持もあつた。

式が終つて、植込みの中を石を傳つて還つて來ると、背後から「何んだ、あんなゾンザイな眞似をして」と伯父が小聲で怒つた。私は初めて大變な失策をしたと氣がついた。私は急に萎れて了つた。

廣間では客が皆席について居た。私は新しい母の次に坐つた。母は拇指に眞白な繃帶をして居た。かすかな沃度ホルムの匂ひがした。

席が亂れるにつれて私も元氣になつて來た。雛妓の踊りが濟むと、大きい呉服屋の息子で私

ゝ同年の子供が其時分流行しだした改良劍舞をやつた。其後で四つ上の伯父と私と只の劍舞をした。

藝者が七八人居た。吾々の前には顔立のいゝ女が坐つて居た。父は少し酒に醉つて居て、母の前で、其藝者に「此中ではお前が一番美しい」と云ふ意味の事を云つた。何か云つて藝者は笑つた。母も強ひられて少し笑つた。私はヒヤリとした。お杯の時した自分の武骨らしい厭味な樣子と、父のこれとが、其時心で結びついたのである。

お開きになつた。玄關で支度をして居ると、新しい母の母が寄つて來て、

「これを忘れましたから、上げて下さい」と小さな絹のハンケチを手渡した。

歸ると、母はもう奥へ行つて居て會へなかつた。私はそれを丁寧にたゝみ直して自分の用箪笥に仕舞つて寝た。

七

翌朝私が起きた時には母はもう何か一寸した用をしてゐた。私は縁側の簀子で顔を洗つた。毎時するやうに手で洟が何んとなくかめなかつた。

顔を洗ふと直ぐハンケチを出して母を探した。母は茶の間の次の薄暗い部屋で用をしてゐた。私は何か口籠りながらそれを渡した。

「ありがたう」かういつて美しい母は親しげに私の顔を覗込んだ。二人だけで口をきいたのはこれが初めてであつた。

渡すと私は縁側を片足で二度づゝ飛ぶ駈け方をして書生部屋に來た。書生部屋に別に用があつたのでもなかつたが。

其晩だつたと思ふ。寝てから、

「今晩はお母さんの方で御やすみになりませんか」

と女中が父の使で來た。

行くと、寝て居た母は床を半分空けて、

「お入りなさい」と云つた。

父も機嫌がよかつた。父は「子寶と云つて子程の寶はないものだ」こんな事を繰返し〱云ひ出した。私は擽られるやうな、何か居たゝまらないやうな氣持がして來た。

私の幼年時代には父は主に釜山と金澤に行つて居た。私は祖父母と母の手で育てられた。而して一緒に居た母さへ、祖母の盲目的な烈しい愛情を受けてゐる私にはもう愛する餘地がなかつたらしかつた。まして父はもう愛を與へる餘地を私の中に何處にも見出す事が出來なかつたに相違ない。此感じは感じとして其時でもあつたから、私には子寶が何んとなく空々しく聽きなされたのである。――それより母に對して氣の毒な氣がした。

父が眠つてから母と話した。暫くして私は祖父母の寝間へ還つて來た。

「何んの御話をして來た」祖母が訊いたが、

「御話なんかしなかつた」と答へて直ぐ夜着の襟に顔を埋めて眠つた風をした。而して獨り何んとなく嬉しい心持を靜かに味はつた。

皆が新しい母を讃めた。それが私には愉快だつた。而して此時はもう實母の死も純然たる過去に送り込まれて了つた、少なくともそんな氣がして來た。祖母も死んだ母の事を決して云はなくなつた。私も決してそれを口に出さなかつた。祖母と二人だけになつても其話は決してしなくなつた。

其内親類廻りが始まつた。祖母が一番先、次に母、それから私と、俥を連ねて行つた。往來の男は母の顔に特別に注意した。母衣の中で俯向き加減にして居る母の顔を不遠慮にヂッと見る男の眼を見ると、其度々私は淡い一種の恐怖と淡い一種の得意と

を感じて居た。

翌々年英子が生れた。

又二年して直三が生れた。

又二年して淑子が生れた。これは今年十二になる。祖母のペットで、祖母と同じやうに色の淺黒い兒である。

又二年して隆子が生れた。又二年して女の子が死んで生れた。隆子はその乳までも飮んで母のペットになつて居た。

それから三年して、眼の大きい昌子が生れた。昌子が三つと二ケ月になつた此正月に又女の子が生れた。

母のお產は輕かつたが、後まで腹が痛んだ。

「未だ餘程痛みますか？」と私が訊いた時、

「蒟蒻で溫めて貰つたら大分よくなりました」

母は力み〳〵答へた。

「こんなに痛むのは今度だけですね」

「年をとつて段々體が弱つて來たんでせうよ」

若くて美しかつた母もこんな事を云ふやうになつた。

（明治四十五年一月）

正義派

上

或る夕方、日本橋の方から永代を渡つて來た電車が橋を渡ると直ぐの處で、湯の歸りらしい二十一二の母親に連れられた五つばかりの女の兒を轢き殺した。

其時、其處から七八間先で三人の線路工夫が凸凹になつた御影の敷石を金テコで起しては下の砂をかきならして敷きかへてゐた。これらが母親の上げた悲鳴で一度に顏を擧げた時には、お河童にした女の兒が電車を背にして線路の中を此方へ向かつて浮いた如何にも輕い足どりで駈けてゐる所だつた。運轉手は眞顏で一生懸命にブレーキを卷いて居る……と、女の兒がコロリと丁度芥子の人形でも倒すやうに輕く轉がつた。女の兒は仰向けになつた儘、何の表情もない顏をしてすくんで了つた。

電車は幾らか下りになつて居るから卷くブレーキでは容易に止まらなかつた。工夫の一人が何か怒鳴つたが、其時は女の兒はもう一番前に附いてゐる救助網の下に入つて居た。然し工夫ま思つた、運轉手臺の下についてゐる第二の救助網は鼠落としのやうな仕掛けで直ぐ落ちる筈だから眞逆殺しはしまいと。——ガッチャンと烈しい音と共に車體が大きく波を打つて止まつた。漸く氣が附いて電氣ブレーキを掛けたのだ。所が、どうしたのか、落ちねばならぬ筈の第二の救助網が落ちずに小さな女の兒の體はいつか其下を通つて、もう轢き殺されて居た。

直ぐ人だかりがして、橋詰の交番からは巡査が走つて來た。

若い母親は青くなつて、眼がつるし上つて、物が云へなくなつて了つた。一度女の兒の傍へ寄つたが、それつきりで後は少し離れた處から、立つたまゝ只ボンヤリとそれを見て居た。巡査が車と車の間から小さな血に染んだ死體を曳き出す時でも、母親は自身とは急に遠くなつた物でも見るやうな一種凄慘な冷淡さを顏に表はして見て居た。而して母親は時々光を失つた空虛な眼を物悲げに細めては落着きなく人だかりを越して遠く自家の方を見ようとして居た。

何處からともなく巡査とか電車の監督などが集まつて來て、人だかりを押分けて入つて來た。巡査は大きな聲をして切りに人だかりの輪を大きくした。

矢張り其人だかりの輪の内で或る監督が其運轉手にこんな事を訊いて居た。

「電氣ブレーキを掛けたには掛けたんだな?」

「掛けました」その聲には妙に響がなかつた。

運轉手は咳をして「突然線路内に飛び込んで參りましたんで……」聲がしやがれて、自身の聲のやうな氣がしなかつた。其所で運轉手は二三度續け樣に咳をしてから何か云はうとすると、監督はさへぎるやうに、

「よろしい。兎も角もナ、警察へ行つたら落着いてハッキリと事實を云ふんだ。いゝか?電氣ブレーキで間に合はず、救助網が落ちなかつたと云へば、まあ云はゞ過失より災難だからナ。仕方がない」と云つた。

「ハア」運轉手は只堅くなつて下を向いて居た。

「どうせ、僕か山本さんが一緒に行くが……」と

其所から急に聲を落として「其所の所はハッキリ申し立てんと、示談の場合大變關係して來るからナ」と云つた。

「ハア」運轉手は只頭を下げた。監督は又普通の聲になつて云つた。

「もう一度確めて置くが、女の兒が前を突つ切らうとして轉がる、直ぐ電氣ブレーキを掛けたが間に合はない。からだナ？……」

此時不意に人だかりの中から

「いゝそら使つてやがらあ！」と云ふ高い聲がした。人々は皆其方を向いた。それを云つたのは眉間に小さな瘤のある先刻の線路工夫の一人であつた。工夫は或る興奮と努力とを以つて、人だかりの視線から來る壓迫に堪へて、寧ろ惡意のある微笑をさへ浮べて其の顏を高く人前にさらして居た。

女の兒を轢いた車は客を後の車に移すと、滿員の札を下げて監督の一人が人だかりの中を烈しくベルを踏みながら其儘本所の車庫の方へ運轉して行つた。其間だけ六七臺止まつて居た電車が順々に或る間隔を取つてそれに從つて動き出した。

失神したやうになつた、若い母親は巡査と監督とに送られて歸つて行つた。

警部、巡査、警察醫などが間もなく俥を連れて來て、形式だけの取調べをした。兎も角其運轉手は引致される事になつて、誰それと一緒に車掌と其他目撃して居た二三人を證人として連れて行きたいといつた。四十恰好の商人で、其車に乘り合はせてゐた男がその一人になつた。あと誰れかと云ふ時に少し離れた處で興奮した調子で何か相談して居た前の三人の工夫が、いゝ年かさの丸い顏をした男を先にして自ら證人に立ちたいと申し出て來た。

下

警察での審問は割りに長くかゝつた。運轉手は女の兒が車の直ぐ前に飛び込んで來たので、電氣ブレーキでも間に合はなかつた、と申し立てた。工夫等はそれを否定した。狼狽して運轉手は電氣ブレーキを忘れてゐたのだ、最初は車と女の兒との間にはカナリの距離があつたのだから直ぐ電氣ブレーキを掛けさへすれば、決して殺す筈はなかつたのだ、といつた。監督は其間で色々とりなさうとしたが、三人はそれには一切耳を貸さなかつた。而して時々運轉手の方を向いては「全體手前がドヂなんだ」と、こんな事をいつてケハシイ眼つきをした。

三人が警察署の門を出た時にはもう夜も九時に近かつた。明るい夜の町へ出ると彼等は何かなし、晴れ〴〵した心持になつて、これといふ目的もなく、自然急ぎ足で歩いた。而して彼等は何か知れぬ一種の愉快な興奮が互の心に通ひ合つてゐるのを感じた。彼等は何故かいつもより巻舌で物を云ひたかつた。擦れ違ひの人にも「俺達を知らねえか！」こんな事でも云つてやりたいやうな氣がした。

「ベラ棒め、いつまでいつたつて、惡い方は惡いんだ」

いゝ年かさの丸い顏をした男が大聲でこんな事を云つた。

「監督の野郎途々寄つて來て云ひやがる――

「ナア君、出來た事は仕方がない、君等も會社の仕事で飯を食つてる人間だ、エヽ？」俺ら餘つ程警部の前で素つ破ぬいてやらうかと思つたつけ」

「それを素つ破抜かねえつて事があるもんかなあ……」と口惜しさうに瘤のある若者が云つた。

――然し夜の町は常と少しも變つた所はなかつた。それが彼等には何んとなく物足らない感じがした。背後から來た俥が突然叱聲を殘して

行き過ぎる。そんな事でも其時の彼等には不當な侮辱ででもあるやうに感じられたのである。歩いてゐる内に彼等は段々に愉快な興奮の醒めて行く不快を感じた。而してそのかはりに報はるべきものの報はれない不滿を感じ始めた。彼等はしつきりなしに何かしらしやべらずにはゐられなかつた。其内にいつか彼等は晝間仕事をしてゐた邊へ差しかゝつた。丁度女の兒の轢き殺された場所へ來ると、其處が常と全く變らない、只の其場所にいつか還つてゐた。それには彼等は寧ろ異樣な感じをしたのである。「あんまり空々しいぢやないか」三人は立留ると、互にかう云ふ情ないやうな、腹立たしいやうな、不平を禁じられなかつた。

彼等は橋詰の交番の前へ來て、其處の赤い電球の下にもう先刻のではない、イヤに生若い新米らしい巡査がツンと濟まして立つてゐるのを見た。

「オイ〳〵あの後はどうなつたか警官に伺つて見ようぢやねえか？」

「よせ〳〵そんな事を訊いたつて今更仕樣があるもんか」

年かさの男がそれについて、

「串戯ぢやねえぜ、それより俺ら腹が空いて堪らねえや」から云ひながら通り過ぎて一寸巡査の方を振りかへつて見た。其時若い巡査は怒つたやうな眼で此方を見送つてゐた。

「ハヽヽ」年かさの男は不快から殊更に甲ん高く笑つて、「惡くすりや明日ッから暫くは食ひはぐれもんだぜ」と云つた。

「惡くすりや所か、それに決まつてらあ」と瘤のある男でない若者が云つた。から云ひながら若者は暗い家で自分を待つてゐる年寄つた母を想ひ浮べてゐた。

「何んせえ一杯やらうぜ」から年かさの男が云つた。

彼等は何かしらん落着きのとれてない心のまゝで茅場町まで來ると、其處の大きい牛肉屋に登つた。二階には未だ四五組の客が鍋の肉をつゝきながら思ひ思ひの話をしてゐた。中には二人で互に酒をつぎ合ひながら、眞赤になつた額を合はすやうにして、仔細らしく小聲で話し合つてる客もあつた。三人は席をきめると直ぐ酒と肉とを命じて其處に安坐をかいた。而して幾らか落ちついたやうな心持を味つた。然し彼等はまだ其話を止めるワケには行かなかつた。

彼等は途々散々しやべつて來た事を傍に客や女中共を意識しながら一ト調子高い聲で此處でも又繰返さずには居られなかつた。

女中共はもう其騷ぎを知つてゐた。而して直ぐ四五人が彼等をとりまいて坐つた。

「何しろお前、頭と手とがちぎれちまつたんだ。それを見ると其場で母親の氣はふれちまふし……」話はいつの間にか大變大袈裟になつてゐた。然し三人はそれを少しも不思議とは感じなかつた。女中共は首を振り〳〵イタマシイといふやうに眼を細めて聽いてゐた。

年かさの男と瘤のある若者とはカナリ飲んだ。二人は更る〳〵警察での問答をまで精しく繰返した。而して所々に、

「こゝらは明日の新聞にはどう出るかネ」と、こんな事を入れたりした。

二階中の客は大方彼等自身の話をやめて三人の話に耳を傾けだした。三人は警察署を出てから何かしらん不滿で〳〵ならなかつたものが初めて幾らか滿たされたやうな心持がした。

――が、それは決して長い事ではなかつた。彼等に話すべき事の盡きる前にもう女中共は一人去り二人去りして、歸つた客の後片附けに、やがて、皆起つて行つて了つた。彼等は又三人だけになつた。其時にはもう十二時に近かつたが、年かさの男と瘤のある若者とは中々飲む事は止

めなかつた。而して其頃は彼等は依然元の不滿な腹立たしい堪へられない心持に還つてゐたのである。最初はそれ程でもなかつたが醉ふにつれて年かさの男は一番興奮して來た。會社の仕事で食つてるには違ひない。然し惡い方は惡いのだ。追ひ出される事なんか何んだ。そんな事でおどかされる自分達ではないぞ。他愛もなく獨りこんな事を大聲で罵つて居た。

暫くして、瘤のない方の若者が、

「俺はもう歸るぜ」と云ひ出した。

「馬鹿野郎！」と年かさの男がぶつけるやうにいつた。「こんな胸くその惡い時に自家で眠れるかい！」

「さうとも」と瘤のある若者が直ぐ應じた。

烈しく醉つた二人がいつの間にか、も一人の若者に逃げられて、小言をいひながら怪しい足取りで其牛肉屋の大戸のくゞりを出た時にはもう餘程晩かつた。何方にも電車は通らなくなつてゐた。

二人は直ぐ側の帳場から俥に乘ると其處から餘り遠くない遊廓へ向かつた。

「親方。大層いゝ機嫌ですね」一人が曳きながらかういつた。

「いゝ機嫌どころか……」と瘤のある若者が答へた。これが直ぐ臺になつて、彼は又話し出した。出來事は車夫もよく知つてゐた。

「へえ、何か線路の方のかたが證人に立つたと聞きましたが、それが親方でしたかい」

掃いたやうな大通りは靜まりかへつて、晝間よりも廣々と見えた。大聲に話す聲は通りに響き渡つた。

年かさの男は前の俥で、グッタリと泥よけへ突伏したまゝ、死んだやうになつて搖られて行つた。後ろの若者は「眠つたな」と思つてゐた。

永代を渡つた。

「オゝ、此處だぜ、――丁度此處だ」後の若者が車夫にかう云つた。

その聲を聽くと、死んだやうになつてゐた年かさの男は身を起した。

「オイ此處だな……一寸降ろしてくれ……エエ、一寸降ろしてくれ」いつの間にかスヽリ泣いてゐる。

「もういゝやい！　もういゝやい！」と瘤のある若者は大聲で制した。

「エヽ。一寸降ろしてくんな」かういつて泣きながら、ケコミに立上りさうにした。

「いけねえ〳〵」と、若者は叱るやうにいつた。「若い衆、かまはねえからドン〳〵やつてくれ！」

俥は其儘走つた。

年かさの男も、もう降りようとはしなかつた。而して又泥よけに突伏すと聲を出して泣き出した。

（大正七年八月）

出來事

七月末の風の少しもない暑い午後だつた。私の乘つて居る電車は廣い往來の水銀を流したやうな線路の上をたゞ眞直に單調な響を立てゝ走つて居た。人通りは殆どなかつた。見渡した所では人造石の高い塀の前に出て居る大道アイスクリーム屋と、其處にしやがんで扇を使つて居る客と、それだけだつた。二人の上には塀の内から無花果が物倦さうに締りのない枝をさし出してゐる。其葉は元氣なく内へ卷きかけて、乾き切つた薄ホコリに被はれて氣持惡さうにヂツと動かずに居た。――私は一番前の窓に倚りかゝつて唯ボンヤリとして居た。（それでも生温かい風が少しは通す）汗のにじみ出た手には讀みさしの雜誌が外へ折返したまゝ卷いてある。

一つの停留場へ來た。降りる人も乘る人も無いので電車は其儘退屈さうに又次の停留場まで走つた。此處で肥つた四十位の女が乘つて來た。片手に毛繻子の小さな洋傘を持つてもう一つの手には濡手拭を握つて、それで頻りに咽のあたりを拭きながら入つて來た。女は汗ばんだ赤い顏をしてゐた。それに物倦い眼ざしを向けた乘客もあつたが、大概は半睡の以前からの姿勢で只ゲツタリとして居た。

乘客は八九人あつた。私の前に電氣局の章のついた大黒帽子をかぶつた法被着の若者がかけて居た。若者は不機嫌な顏をしてウツラウツラとしてゐる。其次に麥藁帽子の鍔を深く下ろした二人連れの書生が二人ながら股を開いたいかつい姿でよく眠入つて居た。素足にかゝつたホコリが油汗で黑くにじんで、それから脛の方に白くぼかしたやうにかゝつてゐるのが、暑苦しいキタナイ感じをさせた。其次に洋服を着た五十以上の小役人らしい大きな男がかけてゐた。よごれたまがひパナマを後へづらして股の間に立てたステッキに顋をのせてポカンと何を考へるともない思ひ切つて氣の無い顏をして居た。目は開いて居るが視線に焦點がない。それでも私に見られて居ると云ふ意識はあつたらしい。今度は背後へ倚りかゝつて薄眼を開いて又ボンヤリとして了つた。すると又急に掌に丸め込んで居た毛ば立つた木綿のハンケチで其ぬけ上つた廣い額を拭つたりした。――私も強い日光にもう目をハッキリとは開いて居られなかつた。まぶたを細くして物を見て居る、それすらつらい。其内に此ジリジリとしたおさへつけるやうな不愉快な暑さが不當な壓迫でもあるやうに私には不平な心持で感じられた。雨に雨具を考へ、寒さに防寒具を考へる人間が暑さだけをから眞正面に受けてそれで辛り切つて居る、いかにも腑甲斐ない事だと云ふやうな事を考へた。

――窓から不意に白い蝶の飛び込んで來たのを見た。蝶は小さいゴムマリをはずますやうに獨り氣輕に、嬉しさうに、又無暗とセッカチに飛び廻つた。

電車は依然物倦い響を立てゝ走つて居る。惰み切つた乘客は自分が何んの目的で何處まで行くかも忘れたやうに唯グツタリとして居た。蝶は既に何町か運ばれたが、それも知らず、唯はしやぎ獨りふざけて居る。此眼まぐろしいひようきん者の動作は厚い布でも卷き附けられたやうな私の重苦しい頭をいくらか輕くして呉れた。

蝶は不意に二三度續けさまに天井へぶつかつた、然し止まりそこなつた。而して下の芝居の廣告へ行つて止まつた。眞黒い木版ずりで「別誂玄冶店」とある、そのかんてい流の太い字から、厚化粧の、深い光を持つた眞白い羽根の浮上つて居るのが美しく見えた。蝶はさん〲はしやいだ後の息でもついて居るやうに急にヂッとしてしまつた。――電車は同じやうに退屈に唯走つた。乘客も同じやうに半睡の狀態でグッタリとして居る。――私もいつか又何も考へなくなつた。

或るダルな數分間が過ぎた。私は運轉手の妙な叫び聲で急に顏を上げた。而してその方を見た時に、小さい男の子が今電車の前を突切らうとするのを見た。子供は此方を見ようともせずに一生懸命に馳けて居る。然し外見からはそれは極く呑氣な馳けやうだつた。しかも、其時は未だ子供は線路内に入つては居なかつた。運轉手は大聲で何か云ひながら急いでブレーキを巻いた。電車ももう餘程のろくはなつて居た。が、それは直角に交はる線を子供も電車も其交叉點へ向つてのゝいゝなりに馬鹿々々しい鉢合せをする爲に走つて居るやうなものだつた。しかも其時は既にどうする事も出來ない事のやうに思はれた。子供の姿が運轉手臺の前のてすりのやうな物のむかうへ隱れると同時にガチャンと音がした。電車は其儘一間ばかり進んだ。私は反射的に急に居耐らない心持から、いつか車掌の居る一番後のところまで自身をのがして居た。私は一人動搖する心持をぐつとおさへて人々の背中を見て立つて居ると、少時して急に子供の大きな泣き聲が起つた。ほつとした。（此ほつとした心持は遙に多く主我的な喜びであつたやうに思ふ。然し私には此心持は後でも却つて愉快に思へた。）

私は近よつて行つた。而して人々の間から窓の外を見た、もう其邊の家々から人々が集まつて居た。烈しく泣く子を抱き上げて今迄私の前に居た電氣局の若者が何か罵りながら恐しい顏で其邊を見廻して居る。若者は氣が立つたやうに成つて居た。子供は手拭地の短い甚平さんを若者の掌と一緒に胸までたくし上げられて其肉附きのいゝ尻を丸出にし、短いくびれた足をちゞめて無暗と大きな聲で泣きわめいて居た。頭の大きな汗もだらけな其醜い顏は一層可笑しく見えた。

「大丈夫々々々」と車掌は子供の尻を撫でながら云つて居た。若者は怒つたやうに、

「一寸もつゝいゝとよく見てくれよ」と云ふと、子供を逆様に、尻の方を高くして見せた。小役人らしい大きな男もいつの間にか其處に立つて居て、

「よく見なくちや いかんよ」と心配さうに自分も覗込んで居た。

「大丈夫です、かすり傷もありません」車掌は一ト通り丁寧に調べて云つた。

少し離れた處で機械のハンドルを下げて、何の表情も無い顏をして居た運轉手は冷淡な調子で、

「又うまく網へ乘つかつたもんだ」と云つた。

それを聽くと、

「エヽ！ 實にうまくやつたね」と小役人はすぐ其方を振り向いた。

「ヤイ〲」子供を抱き上げて居た若者は又大きな聲をした。「自家の奴はどうしたんだナ」

「今迎ひに行つたよ」見物の一人が答へた。

今迄只泣きわめいて居た子供は身を反らし若者の手から逃れようともがき始めた。若者が怒ると子供は尙あばれた。而して今度は若者の顏を眞正面から擲りにかゝつた。

「此畜生」若者は可恐い顏をして子供を睨みながら抱いて居る手をのばし、子供を自分の身體

から離した。
小役人は古いハナマをまだ後へづらした儘何となく落ち着かない様子で其邊をウロ〳〵しながら一人小聲で「うまく、やつた。實にうまくやつた」と云つて居た。而して子供へ近よると、
「もう泣かなくていゝ」から云ひながら、涙と、汗とホコリとできたなく隈を取つた其頬を撫でた。あばれてゐた子供も此善良な小役人を撲らうとはしなかつた。小役人は中腰になつて子供の尻から足の邊を調べて見た。子供ももうチッとされる儘になつて居た。
「す、こりやいかんぜ」から小役人は大きな聲をした。人々の散らばりかけた注意が急に集まると、
「小僧さんいつの間か小便をひよぐつとる」と云つた。人々はドッと笑つた。
若者は默つて眼に角を立てた儘自分の胸を見た、濡のシャツが水落から下へグッショリと濡れて居た。人々は又ドッと笑つた。子供のくびれたもゝに挾まつて居る五分位の綺麗な似指の先はまだ濡つて居た。
「マア此徴鬼は呆れたぜ」若者は子供を抱寄せるやうにして頭で其頭をゴツン〳〵と撲つた。
子供は又烈しく泣き立てた。
「マア〳〵小便位いゝさ」小役人はなだめるやうに云つた。其時、
「來た〳〵」見物の中からから云ふ聲が聞こえて、むかうから四十以上の色の黑い醜い女が駈けて來た。女は興奮して居た。而して若者の手から子供を受取ると直ぐ、
「馬鹿！」と其顏を烈しく睨みつけて、いきなり平ら手で續け樣に其頭を撲つた。子供は一層大きな聲を出して泣きわめいた。女は足をバタバタさせる子供をグイと抱締めると二三度強くゆすぶつて、又、「馬鹿！」と云つた。わきで可恐い顏をして居た若者は其時喧嘩腰に、
「オイ不器用お前が惡いんだぜ」と云つた。それから二人は云ひ合ひを始めた……
それとは又全く沒交渉に小役人は或る興奮から獨言を云ひながら其邊を歩き廻つて居たが、運轉手がもう運轉手臺へ歸つて居る、其處へ行くと、又
「君、實にうまくやつたね」と云つた。彼は殆ど無意味にステッキで救助網を叩いた。而して又「君、こんなうまく行つた事はないよ。えゝ、此網が出來て以來こんな事は初めてだ」と云つた。彼の快い興奮を寄せるにはそれは少し内容の充實しない言葉だつた。彼はもつと云ひたいらしかつた。然し自分でも滿足出來るやうな詞は出なかつた。それに運轉手は割に冷淡な顏をして居た。
もう人立も大分減つた。自分の家の軒の下まで歸つて其處から立つて見て居る人の方が多くなつた。
女は車掌には切りに禮を云つて居た。子供も母のだらしなく垂れ下がつた大きな乳房に口も鼻も埋めてスッカリ大人しくなつて了つた。
若者も小役人も車内へ入つて來た。女は子供の下駄を拾つて歸つて行く。電車は動き出した。
若者は勢よく法衣を脫ぎ、そして小便に濡れたシャツを脫いだ、しまつた肉附きの白い肌が現れた。彼はシャツの濡れたところを丸め込んで、それで忙しく水落から下腹の邊を拭いた。肩から腕、胸あたりの筋肉が氣持よく動く。若者が一寸顏を上げた時に向ひあひの私と視線が會つた。
「往生々々」と云つて若者は笑つた。先刻の氣の立つたやうな恐しい表情は全く消えて善良な氣持のいゝ、生き〳〵とした顏つきになつて居た。
四十位の肥つた女と小役人とがむかうで何

か話して居る。小役人は手附きをしながら熱心に何か怒つて居る。

書生も二人で話を始めた。

暑さにおかいけて半睡の状態に居た乗客は皆生き生きした顔附きに變つて居た。私の心も今は快い興奮を樂しんで居る

ふと氣が附くと芝居の廣告に止まつて居た無邪氣な、いゝ、いゝ、おかみさん達はいつか電車を去つて、もう其處には居なかつた。

（大正二年八月）

速夫の妹

一

速夫とは級も年も二つばかり下たつたけれど家が近いのでよく遊びに行つた。

古い事でハッキリは覺えないが初めよく行つたのは何でも自分が八つか九つの頃だつたと思ふ。當時速夫の父は東京府の知事で芝の山內に其官舍があつた。古風な大きい煉瓦造りで一寸西洋の古城といふ趣のある建物だつたと思ふ。尤も今行つて見たら案外小さな家かも知れない。庭にはカナリ大きな池があつて小さな魚が澤山泳いでゐた。何といふのか一寸鮒に似て腹の所が赤や藍で綺麗に彩つてある魚とか鯉などがゐた。中島へ渡る石橋の上から飯粒を着けた鉤をたれると直ぐかゝつて來た。其他烏貝といふ眞黑な大きな貝が居た。速夫の阿母さんが五つ六つ放したのださうだが後には、此池へ流れ込む溝の方まで繁殖したものだ。溝といつても裏の山から流れ出る水で淸いものだ。吾々は此溝へ入つてよく烏貝を取つた。

烏貝は食へないと云ふので取りは取つても其儘池へはふり込むか、只破つて見て捨てるかした。或時速夫が其中に眞珠があるといふ事を聞いて來て、騷ぎをした事があつた。皆で藥屋から小さなピンセットを一つづつ買つて來て眞珠を探した。それでも薄黑い小さな粒が五つ六つとれたと覺えて居る。

此時分お鶴さんは勿論居たに相違ない。が、どうしても自分の記憶には浮んで來ない。お鶴さんは自分より二つ下で當時六つ位の筈である。

其後　其年の內か翌年か覺えないが、丸山の五重の塔の下の自家から學校へ行く途、辨天樣の池から流れ出る大きな溝の緣を六七町許りの可恐い顏の婆さんに連れられて通る女の子によく出會つた。眼の大きい丸々と太つた子で、西洋人の子が被るやうな大きな帽子を被つて、ボタンで止める小さな半靴を穿いて居た。此女の子には殆と毎日會つた。後で知つたが、それがお鶴さんで、芝園橋を渡つた所の小學校に通ひ出した時分の事だつたのだ。

それから二年程何といふ理由もなしに、速夫の所へ遊びに行かなかつた。學校は四谷で芝からは隨分長道中だから速夫とも會ひさへすれば屹度一緒には歸つて來たが、つひぞ家へ寄つたと云ふ事はなかつた。

此二年の間に速夫の父は知事をやめて、官舍の直ぐ下の元は寺だつたと云ふ大きな家を買つて、其處へ引き移つた。寺と云つても昔、增上寺に屬してゐた學寮のあととかで本堂といふやうなものもなく住居としても別に不都合のないやうな建物であつた。

速夫の父は此處へ引き移ると間もなく、食道癌で亡くなつた。

これは後で聞いたのだが、食物が喉を通らぬと云つて癇癪を起し燒おむすびをグイ〱と呑み込んだといふ話がある。かうすれば、イカな癌でも潰れて下りるだらうと云ふ考へなのだ。薩州藩で維新の時も東奔西走、隨分烈しい働をした我武者羅たから醫者の言葉も聞かずに色々亂暴な事をした。それが餘程死を早めたらしかつた。

速夫の兄に時夫と云ふ人がある。中々の美男子で、それが爲か、どうかは知らないが來た子

供の内から道樂を覺えて、烏森の何とかいふ藝者と、何處か矢張露月町あたりに世帶を持つた事があるのださうだ。それが十八九の時だから兩親も心配した。其處で先づ烏流の格でシカゴの學校へやつたのだが五六年も居たのだらう。もう少しで大學も卒業しようといふ所で、今の爺さんの病の騷ぎだ。早速呼び返されて、それが死目に會つたかどうかは聞かないが、兎も角、兄の時夫は其時歸つて來たのである。

其當時に相違ない、學校の往き歸りに遠夫から、よく米國の學校の話を聞かされた。大學校で Senior と Junior とが丸太のやうなステッキの取合ひをする話などは三度も聞かされて、三度共面白いと思つて聞いたものだ。

遠夫の家の三年間にはまだ色々な事もあつたやうだが自分の知つてゐるだけはこんなものである。

二

夏の初め頃と覺えて居る。或る日遠夫と學校から歸つて來る途、自分は器械體操の蔭下りがどうしても可恐くて出來ないと云つたら、助けて貰へば直ぐ覺えられる、よければ寄らないか、自家の鐵棒で僕が教へて上げるからと云ふ。そんなら寄らう、と飯倉から妙な路地を拔けて行くと遠夫の家の直ぐ裏の山の上へ出た。鐵棒はそれを下りた畑の傍にあつた。學校のから見ると餘程高くて飛びつけない。遠夫に後から抱いて貰つてやつとぶら下つたが、錆切つてゐるので掌が痛かつた。

自分は元來かういふ事には器用な方だつたから、五六度襟首を持つて助けて貰つたら、あとは獨でも出來るやうになつた。其時遠夫が、

「君、もう歸るかい？」と聞くから、

「もつと、やつてる」と答へた。

「そんなら、踏臺を持つて來てやらう、一々抱くのは厄介だ」

かう云つて遠夫は畑をぬけて母屋の方へ駈けて行つた。

待つて居る間、自分は一人で傍の棒から上つて何遍も蔭下りをやつて見た。兩脚を掛けてから手を離す時が一寸可恐いが、逆に下つて仕舞へばもう平氣だ。振るのもやさしいし、下りるのもそんなに六ケしくはない。一度餘り振つたもので、飛び下りた時、勢が餘つてイヤッと云ふ程尻餅をついた。砂はあるにはあるが、よく掘りかへしてないから、いやに腰や頭へグーンと響いた。

遠夫は未だやつて來ない。今度は怖氣がついたので、又逆にぶら下つた。自分は其儘蝙蝠のやうに只フランと下つて居た。其邊の景色が馬鹿に綺麗に見える。青い空にかすれた雲が長く引つぱつてある。丸山の高い杉の木で何十と云ふ烏が騷いでゐる。黑いのが入り亂れるのが小さく、蚊のやうに見える。——額が段々ほてつて耳がガン／＼云ひ出した。何だか額の肉がジーンと痺れるやうな一種のいゝ心持がするので自分は面白半分其儘眼をつぶつて下つてゐた。耳がジーッ／＼と鳴る。

「富や、此方から」

眼を開くと九つ許りの女の子が、ビスケットを入れた支那燒の皿を大事さうに捧げて來る。

「お畑を拔けるとお母ア樣に叱られますから、廻りませう」かういつて茶を持つてついて來た女中が女竹で結つた圍ひの外を廻らうとすると、

「いけない、ツウちやんの後に着いて來なくちやいけない」と自分の身長程に延びた玉蜀黍の並んでゐる畑の道へずん／＼入つて來る。

自分は輕く振つて下りた。尻餅はつかなかつたが、餘り長く逆になつて居たので、ふら／＼

とした。

「速樣は今、お召更へですから直ぐに入つしやいますよ」かういひながら女中は側の石の上へ女の子から受取つた皿と茶とを置いて、

「召上れ。――さ、御辭儀をして參りませう」といふ。

「私、見てるわ」

「ぢや、富やだけ御免蒙りますよ」

かう云ひ捨てゝ女中は小走りに畑の圍ひの外を廻つて行つて了つた。

女の子は石の上の菓子皿を少し押すやうにして、

「召上れ」と大きな眼で自分の顏を見つめて云ふ。

「速夫さんが來てから」

「直ぐいらしてよ」

女の子は又、

「今、貴方の仕てらした事、速さんも出來てよ」

といふから、自分は今速夫から教はつた許りだと云つたら「左う」と故意とらしい驚き方をして見せた。其處へ「失敬々々」と速夫がまだ新しい晴着を着いて驅けて來た。速夫は洒落た半ズボンを穿いて來た。而して赤いづつくの靴を穿いて、運動にはこれでなくちや駄目だ、第一これを穿くと、馬鹿に身が輕くなると勢よく色々な業を仕て見せた。それから自分の羨しくてならなかつたのは米國の大學で運動の時に被るとか云ふ、輕さうな、洒落た鳥打帽子だ。赤地に黄の條が四五本卷いてある。その赤も少し海老茶がかつたいゝ色で、品は今思へばこはいと云ふやうなものかも知れぬ、何しろ光澤があつて、華美だから甚く自分の心を惹いた。然し速夫の兄さんが向ふで被つてゐたものだから速夫が被つてもユル／＼だ。海老あがりでピンと跳ねて上つた時、帽子だけがスッと脫げて前へ落ちた。それが又馬鹿に調子がいゝので、女の子はキャッ／＼云つて笑つた。速夫は何遍も何遍もそれをやつて見せた。

自分は初めは帽子が惡くなりさうで心配したが仕舞には自分も貸して貰つてやつて見た。海老が出來ないから足かけでやらうとしたら、鐵棒へ足をかけるかかけないに帽子はバタリ落ちて了つた。女の子は又それを面白い事にして大笑ひをした。

速夫が菓子を食はうと云ふから一寸中休みをした。

「お前もおたべ」かういつたが、女の子は首を振つた。

菓子を食ふと今度は振りいゝいゝの競爭をやつたが、速夫には迚も敵はない。

間もなく有馬のブウ、（舊有馬邸にある海軍造兵工場の笛の事）が鳴つたから自分はもう歸ると云つた。

「ぢやア又來給へ」と速夫は先に立つて、

「庭の隅から直ぐ辨天樣の前へ拔けられる道があるんだよ」かういつて庭の方へ案內して呉れた。女の子もついて來た。

庭では高い所で植木屋が松の新芽切りをやつてゐた。上でパチン／＼と鋏の音がする度に三寸程の松の芽が落ちて來る。三人は暫く立つて見て居た。

「君々、面白い事があるよ」と突然速夫が云ひ出した。「此新芽を一トッとこ ポキッと折つて水ン中へ入れると走るよ。辨天樣の池へ行つてやつて見ないか」

無論自分は賛成した。二人は落ちた新芽を拾ひ集めて兩手へ盛つて出かけた。するとついて來た女の子が、

「速さん、私にもさしてね」といふ。

「そんな事を云はないで自分で持つておいでよ」

「ぢやア、とつて來るわ」

「此處で待つてゝやるから、早くとつといで」
女の子は身をはずまして茂つた木の間を駆けて行つた。
待つてゐるが中々來ない。
「植木屋ア、そんな所へのつて落こちたら大變だよ、死ンぢまふよ。そいで罰金だよ」こんな事を云つてるのが聞える。
「馬鹿な事を云つてやがる」と速夫は獨言のやうに云つて今度は大きな聲で、
「早く來ないと置いてきぼりだよ――」と怒鳴つた。女の子は直ぐ駆けて來たが持つて來た新芽は昨日切つて凋びて了つたのや、未だ小さくて油を十分に含んで居ないやうなのが多かつた。
三人は辨天樣の池の石の欄干へ倚りかゝつて新芽を折つてははふり、折つてははふりした。新芽は其折り口から出る油の勢でスーツと水の上を走る。自分たちは魚形水雷だと云つて喜んだ。
先刻のブウで退けた有馬の職工が眞田で結へた四角い辨當箱をぶら下げてぞろ／＼通る。自分も速夫と女の子に別れて自家へ向つた。此日始めて、いつも會つた女の子が速夫の妹だといふ事を知つた。
其日から自分はちよい／＼速夫の家へ遊びに行くやうになつた。

三

其時分、赤羽根橋から芝園橋へ行く公園側の河岸が取拂ひになるといふ噂が切りにあつた。自家でも今直ぐといふ事はないと知つて居たが、丁度赤坂の氷川町にいゝ家が見付かつたので間もなく其處へ引越した。それから四年間はたうとう一度も速夫の家へ行かなかつた。
此四年間に小說本を讀む事を覺えて、隨分色色な物を見た。初めが少年文學、次が探偵小說それから、かういふ人はあるやうだが弦齋から浪六を讀んだ。丁度其浪六を讀んで居る時分だ、何かの話で速夫が浪六の小說なら僕の兄貴がすつかり揃へて居ると云つた。貸して吳れるかと聞いたら、失くさなければ貸してもいゝ、然し小說本を學校へ持つて來ると、怒られるから取りに來ないかと云ふ。
それで自分は四年振で速夫の家へ行つた。先とは大分模樣が變つて居た。大きな屋根のついた古臭い門が無くなつて、白木の冠木門が建つた。其突き當りに新しく當世風の玄關が出來て、元の悪くダヽツ廣い玄關が其儘速夫の部屋になつて居た。テーブル、ソーファ、椅子、そんな物が雜然と置いてある。
四疊も敷ける敷臺にもテーブルだの、破損れかゝつた籐椅子だのがあつて、速夫に云はせると、これが其部屋のヴェランダださうだ。
速夫の部屋の向うにも一ト部屋あつて其處には大村と云ふ美術學校の洋畫科の生徒が居た。頭の上の方が開いて首筋の方へすぼんで、それで後頭部がスベラ落ちだから、後から見ると何だか可笑しい。速夫は此人の事をじやもじと呼んで居た。
新しい玄關のわきにも一ト部屋あつて、其處には永井といふ鹿兒島から出たての大きな書生と赤坊の時分から淺香家 速夫の姓 に養はれて居る二郎兵衞とが居た。此人も本當は二郎だけなのを速夫が二郎兵衞々々々々と呼び慣したので後では速夫の阿母さんまでが左う云ふやうになつたのだ。二郎兵衞は速夫と同年だつたと思ふ。
速夫は二郎兵衞を呼んで兄さんの部屋から浪六の小說本を皆持つて來いと命じた。
「中々重いや、こりやア」こんな聲がして二郎兵衞が本を持つて來た樣子だ。
「速樣、一寸こいつを開けて頂きます」と外

から唐紙を足でがた〳〵云はした。開けてやると、「よいきたな」と其處へドスンと置く。中々ある。見ると未だ讀まないのが澤山ある。名さへ聞かないのが三つ四つあつた。

「オヤ、河村さんですね」とさも驚いたやうにいつて唐紙の所から二郎兵衞が自分を見下してゐる。

自分は笑ひながら只其顏を見た。

「驚いたなア、隨分大きくなつたなア」と二郎兵衞が云ふのを速夫が、

「生意氣云つてやがら」といつて、更にいま〳〵しさうに「生意氣云ふねえ。生意氣いふねえ」と繰返したので二郎兵衞は大聲で笑ひながら引返した。

速夫は兄貴が浪六贔屓で奴之助と云ふのは淺香の假名だらうと友人等に評判されたものだなど云ふ話をした。自分は此日「たそや行燈」と「鬼あざみ」とを借りて歸つた。

二度目に行つた時、速夫の部屋で話して居ると唐紙の間から隙見をする者がある。チラッと見たら、バタッと閉めてバタ〳〵向うへ駈けて行く。

「鶴兵衞だよ」と速夫は平氣な顏をして居たが自分は少し平氣でなかつた。乾度二郎兵衞が何とか云つたんで覗きに來たのだなと思つた。

それからは毎土曜日大概出かけて行つた。いつも夕方まで遊んでは歸りに二三册小説本を借りて來る事にして居た。

お鶴さん、――其前よく往つた自分には皆、つうちやんと呼んでゐたが、どういふものか今はお鶴さんといふ――にも度々會つた。

何んでも四五度目の土曜だつたと思ふ。速夫と二郎兵衞と自分と三人で、玄關の前で、キャッチ・ボールをしてゐた。自分は其頃小説本が好きだつたが運動事もカナリ得意で、ベース・ボールは級の選手でセコンド・ベースをやつてゐた。速夫は五年級のピッチャーだつた。其日も門の戸を閉めてネットの代りにして、自分と二郎兵衞とが其前に立つて玄關の所からはふる速夫の球を受けて居た。

速夫のうしろに、大村と永井とが、永井は卷煙草、大村は銀豆の煙管で、スパ〳〵やりながら上り口に腰かけて見てゐる。其處へお鶴さんが出て來て、無理に二人の間に割り込んで腰かけた。

速夫へ球を返す時よくそつぽをはふるので二郎兵衞だけはゴロで返して居た。速夫の球は中中強いけれど、カーヴが出ないから樂だ。自分も得意ではふつてゐる內、どうしたはずみか手許が狂つて力一杯にはふつた球が速夫の一間許り前でロング・バウンドになつた。しかも小砂利で急にバウンドが變つたから速夫の肩を越して、後ろに居たお鶴さんの額にぶつかつた。コツンといふやうな音が自分の居る所まで聞えた。一寸驚いたけれどお鶴さんがいやな顏をしながら速夫を見て笑つて居たから、默つて少時見てゐたら、其內、お鶴さんの顏から笑ひが消えていやな顏だけになつたと思ふと急に下を向いて泣き出した。二郎兵衞の駈けて行く後から自分もついて行つた。二郎兵衞は、

「バウンドだからなう强かないよ。大村さん、いゝ、たんこぶが出來たのかい」と側へ寄つたつて、

「お嬢さん泣いちや駄目ですよ、泣いちや駄目ですよ」といふ。

「唾を塗つて置きなさい」と永井がいふ。

「唾もよからうが前髮の中ぢや一寸塗れないよ」と大村がいふのを、

「何、塗れん事があるもんか」と永井が厚い脣に指を當てゝ今塗つて見せるといふ風をした。

其間に速夫は女中を呼んで、水で冷すやうにと命じてお鶴さんを連れて行かした。皆に觸られてこはれたお稚兒が頭の上でぐら〳〵して居

る。其後姿を見て何だか非常に氣の毒になつた。速夫に謝罪らうかとも思つたが、それも變だから默つて立つて居ると、

「さあ、やらう」からいつて速夫は球を自分へ渡してグラーヴをはめた。

暫くやつたが、どうも氣乘りがしなかつた。速夫はよければ晩までゐないかと云つたが自分は五時頃自家へ向つた。

四

次の土曜にも行つた。門を入ると、玄關の前で速夫とお鶴さんとが追ひかけたり、追ひかけられたりして巫山戯て居る。今日こそ一寸謝つて置かうと思つて居たのだが餘り元氣なのでそんな氣も何處かへ行つて了つた。

「いらつしやい」とお鶴さんがお辭儀をして擧げた顏を見ると、右の眼の下に白墨を水にでも溶かしたやうな物がベッタリ塗つてある。

「その白い者は何？」と聞くと、狼狽て袂でそこを隱して、眼だけで笑つて、速夫と自分の顏を見くらべて居る。

「それかい、それはねえ――」と速夫は何かいはうとしたが、お鶴さんがいきなり飛びついて、「厭よ〳〵」と袂で速夫の口をふさがうとする。

「こいつは馬鹿だよ」と速夫は逃げながら「それはねえそれはねえ」と故意と後をいはない。お鶴さんも仕舞に諦めたか、

「いゝわ〳〵」といやに白い眼を見せて行つて了つた。

「鶴兵衛の馬鹿やい」と戯弄つたが出て來ないので速夫は歸つて來て「それはねえ」の後の話をした。

その朝、屋根の草を取りに來た瓦屋の階子に乘つて四段目から滑り落ちて擦剝いたのださうだ。それを二郎兵衛の婆さん――よく先にお鶴さんの學校通ひについて往つた婆さん――が擦傷には生米を噛んでつけるのが一番だと入齒の怪しい力でボリ〳〵噛んで、泣いてゐるお鶴さんの眼の下になすりつけたのださうだ。

「あの婆アの噛んだ米ぢやア、いくら藥でもきいゝ、きたなくてやりきれない――だけど、お鶴は平氣さ。赤ん坊の時から世話になつてゐる婆だからきたなくもないんだらう」と附加へた。

五

間もなく春休になつた。其頃はもう浪六の小說も總て讀み上げたが、チョイ〳〵來る癖がついたので休中は大概一日措き位に出掛けた。

遊ぶ事は何とキマリもなかつたが主にボールをした。お鶴さんはボールの時こそ餘り出て來なかつたが、外の遊びだと、よく仲間に入つて來た。

お鶴さんが末ツ子で、速夫と一番上の時夫との間に、尚お徳さんといふ人と健夫といふ人とがゐた。此健夫は自分が行かなかつた四年の間に肺病で亡くなつた。

お徳さんといふ人は同胞中での才女であつた。其時分二十一二だつたと思ふ。その前、ある所へいゝ緣があつて、殆どキマリかゝつたのだが、其行かうといふ先の人の妹と時夫とのの話がうまく行かなくなつたのでそれが妙にこぢれていたらとうとうお徳さんの話までが破れて了つたのださうだ。お徳さんはお鶴さんなどとは反對で元來感情の鋭い人だつたから、それから一二年ヒステリー症でカナリ苦しんだといふ事だ。

自分は其時分お徳さんを何となく尊敬してゐた。お徳さんの話は面白かつた。よく淸少納言――お徳さんは此人が大好きだつた――の話を聞いた。又自分が光琳や抱一の名を知つて此趣味を吹き込まれたのもお徳さんからであつた。それからお徳さんは生田流の琴の名人だつ

た。其後餘程あとの事だが、或る慈善音樂會で何とかいふ舞の地でお德さんが彈きながら唄つた事がある。其歸途廊下で人が「うまいもんだ」と讃めてゐたのを聞いて、甚く得意に感じた事があつた。

　淺香の同胞は皆琴を彈いた。お德さんの次に上手だつたのが速夫だ。速夫は「六段」と雲井の「みだれ」とかいふのきり知らなかつたが、其二つなら中々上手に彈いた。其次はお鶴さんなので、よくお德さんに敎はつて居た。お德さんが、

「お鶴さん、お琴のおさらひですよ」と速夫の部屋を覗く時は、いつも眉根に皺を作つて不承不承廻つて行く。

　時夫も彈いた。琴は隱し藝だから滅多には演れないと得意であつた。或る日、

「今日、高田ン所へ往つたら小母さんが是非時さんのお琴を承はりたいものね、とかう云ふんだ。弱つたが、そら、あすこは山田だらう。所で、私の流儀は生田ですからお宅の爪では出來ませんとやつてやつた。すると側にゐた安子さんが生田の爪もムいますよと來たね。爺さんが又乘氣になつて琴を持つて來さすといふ始末だ。流石の乃公も進退谷つた、實に胸を痛めたよ。六段をやりますか其代り、それだけで御免を蒙りますかなんかで、彈き出すと、一段二段と三段までは先づ無事に進んだ。が、四段目へ移らうといふ所で、どうしたのか二段目を始めようといふ所へ還つて了つた。

　若い連中には露れても爺さんや小母さんには解らないから知らん面をして又三段目まで來て、四段目へ移らうとすると、つい又二段目の初めを彈いて了ふ。安子さんと君子さんがクスクス笑ひ出すんだ。左うなれば此方もやけだからその二段目が濟むと爪をはづして澄して御辭儀をしてやつた。何も知らずに小母さんなんか切りと讃めるぢやないか。弱つたネ。すると、安子さんが大眞面目で『あの兄さんの御流は何つて仰有るの？』と聞く。畜生と此方も眞面目で『エ、幾度流つてえんです』と云つてやつた。」からいつて大笑ひをした。「いゝ下げだアネ」と附加へて又笑つた。

　時夫は子爵で其頃貴族院の議員などをして居たが、至つて腰の低い氣の輕い人だから吾々の居る所へ出て來てよくこんな話をして往つた。

　尤も其頃も道樂は盛にやつてゐたらしく、いつか速夫と銀座の方へ散歩した時、芝口の郵便局の横で淸吉といふ抱車夫が空俥をひいて薬屋の方から歸つて來るのに會つた事がある。其時淸吉が笑ひながら、今日北廓で會つた事はお母ア樣に内證に願ひますと速夫に頼んでゐたのを覺えてゐる。

六

　春休みも終つた。終つてから初めて往つた時、自分は速夫の部屋の鴨居に菓子折の蓋でもこはしたやうな杉板に荒い筆遣ひで描いたお鶴さんの肖像を見た。勿論大村の筆で、似てゐると云ふ出來ではないが、お鶴さんが、いやになり澄して顋を出し加減に壺口をして、下眼使ひをしてゐる顏が可愛らしく出來てゐる。正直にいへば自分はそれが非常に欲しかつた、又さういへば呉れるとは思つてゐたが、どうしても云ひ出せなかつた。

　速夫も大村も、當人のお鶴さんも何とも思つてゐないらしい。何でも三ヶ月許りしてからだ。いつも置いてあつた鴨居にそれがなかつた事がある。自分は誰が貰つて往つたのかしらと妙に不安な感じがした。

「あすこにあつた繪はどうしたの」と殊更何氣なく速夫に訊いて見た。

「本箱の後へ入れつちやつた」
「何故」
「餘り、うまくないぢやないか」
「そりやさうだね」と心にもない返事をして、
それつきりになつて了つた。
其の後行く度に本箱の後ろを見たが、例の杉板は塵に塗れて、いつも其處にあつた。
話が外れたが、自分が此繪を初めて見た日、速夫と大村と彼の所謂ヴェランダで紅茶を飲みながら時夫の持つて歸つた米國の古雜誌を見て居た。
門の方から小きざみに來る靴音を聞いて自分は何氣なく額を擡げると、お鶴さんが海老茶の袴を穿き、赤い甲斐絹の日傘をかたげて、友禪の包を抱へ、敷石の上を踵でコツ／＼と音をさせ、其靴のツマ先を見ながら歩いて來る。不圖、誰か見てゐるのに心附いたやうに額を擡げると、大きい眼をして、
「いやアーねえ」といつて日傘で額を隠すと駈けて勝手の方へまがつて行つた。其時分小學校の生徒は袴を穿かなかつたものだ。
「あいつ袴なんぞ穿いてか恥しいもんだから」と速夫は笑つてゐた、お鶴さんは此學期から虎の門の女學校に通ふやうになつたのださうだ。
其處へ、時夫が縞のモーニングかなんかで傑作を從へて歩いて歸つて來た。自分を見ると、
「ヤア、いらつしやい」と景氣のいゝ言葉をかけて、「おい清吉、一寸その俥を持つて來て見たまへ」と勝手の方へ行かうとするのを呼び止めて、それから新しく作つた俥の講釋を始めた。
「此母衣の骨を四本にしたのは一寸洒落てるだらう、洋傘で云ふと、六間と云ふ所なんだ、それから、此泥よけだが此奴を此處まで延ばしたのも新工夫だが清吉に云はせると風に向ふ時が苦しいさうだ――尤も追風となればそれだけ只の俥より樂な理だ。なあ清吉」清吉は只笑つて居た。
何か食べて來たと見え、淡紅色の絹ハンケチで口を拭き／＼お鶴さんが出て來た。
「河村さんは酷いのね、默つて見ていらつしやるんだもの」
「貴樣が餘り澄してるからさ」と速夫がいふと、
「よござんすよ」お鶴さんは一寸其方を睨んで空いた椅子に腰を下した。
「お兄樣、今日學校で西洋人にあつたのよ」
「女かい？」
「えー。私の顔を見て、ミス、エセカーと首を傾げて假聲でいふつていふのよ、何の事かと思つたらお隣の方が貴方よ／＼と仰有るから驚いて起つたわ」
「はゝあ、淺香の事ですな」と大村が左も興ある事のやうに云つた。
「さうなのよ」とお鶴さんがマセタ口ぶりでいふ。
「乃公が彼地にゐた時でもアサカと滿足に發音する奴はなかつたな、大概エセカとかアセカとかいつたな、エセケーなんて來ると少し驚くよ」
時夫は去年の夏國府津の停車場前の茶屋で西洋人がアーン、セーンを呉れといふので、何か十錢の物を註文してるのかと思つて茶屋の奴がまごついてゐるから聞いてやつたら炭酸水の事だつたといふ話をして笑つて居た。
時夫が居間へ引きとつてから二郎兵衛や永井なども加はつて其日は夕方まで面白く話した。お鶴さんは時々ミス、エセカーと西洋人の假聲を遣つては獨り興じてゐた。

七

二年經つた。其間には淺香の家にも種々な事があつた。
自分が行つて居る時、折々色の淺黑い脊の高

い海軍中尉が來ては速夫のお母さんやお徳さんと話して行くのを見た。時々はお徳さんが得意の琴を聞かしてゐる事などがあつた。自分は此海軍士官が好きだつた。其時分、自分は海軍志願だつたけれど、好きなのはそれだからといふ理ではなかつた。何となく兎も角も好きだつた。この人の乘つてゐた松島が品川沖に來た時速夫と遊びに行つて歸りに米國の新しい軍艦帽を貰つて來た事などもあつた。

　暫くしてお徳さんは此人の奥さんになつて葉山へ新しい家庭を作つた。速夫と泊りがけで遊びに行つた事もある。

　何でも其年の歳暮だつたと思ふ、お鶴さんが若し私がお嫁に行つたら赤ン坊をたんと生んで親類中へ御歳暮にくばるんだと云つて皆を笑はせたのは。

　それから間のない正月二日か三日の事であつた。自分は年始がてら晝過から速夫の所へ遊びに行つた。速夫は親類へ行つたとか、留守で、お鶴さんが二郎兵衛や大村や永井や女中などを對手に追羽子をしてゐる所だつた。落すと白粉を塗るのでお鶴さんは鼻筋と頤へ一本づつ入れられてゐた。永井の額は大村の惡戯だらう、繪で見る朝比奈のやうに滅茶々々に何かがいてあつた。

　自分も入つてやつた。滅多に落さなかつたが、永井から寄越した見當違ひの羽子を受損じてたうとう落して了つた。自分は仕方がないから神妙に顏を出してゐるとお鶴さんが白粉を含ました筆を持つて來て額に一寸程の長さに一の字を書いた。其前、落したのを二度誤魔化して仕舞にとぶ／＼につけた筆で額いつぱいに二重丸を書かれた二郎兵衛がお鶴さんの肩越しに自分の額を見てにや／＼笑つてゐたが、お鶴さんが玄關へ筆を置きに行かうとした時、不意に、

「エソヘーン、……萬歲！」と叫んで空へ羽子板をはふり上げて獨り騷いだ。大村も永井も只にや／＼笑つてゐた。自分は眞赤になつた。幸ひにお鶴さんが何も氣が附かなかつたので直ぐに後を續ける事が出來たけれども兎も角閉口した。

　速夫が歸つて來たのは日暮だつた。間もなく時夫も歸つて來て、今晩は一つ乃公の部屋で飯を食はないかと云ふので膳部は其處へ並べられた。時夫の部屋と云ふのは昔風の妙に廣い、天井の高い部屋で、鴨居には川村清雄の三尺に四尺の油畫がいゝ加減に掛けてあつた。

「お正月だ、兎も角、その前に一トつおいとそを上げようぢやないか」かういつて時夫はお鶴さんに雌蝶雄蝶のお銚子と三つ組の木杯とを運ばした。

「甘い奴は[illegible]だから御免蒙つて僕は此方のを勝手に頂きますよ」と云つて時夫は琥珀色をした強さうな西洋酒を小さな酒飲みコップに注いだ。

「お鶴、河村さんに注いで上げないか」

　お鶴さんは自分の額を見て笑ひながら三つ組を前へすゝめて、一番上のに一ぱい注いだ。

「そいつを三つ其片付けて見ないか」と速夫がいふ。自分はそれには答へず、兎も角一番上のだけを平げて下に置いた。

「甘いからいけませう」と時夫がいふ。

　自分は此時實に妙な事を考へて居たのだ。十六か七の子供にしては憎らしいやうな考へだけれども、其時分自分はもう紅葉や天外を見てゐたから別に怪しむ程の事でもないかも知れぬ。それはかういふ考へだ。これから何年先か知らない。七年後か十年後か知れぬけれども、何時か自分――その自分は多分海軍の禮服を着て來る――とお鶴さんとはかう三つ組を間にして坐る事がある。屹度あるのだ。だから自分はお鶴さんが、今飲めと注ぐだけの酒は皆綺麗に飲んで

やらう、かういふ考へである。理窟にも何にもなつて居ないがそんな氣で小から中、中から大と見事皆平げて了つた。

其晩自分は非常な醉ひ方をした。殆ど前後不覺で眠つて了つた。餘り歸りが晩いので自家から寄越した書生には少しおとそに醉つて今晩は歸られないから明朝早く此方から御送りします、決して御心配なさるやうなことではありませんといつて還したのださうだ。翌朝自分が眼を覺した時には、もう自家からの迎ひが俥をもつてまだ開いてない門の所に待つて居た。それは冬の五時頃だからまだ暗い内であつた。

二年間に其他色々な事があつた。青梅の材木問屋から呼ばれて、青梅の上の何とかいふ所から狩野村まで皆でいかだに乗つて急流を下つた事がある。秋で兩岸の紅葉の美しかつた事、流れが潭をなす澱りへ來るとお鶴さんが可恐がつて速夫の手をシッカリ握つてゐた姿を今も憶ひ出す事が出來る。

今自分の部屋の前と土藏の横手へ植ゑてあるいよねい桃は此二年間の何時か、速夫の阿母さんに貰つて來た苗の大きくなつたもので、自分にとつては當時の最もよい記念である。

こんな風に二年經つた所で、時夫は家の新築を思ひ立つた。

八

新築は凡そ一年の計畫で、其間だけ家族は小さい所に借家暮しをするといふ事になつた。丁度、築地三丁目の市川團十郎の屋敷裏に適當な家が見つかつたので兎も角其處へ引き移る事になつた。下町の事で今迄の無暗とだゝッ廣い家と違ひ　大村、永井までは連れて來られなかつた。大村は神田の素人下宿へ永井は三田の下宿屋へ行く事になつた。時夫すら部屋が足らぬとの理由で家は速夫に任せ、自分だけ川向うの水明館とかいふ宿屋に泊つてゐた、但し、それは表向きの理由だつたかも知れない。

然し兎も角も狹い家には相違なかつた。而してこれが自分とお鶴さんとの間を大變近くした。速夫の居間は往來に面した二階の六疊で、唐紙一つへだてた後ろの四疊半にはいつもお鶴さんが何かしてゐた。だから、此方の話もよく聞えたらうし、向うの話もよく聞えた。

或日速夫と寢そべつて新刊の雜誌を讀んでゐると、

「お前の襟のは、これは垢だよ」と速夫の阿母さんがサリッ／＼と剃刀の音をさせながらいふのが聞えた。

「うそよ、昨日お湯でよく洗つたんですもの」

「うそぢやアありません、これを御覽、こんな毛があるもんですか」

「毛よ／＼、こんな垢つてないわ」

速夫は笑ひ出して、

「馬鹿！」と此方から聲をかけた。お鶴さんは默つてゐる。

「本當に此人は馬鹿だ」と阿母さんのいふ聲がして、又暫く／＼は剃刀の音だけが聞えた。

「速さん、お前、河村さんに御免蒙つて一寸お風呂へ入つてお吳れ。これが濟んだらお鶴を入れてよく洗つてやりますから」

「へえ――」といつたが、速夫は矢張り本を見てゐた。

暫く／＼して月代が出來た樣子で、道具を仕舞ふやうな音がして阿母さんが廊下へ出たと思ふと、

「さ、速さん失禮していらつしやい、阿母さんが背中を流して上げますから」

速夫は默つて起きかへると、

「君も入らないか」といふ。

「いやだ」

「ぢや、ちよいと失敬するよ」

からいつて出て行つた。
二人の跫音が階子段の下へ消えた頃、お鶴さんは境の唐紙を開けて入つて來た。
「大村さんは今度の白馬會へ四枚出したんですつて—
「見ましたか？—
「いゝえ、今度の日曜日に誘ひに來るんですつて。貴方もいらつしやらない？」
「日曜は駄目—
「そんなら何時がいゝの？—
「只の日の方がいゝ—
「切符が來てゐるから上げませう」かういつて自分の部屋へ入ると長原止水のデザインの招待券を二三枚持つて來て、
「勝手な日にいらつしやればいゝ」といつて手渡した。
此家へ引越してからはお鶴さんと二人だけで話す機會がふえた。遠夫が一寸でも下に行くやうな場合には屹度隣りから何とか話しかけた。遠夫の留守に來て、あがり込んで待つてゐるやうな時にも大概お鶴さんが菓子や茶を持つて來ては火鉢の向うへ坐り込んで話をした。其話も當時の葉や事件を讀んでゐた自分には情ない程暢氣なものであつたが、それでも馬鹿々々しいとは考へなかつた。而してお鶴さんは向うに跫音でも聞えると直ぐ、
「左様なら」と笑つて自分の部屋へ入つて了ふ。
二人の間には實に話の問題がなかつた。けれどもお鶴さんは何か題を拵へては話しかけた。
阿母さんの聲で間もなくお鶴さんは下りて往つた。

九

或時歸りがけに廊下からちらりと見たらお鶴さんが、少し青い顔をして華やかなメリンスの夜着から首を出して寝てゐた事がある。自分は障子を少し開けて、
「何うしたの？」と聞くと、夜着の襟を心持上げて額を隠し、
「何うもしないの」と大きい眼の縁を紅くした。
散歩旁々一緒に出た遠夫に、
「お鶴さんは病氣なの？」と氣に掛つたから聞いて見た。
「初めて血が下りたもんで、すつかり吃驚しちやつたんだよ」遠夫は事もなげにいふ。
「何の病氣たらう、醫者に見て貰つたの？」遠夫が餘り平氣なので自分は一層不安な感をして聞いた。
「月經ッて女には誰にもあるもんなんだらう」
それから遠夫が誰に聞いたのか月經の講釋をしてくれた。此日自分も初めて女に月經といふものゝある事を知つた。

十

それから——日して自分は何氣なく遊びに行つたが家の樣子が何となく變だ。
「おやあ一寸市ケ谷から赤坂へ廻つて來ますからね」と忙しく云ひながらお德さんが出て來た。入口に梶棒を下してゐた俥に乘ると、
「御免なさい」と一寸自分に會釋して、
「阿母さん、汽車は六時半と定めて置きますから、鶴さんの物も一緒にまとめて支度をしといて頂戴」
お德さんの俥は勢よく曳き出された。
阿母さんはいつものやうに、お上りなさいと云つたが、自分は暫く其處で躊躇してゐた。青い顏をしてゐる阿母さんは強ひては勸めもしない。其處へ遠夫が出て來て、
「まあ、一寸上つて呉れ給へ」といふ。その言葉が常より丁寧なのも胸を跳らせる。

兎も角下駄を脱いだが家の中が何だかおだやかならぬ調子に充ちて居る。階子段で二郎兵衛に擦れ違つたが、何か無駄口を叩かねば置かぬ男が今日は怒つたやうな顏をして眼だけで一寸挨拶をして往つた。

速夫の部屋へ入るとお鶴さんが机に突伏して泣いてゐる、速夫が優しく茶を持つて來ないかと云つたんでお鶴さんは顏を擡げずに會釋して出て行つた。

速夫は精しい事までは云はなかつたが兎も角、時夫が米相場に手を出して甚い失敗をしたといふ事、それで阿母さんとお鶴さんは今晩葉山へやる心算だといふ事とを話した。

「母でもお鶴でも、此方に居たつて何んにもならないからね。それに母は頭が弱いから、此どいゝさくさの厭な騷を見せた日には屹度病氣になるんだ」速夫は苦しさうな顏をしてからいふ。

自分は何と云つていゝか解らなかつたから默つてゐた。

「それから君に賴みがあるんだけど」と起つて戸棚から錦の袋に入れた短刀を二口出して、

「眞逆、そんな事もあるまいとは思ふけど、若し執達吏が來ると危險だからね」かういつてそれを自分に預かつて呉れぬかと云ふ。一つは正宗、一つは左文字で、前者は父が非常に大切にしてゐた物、後者は先祖からの傳はり物だと云ふ事を話した。

自分は快く請合つて間もなく風呂敷に包んだ二口を抱へて此處を出た。龜井橋を渡ると左に一直線に河岸を農商務省の方へ歩いた。色色な事が頭に浮ぶ。十何年か前、府知事夫人として夜會に出た時の姿だといふ長く裾を曳いた洋服姿の阿母さんの寫眞を見た事、山内の官舍の玄關へ輕さうなメリケン馬車を曳き据ゑて速夫と速夫の死んだ兄とを兩側に、自分は洋服を着た五つ許りのお鶴さんを抱き、片手で手綱を執つて居る嚴めしい顏の速夫の父の寫眞などが憶ひ浮べられた。

其日自分が歸つて間もなく、果して執達吏が來て、葉山へ行く用意の荷物までも一々封印をして往つたのださうだ。

案外捗つて、今は疊と建具を入れる許りになつてゐた、新築の家屋も無論、同じ日に取りおさへられたのである。

十一

破產後の淺香家は氣の毒なものであつた。阿母さんとお鶴さんとは葉山のお德さんの所へ同居する事になつた。尤も先に舅姑があるでなし、毎日其處から横須賀へ通ふお德さんの良人はいゝ人だし、お德さんには萩子といふ可愛い赤坊が生れたし、海岸の景色のいゝ小ぢんまりとした家で、裏には畑などもあつて、阿母さんにはこの方が東京の生活より結局氣樂だつたかも知れない。然しあのしつかりした夫の歿後十年經たずに、かうなつた淺香家の運命を想ふと流石に悲しい想が胸を去る事はなかつたらう。

速夫は間もなく學校をよして、速夫の父に引き立てられたといふ或る人の世話でテキサスへ仕事を仕に行つた。二三年して見込が立つたら資本を貸してやると云ふ其人の深切な約束で。

時夫は其後或る新聞社へ入つて外國通信の方を引受けてゐたやうだつたが、後には外國の海上保險の横濱支店の何かになつてゐるといふ話も聞いた。

速夫が居なくなつてからは、自分も淺香の家へ行く機會がなくなつて、お鶴さんとも速夫の出發日横濱の棧橋で會つたきりであつた。

其後山内を通り、築地を通る度によく寂しい氣がした。今もお鶴さんはあの頃のやうに暢氣かしら、こんな事をよく考へた。

又二年程經つて、忘れると云ふのでもないが、お鶴さんの事でも阿母さんの事でも段々頭へ浮ぶ度が減じて來た。葉山の消息は、反つて時々呉れるテキサスからの便りで知る位であつて。

或時、不圖、こんな夢を見た。

夢だから時刻は確でない。然し妙に薄暗かつたから夕方のやうな氣もした。自分は名のない街道を俥に乘つて行く。藥研の樣に凹んだ轍の跡で甚く俥がゆれる。高い杉並木の端れを出ると軒の低いきたない人家が立ち並んでゐる。半町も來ると石橋があつて其處を右へ入ると、自分は直ぐ「あゝ此處だな」と思つた。倒れかゝつた門を入つて、玄關で俥を降りた。自分は山内のこはされた速夫の家を訪うたのだ。

自分は「から森としてゐては病氣も餘程惡いな」こんな事を考へながら案内を乞ふと直ぐ障子が開いて、其處へ亂れたきたない髮をした女が兩手を突いて首を垂れて居る。生え際が薄くなつて額の傷跡のやうな所が妙に白光りがしてゐた。女は聞えぬ程の聲で何かいふと顏を擡げた。お鶴さんだ。泣いてゐる。しかも兩の眼はつぶれてゐた。自分も堪らなくなつて聲を擧げて一緒に泣いた。

その聲で眠が覺めたが涙で頰が濡れてゐた。

この事が二三日頭へこびり着いて變な心持がしてゐた。自分はお鶴さんに對し何か濟まぬ事をしてゐるやうな氣がしてならなかつた。

其夏の始め二三人で三崎から葉山の方へ二泊の遠足をした時、自分は何となく其夢が氣がかりだつたので通りすがりにお德さんの家へ寄つて見た。

阿母さんもお德さんもお鶴さんも皆喜んで呉れた。お鶴さんは十七八の美しいお孃さんになつてゐた。嬉々働いてもてなして呉れるが、何處か取りつくろつたやうな、外所々々しい所が見える。自分は何んだか物足らなかつた。で、一時は、だまされたと云ふやうな氣もした。然し兎も角皆の元氣な樣子を見て異ふ意味では大變嬉しく思つた。切りと留めて呉れたが、友達を待たしてあるから餘り長居をせずに歸つて來たが、未練も中々強かつた。

歸つてから阿母さんに宛てゝ禮狀を出したら早速お鶴さんの代筆で返事が來た。それが何處までも眞面目でへだてのあるのが自分には寂しく感ぜられた。お鶴さんも、遂に一人前の女になつて了つた、と果敢ない感じもした。若しあの悲しい破産がなかつたらまだ〱子供でゐられた人だらうになどとも考へられた。

十二

それから又二三年經つて今になつた。

速夫はいよ〱約束の資本を下して貰つて、カナリの地面を得て其處でこつ〱働いてゐる。

お鶴さんは其後いゝ緣があつて矢張り海軍士官の奥さんになつて、お德さんの家から遠くない森戸に世帶を持つたと云ふ事を聞いた。

此間新橋の關口で買物をして居る速夫の妹を見たといふ友達があつた。其の背後に赤ン坊を抱いた女中と大きい包を抱へた身長の高い可恐い顏の男が立つて居たと其友がいつたが、其男といふのは確に二郎兵衞だらうと思ふ。

二郎兵衞はあの後、工手學校の電氣科を卒業して、今は東鐵の技手をして大分年をとつた婆さんを引とつて赤坂邊に家を持つたといふ話を聞いた。

襖

友と私とは日が入つて山の或る温泉宿に着いた。歩きはしなかつたが、尻にシビレの切れる程、俥で山路をゆられた疲れで、夜は早く床に入つた。二人は白い括枕を胸に當てゝ卷烟草をふかし乍ら話した。

一温泉場へ來ると直ぐ憶ひ出す話があるんだが、君にはもうしたかしら」と友が云つた。

「どんな話だつたかな」

「蘆の湯の紀伊國屋での話だ。今の菊五郎が丑之助と云つてた時分だから、ヤガテ十年も前だネ」

「丑之助の出て來る話なんか未だ聽かないよ」

「丑之助は出て來ないが、丑之助に似た女の出て來る話なんだ」

「聽かないネ」と私は首を振つた。

「それなら仕ようかネ、僕が戀された話だよ」

と友は語り出した。

紀伊國屋の三階に二間續いて十疊の座敷があるが、客の非常にタテ込んだ夏で、僕と祖父と祖母と、其頃幼稚園に通つて居た末の妹と其守と都合五人だつたが其一つの座敷へ入れられて了つた。が、襖一重隣の十疊にも矢張り五人居た。京橋に居る辯護士だと云ふ若夫婦と五十二三の氣の強さうな割に若々しく見える母と、ミノリさんと云ふ五ツばかりの——可愛いといふより人形のやうな綺麗な女の子と、其守とだ。

細君はセイのスラリと高い、からだツつきの甚くイキな人で、話の調子ではこれが家つきの娘らしかつた。夜になるとよく自分で彈いて長唄をやつてゐた。どうかすると其三味線で、小聲で義太夫を語る事などもあつた。又毎朝ミノリさんと云ふ兒に唄を教へた。

子供同士はそんな事がなくても直ぐ友達になるものだけれど、吾々が來た翌朝、隣で唄の稽古が始まると僕の妹は直ぐ緣側へ出て、後手に欄干に倚りかゝつて、背をスリながら靜かに横あるきをして隣を覗きに行つた。

一トクサリ濟むと隣の細君は、

「おはひり遊ばせ」と聲を掛けた。妹は顎を胸へつけるやうにして、子供に特有な眞面目腐つた顏をして默つて居る。僕は花といふ此方の守に眼くばせをした。花が出て行つて、其時から妹とミノリさんとは友達になつたのだ。

もう十日程もゐるとかで、ミノリさんといふ兒は函根細工の玩具を澤山持つてゐた。霧の晴れた時などは一棟の二階の屋根一ツパイに作つた大きな「出ッパリ」の上に其玩具を運んで僕の妹とよく遊んでゐた。隣の鈴といふ守は父、此方の花と同年輩で、二人は二人で子供を離れていゝ友達になつて了つた。

此鈴が丑之助によく似てゐたのだ。

東京座で、家橘の長兵衞、幡隨院(ばんずゐゐん)のぢやない)八百藏の烏山の勘兵衞、猿之助の何とかいふ惡者でやつた、何とかいふ狂言を其少し前に見たが、それに出て來る丑之助の何とかいふ田舍娘にそつくりなのだ。芝居の見始めで、歌舞伎座の役者のする狂言だと一つ物を二度づゝ見ないと承知の出來ない頃で、役者では其時分子役あがりで丁度聲がはりの仕てゐた丑之助が可愛いので一番好きだつた。

だから、其方の聯想から僕は隣の守も直ぐ

好きになつたのだ。尤も極く輕い程度だけれど……

眼のパッチリとした、圓々とハチキレさうに肥つた、色の淺黑い顏が如何にも無邪氣に可愛かつた。田舍者で口數を餘り利かない、一眼で世慣れない、善良な娘といふ事が解るやうな顏なのだ。東京者の花はスッカリ上手へ出て何かしやべつてゐた。

僕が妹を連れて散步に出る時とか、運動場のブランコに乘りに行くやうな時には、花がゐなくても鈴はミノリさんを誘ひ出してついて來る。それが如何にも露骨だ。ミノリさんの相手で何か他の事をして遊んでゐるやうな場合にも僕が散步の支度をすると、直ぐ玩具を片づけてついて來る。十六位だらう。僕は十九だつたと思ふ。二人は一緒に步いても別に話をする事もなかつた。然し段々には僕も鈴がついて來ないと寂しいやうな氣がして、用でも仕かけてゐれば少しは待つてやつた。

其頃は役者の繪葉書と云ふものが無かつたから、僕は新富町の[illegible]山といふ役者の寫眞を殆ど一手販賣にして居る家へヂカに行つて、ためたものだ。僕に芝居を見る事を敎へて吳れた林などは死んだ菊五郎の辨天小僧の寫眞をワザ〳〵日吉町の小川で小さく縮めさせて、時計の鎖に下げる親指の腹程の寫眞挾みに入れて持つてゐた。僕も丑之助のを林にさうして貰つて下げて居た。だから、其他にも丑之助の寫眞は實は澤山持つて來てたのだが祖父や祖母の前で見飾られないのを僕はヒドク不自由に感じてゐたのだ。で、その代りにと云つたら妙だが、兎も角も僕は時々鈴の顏を見るやうになつた。而して何時かそれが癖になつて了つた。

日常の生活では特別な場合の他は、舞臺の人を見る時のやうにヂッと他人の顏を見る事はない。だから見られる方の事にしたら、始終人前にさらしてゐるものでも、見られるといふ事は特別に感じるワケだ。まして癖になつた程に見られたのだから幾ら呑氣らしい鈴でも多少は拘泥しないではゐられなかつたらう。

こんな事を云ふと自分だけいゝ兒になるやうでミットモナイが、正直な所を云つて僕は丑之助に似てゐるから鈴が好きだつたんで、鈴の顏で丑之助がしのべるから一緒にも步きたかつたのだ。

所が其內、妙な事が起つて來た。それは僕が鈴の顏をヂッと見るやうに、鈴が時々ヂッと僕の顏を見るやうになつた事だ。

宿で貸す小さな一閑張りの机を窓際へ近く出して本を讀んでゐるやうな時に僕は不圖何處かで鈴が見てゐるナ、と感ずる事がよくあつた。左ういふ時には實際屹度何處かから見てゐるのだ。僕には鈴が何故そんなに自分の顏をヂッと見るのか解らなかつた。兎も角僕が餘程好きになつたには相違ないが、好きになつたからと云つて、人の顏をヂッと見つめるのは少し變に思はれた。――後でこんな事ではなかつたかと思つたが、鈴が僕がイヤに顏を見るのを、自分を戀してるんでそんな事をするのだと解して、其處で私もお前を戀してるぞ、といふ事を見せる爲に、イヤに僕の顏を見だしたのではないかしら。そんな事かも知れない。呑氣な若い田舍娘の考へとしてはありさうな事と思ふ。然し左うなると、好きは好きでも、幾らか氣味が惡く、前程は僕も鈴の顏を見る事が出來なくなつた。

此邊で隣の家族の事を少し話す方がいゝかも知れない。細君は大變いゝ人だ。僕は大好きだつた。亭主はイヤな奴で、嫌ひだつた。生白いニヤケた男で赤い口髭が房々とのびてゐる。母は鼻の尖つた痩せた人で黑い豐かな髮を下げの

髪をヒッツメて結んでゐた。随分癇の強い我儘な女で、或晩の事、こんな事があつた。八時半頃から女按摩を呼んで療治をさせてゐたから、僕の祖父は女中を呼んで、「御隣が済んだら來る樣に」と按摩に傳へさした。此方の言葉も聞えたらし、女中が按摩に傳へたのも聞いてゐたから、向うの母は、それを知らない筈はないのだ。所が十時頃漸く済むと、其處へ丁度碁かなんか打つて還つて來た辯護士が「負けると一層肩が凝るやうな氣がします」そんな事を云つて、自分も揉んで貰はうかしらと云ひ出した。細君は湯かハヾカリへ行つてゐないが、此方で待つてるのを承知してる母が屹度止めるだらうと思つて耳を澄ましてゐたが、何とも云はない。左うして、十一時頃まで揉まして其男の方の済んだ時の云ひ草が、私のから見ると大變ハショッタやうだネ」とからだ。

按摩が此方へ來た時分は祖父はもうグッスリ寝込んでゐたから僕は斷つて了つた。母といふ人は總てが此調子で、しかも口八釜しくて何へでもキン〳〵響く聲で口を出す。料理の獻立が來れば自分一人で決定て了ふと云ふ風だ。だから隣とは子供同士は隨分親しくして居たが、吾々は殆ど何の交渉もしなかつたのだ。

或晩の事だ。十二時頃まで僕は床の中で本を見て、それからランプを消して眠つた。十畳でもたてに三つ床を並べるのだから、かなりギシギシで、殊に其一方に通れるだけの道を殘さうとするとハジに寝てゐる僕は床を隣との堺へピッタリくつ着けて了はねばならない。僕の次が祖父、向うのハジが祖母、妹は祖父と祖母の蒲團の接目に毛布を敷いて其上に寝た。花は祖母の足の所に、それは割りに裕々として寝てゐる。

其内僕は何かで不圖眼を覺ました。二間半を四枚でシキッタ大分大きな襖が今スーッと開く、――どうしたんだらうと僕は枕から首を浮かしてると、三分の二程開いて、又靜かにスーッと閉まつて了つた。其襖は僕の胴より下の部分にあつたし、隣も此方も薄暗い行燈の光りだから、誰が如何してそんな事をしたのかは全で見えないが、鈴だとは僕も直ぐ思つたのだ。大膽な事をする奴だ、又何ンだつてそんな眞似をするんだらう。若しかすると鈴は本氣で僕を戀し出したなと考へて、少しは嬉しいやうな氣もしたが、大して氣にも留めず、間もなく僕は又眠入つて了つた。

而して翌朝湯に入つてる時、不圖それを想ひ出したまではスッカリ忘れてゐたが、想ひ出すと反つて何んだか夢のやうにも考へられた。

朝食の時、隣でも食事が始まつてゐた。其時、

「昨晩、其處の襖が開きましたネ」と隣の母の云ふのが聞えた。

「エヽ、開いたやうです」少し笑ひ聲で辯護士がいふ。

それがヨク聞えるが、祖父も祖母も默つてゐる。

「鈴や、お前も氣がついたらう」と母の少し高い聲がすると、鈴は一寸云ひよどんで、

「いゝえ、ちつとも……」といふ。

「あれをお前、知らないの？お前の寝てゐる直ぐワキの襖ぢやないか」蔑むやうな調子だ。

「どうでもいゝぢやありませんか」と細君がたいなめるやうに小聲に力を入れていふ。

かうなると僕も默つてゐられなくなつたから、

「おばあさん、襖の開いたのは僕も知つてゐるんですよ」とワザと大きい聲をしてやつた。祖父は、

「默つて」と眼でおさへるやうにして云ふ。

「お隣の若さんも氣がついた」と仰有るやうだ

が、一體誰が開けたんだらうね」と隣の母は如何にも興奮した口ップリだ。「お隣の若さん」が甚く厭味に響いたので腹が立つて來たが、祖父が六ケ敷い顏をしてゐるので、無暗と口出しもならなかつた。

「鈴やお前が開けたんぢやないの？」と勝氣な母はこんな事を云ひ出した。

「いやでムいますよ」田舍者の重い口で句切りに鈴はそれを打消す。僕にそれを塗りつけるといふ程の事も云つてはしなかつたが、鈴が一途に打消して了へば事實は塗りつけられる事になるのだから僕もムッとした。

「お母さん、もう、いゝぢやアありませんか」と又細君が情ないと云ふ調子で云ふ。「又始まつた」といふやうに僕には聽きなされた。

「尤もまあ、人間には、寢ぼけると云ふ事もあるですからな」それまで默つて居た辯護士がこんな事をいふ。

見ると祖母はコツ〳〵と默つて食事をしてゐる。祖母も僕が開けたと思つてゐるに相違ないと思ふと益々腹が立つ。

「お前さん、そんな呑氣な事を云つたつて、これが、襖の開いた位の話だからいゝやうなもの、鈴だつてこれからお嫁に行く兒ですよ。第一、お前さん達は氣がついてゐるか、どうか知らないけど、一昨日の晩も一尺ばかり開いたんですよ、知つてるの？」

「知つとりました」と笑ふやうに辯護士が答へた。

これには驚いた。僕は一體眼ざといい性で、少し變つた事だと直ぐ眼を覺ます方だと自ら信じ切つてゐたのだが、それは全く氣がつかなかつた。

「此暑さぢやあ、私共だつて、中々東京へは歸れないし、御隣だつていらした許りぢや、暫くは襖一重でかうして居なければならないが、その間チョイチョイ襖が開かれちやあ堪りませんよ」

「おぢいさん、襖を開けたのは本統に僕ぢやあ、ないのですよ」僕は激しながら訴へるやうにいつたのだ。

祖父は微笑しながら輕く首肯いて、

「飯を食つたら歩かう」といふ。

僕はイラ〳〵して直ぐ飛び出した。玄關で待つてゐると、暫くして祖父は大きな灰色のヘルメットを被つて、杖を搶ぎ、スリッパをつッかけて下りて來た。

「辨天山の方へ行くか」といふから、

「見晴らしの方がいゝでせう」といつた。今のやうな鋪道のない頃で川底のやうな山路を歩きながら話した。

祖父は白隱禪師の逸話を聞かしてくれた。有名な話で其後も色々な人から聞いたが、ある娘がミモチになつて親から相手を聞かれるので苦しまぎれに白隱樣だといつたら、どういふワケだか知らないが親はそれを喜んで直ぐ白隱の所へ行つて、その事をいふと、「アーさうか」といつたぎりだつたさうだ。暫くして本統の相手が知れたので、親は閉口しきつて平あやまりにあやまりながら、その事をいふと白隱が又、あゝさうか、といつたきりだといふ話だ。

兎も角適切な話なので、僕はスッカリ氣分を直して了つた。而して歸ると、隣では切りと荷をマトメてゐる。晝食をすますと、三挺の籠が來て、たつて往つて了つた。たつ時、細君だけが氣の毒さうな顏をして一寸挨拶に來た。底倉の蔦屋まで降りるのださうだ。

牛之助に似た、呑氣らしい顏の鈴はスッカリ萎れて了つた。ボンヤリしてゐる。僕は急に可哀想になつて何か云つてやりたいやうな氣もしたが、何にも云ひはしなかつた。花だけが玄關まで送つて行つた。辯護士は洋服姿で歩いて三

提の燈をさいい領して行く。皆の姿が辨天山の裏へ入るまで僕は見てゐた。

鈴とはそれツきり、丁度十年になるが、一度も、もう會はなかつた。が、其翌年何かの慈善興行の時、歌舞伎座で辯護士の夫婦とミノリさんとが桝にゐるのを見かけた。其時ゐた女中は鈴より氣の利いた顔をした、十六七の女だつた。便所への通ひ路で細君とスレ違つたが、お互に知つてから、知らん顔をして了つた。

話はこれだけだ。然し最後にもう一ト言、僕を戀してくれた鈴の爲めに辯護をさして貰ふと、鈴があの時襖を開けたのは、襖を開けてどうしようと云ふ、所謂ミダラな考へがあつて、したのではなく、無智な田舍娘の事で、左うすれば、丁度顔を見詰める事が愛情を表はす手段であると考へたやうに、そんな事をして、愛情を僕に見せようとしたに相違なかつたのだ。

何遍も話す爲めか、友はスラ〳〵とちやんとマトマリをつけて漸く、此戀されたと云ふ話を語り終つた。

（明治四十四年八月）

剃刀

麻布六本木の辰床の芳三郎は風邪の爲め珍しく床へ就いた。それが丁度秋季皇靈祭の前にかゝつてゐたから兵隊の仕事に忙しい盛りだつた。彼は寢ながら、一ト月前に追ひ出した源公と治太公が居たらと考へた。

芳三郎は其以前、年こそ一つ二つ上だつたが、源公や治太公と共に此處の小僧であつたのを、前の主が其剃刀の腕前に惚込んで一人娘に配し、自分は直ぐ隱居して店を引渡したのである。

内々娘に氣のあつた源公は間もなく暇を取つたが、氣のいゝ治太公は今までの「芳さん」を「親方」と呼び改めて前通りよく働いて居た。隱居した親爺はそれから半年程して、母親は又半年程して死んで了つた。

剃刀を使ふ事にかけては芳三郎は實に名人だつた。加之、癇の强い男で、撫でて見て少しでもざらつけば毛を一本々々押出すやうにして剃らねば氣が濟まなかつた。それで膚を荒らすやうな事は決してない。客は芳三郎にあたつて貰ふと一日延びが、ちがふと云つた。そして彼は十年間、間違にも客の顔に傷をつけた事がないといふのが自慢であつた。

出て行つた源公は其後二年許りしてぶらりと還つて來た。芳三郎は以前朋輩だつた好誼からも詫を云つて居る源公を又使はないわけに行かなかつた。然し源公は其二年間にかなり惡くなつてゐた。仕事は兎角怠ける。そして治太公までを誘ひ出して霞町あたりの兵隊相手の怪し氣な女に狂ひ廻る。仕舞には人のいゝ治太公を唆して店の金まで掠めさす樣な事をした。芳三郎は治太公を可哀想に思つて度々意見もして見た。然し店の金を持出す樣になつてはどうする事も出來なかつた。で、彼は一ト月程前、遂に二人を追出して了つたのである。

今ゐるのは兼次郎といふ、二十歳になる至つて氣力のない青白い顔の男と、錦公といふ十二三の、これは又頭が後ろ前にヤケに長い子供とである。祭日前の稼ぎ時に此二人ではさつぱり埒があかぬ。彼は熱で苦しい身を横へながら床の中で一人焦々して居た。

晝に近づくにつれて客がたて込んで來た。けたゝましい硝子戸の開け閉てや、錦公の引きずる歯のゆるんだ足駄の乾いたやうな響が鋭くなつた神經にはビリ／＼障る。

又硝子戸が開いた。

「龍土の山田ですが、旦那樣が明日の晩から御旅行を遊ばすんですから、夕方までにこれを磨いで置いて下さい。――私が取りに來ます」女の聲だ。

「今日はチットたて込んで居るんですが、明日の朝のうちぢやいけませんか？」と兼次郎の聲がする。

女は一寸澁つた樣子だつたが、

「ぢやあ間違なくね」かういつて硝子戸を閉めたが、又直ぐ開けて、

「御面倒でも親方に御願ひしますよ」といふ聲がした。

「あの、親方は……」兼次郎がいふ。それを遮つて、

「兼、やるぜ！」と芳三郎は寢床から怒鳴つた。鋭かつたが嗄れて居た。それには答へず、

「よろしう御座います」と兼次郎の云ふのが聞える。女は硝子戸を閉めて去つた樣子だ。

「畜生」と芳三郎は小聲に獨言して、夜着裏の紺で青く薄よごれた腕を出して暫く、凝つと見詰めて居た。然し熱に疲れたからだは据ゑられた置物のやうに重かつた。彼はうつとりとした眼で天井のすゝけた犬張子を眺めて居た。犬張子に蠅が澤山とまつて居た。

彼は聞くともなく店の話に耳を傾けた。兵隊が二三人、近所の小料理屋の品評から軍隊の飯の如何に不味いかなどを話し合つて、然しから涼しくなると、それも幾らかは食べられて來たなと云つて居るのが聞える。こんな話を聞いて居る内に、いくらかいゝ氣分になつて來た。暫くして彼は大儀さうに寢返りをした。

三疊の向うの勝手口から差込む白つぽい曇つた夕方の光の中に女房のお梅が赤ん坊を半纏おんぶにして夕餉の支度をして居る。彼は輕くなつた氣分を味ひながらそれを見てゐた。

「今の内やつて置かう」彼はかう思つて重いからだで蒲團の上へ起き直つたが、眩暈がして暫くは枕の上へ突伏して居た。

「はじかり？」と優しく云つてお梅は濡手をダラリと前へ下げたまゝ入つて來た。

芳三郎は否と云つたつもりだつたが聲がまるで響かなかつた。

お梅は夜着をはいだり、枕元の痰吐や藥壜を片寄せたりするので、芳三郎は又、

「左うぢやない」と云つた。が、聲がかすれてお梅には聞きとれなかつた。折角直りかけた氣分が又焦々して來た。

「後から抱いて上げようか」お梅はいたはるやうにして背後に廻つた。

「皮砥と山田さんからの剃刀を持つて來な」芳三郎はぶつけるやうに云ひ放つた。お梅は一寸默つてゐたが、

「お前さん砥げるの？」

「いゝから持つて來な」

「……起きてるならかいまきでも掛けて居なくつちや仕樣がないねえ」

「いゝから持つて來いと云ふものを早く持つて來ねえか」割りに低い聲では云つてるが、癇でビリ／＼して居る。お梅は知らん顏をして、かいまきを出し、床の上に胡坐をかいてゐるのに後から羽織つてやつた。芳三郎は片手を擡ぐやうにしてかいまきの襟を摑むとグイと剝いで了つた。

お梅は默つて半間の障子を開けると土間へ下りて皮砥と剃刀を取つて來た。而して皮砥をかける所がなかつたので枕元の柱に折釘をうつてやつた。

芳三郎はふだんでさへ氣分の惡い時は旨く砥げないと云つて居るのに、熱で手が震へて居たから、どうしても思ふやうに砥げなかつた。其焦々してゐる樣子を見兼ねて、お梅は、

「兼さんにさせればいゝのに」と何遍も勸めて見たが、返事もしない。けれども遂に我慢が出來なくなつた。十五分程して氣も根も盡きはてたといふ樣子で再び床へ横はると、直ぐうとうととして、いつか眠入つて了つた。

剃刀は火ともし頃、使の歸途、寄つて見たといふ山田の女中が持つて往つた。

お梅は粥を煮て置いた。それの冷えぬ内に食べさせたいと思つたが疲れ切つて眠つてゐるものを起して又不機嫌にするのもと考へ、控へて居た。八時頃になつた。餘り遲れると藥までが順遲れになるからと無理にゆり起した。芳三郎もそれ程不機嫌でなく起直つて食事をした。左うして横になると直ぐ又眠入つて了つた。

十時少し前、芳三郎は藥で又おこされた。今は何を考へるともなくウト／＼としてゐる。熱氣を持つた鼻息が眼の下まで被つてゐる夜着の襟に當つて氣持惡く顏にかゝる。店の方も靜まりかへつてゐる。彼は力のない眼差であたりを

見廻した。柱には眞黑た皮砥が靜かに下がつて居る。薄暗いランプの光はイヤに赤黄色く濁つて、部屋の隅で赤子に添乳をして居るお梅の背中を輝して居た。彼は部屋中が熱で苦しんで居るやうに感じた。

「親方——親方——」土間からの上り口で錦公のオツ〳〵した聲がする。

「えゝ」芳三郎は夜着の襟に口を埋めたまゝ答へた。其籠つたやうな嗄聲が聞えぬかして、

「親方——」と又云つた。

「何だよ」今度ははつきりと鋭かつた。

「山田さんから剃刀が又來ました」

「別のかい？」

「先刻ンです。直ぐ使つて見たが、餘まり切れないが、明日の晝迄でいゝから親方が一度使つて見て寄越して下さいつて」

「お使ひが居なさるのかい？」

「先刻です」

「どう」と芳三郎は夜着の上に手を延ばして、錦公が四這ひになつて出す剃刀をモロッコのケイスのまゝ受取つた。

「熱で手が震へるんだから、いつそ霞町の良川さんに賴む方がよかないの？」

かう云つてお梅はハダカッタ胸を合せながら起きて來た。芳三郎は默つて手を延ばしてランプの心を上げ、ケイスから拔き出して刃を打ちかへし打ちかへし見た。お梅は枕元に坐つて、そつと芳三郎の額に手を當てゝ見た。芳三郎は五月蠅さうに空いた手でそれを拂ひ退けた。

「錦公！」

「エイ」直ぐ夜着の裾の所で返事をした。

「砥石を此處へ持つて來い」

「エイ」

砥石の支度が出來た所で、芳三郎は起き上がつて、片膝立てゝ砥ぎ始めた。十時がゆるく鳴る。

お梅は何を云つてもどうせ無駄と思つたから靜かに默つて見てゐた。

暫く砥石で砥いだ後、今度は皮砥へかけた。室内のよどんだ空氣が其キュン〳〵いふ音で幾らか動き出したやうな氣がした。芳三郎は震へる手を堪へ、調子をつけ砥いでゐるが、どうしても氣持よく行かぬ。其内先刻お梅の側に打つた折釘が不意に拔けた。皮砥が飛んでクル〳〵と剃刀に卷きついた。

「あぶない！」と叫んでお梅は恐る〳〵芳三郎の顏を見た。芳三郎の眉がぴりゝと震へた。

芳三郎は皮砥をほぐして其處へ投げ出すと、剃刀を持つて立上がり、寢衣一つで土間へ行かうとした。

「お前さんそりやいけない、いけない……」

お梅は泣聲を出して止めたが、諾かない。芳三郎は默つて土間へ下りて了つた。お梅もついて下りた。

客は一人もなかつた。錦公が一人ボンヤリ鏡の前の椅子に腰かけて居た。

「兼さんは？」とお梅が訊いた。

「時子を張りに行きました」錦公は眞面目な顏をしてから答へた。

「まあ、そんな事を云つて出て行つたの？」とお梅は笑ひ出した。然し芳三郎は依然嶮しい顏をして居る。

時子と云ふのは此處から五六軒先の軍隊用品雜貨といふ看板を出した家の妙な女である。女學生上りだとか云ふ。其店には始終、兵隊か書生か近所の若者かが一人や二人腰掛けて居ない事はない。

「もう お店を仕舞ふんだから お歸りつて」とお梅は錦公に命じた。

「まだ早いよ」芳三郎は無意味に反對した。お梅は默つて了つた。

芳三郎は砥ぎ始めた。坐つて居た時からは餘

程工合がいゝ。
　お梅は縞入れの牛綾羽織を取つて來て、子供でもだますやうに云つて漸く手を通させてやつと安心したといふやうに上り口に腰をかけて一生懸命に研いでゐる芳三郎の顔を見て居た。錦公は窓の傍の客の腰掛で膝を抱くやうにして、毛もない脛を剃上げたり剃下したりして居た。
　此時景氣よく、硝子戸を開けて、せいの低い二十二三の若者が入つて來た。新しい二タ子の袷に三尺を前で結び、前鼻緒のヤケにつまつた駒下駄を突掛けてゐる。
「ザットでよござんすが、一つ大急ぎであたつておくんなさい」から云ひながらいきなり鏡の前に立つと下唇を噛んで顔を突出し、揃へた指先で切りに其邊を撫でた。若者はイキがつた口のきゝやうだが調子は田舍者であつた。節くれ立つた指や、黒い凸凹の多い顔から彼は荒い勞働についてゐる者だといふ事が知られた。
「錦さんに早く」とお梅は眼も一緒に働かして命じた。
「おいらがやるよ」
「お前さんは今日は手が震へるから……」
「やるよ」と芳三郎は鋭くさへぎつた。
「どうかしてるよ」とお梅は小聲で云つた。
「仕事着だ！」
「どうせ、あたるだけなら毛にもならないから其儘でおしなさい」お梅は半纏を脱がしたくなかつた。
　妙な顔をして二人を見較べて居た若者は、
「親方、病氣ですか」と云つて小さい凹んだ眼を媚びるやうにショボ〳〵さした。
「えゝ、少し風邪をひいちやつて……」
「悪い風邪が流行るつて云ひますから、用心しないといけませんぜ」
「ありがたう」芳三郎は口だけの禮を云つた。
　芳三郎が白い布を首へ掛けた時、若者は又
「ザットでいゝんですよ」といつた。而して「少し急ぎますからネ」と附加へて薄笑ひをした。
芳三郎は默つて腕の腹で、今砥いだ刃を和げて居た。
「十時半と、十一時半には行けるな」又こんな事をいふ。何んとか云つて貰ひたい。
　芳三郎には、男か女か分らないやうな聲を出してゐる小女郎屋のきたない女が直ぐ眼に浮んだ。で、此下司張つた小男が是から其處へ行くのだと思ふと、胸のむかつくやうなシーンが後から〳〵彼の衰弱した頭に浮んで來る。彼は冷切つた湯でシャボンをつけ、ヤケにゴシ〳〵頤から頰のあたりを擦つた。其間も若者は鏡にちら〳〵する自分の顔を見ようとする。芳三郎は思ひ切つた毒舌でもあびせかけてやりたかつた。
　芳三郎は剃刀をもう一度キュン〳〵やつて、先づ咽から剃り始めたが、どうも思ふやうに切れぬ。手も震へる。それに寢てゐてはそれ程でもなかつたが、起きてから俯向くと直ぐ水洟が垂れて來る。時々剃る手を止めて拭くけれども直ぐ又鼻の先がムヅ〳〵して來ては滴りさうに溜る。
　奥で赤子の啼く聲がしたので、お梅は入つて行つた。
　切れない剃刀で剃られながらも若者は平氣な顔をして居る。痛くも痒くもないと云ふ風である。其無神經さが芳三郎には無闇と癪に觸つた。使ひつけの切れる剃刀がないではなかつたが彼はそれと更へようとはしなかつた。どうせ何んでもかまふものかといふ氣である。それでも彼は不知又丁寧になつた。少しでもざらつけば、どうしても其處にこだはらずにはゐられない。こだはればこだはる程癇癪が起つて來る。からだも段々疲れて來た。氣も疲れて來た。熱

も大分出て來たやうである。
　最初何の彼の話しかけた若者は芳三郎の不機嫌に恐れて默つて了つた。而して顔を剃る時分には餘り烈しい勞働から來る疲勞でうつら／＼仕始めた。錦公も窓に倚つて居眠つて居る。奥も女子をだます聲が止んで、ひつそりとなつた。夜は内も外も全く靜まり返つた。剃刀の音だけが聞える。
　焦々して怒りたかつた氣分は泣きたいやうな氣分に變つて、今は身も氣も全く疲れて來た。眼の中は熱で溶けさうにうるんでゐる。
　咽から頰、顎、額などを剃つた後、咽の柔かい部分がどうしてもうまく行かぬ。こだはり盡した彼は其部分を皮ごと削ぎ取りたいやうな氣がした、肌理の荒い、一つ／＼の毛穴に油が溜つて居るやうな顔を見て居ると彼は眞ンからそんな氣がしたのである。若者はいつか眠入つて了つた。がくりと後ろへ首をもたせて他愛もなく口を開いて居る。不揃な、よごれた齒が見える。
　疲れ切つた芳三郎は居ても起つても居られなかつた。總ての關節に毒でも注されたやうな心持がしてゐる。何も彼も投出して其まゝ其處へ轉げたいやうな氣分になつた。もうよさう！　かう彼は何遍思つたか知れない。然し惰性的に依然こだはつて居た。
　……刃がチョッとひつかゝる。若者の咽がピクッと動いた。彼は頭の先から足の爪先まで何か早いものに通り拔けられたやうに感じた。で其早いものは彼から總ての倦怠と疲勞とを取つて行つて了つた。
　傷は五分程もない。彼は只それを見詰めて立つた。薄く削がれた跡は最初乳白色をして居たが、ヂッと淡い紅がにじむと、見る／＼血が盛り上がつて來た。彼は見詰めてゐた。血は黒ずんで球形に盛り上がつて來た。それが頂點に達した時に球は崩れてスイと一ト筋に流れた。此時彼には一種の荒々しい感情が起つた。
　嘗て客の顔を傷つけた事のなかつた芳三郎には、此感情が非常な強さで迫つて來た。呼吸は段々忙しくなる。彼の全身全心は全く傷に吸ひ込まれたやうに見えた。今はどうにもそれに打克つ事が出來なくなつた。……彼は剃刀を逆手に持ちかへるといきなりぐいと咽をやつた、刃がすつかり隱れる程に。若者は身悶えも仕なかつた。
　一寸間を置いて血が迸しる。若者の顔は見る見る土色に變つた。
　芳三郎は殆ど失神して倒れるやうに傍の椅子に腰を落とした。總ての緊張は一時に弛み、同時に極度の疲勞が還つて來た。眼をねむつてぐつたりとして居る彼は死人の樣に見えた。夜も死人の樣に靜まりかへつた。總ての運動は停止した。總ての物は深い眠りに陥つた。只獨り鏡だけが三方から冷かに此光景を眺めて居る。

（明治四十三年四月）

祖母の爲に

總ての友達が自分に敵意を持つて居る——と、かう思ひ込む事が私にはよくある。それが不健全な一時的の氣分からだとは知りながら、若し誰かを訪ねでもすれば乾度脅迫されるやうに、私は不快な事を云つたり仕たりして了ふ。堪へられない孤獨と腹立たしさを感じて別れて來る。と、必ず祖母を思ふ。

「何と云つても、もう祖母だけだ」と思ふ。

祖父は今から丁度五年前に死んだ。祖父はエライ人だつた。知つてる人は皆彼をエライ人だと云つて居た。祖父は一族の大黒柱で祖母には殆ど一つのアイドールになつて居た。非常な養生家で七十九歳になつてカナリ立派な健康を保つて居た。所が胃癌になつた。普通の年寄なら死ぬべき時が來ても、鍛へ上げられたからだは死にきれなかつた。數ケ月の間は見て居られない程の苦みをした。十六と云ふ昔から殆ど傍を離れた事のない祖母は死物狂の力で看病した。私は死物狂の看病がいつまでも／＼續くのには驚いて見て居た。七十になるひよわな祖母に何處からそんな力が湧いたか、それが不思議に思はれた。

私は祖父を尊敬し、愛しもした。然し其時は祖父の死と共に祖母の死が來はしまいかと、それを恐れて居た。

九月の末に床について、正月の始めに祖父は遂に眼をねむつた。

眼をねむると其部屋には急に人々の烈しい泣聲が起つた。兄弟の多かつた祖父には甥とか姪とか云ふ者が多かつた。それらの人々が遠くから集つて來て居た。

少時して私は泣聲を聞き捨てゝ起つた。茶の間へ行かうと中の口へ來ると、其格子の内に六十ばかりの何處かで見た事のある白つ兒の男が立つて居た。

「手前はU町のTI葬儀社でムいますが……」かう云つて、どうか御用が仰せつかりたいといふ。

私は如何してこんなに早く來たのか不審に思つた、それは祖父が眼をねむつて未だ十五分しない時だつたから。——TI葬儀社と云ふのは私の家から電車へ出るU町の左側にある。其處と自家の間はよしんばいゝ若い者がどんなに駈けても十五分で往復の出來る近さでないから、私は變な氣がしたのである。

「私には解らないから」かう云つて來て了つた。

然し祖父の葬儀萬たんは此白つ兒が引きうける事になつた。後で聽くと白つ兒が來て又十五分しない内に××町の葬儀社からも人が來たさうである。

祖父を送つて了つた祖母は何となく、もう此世には用のない人間と云ふ感じを人々にさせた。私にはそれが心細かつた。而して事實祖父の死からは段がついて元氣がなくなつた。

——祖母は一體が烈しい氣性で、「どうでもいゝ」と云ふやうな事が出來なかつた。祖父が死んでから傍に寐て居る私の朝寐坊をよくグヅグヅ云ふ。その事では毎朝のやうに喧嘩した。祖母は同じ調子で色々な事を干渉する。時々は私も我慢出來ずに亂暴な事を云つてイヂメてやる事もあつた。

何でだかは忘れた。或時カナリ烈しい云ひ争ひをして祖母を泣かした。默つて了つた祖母に散々惡口を云ひ捨てゝ私は湯へ入つた。暫くすると、もう如何しても我慢が出來ないと云ふ顔をして、唐木のステッキを持つて入つて來た。打つなと、背中を丸くして居ると何んにも云はずに力まかせに裸の背中をピシャリ〳〵毆る。

「平氣だ」と冷笑すると、

「未だか」かう云つて今度は首筋を二つ三つ毆つて、戸をガタンと閉めて出て行つた。――こんな事も左う古い事ではない。然しもう、八釜しい事は云つても、それ程の元氣はなくなつた。

――私は何だか白つ兒が氣になつて來た。

――白つ兒とは時々往來で會つた。前ハダカりのだらしのない風をしてぶらり〳〵と下駄を曳きずつて居る。血管の透いて見える白いやうな赤いやうな皮膚には所々褐色のしみが地取つて、丸額で頬が落ちて居る。割に大きな口で、その端がポツリ上つて居るのが只でもニヤリとして居るやうに見える。灰色に光つた眼でスレ違ひにジロッと他の顔を盗み見る。すると私の心はいつも反射的に妙な緊張を感じずには居なかつた。さうしては祖父の死んだ日の事を憶ふ。今か今かと屋敷のそば迄來て居た此白つ兒の姿を想像するとカッとして、たしかに祖母の命を呪つて居やがる、と思ふ。かう思ふと私は可笑しい程に興奮した。

――が、二年程は何事もなかつた。

二年目に私は或る事から家の中に騒ぎを惹き起した。父は癇癪してやるから勝手に出て行けと云ふ。其處で私は祖母に承知させて、私の名で貯へてあつた祖母の金を持つて田舎へ住むつもりで、既に家まで借りて、もう二三日で出ようと云ふ時、元來腦の弱かつた祖母は過度の心配から頭が變になつて卒倒して了つた。一時は其儘死ぬかと思つた。自家の者は皆左う諦めたらしかつた。――これで私は家が出られなくなつた。

……十日程で、死なゝいだけは明かになつたが、床を離れる迄には三月や四月はかゝると醫者は云つた。

祖母の死、これが私に本當に恐しくなつたのは此頃であつた。

叔父の一人が、

「……そりや、お前のやうに自家の財産を何んとも思はないのは氣持もいゝさ。然しお祖母さんも、もう二年だぜ。……お祖母さんが安心して眼をねむつてから勝手な仕たつて遲くはあるまい」こんな事を云つた。私はかう云つた。

「心配を掛けてる間お祖母さんも死にきれないんだから、安心されるのが私には何より可恐いんです」

叔父は笑つたが、私は笑はなかつた。――「もう二年だぜ」醫者だつてこんな事を平氣で云へる奴は憎んでやる。――腹ではかう思つて居たのだ。

祖母の健康はいくらかづつ回復して行つた。よくなるにつけ、重るにつけ、氣六ケしい事を云つて看護婦や私には義理のある母などを困らした。かう云ふ時、頭から祖母を叱りつける事の出來るのは私だけであつた。

私はそれまではよくいゝ外國行を心に計畫してゐた。然し此時分から其望は自ら殺して了つたのである。十三で實母を失つた私は其以前からも殆ど祖母の手だけで育てられた。だから私の我儘な性質とか意氣地なしとかは總て祖母の盲目的な愛情の罪として自家の者からも親類

からも認められて居た。病床で二人だけになると祖母はよくそれを云出しては涙を流した。これにはいつも私は怒らされるか泣かされるかしない事はない。殊に亡くなつた母の事を云はれると、理窟なしに直ぐ涙が流れて來た。而して或時はかういふ相手もなくなつた一人ッキリの自分を想像する事もあつた。

祖母は段々とよくなつた、二ケ月半ばかりでたうとう床を離れるまでになつた。然し眼に見えて弱くなつた。其樣子を見ると私は力の入れ所のない不安を感ずる。こんな時私は、

「長生しなくちや駄目ですよ」こんな事を荒々しく云つた。又、

「いまに私も何か仕ますからネ」こんな事を云つた。祖母は首肯きながら、その「何か」が解らないと云ふやうな顔をして居る。それには私も腹を立てる事があつた。

或晩夢を見た。

――不圖眼を覺すと（それが夢だ）祖母が部屋を出て行く。便所なら今母が昌子（私の末の妹）を抱いて行つてるのにと思つたが、其まゝにしてゐると間もなく祖母は手洗を濟して還つて來た。私は眼を覺してゐる時はいつもしてやるやうに起きて夜着をかけてやつた。何氣なく見ると、夜着の袖口から小さな手が出て居る。昌子の手だ――私は其時直覺的に、便所から出て來た母とのスレ違ひに如何かして此手が祖母へくッついて來たんだなと思つた。から思ふと一種の緊張した興奮が腹の奥に起つたやうな氣がした。然し外面は私はグッと落ちついて了つた。

私は割りに平氣に廊下と一ト間を隔てた母を呼んだ。母は昌子を抱いたまゝ出て來た。昌子はグッスリと眠込んでガックリ頭を後へ垂れて居た。……手は兩方共ある。

其時直ぐ夜着の袖口を見たが、今度は手がなくて、三寸ばかりに延びた私の髮の毛がゾックリ一トかたまり、皮ごと落ちて居た。――「何か居るぞ！」から思つた。

「お父さんをお呼びして下さい」私は自分の頭に手をやつて見る氣もなかつた。

母は無言で起つて行く。そこらがシーンとして居る。祖母も母も默つたやうに口をきかない。「凶」――から云つた見えない力が此家中を一パイに支配してゐる、こんな氣がした。

それに對しては瞬きも出來ないと思ふ。……と見ると、母の袖の下からだらりと下つた昌子の片手だけが土色をして居る。思はず立つて私はついて行つた。其時背後からスッと私をスリ拔けて行く者がある。私は直ぐそれへついた。其者は襖も障子も音もなく開けて行く。それが非常な速さだ。中の口から戸外へ出る。

「女の西洋人だ」――から思ふと「イヤ、白つ児だぞ」と直ぐ思ひ直した。灰色のスカートを曳いて飛ぶやうに門の方へ逃げて行く。私はイキナリ後から組みついた。――夢は覺めた。

私は暫く深い呼吸をしながら天井に丸く映つて居る行燈の燈を見つめて居た。

……どうしたのか祖母も眼を覺して居る。私は今の夢を話してやつた。すると祖母は、

「そんなら私も丁度同じ夢を見て居た」と云つた。これにはゾーッとした。――がそれも翌朝になつて見たら夢だつたのである。

此夢は妙に頭へついた。

――子供の頃、一つ下の級に何といふ事もなくヒドク憎らしく思つた子供があつた。或時は餘り憎らしくなつて、持つて居た鞠をイキナリ頰へたゝきつけて泣かした事もあつた。所が

暫くして私は全く其兒が嫌ひでなくなつた。それは夢で其兒が綺麗な着物を着て可愛くなつて私に親しくしたからである。翌日は私は此子供に一種の愛情をさへ起して居た。――

白つ兒にも夢からそんなに思ふのは馬鹿々々しくも、亂暴のやうにも思へる事があつた。然し祖父の亡くなつた日の事を考へると、急に、「何だ！」と云ふ氣になる。そんな事で油斷すると危險だぞとも思つた。

白つ兒は懐手をしてよくぶら／＼と往來を歩いて居る。それが私には餓ゑた肉食獸の食い、をあさつてでも居るやうに見えた。所が此いつもぶら／＼してゐる男が葬式の列に添うて走りながら世話を焼いて居る樣子を見ると、まるで別人かと思ふ程にキリヽとして了ふ。何も知らずに眼を泣きはらして白い着物で從ふ女の人などを見ると、他事ながらカッとして來る事もあつた。

祖母は何となく元氣が無くなつた。――氣のせゐで左う見えるのかな、とも迷つた。

夜晩く歸つて來ると眼を覺して居て、「何處へ行つて來た？」と聞く事がある。「何か口へ入れる物はないか？」など、云ふ事がある。そんな時に私はビスケットを二ツ三ツ持つて行つてやると、それを食べて又眠る。こんな事は私にも子供から決して許さなかつた事だ。

祖母は又私のする二三日の旅行も喜ばなくなつた。私には左ういふ事々が情なく感じられた。それにつけ呪つて居るやうな白つ兒をどうかしなければならぬと思ふ。

或日親類の者が來て、其家の老人が重患でもう助かるまいといふ話をしながら、

「病人も夜着を釣るやうになると、もう長い事はありません」と祖母に云つてゐた。私は聽いて居てヒヤリとした。夜着が重いと云ひながら此言葉を想ひ出す祖母を考へても――自分を考へても私はゾッとした。いづれは死ぬ。百まで生きる人は殆どない。然し九十、自分が四十以上になるまでは生かして置きたい。白つ兒をどうかしなければならぬ――然しどうかするとは如何する事かと思ふと私の考へも其處で止つて了ふ。

秋も更けたが妙に生温かい日が續いて、其内不意に寒い日が來た。祖母は風邪をひいた。これが段々惡くなつて苦しさうな咳が頻りに出る。呼吸が妙に早くなる。私は恐れて居た事がいよ／＼來たなと思つた。

病名は知らないが、醫者にたんが溜つて空氣を吸ふ場所を段々狹くする爲に呼吸が早くなるのだと云ふ。所が其たんが時々込上げて來る。これが見て居られない。

せいてもせいてもたんが切れない。上眼使ひをして力を入れこせかうとするが如何にも力が足りない。背後から抱いてゐるが、私にも如何する事も出來ない。其内祖母は疲れて、もうせく力がなくなると、ゲッとつまつて息が止つて了ふ。抱いてる私の手を握りながら、背を丸くして苦しむ。痩せきつた小さなからだには全體に力が入つて居るが、それで息が出來ない。顏が赤くなつて、眼をつり上げて了ふ。私は無益に力を入れて――仕方がない、自分で咳をする。調子をつけて力を移すやうにするが、祖母は今にもガックリ往つて了ひさうになる。父も母も只あわてるばかりだ。

かう云ふ時、私は幾度部屋の暗い隅を一生懸命に睨んで居る。其處に實際、白つ兒の灰色の眼が見えるのではないが、私はそれをこしら

へて――又出來る――それを出來るだけの力で睨みつけるのである。

祖母の苦しみぬく時にはその樣子を見て居られなくなる。長いと云つても本當に計つたら何秒と云ふ間であらう。其僅な間が見て居られない。何秒の逃場としても私は暗い隅に眼を外らさずには居られない。息を凝して睨んで居る。其内祖母の脣からドロ〳〵のいゝたんが流れ出して來る。看護婦がガアゼでそれをとる。祖母はすつかり疲れる。靜に寢かしてやると默つて眼を眠る。凹んだ眼から淚が溢れて居る。

――から云ふ事が三四度あつたが、祖母は又取直して來た。

日に八度吸入をした。吸入器のコップに二杯づつ、寢ながら吸入をした。祖母のは湯氣の中で呼吸してると云ふだけで殊更に強く吸ふと直ぐ咳になる、がそれで少しづつはよくなつて往つた。大きな火鉢にかけた金盥からは絕えず湯氣をたてゝ置いた。

はか〴〵しくはないが段々と呼吸の數も減じて行つた。

私はこんな事を思つた。前の時でも今度でも、もう殆ど危いとなつてどうか取直す。これが若し自分が自家に居なかつたらと想像すると祖母は到底生きてゐさうもない氣がする。それが白つ兒か何かもう知らない。――兎に角、祖母を襲つて來る者に自分は何かしてゐる。この考へは何となく疑へなかつた。然し私は、快くなつて行く樣子を見ながらも安心は出來ないと絕えず思つて居たのである。

三月ばかりで思つたより早く全快した。醫者は二月末までは鵠沼あたりの海岸に行つて居る方がいゝと云つた。

朝、荷は新橋へ先に屆けさして、後から祖母と俥を連ねて家を出た。U町の葬儀社の前へかかると、生花造花などが店先に竝べてある。白張り龍頭などが軒先にたてかけてある。黑い着物の人足共が溝板の上にシャガンで煙草をのんで居る。

其樣子から家の中の工合がいつも餘所の葬式にそれらを運び出す時とは異ふ。

「若しかしたら白つ兒が死んだ!」――思ふだけで胸がドキ〳〵して來た。……白つ兒はたしかに居ない。……俥は店の前を過ぎた。私には不意にヒロイックな烈しい興奮と得意とが起つて來た。頭巾を被つた頭をチョコンと出してゐる小さな祖母を後から見てゐる内に、「どうだい!」と怒鳴つてやりたいやうな氣がして困つた。

新橋へ來ても何にも知らずに祖母は間拔な顏をして風に當つた眼をショボ〳〵さして淚を拭いてゐた。私は、

「お祖母さんは馬鹿だなア」から云つて背中でも撲つてやりたいやうな氣がした。

白つ兒はたしかに死んだ。――それはどういふものか疑ふ氣が少しもなかつた。

人の死を喜ぶ。それも殆ど矛盾なしに喜ぶ。――私には初めての經驗だ。

私も葬儀社と云ふ職業のあるのは仕方がないと思つて居る。然し葬儀社はしても考へてならぬ事があらうと思ふ。所が、白つ兒は絕えずそれを考へて居たのではないかしら……

私は戰爭は勿論、總ての殺人を憎む、(今も左うキメて居る)――死刑と云ふ法律も私には許せないものだ。だのに、白つ兒の死、それには何かの意味で自分が原因になつて居さうな氣をしながら矛盾なしに喜ぶ事が出來た。――!

いゝ事か惡い事か知らない。――が、どつちに

しろ私は嬉しくて嬉しくてならなかつた。

鵠沼に居る間に祖母は大變丈夫になつた。而して二月の末に歸つて來た。

それからも私はよく店の中を注意して見た。然し遂に白つ子の姿は見る事がなかつた。

私は此冬祖母を又鵠沼へ連れ出さうと思つて居る。祖母は去年より遙に丈夫になつた。

(明治四十四年十二月)

子供三題

一、次郎君

K氏の親類の兒で、名は知らぬ。次男だと云ふから假に次郎君とする。

次郎君の兄さんは音無しい兒であるが、次郎君は却々のきかん坊ださうだ。

次郎君の家に大きな角火鉢があつて、先生何ぞといふと、それに乘つて困るといふ。K氏のお母さんは第一あぶないし、それをいやがつてよく叱言を云つた。その度次郎君は不精々々下りてゐた。

或る時、下りたと思つて、部屋を出ようとすると何時の間にか又乘つてゐた。K氏のお母さんは腹を立てゝ、默つてにらみつけた。次郎君も默つて再び下りたが直ぐ聞えよがしにこんな獨言を云つた。

「エヽ！　あの婆ア早く死ねばいゝなあ」

或る日、お父さんと湯に入り、先へあがつて、よく拭かずに、行きかけるので、お父さんは風呂の中から、

「風邪をひくぞ。もつとよく拭きなさい」と聲をかけた。次郎君は一寸手を擧げ、二の腕を二三度フウ〳〵と吹いて、其儘いつて了つた。

もう一つ。

これも或る日の事だ。次郎君は飴を頰張りながら、例の角火鉢の側で何か獨りで饒舌つて居た。そして思はずその飴を灰の中へ落として了つた。勿論飴は灰まぶれである。先生、それを火箸で摘まみ上げ、殘念さうに眺めて居たが、側に居た妹にそれを食へと云ひ出した。妹がいやだと云ふと、どうしても食へと强ひた。

離れた所で、見てゐたお父さんが、

「そんな事を云ふなら、貴樣食つて見ろ」と幾らか怒氣を含んで云つた。流石の次郎君もこれには一寸弱つた。が、直ぐ自分の懷から紙を出すと、それでくる〳〵と飴を卷き自分の口へはふり込んだ。そして頰張つたまゝ悠々と部屋を出て行つた。

却々面白い坊主である。

二、かくれん坊

「もういゝかあ。もういゝかあ」遠くでからいふ聲がする。かくれん坊の鬼がいつてるらしいが、「もういゝかあ」は少し間が拔けて居ると思つた。私は二階で手紙を書いて居る。

間もなく下の往來を一人は草履、一人は靴で駈ける足音がして來た。二人は駈けながら、何か忙しく話し合つて居た。それが止むと、今度は景氣のいゝ調子で、

「もういゝよう」私の妹の淑子の聲である。

私は手紙を書續けて居た。暫くして封をしながら、氣がつくと、下では子供等が何か切りに云ひ合ひをして居た。私は机越しに手を延べ、障子を五寸ばかり開けて見た。前の家の少し凹んだ門の所に淑子とオデットと云ふ淑子よりも一つか二つ下の佛蘭西人の小娘とが竝んで立つて居る。それと向合つてジョールといふ娘の兄さんが短い半ズボンの下から白いすらりとした脛を出して立つて居た。「もういゝかあ」は此先生だつた。

何でもジョールさんの鬼が彼方から駈けて來ると二人は藝もなく竝んで其處に立つて居たら

しい。探すまでもなく二人は直ぐ見つかつたが、扨て何方が今度鬼になるか、それが分らず、今その悶着の最中らしかつた。

「ジョールさんが其處で首をかうなさつたでせう？（と淑子は自分の首をめぐらして見せ）そしたら、私とオデットさんと、どつちが先に見えて？」

淑子はそれさへはつきりすれば此難問題は解決されるのだと云ふやうに、口を堅く結んで熱心にジョールさんの顏を見詰めて居る。

ジョールさんは弱つた。二人の何方が先づ自分の眼に映つたらう？ ジョールさんは赤皮の半靴の足を揃へ、眞直ぐに立つて、上眼使に淑子と妹の顏を見くらべながら考へて居る。

金具のついた皮のバンドをゆるくしめ腹を突き出し、兩の掌を後で握り合はせ、默つて考へてゐるジョールさんの樣子は如何にも仔細らしく可笑しかつた。

淑子もオデットさんも耳を澄まし、ジョールさんの口から出る言葉を待つて居る。

暫くして、

「オデットだ」とジョールさんはきつぱり云ひ切つた。緊張はゆるむ。

「ジョールはヅルい、いやだわ、私」オデットさんは眉根を寄せ、肩につく程首を傾け、後手に門の戸を摺つて横歩きをしながら泣き出しさうな顏をした。

淑子は氣の毒さうに默つて暫くそれを見て居たが、

「そんならいゝわ。私、鬼になるわ」と云つた。

「オデットずるい」兄さんは妹を睨んだ。

「いゝ事よ、私が鬼になるから、早く、お逃げなさい。ね、早く、お逃げなさい。私此處にかうして居るから」淑子は兩の掌を顏に當てゝ後ろを向いた。

「オデット、おいで」ジョールさんは不興氣に云つた。

オデットさんは不平らしい顏をしながら、それでも門の戸を離れて出て來た。そして顏を隱してゐる淑子の方をもう一度振返つてから、急に勢よく兄さんのあとを追つて驅けて行つて了つた。私は障子を閉めた。

少時して、「もういゝかい」といふ淑子の甲ン高い聲がした。

三、輕便鐵道

小田原で湯本行きの電車を降り、前の茶屋に休む。熱海行の發車までには尚一時間餘りある。

眼の上に焦茶色のぼちのある小さい黑犬が顏を見上げて頻りに尾を振る。さうして菓子を貰ひつけてゐる犬らしい。媚びるやうな眼付きが感心しない。菓子はやらなかつた。

私の側には淺草の者だといふ肥つた男が腰かけてゐる。新橋からずつと一緒に、互に無言で來たが、横濱の停車場を出る時、其男は私を顧み、始めて口をきいた。

「幾らかお温かになりやしたな」

「えゝ」

それだけで、その次は平塚を出る時又其男が話しかけた。

「失禮ですが、何方へ？」

「湯ケ原へ行かうと思ひます」

「へえ、私も湯ケ原で。湯ケ原はどちらかお宿は決つて居りますか」

「決めてゐます」

「宿屋にも（）（）（）、何か妙な事をいつたが私には分らなかつたがありませうな」

「え？」

「その、いゝのと惡いのが厶いませうな」

「あるでせう」

「御病氣ですか」
「いゝえ」
「へえ、私はその轉びましてな。二週間名倉へ通ひましたが、薩張り埒がムいません」からいつて裾をまくり、不快な色に腫れ上つた膝を出して見せ、「これからこれへかけて、まだこれで……」と私の顏を見上げる。
「あゝ」私は眉を顰めた。如何にもきたない感じがした。
國府津で電車に乘る時でも、小田原でそれを降りる時でも、其男は毎時、私の顏色を覗つて、「此處ですか？」と云ふやうな顏をする。私が一寸點頭いて見せると、お辭儀をしてそこそこに荷物を取下ろす。今ゐる茶屋にも私について入つて來たのである。
最初、何となくいやな奴に思へてゐたが、かう萬事逆はずに出られると自然と多少の好意が湧く。私は茶を飲みながら、此男と少し話した。
却々時が經たぬ。私は町を少し歩いて見る。足が惡いので其男はついて來なかつた。
小さな堀があつて、堀の水はきたないいなりによく澄んでゐた。口の缺けた德利が底の溝泥に半分埋まつてゐるのがよく見えた。

見附を入つた所に小學校がある。休み時間で子供が大勢遊んでゐた。廣い運動場で、砂地の爲めに霜柱が立たず、子供等は地面に轉がり廻つて遊んでゐた。
私は低い垣根の側に立つてそれらを見た。洟たらしのきたない子供達で、中には性の惡さうな奴もゐるが、長閑な氣持でかうして見てゐると、どれもこれも同樣に親しい氣持で見られ、面白かつた。
垣に近く、テニス・マッチをやつてゐる連中があつた。三尺幅程の縞が地面に描いてある、これがネットで、ラケットは手の掌である。それで立派に試合をやつて居る。打ち込みに名人がゐて、それに大分倒されてゐた。應援隊が盛に囃つてゐる。
私は時間の許すかぎりそれを見て、又ぶらぶらともと來た道を引返して來た。途々、一體自分は子供好きなのか、それとも子供のやうな遊び事が未だに好きなのかなど考へて來た。
歸ると、茶屋の婆さんが、「直ぐお乘り込みになつてよろしうムいます」と云つた。
乘合は淺草の男の外に水兵五人、頰骨の高い五十ばかりの女と、その娘と男の兒、それと私だつた。

間もなく、いかにもちやちな小さい機關車は[illegible]の如く汽笛を吹いて發車した。ガタガタといやに氣忙しく走る。早川橋を渡り、海岸づたひにやがて石橋山の麓へかゝつた。
「これから段々あぶない路になりますよ」眞鶴の者だと云ふ水兵が隣りの海軍工機學校と書いた帽子を被つた水兵に話しかけた。
「あゝ、左うかね」と此男は大やうに[illegible]しながら、眼はそのまゝ海の方を眺めてゐた。
二人は知り合ではないらしかつたが、場所場所で眞鶴の水兵は丁寧に說明してゐた。
「根府川の石山は陸軍の所轄ですから無暗に切り出せないんですよ」
「左うかね」
「觀音崎の要塞の石なんか皆此處から出すんですよ」
「あゝ、左うかね」とにこにこしてゐる。
根府川の停車場は幾らか坂になつてゐるので、發車にブレーキをゆるめると一寸逆行した。それと同時に車輪が廻り出したから、車體が酷く搖れた。
「ゴースタンとゴーヘーを一緒にやり居るわ」大やうな水兵は皆を顧みて笑つた。私達は別に可笑しくもなかつたが、水兵達は皆笑つた。

一歩々々段々あぶなくなつて來たね」工機學校は窓から首を出して其邊を見廻した。

「一つ脱線しようもんなら、これだけで海の中へどぼーんですぜ」眞鶴は皆の顏を見る。

「なんまいだあ、なんまいだあ」こんな事をいふ水兵があつた。

「これからが段々あぶないんですよ」眞鶴は何んとなく得意である。

實際路は段々海面を遠ざかる。

「どうです」眞鶴は如何にも嬉しさうだ。

「こりやあ、大分あぶないね」言葉だけはあぶなさうだが、顏は相不變にこ／＼して居る。

あぶない所へ來る度、眞鶴は、

「どうです」と云ふ。

「あぶないね」と工機學校も同じ事を繰返してゐた。小田原國府津の海岸が遠く見えて居る。

先刻から青い顏をしてゐた娘が、母親の胸へ額をつけ、何かいつてゐる。

「頭を冷やす方がいゝよ」母親は抱くやうにして立たさうとするが、娘は力を拔いて動かなかつた。

「もどしさうだ」

「だから、立つて窓から首をおだしなさいよ」

「苦しい」娘は泣き出した。

「弱蟲だよ。しつかり立つて顏をお冷やしなさい」と母親は叱つた。

娘は窓へつかまつて顏を出し、そして何かもどした。

「餘つ程いゝだらう?」

娘は首肯いた。

母親は袂からハンケチを出し、娘の涙を拭いてやつた。娘は十三四の反齒で眼のキヨロリとした醜い兒だつた。母親も醜り感じつゝ、女ではなかつた。然し如何にも母らしい感情に浸りつゝ拭いてやる。それを此方も既にそれ程の年でもないのに默つて拭かしてゐる、かういふ樣子は一種いゝ氣持で眺められた。

眞鶴へ來て、眞鶴の水兵は下りた。機關車へ水を入れ、熱海からの列車を待つた。間もなく貨車を一臺曳いたのが來て、それと入れ代りに私達の列車は動き出した。

その邊に遊んでゐた學校歸りの男の兒が五六人、喜々の列車を追ひかけて來た。一人鞄をかけ、片手にビールの空壜を持つた奴が客車の直ぐ側まで追迫つて來た。向うで貨車に米俵を積込んでゐた小揚人足が大聲に、

「乗るぢやあ、ねえぞ」と怒鳴つてゐた。

「乗れ／＼。かまあもんか」と工機學校の水兵は窓から作業らしい顏を突き出し、子供達をおだてた。

汽車が早くなるに從ひ、一人々々落伍して行つたが、七つばかりの[illegible]らしい洟垂らしだけが一人執念深く追つて來た。どう云ふ心算か草履を片々は穿き、片々は手にはめて、それをきり／＼振り廻しながら、いい、むきになつて追ひかけて來る。丁度踏切が上りになつて汽車は少し遅くなつた。きかん坊は[illegible]ぞと業腹を出來るだけ剝出して段々に追よつて來た。

「しつかりやれ。しつかりやれ」工機學校は立上つて小さな窓から上半身を乗り出すやうにして應援した。

もう二三間で追ひつく所まで迫つた時、その子供は不意に、俯向きに立止つて了つた。[illegible]眼に石炭殻が飛込んだのだ。

子供は、眼をこすり／＼何時までもまぶしさうに此方を見送つてゐた。

「ハヽヽヽ。残念で卻々歸りよらん」水兵は笑ひながら、それでも氣の毒さうに、ハンケチを出して頻りに振つた。

暫くして子供は眼をこすり／＼歸つて行つた。

（明治四十二年正月）

鵠沼行

順吉は十四になる弟の順三の聲で眼を覺した。

「今日皆で拓殖博覽會へ行くんですつて、お兄様いらつしやらない？」襖の外でかう云つて居る。

「皆つて誰なんか行くんだ」

「みんな」

「お祖母さんや呂ア公までか？」

「えゝ」

順吉はムッとして默つて了つた。

「お兄様、いらつしやらない？」又弟が云つた。

「今日は日曜ぢやないか。そんな人込みに年寄りや子供で行つてどうするんだ」

「いらつしやらないの？」

「迚も行けないつて云つて呉れ」

「エー」

間もなく順三の梯子段を下りて行く足音が聞えた。

順吉も起きた。而して少しふくれ面をして茶の間へ出て行つた。皆は着物を着更へて居た。祖母は皮の信玄袋の口をゆるめて、ハンケチだの煙草入れだの千金丹だのをそれへ詰めて居た。呂子は友禪の着物を着せて貰つて、其長い袖をさも持に扱ふ風に兩手に一ト卷き卷いて、ぶく／＼した足袋を穿いた足で其邊を駈け廻つて居た。

「僕が行かなければ男は誰か行くんです」

順吉は露骨に不機嫌を見せて祖母に云つた。

祖母は、一目も二目も置いた調子で「お兄様がいらして下さらなければ可恐いつて上の妹が云つてゐたと云ふやうな事を云つて、

「お前が行けなければ仕方がないから、丁度石井が來たから、あれに連れて行つて貰はう」と云つた。

「何しろ亂暴だ、途中は俥で行つてもいゝが、中へ入ればもう同じですよ。第一そんな人込みで何が見られるもんですか。新聞で見たつて解つて居るぢやありませんか、年寄りや子供で遊びに行ける場所でない事は」

「それならよすかい」

「無論およしなさい」

「昨日から皆たのしみにして居たんだつけが……」

「迷兒が出來たり怪我人が出來たりする事を思へば、そんな事は何でもないさ」

祖母は困つたと云ふ笑ひをして默つて了つた。

傍で默つてそれを聽いてゐた十二になる淑子が姉や英子（十歳）が未だ着物を着更へて居る倉のしころの方へ行つた。すると隆子の、

「つまんないの」と鼻聲で云ふのが聞えた。

もう支度の出來上つた英子（十六）が其正月に生れた末の妹を抱いて座敷の方から出て來た。而して、

「お兄様いらつしやらないんですつて？」と云つた。

「何だ、こんな小さな奴まで連れてく氣だつたのか？」順吉は怒るやうに云つた。

妹は氣壓れたやうな顏をした。

「あぶないから、行つてはいけないいと……」と少し態とらしく祖母が云つた。

「皆もおやめなの？」かう云つて英子もがつかりしたやうな顏をした。其處に、

「今日はおやめですか？」と母が笑ひながら、羽織を手に持つて出て來た。

「左うなんですつて」と英子も少し不平らしく云つた。

「總勢にしたら八人位ぢや有りませんか。若い者でも其人數ぢやはぐれる位だ。はぐれまいとするだけだつて何が見て居られるものですか」

「つまんないわ」と隆子が故意に左う云ふ顔をして母の袖にからまりついた。

「誰だ。青山へお葬式の車を見に行つてはぐれた奴は」順吉は隆子をにらみつけて左う云つた。

「ふうん〳〵」と半分笑ひながら隆子は泣くやうな眞似をして母の後に隱れた。

「植木屋に連れられて泣いて歸つて來たんです。アゝいや〳〵。そんなにからまつちやあ。帶がぐず〳〵になつて了ふ」と母は隆子を叱つた。「眞實におやめの方が無事ですよ。歩いて半杭さんへ行つて又皆で日比谷へおいでなさい。それが一番安心でいゝ」と母は笑つた。

もう少し前から其處へ來て獨りむつつりして居た順三が「日比谷なんか、つまんないや」と云つた。

「向島の百花園に行つて見ますか」と僅な希望をつなぐやうに祖母が云ひ出した。皆は黙つて順吉の顔をうかゞつた。

「そりやあ拓殖博覽會よりは幾らましか知れないけれど、何しろ淺草の方ですからね、若しも電車で行く氣なら危いな。おまけに角もあるし」

かう云ふと子供達の顔には一せいに失望の表情が浮び出た。

「こんなにみんな支度まで出來たのにねえ」と隆子はわざと大人びた調子で[illegible]を顧みた。

「馬鹿」と英子は笑ひながら隆子を叱つた。

座敷の方から四つになる昌子が走つて來た。未だ長い袖を手へ巻きつけて上げるやうにして居る。

「お兄様、博覽會にいらつしやらないの？」

「うん。もう皆博覽會はおやめだ」

「もう博覽會はおやめ？　何故？」

「あぶないから」

「何故あぶないの？」

「お前が迷兒になるといけないから」

「昌アちゃんが迷兒になるから？」

順三が癇癪を起して、

「昌アちゃん、黙つといで」と叱つた。

昌子は吃驚して大きな眼を一層大きくして順三を見上げた。然し黙らなかつた。

「昌アちゃん迷兒にならないわ。姉やにおんぶするわ、ね、昌アちゃん迷兒にならないわ」さう云つて順三を見上げた。

「お前がならなくても、隆子姉ちゃんが迷兒になるからいけない」と順吉は隆子を見て笑つた。

「まあ、いやだ」隆子は次の間に逃げて行つた。

母も台所の方へひき返して行つた。

「いつそ鎌倉へ行きますか」又祖母が[illegible]にも臆病らしく云ひ出した。鎌倉といふのは祖母には義理の子になつて居る直方と云ふ順吉には四つ上の叔父の家を意味して居た。

「鎌倉ならいゝでせう」

「鎌倉なら兄さんも往つて呉れますか？」

「えゝ」

祖母は急に嬉しさうな顔をした。而して、

「兄さんに往つて貰へれば安心だ。淑子」と淑子を顧みて、「兄さんが鎌倉へ連れておんなさると」と云つた。

淑子は終りまで聞かずに起つて行つた。

これが傳はると急に皆元氣づいた。

「かう大勢で押しかけたら、お峰さんは大まごつきかも知れない」と母が云つた。

「全體何人だ」順吉は祖母から女中まで指を折つて數へて見た。「十人だ。迚もあの家には入りきりませんよ。第一それだけのめしが不意に行つちやあ出來まい」
「それなら三つ橋へ行つて呼びますか」と祖母が云つた。
結局鵠沼の東家へ行く事になつた。而してもう何も支度の要らぬ順三を直ぐ一ト足先に鎌倉へやつて鎌倉の連中を皆誘つて來さす事にした。
順吉は先へ往つた順三を除き、あと大小八人を宰領して家を出た。
それは秋の秋らしくよく晴れた氣持のいゝ日だつた。
品川の海を眺めながら順吉は、
「博覽會のゴタ〱へ行くより如何によかつたか知れやしない」と云つて竝んで腰かけて居た祖母を顧みた。
彼は皆の博覽會行きを頭から反對したのは自分の我儘からではないと思つてゐた。然しその仕方は少し酷かつたと考へた。毎日毎晩勝手に遊び廻つてゐる自分が皆の樂しみにしてゐたいゝたまの外出にあゝ云ふ調子で物を云つた事は少し心にひけて居た。彼は出來るだけ今日を皆にとつて愉快なものとしたいと思つた。
大船でサンドキッチを子供等に一つづつ買つた。
藤澤から電車に乘りかへた。鵠沼の停留場からは祖母と當歳の祿子だけが俥に乘つてあとは砂地の路を歩いて行つた。
東家へ着いた。二階の廣い部屋に通された。直ぐ向うに江の島が見える。小さい連中は喜んで縁へ出た。
鎌倉の連中は却々來なかつた。
「何してるのかしら。まささん（伯父にあたる順方を順吉は子供からの習慣で左う呼んでゐた）が御寺へでも往つて居たかな」
「お峰さんやお泰さんがおめかしでもしてるんでせうよ」と云つて母は笑つた。
「腹が空いて了つた」
「兄さんは朝御飯を食べずだから、空いたでせう。昌子の手をつけないサンドキッチがありますよ」と母が云つた。
「もう來るでせう」
女中を呼んで彼は晝の物を云ひつけた。それから彼は小さい連中に、
「御飯の出來る間、海の方へ往つて見ようか」と云つた。皆は喜んだ。
祿子だけ置いて、下駄を廻して貰つて庭から出た。隆子は一人だけ眞先に駈け出して芝生の向うのブランコへ往つた。皆は池のふちをついて海へ出る木戸の方へ歩いた。
池に舟が浮かんで居た。
「乘らうか？」と順吉は淑子を顧みた。
「乘りませう、隆ちやん。お舟に乘るのよ」と淑子は大きな聲で隆子を呼んだ。隆子は直ぐ駈けて來た。
「みんなしやがんでるんだよ」女中共都合六人乘込んだ所で、「いゝか？」と云つて順吉は岸へ竿を張つた。
初めて舟に乘つた昌子は中腰をして舟べりへつかまつた儘、不安な眞面目顏をして其邊を見廻して居た。
「母アさん」隆子が大きい透る聲で遠い二階へ呼びかけた。
縁側に坐つて、らんかんの間から頭だけ見せて居た母が此方を向いた。母はらんかんにつかまつて起ち上つた。而して後を向いて何か云ふと祖母も縁へ出て來た。母はハンケチをふつた。祖母は小手をかざして見てゐる。

「お祖母アさん」と又降子が大きな聲をした。昌子が一緒に「母アさん」と呼んだ。
「橋だ〳〵。みんな頭を下げろ〳〵。吉枝、昌ア公を抱け。手をはさむと大變だぞ。いゝか」順吉は勢をつけて竿を一つ突つ張つて、自分も頭を下げた。舟はすーつと水の面を滑つて橋の下をくゞつた。
暫く漕ぎ廻つてから皆は舟から上つた。而して小さい木戸から路へ出た。波の音が秋の穩かな空氣に響いて居た。皆は路から草の生えた砂原へ入つた。少し行くと小さな流れに出た。人の跫音で、小さい魚の一群が淺い流れを水底にうつる自身の影と一緒に逃げて行つた。
「此處からは行けないな」順吉は流れの上下を見渡しながら云つた。「さつきの路をずーと廻らなくちや駄目だ。――兄さんがおぶつてやらうか。それとも足袋を脱いで皆渉るか?」
淑子と降子が顔を見合はせて嬉しさうな顔をした。
順吉は先づ自分から足袋を脱いで袂へ入れるとヒヤリとする黒い砂に立つた。自分の足がいつになく美しく見えた。皆も左うした。昌子まで獨りで足袋を脱ぎかけた。
「昌ア公は其儘でいゝ。兄さんが抱いてつてやる」から云つて抱上げると昌子は默つて反りかへつた。「いやか? お前も渉るのか? ころぶと大變だよ。いゝおべゝが濡れちやふよ」左う云つても昌子は默つて無暗と反りかへつておりようとした。「吉枝、そんなら脱がしてやれ。それから俺の下駄を持つて來て呉れ」
昌子は嬉しさうに皆の眞似をして裾を上げて流れへ入らうとした。
「もつと、まくらなければ駄目だ」順吉は惹きずりさうな長い袂を背中で結んでやつた。
淑子に「もつと、もつと」と笑ひながら云はれて昌子は自分で、へその出るまで着物をまくつた。淑子と降子は聲を出して笑つた。
「つべたいわ」と昌子は後からついて來る順吉を見上げて云つた。實際それは痛い程つめたい水だつた。
流れを渉ると乾いた白い砂原へ出た。皆は裸足で儘草も何もない砂原を波打ぎはの方へ歩いた。秋も末に近かつたから海岸に遊んでゐる客らしい人の姿も見えなかつた。皆は自家の庭で遊ぶ時のやうに顧慮なく笑ひ騒ぎながら行つた。
波打際では皆裾をまくつて、寄せる波に足を洗はして遊んだ。順吉は淺い所で波の寄せる間昌子を抱き上げて居て、その退く時下ろしてやつてゐた。昌子は後から持たれるのを嫌がつて、下ろすと直ぐチョコ〳〵と其處を離れて、獨りでその足許を見て立つて居たがつた。
「倒れるぞ」と順吉は云つた。
「何んだか眼が廻つて來るわ」とわいわきで同じ事をしてゐた淑子が云つた。
「かうやつてると踵の下の砂が無くなるだらう?」
「えゝ。後へ倒れさうになるわ。昌アちやん。獨りでそんな事をして、倒れたら大變よ。波にさらはれてよ」
昌子は怒つたやうな眼をして淑子を見かへして居た。
石や貝を拾ふ事にした。小さい櫻貝が澤山あつた。
「皆、おなかが空いたらう」と石ずれを出して砂に腰を下ろして居た順吉が暫くして皆に聲を掛けた。
「隆ちやんは少しも空かない事よ」と直ぐ降子が答へた。
「もう一時半だ。御飯を食べて、若し早かつたら江の島へ行つて見よう」
兎も角歸る事にして順吉は昌子を呼んで思

ひ切つてまくり上げてゐる着物を着せ直してやつた。丸くふくれた小さな腹には所々に砂がこびりついて居た。左うして身體だか着物だかもう磯臭いにほひがして居た。

今度は流れを渉らずに橋から廻つて歸つた。池で順三が鎌倉から來た昇（昌子と同年生れ）を舟に乘せて遊んで居た。

鎌倉から四人來て總勢十四人になつた。食事をして少し話して居ると四時過ぎた。江の島へはもう時間がないので、土産物の饅頭を買ひ旁々、片瀬の龍口寺へ行く事にして其處を出た。

龍口寺では皆新しく出來た五重塔の横から裏の山へ登つた。祖母と順吉だけが本堂の前で皆の降りて來るのを待つてゐた。

「學習院の水泳で初めて來た時に、今はありませんが、あの山門の右に法善坊といふ小さな家があつて、そこへ泊つて居たんです」と順吉がいつた。

「何んぼ止めても諾かずに出掛けて……」と祖母は笑ひながら答へた。

「今の降子位でせうか？ 何しろ初めて一人で出たんだから急に心細くなつたんですね。それに蚤が居て眠れないので侗まゐつたんですよ――一日に二本も三本も、はやくむかひにくるべし、と電報のやうな手紙をよこして……」

「滿吉が來た時には嬉しいんだか悲しいんだか知らないが大きな聲をして泣いたのを覺えてゐますよ。それから、それは自分では覺えてゐないが、お祖父さんの宛名にして樣の字を書かずに出したとか……」

「左うだつた」と祖母は笑つた。

「書くのを忘れたんですかネ。それとも迎ひの來やうが遲いので怒つてやつたのかしら」

・五重塔とは反對側の道から降子が昇の手をひいて下りて來た。平地へ來ると二人は手を離して競爭するやうに祖母と順吉の立つてゐるところへ駈けて來た。間もなく皆も下りて來た。

石段の下の饅頭屋に休んで電車の來るのを待つた。

電車の窓から七里ヶ濱の夕方の景色を見て行くのが順吉の豫定だつた。然し日曜で江の島からの歸り客で電車の中はギシ〳〵だつた。祖母と祿子を抱いた母だけが人の好意で漸く腰かけられたが、あとは押され〳〵て鎌倉へ入るまで立つて居なければならなかつた。鎌倉へ着いた時は全く日が暮れて居た。

停車場では驛長の好意で祖母だけは橋を渡らずに赤帽におぶさつて線路を越した。皆が橋から廻つて其處へ行つた時には如何にも疲れたらしい樣子をして祖母は板ばりに附いた低い腰かけに背中を丸くして一人腰かけて居た。順吉も今は何んとなく疲れて居た。

汽車に乘つた。鎌倉の連中とは其處で別れた。一行は二時間程して漸く新橋へ着いた。昌子も祿子も他愛なく眠入つて居た。

（大正元年一月）

廿代一面

米田英介は春の初めから、今年は何んとなく頭を悪くしさうな氣がして居た。四月に入つて京都で同人雜誌主催の展覧會をする筈だつたが、その京都行きが苦になつた。迚も會期全體はゐられさうにない。中幾日か山陰の方へ旅して見てもいゝ、そんなに考へてゐた。皆と一緒に居て、疲れないやうに用心しないと、乾度、他人に不快感を持つ、これが彼の癖だつた。此悪い癖を彼は自ら用心してゐた。

翌日出かけるといふ日の夕方、旅費を貰ふ爲めに父にそれを云ひに行つた。

「そんな事をしてゐて、それが貴樣の何になるのだ。——全體貴樣はこれから何をやつて行くつもりだ」

父も近頃は自分達の同人雜誌の仕事に或る程度の同情を持つて居ると勝手に考へてゐた彼には、一寸案外だつた。二人は京都行きの話を其方除けにして大きな聲で云ひ合つた。隣の部屋では彼の祖母と母とが氣を揉んでゐた。「お金はお祖母さんと私とであげますから」父の出かけた後で彼の義理の母がかう云つた。

翌日の出發を三日程延ばして、夕方支度をしてから、彼は父の所へ行き、「これから京都へ參ります」さう云つて頭を下げた。父は默つて返事をしなかつた。珍しい事でもないので、彼は氣にもかけず出かけた。

京都は面白かつた。氣分もよく、中幾日かをはづさずとも彼は疲れずに濟んだ。仲間の誰にも不快感を持たずに濟んだ事を喜んだ。そして歸つて來た。そして一週間程すると、矢張り危いと思つてゐた、自身でもどうにもならない不機嫌がやつて來た。

夜十二時から先は大變元氣になる。無暗と興奮して自分が非常に偉い人間のやうな氣がして來る。四時には寢る事にしてゐるのだが、その興奮が去らないと夜が明けて戸外に雀の囀聲を聞きながら尚ほ眠れずに居るやうな事がよくあつた。

晝の十一時には大概起きてゐた。然し起きるともう不機嫌なのだ。その不機嫌は迚も自身で慰めきれない。無暗に當るやうに自分で自分を持ちあつかふ。夜つぴて、だら／＼と見續けて來たやうな不快な夢の斷れはしが、顔を洗ふ時、飯を食つてゐる時、部屋へ歸つて、紙くづ籠を枕に寢ころんだ時などに、ふつと幻のやうに浮んで來る。

彼には其間が一番閑日だつた。どうにも時間つぶしの法がつかない事がよくあつた。誰かの所へ行きたいと思ふ、然し誰の所へ行かう、さう思ふと、もう誰も行きたいと思ふ人はなかつた。誰の所へ行つた所で、其結果は分つてゐるやうに思はれるのだ。益々不愉快になるとも、慰められる事など、ありやうない氣がするのだ。

「それは君、立派な神經衰弱だよ」

或時佐木と云ふ、彼には年下であるが神經衰弱では先輩の友が、彼の話を聞いてさう云つた。

金曜日の夕方、彼は的もなく、赤坂の自家を出たが、薄く凍つた表に溜池から電車に乗つて、四谷見附まで行き、其處から歩いて番町の伊作の家を訪ねた。武者長屋のやうな大きな門のくぐりを開けると、直ぐ前に丈けの高い洋館があつて、その二階が伊作の部屋になつて居るのだ

が、灯がついてゐなかつた。彼は案内を乞はず其儘出て了つた。
　隼町に居る雨宮といふ法科大學に通つてゐる年下の友の家に寄つて見た。雨宮は喜んで彼を迎へた。雨宮の机の上に細かい字で書いた英文のノートが開けてあつた。
「今日これを倉で眼つけたんだがね」雨宮は下が地袋になつてゐる小さな暗い床から、横物の小さい幅をはづして來た。英一蝶の鹿島踊と云ふ繪だつた。
　間もなく伊作が來た。伊作は文科に未だ籍だけ置いてある大學への月謝を雨宮に持つて行つて貰ふ事を頼みに來たのだ。三人は呑氣な氣持で話した。歌舞伎座へ行つたと云ふ雨宮の家の人々が歸つて來て階下から話聲などが聞こえ、それから暫くして時計を見ると、もう十二時を過ぎてゐた。
　英介と伊作とはぶら／＼と赤坂見附の方へゆるい坂路を上つて行つた。
「泊りに來ないか」
「いやだ」
「まあさう云はずに來ないか」
「今日はいやだ」
「いやでもいゝから、來玉へ」
「本統にいやだよ」
　英介は厭がる伊作の首を二の腕へ抱へ込んで、華族女學校の角から三平坂の方へ曲つて行つた。伊作は抵抗したが、小男で力がなかつたし、いやだと云ふ割りに心持は何方でもよかつた。寧ろ英介の强ひるのがいやらしかつた。
　途中、二人は未だ起きてゐる小さな牛肉屋で食事をした。そして英介の家へ歸つたのは一時近かつた。英介は女中を起こし、翌朝早く伊作の所へ電話を掛けて置くやうにと云つた。
　二人はそれから氣樂に話した。伊作が南新二の「鎌倉武士」といふ戲作の朗讀をした。
　眠る事にして、電燈を消し暫くするともう戶外が明かるくなつて來た。雨戶の隙間から來る光りで部屋の中の物が見え出した。雀が啼いて居る。
「濕り氣のある、いゝ聲ぢやないか」と寢つかれない英介が云つた。
「濕氣があるかどうか知らないが、いゝ聲だと思つて先刻から聞いてゐるんだよ。雀チューチューなんていゝ加減なものだネ。チョッ、チッ――チョッ、チッつて啼いてゐるぢやないか」
　少時すると今度は烏の聲がした。英介が、「アワア――アワア」と其眞似をした。戲作の影響を受けたわけだ。
　間もなく二人は眠つた。そして十二時頃起きた。英介は例の如く不機嫌だつた。伊作も不機嫌だつた。
　食事をしながら、英介は屹度いやだと云ふだらうと思ひながら、
「土曜劇場へ行かう」と云つて見た。
「いやだ」案の定、伊作は不機嫌な聲で答へた。
「何故」
「俺は歸るよ」
「さう云はずに行つて見よう」
「歸るよ。歸つて寢るんだ」
「そんなら、歸るとして、其前兎も角一寸寄つて見よう」
「今日は許して呉れ」
「いやだ」
　結局二人はそれから有樂座の土曜劇場を見に出かけた。二人が行つた時には既に前の狂言二つ濟んでゐた。仁木が來てゐた。廊下で會つた小說家の池田湖山君が、英介の顏を見るなり、
「一夜、睡眠が出來ませんね」と英介が何も云はぬ先から一ト眼で神經衰弱と診斷した。

いよ／＼さうと病氣が決まれば自分も如何か
しなければならぬと、英介は思つた。
ホフマンシタールの「痴人と死」と、それから
シュミット・ボンの「ディオゲネスの誘惑」とが
濟んで、英介は伊作や仁木と共に小屋を出た。
伊作は取附く島のないやうな態度を殊更見せ
つけて、大急ぎで一人日比谷の方へ歸つて行つ
た。
風の吹く、蒸し暑い夕方だつた。
―綾野の所へ行つて見ないか―數寄屋橋を渡つ
て行く時英介がいつた。
―行かう―仁木は直ぐ承知した。
歩いて行く事にして、山下門から又入つて帝
國ホテルの前から日比谷公園を拔け、支那公使
館の前を葵橋の方へ降りて行つた。
綾野は留守だつた。二人共初めからさう思つ
て居たかのやうだつた。
「どうする?」英介が云つた。「面白い所でもあ
ればだけど……!　兎も角、僕の家へ來ないか」
―あゝ―
仁木は云はゞ快癒期の病人だつた。
話は八ケ月程前の事になる。

―仁木が今晩か、明日の朝、又京都へ行くから
君にさう云つて吳れとさ―
南は前夜この家へ泊つて二人は晩くまで話し
た。南も伊作もぼんやりして居た。後から來た
英介も疲れてゐたし、三人は或る者はベッドに
寢ころび、或る者は椅子に腰かけ、だらしなく煙
草を喫みながら、無意味な話に時を過ごしてゐ
る時だつた。戸を一寸明いて、首丈入つて來た
山岸が英介の顏を見ると直ぐさう云つた。
―今、何處にゐるのかしら―
―南宮の所にゐる。重見君も一緒だ―
―今晩たつんだつて?―
―君の都合で明日の朝でもいゝさうだが、何し
ろ追手が嚴しいので、愚圖々々してられないさ
うだ」さういつて山岸は笑つた。
―俺も行く事に決めてるかね?」英介も笑つ
た。
「決めてるらしいよ」
―行つて來い。行つて來い―南は敷島の空袋を
開いた紙に萬年筆で何か樂書しながら云つた。
―行くのはいゝが金がないな―
―どうかなるよ―と伊作がいつた。
日本間の方から、伊作のお父さんの唄ふ謠の
聲が聞こえて來た。

青山と綾野とが來た。綾野は濃紺の薄い夏服
の胸を開け、その狹い額の汗を頻りに拭いて居
た。
―綾野君、早速だが、何か一つ唄つて吳れない
か―南が云つた。
―駄目だよ。まるで、咽を惡くしちやつてるか
ら―
―一寸、短いものを何か……短唄がいゝ―
―短唄なんか知らないよ―綾野は迷惑さうに笑
つた。
―ラアーラ、ラツラツラアー―南は大きな身體
を搖りながら、拍手の受け口をして、出鱈目な
節を出鱈目らしく、なく唄つて見せた、
―南の方が餘程上手だ―青山が[illegible]出した。
―君の方が上手だよ―綾野も云つた。
―本統かい?　嬉しいな。ラアーラッラッラッ
ラア―だネ―南は立上がつて、首を大袈裟
に振つて見せたが、一キイ／＼、何か聞かせ玉へ
よ。何構はずに―からいつて綾野の肩を搖つ
た。山岸は默つてにや／＼笑つて居た。伊作と
青山とは最近の[illegible]出す、[illegible]の[illegible]
を頻りに調べて居た。
―綾野はリガネル唄ひだから、そんなものは唄
へないよ―傍から英介が出まかせを云つた。

「貴様、意地の悪い奴だなあ」南はわざと眼をむき出して喧嘩腰に英介の方へ寄つて来たりした。

「未だ、昼飯を食はないんだよ。腹に力がありやしない」綾野が云つた。

「僕達も十時に食つて、昼ぬきなんだ」南がいつた。

「御馳走はないが、云はうか？」豫算の紙から眼を離さずに伊作が云つた。

「澤山々々。二時に〇〇で××君に會ふ約束があるんだ。もう、そろ〳〵出掛けなくちや」

ノックの音、

「あ――」伊作が答へると背の高い女中が入つて来た。

「仁木さんからお電話で、米田様に雨宮様のお宅の方へおよろしかつたら直ぐお出で下さるやうに……」

英介は英介の顔を見てゐる伊作と眼を見合せて黙つてゐたが、

「もう少ししたら上がります、さう云つて下さい」

女中が出て行つた。

「皆も出掛けないか」英介が云つた。

「僕ももう出なくちやならない」綾野は懐中時計を見ながら云つた。

「そんなら僕はこれから印刷屋だ」

「俺は〇〇堂へ行くんだ」南は洋畫家で、最近洋行する、その前に其〇〇堂で近作の個人展覧會をする事にしてゐたのだ。

「みんな出掛けるんなら、俺も出るぞ」伊作は萬年筆を置くと、勢よく立ち上がつて其長い髪の毛を後ろへ振り下ろしながら、はだかつた着物の前を合せた。

南と青山と綾野とに麹町の通りで別れ、英助と山岸と伊作とは隼町の雨宮の家へ行つた。門を入ると玄關側の櫺子格子のはまつた雨宮の部屋から重見の甲ン高い笑ひ聲が聴こえて来た。

「馬鹿」足音を聞きつけた重見が細かい格子の間から眼鏡をかけた眼を覗かせてゐた。

「ヤイ馬鹿」英介も云つた。

床の間も何もない天井の高い部屋に本箱、机、テーブルが置いてあり、それに紅茶器、菓子器、番茶器、灰皿、雑誌等が一杯に取散らしてあるので坐る所もなかつた。英介は重見と並んで出窓に腰かけた。

「米田さん〳〵。大變だよ。どうかして呉れ玉へな」仁木は二タ側眼の子供らしい顔をして英介を見上げて云つたかと思ふと、急に大きな聲で「軍人づれに見かへられしか。此仁木直三郎の男が立たねえ」頬の肉にいやに力を入れて、芝居がかりに首を振りながら怒鳴つた。

「〇〇さんのお爺さんが、いよ〳〵歸らなければ、警察の力を借りると云つてるんだとさ」重見が云つた。

「おどかしだらう」

「おどかしばかしぢや、なささうだよ」

伊作と雨宮とは机に肘をついて、佐々木といふ二人だけに共通な遊び友達が、四日程前から未だ歸らず、今は歸れなくなつて金のさいかくを電話で頼んで来た、その相談をしてゐた。

「何時かけたい？」

「今朝」

「俺の所は昨晩おそくかけてよこしたよ」

「困つた奴だね」

仁木は甘えるやうに眉間に皺を作つて云つた。

「どうしよう。えゝ米田さん」

「今晩、京都へ行くんだつて？」

「行くんだつて？　そんな呑氣な事を云つてちや困るなあ。もう君追手はせまつて来てるんですぜ」

「……」
「おい君、どうなの？　一緒に行つて呉れるんだらう？」
「今晩か？」
「今晩でなければ、あしたの朝でもいゝよ」
「僕はこれから金を作るんだからね」
「金なんかどうだつていゝよ。君、金なんかの問題ぢやあないよ」
「金はどうかなるだらう。俺の所にも十圓位ならあるよ」重見がいつた。
「小遣の前がりをして、それからダ・ヴィンチの本を榊に買つて貰ふかな」
「そら見たまへ。充分ぢやないか」
「兎も角晩にはつきり返事をするよ」
「晩になつて矢張り止めたなんて、僕はいやだよ」
「大概行くよ」
「何しろ、今晩たゝうと仕たんだからね。其處を考へてくれ玉へよ」
「よし〳〵」
「漸く相談落着に及んだかね」と雨宮がふつ〳〵りした調子で云つて此方へ立つて來た。
「未だ落着するもんかい。氣をつけてくれえ。晩に落着するんでえ」仁木は壇へ性な〳〵、こんな憎まれ口をきくと、幾らかてれ隠しの氣味に、いきなり後ろへどさりと寝ころんだ。丁度其處に未だ口をつけてない茶が置いてあつて、仁木は倒れる拍子にそれを引くり返した。仁木は一寸身體をひねつてそれを見たが、直ぐ其儘長々と寝て、
「かまあもんかい。ほつとけ、ほつとけえだ」
こんな事を大聲にいつた。
「いけないね」山岸は懐から紙を出して、それを拭いた。
顔を横にして仁木はそれを見てゐたが、
「かう云ふ所が全く山岸なんだね」と他の人達の方を向いて云つた。
「何を云つてんだい」山岸は小聲で獨言のやうに云つて、濡れた紙を盆にしぼつてはそれを拭いた。
「どうか、さうやつといて呉れ玉へ」雨宮が云つた。
「こんな居候を重見もよく置いとくな」と英介が云つた。
「なに中々綺麗好きで、俺が散らかすと、一人で片附けてるよ」
「全く重見さんのきたな好きつたらないんだよ。直ぐ散らかしちまふんだもの。重見さんの奥さんになる人は災難だね」
仁木は仰向けに寝た儘こんな事を云つた。
「だから、きたな好きを探してるんだ」
「仁木君はもう三週間位になるのかい？」伸作が訊いた。
「四日に出たんだからね。二週間と半位かね。いやだ〳〵。僕の話はもうよして呉れ玉へ」
仁木はそれ程前から自家を出て、重見の家にゐるのだ。
「今晩たてないとすると、どうして暮らさうかな。芝居へ行くか、活動寫眞へ行くか。それとも吉原へ行つて、好男子々々々つて呼ばれて來ようかな。——オイ雨宮君、誰が行つても好男子つて云つて呉れるかい？」
「知らないねえ、そんな事」雨宮は工合悪さうに云つた。「君位の美男なら大丈夫云ふだらうよ」
「ありがたいな。ポンペアン・クリームとポンペローヰでも塗込んで、うんと綺麗になつて行つてやるかな」
「仁木は吉原のある所を知つてゐるのかい？」重見が危つかしい調子で訊いた。
「知つてるとも。淺草を抜けてどん〳〵北へ行けばいゝんだ。北國ぢやあないか」

「行つた事があるのかい？」
「行かなくたつて、ちやんと聞いて知つてらあ！」仁木はそつぽを向いて云つた。
其晩神田の方に義太夫を聽きに行く事にして、重見だけ先に歸つて行つた。
それから又一時間程して英介は伊作と一緒に其處を出た。
「仁木君は此間京都へ行つて來たばかりぢやないか」と伊作が云ふ。
「まだ四日ばかりにしかならないだらう」
「一體これから如何するんだい？」
「どうすると云ふ、さう明瞭した考へもないだらう」
「だつて、どうしたいつて云ふんだい」
「柳子さんて人と一緒にして異れなければ家へ歸らないと云つてるのさ」
「何んだか、いやに子供染みてるんだね」伊作は續けて云つた。「何しろ、今見たやうな事を續けて居ちやあいけないね」
「いけないに決つてるよ」英介も云つた。「いつもはウヰスキーを無暗に飮むし、葉卷を亂暴に喫ふし、始末にいけない。仕舞に身體から參つて來るよ」
二人は電車路を横切つて、菓子屋と牛乳屋の間のじめ〳〵した横町へ入つた。兩側に古びた安下宿があつて、未だ晝間なのに軒にぼんやり灯がついてゐた。
「お父さんも少し頭が惡かつた事があるんだつて？」
「あゝ。それから仁木だつて二年程前に烈しい神經衰弱で少し變な事があつたと自分で云つてた事があるよ」
「何故、自家でいけないつて云ふんだらう？　向うも華族さんなんだらう？」
「さうだ。だけど、その人のお母さんが藝者だつたといふんで、正しい血統にさういふ血を入れたくないと云ふんださうだ。──オイ！」丁度重見の部屋の窓の下に來たので英介は見上げてさう聲をかけたが、返事がなかつた。
「寢てるかな」
「伊作も寄らないか」
「今日は失敬しよう」
「用があるのか？」
「何んにもないが、まあ失敬しよう」伊作はかう云ひながら重見の家の門とは反對の方へ三四歩ゆるく後ろ歩きをして、英介に捕まらない用心をして居た。仁木の話を散々喋らして置いて、から云ふ所へ來て、如何にも執着なく、後を聞かうともせず別れて行く伊作を英介は面憎く思つた。「いやな奴だ」と思ひ、英介は腕力沙汰で伊作を引張つて來たい誘惑を一寸感じた。が我慢した。
英介は聲をかけて、低い入口をくゞるやうにして、本箱を三つ四つ竝べた錏のやうになつてゐる天井の低い板敷へ上がつたか、返事がなく、只人の起き上がる氣配だけがした。鴨居の隅々まで十程の額を懸連した部屋の、本や雜誌で一杯に散らかつた中に重見は寢起きの不機嫌な顏をして坐つてゐた。座蒲團を四折りにした枕には丸い頭の型が殘つて居た。
「眠れたかい」
「あ──」重見は物憂さうに四折りにした座蒲團を開いて英介の方へ押しやつた。そして、立つて机の前に自分の座蒲團に胡坐をかいた。
「仁木なんか、どうしたい？」
「未だゐるよ。段々あの調子が昂じて來て、やり切れないんで、今伊作と別れて來た」
「又切腹の眞似でも始めたのか？」
「扇子で咽を突く眞似をしてやがる。その前、あした早いと髯を剃る間がないから、雨宮のを借りて剃つてると、軍人づれに女を取られちやあ、男が立たねえ、とか何んとか、咽を突い

―苦しむ眞似をしてるんだ。堪つたもんぢやない」

「あいつをやられると、俺でも時々閉口するから、米田のやうな氣分の傳染り易い奴は堪るまい」

「あゝ云ふ氣分は本統に傳染るよ。何んだか剃刀を持つてゐるから、それでぐつと自分の咽をやりさうな氣がして可恐くなつた。所が伊作は机の向うで、いやに凝然と俺の顏を見つめてゐるから、『オイ、少し可恐くなつて來たよ』と云ふと、『僕も、だから、危いと思つて先刻から用心してゐるんだ』と云ふんだ。伊作は今にも僕が其剃刀を振り廻して誰かに飛びかゝつて來さうな氣がして、直ぐ飛び出せる身がまへをしてたんださうだ」

云ひ切らない内に重見は大きな聲で笑ひ出した。

「それにあの部屋もいけないよ」と英作は續けた。「縁なしで西向きに横の六疊で、奥行きがない所に默つて來てゐるから、今日見たやうに西日が差込んでると、只の人でも變に苛々して來る部屋だよ」

「髯はすつかり剃れたかい」

「うゝん。こら」英作は剃りかけの見苦しい頤を突出して見せ、二人で笑つた。

「いよ〳〵京都へ米田も行くかね」

「あんな事をしてちやあ駄目だからね」

「二人つきりだと、あんな事はないんだよ。四人以上になると、乾度やり出すね」

「旅行中あんな事をしたら、俺は本統に怒るよ」

「米田は干渉出來るからいゝが、俺はどんな眞似をされても干渉出來ないから閉口だ。干渉しだせば直ぐ自分の方が參つちまふ。干渉しないで居るんなら俺は割りに平氣で居られる方だ」

「それは干渉しなければ迚もやりきれない」

「米田なら氣輕に出來る方だから、やる方がいいんだよ」

窓の下から榊の聲で、

「重見さん、居るかい？」と云つた。

「あ、居る」重見は起つて窓から首を出した。

「誰か居るの？」

「米田だ」

間もなく庭の方から靴音がして、榊が入つて來た。榊は學校の歸りで、毛繻子の重さうな包を部屋の隅へ置くと、未だ形の少しも壞れない角帽を傍のギリシャ彫刻の大きな石膏の像の頭に被せ、忙しく額の汗を拭きながら、

「今、仁木のムッターに會つて來た」さういつて、洋服の足を窮屈さうに腰を下ろした。重見が次の間から白い麻の座蒲團を持つて來ると、榊は一寸腰を浮かしてそれを敷き、「話は益々オークワードになるね」と云つた。

「惡いんだね」

「あゝ、いけないね」さう云つて榊は頭を搔つた。

「ムッターは向うの姉さんに會つたんだつて？」

「姉さんは仁木の健康の事で何かけちを附けたらしいんだ。それと學校の出來の惡い事も云つたらしいんだ」

「で、何しろ、お斷りするつて」

「それ程露骨に云はないらしいが、事實はさうだね。ムッターも大分感情を害してられたよ」

「そんな風にいつて、仁木にあきらめさす氣ぢや、ないのかね」

「さうぢやないらしいよ。此間僕が大磯で會つた時にも姉さんの口ぶりはそんな風だつた。何しろあんな若い女の人には珍しいよ、云ふ事がはつきりしてるんだ」

「仁木のムッターとは大分違ふかね」

「僕は仁木が、初めにその姉さんに打明けた時の話を聞いて、寧ろ向うがしつかりした人なら、

うまくない調子だと思つたよ」さう英介が云つた。「甘つたれた、變に技巧的な調子だからね。ダイレクト・ナレーションで其時の話を聞かされて閉口した」

「仁木は同じ事を同じ程度の激しさで誰にでも話せるんだね。僕も山岸に話すのを二度目に聽いた時は少し閉口した」

「柳子さんて人の考へは未だ分らないんだね？」

「そりやあ、矢張り婆さんと同じなんだらう」

「自分が嫌い程度に戀してないかぎり、若い女の人は自家の人の云ひなり次第になるより仕方がないからね」重見が云つた。

間もなく三人は全く異ふ話題で話し合つて居た。重見は新しく來た外國の繪の雜誌を出して來て、初めて名を知つた或る繪かきの事を精しく二人に話した。

暫くして、榊は、

「ぢやあ、僕は失敬する。米田さんは未だ居るかい？」からいつて歸り支度を始めた。

「今晩、重見や仁木と義太夫を聽きに行く」

「さう」榊は靴を穿いて居たが、不意に振り返つて、「今晩、君ン二階を貸して貰へないかな」と云つた。

「いゝよ」

「自家に居ると又仁木のムッターに呼出されさうだし、それに今晩中に本の方の校正を仕舞はなくちやならないからね」

榊は最近評論風の單行本を出す事になつて居た。

「そんなら、あとで、自家に電話をかけて置かう」

榊は歸つて行つた。

「晩の御飯は山岸さんで頂いて、それからすぐ歸りますから」かう云ふ仁木からの電話を、白馬會の研究所へ通つて居る重見の家の爺むさい書生が取次いで來た。

「そんなら飯を二つだけ大急ぎで作つて呉れ。出かけるんだから」と重見が云つた。

英介は次の間の机の上にある仁木の手下げ鞄を持つて來た。

「此中の物を出して、細々した物を入れて行かうかな。鍵は？」

「鍵は此處にあるけど……」重見は背後の机の抽斗を探しながら、「秘密鞄を開けられたら弱るかな」とも云つた。

「どうせ、入つてる物は大概知つてるもの。いいさ」

英介は重見から鍵を受取つて、それを開けた。古手紙、おもちや、鈍栗、賣藥の包紙、寫眞、繪葉書、そんな物が一杯につまつてゐた。英介は其鈍栗を一つ摘んだ。

「何んだ、これは」

「この中の物は皆戀人の記念なんだ」

「これもかい」英介は艷もさめた其鈍栗を一寸見てゐたが、それを又元へかへした。

「これを見たかい？」重見は奉書の紙に丁寧に包んである、カビネの寫眞を出した。

柳子さんの子供の時のか」

大きなひぢ掛け椅子に丸々と肥つた、眼尻の下がつた、五つばかりの女の兒が、洋服を着て、きちんとした白い長い靴下に小さい淺い半靴を穿いた足を無心に前へ投げ出して、かけて居る。その横に、肩から大きなお挾みの帶を見せ、髮だけは洋風のお下げにした顔立のきりゝとした十三四の女の兒が立つて居た。

「これが姉さんか」

「さうだらう」重見も一緒に覗き込むやうにして見た。

「近頃のはないのかね」

「何處かへ自動車でピクニックに行つた時のがあつたよ」

「立派な人かい？」

「素人寫眞だし、大勢で寫したんだから、小さくてよく分らなかつた」餘り美しくないと云ふのを遠慮してさう云つてるやうに英介にはとれた。

「こんな物があるぢやないか。佐四郎人形だな」それは今戸燒の「あねさん」を手綺麗に小さく作つたものだ。

「それは富勇のお土産だとさ」

「……」

「富勇さん」を呼ぶかね」

「どうするかな。今日のやうだと、只いゝ景色の所でも歩く方がよささうだが……」

「仁木は米田と旅行するのは半分はその目的なんだよ」

「困つた奴だな」

「そんな事、どうでもいゝが、仁木は其氣らしいよ。俺に一緒に行かうとは少しも云はないもの」

仁木は富勇といふ京都の舞子の寫眞を見て、それが自分の戀人によく似てゐると云つた。英介と一緒に云つて其舞子を呼んで見たいと云ふのだつた。

英介は、その晩[illegible]中に[illegible]の物を一トまとめに風呂敷に包んで仕舞ひ込んだ。

「お土産も仕舞ふのか？」

「なるべく破損はよすよ。此方も樣子が分らないし」

二人が晩めしを濟まして其部屋へ歸つて來てからも仁木は却々歸らなかつた。そして七時頃、漸く山岸と綾野と三人で歸つて來た。

「行く事にしたよ」英介がいふと、

「本統かい」仁木は大袈裟に喜ぶ風をして飛上がつたりした。

「それから此鞄は、持つて行くので、中の物を皆出したよ」

「あつ！」仁木は如何にも驚いたと云ふ顔をした。

「ちやんと風呂敷に包んで仕舞つてあるから大丈夫だよ」

仁木は默つて胸をなで下ろした。

翌日三時何分とか云ふ急行に乘る事にした。

そして翌日英介が支度をして重見の家に行つた時には、仁木は買物に出て留守だつた。暫く話してゐると、出入りの唐物屋から旅行に要る色々な品物を買込んで歸つて來た。

仁木は知つてる人と會ふと面倒だから、時間きち〳〵に行くから先に行つて呉れと云ふ。で、英介は荷を持つて先へ新橋へ行く事にした。

「會計は君にやつて貰はうか」と英介がいつた。

「どうでもいゝよ」

「共同の金を作つてそれがなくなるまで兎も角やつて貰はう」

「そんなら此財布を持つて行かう」仁木は置いて行く方の包みに仕舞ひ込んだモロッコ皮の財布を又出して來た。

「落とさないかね」と重見が言つた。

「大丈夫さあ」

「それを落とすと米國へ行けなくなるよ」

「さうだ〳〵」仁木は大袈裟に今度は其財布を何のポケットに仕舞つたものかと云ふやうな樣子を殊更して見せた。二人は笑つた。

英介は[illegible]を守きながら、

「オイ、置いてちや、困るよ」と云つた。

「大丈夫だよ」

「直ぐ來るんだよ」

「いやだあ！ 米田さんは」うるさいなと云ふやうに仁木は甘えた大きな聲をしたが、それでも幸福[illegible]上機嫌だつた。

「米田に切符を買つといて貰ふといゝんだ」

「おやおや、[illegible]」仁木は忙しく今、仕舞つた財布を又出して、「幾らだらう？ 幾ら上げとかう？」
「十圓か」
「中等かい」
「へイ十圓」と五圓札を二枚出した。
「串談云つてらあ」仁木は眼を丸くした。
英介は待たせて置いた俥に乘つて直ぐ新橋へ向つた。
停車場は其急行へ乘る客で込んでゐた。英介は京都までの三等切符と急行券を買ふと、表口の石段の上で仁木を待つた。間もなく、母衣をかけた俥が來て、仁木はそれを飛び出すと急いで石段をあがり、小聲で、
「大丈夫かい？ 知つてる奴は居ないか？」と覗ふやうに四邊を見廻したりした。
「早く行かう。もう切つてるよ」
「なるべく先きがいゝよ」
二人が乘込んだ客車には齒醫者の椅子のやうなのがついてゐて、二人はそれに並んでかける事が出來た。
「これは昔の山陽鐵道のだ」
「これを起こすと枕だ」
「ぢかにやつちや、きたないよ」
「上等ぢやあないか、君。三等だつて、どうだい」仁木は得意さうに車内を見廻したが、「でもなんだかよごれて居るね」と云つた。
「オイ」窓の外で聲がして、其處に山岸が立つてゐた。向うから尾島と森下が來た。矢張り同じ雜誌の仲間だつた。三人は銀座の額縁屋へ額を誂へに行く序でに寄つたのだ。
「版畫展覽會は何日からだ？」
「未だ大分あるんだが、一度期だと間に合はないからね」
彼等仲間で泰西名畫の版畫の展覽會を近々することにしてゐた。仁木は其時事務室の壁をかりて、一人で美人寫眞展覽會をするのだと、それを樂みにしてゐた。仁木は此前京都へ行つた時吉井勇の繪葉書を眼に觸れただけと、その他舞子等の寫眞を百枚以上も買つて來た。それを事務室に並べて婦人だけに一錢の入場料で見せるのだと云つてゐた。その事で、
「又買ひ込んで來るかね」と森下が笑ひながら云つた。
「買ふとも」
山岸が、
「ぜげん見たやうな奴だな」と云つた。
皆笑つた。尾島は口に手を當てゝゆるく體を搖りながら、あとまで一人笑つてゐた。
「ぜげん、ぜげんて何んだい？ えゝ、ぜげん、ぜげんて何んだい？」仁木が云ふ。
「何んでもないよ。つまり善六さ。松助がやるといゝ役なんだよ」山岸は濟ましてこんな事を云つて誤魔化して了つた。
間もなく汽車は出た。
二人はこの翌朝京都が未だ餘りに早かつたので、大阪まで乘越し、箕面、寶塚へ行き、翌々日京都へ行き、其夜遲くなつて奈良に行き、次の日又京都に歸り、其處に三日程居て東京へ歸つて來た。その間に仁木は絶えず苛々と落着かず、奈良の博物館に入つても、その靜かさが却つて彼には堪へられぬらしく、英介が見て廻る間、彼は一つのベンチに腰かけて選擇なしに眼の前の佛像をスケッチブックにギシ〳〵と鉛筆の芯の音のする位亂暴に寫生してゐた。
何處ででも仁木は十分と落ちついてゐられなかつた。何もせずにゐる事が彼には苦しかつた。苦しい事で頭も胸も一杯になると云ふ風だつた。始めは病人として英介もそれを我慢してゐたが、段々と彼にも彼自身の我儘不機嫌が出て來ると彼は他人の事ばかり考へては居られないやうな氣持になつた。

「偉い奴が偉い事をする爲めに他人を犧牲にするのは辯護される場合もあるが……」こんな事を英介はチクリ／＼云つたりした。そして「もつと偉くなれ！　もつと偉くなれ！」など云つた。

仁木は一日でも永く、金のある間此地に居たがつた。英介の方はもう閉口してゐた。何んでもいゝから早く歸りたくなつた。

歸る前の晩の事だ。少しも樣子を知らず、それに左う云ふ場所には餘り馴れてゐなかつたから、心元ない氣をしながら二人は祇園の町を歩いてゐた。

「何んでも、なるべく立派な家の方がいゝよ」

こんな事を云ひながら、二人は一流らしい家を探しては入つて見た。然し何家でも皆斷られた。

「初めての客を上げないと極まつてるなら、幾ら歩いても駄目だね」

「富勇にも會へないのかな」

「いよ／＼駄目なら仕方がない、よさう」

二人が、入つては斷られ、入つては斷られてゐるのを見てゐた婆さん──曾我の家一座の番附を賣つてゐた婆さんで、二三度同じ家の入口で落ち合つたが、後から來て、

「あの橋から向うやつたら一現はんでも上げて吳れはりまつせ」と敎へて吳れた。

「富勇を呼びたいのだが、其處でも來るかね？」

「そら、あきまへん」と婆さんは云ふ。

「それぢやあ、困る。何處かないかね、お前さんの知つてる家で富勇の來さうな家は。左う云ふ家を紹介して貰へないかね」

婆さんは一寸考へて居たが、「どう云はれるか分らしまへんけど、まあ訊ねてみまつさ」かう云つて先へ立つて又半町程後へ戻つて行つた。婆さんは或る餘り上等でもなささうな家へ入つて少時話してゐたが、出て來て、

「どうぞ、おはひりやしてお吳れやす」と自分の家ででもあるやうに云つた。英介はそれでいいか、どうか分らなかつたが、五十錢銀貨を二枚婆さんの手に渡した。婆さんは再三禮を云つて引返して行つた。

然し其晩は何度云つても遂に目的の富勇は來なかつた。それは富勇が所謂一流中の一流で、茶屋の方は三流所の家らしかつたからである。それにしろ二人は錦魚のやうな美しい舞子達を澤山見て至極滿足した。

月のいゝ夜だつた。十二時過ぎ二人は鴨川の端を歩いて宿まで歸つて來た。そして二人は直ぐ床に就いたが英介は醉ひから、妙に足や肩がだるく、その癖興奮してゐて寢つかれなかつた。仁木は快ささうに低い鼾をたてゝ眠つて居る。英介はランプの芯を上げ、寢ながら、ストリンドベルヒのマザーラヴと云ふ一幕物を讀んだ。彼はそれを大變面白く思つた。此三四日の間の少し調子の狂つた生活から、それで日頃の調子に戻れた氣がした。

其の朝彼は仁木に此戲曲の筋を話した。それは母に從つた娘の話で、話す彼には知らず／＼に仁木と仁木の自家の人々との關係に觸れる老婆心らしい氣持が働いてゐた。が、さう氣が附くと、自分でも氣がさした。で、彼は、

「然しそれが何方がいゝかと云ふやうな事は僕は知らないよ」こんなに附加へた。

仁木は英介が眠つて居る時に受取つた[illegible]からの手紙を出して見せた。

「一昨晩、君の父君からお手紙を頂いた。それに君宛の封書が一通入つて居た。そして受取つたと云ふ印しに自署した封筒を返すやうにと云ふ事だつた。今朝重見さんに電話をかけたら、京都の宿に送るといゝといふ事で、此手紙を書くが、家から來た手紙は僕と重見さんなら見てもいゝと云つてゐた、と云ふ事で、僕はそれを開

いて讀んだ。一つは君の今度の旅行先にお自家からの手紙を送りたくない氣がしたのだ。然し僕はそれを讀み終ると本統に涙ぐんだ。それには、新しい要求も、宣告もない。此事だけは云つて置く方が君も安心すると思ふ。精しくは歸つてからの事にして、それを送らない。何しろ君は元氣にならなければいけない。……」

其日の夜行で歸る事にした。そしてその前もう一度前夜の茶屋へ行く事にして、雨の中を二人は未だ明るい内に相乗りの俥で宿を出た。二人の足の下には二人の荷物が入れてあつた。宿の手前宿を出る時には七條驛までと云ひ、途中から本統の行先きを云つたが、新米らしい若い車夫は祇園の中は前夜初めて知つた二人よりも精しいとは云へなかつた。洋服を着た二人を乗せた幅廣い俥が未だ中形の浴衣で舞子や藝子達の行交ふ五時頃の祇園町をぐる／＼と馳け廻つた。却々家が知れなかつた。仕舞ひに「祇乙」と軒燈を出した狭い町に入り込み、その或る家の前に立つてゐた薄化粧の若い立派な顔立ちのプロスティチュートに車夫はその茶屋の名を云つて丁寧に訪ねた。

女は知らなかつた。二人は悪い意味なく、雨どひの上から並べて顔を出して居た。女は赤い顔をした。

「東京の連中に此圖を見せたいな」こんな事を云つて二人は隨分笑つた。間抜けさ加減が面白かつた。「然し母衣がなかつたらやりきれないぜ」こんな事も云つた。

その内、自然に其茶屋の前へ出た。お夏と云ふ仲居が直ぐ二人の荷を運んだ。

二人は前夜の座敷に通されたが、前夜は落着いた何か氣分のある座敷のやうに思つたが、曇りの光で見ると紅殻染めの天井でも縁側でもが總て薄ぎたなく感ぜられた。灯りの點くまでが妙に落ちつけなかつた。お夏といふ仲居は眼の優しい受け口の音なしさうな女だつた。

「あの何とか云ふやんちやとおもちやは厭だが、あとは誰でもなるべく昨日の人を云つて下さい」

「あゝ春奴さん」お夏は自分とは一番仲のいゝ其やんちや藝子の名を云つて笑つて居た。

「AとBとCとDと、それからEとFと」

Fが一番先に來た。それから十二三の半年程前から出たと云ふ美しい舞子が來た。蛟龍と云ふ名だつた。續いて、前夜の馴染の連中が、「おほきに。姉はん。おほきに」こんな事を云ひながら集まつて來た。

ベルモットの鶴の首のやうな長い壜が舞子を困らした。お富と云ふ、元氣な舞子はよく注ぎ損じては笑ひこけた。

舞子等は温習會の稽古の厳しい事を語り合つてゐた。

「わてえナ、濟んだら六時どつせ」

「もう、ちよつとも遊ばらへん」

「晝寢も出來へん」

階下で電話のベルの音がすると、間もなく、髪をきりゝとつめて結んだ小さな女の兒が敷居の所へ來て、

「おせんさん、ちよつと、どうぞ」と云ふ。おせんは仲居の顔を見る。すると仲居のお夏は、

「えらい、濟まん事で……」と二人に一寸頭を下げる。そして急に其おせんと云ふ舞子が、

「さいなあ／＼」から勢よく仲間の一人々々にも忙しく顔を向けて歸つて行く。

入れ代つて、別の舞子が入つて來る。

「姉はん、おほきに」

「勝彌はん、ねき、おきいな」仲居は今空いた席を指して云ふ。

高濱虚子の「風流せん法」と云ふ小説に「まげは？」「京風」「帯は？」「だらり」と云ふ所がある。それを覺えてゐる二人は帯留のぽつちり、

髮の、お初、前ふくらげ、割り信夫、鴛鴦、島臺橋、こんな結び方を聴いた。
「蛟龍さんのが一人異ふね」
「これどすな。そんなりどす。東京のお酌はんたら、ほんまにお孃さんのやうどすな」
舞子二人が地方になつて舞子達が交る〴〵舞うた。「石橋」「御所車」「三國一の富士の山」こんなのを舞うた。
地方へも廻らず只それを見てゐた兼子と云ふ、近頃襟替へをした、何處となく弱々しい感じの、如何にも京都の女らしい若い藝子が、
「お富はんナ、舞ふ時、一つち氣を入れてやはるさかい、お師匠はん讃めとゐやしたえ」姉分らしい口調でこんな事を云つた。
仁木が荷物の中から、新しく買込んだ舞子の繪葉書を澤山持出して來た。それが皆の手から手へ渡された。
「此人は居るの？」仁木が美しい未だ小さい舞子の一人を指して云ふと、兼子は、
「あゝ、ちか子はん。ちか子はんはナ、やゝはんがでけて、ひいてやはります」と云つた。
「これは何時頃寫したの？」左う云つて兼子の舞子姿の一つを仁木が訊いた。
「をとゝしの秋どす、みな、舞子はんの時のばかりどすなあ。襟替へしてからのが、ちよつともあらへん」
「あつたかも知れないが……」
「富勇はんのばかり溜めとゐやすのや」年の行つた藝子の一人が云つた。
「あゝ、ほんに」兼子は云つた。「富勇はんが一つち多おすな。――わてえナ」かう云つて、兼子は舞子達の顔を見廻した。「今日十九枚寫眞撮つて來たえ。寫眞はナ、撮す人が此處を見い云うてもナ、撮る時、一寸眼を外らさんと可恐う寫りまつせ」
小さい蛟龍は輕く口を開いて、引込まれるやうに先輩のかう云ふ話に聽入つて居た。
兼子の妹の政代とか富勇が自動車に乘つてるのがあつた。それを見て兼子が、
「まあ、みな、ほんまに樣子してやはる事。自動車に乘つてるうーちふ顔してやはる」こんな事を云つた。兼子は騷々しい感じなしに一人よく喋つた。
「此春の踊りにCぼんが來てやはつた。福千代はん鏡出して、ねえはん、白粉落ちてやしめえんか？」兼子は鏡で顔を直す眞似をしながら、「お囃子でかうどす」など云つた。
「そないな事あらしめえん」
「ほんまどつせ」
色々な遊び事をする內に、仁木が鬼になると、こんな中でも荒んだ氣持を避けられずにゐる彼はよく失策した。當て物の遊びなどでも彼はそれを考へる氣になれないらしかつた。そんな時英介は殆ど、ずるに近い程度に其物のヒントを與へるのだが、それでも却々分らなかつた。しくじつた者は、でぼちん（額）を親指で押される。よく、しくじる仁木の額は隣りに坐つてゐた勝彌が押したが、仕舞ひには押す勝彌の方が當惑し、遠慮しながら、輕く押して居た。仁木は又、油の多い額を押さす事を氣の毒がり、その度、一々ハンケチで其處を拭いてから押さして居た。
舞子等の云ふ「おいどとり」の遊び事で、りの字が早くなくなつたが、
「りいし」と蛟龍が續けた。
「りいして何んどす？」とお夏が訊いた。
「履行のりいし」そして蛟龍は隣りにゐる英介の顔を覗込んで、「あのナ、ツの字とナ、カの字を云うてお見やす」こんな事を賴んだ。
其次英介の所へシの字が廻つて來て、彼は、しそ」と云つた。
「宗十郎！」左う大急ぎで云つて蛟龍は胸をた

でながら嬉しさうな顔で皆を見廻した。

「かなはん」と福千代が云つた。

「今度は力の字か？」

「もう、よろし。力はもう、よろし」

こんな事をして居る間お富は幾度か電話口へ呼び出された。

「此處が面白いものどすさかい」とお夏が云つた。

お富は舞子の中では一番よく飲んだ。眞赤な顔をしながら、

「わてナ、お酒を飲むと直ぐ青筋が出るのどつせ」こんな事を云ひ、怒張した額の青筋を皆に見せて廻つた。

「けつたいやナ」

「けつたいやナ」

お富は又呼ばれて、歸る事にした。

「今、幕の内が來ますさかい。たべとゐやすな」

お夏が云つた。

間もなく、それが來て、そしてお富は一寸それに手をつけると、「さいなあ〳〵」と勢よく歸つて行つた。お富の行つたあと、勝彌も蛟龍も歸つて行つた。それから福千代も、藝子達も。一座が急に淋しくなつた。そして二人も今は騒ぎ疲れ、仁木は脇息に俯いて眠つて了つた。汽車は十二時何分かの二三等急行だつた。

「義太夫はんでも知らしませうか」

「左うね」英介は曖昧に答へた。多見次と云ふ音なしい今まで餘り存在を認められなかつた舞子が一人置物のやうに仁木の側にちんと坐つてゐるだけだつた。

義太夫藝者は唸つた、首の太い不愉快な聲の女だつた。英介は物憂い心持で女の出した一と重ねの五行本をあれかこれかと見た。「勘作住家」とか「鰻谷」とか、「又助住家」とか「逆櫓」とか「八百屋」とか、さう云ふのが多かつた。「日吉丸三段目」と云ふのをやつて貰ふ。然し下手で少しも面白くなかつた。途中で止めて歸つて貰ふ。

「下手だね」

「さうどすか」

「あんなのが溫習會へ出るのかしら」

「そら、もつと上手な人が出ますのやけど……」

こんな事を云つて居ると、不意に階子段の所から其女が顔を出して、

「わてのハンカチ落ちてやへんか」と胴間聲で云つた。

「あゝ、ある〳〵」お夏は皺になつた小さなハンケチを拾ひ、持つて行つて渡した。

そろ〳〵時間が近づいたので、仁木を起こし、俥を云ひ、勘定を取つたが、二人が持つてる金では大分足りなかつた。

「荷物を置いてくから後から送つて貰はうか」

「いゝえ、そないな事おしやはんかて大事ムりません。いつでもおついでで結構どす」

英介は名刺に番地を書いて渡した。仁木は舞子藝子達が暑中配る團扇を欲しがつた。お夏は色々な名のついた左う云ふ大きな團扇を澤山新聞紙に包み、三味線の絃で結はへて呉れた。

間もなく俥が來て、二人は夜更けた雨の町を停車場へ向かつた。

二人は繁吹きのかゝる夜中の寂しいプラットフォームをこと〳〵と行きつ戻りつして居た。何んとなく二人共に沈んだ氣持になつてゐた。疲れてもゐたのだ。仁木も今は幾らか落ちついて見えた。

窓を閉めた客車の中はいきれで臭かつた。二人は腰を下ろすだけの場所を漸く見出せた。移住民の歸國らしい百姓夫婦が子供と赤兒を連れて乘つてゐた。英介は自分の膝に頬杖を突き、うと〳〵してゐると、頭の所で其赤兒がよく泣いた。

新橋に着いたのは翌日の午後三時頃だつた。山岸が迎ひに來てゐた。停車場の二階で暫く休んで話した。山岸は其日柳の家で南の送別會があり、それに呼ばれてゐるから、直ぐ行かないかといつた。仁木だけ荷を持つて先に俥で行き、英介と山岸とは電車で行つた。

二人が柳の家に行つた時は皆集まつた中で仁木が旅行土産を擴げて居る所だつた。

食事が濟んでから皆よく騷いだ。雨宮が歌澤を唄つた、紺野が外國の歌を唄つた。仁木が鼻毛拔きの藝當をした。英介は自ら興行師と稱し、世話燒きをした。體の大きい南が身振りだけをやり、その後ろに小柄な伊作が隱れてメリー・ウイードウの道化役の假聲を巧みに使つた。即席の藝にしては大出來で、皆感心した。

十二時頃皆歸る事にした。仁木は貰つて來た[illegible]を一本づつ皆に配つた。

それからも仁木は、人時々京都へ出掛けて行つた。金がなくなると、神田の知つてる古本屋で一番高く買ひ取る書名を聽いては丸善とか中西屋でその新しい本を買ひ、俥で運んで金に換へた。丸善や中西屋は自家へ拂ひを取りに行くから幾らでも本を渡して呉れた。

然し肝心の結婚の話は益々望み少なくなつて行つた。最初軍人に左う云ふ話があるやうに聽き、仁木はそれを切りと氣にしてゐたが、決つた話は全く想ひがけない、英介の子供からの友達の、或る銀行に出てゐる男だつた。仁木の事があるので向うも急いだらしかつた。總てが濟んで了つた。暫くして仁木も間に入る人があり、自家へ歸つたが彼の心に受けた傷が醫やされる爲めには未だ暫くの時が要つた。仁木は最初から此話を大變簡單なものに考へてゐた。子供からの知人であり、氣心も互によく知れて居、殊に先の人は仁木の母に可愛がられ、その人も親しみを持つてゐるといふ關係では、結婚は二つ返事で承知されるものと彼は思ひ込んでゐたのだ。仁木は柳子の姉達も自分に好意を持つてゐると思ひ込んでゐたし、そしてそれらが總て裏切られた今になると、仁木は結局自分の思ひ違ひだつたと思ふよりも信ぜられないのは人の心だと云ふ、その方を強調して深く思ひ込んで了つた。それまで他人に甘えるやうな性質を多分に現して居た仁木が、急に左う云ふ事をしなくなつた。そして時には如何にも僞惡家らしい調子を見せたりするやうになつた。

——それから八ケ月程經つたが、彼は未だ快癒期の病人だつた。

仁木は歩きながら、自身の此頃の生活を話した。彼は大概晝の十二時頃に眼を覺す。それから顏を洗つてゆつくりと湯に浸かる。湯を出て、寢室へ還ると、其處に掃除が出來て居て、ベッドの上に其日の新聞が置いてある。彼は又寢床へ入つて、それを見る。女中が食事を持つて來る。ベッドの上で食ふ。三面記事から一噂の事まで見て居ると又眠くなる。そして一眠りして今度起きた時にも又湯に入る。晩めしを食ふと、一人で外へ出る。

十二時頃歸つて來て、出來るだけ刺激のない呑氣な本を見るか、繪を描くか、蓄音器をするか、自分で寫した活動寫眞をするか、そんな事で四時頃まで一人で遊ぶ。

「此間、金尾さんに逢つたら、君は隨分上手に病氣をだましてるね、と讃められたよ」

「金尾に會つたの?」

「昨日來た。いやに眞面目な顏をして、僕なんかもう何んにも取柄はないが、まあ去勢してないだけが値打ちなんだ、そんな事を自分で云つてたよ」仁木は大きな聲で笑ひ出した。

「去勢とはどうした事だ」

「例の馬ね、あれを今度歸つて來る時、賣つたんださうだ。所が、これは去勢してあるからと甚く値切り倒されたらしいんだ」
英介も笑つた。
金尾は北海道の農科大學へ行つてゐた。小さな家を建てゝ其處に一人で住んで居た。壁には簡單な色の紙を張つて、それに廣重の五十三次の繪葉書を貼り付け、かうして厭になつたら地の紙ごとはがして又張更へ、別の繪葉書を貼ればいゝと云ふ考へだつた。
去年の夏の事だ。不圖、冬、大きな馬に橇を曳かして馳け廻つたら嘸ぞ愉快だらうと考へた。彼は早速ロシアの士官が使つてゐたと云ふ非常に大きな馬を一頭買ひ込んだ。そして彼はそれは冬の橇だけと限つた事はない、間もなく來る暑中休暇に、それに乘つて東京まで歸つて來ようと考へた。其處で精しく里程日程の計算をして見た所、馬も疲れず、自分も疲れずと云ふ風にして、臨時の滯在などを計算に入れると東京まで殆ど半年かゝる事になつた。それでは仕方がないので、それは止めたが、此冬彼は橇を飛ばしたと云ふ噂をしてゐる者がない所を見ると、恐らく一度も橇は飛ばさなかつたに違ひない。そして最近試驗をよして、歸つて來たが、歸る時其馬を賣らうとすると、去勢で甚く値切り倒されたのであつた。
「此頃はどうしたのか、晝間も全く持ちあつかつてゐる、何時でもいゝから遊びに來て呉れないか」かう英介が云つた。
「何か仕事をしてるんだらうと思ふんで……」
「仕事は夜するんだ。十二時過ぎからだ」
二人が英介の部屋で夜の食事をしてゐる所に綾野から電話がかゝり、暫くして自身やつて來た。それから三人は氣持よく話し、仁木と綾野とは十一時過ぎて歸つて行つた。
英介はそれから七枚ばかりの小品小說を一つ作つた。
仕事に對する執着、それから來る興奮狀態は他からは一寸病的に見えた。近頃の英介は殊にそれが烈しかつた。仕事に對する執着が段々強くなり、それが後戻り出來ないまでになつた所で、自分の力に全く失望すれば、其人が自殺するのは當然の事のやうに思へた。自殺するまでに行き詰める、これは氣持のいゝ事で彼の興奮した心からは少しも差支へないやうに思はれるのだが、然し左う云ふ感情だけが先き走つて實力が追ひつき切れない失望から自殺するのは馬鹿氣た事だとも想ひ改めるのだ。何れにしろ生理的に來る狀態を左う云ふ事の中に計算し込まぬ用心は必要だなどと思ふ。
翌日は日曜日で、彼は眼覺めるとから床の中で一日の日暮らしを苦にした。此前の日曜、一番上の妹が三越に連れて行つて呉れと云つたのを憶ひ出し、今日其處へ妹を連れて行かうかと考へた。然し起きると、自家には赤坊と其上の小さい妹きり居なかつた。皆は其日朝から慶應義塾の運動會を觀に出かけたのである。
午後彼は三年町の綾野を訪ねて見たが、今日も留守だつた。前日綾野が浮草連で明治座に左團次の芝居を見に行く、そんな事を云つてた事を漸く憶ひ出した。
蒸暑い日で、肌が何んとなくべとついて氣持が惡く、彼は三年町の長い坂を陽に照らされながら、荷車でも押してるやうな心持で登つて行つた。頭が重く、身體がだるく、氣分が苛々として、もう其處ら一帶、濁つた泥水で自身はその中に浮び上がつた錦魚のやうな氣持がした。
「高い山にでも行かねばやり切れぬ」左う彼は思つた。日光、箱根、輕井澤——然しその何れに決めるかと云ふ事になると今の自分には迚も不可能事に思はれて來る。其朝新聞で見た、市村羽左衞門が家族連れで九州まで自動車旅行

をすると云ふ記事を憶ひ出し、えらい奴だなと思つた。
　自分は何故、やれば直ぐ出來る事が、から出來ないのだらう。頭が惡いと思つたら、思つた時に高山に行くなり、醫者に診て貰ふなり、仕事をやめて、體育をするとか、藥を呑んで規則的な生活をするとか、何んとでも直ぐ仕たらよささうなものである。それをするに何の障害もないのに、「それがどうしても自分に出來ないのは、これはどうした事だ」と、彼は考へた。自分は何んでもいゝと思つた事を直ぐやればいゝのだ。
　ぶら〳〵と歩いて彼は重見の家へ來た。窓はしまつてゐたが、廻つて行くと、入口に下駄がなかつた。彼は母家の方へ何も云はず出て來ると、重見の小さい從弟が空氣銃を持つて往來の雀を探し〳〵歩いて居るのに會つた。彼は暫くそれと立話をしてから、番町の伊作の家へ向かつた。
　洋館の細い階段を上がつて一つ部屋を通り越して、戸を叩くと、
「あー」如何にも元氣のない聲で答へた。
　伊作は窓の下に籐椅子を据ゑ、それで眠つてゐたと見え、不平さうな不景氣な顏をして、ぼんやりと薄眼で、入つて來た英介を見てゐた。

その樣子が如何にも參つてゐるので、英介は笑ひ出した。
「此錦魚も泥水に浮び上がつてるな」
　英介はバネのゆるんだ低いベッドに寢ころんだ。高い二階で風だけはよく通した。
「高い山はどうだい」
「高い山がどうしたんだ」
「高い山に行つて見る氣はないかネ」
「行きたいね」
「行かうぢやないか」
「何日から」
「あしたから」
「あした？　あしたは一寸用があるんだがな」
「あさつてなんて云つたら、乾度もう行きはしない。そりやあ、あした中に氣が變るに決つてるよ」英介には實際左う思はれた。
「よし、それなら、あした行かう」伊作は勢よく椅子から起ち上がつた。
　何しろ行つたら體育を專一にし、場所は日光の奧の湯本で、戰場ヶ原の運動、湯の湖の船遊び、近所の山登り等、色々する事はあり餘つてゐた。
「未練がましく勉強しようなぞ思つたら間違ひだぞ」

「左うとも」
「仁木や山岸はどうかしら？」
「山岸は行くまいよ、が、仁木の方は行くかも知れない。――どうだい、これから青木堂へ、持つてく食料品を買ひに行つて歸りに仁木の家へ寄つて見ようか」
　二人は話だけでいゝ加減元氣になつた。
　二人は間もなく青木堂へ行つた。罐詰、菓子、チース、……。
「酒類は何か持つてくかネ？」
「よさう。體育だもの」酒好きの伊作が自分から左う云つた。
「そんならライムジュースか」
　伊作はネヴィ・カットと云ふ刻煙草を取つて、
「運動家だから俺の雁首ですぱ〳〵やるんだ」
こんな事を云つた。
「そんなら俺も買つて行かう」
　英介は硝子の見世函から手頃なマドロスパイプを一つ選んだ。
「どうだらう？　ウイスキーを一本持つてかうか」伊作は本音を吹いた。
「體育でもいゝか」
「生水を呑むと毒だよ。つまり、毒消しに使ふ

んだがね……」
　大概買物が決つた所で、
「これだけが此人の家。これだけが僕の家。今日中に屆けられるかい？」
　二人はこれから近い仁木の家に行つた。仁木はその話を聞いて、
「面白さうだなあ」こんな事を云つたが、行く事を勸めると曖昧な返事きりしなかつた。
「何故行けないんだ。別に用なんかありやしないぢやないか」
「實はあした來る人があるんだよ。親類の奴があんまり分らない事を云ふから、あした喧嘩をしてやらうと思つてるんだ」
　仁木の病氣の父に對する仁木の考へと親類の人々の考へとが全で異つてゐた。家庭内の或る一つの問題を今、持ち出す事は彼の父の病氣を悪くする事だといふ仁木の考へに對し、親類の年寄つた人々が反對するのだと云ふ。
「マグダの親爺に輪をかけたやうな連中だからね」こんな事を云つてゐる仁木はもう八ケ月前の仁木ではないやうに見えた。自分を、それから自家を、處理する者は自分だと云ふ自恃を持つた仁木だつた。
　翌日午前十一時上野發といふ事に決めて、伊作だけ歸つて行つた。
　英介と仁木とは食事を濟ましてから寄席へ行く事にして家を出た。そして煙草を買ふ爲めに又青木堂へ行くと其處の大きな時計が九時を指してゐた。
「九時か？」英介はさういつて自分の懷中時計を出して見た。「それでいゝのだ。もう寄席は駄目だね。伊作の所へ行かう」
　二人は伊作の家へ行つた。其處には上村と云ふ法科大學へ行つてゐる伊作と同級だつた男と伊作の大分年の違つた弟とがゐた。
「これを見て呉れ」伊作は得意氣に、バットを二本入れたズックの手下げ袋を出して見せた。
「いやに事が大袈裟になつて來たなあ」から云つて仁木は笑つた。
「これはどうだい」伊作は別に又グラーヴを二つ出して見せた。
「すつかり本式だね」
「上村も出掛けろよ。追試驗にして出掛けちやどうだい」
「行きたいねえ。僕は運動は贊成なんだよ」
「運動事も二人つ切りぢやあ張合ひがないからな」
　五六年前の夏英介は二人ばかりで日光から湯本へ行き、白根山へ登つた事がある。其時伊作も一緒だつた。
「白根に雪があつたね」
「さうだつたかしら？　そんなら今は餘程あるよ。スキーをやらうぢやないか」
「雪が固まつてゐるから駄目だよ」伊作の弟がいつた。それからスキーの話になつて、伊作の弟が自分の部屋からそれを持つて來た。前年の暮れに越後の高田で乘つた時の寫眞などを持つて來て、穿き方や歩き方を説明した。「ずべること――」何とかいふ墺太利人の教官の假聲を使つたりした。
　運動事の話が續いた。諏訪の氷滑り、オリンピック・ゲーム、慶應、早稻田の野球試合等、伊作の弟はその方に熱心家だけに話が非常に精しかつた。
　英介は昔取つた杵柄と云ふ氣も多少あつて、最初はさう云ふ話も面白く聽いてゐたが、久しく彼等の生活に入つて來なかつた世界だけに、立續けにその話を聽かされると、そしてこれから自分がその世界に入るのだと思ふと、何だか甚く心細いやうな不快な氣がして戰場ケ原のベース・ボールも一向勇ましくなくなつた。

「困りものだな。もう泥水に中毒してるんだ。錦魚なら絆つかひになつてあつぷ／＼してる所だ」

「二人だけで、一人にあつぷ／＼されたら堪らないなあ」

晩くなつて二人は此處を出た。伊作も仁木も散歩がてら四谷見附まで英介を送つて來た。

「仁木も來られたら、なるべく來玉へよ。十一時ジャストだからね」英介はこんなに云つて二人に別れた。

彼は歸つてから旅の支度をした。本はなるべく見ない事にしたが、それでも三四册入れた。

翌朝起きると直ぐ彼は旅の事を母に云つた。祖母にも云つた。何か愚圖々々云ひさうな父には立つ間際に云ふ事にして女中には足りない物、例へば繃帶入れのやうな、もう倉へ仕舞つた物を出さして、揃へさした。

彼は又山登りから思ひつき、二三年前、お歳暮で弟にやつた西洋の手斧を出して來て、井戸端でそれを研いだ。枯れかゝつた棱樣の幹を切つて見ては又研いだ。力を無暗に入れたので腕の下の筋肉が痛くなつた。

靴下の足に下駄を突かけ、離れ家の部屋から學校道具を揃へて來た上の妹が、其處に立つて、

「それ、何なさるの？」と訊いた。

「今日から戰場ケ原へ行くんだ」彼はぐい／＼と力を入れ、顏をあげずに答へた。

「日光の？」

「あゝ」

「湯本にいらつしやるの？」

「あゝ」

三四年前、英介は此妹と弟とを連れて行つた事があつたのだ。

幾ら研いでも光るばかりで一向切れなかつた。彼はたうとう降參して、妹に、

「和三郎を呼んで呉れないか」と云つた。

「和三郎。和三郎」妹は高い聲で呼んだ。和三郎が庭の方から箒を持つて出て來た。英介は斧を和三郎に引き渡し、

「それを研いだら、俥を一臺、上野まで、九時半に來いと云つてお呉れ」かう頼んで、彼は今度は鏡臺に向つて髭剃りを始めた。

そして半分程剃れた所へ、伊作から電話が掛つた。

「故障が出來たな」彼は直ぐ左う思つた。

出ると、

「親爺に斷られたよ、昨晩あれから歸つて話したら斷られたよ」

二人は笑つた。英介は可笑しくもあつたし、腹も立つた。いやに好景氣をして乘氣らしくしただけに此結果が馬鹿々々しかつた。其の上、氣の變り易い不決斷な伊作が此結果で却つてほつとして居はしまいかと云ふやうな邪推が淡く浮んで來ると、彼は自分でも自分の顏の不機嫌になるのが分つた。

「仁木はどうするだらう？」

「仁木が行くやうなら僕にかまはず行つて貰ふといゝな」伊作が云ふ。

「仁木は行きはしないよ」然し、若し出かけると惡いといふので電話をかける事にした。

「左うしたら、もう一度僕の方へも掛けて呉れないか」伊作は左う云つて電話を斷つた。

仁木へかけると、

「まだ、おやすみで厶います」と女中が云つた。

英介は一寸考へたが起こして貰ふ事にした。

そして仁木にその話をすると、

「おや／＼」と笑つて居た。勿論自分に行く氣はないらしかつた。

行かないと極まると、英介も矢張り何か安心したやうな氣がした。そして彼は日光行きは止めました」と母に云つた。

何處か他の所へ一人で行く事も考へて見たが、場所も直ぐ浮んで來ず、一人では迚も決行出來さうになかつた。
「兎も角、お返しして置きます」彼は受取つた旅費を母に返した。
彼は其前、四枚ばかり用の端書を出した中の、榊へのに「これから伊作と日光へ行く」と書添へた事などが馬鹿々々しい氣で顧みられた。
其日は五月廿日だと云ふのに無暗に暑かつた。八十度に昇つた。彼は部屋へ入ると、少し書き物をした。前夜三時間程しか眠つてゐない所へ此暑さで、彼は甚く參つて居た。
暫くすると綾野から電話で、
「岡田で子供會があるが、これから行かないか」と云ふ。英介は行きたくもあり、いやでもあつた。
「もう少しして、兎に角君の家まで行かう」
單衣を着て俥で出掛けた。
綾野はストリンドベルヒの「スワン・ホワイト」の飜譯をして居た。
「子供會はやめるよ。左うしてこれから、伊作の家へ行つて見る」
「左う云へば、伊作から電話で、君が來たら自分の所へかけて貰ひたいとさ」
間もなく仁木が來た。仁木は、
「どうしたんだらう。伊作は昨晩、もうお許しが出てるやうな事を云つてゐやしなかつたか？」
と云つた。
「そんな氣がするね」
二人は戸外へ出た。そして英介だけ別れ、彼は番町の伊作の家へ行つた。
これからが伊作の話である。
伊作は前日夕方仁木の所から歸ると、直ぐ彼の母に頭の工合の惡い事から、旅行したいと云ふ事などを話すと、母は直ぐ承知した。彼はそれでいゝ事と思ひ、然し彼の父が晩く歸つて來た時に同じ事を云ふと、一人ならいゝが、病人が二人で行けば兩方が益々重くなるばかりだと云はれたさうだ。
「どうして、君が神經衰弱だといふ事を知つてるんだらう？」かう伊作が云つた。
英介は自分の神經衰弱――自分で左う思つてゐるのに差支へないが、他人にまで左う決められるのはたまらぬと思つた。それは不愉快だ。
「君の兄貴がそんな事を云つたんだらう」
「左うかね」
伊作の父は、お前の神經衰弱も、もう二三年來のものなんだからと云つた。伊作は、なについ一週間ばかり前からですと云つたが聽き入れられなかつた。
それから伊作の仕事の話――どうか、夫れだけは、まあよして下さい。左う頼んださうだが、伊作の父は、お前は俺が何んにも分らないと思ふだらうが、それは俺は今の西洋の哲學は知らん。然し五常五倫の外へ出る教はない筈だ、俺達の仕た學問は古臭いものかも知れんが、此五常五倫の教へだけはよく分つて居るつもりだ……。
「マザーは初め自分がいゝと云つたもので、頭の工合の惡い時には旅をするのが一番いゝと思ひますがなんて、大變頑張もしかつたんだが、親爺のお談議があんまり長いんで、仕舞ひには傍でこつくり〳〵やつてるんだ。雪坊主（伊作の弟）がやつて來て、もう大分晩くなりましたし、女中を起こして置くのも氣の毒ですから、明日になすつたらいゝでせう。こんなに云つて漸く濟んだが、實に參つたね」
伊作は一時過ぎまで左う云ふ話を聞かされたのだと云ふ。
「所で、今朝は今朝で、又兄貴に呼びつけられて、お父さんは約束をしたなら、無理にいかんとは云はんと云はれるんだが、米田と旅行する

事は僕が不賛成だよ。第一米田に興味を持たれて居るやうな事ぢやあ、仕方がないぞ。旅行するなら一人でしたまい。何も米田と一緒に行く必要はないよ。と、こんなに云はれたよ―
「一生意氣云つてやがる」英介は一寸腹を立て、赫い顔をした。
「兄貴は何しろ僕と行くのが不賛成なんだ。そんなら、自分が一緒に行つてもいゝと云ふから、もういゝんだ、もう別に旅行しなくてもいゝんだと、云ふと、そんなら米田のお供かい、あんまり自分がなさ過ぎるぢやないか。と、からだ。閉口しちやつた―」
「君の兄貴は馬鹿野郎だよ」英介は十歳位からの最も親しかつた友――それと近頃は少しづつ離れつゝあるのを、こんな風に云つた。
「叔父は北海道へ行けと云ふし、兄貴は何處でもいゝから旅行は仕事へと云ふんだ。日光なんてそんな[illegible]しい所は駄目だと云ふんだ―」
伊作は持つて行くつもりで買つて來た、チーズを切り、ウーエーズ・ビスケットを一緒に出した。
二人は滑稽な氣持になり、よく笑つたが、それでも英介にはどうにも隠し切れない不愉快もあつた。
「君の兄貴が僕に持つ悪意はそれは無理ないよ。それに價する事を此方で随分やるからね。然し僕が左うなる原は矢張り向うにあるんだから……」こんな事が彼の口から出た。
伊作は元來、ぐうたらな素質を多分に持つて居たが、その割りに彼は彼の仕事に一生懸命だつた。彼は未だ仕事らしい仕事を仕てゐなかつた。然しそれをやらうと云ふ氣だけは見かけ以上に強かつた。彼は最近、嘗て日本人が書かなかつたやうな形式で、一つの長篇を書かうと思つてゐた。それが出來ればどんなに小さく見積つても彼にはライフ・ウォークの第一段になるものだつた。のみならず、それによつて生活のあらゆる束縛から解脱する、そんな風に彼は思つてゐた。そして彼はその考へから一時、自家を捨てる覺悟までしてゐた。
かう云ふ話を彼は興奮しながら或る夜英介に話した。英介も一緒に興奮し、喜んだ。
然し伊作の家出は色々な事情から二ケ月ばかり延びて了つた。彼はその間にも時々家出の事は云つてゐたがその決心は段々と鈍つて來た。左うして遂にそれは止める事にした。これは如何にも伊作らしかつた。英介はそれにも同情出來た。
伊作は一度一つになつた家出とライフ・ウォークとを離さうとした。家出はよして、仕事だけしようとした。然し家出をよすと仕事の方も一緒に延びた。そして、これではならぬと、思ふ事がよくあるらしかつた。
英介が山へ行かうと云つた時、
「今日は幾日だ？――二十日か。十日あるな―」こんな事を云つてゐた。材料の準備などが出來た所でいよ／＼來月からそれを始める氣らしかつた。
二人はそれから興奮しながら仕事の事を話し合つた。そして元氣になつた。
「鈎つかひになつた鯖魚も大分勢ひが出て來たな―」
「刻んだ[illegible]を入れたやうなものだ―」
こんな事を云つて大きな聲で二人は笑つた。
翌日から續いて雨の日が來た。八十度から急に袷羽織の日が來た。英介は二日目には部屋に炭火を入れた。泥水は清水にかへられた。英介は此間から考へてゐた少し六かしい短篇に取りかゝつた。

（明治四十五年四月）

クローディアスの日記

――日

彼は珍らしいゝ頭をした男である。理解力も豊だし、それに詩人だ。自分は近い内に何も彼も語り合つて彼によき味方になつて貰はねばならぬ。自分は總てを彼に打明けて隔はない。然し今は其時でない。彼は今心の平均を失つてゐる。尤もそれは自分も同じ事だ。兄の死後その妻を直ぐ妻として自らその王位に直つた、單にその生活の變化から云つても何んとなく自分は常と同じ調子では過ごせない。まして久しい戀――それには殆ど望みを斷つてゐた戀を得た喜びには自分は心の平均を失はずにはゐられない。

自分は今、自分の此心持を出來るだけ他に隱してゐる。それは自分が、自分の仕た事或は自分の此心持を恥づるからではない。只自分には自分の此心持を不愉快に思ふ人のある事が解つてゐるばかりである。解つてゐるばかりでなく、それに對しては自分は同情する事も出來るからである。

而して左ういふ人々の第一人は彼である。彼が近頃何んとなく弱つて憂鬱になつたのは見てゐても氣の毒である。のみならず彼は自分に對して或る不快を感じてゐる樣子だ。それにも自分は同情が出來る。自分の此柔かい心持は彼との關係では唯一の望みである。自分は自分の此柔かい心持を出來るだけ大切にしなければならぬ。

――日

自分は自分の仕た事を少しも恥ぢはしない。然し慣習からは愉快な事ではなかつたに相違ない。自分は少くとも此數箇月は喜びと苦みとの間に彷徨してゐなければならないだらう。

自分程外界の事情に氣分を支配される人は少ない。それを制御しようとするとイツモ失敗する。寧ろなるがまゝに任してその間で出來るだけよくマネーヂして行くより他ないのである。

何しろ今は彼と語り合ふべき時ではない。その氣分でない。今若し話し損へば、二人は永遠に取りかへしのつかぬ關係になりかねない。

先刻會つた時、妙な顔をしてゐたから「氣持が惡いのか？」と訊いて見た。それに對する彼の答へが自分には不愉快だつた。寧ろ子供らしい男である。實際子供らしい低級な惡意の示し方であつた。あの子供らしさに自分は釣込まれないだけの餘裕を常に持つてゐなければならぬ。

兎も角もウイッテンバーグの大學へ行く事を思ひ止まつて呉れたのは仕合せであつた。今のまゝで別れて了つたら二人の間の溝は遂に越えられない幅に擴がつて了ふだらう。

自分には彼の母が彼を愛するやうには到底愛する事は出來ない。それの自分に望めないのは當り前の事である。よしんば出來ても、彼もそれを其儘に受け入れられる人間ではもうない――そんな事はどうでもよい、二人の間では愛よりも今は理解である。而して理解し合へば其處にまた愛も湧くわけである。

——日

……二三度呼びにやつたが遂に來なかつた。勿論今晩の酒宴は彼の爲めばかりではなかつたにしろ、隣に設けて置いた席が終りまで空いてゐるのを見ると、自分にはそれから色々な事が想はれて幾ら飲んでも氣が沈んで氣が沈んで堪へられなかつた。それを又ハズマセようとするポローニャス老人の努力が陽氣を滅入らして了つた。自分はよくあの時間まであの席に堪へられたものだ。

「酒宴の習慣は守るよりは破る方がいゝのだ。外國人が此國の奴を豚といふのは此習慣に溺れるからだ」こんな事を云つて友達と何處かへ出て行つたさうだ。初めて開いた今晩の酒宴を、こんな云ひ草で斷る、その禮儀のなさは眞正面からは腹も立てられない。が、腹が立てられないだけそれだけ不愉快な感じは一層であつた。それも、氣分の云はせる言葉として自分は許さねばならぬ。若しかしたら父の葬式が餘に質素だつたのが彼の感情を害してゐるかも知れぬ。

いづれにもせよ、近い内に何も彼も話し合はう。彼が生れぬ前から彼の母を戀してゐた事まで打明けて差支へない。彼にとつては不快な事に相違ない。然し或る誤解をとく爲めには其處まで話さねばならぬ。それも機會でいふべき事だ。機會で話さねばこんな事は半分も解らない。いゝ機會を待たう。

妻は何か彼に云ひ聞かす氣でゐるらしい。然し今何を云つても云ひ込められるばかりだ。彼も妻が思つてゐるよりは遙かに大人である。

——日

昨夜は一と晩中何かしらんいやな心持で過ごした。どうしても寢つかれなかつた。眠くて眠る事が出來なかつた。今でもいやな心持が腹の底にオドンでゐるやうな氣がする。又頭を惡くしたのかも知れぬ。左うとも思はなかつたが近頃は何かしら絶えず考へ事をしてゐたからかも知れぬ。そんな事が自分の神經を弱らしたのだらう。然し昨晩は天候から云つても不氣味な夜であつた。烈しい風が頻りに窓を打つ。自分は飲過ぎからヅキ／＼する頭を冷さうと、窓の扉を開けるとその瞬間に扉の合はせ目から、ボンヤリと白く光つた小さな玉がフゥーッと闇の中に飛び去つたやうな氣がした。明るい部屋から急に闇を見たからだと思つた。

戸外の氣温は非常に寒い。三十秒も左うしてはゐられなかつた。それに烈しい風が灯を消しさうにしたから、自分は扉を閉めた。其時不圖又、自分は今の光り物を見た——見たといふより感じたのだ。飛び去つた奴が又フゥーッと飛んで來て、合はせ目へ來て、其處へくつついて、此方を覗いてゐる——こんな感じがしたのだ。

何んだか凄い氣がした。

自分は近頃何かに呪はれてゐるといふやうな氣がして來た。

これは確かに自分の生理狀態から來てゐるのだ。兎も角自分には仕事がある。こんな事にコダハつてはゐられない。今は出掛けられないが、もう少ししたら猪狩りにでも行きたいと思つてる。

——日

今朝ポローニャス老人が何かあわたゞしい用事でもあるやうに、娘のオフィリアを彼が戀してゐるやうだと話して行つた。老人は又クドクド自身が十二分の警戒をしてゐるから、それに就いては心配しないでくれと云つてゐた。

彼があの娘を戀してゐる事は自分も感じてゐる

た。あの女らしい、賢い娘には自分も同情を持つてゐる。而して老人のやうに一途にその關係を豫想するのに自分にはいゝ事と思へない。今日はそれに何もいはなかつたが、正直にいへば彼は其戀を心から深く味はつて呉れる事を自分は望むのである。左うすれば彼の母に對する自分の戀にも其處から多少の理解が湧いて來ねばならぬ筈である。

老人は彼の戀を頻りに浮いたもののやうに解つてゐる。それは可哀想だ。あの老人は自身酸いも甘いもスッカリ嚙み分けたといふ自信へ大した根據もないことに捕はれてゐた男だ。だから、何も彼も早わかりの早片づけをして一人で吞込んでゐる。然し決して物の解つた人間ではない。しかも彼は此老人が考へてるやうな淺薄な青年ではないのだ。

——冬は大概氣分がいゝのだが、今年は少し變だ。生活の變化がたしかに心身の調子を狂はしてゐるのだ。それにしても早く彼と理解し合はねばならないと思ふ。

善良な妻の自分に對する態度は總て生前の兄へ對してのそれである。此平和な女らしい性質を不滿足に思ふのは自分が惡い。自分は妻のあの平和な性質を其儘に此家の中の調子にしたいと思ふ——近頃は切りにそんな事が思はれる。

今、又ポローニヤスがこんな話を持つて來た。——昨日だつたといふ。あの娘が部屋で縫物をしてゐると、帽子も被らず外套の釦は開けたまゝ、蒼ざめた顏つきで、入つてくると彼はイキナリ娘の手頸を握つたまゝ長い事その顏を見詰めてゐたが、其手を輕く振つて頭を二三度上げ下げすると、深い〳〵溜息をついて其儘物も云はずに娘の方を振りかへつたまゝ出て行つたといふ。老人は自身見てでもゐたやうに芝居がかりの身振りで、それを話して、で、確かにそれは彼が戀故に氣が狂つた證據だといふ。然し若しかしたら何事かあつたのかも知れない。尤も、どうも自分には左う思へない。……然し若しかしたら何事かあつたのかも知れない。尤も一面では老人以上に芝居氣の強い男だから、その何事かもそれ程大した事でないかも知れない。

——二日

彼が娘にやつた手紙を見せて老人は切りに彼の病氣はどうしても戀からだといふ。何老人は自慢らしく娘が老人の意志通りに綺麗に彼を撥ね付けた事を口巧者にシャベリ立てゝゐたが、自分にはそれを其儘には承け入れ兼ねる事がある。第一に彼の自分を見る眼が二三日非常に不愉快になつた。何となく底意のあるイヤな眼だ。自分はあの呪ふやうな眼でヂツと見られる時に心の自由を失ふやうな氣がする。自分は不圖先夜庭の暗闇から内をうかゞつてゐたあの小さな光り物を憶ひ出した。

戀故に悶えてゐる者の眼では確にない。自分の觀察する所によると、彼は時々あの眼を彼の母にも向けてゐる。——邪推かも知れないが、彼の母には彼の父の死後餘りに早く結婚したのを後悔してる風さへ見える。これが若し邪推でないとすれば、確にあの眼で毒注された考へである。妻は彼の狂氣が其處に原因してゐると信じてゐるらしい。この事は今の自分には堪へ難い苦痛である。

然し自分はそれで彼女を責めようとは思はない。自分は彼女の善良な弱い性質をよく知つてゐる。自分は只これを起つた情ない出來事として諦めるより仕方がない。而して、自分だけで、悔ゆべき事ではないといふ最初からの考へを益々堅く握りしめてゐればそれでいゝのだ。

——老人は自分が老人の云ふ事を其儘に

承け入れないもので、彼と娘とを人のゐない廣間の廊下で偶然のやうにして會はせて見ようと云ひ出した。立聞きは快い事ではないが、兎も角承知して置いた。

——日

自分は今度の結婚を決して恥ぢてはゐない。少しでも恥ぢる心を持つてゐたら、自分の性質としてそれは到底出來る事ではない。如何に彼女を愛してゐたとはいへ、道徳的に何等の自信もなく、若し結婚したのなら、自分は寧ろ無法者である。而して愚者である。然し自分には自分だけ、それに對する立派な心用意があつた。その心用意があつたから自分は寧ろ大膽に結婚を申込み、その承諾を得て、それを直ぐ、天下に發表する事が出來たのである。而して發表する場合でも自分は反つて驕々しい感じを與へる嫌疑は、全くつけなかつたのである。其處に動かし難い自信を自身ですら見たやうな氣がした。然しそれには何處か弱い所があつたかも知れない。自分は自分の力を正確に計る事を誤つてゐた。今になつて見れば自分は遂に其の弱點を彼から突き込まれたのであつた。が、自分はあれ程に低級な、而して平凡な、理解も同情もない突き込み方でくる事は全く豫想しなかつた。彼の自分の行爲に對する見方は實際に起つた或る姦通事件を見るのと殆ど變つてゐない。彼は其見方に對して自ら何の疑も起さずにゐる。彼が自分等に對してこんなに低級に解しようとは、それは自分の心用意の中にも用意されてゐない事だつた。

自分はこれに對しては何處までも戰はねばならぬ。

が、左う思ひながら、今日自分は自身の内に猶恐ろしい弱點のある事を不圖感じた。それを今更に知つた。——それは自分の心の何處かに未だヒソンでゐる安佚な、慣習的な所謂良心といふ奴だ。それの裏切りである。

ボローニヤスが娘に、信心らしい顔附と殊勝らしい行ひで惡魔の根性に口當りのいゝ外被をかける、それが其處にも此處にもある例だとこんな事をいつてゐた。其傍で聽いてゐて、自分は不圖自分の事を云つてるなといふ感じがした。自分は何かしらん心に鋭い咎を感じた。而してハッと氣がつくと自分で驚いて了つた。自分は自分の心を叱つて、更に自分に何の恥づる所があるとハッキリと思つて見た。が、左う思ひながら、そんなに思つてゐなければ、ヤリキレナイから左う思ふのか、實際心の底から恥ぢてないのか解らない——こんな考へが又ふつと湧く。もう其時は自分で自分が氣味惡くなつた。

一寸した感情から、それへ自身全體を惹き込まれて、心の平均を失つて了ふのが自分の大きい弱點である。自分は其朝の夢からさへ終日の氣分の平均を失ふ事が少なくない。

自分は他人が自分をどう思はうと、それだけなら少しも恐れはしない。自分を憎んでゐる者の少なくない事を自分はよく知つてゐる。それが譜々であるかも知りながら、それが客觀的にそれだけの事實である間は自分は何とも思ひはしない。左ういふ事にはそれ程自分は臆病でない。然し、その或るものが自分の心を釣込んで行く事がある。するとその釣込まれた自身の心が自分にとつては最も恐しい者になるのである。

……………ポローニヤスと隱れてゐると、何か考へ〳〵うつ向いて歩いて來た。靜かな氣高い顔つきをしてゐた。物蔭に隱れてゐる自分が下らぬ者のやうな氣さへ一寸した。

其時彼は娘にこんな事を云つてゐた。
自分は元來は正直だが、高慢で、執念深くて、それに野心が激しくて、若し自分で許せさへすれば、カナリの悪事も仕かねない。が、只それを調整へる思案とそれに像を附ける想像力とがなく、又時も場合もないから仕ないのだ。
又娘に切りに尼寺へ行け、尼寺へ行けと云つてゐた。
彼のいふことを單に彼の性格として考へれば、それに自分は興味も持てるし、同情も出來る。然し彼は何か考へてるらしい。何か考へてる内にあんな事を思ふやうになつたのだ。何しろ自分に關する事に相違ない。若し此考へが解つたら彼は何をするか解らない。自分はどうしていゝかしら？　若し話し合ふならば今の内だ。
然し、彼の左う云ふ考へも彼の健康から來る事であつたら、英國へやるといふのも一つの考へである。
――――妻はポローニヤスの娘に
一あの子の心の狂つたのがお前のきりやう故であれと念じて居ます。それなら又お前の氣立であれを正氣にさす事も出來ませうから。…一
こんな謎を掛けるやうな事を云つてゐた。自分は妻程に女らしい優しい美しい心を持つた女を知らない。自分は妻の爲めにも彼を憎む事はしたくない。自分は彼の勝れた才能と得がたい人格とをまだ〳〵愛してゐる。どうにもして早く理解し合はねばならぬ。
何か芝居をすると云ふ。彼の心が本統にそんな遊び事に向かつたのなら喜ばしい事である。

――日

……乃公が何時貴樣の父を毒殺した？　誰れがそれを見た？　見た者は誰れだ？　一人でもさういふ人間があるか？　一體貴樣の頭は何からそんな考へを得た？　貴樣はそれを聞いたのか？　知つたのか？　想像したのか！　貴樣程に安値なドラマティストは世界中にない。あゝ、皆が寄つてたかつて乃公を氣違ひにしようと云ふのだ。乃公はこれまでにこんな氣持の悪い經驗をした事がない。
全體貴樣は乃公をおびやかして兄殺しの大罪人とすればそれが何の滿足になるのだ？　貴樣の考へは正しくヴルカンの鐵砧ほどにもむさ苦ろしい想像に過ぎないのだ！　そんな事を貴樣は疑つて見た事がないか？　その想像は貴樣の安價な文學といふ惡魔から貰つたに過ぎない。それを貴樣は疑つて見た事がないのか？
貴樣程に芝居氣の強い奴はない。貴樣はそんなに貴い悲劇の主人公になつて見たいのか？
それも自分獨りで演じてゐるならいゝ。貴樣は乃公に覺えもない敵役を演じさせようとそれを強ひて來る。左うだ、貴樣のはそれを強ひて來たのだ。それは許せない。
貴樣程に氣障な、講釋好きな、身勝手な、芝居氣の強い、而しておしやべりな奴はない。
老人に、昔大學で芝居をした時、何の役を演たと貴樣が訊いた。老人はシーザーになつて殺されましたと答へた。其時貴樣は何故乃公の額を盜み見た？　貴樣は其時どれだけ正當に乃公の額から乃公の心を讀み取る事が出來たと信じてゐる？　貴樣は乃公の心が其時平靜を失ひかけたまでは解つたらう。が、何故平靜を失ひかけたかまでは考へて見ない男である。それが貴樣の作つた筋書に合へばそれより深く物を見ようとしない――乃公にはあの時、何故貴樣が乃公の額を盜み見るかが直ぐ感じられたのだ。盜み見る目的が直覺的に感じられた時に、乃公の心にもヒソンでゐる安値な文學といふものが同時に乃公の心で裏切りをやつたのだ。無心で

ゐようと努力すればする程却つて乃公の心は自由を失ひさうになる。而して遂に貴樣の空想にかなふやうな表情が乃公の額に現はれて了つたのだ。貴樣が何かありがたい證據でも摑んだやうに思つたのは只これだけの事實だ。然しあれ位の事は未だいゝ。が、あの芝居はなんだ——「ゴンザゴ殺し」！ 言葉の陳腐をさへ嫌ふと自ら云ふ人間で、あの露骨な仕組は何んだ？ しかも、それで、臆面もなく他にのしかゝつて來る。貴樣はよく懷疑的な口吻をしたがる癖に物を單純に信じ、それで平氣でのしかゝつて來たがる奴である。あの厚顏には感じ易い乃公の心は卷込まれずにはゐられない。實際乃公の心は見事に卷込まれた。然しこれが事實の證據として何になる？

默伎の一くさりで既に乃公は自分の中の惡魔と、どれだけ戰つたらう？ 乃公はもうあの時あの場にゐたゝまらなくなつたのだ。が、場をはづす事の危險を考へると起つ事も出來なくなつたのだ。「無心に、〳〵」乃公はこれをどの位心に繰返したか知れない。然しイヤに落着いたホレシヨーの眼が絶えず乃公の額を見つめてゐる。仕舞には乃公自身の神經までが乃公の額の筋肉の微細な運動までを一つ一つ凝視しだした。

其内に芝居の王の云ふ事が、貴樣の父が實際に云つてでもゐるやうな心持がして來た。乃公は乃公自身が恐しい惡人だつたと、そんな氣がして來た、——エ、それが何んだ！ そんな事が何だ！ そんな事が事實の何の證據になる？

あゝ恐ろしい底意だ！ 憎むべき底意だ！ 貴樣のそれが、乃公の感情の行く所、何處へでも待伏せをしてゐる！ 乃公の感じ易い心はそれを見つめながら進んで了ふのだ。而してそれへ陷つて了ふのだ。

乃公に對する貴樣の底意、これは乃公は前から氣づいてゐた。が、これまではどうかしてそれに好意を持たうと考へてゐた。自身にも起つて來る貴樣に對する惡意は、それは出來るだけの努力で殺して來たのだ。乃公は貴樣の善良な母に對してもさうして來たのだ。が、もう、そんな半ンぱな心持ではゐられない。乃公はもう、其危險さに堪へられない。強い力で浮ばう浮ばうとする物を或る力で水の中途に沈めてゐる。そんな愚かしい、苦しい努力はもうしてゐられない。

乃公はもう腹の底から貴樣を憎む！ ——腹の底から憎む事が出來る！

——日

毒殺、これ程のことがどうして隱しきれるものか。人眼の多い中で、どうして隱しきれるものか。而して若し誰れか知つてるものがあれば假令どれ程の權力で壓へつけようが、口から耳へ、又口から耳へと順々に傳はらずにゐるものか。

貴樣は一人でも僞りなくそんな陰口をきゝ得る者を實際に知つてゐるか？ 誰れがある？ 貴樣は一つでも客觀的に認め得る證據を手に入れる事が出來たか？

第一に乃公が若しそれ程巧みに惡事を包み得る惡漢ならば初めから見えすいた貴樣のあの狂言などに易々と乘せられるやうな事は仕はしない。のみならず、兄の死後直ぐその妻と結婚するやうな事もしなかつたらう。乃公にはそれが出來るだけに正しい自信があつたのだ。

貴樣は上手な洒落を云ふ手間でもつと〳〵考へて吳れねば困る。而して事をもつと眞正面から行つて吳れねば困る。露骨な裏廻り程醜い物はない。眞正面から來さへすれば解る事も廻りくどく仕組むと其間に眞實らしく誤つて

來るものである。
貴樣は何んと云つても乃公の最も愛する妻の最も愛する兒である。
乃公は貴樣の事の爲めに今は妻にさへ思ふ事が充分に云へなくなつた。
今日は乃公の心は餘程柔いだ。其内に何も彼も話し合つて解る機會があるだらう。その機會の來るまでは何事も起らぬよう心に祈つてゐる。
……今、ポローニヤスが殺された！　劍で突き殺したと云ふ。氣違だ！　氣の違つた惡魔だ!!

――日

彼はたうとう彼の母までを後悔させて了つた。此世に悲劇を演じに來たやうな奴である。彼の教育はその筋を作らう爲めだ。彼の哲學はそれを意味あり氣に見せる爲めだ。あの廻りくどい云ひ廻しと淺薄な皮肉とは科白の抑揚變化の爲めだ。それに過ぎない。而して自身その主人公といふいゝ役を引きうけて置いて、いやな敵役を自分に振らうと云ふのだ。どんな役者がやつても悲劇の主人公は直ぐ女を泣かす事の出來るものだ。無邪氣で而して單純な彼の母は其處をつけ込まれたのだ。
――母を責めてゐる時、彼は父の幻を見るやうな樣子をしたと云ふ事だ。其時「亂心の折りには有りもせぬ物の形を心で上手に作るものだ」と云つたら、大變怒つたさうだ。空々しくそれ程の芝居をするとも考へられない點で、若しかしたら本統の氣違ひになつたかも知れぬ。父が殺されたと云ふ不思議な考へも若しかしたら、左う云つた幻から得たものかも知れぬ。
何しろ、彼はもう正氣な人間ではない。正氣な人間にしては餘りに明らかな自家撞着を平氣でやつてゐる。彼は彼自身の父の死にあれ程に不法な空想をして置きながら、人違ひから刺殺したポローニヤスの子供等に對しては何んとも考へてゐない。簡單に「自業自得」だと云つてゐたといふ。「不便な事をしたが、これも天の配劑だ。天は之を以つて自分を懲らし、自分を假りの道具として此奴等を罰したのだらう」とこんな事を云つてゐたさうだ。全體ポローニヤスが何時死に價する程の罪惡を犯した？　而して父を殺されたレアーチーズや、あの娘はどうすればいゝのだ？
妻は「氣違ひながら、殺した事を甚く後悔してゐます」と云つてゐるが、自分はもうそれは信じない。
彼は老人の死體を何處かへ隱して了つた。
何にせよ自分はもう彼を自分の傍へ置く事は出來ない。

――日

口巧者で、而して賢さうな眼差しをしてゐる彼は或る一部分の人間からは尊敬されてゐるから此國では罰する事は出來ない。が、もう彼の病氣も危篤になつてゐる。到底この儘にはして置けない。もう理解といふやうな悠長な事を待つてはゐられない。自分は危險な荒療治をしなければならない。
今は矢張り英吉利へやらうと考へてゐる。敵役が殺されずに主人公の死ぬ方がより悲劇になる……

――日

優しい娘は氣が違つた。一人の心に不圖湧

いた或る考へがこれ程に多くの人間を不幸にしようとは考へなかつた。もう自分は心から彼を呪ふ。

――日

禍厄は一つ來ると續いて來るものだ。老人の死體を竊かに埋めたのが愚民共に妙な邪推を抱かせた。フランスから歸つて來たといふレアーチーズまでが其噂に乘つて自分を疑つてゐる樣子だ。

――日

――自分が兄の死を心から悲しめなかつたといふのはそれは寧ろ自然な事ではないか。自然だといふのが立派なジャスティフィケーシヨンである。自分だけなら立派なジャスティフィケーションになつてゐるのだ。然るにそれを嫂に遠慮してかゝつた。それだけなら未だよかつた。悲しい事にはその「彼」は自分の內にも住んでゐたのだ

實際あの時の事を思ふと今でも愉快な心持はしない。子供の內から一緒に育つた兄の死としては自分も本統に悲しかつた。が、それ以上自分には或る喜びがあつた。心は自由である。想ふといふ事には束縛は出來ない。それは愉快な事では確かになかつた。然しそれをどうする事も出來ないではないか。自分は自分の心の自由を獨り樂む事がよくある。又同時にそれが爲めに苦しめられる事もあるのだ。其意味では自分にとつて自分の心程に不自由なものはないのである。實際今の自分には、自分を殺さうと考へてゐる彼よりも、どうにもならない自身の自由な心の方が恐しい。自分に於ては「想ふ」といふ事と「爲す」といふ事とには、際と境はない。（思つた事を直ぐ爲すといふ意味ではない）

それでも自分は明らかに云へる。自分は嘗つて一度でも兄を殺さうと思つた事はない。さういふ非道な考へを一度だつて兄に對して構成した覺えはないのだ。然し自然に不圖浮ぶ考へはそれはどうすることも出來ないではないか。

兄は三年程前から自分と彼女との間を疑ひ出した。然し彼女は自分が戀してる事すら氣がつかない位で、兄が疑ひ始めた事などに夢にも知らなかつた。

兄の心と自分の心とは、時々心同士で暗鬪をする事があつた。而して兄はあの頃から決して自分を留守へ殘さないやうにした。戰にも、狩りにも、乾度自分を誘ふやうになつた。そんな戰も狩りも自分には愉快な筈はない。第一に始終窺ふやうな兄の心が自分には腹立たしかつた。今になればそれもよかつたと思ふ。何故なら、こんな事が却つて彼の未亡人に結婚を申込む勇氣を自分に與へてくれたからである。

――秋の月のある寒い晩だつた。納屋につながれてゐる獵犬がよく鳴いた。狩場の馴れない堅い寢床では自分は中々寢つかれなかつた。暗いランプが兄と自分との並べた枕元に弱い陰氣な光を投げてゐた。其內疲勞から自分は不知吸ひ込まれるやうに何か考へながら眠りに落ちて行つた。自分はそれを夢と現の間で感じながら眠りに落ちて行つた。而して未だ全く落ちきらない內に不圖妙な聲で自分は氣がハッとした。眼を開くと何時かランプは消えて闇の中で兄がウメイてゐる。然し其時直ぐ魘されてゐるのだなと心附いた。いやに懷い、首でも絞められるやうな聲だ。自分も氣味が惡くなつた。自分は起こしてやらうと起きかへつて夜着から半分體を出さうとした。その時どうしたのか不意に不思議な想像がフッと浮んだ。自分は驚いた。それは兄の夢の中でその喉を絞めてる

るものは自分に相違ない、かういふ想像であつた。すると暗い中にマザ〳〵と自分の恐ろしい姿が浮んで來た。自分には同時にその心持までが明らかに想ひ浮んで來た。――殘忍な樣子だ。殘忍な事をした…もう仕て了つたと思ふと殆ど氣違ひのやうになつて益々烈しく絞めてかゝる、其自身の樣子がハッキリと考へられるのである。

兄は吠えるやうなウメキを續けてゐる。自分はどうしていゝか解らなかつた。

其處に若し明るい灯があつたら自分は決してそんな想像に惱まされる事はなかつたのである。時々にさう云ふ事のある自分は、自身の部屋では其用意がいつもしてあるのだ。自分は枕元の明るい灯を直ぐ點ける。左うすると、イヤな夢から覺めた時でも、イヤな想像の凝つて來る時でも、視覺からなら容易にそれを散らす事が出來るのだ。何部屋にはそれを助ける爲めに愉快な色をした風景畫を二三枚かけて置くのだ。明るい灯でそれを見ると頭の調子は直ぐ變る。イヤな氣分も直ぐほぐされて了ふのだ。殆ど夢なしには眠れない自分は、いつもこれだけの用意は忘れられなかつた。所が狩場の百姓家ではそれが出來なかつた。暗い中に大きく開いた眼には只想像のシーンだけが映つてゐる。それから眼も頭も轉ずる事が出來なかつたのである。

自分は枕に顏を伏せて暫く息を凝らした。自分は何か他の感覺でその調子を轉じなければならなかつた。自分は強く自身の腕を噛んで見たりした。其内兄もスヤ〳〵と眠つて了つた。

翌朝が何んとなく氣づかはれたが、兄は魘された事も知らぬ樣子で其日の狩りの計畫などを自分に話してゐた。自分もそれで安心はした。然し其想像は其後もどうかすると不圖憶ひ出された。其度自分は一種の苦痛を感ぜしめられる。

――日

彼も、もう英吉利へ着く頃である。自分には近頃何んとなく弱々しい心が起る。然し自分を殺さうとする者を憐む心はいゝとは考へられない。

――日

彼の死の知らせが來た時を想ふと、氣持の惡い不安が起つて來る。其時の妻を考へても、自分を考へても堪へられない氣持になる。イヤな事をヂッと待つ心持程に不愉快なものはない。「時」が自然にそれを近づけてくれる。弱い心を壓へて只ヂッと眼をねむつてゐなければならない……

（日記は茲で斷れてゐる。然し此クローディアスの運命は必ずしも「ハムレット」の芝居のそれと同じになるものとはかぎらない。――作者）

（大正元年八月）

清兵衞と瓢簞

これは清兵衞と云ふ子供と瓢簞との話である。此出來事以來清兵衞と瓢簞とは緣が斷れて了つたが、間もなく清兵衞には瓢簞に代はる物が出來た。夫は繪を畫く事で、彼は嘗て瓢簞に熱中したやうに今はそれに熱中して居る……

清兵衞が時々瓢簞を買つて來る事は兩親も知つて居た。三四錢から十五錢位までの皮つきの瓢簞を十程も持つて居たらう。彼はその口を切る事も種を出す事も獨りで上手にやつた。センも自分で作つた。最初茶澁で臭味をぬくと、それからは父の飮みあました酒を貯へて置いて、それで切りに磨いてゐた。

全く清兵衞の凝りやうは烈しかつた。或日彼は矢張り瓢簞の事を考へ〳〵濱通りを歩いて居ると、不圖眼に入つた物がある。彼はハツと思つた。それは路端に濱を背にしてズラリと並んだ屋臺店の一つから飛び出して來た爺さんのハゲた頭であつた。清兵衞はそれを瓢簞だと思つたのである。「立派な瓢ぢや」から思ひながら彼は暫く氣がつかずにゐた。——氣がついて、流石に自分で驚いた。その爺さんはいゝ色をしたハゲ頭を振り立てゝ向うの橫町へ入つて行つた。清兵衞は急に可笑しくなつて一人大きな聲を出して笑つた。堪らなくなつて笑ひながら彼は半町程駈けた。それでもまだ笑ひは止まらなかつた。

これ程の凝りやうだつたから、彼は町を歩いて居れば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でも又專門にそれを賣る家でも、凡そ瓢簞を下げた店と云へば必ず其前に立つて凝つと見た。

清兵衞は十二歲で未だ小學校に通つてゐる。彼は學校から歸つて來ると他の子供とも遊ばずに、一人よく町へ瓢簞を見に出かけた。而して、夜は茶の間の隅に安坐をかいて瓢簞の手入れをして居た。手入れが濟むと酒を入れて、手拭で卷いて、鑵に仕舞つて、それごとコタツへ入れて、而して寢た。翌朝は起きると直ぐ彼は鑵を開けて見る。瓢簞の肌はスッカリ汗をかいてゐる。彼は厭かずそれを眺めた。それから丁寧に絲をかけて陽のあたる軒へ下げて、そ、學校へ出かけて行つた。

清兵衞のゐる町は商業地で船つき場で、市にはなつて居たが、割りに小さな土地で二十分歩けば細長い市のその長い方が通りぬけられる位であつた。だから假令瓢簞を賣る家はカナリ多くあつたにしろ、殆んど毎日それを見歩いてゐる清兵衞には、恐らく總ての瓢簞は眼を通されてゐたらう。

彼は古瓢には餘り興味を持たなかつた。未だ口も切つてないやうな皮つきに興味を持つて居た。しかも彼の持つて居るのは大方所謂瓢簞形の割りに平凡な恰好をした物ばかりであつた。

「子供ぢやけえ、瓢いうたら、から云ふんでなかにやあ氣に入らんもんと見えるけなう」大工をしてゐる彼の父を訪ねて來た客が、傍で清兵衞が熱心にそれを磨いて居るのを見ながら、かう云つた。彼の父は、

「子供の癖に瓢いぢりなぞをしをつて……」とニガ〳〵しさうにその方を顧みた。

「清公。そんな面白うないのばかりエット持つ

とつてもあかんぜ。もちつと奇拔なんを買はんかいな」と客がいつた。清兵衛は、
「かういふがエヽんぢや」と答へて濟まして居た。
清兵衛の父と客との話は瓢簞の事になつて行つた。
「此春の品評會に參考品で出ちよつた馬琴の瓢簞と云ふ奴は素晴らしいもんぢやつたなう」
と清兵衛の父が云つた。
「エライ大けえ瓢ぢやつたけなう」
「大けえし、大分長かつた」
こんな話を聽きながら清兵衛は心で笑つて居た。馬琴の瓢と云ふのは其時の評判な物ではあつたが、彼は一寸見ると、――馬琴といふ人間も何者だか知らなかつたし――直ぐ下らない物だと思つて其場を去つて了つた。
「あの瓢はわしには面白うなかつた。かさ張つとるだけぢや」彼はかう口を入れた。
それを聽くと彼の父は眼を丸くして怒つた。
「何んぢや、わかりもせん癖して、默つとれ！」
清兵衛は默つて了つた。
或日清兵衛は裏通りを歩いてゐて、いつも見なれない場所に、仕舞屋の格子先に婆さんが干柿や蜜柑の店を出して、その背後の格子に二十ばかりの瓢簞を下げて置くのを發見した。彼は直ぐ、
「ちよつと、見せてつかあせえな」と寄つて一つ一つ見た。中に一つ五寸ばかりで一見極く普通な形をしたので、彼には震ひつきたい程にいゝのがあつた。
彼は胸をドキ〳〵させて、
「これ何んぼかいな」と訊いて見た。婆さんは、
「ぼうさんぢやけえ、十錢にまけときやんせう」と答へた。彼は息をハズマせながら、
「そしたら、乾度誰れにも賣らんといつて、つかあせえなう。直ぐ錢持つて來やんすけえ」クドクこれを云つて走つて歸つて行つた。
間もなく、赤い顏をしてハア〳〵いひながら還つて來ると、それを受取つて又走つて歸つて行つた。
彼はそれから、その瓢が離せなくなつた。學校へも持つて行くやうになつた。仕舞には時間中でも机の下でそれを磨いてゐる事があつた。それを受持の教員が見つけた。修身の時間だつただけに教員は一層怒つた。
他所から來てゐる教員には此土地の人間が瓢簞などに興味を持つ事が全體氣に食はなかつたのである。此教員は武士道を云ふ事の好きな男で、雲右衛門が來れば、いつもは通りぬけるさへ恐れてゐる新地の芝居小屋に四日の興行を三日聽きに行く位だから、生徒が運動場でそれを唄ふ事にはそれ程怒らなかつたが、清兵衛の瓢簞では聲を震はして怒つたのである。「到底將來見込みのある人間ではない」こんな事まで云つた。而して其たんせいを凝らした瓢簞は其場で取上げられて了つた。清兵衛は泣けもしなかつた。
彼は青い顏をして家へ歸るとこたつに入つて只ボンヤリとして居た。
そこに包みを抱へた教員が彼の父を訪ねてやつて來た。清兵衛の父は仕事へ出て留守だつた。
「かう云ふ事は全體家庭で取締つて頂くべきで……」教員はこんな事をいつて清兵衛の母に食つてかゝつた。母は只々恐縮して居た。
清兵衛はその教員の執念深さが急に恐ろしくなつて、脣を震はしながら部屋の隅で小さくなつてゐた。教員の直ぐ後の柱には手入れの出來た瓢簞が澤山下げてあつた。今氣がつくか今氣がつくかと清兵衛はヒヤ〳〵してゐた。
散々小言を並べた後、教員はたうとう其瓢簞には氣がつかずに歸つて行つた。清兵衛はホッ

と息をついた、清兵衛の母は泣き出した。而してダラ〳〵と愚痴つぽい小言を云ひだした。

間もなく清兵衛の父は仕事場から歸つて來た。で、その話を聞くと、急に側にゐた清兵衛を捕へて散々に撲りつけた。清兵衛はこゝでも「將來迚も見込のない奴だ」と云はれた。「もう貴樣のやうな奴は出て行け」と云はれた。

清兵衛の父は不圖柱の瓢箪に氣がつくと、玄能を持つて來てそれを一つ〳〵割つて了つた。清兵衛は只青くなつて默つて居た。

扨て、教員は清兵衛から取上げた瓢箪を穢れた物ででもあるかのやうに、捨てるやうに、年寄つた學校の小使にやつて了つた。小使はそれを持つて歸つて、クスブツタ小さな自分の部屋の柱へ下げて置いた。

二タ月程して小使は僅かの金に困つた時に不圖その瓢箪をいくらでもいゝから賣つてやらうと思ひ立つて、近所の骨董屋へ持つて行つて見せた。

骨董屋はタメツ、スガメツそれを見てゐたが、急に冷淡な顏をして小使の前へ押しやると、「五圓やつたら貰うとかう」と云つた。

小使は驚いた。が、賢い男だつた。何食はぬ顏をして、「五圓ぢや迚も離し得やしえんなう」と答へた。骨董屋は急に十圓に上げた。小使はそれでも承知しなかつた。

結局五十圓で漸く骨董屋はそれを手に入れた。――小使は教員から其人の四ヶ月分の月給を只貰つたやうな幸福を心ひそかに喜んだ。が、彼はその事は教員には勿論清兵衛にも仕舞まで全く知らん顏をして居た。だから其瓢箪の行方に就ては誰れも知る者がなかつたのである。

然し其賢い小使も骨董屋がその瓢箪を地方の豪家に六百圓で賣りつけた事までは想像も出來なかつた。

……清兵衛は今、繪を畫く事に熱中してゐる。これが出來た時に彼にはもう教員を怨む心も十あまりの愛瓢を玄能で破つて了つた父を怨む心もなくなつて居た。

然し彼の父はもうソロ〳〵彼の繪を畫く事にも小言を云ひ出して來た。

（大正元年十二月）

范の犯罪

范といふ若い支那人の奇術師が演奏中に出刃庖丁程のナイフで其妻の頸動脈を切斷したといふ不意な出來事が起つた。若い妻は其場で死んで了つた。范は直ぐ捕へられた。

現場は座長も、助手の支那人も、口上云ひも、尚三百人餘りの觀客も見てゐた。觀客席の端に一段高く椅子をかまへて一人の巡査も見てゐたのである。所が此事件はこれ程大勢の視線の中心に行はれた事でありながら、それが故意の業か、過ちの出來事か、全く解らなくなつて了つた。

その演奏は戸板位の大きさの厚い板の前に女を立たせて置いて二間程離れた處から出刃程の大きなナイフを掛け聲と共に二寸と離れない距離にからだに輪廓をとるやうに何本も何本も打ち込んで行く、さういふ藝である。

裁判官は座長に質問した。

「あの演奏は全體六ケしいものなのか？—

「いゝえ、熟練の出來た者にはあれは左程六ケしい藝ではありません。只、あれを演ずるにはいつも健全な而して緊張した氣分を持つて居なければならないと云ふ事はあります—

「そんなら今度のやうな出來事は過失としてもあり得ない出來事なのだな—

—勿論左ういふ假定—左ういふ極く確かな假定がなければ、許して置ける演藝ではムいません—

—では、お前は今度の出來事は故意の業と思つてゐるのだな？—

—いや、左うぢやあ有りません。何故なら、何しろ一間といふ距離を置いて、單に熟練と或直覺的な能力を利用してする藝ですもの、機械でする仕事のやうに必ず正確に行くとは斷言出來ません。あゝ云ふ過りが起らない迄は私共はそんな事はあり得ないと考へてゐたのは事實です。然し今此處に實際起つた場合、私共は兼てから考へてゐたといふ、其考へを持出して、それを批判する事は許されてゐないと思ひます—

—全體お前は何方だと考へるのだ」

「つまり私には解りませんのです—

裁判官は弱つた。此處に殺人といふ事實はある。然しそれが故殺或は謀殺（謀殺とすればこれ程巧みな謀殺はないと裁判官は考へた）だといふ證據は全くない。裁判官は次に范が此一座に加はる前から附いてゐた助手の支那人を呼んで質問を始めた。

—ふだんの素行はどういふ風だつた—

—素行は正しい男でムいます。バクチも女遊びも飲酒も致しませんでした。それにあの男は昨年あたりからキリスト教を信じるやうになりまして、英語も達者ですし、暇があるとよく說教集などを讀んで居るやうでした」

—妻の素行は？—

—これも正しい方でムいました。御承知の通り旅藝人といふものは決して風儀のいゝ者ばかりではありません。他人の妻を連れて逃げて了ふ、左ういふ人間も時々はある位で、范の妻も小綺な美しい女で、さういふ誘惑も時には受けてゐたやうでしたが、それらの相手になるやうな事は決してありませんでした」

「二人の性質は？—

「二人共に他人には極く柔和で親切で、又二人共に他人に對しては克己心も強く決して怒るや

うな事はありませんでした。が、此處で支那人は言葉を斷つた。而して一寸考へて、又續けた)――此事を申上げるのは范の爲に不利益になりさうで心配でもありますが、正直に申上げれば、不思議な事に他人に對してはそれ程に柔和で親切で克己心の強い二人が、二人だけの關係になると何故か驚く程お互に慘酷になる事でムいます」

「何故だらう？」

「解りません」

「お前の知つてる最初から左うだつたのか？」

「いゝえ、二年程前妻が産を致しました。赤子は早産だといふ事で三日ばかりで死にましたが、其頃から二人は段々に仲が惡くなつて行くのが私共にも知れました。二人は時々極く下らない問題から烈しい口論を起します。左ういふ時、范は直ぐ蒼い顏になつて了ひます。然しあの男はどんな場合でも、結局は自分の方で默つて了つて、決して妻に對して手荒な行ひなどをする事はムいません。尤もあの男の信仰もそれを許さないからでせうが、顏を見るとどうしても、押へきれない怒りが凄い程に現れてゐる事もムいます。で、私は或時それ程不和なものをいつまでも一緒にゐなくてもいゝだらう、と云つた事がムいます。然し范は、妻には離婚を要求する理由があつても、此方にはそれを要求する理由はないと答へました。范は何處までも自分の我儘にしてゐました。どうしても妻を愛する事が出來ない、自分に愛されない妻が、段々に自分を愛さなくなる、それは當然な事だ、こんな事もいつてゐました。あの男がバイブルや説教集を讀むやうになつた動機もそれで、どうかして自分の心を和げて、憎むべき理由もない妻を憎むといふ、寧ろ亂暴な自分の心をため直して了はうと考へてゐたやうでした。妻も又實際可哀さうな女なのです。范と一緒になつてから三年近く、旅藝人として彼方此方と廻り歩いてゐますが、故郷の兄といふのが放蕩者で家はもうつぶれて無いのです。假に范と離れて歸つた所が、四年も旅を廻つて來た女を信用して結婚する男もないでせうし、不和でも范と一緒にゐるより外なかつたのだと思ひます」

「で、全體お前はあの出來事についてはどう思ふ」

「過りで仕た事か、故意で仕た事かと仰有るのですか？」

「左うだ」

「私も實はあの時以來色々と考へて見ました。所が考へれば考へる程段々解らなくなつて了ひました」

「何故？」

「何故か知りません。事實左うなるのです。恐らく誰でも左うなるだらうと思ひます。口上云ひの男に訊いて見た所が、此男もやはり解らないと申しました」

「では出來事のあつた瞬間には何方かと思つたのか？」

「思ひました。(殺したな)と思ひました」

「左うか」

「所が口上云ひの男は(失策つた)と思つたさうです」

「左うか――然しそれは其男が二人の平常の關係を餘り知らない所から單純に左う思つたのではないかネ」

「左うかも知れませんが、私が(殺したな)と思つたのも、同樣に二人の平常の關係をよく知つてる所から、單純に左う思つたのかも知れないと、後では考へられるのです」

「其時の范の樣子はどうだつた」

「范は(あつ)と聲を出しました。それで私も氣がついた位で、見ると女の首からは血がどつと溢れました。それでも一寸の間は立つて

ゐましたが、ガクリと膝を折ると、さゝつたナイフで一寸身體がつられ、其ナイフが拔けると一緒にくづれるやうに女のからだは前へのめつて了ひました。その間誰もどうする事も出來ません。只堅くなつて見てゐるばかりでした。で、確かな事は申されません。何故なら私には其時范の樣子を見る程餘裕がなかつたからです、が然し范も其瞬間には恐らく私達と同じだつたらうと思はれます。その後で私には（たうとう殺したな）といふ考へが浮んだのです。が、其時は范は眞蒼になつて眼を閉おて立つてゐました。幕を閉めて、女を起して見るともう死んでゐました。范は興奮から恐しい顏をして（どうしてこんな過ちをしたらう）といつてゐました。而して其處に跪いて長い事默禱をしました」

―あわてた樣子はなかつたか？―

「少しあわてた樣子でした」

―よろしい。訊ねる事があつたら又呼び出す―

裁判官は助手の支那人を下げると、最後に本人を其處へ連れて來さした。范は引きしまつた蒼い顏をした、賢さうな男だつた。一眼で烈しい神經衰弱にかゝつてゐる事が裁判官に解つた。而して―今、座長と助手とを調べたから、それから先を訊くぞ―と范が席に着くと直ぐいつた。范は首肯いた。

「お前は妻をこれまで少しも愛した事はないのか？」

―結婚した日から赤子を生む時までは心から私は妻を愛して居りました―

「どうして、それが不和になつたのだ」

―妻の生んだ赤子が私の兒でない事を知つたからです―

―お前はその相手の男を知つてゐるか？」

―想像してゐます。それは妻の從兄です―

―お前の知つて居る男か？―

―親しかつた友達です。其男が二人の結婚を云ひ出したのです。其男から私は勸められたのです」

―お前の所へ來る前の關係だらうな？―

「勿論左うです。赤子は私の所へ來て八月目に生れたのです」

―早産だと助手の男は云つてゐたが……？」

「左う私が云つてきかしたからです」

―赤子は直ぐ死んだと云ふな？―

―死にました―

―何んで死んだのだ―

―乳房で息を止められたのです」

「妻はそれを故意でしたのではなかつたのか？」

―過ちからだと自身は申して居りました―

裁判官は口をつぐんでヂッと范の顏を見た。范は顏を擧げたまゝ伏目をして、次の問を待つてゐる。裁判官は口を開いた。

「妻はその關係に就いてお前に打明けたか？」

―打明けません。私も訊かうとしませんでした。而してその赤子の死が總てのつぐのひのやうにも思はれたので私は自身出來るだけ寛大にならなければならぬと思つてゐました」

「所が、結局寛大になれなかつたといふのか」

「さうです。赤子の死だけではつぐのひきれない感情が殘りました。離れて考へる時には割りに寛大で居られるのです。所が、妻が眼の前に出て來る。何かする。そのからだを見てゐると、急に壓へきれない不快を感ずるのです」

「お前は離婚しようとは思はなかつたか？」

「したいとはよく思ひました。然し嘗てそれを口に出した事はありませんでした」

「何故だ」

―私が弱かつたからです。妻は若し私から離婚されゝば、生きてはゐないと申してゐましたからです」

「妻はお前を愛してゐたか？」

「愛してはゐません」

「何故それなら、そんな事をいつてゐたのだ」

「一つは生きて行く必要からだつたと考へます。實家は兄がつぶして了ひましたし藝人の妻だつた女を貰ふ眞面目な男のない事も知つてゐたからです。又働くにしては足が小さくて駄目だからです」

「二人の肉體の上の關係は？」

「多分普通の夫婦と、それ程には變らなかつたと思ひます」

「妻はお前に對して一體に同情もしてゐなかつたのか？」

「同情してゐたとは考へられません。――妻にとつて同棲してゐる事は非常な苦痛でなければならぬと思ふのです。然し其苦痛を堪へ忍ぶ我慢強さは迚も男では考へられない程でした。妻は私の生活が段々と壊されて行くのを殘酷な眼つきで只見てゐました。私が自分を救はう――自分の本統の生活に入らうともがき苦しんでゐるのを、押し合ふやうな少しも隙を見せない心持で、しかも冷然と側から眺めてゐるのです」

「お前は何故、それに積極的な思ひ切つた態度が取れなかつたのだ」

「色々な事を考へるからです」

「色々な事とはどんな事だ」

「自分が誤りのない行爲をしようといふ事を考へるのです――然しその考へはいつも結局何の解決もつけては呉れません」

「お前は妻を殺さうと考へた事はなかつたか？」

范は答へなかつた。裁判官は同じ言葉を繰返した。それでも范は直ぐは答へなかつた。而して、

「其前に死ねばいゝとよく思ひました」と答へた。

「それなら若し法律が許したらお前は妻を殺したかも知れないな？」

「私は法律を恐れてそんな事を思つてゐたのではありません。私が只弱かつたからです。弱い癖に本統の生活に生きたいといふ慾望が強かつたからです」

「而して、其後にお前は妻を殺さうと考へたのか？」

「決心はしませんでした。然し考へました」

「それはあの出來事のどれ程前の事か？」

「前晩です。或はその明け方です」

「其前に爭ひでもしたか？」

「しました」

「何の事で？」

「話し仕なくてもいゝ程下らない事です」

「まあ、云つて見ないか」

「――食ひ物の事でです。腹が空いてゐると私は癇癪持ちになるのです。で、其時妻が食事の支度でグヅ〳〵してゐたのに腹を立てたのです」

「いつもより、それが烈しかつたのか？」

「いゝえ。然しいつになく後まで興奮してゐました。私は近頃自分に本統の生活がないといふ事を堪らなく焦々して居た時だつたからです。床へ入つてもどうしても眠れません。興奮した色々な考へが浮んで來ます。私は私が左右顧、始終キヨト〳〵と、欲する事も思ひ切つて欲し得ず、イヤで〳〵ならないものをも思ひ切つてハネ退けて了へない、中ブラリンな、ウヂウヂとした此生活が總て妻との關係から出て來るのだといふ氣がして來たのです。自分の未來にはもう何の光りも見えない。自分にはそれを求める欲望は燃えてゐる。燃えてゐないまでも燃え立たうとしてゐる。それを燃えさせないものは妻との關係なのだ。しかもその火は全く

消えもしない。プス〱と醜くイブつてゐる。その不快と苦みで自分は今中毒しようとしてゐるのだ。中毒しきつた時は自分はもう死んで了ふのだ。生きながら死人になるのだ。自分は左ういふ所に立つてゐるのに尚それを忍ばうといふ努力をしてゐるのだ。而して一方で死んでくれゝばいゝ、そんなきたない、イヤな考へを繰返してゐるのだ。其位なら何故殺して了はないのだ。殺した結果がどうならうとそれは今の問題ではない。牢屋へ入れられるかも知れない。しかも牢屋の生活は今の生活よりどの位いゝか知れはしない。其時は其時だ。其時に起ることは其時にどうにでも破つて了へばいゝのだ。破つても破つても破りきれないかも知れない。然し死ぬまで破らうとすればそれが俺の本統の生活といふものになるのだ。――私は側に妻のゐる事を殆ど忘れてゐました。私は漸く疲れて來ました。疲れても眠れる性質の疲勞ではなかつたのです。ボンヤリして來ました。張りきつた氣がゆるんで來るに從つて、人を殺すといふやうな考への影が段々にボヤケて來たのです。私は惡夢におそはれた後のやうな淋しい心持になつて來ました。一方ではあれ程に思ひつめた氣が一ト晩の間にからも細々しくなつて了ふ自身の弱い心を悲しみもしたのです――而してたうとう夜が明けました。想ふに妻も眠つてゐなかつたらしいのです――

―起きてからは、二人は平常と變らなかつたか？―

「二人は互に全く口をきかずにゐました」

「お前は何故、妻から逃げて了はうとは思はなかつたらう？」

「貴方は私の望む結果からいへば、それで同じ事だらうと仰有るのですか？」

「左うだ」

「私にとつては大變な相違です」

范はかういふと、裁判官の顏を見て默つて了つた。裁判官は和いだ顏つきをして只首肯いて見せた。

「――然しかういふ事を考へたといふ事と、實際殺してやらうと思ふ事との間には未だ大きな溝が殘つてゐたのです。其日は朝から私は何となく興奮してゐました。からだの疲勞から來る、イヤに彈力のない神經の鋭さがあります。私はヂッとしてゐられない樣な心持から朝から外へ出て人のゐないやうな所をブラ〱と歩いてゐました。私は兎も角どうかしなければならないといふ事を繰返し〱考へてゐました。然し前晩のやうに殺さうといふ考へはもう浮べはしなかつたのです。又其日の演藝についても私は何の心配もしてゐなかつたのです。若しその事を多少でも私が想ひ浮べたとしたら、多分あの藝は選ばなかつたと思ひます。私共のする藝は未だ他に幾らもあつたからです。其晩いよいよ私共の舞臺へ出る番が來た、其時すら私は未だそんな事は考へませんでした。私はいつものやうに、ナイフの切れる事を客へ見せる爲に紙をきつたり、舞臺へそれを突立てたりして見せました。間もなく厚化粧をした妻がハデな支那服を着て出て來ました。其樣子は常と全く變つてはゐません。愛嬌のある笑を見せて客に挨拶をすると厚板の前へ行つて直立しました。私も一本のナイフを下げて或る距離から妻と眞向きに立ちました。前晩から初めて其時二人は眼を見合せたのです。其時漸く私は今日此演藝を選んだ事の危險を感じたのです。私は出來るだけ緊張した氣分で仕なければあぶないと思ひました。今日の上づつた興奮と弱々しく鋭くなつた神經とを出來るだけ靜めなければならぬと思つたのです。然し心まで食ひ込んでゐる疲勞はいくら落ちつかうとしてもそれを許しません。其時から私は何となく自分の腕が信じ

られない氣がして來たのです。私は一寸眼をねむつて心を靜めようと試みました。するとフラ／＼と體のユレるのを感じました。時は來ました。私は先づ最初に頭の上へ一本打ち込みました。ナイフはいつもより一寸も上へ行つてさゝりました。次に妻が兩手を肩の高さに擧げた其腋の下に一本づつ打ちました。ナイフが指の先を離れる時に何かベタックやうなコダハッタものが一寸入ります。私にはもう何處へナイフがさゝるか解らない氣がしました。一本毎に私は(よかつた)といふ氣がします。私は落ちつから落ちつかうと思ひました。然しそれは反つて意識的になる事から來る不自由さを腕に感ずるばかりです。頭の左側へ一本打ちました。次に右側へ打たうとすると、妻が急に不思議な表情をしました。發作的の烈しい恐怖を感じたらしいのです。妻はそのナイフが其儘に來んで來て自身の頸へさゝる事を豫感したのでせうか？ それはどうか知りません。私は只その恐怖の烈しい表情の自分の心にも同じ強さで反射したのを感じたのでした。私は眼まひがしたやうな氣がしました。が、其まゝ力まかせに、殆ど暗闇を眼がけるやうに的もなく手のナイフを打ち込んで了つたのです……」

裁判官は默つて居た。

「たうとう殺したと思ひました」

「それはどういふのだ。故意でしたといふ意味か？」

「さうです。故意でした事のやうな氣が不意にしたのです」

「お前はその後で、死骸の側に跪いて默禱したさうだな？」

「それは其時不圖湧いたズルイ手段だつたのです。皆は私が眞面目にキリスト教を信じてゐると思つてゐる事を知つてゐましたから、祈る風をしながら私は此場に處すべき自分の態度を決めようと考へたのです」

「お前は何處までも自分のした事で故意であると思つてゐたのだナ？」

「さうです、而して直ぐこれは過殺と見せかける事が出來ると思つたのです」

「然し全體何がお前にそれを故殺と思はしたのだらう？」

「私の度を失つた心です」

「而してお前は巧みに人々を欺き終せたと思つたのだな？」

「私は後で考へてゾッとしました。私は出來るだけ自然に驚きもし、多少あわてもし、又悲んでも見せたのですが、若し一人でも感じの鋭い人が其處にゐたら、勿論私のワザとらしい樣子を氣づかずには置かなかつたと思ひます。私は後で其時の自分の樣子を思ひ浮べて冷汗を流しました。――私は其晩何うしても自分は無罪にならなければならぬと決心しました。第一に此兇行には何一つ客觀的な證據のないといふ事が非常に心丈夫に感ぜられました。勿論皆は二人の平常の不和は知つてゐる、だから私は故殺とは疑はる事は仕方がない。然し自分が何處までも過失だと我を張つて了へばそれ迄だ。平常の不和は人々に推察はさすかも知れないが、それが證據となる事はあるまい。結局自分は證據不充分で無罪になると思つたのです。其處で私は靜に出來事を心に繰返しながら、出來るだけ自然にそれが過失と思へるやう、申立ての下拵へを腹でして見たのです。所が其內、何故、あれを自身故殺と思ふのだらうか、といふ疑問が起つて來たのです。前晩殺すといふ事を考へた、それだけが果して、あれを故殺と自身でも決める理由になるだらうか、と思つたのです。段々に自分ながら解らなくなつて來ました。私は急に興奮して來ました。もうヂッとしてゐられない程興奮して來たのです。愉快で

愉快でならなくなりました。何か大きな聲で叫びたいやうな氣がして來ました」
「お前は自分で過失と思へるやうになつたといふのか？」
「いゝえ、左うは未だ思へません。只自分にも何方か全く解らなくなつたからです。私はもう何も彼も正直に云つて、それで無罪になれると思つたからです。只今の私にとつては無罪にならうといふのが總てです。その目的の爲には、自分を欺いて、過失と我を張るよりは、何方か解らないといつても、自分に正直でゐられる事の方が遙に強いと考へたからなのです。私はもう過失だとは決して斷言しません。そのかはり、故意の仕業だと申す事も決してありません。で、私にはもうどんな場合にも自白といふ事はなくなつたと思へたからです」
　范は默つて了つた。裁判官も少時默つてゐた。而して獨言のやうに、
「大體に於てウソはなささうだ」といつた。「所でお前には妻の死を悲しむ心は少しもないか？」
「全くありません。私はこれまで妻に對してどんな烈しい憎みを感じた場合にもこれ程快活な心持で妻の死を話し得る自分を想像した事はありません」
「もうよろしい。引き下がつてよし」と裁判官が云つた。范は默つて少し頭を下げると此室を出て行つた。
　裁判官は何かしれぬ興奮の自身も湧上がるのを感じた。
　彼は直ぐペンを取上げた。而して其場で「無罪」と書いた。

（大正二年九月）

冬の往來

寒い空つ風の吹く日暮だつた。私は小説家の中津榮之助と山の手の或る町を歩いて居た。

「正月號の仕事はもう皆濟んだのかい？」私はこの間中から口癖のやうに忙しい／＼と大袈裟に吹聽しながら、毎日何處か出歩いてばかりゐる中津にから諷いて見た。

「駄目さ」

「何日が〆切りなんだ」

「あしたが〆切りだ。未だ何んにも出來てやしない」

「材料はあるのか」

「うん、それはあるんだが、どれに手をつけても、左う直ぐは物になりさうもないんで、愚圖愚圖して了ふんだ。どうも勇氣がなくつて駄目だよ」

「あんまり怠けてばかりゐるからだ」

世間では仕事に念を入れ過ぎて書けないやうに解られてゐるが、——彼自身も幾らかその氣でゐるらしいが、私からいへば彼は子供からの只の怠け者に過ぎない。

「それは怠けてもゐるが、少しつめて机に向ふと、胃が惡くなつたり、熱が出たり、何かしら故障が起こるんだ。實際不思議な位だ」

「ふだん、やりつけない事をすると直ぐ身體に障るといふ奴だよ」

「その通りだ」

二人は笑つた。

風は時々往來の砂塵りを捲き上げ、大砲の烟りのやうに押寄せて來た。私達は幸ひ、風下を向いて居たが、それに向ふ人々はその度立止まつて、背後を向くか、帽子を額に當てるかして、やり過ごしてゐた。別に用もない私達ではあつたが、知らず／＼急ぎ足に歩いてゐた。

往來は割りに賑やかだつた。私は向うから肥つた女の人を乘せた一臺の俥の來るのを何氣なく見てゐた。女の人は四十以上に見えた。はつきりした眼鼻立ちの、色白で、でつぷりと肥つた、如何にも豐かな感じの人だつた。髪は無造作なひつつめに結つて居る。女の人は一方に大きな風呂敷包みを抱へ、片一方に三つばかりになる女の兒を抱いてゐた。その一人乘りの俥に食みだした樣子が可笑しかつた。

「あゝ、薫さんだ」中津は小聲でかういふと、何氣なく一寸顏を背向けたが、又思ひかへしたやうに俯向いて了つた。

俥は近づいて來た。中津が心の平靜を失つて居るのが分つた。彼は顏を赧めて居る。私には彼の左ういふ樣子が如何にも子供染みて見えた。何をそんなにドギマギしてゐるのだらうと思つた。

俥がそばに來た時に彼は不意に顏を上げ、いやに丁寧なお辭儀をした。女の人も一寸頭を下げたが、それは中津を中津と認めて下げたのではないらしかつた。女の人は尚不審さうに凝つと此方を見て居た。

此時、丁度又大砲の烟のやうな埃りが押寄せて來た。兩手の塞がつてゐる女の人はそれを顏へ眞正面に受け、顏中の筋肉を鼻へ集め、妙な顰め面をした。それでも薄眼で此方を見てゐたが、漸く彼を認めたらしく、

「あら……」左ういつて子供の頭の上で窮屈さうに頭を下げた。そして女の人はその奇妙な顰め面のまゝ、擦違つて行つた。

「君はあの人を見たかね」暫くして中津が云ひ

出した。見た」と云ふと、彼は續けて、
「あれは薫さんと云ふ人だよ」
「ふむ」
「僕の初戀の人だ。そして今でも戀人なのだ」
「戀人?」私は多少吃驚して訊き返した。
「左うだ、戀人と云つていゝだらう。勿論僕だけの氣持でいふのだが」
「むかうの人はどうなのだ」
「薫さんは何んにも知つてやしない。初めから仕舞ひまで何んにも知つては居ないのだ。僕は遂に打明ける機會なしに失戀して了つたのだ」
「打明けない内にあの人が結婚して了つたのか」
「左うぢやあない。僕があの人を意識にのぼらして戀し出したのは五年程前、あの人が未亡人になつてからの事だ」
「然し、それが君が云ひ出さない内に再婚したんぢやないか」
「いや、あの人はその時から未だにずつと一人で居る」
「今の小さい子供はどうしたのだ」
「あゝあの子供か。あれはあの人の孫だよ」
私は危くふき出しかけた。然し今、頭も胸もその人の事で一杯だといふやうな彼の眞劒な顔つきを見ると笑ふわけには行かなかつた。勿論私は此親しい友を笑ひ者にしようなどとは毛頭思はない。が、笑はないまでも兎も角、それは可笑しな事には違ひなかつた。一體中津はこれまで餘りラヴストリーは書かない方だつた。私は恐らく彼自身の經驗に書く程の事件がなかつたのだらうと思つてゐた。實際彼は書かないばかりでなく話しさへしなかつた。所で、今私は彼から左ういふ經驗のあつた事を聞き、その戀人を眼のあたりに見る光榮をも持つたわけである。
「君は何故それを作物に書かないのだ」
「書く時期が來たら書くつもりで居る」
「話す時期が來たから話したのか」かう云つて私は笑つた。私はそれを別に厭味のつもりで云つたのではなかつたが、彼は左う解つた。
「別に隱す氣ではなかつたが、話す機會がなかつたのだ。然し君が聽いて呉れるなら僕は喜んで話す」
「左うか」
「君は聽いてくれるかね?」
「勿論喜んで聽く」
以下はそれから彼の話し出した彼の「薫さん」の話である。然し此話は餘り精しく書くわけには行かない。何故なら、時期が來れば彼自身精しく書くつもりで居る材料だからである。

僕が薫さんを初めて見たのは姉の結婚披露が紅葉館であつた、その時だつた。薫さんは先の親類の一人として來てゐた。四つ位になる男の兒と多分十位になる痩せた女の兒とを連れて來てゐた。良人といふ人は或る官省の課長をしてゐる痩せた小さな人で、評判では所謂切れ者で官吏としても先のある人だといふやうな事だつた。年はよく分らなかつたが、薫さんの大やうな豐かな感じとは全く反對に、變にひねこびた感じがする、大分年のいつた人に僕には思へた。後で聽いた事だが、薫さんは元來此人の弟の所へ行く筈だつた。それが結婚間際にその弟が死に、それで話はそれ切りになりかけたのだが丁度その頃今の良人が細君を亡くし、子供もない所から、その方へ來ては貰へないだらうかといふやうな話になつた。元々弟に對して別に愛情があつたわけではない。で、云はれるまゝに薫さんは今の良人の所へかたづいて來たのだといふ事だ。

薫さんは僕の祖母と火鉢を挾み、女持にし

ては少し太過ぎる裕式な銀煙管で、うまさうに煙草をのみながら、何か切りに話し込んでゐた。僕は遠くからその樣子を見、その人に對し、今日初めて見た人ではない、前からよく知つてゐる人だといふやうな親しい感じを持つた。兎に角、薰さんは僕にとつて、一人の立派な母性として映つてゐた。少なくも其時はそれ以上で惹きつけられて居たとは思へない。當時僕は二十で、高等學校に通つてゐた。

その後薰さんとは時偶に會ふ機會があつた。直接の親類でないからお互の家としての交渉は殆どなかつたが、姉の家で何かある場合、よく其處で落ち合つた。

或る時僕は姉から、薰さんが近頃神經衰弱で轉地して居ると云ふ噂を聽いた。何の屈託もなささうな、あの大まかな薰さんにもそんな事があるのかしらと僕は不思議な氣がした。それを云ふと、未だ娘つ氣の脫けない姉はいつも癖で、眼に角を立て、さも輕蔑するやうに、

「薰さんといふ方は、お前さんなんぞが考へてゐる、只それだけの方ぢやあ、ありませんよ」と云つた。

そして姉は、薰さんが結婚してから後、或る戀愛事件の爲に家を飛び出した事のある人だといふ話をした。これは僕にとつては全く思ひがけない事だつた。

薰さんの父といふのは自由民權といふやうな事を云つた政客の一人だつた。最初佛の專門で外國へ行つたのが、向うで中江兆民などと親しくなり、歸つて來た時にはもう一トかどの佛蘭西仕込みの政論家になり濟ましてゐた。かういふ人だつたから、初めの内は地方遊說などに大勢の壯士などを引連れて步いたものだが、それも或る一時代で、その後或る新聞の主筆として、前とは生活も幾らか落ちついた頃には、以前の壯士流の人間は餘り出入りしなくなつた代りに、私立大學出といふ種類の青年達が大分その門に集まつた。薰さんの戀愛事件の對手だつた岸本といふのはその仲間の一人だつた。

地方出の、今見る薰さんのやうに肥つた、——當時十七八の薰さんは今のやうにあんなに肥つた人ではなかつたさうだ。いゝ、すらりとした、さうもいへまいが、兎に角、せいに延びる年頃で普通の娘らしい若さを持つた人だつた、——が、今いふ岸本といふ人は丁度今の薰さんのやうにでつぷりと肥つた如何にも落ちついた所謂膽汁質といふ側の人で、眼尻の下がつた、風采は普通いふ好男子とは違かつたが、何かしら人を惹きつけるものを持つた、信賴するに足るといふ感じを與へる方の人だつた。薰さんは戀とは知らず只だ心の中で此人を好いてゐた。其人も亦、薰さんに對し、同じやうな氣持を持つてゐたが、さりとて、互にそれを氣にも現せない妙な一種の神經質を持つてゐたのだ。つまりは互に思ひながら、對手の心を少しも知らずにゐた。

薰さんの父は比較的自由な考へを持つてゐた人だから、その氣持を何方かで一寸でも現す事が出來たら、堰かれた水は一時に流れ出し、萬事はうまく運んだに違ひないのだが、其處が、互の神經質で自分だけの氣持とのみ思つてゐたから、氣にもそれを現さうとはしなかつた。しかも、それなら、それで仕舞ひまでそれで過せば何の面倒も起らなかつたが、薰さんが結婚して一年餘り、薰さんの父が死んだ時に、そのお通夜で二人が一緒に夜を明かし、はしなく、その事が兩方の心に通じて了つた。これはよく云ふ運命の惡戲とでも云ふやうな事だつた。

岸本といふ人はしつかり者だけにかう云ふ事にも態度は明瞭してゐた。自分は勿論結婚を切に望んでゐる。然し貴女が今の良人と別れて出て來る手傳ひまでは出來ない。それは貴女自身

の領分内の事だ。其處まではどうしても貴女自身で解決をつけて來なければならぬ。然し若しそれだけを貴女自身で型をつけさへすれば、後は總て私がする。對世間の事柄でも何んでも。そのためにどんな犠牲を拂ふ事も自分は決して辭さない。貴女はその自分の領分内の事を自分で處理出來るだらうか？」かう云つたさうだ。薫さんは「やります」と答へた。其場では勿論自分でやつて見せる氣でゐたのだが、扨て家へ歸つて見ると、此關所は仲々左う易くは破れなかつた。薫さんは悶えながら空しく日を過すより仕方がなかつた。薫さんにしろ無斷で飛び出すなら、出來ない事ではなかつた。然しそれでは岸本の云ふ解決にはならなかつた。實際かういふ難問題を女に課するといふ事は無理である。岸本がもつと女といふものをよく知つてゐたら、かういふ難問題は課さなかつたに違ひない。が、彼は未だ若かつた。その上總てを理想的に考へる方だつた。彼は女に出來ない事を女に要求したわけだ。そして彼は獨り薫さんの出て來る日を力瘤を入れて待つてゐた。

薫さんからは時々手紙が來たが、要するに女らしい愚痴ばかりで、それには少しも其事に突進んで行く力が現れてゐなかつた。岸本は歯がゆかつた。が、最初の決心通り、彼はその事には直接一指をも加へない氣で返事さへ出さなかつた。薫さんの方はどうしても岸本の力を借りなければ此關は破れない。そして空しく幾月かゞ過ぎて了つた。

岸本の方も苦しかつた。その事が自分の領内に入つて來た場合には、どうにでも片附けて見せる氣ではゐるものゝ、未だ其處まで來ない今、彼には力の入れやうがなかつた。彼は何事にも手がつかず、蛇の生殺しで日を送つてゐたが、仕舞ひには流石の彼もそれに堪へられなくなつた。もう仕方がない。いつかはその日が來るに違ひないが、それまで自分はかうして手を束ねて待つてはゐられないと思つた。彼は一年でも二年でも息抜きに亞米利加へ行くことにした。

岸本は此場合薫さんに無斷で行つて了ふわけには行かなかつた。彼は寧ろ事務的に、いつ幾日の船で渡米するといふだけの手紙を薫さんへ出した。そしてその前日彼は横濱の西村といふ船はたご屋へ行つてゐると、夜晩くなつて、突然薫さんが家を飛びだし、其處へ訪ねて來た。

薫さんは此儘自分もどうか連れて行つて呉れと泣いた。これは薫さんとしては精一杯だつた。薫さんは良人に宛て手紙一つ殘し、着のみ着のまゝで出て來たのだ。

これには岸本も弱つた。來て呉れた事は嬉しかつたが、薫さんのいふやうな事は出來なかつた。それでは最初から約束の本統の解決にはならなかつたし、兎に角、未だ人妻である薫さんを此儘同じ宿へ泊めるわけには行かなかつた。彼は止むを得ず薫さんの實母に直ぐ來て呉れるやう電話をかけた。

二人――實母と良人は終列車で來た。良人はわざと岸本と會ふ事を避け別室に入つて了つたが、その意を受けた母親から岸本は薫さんが既に姙娠四箇月である事を聴くと、彼は崖からいきなり突き落とされたやうに感じた。

良人の云ひ分はかうだつた。岸本の此事に處する態度の公明正大である事を先づ充分に認め、それで自分の方でもこれを匹夫匹婦の痴情の爭ひには、したくない。で、薫さんの心がそれ程まで貴方の方へ傾いてゐるものなら、自分の方も薫さんに對する愛がさめたわけではないが、潔よく彼女をあきらめるつもりだ。けれども、只一つこゝに條件がある。それは薫さんの胎にある子供の事で、此未だ見ぬ兒に對する父親の責任として、此儘薫さんを米國へやつて了

ふ事は、どうも忍び難い。夫婦の關係は此まゝ切つても差支へないが、胎の兒が無事に生れるまでは實家へやつてなり、又別居なりしても薰さんを自分の手近に止めて置きたい。この事は貴方ばかりでなく薰さんにも是非快く認めて貰ひたいものだ。かういふ話だつた。

岸本はその話を聽きながら夢から覺めたやうな變に白けた氣持になつてゐた。彼は理想家だつた。その彼にとつて薰さんが姙娠したといふ事は實に晴天の霹靂にも等しかつた。四ケ月といへば彼と心を打明け合つて一ケ月か二ケ月後の事だ。左う云ふ事があり得るものだらうか。

彼は勿論、その場では何も云へなかつた。そして翌日彼は淋しい姿で二三の友に送られ、一人米國へたつて行つた。

その後岸本からどう云ふ事が薰さん、又薰さんの良人の方へ云つて來たか分らないが、兎に角岸本はそれから十年餘り彼方へ行つたきり日本へは歸つて來なかつた。そして歸つて來た時にはその爲めばかりでもあるまいが、直ぐ滿洲の方に仕事を見つけ、その方へ出掛けていつたといふ事だ。未だに獨身でゐるといふやうな噂もある。そして薰さんがそのまゝうやむやに良人の家に落ちついて了つた事は云ふまでもない。

此話は僕には全く意外だつた。此話で僕は僕の頭にある薰さんといふ人間を全く作り變へねばならなかつた。何處にさういふ熱情をあの人は隱してゐるのだらう？ さういふ熱情が今も尚あの人の何處かに隱されてあるのだらうか、左う思つた。が、僕が左う思つたのも實は束の間だつた。僕はそれでこそ、あの人があの人らしくなつた、それでこそあの人が丸彫りになつたのだ、と、直ぐこんなに思ふやうになつた。僕は今まであの人を餘りに平面的に見てゐた。それは岸本があの人の姙娠に幻滅を感じた事が餘りに平面的な見方からであつたと同樣であると考へた。

それから年月が經つにつれ段々に薰さんといふ人が僕には明瞭して來た。同時に平凡にもなつて來たが、薰さんに對する知らず〳〵の好意は少しも變らなかつた。姉の家で落ち合つたりすると、その日一日、或は翌日までも私は云ひしれぬ淡い幸福を感ずる事がある。然しそれが薰さんを自分が戀してゐるからだとは僕は少しも考へなかつた。臆病者の僕にはそれは考へられない。人妻を戀する。――左ういふ經歷を持つた人だから戀する、若しかうなつて來ると、それは尙考へてはならぬ事だつた。が、事實は僕は矢張り薰さんを戀してゐた。只それを意識に上らせる事がどうしても出來なかつた。

これは臆病といへば臆病だが、人間はそれでいゝのだと思ふ。時には人妻を好きにならぬとはかぎらない。然し好きは好きでも、それ以上に自分で嵩じさせないのが人間の運命に對する智慧なのだ。

僕の薰さんに對する氣持はかう云つた不卽不離の狀態のまゝ續いた。どん〳〵月日が經つた。その間に話すべき事も別に起こらなかつた。さうして今から五年前、初めて薰さんに會つた時から云へば七年目に薰さんの夫はインフルエンザで亡くなつた。

或る日僕は祖母と姉とがこんな話をしてゐるのを聽いた。

「薰さんは今、お幾つかね」

「左うね、割りに老けてお見えになるけれど、お三十四かしら、五かしら」

「未だお若いんだね」

「左うよ、私とは五つか六つしかおちがひにならないのよ。本統にお可哀想ですわ」

「でも、もう再婚はなさらないんだらう」

「それが、分らないの。若しかしたら、左ういふ事があるんぢやないかと私は考へてるの。別に變な話ぢやありませんけどね、大分年のいつた方で元の鐵道の社長さんだつた方から左ういふ申込みが、あつたとか、なかつたとか、何だかそんな事を此間うちが云つてゐましたよ。――うちがその方に頼まれたのかしら……」

「それでお子さん達の方はいゝのかね」

「それですわ。私もそれを云つたんですよ。處が、雪子さんの方はもう直にお嫁にいらつしやるんだし、茂さんの方は當人さへ承知なら、此方へ引きとつて今まで通り一緒に暮らして少しも差支へないと、何んだか話が大變簡單なのよ」

僕は左ういふ話を聽いてゐる内に、その席に居堪らない氣持になつた。僕は何氣なく起つて自分の部屋に入つて了つた。

然しそれから間もない或る日だつた。僕は又姉の口から、薫さんがその話をきつぱり斷つたといふ事を聽き、思はずほつと息をついたものだ。

薫さんの年に就いて、誠に迂濶な話ではあるが、僕はこれまで判然考へたことはなかつた。只漫然四十越した小母さん――姉といふよりも明かに小母さんといふ氣持でそれを考へてゐた。所が、姉の話によれば、姉と五つか六つ違ひ、自分から云へば六つか七つの違ひ、――左うなると、こゝに今まで全く考へられなかつた事が考へられて來た。全く望み得ないやうに思つてゐた事が滿更望めない事ではないと云ふ氣が僕にはして來た。僕はどうしたらいゝか。手近い所で矢張り姉に相談すべきだらう。姉が又例の意地惡い調子で僕を頭から馬鹿にするに違ひない。或はてんで取合つてくれないかも知れない。が、又こんなにも考へた。根が善良な性質だけに此方の心を汲んで、案外本氣にその爲め盡くしてくれるかも知れぬ。何はしかれ、自分は機を見て姉にこれを打明けて置いてもいゝ。左う考へた。

が、かう考へながら、矢張り僕は愚圖々々してゐた。自然な云ふべき機會も捕へられなかつたし、我儘者の姉から頭ごなしにやられるのも業腹な氣がしてゐた。その内、或る日突然、それは全く突然、僕は薫さんの訪問を受け、我ながら可笑しい程に甚く亢奮して了つた。薫さんは實は祖母を訪ねて來たのだが、取次が留守だといふと僕の名を云ひ、會ひたいと云つた。

「お邪魔ぢやないこと？」薫さんは例の落ちついた樣子で親し氣に云つた。

「いゝえ、どうぞ」僕は左う云つて薫さんを座敷へ通した。

薫さんはいつにない寛いだ樣子で話して呉れた。僕の事も色々訊く、――と云つて別に立入つた事ではなく、何が好きかとか、何をどう思ふかとか、そんな事だが、釣込まれて僕も段々氣樂な氣分になつて行つた。どの位話したらう。

「お祖母樣は却々お歸りになりさうもありませんね」

「さあ、もう歸るかと思ひますけど……」

薫さんは祖母に用事でもあるらしく、歸りを待つた。僕は少しでも長く薫さんに居て貰ひたかつた。

薫さんは一時間程ゐて歸つて行つた。僕は其日でずつと薫さんに近づく事が出來た。薫さんの方からもずつと近づいて呉れた。その好意が、僕には通り一遍の好意とは思はれなかつた。全體これはどう云ふ事だらう？ 自信の乏しい僕は直ぐ左う疑ふ氣にもなる。自分は何處までそれに附け上つて考へていゝのだらう。僕は僕の好意を何の程度まで表明する事に成功したらう。それを薫さんはどう解して呉れたらう。

僕は餘りに自分が臆病であり、さういふ事に自信のないのを齒がゆく思つた。自分は薫さんより年下ではある、が、兎に角俺は男でないか、男がかういふ事に何時までも受身でゐるといふ法はない。俺は一度此方から薫さんを訪ねて行かう。

それから三四日しての事、姉は前に電話で僕達が家にゐるかどうかを確めてから出掛けて來た。姉は上がるなり、人の惡い微笑を浮べながら、

「今日は榮さん、お前さんの事で、少し御相談があつて、來たのよ」と云つた。僕はそれだけで、或る豫感からどきりとした。

中津は此處まで、話した所で、改めて私の顏を見ていつた。

「君、この姉の云ふ相談といふのがどういふ事だつたか分るかね？　其時の僕の豫感は間違つて居たが、或は君にはもう大體見當がついてるかも知れない。薫さんの娘の雪子さんを僕に貰ふ氣はないかといふのだ。薫さんが自分でそれを姉の所に頼みに來たのだ」

「左う……」

「これが僕に何を意味するか――萬事休矣。今更母親の方と結婚したいとは云ひ出せないぢやあないか。僕は姉の此一言で見事崖から突き落された。岸本が姙娠を聴いて突落されたさうに一ト思に突落された。しかも前は胎兒、今度は同じ人が雪子さんとなつて僕を突落した。先づ因緣とでも云ひたい所だ」

「直ぐ斷つたのか」

「勿論斷つた」

「それから君はどうしたかね？」

「何をする事があるだらう？　僕の薫さんに對する心持はそのまゝ永久に葬り去られたのだ」

「陽の目を見ずに……」

「薫さんの訪問で陽がさしたと思つたのは勘違ひだつた」

「君はそれを何故書かないのだ。君の今の話だけでも話になつてゐるぢやあないか」

「實は僕は此話から二つの主題を見出してゐる。それはその内短篇に書くつもりだが、今僕がお話したやうな事を其儘書けない氣持は分るだらう？」

「分らないね」

「若しその儘書くとすれば、とりもなほさず、それは薫さんに宛てた僕の戀文になつて了ふぢやないか。僕は今更薫さんに、左う云ふ戀文を書かうとは思はないよ」

私は不圖、先刻擦れちがつた時の、女の人の、窶れ面を憶ひ出した。

（大正十三年十二月）

黒犬

朝から冷たい時雨が時々來るいやな日だつた。私はしめつけられるやうな頭痛で甚く元氣がなかつた。手足は冷え、頭はかりかり熱く、纏まつた氣持で何をするのもいやだつた。一時から千駄木の家で仲間の句會がある、それへ出席の約束をしたが、今更おもひてならなかつた。坂本の問屋の格子を纏まれて居る事も、なければ勿論缺席するのだが、そんな事に束縛され、一寸躊躇して、漸く思ひ切つて自家を出た。未だ電車のない頃で、この宿から菓子屋に寄り、それから千駄木までは小一里の道だつた。私は大儀な身體を持てあまし辻俥に乘つて行つた。

會では「短日」といふ月並な題が出てゐたが、時間もなし、頭も惡し、私には句らしい句は出來なかつた。第二回が夜ある筈だつたが、殘る氣がせず、浦月を連れ出し、其處を出た。霜解けの細い路を私達は右へ左へ、高等中學の前へ出て、其處の蕎麥屋へ入つた。浦月はいける口だが、私はさつぱり駄目だつた。然し温いもので腹が出來ると幾らか元氣が出た。

「これから若竹へ行つて見ないか」

「ふーむ、餘り氣が進まないね。それより下宿へ來て、久しぶりで……？」浦月は一方の掌から石を挾んで打つやうな手つきを見せた。

「さうだなあ……」私も對手のいつもながらの執拗い性質に早やたじろぐ氣持で逃つた。「又夜明しになると困るからね。親がかりが碁なんかで家を空けるのは全く信用の浪費だからねー」

「それ程の信用でもあるまい」浦月は笑つた。

十時には打ちかけでも乾度きり上げる約束で寄る。が、碁は何番打つても私に勝身はなかつた。打つ手・打つ手が受け身になつて、我ながら腹が立つ。いゝ加減でやめ、あとは寢ころんで、話にした。浦月は近頃大學校で習つてゐる心理學の睡中遊行の話をした。色々な例を話したが、氣の衰へてゐる時にかういふ病的な話は餘りよくなかつた。――が、面白かつた。

十二時頃漸く其處を出た。浦月も共々出た。「三島樣まで送るかね」私は笑談を云つた。

浦月は三丁目の角から引返して行つた。

人通りがなく、寒い木枯しが吹いて、道は霜解けのまゝ凍りついて居た。電線が唸り、高い所で星がきら〳〵光つてゐた。捨てた卷煙草が火花を散らしながら往來を轉げて行つた。

湯島、仲町、それから三枚橋へ出ると、流石に未だ人通りがあつた。雁鍋の大戸のくゞりを出て來た一人の醉漢が、いきなり道端の電信柱につかまつて小間物店を開いてゐた。殊更景氣のいゝ掛け聲をして追ひ拔いて行く俥がある。私は毛絲の襟卷を鼻の上まであげ、懷手のまま急いだ。

三島神社から先は又淋しく、根岸のやつちや場へ行く小田原提灯を下げた荷車に會つただけだ。

此通りから自家へ折れる角に交番がある。それから五六軒目の所に以前駄菓子屋だつた軒の低い小さな二階家がある。私はその前を通る時不圖、「あの婆さんを殺した男も結局分らず了ひかな」と思つた。

四つか五つの時私が此處へ引越して來た、その前からあつた駄菓子屋だつた。同じ年頃の子

供が大勢集まつて文字焼をやつてゐるのを羨ましく思つたものだ。かみさんの廻す張子の的に矢を吹きつけたり、菓子何個と書いた辻占のやうな紙を文久一つで臺紙から捲らして貰れる、そんな事が甚く羨ましかつた。年頃になつて茶屋待合の絃歌の響を聴きながら、其處にどんな歡樂境があるのだらうと想像した、そんな心持で私は此駄菓子屋に出入する子供達の身の上を羨んだものである。一度内證で女中から金菓糖の蔦口を買つて貰ひ、大變値打のあるものに思つた事を覺えてゐる。

が、殺された婆さんといふのは其時の駄菓子屋ではない。前の駄菓子屋はその店を居抜きにその婆さんに讓り、自分達は金を持つて茨木の在所へ歸つて行つた、あとに一疋の黒い小犬を對手に婆さんが同じ商賣を續けてゐた、それが殺された。

愛嬌のない、稲荷ずしのやうな感じの婆さんだつた。熊本の後家だとか、妾だとか、吉原の花魁上りだとか、近所では勝手な事を云つてゐた。小金を持つてゐて、死ぬまでは遊んでゐられる身分を金に對する執着から殊更貧乏たらしい暮しで人の眼を晦ましてゐるのだ、だから商賣はほんのつけたりなのだ、こんな事をいふ者もあつた。實際商賣は此婆さんになつて眼に見えて少くなつた。子供達は遠い表通りの駄菓子屋まで出張るやうになつた。

兎に角えたいの知れぬ妙な婆さんだつた。ぶくぶくした繼だらけの半纏を着て陽なたぼつこをしてゐる、前を通るときまつて顔を上げて此方を見る。その眼が私には甚く嫌だつた。冷たいといふか、無關心といふか、餘りに無表情過ぎて、此方では近所づくでよく知つてるだけに、その眼が却つて變な壓迫力になつて迫つて來る。氣の弱い私は一時自家からの出入りに可笑しい程それを氣にしたものだつた。

或る晩おそく、私はその前で、婆さんの魘されてゐる聲を聽いた。それは慥かに魘されてゐる氣持の惡い聲だつたが、もつと不氣味だつたのは例の黒犬が吠えも唸りもせず、同じ部屋の中を亢奮しながら跳び廻つてゐる氣配のしてゐる事だつた。何の事か分らぬだけに私は慄然とした。

が、翌日通ると、婆さんはいつものやうに今戸燒の火鉢に覆かぶさるやうな恰好をして居睡してゐた。

それから、これは私だけの事で、婆さん自身は關係ない事ではあるが、或る時、私は寝つきに夢現の境で、非常に氣味の惡い婆さんの顔を見た。以來覺めても不圖それが浮んで來ると、私はその度輕い戰慄を覺えるのが癖になつて了つた。その顔といふのは眉毛だけあつて、眼の邊から下が煮豆で一杯つまつて居る顔だつた。

こんな風に私は自分と直接何の關りもない婆さんながら、その存在に變に拘泥してゐた。

それが二年程前の或る朝、婆さんは自身の寢床の上で何者かに絞め殺されてゐたのだ。犬は生きたまま、襤褸布に包まれ行李詰にされて居た。何者の仕業か分らなかつた。物取か意趣かさへ分らなかつた。箪笥の小抽斗の裏に小判が三十兩隠してあつたといふ、それは手つかずに殘され、その他、何を持つて行つたといふ形跡もなく、若し物取でないとすれば、どういふ人間がどういふ意趣を、此婆さんに持つか、左ういふ事が誰にも全く見當がつかなかつた。此兇行が軒ならびにして、五六軒の所にあつた事を少しも知らずにゐたと云ふ位で、當時勤務の巡査は始末書を取られた。

そこは其後暫く空店になつてゐたが、家主が住ひに直すと間もなく、勤人らしい若い夫婦が引移つて來た。それから今に一年位、犯人が捕

へられたといふ事を私は遂に聽かなかつた。
　これは左ういふ家だつた。そして私は今その前を通りながら不圖その事を想ふと、全體どういふ人間が、どういふ動機でさういふ事をしたのだらうと考へた。物取でなし、意趣でなし、猶その他にこの婆さんを殺すべき動機があるだらうか、左ういふ事があり得るだらうか？　こんな事を考へてゐる私の腹の底には「勿論さういふ動機はあり得るさ」といつてゐる者がある。そしてこんな事をあんまり考へると自繩自縛になるぞ、といふ豫感も一寸した。「冗談ぢやない。自分はそんな事をした覺えはない」かう云つて居るものもあつた。
　蒲月の話した睡中遊行者のやうな人間の仕業とすればそれはあり得ない事ではないと思つた。前後に何の因果關係もなしに突然左う云ふ事が行はれる、しかも行つた本人が少しもそれを知らずにゐる、かういふ場合、誰がその眞相を云ひ得るものがあらう。そして此世に起つた左ういふ出來事が誰にも其眞相を知られずに永久に葬り去られる。かう思ふと、事の善惡を問はず、何んとなく淋しい氣持に私は誘はれた。
　黑犬は往來の眞中に立つてゐた。犬は私が近寄つても避けようともせず、凝然と其處で私を見上げてゐた。そしてわしだけは殺した人間を知つてゐる」と左う云つた。
「馬鹿いへ」
「お前さんは自分でそれを知らずにゐるのだ。お前さんは二階から忍び込んで來た」
「ふむ」それは覺えがある。私はそれから狭い段梯子を靜かに降りて來た。婆さんは梯子の下に寢てゐた。私はいきなりその咽を絞め上げた。此手で絞めた。婆さんは他愛なく死んだ。
私は今その時の自身の兇惡な顔つきや樣子や心持をまざ／＼と憶ひ出す事が出來る。然しそれからどうしたらう？
「お前さんは決してそんな兇惡な樣子で婆さんを殺したのではない」
「左うか。ふむ、左うだ。私は睡中遊行者だ。成程私はそんな兇惡な樣子で殺しはしなかつた」
「お前さんはわしを襤褸と一緒に行李詰めにすると、落ちついて又二階から戸外へ出て行つた」
「その通りだ。私は落ちついて戸外へ出て來た」
　そして私は今歩いてゐる此路も恰も遠い所から歸つて來た人のやうな足取りで歩いてゐた。其時も木枯がこんな風に頭の上で唸つてゐた。丁度遠い所で汽笛が長く尾をひいて鳴つた。こんな寒い晩だつた。左うだ。それから此瓦斯燈が其時もかう私を照らしてゐた。此方の瓦斯燈も同じやうに私を照らした。私の黒い影が私の足元から右へも左へもかう映つてゐた。兩方の影は板塀の面を摺つて私と一緒に歩いた。影は段々と先へ延びて行く。あゝ、その時も今も少しも變りはない。延びるに從つて兩方の影は段々に狭められて行つた。あの二つの影は私を挾み打ちにしようとしてゐるのだ。……
　二つの影が路の上で一つになつた時私は一寸息をひいた。が、其處には別に何事も起らなかつた。私は漸く、その馬鹿々々しい夢から覺めた。
　自家のものはもう皆眠つてゐた。私は戸締りをして自分の部屋に來た。薄暗い行燈の側に寢間着をかけた炬燵が置いてある。私は燈心をかき立て部屋を明るくした。私はおもにのしたやうなぼんやりした頭で暫く炬燵にあたつてゐた。何んといふ馬鹿氣た想像をしたものだらう。

それから私は「唖の旅行」といふ小説を讀み、幾らか氣分の轉換が出來た所で漸く床に就いた。

幾日かして浦月が訪ねて來た時、此話をすると、それは心理學でいふ恐迫觀念だらうといつてゐた。今は普通になつてゐる言葉だが私は此時初めてかういふ言葉を聽いた。

今から三十何年前の話である。

（大正十三年十二月）

佐々木の場合

（亡き夏目先生に捧ぐ）

君は覺えて居るかしら、僕が山田の家に書生をして居た事は。君が國の中學に居る頃だ。まあそれはどうでもいゝ。僕が山田の玄關番をしながら士官學校の入學準備をしてゐる時だ。……僕はお孃さんの守つ兒と關係したんだ。僕より三つ位下だつた。多分十六だつたと思ふ。其時は餘り大きな方ではなかつたが、それでも身體のいゝ、顏は普通だつたが何處か男を惹きつける所のある娘だつた。僕も初めての經驗だし、割りに上ぼせて居たが、何しろ對手お氣の小さい奴で他人に對し餘りピク／＼するので僕はよく腹を立てた。夜僕はよく漬物臭い物置きで待ちぼうけを食つたものだ。薄ぎたない逢引だが守つ兒と玄關番の戀だから仕方がない。これと云ふ長所もない奴だが、無暗と從順なんだ。これが長所と云へば長所だが、同時に如何にも勇氣のないといふ缺點になつて、それでは隨分ガミ／＼怒つてやつた。

二タ月位無事に經つた。女中で少し位感づいた奴があつたかも知れないが、まあ何事もなく經つた。歲暮近かつた。其頃屋敷では主人のお母さんの隱居所を建てるので毎日大工や何か七八人入つて居た。而して仕事が濟むとかんな屑や木れ端でたき火をしていつぷく／＼やるのが毎夕の例になつてゐた。左官の泥練りをやつてゐる滑稽な爺がゐて、これがよく話の中心になつて、若い時分の吉原とか根津の話をして皆を喜ばして居た。そんな話に興味を持つ事は如何にも氣がとがめたが、未だ知らない左ういふ世界の事は中々僕の好奇心を惹く。時々何氣なく僕も其仲間に入つて火にあたつてゐた。而して皆が歸る時水を掛けて行くのを時には僕が引きうけて後まであたつてから消す事もあつた。

或る夕方だつた。僕も一緒にあたつてゐる時富が僕を呼びに來た。主人の使ひで直ぐ築地まで行つて呉れといふのだ。しやがんでゐた僕は直ぐ起つて來た。富もついて來た。―左う直ぐ逃げて行くもんぢやないよ」と泥練りの爺が呼びかけた。「お前に惚れてるのが泣くよ」皆がドッと笑つた。富は僕を追拔いて耳まで赤くして先へ駈けて行つた。僕は自分も一緒に侮辱された樣な氣がした。而して何んだか富に腹が立つた。僕は其晩富に怒つたが、自分でも何を怒つてゐるのかよく解らない位だから富は何んで怒られるのか解らずに妙な顏をしてゐた。それでも怒られたゝで默つてゐた。

守りの名は富と云ふのだ。こんな事があつてからは決して皆のゐる間は來なくなつたが、歸つて了ふと時々お孃さんを連れてあたりに來た。お孃さんは五つ位だつたかしら、ひどいすが眼で顏だちも瘦せて妙に鋭く、性質もいやにひねくれて居た。かなり感じの惡い兒だつた。僕は一體子供好きでない方でもあつたが殊に此お孃さんは大嫌ひだつた。嫌ひ以上妙に恐れてゐた。お孃さんも僕を嫌つてゐた。全く御愛想らしい事も云はなかつたし、どうかして本でも見てゐる時部屋へ來ると可恐い顏をしてにらむ事も實はあつた。所で妙な事は此お孃さんがこんな子供の癖に僕と富との關係を知つて居るやうな氣がしてならなかつた事だ。此方の氣のせゐかと思ふ事もあつたが左うでな

い場合がよくあつた。兎も角僕と富とが會ふ事は非常に厭がつて居た。富は又こんな厭な兒だつたが、他からは考へられない程に愛してゐるのだ。お孃さんも隨分駄々をこねていぢめもしたが又心から富になついてもゐたのだ。此關係は全く不思議に見えた。お孃さんが餘り云ふ事を諾かないと云つて富が泣いて云ふ愚痴を僕はよく聽いた。迚も自分には勤まらないからお暇を貰ふ、こんな相談も二三度受けた。そんな場合大概賛成してやるのだが、少したつと富は全く忘れたやうな顏をしてゐるのが常だつた。僕にとつて富とお孃さんとを一緒に眺める事は氣分の上で如何にも不調和でかたはなかつた。又お孃さんは何んの事かよく解らない迄も僕と富との關係に或る嫉妬を抱いてゐたし、僕にも同じ物が働いて、見た感じ以上にお孃さんは厭に思つてゐたのが本統だ。僕は僕達の關係にお孃さんと云ふものが呪のやうにつきまとつて來さうな氣がした事がよくあつた。お孃さんは子供ながら意識してよく邪魔をした。然しそれは兎も角として、お孃さんに全く意志がなく、偶然邪魔する事になる場合が實際度々あつたのだ、これが何んだか氣味の惡い氣持をさした。

僕達が逢引に一番いゝ時は主人の家族が入つた後、風呂の湯が少くなるので又火をたく其時だ。此掛りは大概富が引き受けてゐた。其頃になれば大概お孃さんは眠つて了ふからでもあつた。僕達はよく其時を利用した。所が妙にさう云ふ時眠つた筈のお孃さんが眼を覺して泣き出すのだ。「富。富」奧さんの呼ぶ聲がする。―お富さん―から他の女中が一緒になつて呼ぶ。僕はこれを聽くといつも厭な氣持になつた。富はそれ程に思はないやうだつたが、僕には何かが故意にそれをするとしか思はれなかつた。富は毎時オド〳〵しながら未練氣もなく僕を殘して行つて了ふ。僕は富にも腹が立つた。

實際富の弱蟲には弱つた。其上二人のして居る事を全然罪惡と思ひ込んで居るには閉口した。僕は二人の關係が只の所謂いたづらな關係ではないのだ、僕が少尉か中尉になれば必ず正式に結婚するのだからと何遍いつて聽かしたか知れない。富もそれは非常に喜んでゐたが、矢張り惡い事をして居るといふ氣はどうしても拔けなかつた。兎も角古臭い型にはまつた女なのだ。只の下らない女なのだ。然しそれで僕には少しも惡くはなかつたのだ。何かしらん愛さずには居られないものがあつた。僕は殆ど、かべつか怒つては居たが、憎んだ事は只の一度もなかつた。富も怒られながら少しも不平を持たうとはしなかつた。只お孃さんに對し僕がいゝ感じを持つてゐない事だけは、云ひはしなかつたが、苦の種にしたやうだつた。それにしろ富は一體に呑氣な氣分でゐた。それに較べると僕の心は絶えず騷いでゐた。それは主に嫉妬だが、今思へばどれも下らない嫉妬だつたさうだ。主人に對してもそんな氣を持つたし、もう五十位になる抱車夫がゐて、それにもさういふ不快を感じた事があつた。一々數へ立てるのは下らないからよすが、何もない關係ならば總て見逃がしてゐる事がらが一々感じられるからなのだ。實際淺いながらそれは在る事なのだから仕方がないには仕方がないのだ。それから主人方の富に對する使ひ方に僕はかなり神經質になつた。そんな事は他の奴にさせればいゝのにと思つて不愉快を感じる事がよくあつた。僕は自分に對する使ひ方には割りに寛大であられたが富の事はさうは行かなかつた。然し他の女中の事だと平氣でゐられる點で其氣持も身勝手なものとは自分でも認めて居た。

歳暮も押しつまつた或る夕方の事だつた。大工共の例のたき火の集會が濟んで、僕一人受

験問答の本を見ながら其處に殘つてゐる時だつた。富がお孃さんを連れてやつて來た。僕は何か少し癪に觸つてゐる事があつて、いきなり、

「弱蟲」と一寸からかふとも怒るともつかぬ調子で云つた。富は又怒られるのかと思つたらしく少し不安な顏をしかけたが、なるべく笑談にして了はうとするやうに、

「弱蟲さん」と媚びるやうな眼付をして云ひ返した。

「馬鹿」

「お利口」

富の身體に倚りかゝつて、默つて上眼使ひをして二人の顏を見較べてゐたお孃さんが不意に、

「佐々木馬鹿。佐々木馬鹿」と腹からの惡意を示して罵るやうに云ひ出した。

「お孃樣。そんな事おつしやつてはいけません」富がお孃さんをたしなめた。僕は只苦い顏をしてゐた。

お客で閉め殘して置いた座敷の雨戸を閉めに行かなければならないと思つたが其前に富に強い接吻をしてやりたいといふ慾望が僕には強く起つてゐた。二人の關係では主なものは接吻だと云へた。二人にはさうユックリ話してゐる時間はなかつた。僅な時間に現す愛情は實際接吻よりなかつた。しかし僕の接吻は甚だ亂暴だつた。立つてゐて、被ひかぶさるやうにしてグイと抱締めてやる。小さい富はよくウッと唸つた。

「一寸これを讀んで見ないか」から云つて僕は落ちてゐた釘を拾つた。

「何？……お孃樣一寸」富は倚り掛つてゐたお孃さんをチャンと立たして寄つて來た。

「いゝかい」僕は地面に「コオアル」と書いた。

富はそれを見たまゝ首肯いた。少し笑つてゐた。

「それから」と僕は又「スグコイ」と書いた。所が富は笑つただけ居て首肯かなかつた。僕は「バカ」と書いた。而してにらんでやつた。富は當惑したやうな顏をして眼でお孃さんが居るから駄目だと云ふ。僕はかういふ時中々思ひ返せない惡い癖がある。僕は怒つた顏をして今書いた文句を消すと默つて其處を起つて行つた。實際怒つても居たが左うすれば氣の弱い富は來ずに居られない事を知つて居たのだ。

例のカビ臭い物置へ行つて待つて居た。すると案の定直ぐ富は心配顏をしてやつて來た。而して歎願するやうに小聲で、

「キッスだけよ」と云つた。

「當り前だ」

義務的なのが癪に觸つたから、富が背延びをし、あごを突出し接吻しようとするのを故意と屆かないやうに此方も上を向いて置いて力を入れてグイと抱締めてやつた。富は苦しがつた。

女中の悲鳴が聽えた。二人は驚いて物置を飛出した。お孃さんがたき火——既にオキにはなつて居たが其處に仰向樣に倒れて居る。直ぐ抱き起したが、もう氣を失つてゐる。毛がこげるのか肉が燒けるのか變な臭ひがした。傍に大工が假りに作つた坐りの惡い椅子が倒れて居た。それに乘つて仰向けに倒れたらしい。而して其時後頭を打つて腦震盪を起したに違ひない。左うでなければいくら子供でもそれ程にならない中に火から這出す位はしなければならない。何しろチャンチャン兒の肩が燃拔けてゐた。綿のブス／＼燃えるのは中々消えない。もみ消さうとしたがいけないので直ぐ脱がしたが其時はもう肩の後をかなり甚く燒かれてゐた。頭だけは幸に火の端へ行つてゐたから夫程ではなかつたが、それでも襟首の上が燒爛れて、其處は後も毛が生えなかつたさうだ。暫く人事不省だつたが氣がついてからも、二三日はわからなか

つた。實際よく死なゝかつた。一家の騷ぎは想像して貰ひたい。

何しろ弱つた。僕の心は甚いぐらつき方をした。普段からお孃さんを嫌ひだつただけ一層妙な苦み方をした。僕はお孃さんに對し非常に氣の毒な事をしたと思つた。然し左う思ふ事によつても僕の心に愛情は湧上つて來なかつた。此意識は非常に氣持が惡かつた。僕はかうしては居られない氣がした。第一總ては富の落度になつてゐた。富の弱り方と來てはそれは又甚かつた。半氣違のやうになつて了つた。飯も殆ど食はなくなつた。氣の小さい奴の事で自殺でもしはしまいかといふ不安に僕は襲はれた。然し話をする機會がなくなつた。それが有つたにしろ眼中にないやうに富はもう僕によそ〱しくなつて了つて居た。幸に自殺はしなくても氣違になりはしまいかと心配した。僕は何も彼も主人の前に懺悔したかつた。然し二重に富を苦しめる事を思ふとそれも出來なかつた。

醫者は肩の火傷は迚も此儘では肉の上がる見込はないと云つたさうだ。唯一の療法は他人の肉を切り取つて來てそれで其處をおぎなふのだと云つたさうだ。聽いた時僕はそれを僕の身體から取つて呉れと申出ようと思つた。左うせねばならぬと思つた。然し正直にはそれは強迫されて思ふので進んで出たい氣を起して居るのではなかつた。話によると足べたの肉を取るのださうだ。而してそれを取られた跡は多分窪みになつて殘るだらうと云ふ事だつた。かうなると恥かしいが僕の心では急にイゴイスティックな方面が眼を覺ました。それが事件の中に沒頭して居た自分を廣い野原に連れ出すやうな事をした。僕は此事件を大きいものゝ一部分として見るやうな氣持になつた。これが正しい事かどうか云へない僕は今自分が士官學校の入學準備をして居る事を考へた。若し肉に窪みの出來る事が體格試驗に影響しないものならそれは恐しい事でも何んでもなかつた。然し此事件の爲めに生涯の目的を變へる事は恐しかつた。今はそれは左うではない。然し二十歳前の目的に對する執着からは僕は迚も超越出來なかつた。

而して富が其申出をした。どうか許可して呉れと願ひ出た。僕はホッと息をついた。僕は自分をずるい〱と思つた。然し富の爲めにもそれはいゝと思つた。そんな事でもしなければ弱い、而して正直な富の心は到底暫くの安靜も得られなかつたに違ひない。主人の方では最初直ぐにも富を追出すつもりらしかつたが、石川縣の親元へ無斷でも出せないと云ふやうな事で、それは其知らせを出して時を待つて居る時だつた。然し富の實際苦みぬいて居る樣子は誰の眼にも解つたから主人夫婦も最初一時に來た怒りを通り越すと互に口には出さなかつたが餘程心は解けて居た。それにしろ其儘使ふ氣はなかつたのは勿論だが、其内人肉の必要が起つた時奧さんはそれは當然富から取つていゝと云ふやうな事を云つたさうだ。然し主人はそんな事は出來ないと反對したさうだ。何んでも其事は醫者に一任したらしい。所へ富が願ひ出た。それは心から左う云つて出た事が解つた。それで主人の心はすつかり解けた。

僕が不意に國に歸つて來たのを君は覺えて居るかしら。隱して居たが實は逃げて來たのだ。僕は迚も何食はぬ顏をして其處に居る事は出來なかつた。富はもうよく〱懲りた。其後は一切僕と口もきかなくなつた。富の考へでは僕との關係が此不幸を生んだ總てなのだ。前からそれに良心を痛めて居た富がそれを堅く堅く左う思つて了つたと云ふ事はどうにもならなかつた。僕は責任のがれをしようと云ふ氣は實はなかつた。お孃さんも氣の毒に思つた。然しそ

れよりも富に對する責任は果したい氣が强かつた。僕は何時か屹度それを果してやらうと思つた。それを富に云つて僕は其處を出たかつた。然したうとう其機會はなかつた。腹の底から懲りて了つた富は左う云ふ機會をどうしても僕に與へないやうにして居た。富が其手術を受ける爲めに入院した多分三日目かに僕は山田の家を逃げ出して了つた。それはまづい結果を殘したに違ひない。然し平氣で其處に居るのはもう迚もかなはなかつたのだ。

それからの事は細々と云ふ程の事もない。僕に就ては君も知つてゐる通りだ。―佐々木は大尉の時大使館付きになつて露西亞に行つて多分七八年ゐて、つい近頃歸つて來たのである。―然し其間僕は富の事を忘れはしなかつた。それ程强く考へないまでも忘れはしなかつた。度々結婚も勸められたが皆斷つて居たのも其爲めで、日本にゐる間、一度も會ふ機會はなかつたが、富の事はそれとなく知つて居た。富は誰にでも愛される性ではあつたが肉の事から主人夫婦も心から富を愛するやうになつて其儘お孃さんのお附きとして山田の家に居ついて了つたのだ。、

其處で話は急に近い事になるが、一週間前だ。偶然銀座通りでお孃さんを連れた富を見掛けたのだ。日本にゐる間一度も會ふ事の出來なかつた奴が七年目に外國から歸つて來ると直ぐバッタリ出會ふのも一寸不思議な氣がした。樣子も變つて居たし向うは勿論此方を忘れて居た。然し僕はお孃さんで氣がついた。二十か二十一位になつて居た。幼顏もだが、襟首から頰へかけた火傷のひつつりが僕に憶ひ出させると同時に富も直ぐ解つた。全く變つて了つた。小さい女だつたが今は人並以上大きい女になつて居た。君は常陸山の死んだ細君を知つて居るかね。性質から來る或る感じは異ふにしろ、一寸あゝ云ふ風だ。三十二三だ。子供を生まない爲めか何處か若々しい所があつて、それが安心の狀態に居る人らしい落ちつきが見える。僕は如何しようかと思つた。僕の富から受けた印象は非常によかつた。それまでは責任は果たさうと云ふ氣が寧ろ先に立つて忘れずに居たのだが、其時今更に新しい感情の湧起るのを僕は感じた。廻りくどい事をするより兎も角直接會ひたいと云ふ氣が强くした。二人は女物を專門に賣る唐物店へ入つて了つた。僕は少し離れた所に立つて出て來るのを待つてゐたが二人は中々出て來ない。富一人だけだつたら僕は多分何時までも其處に待つて居られたらう。然しお孃さんが一緒なのが僕の心を暗くした。僕は妙にお孃さんが恐しかつた。いつそ電話を掛けて電話で話をしようと思つた。

其晩山田へ電話を掛けて見た。富が電話口に出て來た。それがまるで別人のやうな氣が僕にはした。晝間案外若々しく思つた富を今度は大變年を取つた女のやうに感じた。僕は取次に明かに名を云はなかつたから、相手の知れない不安からも左うなつたかも知れない。いやに切口上で物を云つて居る。

「十六年前に御別れした佐々木です」から云つた。餘程驚いたらしい。富にとつて僕の名は殆ど凶事を意味して居たに違ひない。何んとも返事をしない。僕は是非一度會つて話したいと云つた。まだ默つて居る。僕も默つて了つた。兩方で默つて居る時間が一寸あつた。すると不意に、

「何處で御會ひ致すのですか」と云つた。凡そ艷のない調子だつた。

「何處でもかまひません。然し出來る事なら宿へ來て貰ふと都合がいゝんです。明日どうですか」一寸考へる風だつたが、

「參れましたら上がりませう」と云つた。

宿を敎へて時間をきめて電話をきつた。

餘りに不愛想なので僕は一寸ぼんやりする程興覺めがした。何んと云ふ事もなく僕は自分が今幸福な身の上だと云ふ氣がして居た。勿論世間並な意味でだが。而して富は女として不幸な境遇に居る者として考へて居た。而して僕は自分が富に交渉して行くのは幸福な者が不幸な者を救はうとしてゐるのだと云ふ風に考へて居た。何んとなくそんな氣持で居た。所が今の對話はそれと全く反對な感じを與へた。幸福に暮らして居る者に對し昔の關係を楯にそれを攪亂しようとする者のやうに自分が見えた。

翌日待つて居たが、たうとう待ちぼうけを食はされた。電話もかゝつて來なかつた。其晩又電話を掛けたがお孃さんと芝居見物に行つて留守だと云ふ事だつた。噓ではないらしかつた。

其翌日も何んの音沙汰もなかつた。これは直接では駄目だと思つて、もう電話も掛けなかつた。すると翌朝手紙が來た。

要は矢張り御會ひするのはよさうと決心したと書いてあつた。自分は今は尼のやうな氣持で居る。お孃樣も未だ御縁がなく淋しい御心で暮らゐる時に何事がなくても貴方と御會ひする樣な事は心にとがめる。若し手紙で濟ませられる用だつたら、どうか同封の封筒で手紙に書いて云つて貰ひたいと云ふやうな事だつた。自分で書いたらしい女名前の封筒が一枚入つて居た。一枚でないのが愉快な氣がした。而して手紙の追白にどうか電話は今後掛けて下さらないやうにと書いてあつた。相變らずの弱蟲だと思つた。

晝間は忙しかつたので晩になつて僕は長い手紙を書いた。二日程して其返事が來た。又僕から出した。

要するに富は僕との關係を心の底から悔んで居るのだ。それがお孃さんの生涯をだいなしにして了つたと思ひ込んで居るのだ。自分はもう如何な事があつても再び男との關係は作るまいと決心してゐる。而してそれは御隱居樣にも主人夫婦にもお孃樣にも誓つて居る事で、殊に奧樣とお孃樣だけにおなりになつた今、長い間非常によくして下さつて、もう生涯困らないやうにして頂いてから左う云ふ事を仕でかすのは迚も自分の心に許せない。同樣に世間からも許されない事と思ふ。貴方は私を大變に氣の毒がつて下さるけれども私は今少しも不幸ではない。只お孃樣にいゝ御縁のないだけが自分の不幸であると云ふのだ。而して實は貴方に逃出された時には悲しい氣がした。自分は貴方が日程にもない薄情男であると思つて怨みました。然し御別れしてからの事を御手紙で知つて今は大變ありがたく思つてゐる。それで私は滿足しました。私もどうせ今は普通の女のやうな身體ではないから、貰ひ手もないし又行く氣もないから一生お孃樣の御傍で働くつもりでゐます。どうか自分の事は忘れて早くいゝ奧樣を御貰ひになつて樂しい家庭を作つて頂く、それが反つて自分の慰めである、

こんな事を云つて居る。總てが非常に尤もなのだ。總てが餘りに紋切型に尤もなので僕には齒がゆくてならない。僕は今一ぱどうにかなると思つて居るのだ。然し手紙では若し自分の思つて居る事をどん／＼書けば向うを尚可恐がらすだけだと思ふのだ。だから左うも書けない。實は今どうしたらいゝかと思つてゐるのだ。實際齒がゆいではないか。一度出したら、もう封筒もないし、其儘にして居るが手紙ではもう駄目だと思ふのだ

僕はお孃さんに良縁があつてからなら如何なのだと書いてやつた。然しそれには返事をして來ない。第一お孃さんは結婚出來るかどうかわからない。髮で隱してはゐるが頭の後にか

なり甚い禿になつて居るとも云ふし、迚も駄目かも知れない。たうとう僕はお嫁さんに呪はれとほすかも知れない。どうかこんな身勝手な事を云ふのを悪く思はないでくれ玉へ。

佐々木は今其女の心をさへぎつて居るものは純粹な道義心と犠牲心とで、それをとり除く事が出来れば問題は解決すると思つて居るらしい。而して其道義心と犠牲心に餘りに價値を認めない點が、佐々木も可哀想だが、自分には少し同情出来なかつた。自分もそれらを左う高く價つけはしない。然し佐々木はそれを餘りに低く見てゐると思つた。而して假令消極的な動機からにしろ其女が信じた事を堅く握り締めて居る其強さに自分はいゝ感じを持つた。佐々木には今の自身の位置を誇る氣さへ多少ある。それは無理はない。然し佐々木の妻になる事が必ずしも其女の幸福を増す事になるとは自分は考へない。佐々木が或る幸福を與へるだらう事は佐々木自身が信じて居る如く確かかも知れない。然し同時に其女が今持つて居る或る幸福を捨てねばならぬ事も確かだ。しかも佐々木には女の今持つて居る幸福が如何なものかは本統に解つて居ないと云ふ氣がする。

自分は何んと云つていゝか解らなかつた。眼前に佐々木の苦しさうな様子を見ると佐々木も可哀想だ。實際佐々木はイゴイストではある。然し決して不愉快なイゴイストではない。自分のした事に責任を負はうとして普通なら三四人も子供のあつていゝ年まで獨身でゐて、前を忘れず心からの愛を注がうとしてゐる。それは惡い感じはしない。然し何しろ女がそれを承知しなければそれはそれまでと云ふより仕方がないと思つた。然し左うも云へなかつた。又左う云つた所で其女の從順な弱い性質を知りぬいて居る佐々木が左う思へないのは無理なかつた。しかも自分には感じられない強さの戀情が彼にはある。自分はそれで、何んと云つていゝか解らなかつた。

（大正六年四月）

好人物の夫婦

一

深い秋の静かな晩だつた。沼の上を雁が啼いて通る。細君は食臺の上の洋燈を端の方に引き寄せて其下で針仕事をして居る。良人は其傍に長々と仰向けに寝ころんでぼんやりと天井を眺めて居た。二人は永い間默つて居た。

「もう何時？」と細君が下を向いたまゝ云つた。

「十二時十五分前だ」

「お寝みに致しませうか」細君は矢張り下を向いた儘云つた。

「も少しして」と良人が答へた。

二人は又少時默つた。

細君は良人が餘りに静かなので漸く顔を擧げた。而して縫つた絲をこきながら、

「一體何をして居らつしやるの？　そんな大きな眼をして……」と云つた。

「考へて居るんだ」

「お考へ事なの？」

又二人は默つた。細君は仕事が或る切りまで來ると、絲を斷り、針を針差しに差して仕事を片付け始めた。

「オイ俺は旅行するよ」

「何いつて居らつしやるの？　考へ事だなんて今迄そんな事を考へて居らしたの」

「左うさ」

「幾日位行つて居らつしやるの？」

「半月と一ト月の間だ」

「そんなに永く？」

「うん。上方から九州、それから朝鮮の金剛山あたり迄行くかも知れない」

「そんなに永いのいやア」

「いやだつて仕方がない」

「旅行おしんなつてもいゝんだけど、……いやな事をおしんなつちやあいやよ」

「そりやあ請合はない」

「そんならいや。旅行だけたらいゝんですけど、自家で淋しい氣をしながらお待ちして居るのに貴方が何處かで今頃そんな　—から云ひかけて細君は急に「もう、いや／＼」と烈しく其言葉をはふり出して了つた。

「馬鹿」良人は意地惡な眼つきをして細君を見た。細君も少しうらめしさうな眼でそれを見返した。

「貴方がそんな事をしないとハッキリ云つて下されば少し位淋しくても此間から旅行はしたがつて居らしたんだから我慢してお留守して居るんですけど」

「乾度そんな事を仕ようと云ふんぢやないよ。仕ないかも知れない。そんなら多分しない。なるべく左うする。——然し必ずしも仕なくないかも知れない」

「そら御覧なさい。何云つてらつしやるの。いやな方ね」

良人は笑つた。

「仕ないとハッキリ仰有い」

「どうだか自分でもわからない」

「わからなければいけません」

「いけなくつても出掛ける」

細君はもうそれには應じなかつた。而して

「貴方が仕ないとハッキリ仰有つて下されば安心してお待ちして居るんだけど、男の方つて何故左うなの？」と云つた。

「男が皆左うぢやないさ」
「皆左うよ。左うにきまつてるわ。貴方でも左うなんですもの」
「そんな事はないさ。俺でも八年前までは左うぢやなかつたもの」
「ぢやあ、何故今は左うぢやなくおなりになれないの？」
「今か。今は前と異つて了つたんだ。今でもいいとは思つて居ないよ。然し前程非常に悪いと云ふ氣がしなくなつたんだ」
「非常に悪いわ」細君は或る興奮からさへぎるやうに云つた。「私にとつては非常に悪いわ」
　その調子には、良人の怠けた氣持を細君の其氣持へグイと引き寄せるだけの力がこもつて居た。
「うん。そりや左うだ」良人は其時腹からそれに賛成して了つた。
「そりや左うだつて、そんならハッキリそんな事仕ないつて云つて下さるの？」
「うゝ？　斷言するのか？　そりや一寸待つて呉れ」
「そんな事を仰有つちやあ、もう駄目」
「よし。もう旅行はやめた」
「まあ！」
「まあでも何んでも旅行はもうよす」
「そんなに仰有らなくていゝのよ。御旅行遊ばせよ。いゝえ、多分仕ないつて云つて下すつたんですもの。私が何か云つておやめさせしちやあ悪いわ、おいで遊ばせよ。上方なら大阪のお祖母さんの所へ行つて居らつしやればいゝわ。お祖母さんに貴方の監督をお賴みして置くわ」
「旅行はよすよ。お前のお祖母さんの所へ泊つて居てもつまらないし、第一行くとすると上方だけぢやないもの」
「惡かつたわ。折角思ひ立ちになつたんだからおいで遊ばせ。左うして頂戴」
「うるさい奴だな、もうやめると決めたんだ」
「……赤城にいらつしやらない？　赤城なら私本統に何んとも思ひませんわ。紅葉はもう過ぎたでせうか」
「うるさい。もうよせ」
「お怒りになつたの？」
「怒つたんぢやない」
　細君は良人は矢張り怒つて居るんだと思つた。而して何か云ふと尚怒らしさうなので默る事にした。然し良人は少しも怒つては居なかつた。其時は實は旅行も少し億劫な氣持になつて居た。
「それは左うと大阪のお祖母さんのお加減は此頃どうなんだ。お見舞を時々出すか」
「今朝も出しました。又例のですから左う心配はないと思ひますの」
「八十お幾つだ？」
「八十四」
　細君は針箱やたゝんだ仕立てかけなどを持つて隣室へ起つて行つた。而して今度は良人の寢間着を持つて入つて來た。良人は起き上つて裸になつた。細君は後ろから寢間着を着せかけながら、かう云つた。
「何んだか段々嫉妬が烈しくなるやうよ。京都でお仙が來た時貴方だけ殘して出掛けて行つた事なんか今考へると不思議なやうですわ」
「あれは安心して出掛けて行つたお前の方が餘程利口だつた。お前が出掛けて行つたら何話も何んにも無くなつて閉口した」
「ですけど、今は到底そんな事は出來ませんわ」
「俺がそんな不安心な人間に見えるかね」
「いゝえ、貴方が左うだと云ふんでもないのよ」
「そんなら向うが危いと云ふのか」
「それもありますわ」
「慾目だネ。俺は餘り女に好かれる方ぢやないよ」

「でも御旅行だと如何だか知れないんぢや有りませんか」
良人は一寸不快な顔をした。
「それとは又異ふ話をして居るんだ、馬鹿」
「何故？」
「もうよさう。其話はいゝやめだ」

二

翌朝大阪から良人宛の手紙が來た。朝寢坊な良人は未だ眠つて居た。名は書いてなくても自分宛にもなつて居ると思ふと勝手によく開封する細君は其手紙も直ぐ開封した。

それを書いたのは他へ縁付いて居る細君の一番上の姉で、祖母の病氣が今度はどうも面白くないと書いてあつた。祖母は貴方にお氣の毒だから妹は呼ばなくていゝと申しますが、會ひたい事の山々なのは他目にも明かで、昔氣質で左う云へない所が尚可哀想です、と書いてあつた。どうか都合出來たら二三日でいゝから妹を寄越して頂きたい。私共と異つて妹は赤坊の時から殆ど祖母の手だけで育つた兒ですから、それが會はずに若し眼をねむる事でもあると祖母も妹は勿論私共にも甚だ心殘りの事となります。こんな事も書いてあつた。

「又姉さんが餘計な事まで書いて……」から思ひながら、猶細君の眼からはポタ／＼と涙が手紙の上へ落ちて來た。

寢室の方で、
「オイ。オイ」と良人の呼ぶ聲がした。
細君は急いで湯殿へ行き、泣きはらした眼を一寸水で冷してから其手紙とそれから其日の新聞を持つて寢室へ入つて行つた。
「お祖母さんが少しお惡いらしいのよ」仰向きになつて夜着の上に兩手を出して居る良人に新聞と一緒にそれを手渡しながら云つた。
良人は細君の赤い眼を見た。それから其手紙を讀んだ。
「直ぐ行くといゝ」
「左う？ 行くなら早い方がいゝかも知れませんわネ」
「左うだよ。東京を今夜の急行で出掛けられるやうに早速支度をするといゝ」
「そんなら左うしませうか。早く行つて早く歸つて來る方がいゝわ。同じ事ですもの」
「早く歸る必要はないから、ゆつくり看護をして上げるといゝよ」
「そりや屹度お祖母さんの方で早く歸れ／＼つて仰有つてよ。顏を見ればいゝんだから早く歸つてお呉れつて、屹度左う仰有つてよ。私もいやだわ。そんなに永く自家を空けるのは」
「よくなられるやうなら、それでいゝが、萬一左うでなかつたら、なるべく永く居て上げなくちやいけない。お前とお祖母さんとは特別な關係なんだから」
「左う？ ありがたう」から云つて居る内に細君の眼からは又涙が流れて來た。
「お前は餘程氣持をしつかり持つてないと駄目だよ。看護して上げるうへにも自分の感情に負けないやうに氣を張つてないと駄目だよ」
「でも、なるべく早く歸りますわ。自家の事も心配ですもの」
良人は細君の云ふ意味がそんな事でないのを知りながら、つい口から出る儘に、
「俺も品行方正にして居るからネ」と笑談らしく云つた。
「そりやあ安心してますわ」と涙を拭きながら細君も笑顏をした。「けど、左う仰有つて下されば何嬉しいわ」
細君はそこ／＼に支度をして出發て行つた。
細君からは手紙が度々來た。祖母のは肺キシと云ふ病氣だつた。風邪から段々進んで來たものである。痰が肺へ溜まる爲に呼吸する場所が

狭くなる。而して其痰を出す爲にせく。せいてもせいても中々痰が出ないと呼吸が出來なくなつて非常な苦み方をする。見て居られない。病氣其ものはそれ程危險ではないが其苦みの爲に段々衰弱する。それが心配だと書いて來た。然し何しろ氣の勝つた人の事で氣で病氣に抵抗してゐるのが――殘酷な氣のする事もあるが――嬉しいと書いて來た。

細君は中々歸れなかつた。祖母の病氣はよくも惡くもならなかつた。それは實際氣で持つて居るらしかつた。

細君が行つて四週間程して良人も其處へ出掛けて行つた。然し其頃から祖母は幾らかづついい方へ向つた。氣丈は遂に病氣に勝つた。良人は十日程居て妻と一緒に歸つて來た。それは大晦日に間もない頃だつた。

祖母はそれからも二タ月餘り床を離れる事は出來なかつた。然し三月初めの或日夫婦は小包郵便で大阪からの床あげの祝物を受取つた。

三

それは春の春らしい長閑な日の午前だつた。良人は四五日前から巣についてゐる鷄に卵を抱かしてやらうと思つて、巣函の藁を取更へて居ると、不圖妙な吐氣の聲を聽いた。瀧だ。瀧が女中部屋の窓から顏を出して切りに何か吐かうとして居る。吐かうとするが何も出ないので只生唾を吐き捨てゝ居る。

彼はもみがらを入れた菓子折から丁寧に卵を一つ〳〵巣函へ移して居た。而してあゝ云ふ吐氣の聲は前にも一度聽いた事があると考へた。父の家に居た頃門番のかみさんがよくあゝいふ聲を出してゐたと思つた。彼は其時それを母に話すと、母は「赤ン坊が出來たので惡阻でそんな聲を出すんだらうよ」と云つた。母の云ふやうにそれは實際姙娠だつた。

彼はそれを憶ひ出して、瀧のも姙娠かなと思つた。――彼は翌日も其聲を聽いた。それから其翌日も聽いた。

四

瀧のが姙娠だとすると、これは先づ自分が疑はれる、と良人は考へた。何しろ過去が過去だし、それに獨身時代ではあつたにしろ、女中との左う云ふ事も一度ならずあつたし、又現在にしろ、それを細君に疑はれた場合、「飛んでもない」と驚いたり怒つたりするのは我ながら少し空々しい自分だと考へた。これは恥づべき事に違ひないと彼は思つた。

彼は結婚した時から左う云ふ事には自信がなかつた。彼は其を細君に云つた。一人で外國へ行つた場合とか、一ト月或は二タ月位の旅行をする場合とか、と云つた。其時は細君も或程度に認めるやうな返事をして居た。

それからも良人は其危險性の自分にある事を半分笑談にして云つた。又或時は既にそれを冒して居るやうにも云つた。而して後のを云ふ場合には知らず〳〵意地惡いイヤガラセを云ふ人の調子でそれを云つて居た。これはずるい事だ。其場合彼では打明ける事が主であつた。然し聽く者にはイヤガラセが主であると解れるやうに彼は云つて居た。聽く者にとつてイヤガラセを主として感ずればそれだけ云はれた事實は多少半信半疑の事がらになる。良人は故意で左うするのではなかつた。知らず〳〵にそんな調子になるのだ。尤も細君もそれを露骨に打明けられる事は恐れて居た。自身でもそれを云つて居た。而して最初或程度に認めるやうに云つて居た細君も何時となしに、それは認めないと云ふやうになつた。

瀧のが結果から、或は醫者の診察から、若し細君の留守中に起つた事と云ふ事になればそれ

は尚厄介な事だと良人は思つた。然し實際自分は疑はれても仕方がない。事實に左う云ふ事はなかつたにしろ、左う云ふ氣を全く起さなかつたとは云へないからと思つた。

彼は瀧を嫌ではなかつた。それは細君の留守中の事ではあつたが、例へば狹い廊下で偶然出會頭に瀧と衝突しかける事がある。而して兩方で一寸まごついて、危く身をかはし、漸くすり拔けて行き過ぎるやうな場合がある。左ういふ時彼は胸でドキ／＼と血の動くのを感ずる事があつた。それは不思議な惱しい快感であつた。それが彼の胸を通り拔けて行く時、彼は興奮に似た何ものかで自分の顏の赤くなるのを感じた。それは或るといゝ時に來た。彼にはそれを道義的に批判する餘裕はなかつた。それ程不意に來て不意に通り拔けて行く。が、これはまだよかつた。

然し左うでない場合、例へば夜座敷で本を見てゐるやうな場合、或は既に寢室に居るやうな場合、其處に家の習慣に從つて瀧が寢る前の「御機嫌よう」を云ひに來る。すると、彼は何時ものやうに只、うん」と答へるだけでは何か物足らない氣のする事がよくあつた。彼は現在廊下を歸りつゝある瀧を追つて行く或る氣持の自身にある事を感ずる事がよくあつた。彼はそれを餘りに明かに感ずる時何かしらん用を云ひつけない事はない。一寸書齋からペンを取つて來て異れ」とか或は「少し寒いから上へ毛布を掛けて異れ」とか云ふ。云ひながら、底意の爲めに自分ながらそれが不自然に聽えて困つた。彼は自分の底意を瀧に見拔かれてゐると思ふ事もよくあつた。然しこんなにも考へた。瀧は自分の底意を見拔いて居る。而してそれに氣味惡さを感じて居る。然し氣味惡がりながら尚其冒險に或る快感を感じて居る——彼は實際そんな氣がした。彼は自身と共通な氣持が瀧にも其場合起つてゐると思つた。而して全體瀧は未だ處女かしら？　それとも、——こんな考への頭をもたげる事もあつた。

細君が大阪へ出發てからは必要からも瀧はもつとの用を彼の爲めにしなければならなかつた。瀧はそれを忠實にした。彼の底意が見られたと彼が思つてからも瀧の忠實さは少しも變らなかつた。それは尚忠實になつたやうな氣が彼にはした。しかも其忠實さは淫奔女の親切ではないと彼は思つた。——けれども兎も角、それは淺い放蕩には違ひなかつた。

左う思つて、彼は前のといゝ時に彼の胸を通り拔けて行く惱しい快感の場合を考へた。然しそれを放蕩と云ふ氣はしなかつた。根本で二つは變りなかつた。——然し矢張りそれを同じに云ふ事は出來ないと思つた。

瀧は十八位だつた。色は少し黑い方だが可愛い顏だと彼は思つて居た。それよりも彼は瀧の聲音の色を愛した。それは女としては太いが、丸味のある柔かい、いゝ感じがした。

彼は然し瀧に戀するやうな氣持は持つて居なかつた。若し彼に細君がなかつたらそれは或はもつと進んだかも知れない。然し彼には家庭の調子を亂したくない氣が知らず／＼の間に働いて居た。而してそれを越える迄の誘惑を彼は瀧に感じなかつた。或は感じないやうに自身を不知掌理して居たのかも知れない。左ういふ事も或程度までは出來るものだと彼は思つてゐる。

五

良人はこれは矢張り自分から云ひ出さなければいけないと思つた。左う思へば此四五日細君は何だか元氣がなくなつてゐる。然し未だ兒を生んだ事のない細君が、惡阻を知つてゐるかしら？　左う良人は思つた。兎も角、元氣のない理由がそれなら早く云つてやらなければ可哀想

だと思つた。それに瀧の方も田舍によくある若し不自然な眞似でもする事があつては大變だと思つた。而して一體相手は誰かしらと考へた。それは一寸見當が付かなかつた。何しろ自分達が餘り不愉快を感じない人間であつて呉れゝばいゝがと思つた。彼は淡い嫉妬を感じてゐたが、それは自身を不愉快にする程度のものではなかつた。

良人は細君が大槪それを素直に受入れるだらうと思つた。然し若し素直に受け入れなかつたら困ると思つた。其場合自分には到底ムキになつて辯解する事は出來まいと思つた。辯解する場合其誤解を不當だと云ふ氣が此方になければ左うムキになれるものではない。しかも疑はれゝば誤解だが、自分の持つた氣持まで立入られゝばそれは必ずしも誤解とは云へないのだから、と思つた。

兎も角此儘にして置いては不可ない。彼は左う思つて、書齋を出て行つた。

細君は座敷の次の間に坐つて瀧が物干から取り込んで置いた襦袢だの、タオルだの、シーツだのを疊んで居た。細君は良人が行つても何故か顏を擧げなかつた。

「オイ」と良人は割りに氣輕に聲を掛けた。

「何？」と細君は艶のない聲で物憂さうな眼を擧げた

「そんな元氣のない顏をして如何したんだ」

「別に如何もしませんわ」

「如何もしなければいゝが……お前は瀧が時々吐くやうな變な聲を出して居るのを氣がついて居るか？」

「えゝ」左う云つた時細君の物憂さうな眼が一寸光つたやうに良人は思つた。

「どうしたんだ」

「お醫者さんに診て貰つたらいゝだらうつて云ふんですけど、中々出掛けませんわ」

「全體何んの病氣なんだ」

「解りませんわ」細君は一寸不愉快な顏をして眼を落として了つた。

「お前は知つてるネ」良人は追ひかけるやうに云つた。

細君は下を向いた儘返事をしなかつた。良人は續けた。

「知つてるなら僞い。然しそれは俺ぢやないよ」

細君は驚いたやうに顏を擧げた。良人は今度は明かに細君の眼の光つたのを見た。而して見てゐる内に細君の瞼は浪打つて來た。

「俺は左う云ふ事を仕兼ねない人間だが、今度の場合それは俺ぢやあない」

細君は立つてゐる良人の眼を凝つと見つめて居たが、更に其眼を中段の的もない遠い所へやつて、默つて居る

「オイ」と良人は促すやうに强くいつた。

細君は、唇を震はして居たが、漸く、

「ありがたう」と云ふと其大きく開いて居た眼からは涙が止途なく流れて來た。

「よし／＼、もうそれでいゝ」良人は坐つて其膝に細君を抱くやうにした。彼は實際しなかつたにしろ、それに近い氣持を持つた事を今更に心に恥ぢた。然し今はそれを打明ける時ではないと思つた。

「それを伺へば私にはもう何んにも云ふ事は御座いませんわ。貴方が何時それを云つて下さるか待つて居たの」細君は泣きながら云つた。

「お前は矢張り疑つて居たのかい」

「いゝえ、信じて居ましたわ。でも、此方から伺ふのは可恐かつたの」

「それ見ろ、矢張り疑つて居たんだ」

「いゝえ、本統に信じて居たの」

「うそつけ、左う信じゝばそれが本統になつて呉れるやうな氣がしたんだらう。兎も角それで

「いゝ、お前は中々利口だ。お前は素直に受け入れて呉れるだらうとは思つてゐたが、若し素直に受け入れなければ俺は疑はれても仕方がないと思つて居たのだ。然し素直に信じてくれたので大變よかつた。若し疑ひ出せば疑ふ種は幾らでも出て來るだらうし、その爲めに兩方で不愉快な思ひをしなければならない所だつた。俺は明かなうそは云はないつもりだ。笑談やイヤガラセを云ふ時、反つてうそに近い事を知らずにするかも知れないが、斷言的にうそは云はない……」

「もう仰有らないでいて頂戴。よく解つてます」細君は妙な興奮から焦々した調子で良人の言葉をさへぎつた。

良人は苦笑しながら一寸默つた。

「然しあとはどうする」

「あとの事なんか、今云はないで……。瀧が好きなら其男と一緒にするやうにしてやればいゝぢやありませんか」

「さう簡單に行くものか」

「まあそれは後にして頂戴つて云ふのに……。もういゝわ。そんな他の話は如何でもいゝぢやありませんか」

「他の話ぢやない」

「もういゝのよ。……貴方もこれからそんな事で私に心配を掛けちやあいやですよ」細君は濡れた眼をすゑて良人をにらんだ。

「よし／＼。解つたらもうそれでいゝ。又無暗と興奮すると後で困るぞ」

「何故もつと早く云つて下さらなかつたの？ いやな方ね、人の氣も知らずに」

「全體お前は惡阻と云ふ事を知つて居るのか」

「その位知つて居ますわ。淸さんの生れる時に姉さんの惡阻は隨分ひどかつたんですもの」

「知つてるのか」

「そりやあ、知つてますわ。それより貴方の知つて居らつしやる方が餘程可笑しいわ。男の癖に」

「俺は知つてる譯があるんだ」

「又そんないやな事を仰有る」

「お前は瀧のは何時頃から氣がついたんだ」

「もう四五日前からよ」

「俺は一昨日からだ。その間お前はよく默つて居られたな。矢張り疑つて居たんだな」

「貴方こそ、よく三日も默つて居らしたのね」

そんな事を云ひながら細君は身體をブル／＼と震はして居た。

「どうしたんだ」良人は手を延ばして今は對座してゐる細君の肩へ觸つてみた。

「何んだか妙に震へて困るわ」かう云ひながら細君は頭を引いて自分の頰から肩の邊を見廻した。

「興奮したんだ。馬鹿な奴だな」

「本統にどうしたんでせう。どうしても止まらないわ」

「寢るといゝ。此處でいゝから暫く静かに横になつてゝ御覽」

「お湯を飲んでみませう」さういつて細君は起つて茶の間へ行つた。而して戸棚から湯吞みを出しながら、

「瀧には出來るだけの事をしてやりませうネ」と云つた。

「うん。それがいゝ。それはお前に任せるからネ。而して云ふなら早い方がいゝよ。そんな事もあるまいが不自然な事でもすると取り返しが附かないからネ」

「本統にさうネ。明日早速お醫者さんに診せませう。——まあ、如何したの？ 未だ止まらないわ」かういま／＼しさうに云ひながら細君は長火鉢の鐵瓶から湯を注いだ。而してそれを口へ持つて行かうとすると其手は可笑しい程にブルブル震へた。

(大正六年七月)

赤西蠣太

昔、仙臺坂の伊達兵部の屋敷に未だ新米の家來で赤西蠣太といふ侍があつた。三十四五だと云ふが、老けて居て四十以上に誰の眼にも見えた。容貌は所謂醜男の方で、言葉にも變な訛があつて野暮臭い何處までも田舍侍らしい侍だつた。言葉訛は仙臺訛とは異つてゐたから、秋田邊だらうと人は思つて居たが實は雲州松江の生れだと云ふ事だ。眞面目に獨りこつこつと働くので一般の受けはよかつたが、特に働きのある人物とも見えないので、才はじけた若侍達は彼を馬鹿にして彼を何かに利用するやうな事をした。蠣太は左う云ふ時に平氣で利用されて居た。然し若侍達も馬鹿ではなかつたから承知で利用されて居る蠣太に己等の餘り趣味のよくない心事を見ぬかれて居ると思ふ事は愉快でなかつた。段々皆も左う云ふ事はよすやうになつた。

蠣太は一人者で武者長屋の一と部屋に人も使はず暮らして居た。酒を飲むでもなし、女遊びをするでもなし、非番の日などは時間つぶしに困るだらうと人に思はれて居た。然し其割りに當人は退屈して居なかつた。酒を飲まない代りに菓子を食つた。底の淺い函を幾つも重ねた上を眞田紐で結んだ荷を擔いで來る菓子屋が彼の居あはせた所に來て無駄足をする事は決してなかつた。然し彼は菓子を買ふにも餘り氣前のいゝ買ひ方はしなかつた。一々値段を訊いては、あれかこれかと指を箸にした手を菓子の上でまごまごさす見よくない癖があつた。菓子屋は「左う變つた菓子を持つて來ないのに此人は未だに値段を少しも覺えない」と思つて氣分の惡い日などはムカ／＼と腹を立てる事もあつた。然し蠣太のは知つて居ても一度は訊いて見ないと氣が濟まなかつたのだ。

菓子好きの蠣太は又胃腸病者であつた。彼は彼の部屋に菓子も絶やさなかつたかはり千振も絶やさなかつた。彼の部屋にはいつも千振の臭ひが漂つてゐた。

それから菓子の外にもう一つ道樂があつた。それは將棊で、將棊は柄になく上手だつた。菓子を買ふ時餘り氣前のよくない彼も將棊では中々氣前のいゝ離れ業をやつて敵を驚かした。やり口に中々鋭い所のあるので如何にも此男らしくないと云ふ氣を對手にさせる事がよくあつた。然し彼は好きな割りに對手を欲しがらなかつた。膝の上に定石の本を置いて獨りで駒を並べて居るのが好きだつた。盤の向うには行燈を据ゑて夜更けまでよくやつてゐた。それが一寸見ると行燈と將棊を差してゐるやうに見えたから、「昨晩は行燈との勝負は如何でした」こんな事を云つて冷かす同役もあつた。

こゝに又愛宕下の仙臺屋敷に居る原田甲斐の家來に銀鮫鱒次郎と云ふ若侍があつた。此男は生き／＼とした利口さうな而して美しい男で、酒も好き、女道樂も好きと云ふ人間だつた。蠣太とは樣子あひでも好みでも凡そ反對の男だつたが、只將棊好きだけが一致してゐた。

或時殿樣の使ひで蠣太は愛宕下の屋敷へ行つて、其時偶然知り合ひになつて以來、二人は將棊友達として大變親密になつて了つた。

餘りに異ふ二人が親しくなつたのを見ると、人は「氣が合ふと云ふのは不思議なものだ」などと云つた。然し左う云ふ程實は其人達もそれを不思議とも何とも思つては居なかつた。

何事もなく一年程經つた。其間不相變二人は十日に一度、半月に一度と云ふ風に往き來をして將棊の勝負を爭つて居た。

或時不意に蠣太に就いて妙な噂が立つた。それは蠣太が切腹未遂をやつたと云ふ噂だつた。行つて見ると成程半死半生の蠣太が仰向けになつてうつら〱して居た。傍には親友の鱒次郎がついてゐたが、鱒次郎も蠣太が何故そんな事をしたかは知らなかつた。醫者に訊くと實際腹を十幾針か縫つたと云ふ。

「胃弱で苦しんでゐたから夢でも見て、寢惚けてそんな事をやつたのだらう。馬鹿な奴だ」こんな事を云ふ人があつた。「それとも氣でもふれたかな？」こんなに云ふ人もあつた。

すると或晩の事、老女蝦夷菊の部屋で按摩の安甲と云ふ者の口から切腹未遂の本統の事が密かに話された。それによるとかうだつた。

其晩安甲が呼ばれて行くと蠣太は「腹が痛くてやりきれないが、按腹でも針でも直ぐやつてくれ」と背中を海老のやうにして苦しがつて居た。安甲は直ぐ針を五六本打つて見たが、蠣太は苦しい氣に「一向直らない」と云つた。安甲は胃痙攣だと思ふから針を水落ちの邊に打つて見たのだが五六本打つてから蠣太は「痛いのはもつと下腹の方だ」と云ひ出した。此邊かといふと、もつと右だといふ。右を押すと左だと云ふ。而して「何んでもいゝからそこら中、力まかせにもんでくれ」と云ふ。安甲はそろ〱と腹をもんで見た。何だか妙なふくらみ方をして居る。安甲はこれは自分の仕事ではないと思つた。蠣太は、力まかせにやらなければ駄目ぢやないか」と怒つた。安甲は「按腹はそんなに力を入れられるものではありません　腸捻轉でも起したら、それこそ事です」と答へた。「腸捻轉とは何んだ」と蠣太が云ふ。「腸捻轉と云ふのは腹綿のよぢれる病氣です」こんな事を云ひながら安甲は少し力を入れてもんでゐると、どうしたのか腹が段々ふくらんで來た。蠣太の顏は見る見る青くなつて來た。蠣太は「あッ、あ、あッ、あ」と息を吐く度に妙な聲を出した。……安甲は仰天して了つた。何故なら、「蝦夷菊に話す時には彼はそれだけぬかしてゐたが」彼が若い頃下手なもみ方をして一人腸捻轉で殺した事がある。彼が按腹をして其翌日又出掛けて行つた其時の樣子と蠣太の今の樣子と變りなかつたからである。かうなつたら醫者を呼んでも仕方がないと思つた。それにしろ自分一人は心細かつた。「兎も角これはエライ事が起つた。自分が何したのか、自分が手をつける前から起してゐたのか解らないが、何しろこれから俺に按腹を頼む人はなくなるだらう」安甲の頭にはそんな事が想ひ浮んで來た。而して恐る〱「お醫者を呼ばして下さい」と云つた。「俺は矢張り腸捻轉になつたのだらう」と蠣太が苦し氣に云つた。「どうも左うかと思はれます」と安甲が答へた。其時蠣太は可恐い顏をして安甲をにらみつけた。安甲は吃驚した。すると直ぐ、蠣太は反つて穩かにかういつた。「何んでも本當の事を云つて呉れ」安甲は「へえ」と頭を下げた。「俺の病氣は醫者が診た所で助かるまい」と蠣太がいつた。流石の安甲も此場合「へえ」とは云へなかつた。默つてゐると……

お饒舌りの按摩安甲はこゝまで話すと急に默つて了つた。而して後は何故か少し落ちつかない樣子になつて、話をひどく概略にして了つた。つまり蠣太は「どうせ助からないものなら」と云つて自分で腹を切つて、安甲に手傳はせ、腸のよぢれを直して了つたと云ふのだ。

〔此場合其話を聽いてゐる老女に若し少しでも醫學上の智識があれば「左うして出血はどう

遠慮しましたと云はねばならぬ所ださうだ。所が生憎老女には其智識がなかつた。又假りにあつたにしろ、老女は只々鶴太の勇氣に感服してゐる所だつたから、其等の理屈は通さなかつたかも知れない。而して先を讀めば解るが、どうした事か鶴太は遂に腹膜炎にもかゝらずに濟んだのである

「あんな氣の強い人は見た事がない」と安甲は云つた。「然し此事は堅く口留めされて居るのですから、どうか貴方にもおもらし下さらぬやう」から繰返し〳〵老女に頼んで歸つて行つた。

それから二三日した時だつた。紺屋坂を下り切つた所に按摩安甲の斬り殺された死骸が横はつてゐた。それは首筋を背後から只一太刀でやつた傷だつた。

又二三日した午後だつた。經過がいゝので、もう少しは話位出來るやうになつて居た鶴太の枕元に鉾次郎が坐つて居る。

仰臥して居る鶴太は上眼をして鉾次郎の顏を見ながら勢のない聲で、

「安甲を斬つたのは君だらう」と云つた。

「いゝや」と鉾次郎はニヤ〳〵しながら答へた。

「可哀想に」かう云つて鶴太は大儀さうに又眼をつぶつて了つた。

又一週間程して鉾次郎が見舞に來た時、其事が出ると、——其時は鶴太も餘程元氣が出てゐたので、

「君は馬鹿だよ。あんなお饒舌に密書の在り處を云ふ奴があるものか」と鉾次郎は微笑しながら鶴太を非難した。

「左う云はないで呉れ。同じ死ぬのでも、犬死はつらいからね。二年近くかゝつて作つた報告書を白石の殿樣に見せずに天井で鼠の糞と一緒に腐らして了ふのは死ぬにも死にきれないよ」

「それは左うかも知れないが、人もあらうにあんな奴に打明ける奴があるものか」

「それならあの場合誰に打明ければよかつたのだ」

「誰に打明ける事が要るものか。そこらに如才はあるものか、君が死んだと聽けば直ぐ飛んで來て隙を見て俺が自身で探し出して了ふ」

「そんなら天井のどの邊にどう隱してあるか今でも見當がつくか」

「見當も何もあるものか。あの按摩が精しく教へて呉れた。それが君がもう助かると決つて暫くしてそんな事を俺に云ふのだ。さも內證事らしく、それから手柄顏をしてベラ〳〵薄ツぺラな調子で饒舌るのだ。其時俺は此奴は生かして置くと其內に乾度他に行つて此調子で饒舌るなと云ふ氣がしたのだ。——然しどの道彼奴は俺に殺されたよ。君が若しあの儘死んで彼奴が君の遺言通り天井の密書を俺の所へ持つて來たとしても、俺は彼奴を生かしては置くまいよ」

「それは左うかも知れない」

「左うかも知れないと云つて、今こそ左うは思はないか、若し君が死んでゐたら君も彼奴を殺さす氣でよこしたと俺は思つたに違ひないよ」

「毛頭そんな考へはなかつた。俺は少しは彼奴を信用して居る。お饒舌は知つて居るが、少くも俺等の役目が濟む日位までは秘密を守つて呉れるだらうと思つてゐた。何しろ遺言だからな」

「君は不相變君子だな」かう云つて鉾次郎は一寸不快な顏をした。

鶴太は默つて居た。

鉾次郎の方はかう云ふ時默つては居られない

性だつた。

—君子にも困る。自分が殺されかゝつて来た其奴を辯護して居る—

—腸の捻轉は彼奴にもませる前からやつて居たのだ。醫者に聽くとさうだ。もんで居る内に直ぐあゝなるものではないさうだ—

—然し彼奴のもみ方が惡いので一層早く惡くなつたのだらう—

蠣太は又默つて了つた。鱒次郎も今度は默つて了つた。然し暫くすると又鱒次郎から口を切つた。

—それはさうと吾々も役目だけは大概果たしたんだから君の身體でも直つたら、いゝ機會に早く白石に引上げた方がいゝよ」

「うん、左うしよう」

一ヶ月程經つた。秋の彼岸の日だつた。蠣太はもう全快して居た。其日は鱒次郎も非番だつたので二人は築地から荷足を一艘借りてハゼ釣りに出かけた。蠣太は辨當の他に菓子、鱒次郎は辨當の他に酒を持つて行つた。二人は御濱御殿の石垣の側で大分釣り上げた。然し其處には深川の舟があつて、自由に何でも話すわけには行かなかつた。

—どうだい此位釣れたらもういゝだらう。辨當は少し沖へ出て廣々とした所でやらうぢやないか—と鱒次郎は何本かたれてゐた絲を竿に卷き始めた。

—うん、左うしよう—蠣太も竿を上げながら答へた。

—向うにこんもり高く見えるのが鹿野山と云ふ山だらう—

—左うかい—

—かう云ふ景色を眺めながら一杯やるのは又別な味だが、かう云ふ景色を眺めながらムシャムシャ菓子を食ふ相手だから仕方がない—

蠣太は只笑つてゐた。

—然し菓子もいゝ加減にしないと命取りだよ。今日はどんな菓子を持つて來たんだ。無暗な菓子を食つたら又さはるだらう

—今日は輕燒だ

—まるで乳呑兒だネ—と鱒次郎は大きな聲をして笑つた。

釣道具の始末が出來ると鱒次郎が漕いで舟を沖へ出した。而して船道の棒杭迄來ると其處に舟をつないだ。其邊にはもう他の釣船は居なかつた。二人は氣樂な氣持で自分々々の辨當を開いた。

—時に君の身體はもう旅の出來る位にはなつたかネ？—と鱒次郎が云つた。

—もう大概大丈夫だらう—

「先刻漕いだ位では弱りもしないかネ—

—別に弱らない—

—それならどうだい、そろそろ白石へ歸る支度をしては。俺の方の報告書も大概出來上つて居るが—

—出來上つて居るなら君が先へ歸つたらよからう。俺も大概は出來てゐるが、—然し甲斐の方はもう少しついて居る方がよくはないか？—

—それは左うかも知れない—

—兎も角、君の旅立つ日が決つたら其少し前に俺の作つた報告書は持つて行かう—

—旅立つのはいゝが、どう云ふ理由で暇を貰つたらいゝかな—

「正式に暇を貰ふやり方だと、向うに故障を云はれた時に困るぞ—

「そんなら夜逃げをするか。然しそれも向うの腑に落ちるだけの動機がなければ危險かも知れない。後に殘る君にも危險な事だ

—何しろ甲斐は利口な奴だからな。下手をして

此方の不利を向うに握らすやうな事をしては大變だから、……然しどうしたら君の夜逃げが最も自然に見えるかな」
蠣太はかう云ふこまかい細工は自分の領分ではないと思つて居たから、鱒次郎に一任した氣で深く考へようともしなかつた。
「兎も角君は面目次第もない事をやるのだ。他人に顏向けの出來ない事をやるのだな」鱒次郎は意地の惡い微笑を浮べながら蠣太の顏を見て云つた。
「武士の面よごしをするのだな？」
「まあ武士の面よごしをするのだな」鱒次郎は嬉しさうな顏をして答へた。
「眞逆泥棒をしろとは云ふまいな」
「泥棒もいゝかも知れない」
「追手がかゝると俺は直ぐ捕まるよ」
「追手がかゝる位ならいゝが、物を取らない内に屹度捕まるだらう」
二人は笑つた。
蠣太は默つて辨當を食つてゐる。鱒次郎は肴をつまんだり酒を飲んだり、時々廣々とした景色を眺めたりしながら矢張り考へて居た。
「どうだい」鱒次郎は不意に膝を叩いて乘氣な調子で云ひ出した。「誰かに附文をするのだ。いゝかネ。何んでもなるべく美しい、而して氣位の高い女がいゝ、それに君が艷書を送るのだ。すると氣の毒だが君は肘鐵砲を食はされる。皆の物笑ひの種になる。面目玉を踏みつぶすから君も屋敷には居たゝまらない。夜逃げをする。――それでいゝぢやないか。君の顏でやればそれに間違な、成功する。この考へはどうだい。誰か相手があるだらう、腰元あたりに。年のいつた奴は駄目だよ。年のいつた奴には恥知らずの物好きなのがあるものだから、左うい ふ奴にあつたら失敗する。何んでも若い綺麗事の好きな奴でなければいけない」
蠣太は亂暴な事を云ふ奴だと思つた。然し腹も立たなかつた。而して氣のない調子で、
「泥棒するよりましかも知れない」と答へた。
「ましかも所か、こんなうまい考へは他にはないよ。左うして誰か心當りの女はないかね。日頃左う云ふ事には迂い男だが……」
蠣太は返事をしなかつた。
「若い連中のよく噂に出る女があるだらう」
「小江と云ふ大變美しい腰元がある」
「小江か、小江に眼をつけた所は君も案外迂い方ではないな。左うか。小江なら益々成功疑ひなくなつた」
蠣太はこれまで小江に對し戀するやうな氣持を持つた事はなかつた。然し其美しさはよく知つて居た。而してその美しさは淸い美しさだと云ふ事もよく知つてゐた。今其人に自分が艷書を送るといふ事は或る他の眞面目な動機を持つてする一つの手段にしろ、餘りに不調和な、恐しい事のやうな氣がした。
「小江でなく誰か他の腰元にしよう」
「いかん〳〵。そんな色氣を出しちや、いかん」
かういつた鱒次郎にも今は笑談の調子はなくなつてゐた。色氣と云ふ意味はどう云ふ事かよく解らなかつたが、蠣太はどうしても小江に左う云ふ手紙を出す事は如何にも不調和な事で且つ完き物にしみをつけるやうな氣がして氣が進まなかつた。然し若し鱒次郎の云ふ成功に、若い美しい人がどうしても必要だとすると小江以外に蠣太の頭には左う云ふ女が浮んで來なかつた。其處で彼は觀念して小江を對手にすることを承知した。
「それなら艷書の下書きをして呉れ」と蠣太が云つた。
「それは自分で書かなくては駄目だ。俺が書けば俺の艷書が出來て了ふ。何しろ對手が小江だから、俺が書くと氣が入り過ぎて、コロリ向う

を參らすやうな事になるかも知れないよ」
蠣太は苦笑した。而して鱒次郎が書くよりまだ自分の書く方が小江を汚さずに濟ませるだらうと思つた。
風が出て來たので二人は踵を返した。仙臺屋敷は丁度歸り途だつたから蠣太は鱒次郎の所へ寄つた。二人は久し振りで將棊の勝負を爭つた。

秋になつて初めての珍しく寒い晩だつた。蠣太は靜かな自分の部屋で僅な埋火に手をあぶりながら、前に安卷紙を展げ、切りに考へてゐる。彼は眞面目腐つた顔をして、時々困つたと云ふやうに筆を持つた手で頭の剃つてある所をかいたりした。
彼は兎も角紙に筆を下ろした。
どうもうまくない。字は立派だが文章が駄目だ。妙に生眞面目で如何にも艶も味もない。「こんな艶書があるものではない」と彼は苦笑した。
彼は嘗て讀んだ事のある草雙紙を頭に憶起して見たが、艶書の條も別に浮んで來なかつた。仕方がないから彼は今度は自分を草雙紙の繪に見るやうな二十前後の美しい若侍として考へて見た。眼をつぶつて想像力をたくましくしてゐる間は一寸そんな氣がしないでもない。然し眼を開くと直ぐ眼の前に毛の生えた黑い武骨な手がある。彼は閉口した。
彼は又迷ひ出した。小江でない他の女ならまだ幾らか書きいゝかも知れないと考へた。それとも艶書はやめて、直接口で云つてやらうかしらと考へた。然しそれは何六かしさうだと思つた。而して艶書は矢張り鱒次郎にあの時頼んで了へばよかつたと思つた。
彼は又それを受取つた小江の驚きと不快とを察すると氣が沈んで來た。彼はこんな事ではならぬと氣を取直して又別に書いて見た。どうも思はしくない。餘りにサッパリしすぎてゐる。これでは一向戀になやんでゐる樣子は出てゐない。困つた事だと思つた。
何しろ艶書を作ると云ふ考へが不可のだと考へた。作ると云ふよりなるべく地金を出すやうにして書かなくては駄目だと思つた。左う思つて彼は無理に小江を戀するやうな心持に自身を誘つて見た。小江に戀焦れ思ひなやんでゐる自分になり澄まさうとした。多少はそんな氣持になれた。其氣の覺めない内にと彼は急いで筆を運んで行つた。それでもやゝもすると其氣持から覺めかけるには彼も往生した。然し自分のやうな醜い男に思はれる氣の毒さを同情する氣持にうそはなかつたから、それは思ひやる部分などは眞實な情のある兎も角も一本の艶書が出來た。これ以上はもう書けないと思つた。
彼は一度讀返して見て、丁寧に卷きをさめるとそれを封書にして、さも大切な物ででもあるかのやうに机の抽斗に仕舞つて、それから寢支度にかゝつた。

翌朝蠣太はいつもより早く御殿へ出て行つた。而して目立たぬ程度で長廊下をまご〳〵しながら小江の來るのを待つて居た。彼は何んだか妙にどき〳〵した。それをおさへようとしても何處へ力を入れていゝか解らなかつた。今にも小江が見えたら機會を逸さずこれを渡さなければならぬ。彼は左う思つて手紙を握つたまゝ其手を袴の割れ目に入れて待つた。手から出る油で手紙がじめ〳〵してゐるのがわかつた。
彼は小江が恐ろしい人のやうな氣がして弱つた。こんな事ではならぬと思つて頭を殊更に今自分がなし遂げつゝある侍としての使命に向

けて見たが、然し此場合たしかに美しい小江は強者で醜い自分は比較にならぬ弱者だと思はずには居られなかつた。性の異ふ關係で美醜が直ぐ優強弱になる場合があるものだが蠣太には殊にその感が深かつた。彼は其壓迫に堪へられない氣がした。彼は落ちつきなく廊下から人のゐない側の部屋へ入つたり、又出たりして居た。

やがて時が來た。彼はドキリとした。が、それからは我ながら意外に落ちついて了つた。彼はまるで附け文をする人のやうでなく、

「これを見て下さい」から云つて、こはい顏で小江をまともに見ながら、それを手渡した。

小江は一寸驚いた風だつたが、それを受取つて、

「御返事を差上げる事で厶いますか？」と云つた。返事の豫想は全くして居なかつたが、蠣太は、

「どうぞ」と答へた。

小江はお辭儀をして行つて了つた。蠣太はホッと息をついた。而して兎も角やつてのけたと思ふと一種快活な氣分が起つて來た。

彼は今日のうちにも何か起るか、それとも明日か、こんな事を考へて、自分もそろ／＼逃支度をして置かねば、と思つた。が、其日は何事も起らなかつた。

而して翌日になつた。返事を豫期しない彼は返事を貰ふ機會を別に求めなかつたし、其日も何事もなく濟むと、これは變だぞと考へた。若しかしたら小江が自分に恥をかゝすまいと、何事もなかつたやうに手紙を握りつぶす氣ではないかしらと云ふ心配が起つた。實際小江は年に似ずしつかり者だから、若し左うなら困つた事だぞと思つた。

翌々日も其儘過ぎた。小江とは二人だけで會ふ機會もなかつた。又蠣太は知らず／＼それを避けても居た事を後で氣がついた。而して人の居る所で會ふ場合小江は全く何事もなかつた人のやうな顏をして居た。それを蠣太は心で感服した。然し此儘では仕方がないと思つた。仕方がなければ、もう一つ艷書を書いて、氣の毒だが、それを何處かに落して置いてやらうと考へた。

其晩又書いて見た。彼は小江に拂はす犧牲を出來るだけ少くしようと注意しい／＼書いた。何んの返事も下さらないのは自分に恥をかゝすまいとする御好意と解して居ます。左う云ふ立派な貴女のお心に對し、何つけ上がつてこんな手紙を書く自分は自分でも許せない氣がします。然し自分はどうしても思ひ止まる事は出來ません云々。こんな事も書いて見た。彼は若侍等が寄つてこれを見て笑ふ樣子を想ひ浮べると冷汗だつた。

翌日彼は出勤すると直ぐ長廊下の角の金網のかゝつた行燈の側にそれを落して來た。

一時間程して又何氣なく行つて見た。もう其處にはなかつた。彼は安心と不愉快との混り合つた變な氣持をしながら引返して來ると、偶然向うから小江が一人で來るのに會つた。彼は思はず眼を伏せた。而して何氣なく摩れ違はうとすると何か自分の手に觸れる物を感じた。彼は不知それを受取つてゐた。それは重みのある手紙だつた。

其晩部屋へかへると燈心をかき立てゝ急いで披いて見た。返事は全く豫想外だつた。二本入つて居た。一つは渡す機會がないので持つて

歸つた時又書いて入れた手紙だつた。

内容の意味はかうだつた。

私は貴方を戀した事はムいませんが、前から好意を感じて居りました。私には遠からず結婚の問題が起ると思つて居ましたが、今此お屋敷で見る程の若侍方の誰方に對しても私は左う云ふ氣は起りませんでした。素より貴方に對してそんな事を考へた事はムいませんでした。貴方とそんな事とを聯想する事が出來なかつた爲めでムいます。これは惡い意味にはおとり下さらぬ事と存じます。

私は町家の者でムいます。私はもう一年か一年半したら親元へ下がる筈になつて居ります。結局は町家へ嫁入る身と自分でも考へて居りました所でした。然し今貴方から御手紙を頂いて私には新しい問題が起りました。私は考へました。私には新しい感情が湧いて參りました。私には前から貴方に對する或る尊敬がムいました。それが今急にハッキリして參りました。私は私がこれまでハッキリ意識せずに求めて居たものが、それが貴方の内にあるものだつたと云ふ事を初めて氣がつきました。私が所謂美しい若侍方に何となくあきたらなかつたのは、左う云ふものが若侍方の内にないからだつたと云ふ事が解つて參りました。私は貴方からお手紙を頂いて本統に初めて自分の求めて居たものがハッキリ致しました。私は今幸福を感じて居ります。

それから貴方は貴方にお似合にならない顧慮ばかりしておいでです。それを決して惡く解りは致しません。然し本統にそれは無駄な事です。これからは決してそれを仰有らないで頂きます。私は心から嬉しく思上げて居ります。云々。

かう云ふ意味がもつと／＼美しい、それから艶のある女らしい感情で書いてあつた。

後から書いた方には、何故貴方が私の返事を受取る機會をお避けになるのか解りませんと、それを切りに憾んであつた。其後には實際的な、今後どうしたらいゝかと云ふ事が細々と書いてあつた。近く來る宿下りの日にそれを兩親に打明けようと思ふと云ふやうな事が書いてあつた。

[illegible]太の顏は赤くなつた。彼は自分の胸の動悸を聽いた。彼は少時ボンヤリして了つた。彼はこれをまともに信じていゝか、どうかを迷ひさへした。彼は彼の胸に新しく出來た——それは五分前まではなかつた、妙なものを感じた。彼は自分の年がわからなくなつた。何故ならかう云ふ妙なものを胸に感じたのは彼が未だ雲州松江にゐた十二三の頃一度左う云ふ事があつただけだつたからである。其時にそれが對手の冷笑で慘めな幻滅で終つて以來、全く自信を失つた——彼自身に云はせれば己れを知つた——彼には今日まで再び左ういふものが彼の胸に訪れて來なかつたからであつた。

彼は夢のやうな氣持になつて居た。然し間もなく、今日艷書を落して來た事を憶ひ出すと彼はギョッとした。俺はどうすればいゝのだ。彼は堪らない氣がした。彼はつく／＼自分を馬鹿者だと思つた。それは動機に辯解は出來るにしろ、自分は人間の最も卑しい氣持を惡戲に使はうとしたのだ。それを尊重する事をどうして忘れて居たらう。このつぐのひはどうすればいゝのだ。彼は全く熱して了つた。

夜が更けた。床へ入つたが眠れない。どうしてこんな事になつたらうと云ふ氣が未だにして居る。彼はもう仕方がないと想つた。落した艷書が何かしらんの解決に導いて與れる、それに從ふより仕方がないと思つた。

彼の感動は段々に靜まつて行つた。彼の頭は再び彼の侍としての役目へ返つて行つた。

彼は夢から醒めたやうな氣持になつた。五十四郡の運命にかゝはる大事の場合に自身だけの事に沒頭して居ては濟まないと思つた。自分は今心を鬼にしなければならぬ時だ。兎も角も自分の役目は果たさねばならぬ。小江にもそれは後で解る事だ。幸に總てが順調に行つた日に小江との事は改めて甦らせられない事ではない。其時になれば何も彼も解る事だ。――左う思つても彼には何か淋しい氣持が殘つた。彼は淋しいまゝに暫くすると眠つて了つた。

翌朝になつた。定刻に蠣太は出勤した。彼の顏はいつもより青かつた。彼は何となく元氣がなかつた。然し何となく興奮もして居た。

暫くすると老女の蝦夷菊から一寸部屋まで來て吳れと云ふ使が來た。蠣太はシヲ〳〵として行つた。それが自分でも相應してゐると思つて、彼はそれを取りつくろはうとはしなかつた。

老女は人拂ひをしてから彼に彼の手紙を手渡した。それは開封してあつた。

「私が拾つたからいゝやうなものゝ、他人の手で拾はれたら、どうするおつもりです」老女は叱るやうに云つた。

左ういつた老女も蠣太には好意を持つて居た。殊に切腹未遂からは一層蠣太に感心して居たから、こんな事で此侍にきずがつく事は腹から殘念に思つた。老女は自分は堅く口をつぐんでゐるから總ては無かつた昔としてこれ迄通り御用をはげんで下さらねば困る。小江にやつた手紙はいゝ機會に必ず取もどして置いて上げるからと、何コン〳〵と將來をいましめた。

蠣太は一言もなかつた。彼はそれは彼のいゝ性質が他人の心から反射して來るのだとは氣がつかなかつた。而して、どうしてから皆いゝ人達ばかりだらうと考へた。兵部は惡人だが、から云ふいゝ人達の居る此一家を破滅さす爲めに自分が働かねばならぬかと思ふと一寸淋しい氣になつた。

彼は病氣と云つて部屋へ引き退がると、かうなればもう此儘やり通すより仕方がないと考へた。彼は蝦夷菊宛ての書置きを書いた。

自分は自分の年をも考へず痴情に陷入つた段、何とも恥入る次第である。何の面目あつて再び貴女と顏を合はす事が出來よう。かうなつた以上小江殿を忘れられもせず、又此儘では今迄通りお勤めも出來なくなつた。誠に我ながら愛想の盡きる次第である。

こんな意味だつた。

蠣太は天井に隱して置いた自分と鱒次郎の祕密の報告書を肌身につけて、夜の更けるのを待つて屋敷を脱け出した。

而して白石をさして急いだ。

書置きは翌日蝦夷菊の手に入つた。蝦夷菊は氣の毒な事をしたと思つたが、今は仕方なかつた。それを其儘に握りつぶすわけにも行かなかつたから、殿樣の兵部に見せた。兵部は心から笑つた。居あはせた侍達も心から笑つた。蠣太と小江との對照が彼等には此上なく可笑しかつた。而して、それは笑ひ話だつたが、人々には小江が人眼にも知れる位弱つて了つたのが、どう云ふわけか解らなかつた。

小江は又蠣太の仕た事がどうしても解らなかつた。併し小江は馬鹿ではなかつた。これには何かあると思つた。小江は獨り苦しい氣持を忍んで誰にもそれを話さなかつた。蝦夷菊から最初の手紙を見せるやう云はれた時も、もう燒捨てましたと答へて、後から直ぐ本統に燒捨てゝ

了つた。だから蠣太と小江との事は皆の間には一場の笑ひ話の種として殘るだけだつた。

それから暫くして或日原田甲斐が訪ねて來た。甲斐は兵部と二人離れの茶室に人を避けて暫く密談をした。而して用が濟むと二人は座敷へ歸つて來て、皆と共に酒宴を始めた。其時兵部は座談として蠣太と小江の話をした。最初甲斐は兵部と共に笑つて居た。然し段々彼は變な顔をしだした。仕舞に非常に不機嫌な顔になつた。

甲斐は兵部にもう一度離れに來て下さいと云つた。二人は又暫く密談した。間もなく蝦夷菊と小江が其處に呼ばれて行つた。小江は甲斐から峻酷に調べられた。今は本統の事を云ふより仕方がないと思つた。小江は惡びれずに本統の事を話した。甲斐は益々不機嫌な顔をした。

小江は直ぐ親元へ下げられ其處で監視を受けねばならぬ身となつた。蝦夷菊は自分から願出て役を退いた。

間もなく所謂伊達騷動が起つたが、長いゴタゴタの結果、原田甲斐一味の敗けになつた事は人の知る通りである。

事件が終つてから蠣太は本名にかへつて、同じく變名して居た鱒次郎をたづねて見たが、どうなつたか皆目行方が知れなかつた。それは甲斐の爲めに人知れず殺されたのだらうと云ふ事だつた。

最後に蠣太と小江との戀がどうなつたかゞ書けるといゝが、昔の事で今は調べられない。それはわからず了ひである。

（大正六年八月）

流行感冒

上

最初の兒が死んだので私達には妙に臆病が浸込んだ。健全に育つのが當然で、死ぬのは例外だといふ前からの考へは變らないが、一寸病氣をされても私は直ぐ死にはしまいかといふ不安に襲はれた。それで醫學の力は知れたものだと云ひ〳〵矢張り直ぐ醫者を賴りにした。自分では恥かしい氣のする事があつた。田舍だから四圍の生活との釣合ひ上でも子供を餘りに大事にするのは眼立つてよくなかつた。

百姓家の洟を垂した男の兒が私の左枝子よりもつと幼い兒をおぶつて、秋雨のしと〳〵と降る夕方などに、よく傘もさゝずに自家の裏山に初茸を探しに來る事がある。項を直角に仰向いて、眠つてゐる赤兒の額は濡れ放題だ。而して平氣でいつまでも〳〵うろついてゐる。それらを見る時一寸變な氣がする。亂暴過ぎると眉を顰めるやうな氣持にもなるが、何方が本統か知れないといふ氣にもなる。自分達のやり方が案外利口馬鹿なのだとも思へて來る。然し、かう思ふ事で子供に對する私の神經質な注意は實は少しも變らなかつた。

「去年はあゝ癖をつけて了つたから仕方がありませんが、此秋からは餘り厚着をさせないやうに慣らさないといけませんよ」夏の內こんな事を妻はよく云つた。私もそれは賛成だつたが、段々涼しくなるにつれて、いつか前年通りの厚着癖をつけさして了つた。而して私は、

「一體お前は寒がらない性だからね、自分の體で人まで推すと間違ふよ」などと云つた。

「お父様は又、人一倍お寒がりなんですもの：：」夏頃切りに云つてゐた割りには妻も他愛なく厚着を認めて了つた。

或る時長い旅行から歸つて來た友達の細君が、「××さんが左枝ちやんを大事になさる評判は日本中に弘まつて居ましたわ」といつて笑つた。友達の細君は行く先々の親類、知人の家でその話を聽いたと云ふのだ。それは大袈裟だが、人々が私のそれを話し合つて笑つてゐるやうな氣のする事はよくあつた。然しそれは私にとつて別に惡くはなかつた。私達が左枝子の健康に絕えず神經質である事を知つて居て貰へば、人も自然、左枝子には神經質になつて呉れさうに思へたからだ。例へば私達のゐない所で或る人が左枝子に何か食はさうとする。所がその人は直ぐ一寸考へてくれる。私達ならどうするかと考へて呉れる。で、結局無事を願つて食はすのをやめて呉れるかも知れない。左うあつて私は欲しいのだ。殊に田舍にゐると、その點を嚴格にしないと危險であつた。田舍者は好意から、赤兒に食はしてならぬ物でも、食はしたがるからである。

私の生れる半年程前に三つで死んだ兒がある。祖母に云はせると、それは利巧者だつたさうだが、守が、使ひの出先で何か食はせたのが原因で、腹をこはし、死んで了つた。左枝子にそんな事があつては困る。それ故私は自分の神經質を笑はれるやうな場合にも少しも隱さうとは考へなかつた。

流行性の感冒が我孫子の町にもはやつて來た。私はそれをどうかして自家に入れないやうにしたいと考へた。その前、町の醫者が、近く催される小學校の運動會に左枝子を連れて來

る事を妻に勸めてゐた。然しその頃は感冒がはやり出して居たから、私は運動會へは誰もやらぬ事にした。實際運動會で大分病人が多くなつたといふ噂を聽いた。私はそれでも時々東京に出た。而して可恐々々自動電話をかけたりした。然し幸に自家の者は誰も冒されなかつた。隣まで來てゐて何事もなかつた。女中を町へ使にやるやうな場合にも私達は愚圖愚圖店先で話し込んだりせぬやうにと八釜しくいつた。女中達も衞生思想からではなしに、吾々の騷ぎ方に釣込まれて、恐しがつてゐる風だつた。兎も角可恐がつてゐてくれゝば私は滿足だつた。

我孫子では毎年十月中旬に町の青年會の催しで旅役者の一行を呼び、もとの小學校の校庭に小屋掛をして芝居興行をした。夜芝居で二日の興行であつた。私の家でも毎年その日は女中達をやつてゐた。然し今年だけは特別に禁じて、その代り感冒でもなくなつたら東京の芝居を見せてやらうといふやうな事を私は妻と話してゐた。

「こんな日に芝居でも見に行つたら、誰でも屹度風邪をひくわねえ」庭の井戸で洗濯をしてゐた石が縁を掃いてゐるきみに大きい聲でこんな事をいつてゐたさうだ。妻から聞いた。見す見す病人をふやすに決つた、そんな興行を何故中止しないのだらうと思つた。

私は夕方何かの用で一寸町へいつた。薄い板に市川某、尾上某と書いた庵看板が舊小學校の前に出してあつた。小屋は舞臺だけに幕の天井があつて見物席の方は野天で、下は藁むしろ一枚であつた。餘り聞いた事もない土地から贈られた雨ざらしの幟が四五本建つてゐた。かういへば總てが見窄しいやうであるが、若い男や若い女達が何となく亢奮して忙しさうに働いてゐる所は中々景氣がよかつた。沼向うからでも來たらしい、いゝ着物を着た娘達が所々にかたまつて場の開くのを待つてゐた。

歸つて來る途、鎭守神の前で五六人の芝居見に行く婆さん連中に會つた。申合はせたやうに手織木綿のふく〳〵した半纏を着て、提灯と辨當を持つて大きい聲で何か話しながら來る。或る者は竹の皮に包んだ辨當をむき出しに大事さうに持つてゐた。皆の眼中には流行感冒などあるとは思へなかつた。私は歸つてこれを妻に話して「明後日あたりから屹度病人がふえるよ」と云つた。

その晩八時頃まで茶の間で雜談して、それから風呂に入つた。前晩はその頃はもう眠つてゐたが、其晩は風呂も少し晩くなつてゐた。二人が濟んだ時に、

「空いたよ。餘りあつくないから直ぐ入るといいよ」妻は臺所の入口から女中部屋の方へさう聲をかけた。

「はい」ときみが答へた。

「石はどうした。ゐるか？」私は茶の間に坐つたまゝ訊いてみた。

「石もゐるだらう？」と妻が取次いでいつた。

「一寸元右衞門の所へ行きました」

「何しにいつた」私は大きい聲で訊いた。これは怪しいと思つたのだ。

「薪を賴みに參りました」

「もう薪がないのかい？……又何故夜なんか行つたんだらう。明い内、いくらも暇があつたのに」と妻も云つた。

きみは默つて居た。

「そりやいけない」と私は妻にいつた。「そりやお前、元右衞門の家へ行つた所で、夫婦共芝居に行つて留守に決つてるぢやないか。石は屹度芝居へ行つたんだ。二人共ゐなかつたから、それを賴みに出先へ行つたといつて芝居を見に行つたんだ」

「でも、今日石は何かいつてたねえ、いゝきみ。ほら洗濯してゐる時。眞逆そんな事はないと思ひますわ」

「いや、それは分らない。いゝきみ、お前直ぐ元右衛門の所へいつて、石を呼んでおいで」

「でも、眞逆」と妻は繰返した。

「薪がないつて、今いつたつて、あしたの朝いつたつて同じぢやないか。あしたの朝、焚くだけの薪もないのか？」

「それ位あります」いゝきみは恐る〳〵答へた。

「何しろ直ぐお前迎へにいつておいで」から命じて私は不機嫌な顔をしてゐた。

「貴方があれ程いつてゐらつしやるのをよく知つてゐるんですもの、幾らなんでも……」

そんな事をいつて妻も茶の間に入つて來た。

二人は默つてゐた。女中部屋で何かごと〳〵いはしてゐたが、その内靜かになつたので、私は、

「いゝきみは乾度眠つてゐるよ。元右衛門の所にゐない事を知つて居るらしいもの。居れば直ぐ歸つて來るが、直ぐでないと芝居へ行つてゐたんだ。何しろ馬鹿だ。何方にしろ馬鹿だ。行けば大馬鹿だし。行かないにしても、疑はれるにきまつた事をしてゐるのだからね。順序が決まり過ぎてゐる。行つたら居なかつたから、それを云ひに行つたといふ心算なんだ」

妻は耳を欹てゝゐたが、

「いゝきみは行きませんわ」と云つた。

「呼んで御覽」

「いゝきみ。いゝきみ」と妻が呼んだ。

「はい」

「行かなかつたのかい。……行かなかつたら、早くお風呂へ入るがいゝよ」

「はい」いゝきみは元氣のない聲で答へた。

「乾度もう歸つて參りますよ」妻は切りに善意にとつてゐた。

「歸るかも知れないが、何しろ、あいつはいかん奴だ。若しそんなうまい事を前に云つて置きながら行つたなら、出して了へ。その方がいい」

私達二人は起きてゐようと云つたのではなかつたが、もう歸るだらうといふ氣をしながら茶の間で起きてゐた。私は本を見て、妻は左枝子のおでんちを縫つてゐた。而して十二時近くなつたが、石は歸つて來なかつた。

「行つたに決つてるぢやないか」

「今まで歸らない所を見ると本統に行つたんでせうね。本統に憎らしいわ、あんなうまい事を云つて」

私は前日東京へ行つてゐたのと、少し風邪氣だつたので、萬一を思ひ、自分だけ裏の六疊に床をとらして置いた。丁度左枝子が眼をさまして泣き出したので、妻は八疊の方に、私は裏の六疊の方に入つた。私は一時頃まで本を見て、それからランプを消した。

間もなく飼犬がけたゝましく吠えた。然し直ぐ止めた。石が歸つたなと思つた。戸の開く音がするかと思つたが、そんな音は聞こえなかつた。

翌朝眼をさますと私は寢たまゝ早速妻を呼んだ。

「石はなんて云つてる」

「芝居へは行かなかつたんですつて。元右衛門のかみさんも風邪をひいて寢てゐて、それから石の兄さんが丁度來たもんで、つい話し込んで了つたんですつて」

「そんな事があるものか。第一元右衛門のかみさんが風邪をひいてゐるなら其處に居るのだつていけない。石を呼んで呉れ」

「本統に行かないらしいのよ。風邪が可恐いからといつて兄さんにも止めさせたんですつて。兄さんも芝居見に出て來たんですの」

「石。石」私は自分で呼んだ。石が來た。妻は入れ代つて向うへ行つて了つた。
「芝居へ行かなかつたのか？」
「芝居には參りません」いやに明瞭した口調で答へた。
「元右衛門のかみさんが風邪をひいてゐるのに何時までもそんな所にゐるのはいけないぢやないか」
「元右衛門のかみさんは風邪をひいてはゐません」
「春子が左ういつたぞ」
「風邪ひいてゐません」
「兎も角疑はれるに決つた事をするのは馬鹿だ。若し行かないにしても行つたらうと疑はれるに決つた事ではないか。……それで薪はどうだつた」
「沼向うにも丁度切つたのがないと云つてました」
「お前は本統に芝居には行かないね」
「芝居には參りません」
　私は信じられなかつたが、答へ方が餘りに明瞭してゐた。然し調子は澄んでなかつた。緣に膝をついてゐる石の顏色は光を背後から受けて居て、まるで見えなかつたが、其言葉の調子には僞りを云つて居るやうな所は全くなかつた。それ故妻は素直に石のいつた通りに信じてゐる。私も左うかも知れないといふ氣を持つた。が、何んだか腑に落ちなかつた。調べれば直ぐ知れる事だが調べるのは不愉快だつた。後で私は「あゝ明瞭云ふんなら、それ以上疑ふのは厭だ。……然し兎も角あいつは嫌ひだ」こんな事を妻にいつた。
「そりやあ、あゝいつてゐるんですもの、眞逆嘘ぢやありますまいよ」
「なるべく然し左枝子を抱かさないやうにしろよ」
　根戸にゐる從弟が來たので、私は上の地面の書齋へ行つて話してゐた。而して暫くするとキャア〱といふ左枝子の聲がして、それを抱いた石を連れて妻が登つて來た。石はもう平常通りの元氣な顏をして左枝子の對手になつて、何かいつてゐる。私は一番先に妻の無神經に腹を立てた。
「をぢちやま御機嫌よう」こんな調子に少し浮き浮きしてゐる妻に、
「馬鹿。石に左枝子を抱かしてちやあ、いけないぢやないか。二三日はお前左枝子を抱いちやあ、いけない」私は不機嫌を露骨に出していつた。妻も石もいやな顏をした。
「いらつちやい」妻は手を出して左枝子を受取らうとした。妻は石に同情しながら慰めるわけにも行かない變な氣持でゐるらしかつた。すると左枝子は、
「うゝう、うゝう」と首を振つた。
「いゝえ、いけません。いゝや御用。ちやあちやんにいらつしやい」
「うゝう、うゝう」と左枝子は未だ首を振つてゐた。石は少しボンヤリした顏をしてゐたが、妻にそれを渡すと、其まゝ小走りに引きかへして行つた。その後を追つて、左枝子が切りに、
「いゝや！いゝや！」と大きな聲を出して呼んだが、石は振りかへらうともせず、うつ向いたまゝ駈けて行つて了つた。
　私は不愉快だつた。如何にも自分が暴君らしかつた。――それより皆から暴君にされたやうな氣がして不愉快だつた。石は素より、妻や左枝子までが氣持の上で自分とは對岸に立つてゐるやうに感じられた。いやに氣持が白けて暫くは話もなかつた。間もなく從弟は裏の松林をぬけて歸つて行つた。それから三十分程して、私達も下の母屋の方へ歸つて行つた。
「石。石」と妻が呼んだが、返事がなかつた。

「いゝ　きみ。いゝきみもゐないの？……まあ二人共何處へいつたの？」
妻は女中部屋へいつて見た。
「着物を着かへて出かけたやうよ」
「馬鹿な奴だ」私はムッとして云つた。
私には兼ねてから、そのまゝ信じていゝ事は疑はずに信ずるがいゝといふ考へがあつた。誤解や曲解から悲劇を起すのは何より馬鹿氣た事だと思つて居た。今朝石が芝居には行かなかつたと斷言した時に私はその儘になるべく信じられたら信じてやりたく思つてゐた。實際、嘘に決つてゐる、といふ風にも考へなかつた。半信半疑のまゝ、其半疑の方をなくなさうと知らず知らず努力してゐた形であつた。所が半信半疑と思ひながら實は全疑してゐたのが本統だつた。かういふ氣持の不統一は、それだけで既にかなり不愉快であつた。所で二人共逃げて行つた。私は益々不愉快になつた。而して若しも石が實際行かなかつたのなら、自分の疑ひ方は少し慘酷過ぎたと思つた。石が沼向うの家に歸つて、泣きながら兩親や兄にそれを訴へてゐる樣子さへ想ひ浮ぶ。誰が聞いても解らず屋の主人である。つまらぬ暴君である。第一自分は左ういふ考へを前の作物に書きながら、實行ではそのまるで反對の愚をしてゐる。これはどういふ事だ。私は自分にも腹が立つて來た。
「お父樣があんまり執拗くおうたぐりになるからよ。行かない、とあんなに明瞭云つてゐるのに、左枝子を抱いちやあいけないの何んの……誰だつてそれぢやあ立つ瀨がないわ」
氣がとがめてゐる急所を妻が遠慮なくつッ突き出した。私は少しムカムカとした。
「今頃そんな事をいつたつて仕方がない。今だつて俺は石のいふ事を本統とは思つてゐない。お前まで愚図々々いふと又癇癪を起すぞ」私は形勢不穩を現す眼つきをして嚇かした。
「お父樣のは何かお云ひ出しになると、執拗いんですもの、自家の者ならそれでいゝかも知れないけど……」
「默れ」
女中が二人共ゐなくなつたら覿面に不便になつた。チョコチョコ歩き廻る左枝子を常に一人は見てゐなければならなかつた。而して私は左枝子の守りは十五分とするともう閉口した。他に誰か居ればそれ程でもないが、一人で遊ばすと私の方でも左枝子の方でも直ぐ厭きて了つた。
「いゝや！　いゝや！」左枝子は時々左ういつて女中を呼んだ。石もきみも左枝子は「いゝや」であつた。妻は如何にも不愉快らしく口數をきかずに、左枝子を負ぶつて働いてゐた。
「晩めしはあるか」
「たきますわ」
「菜はどうだ」
「左枝子を遊ばしてゝ下されば、これから町へいつてお魚か何か取つて來ますわ」
「町の使は俺がいつてやる。それに二人共ほつても置けない。遠藤と元右衛門の所へいつて話して來よう」此二人が二人を世話してよこしたのである。
「左うして頂きたいわ」
四時頃だつた。私は財布と風呂敷を持つて家を出た。
田圃路を來ると二三町先の渡舟場の方から三人連れの女が此方へ歩いて來るのが見えた。石、いゝときみとそれから石の母親らしかつた。元右衛門の家の前に立止つて少時此方を見てゐたが三人共入つて行つた。私は自分の疑ひ過ぎた點だけは兎も角先に認めてやらう、而してどうせ向うで暇を貰ひたいといふだらうから、左うしたら、仕方がない暇をやらうと考へた。
元右衛門の屋敷へ入つて行くと土間への大戸

が閉まつてゐて、その前に石の母親ときみと裸足になつてる元右衛門のかみさんとが立つてゐた。きみは泣いた後のやうな赤い眼をしてゐた。此事には全く關係がない筈なのに何故一緒に逃げたり、泣いたりするのだらうと思つた。

「俺の方も少し疑ひ過ぎたが……」左う云ひかけると、

「馬鹿な奴で、御主人樣は爲めを思つて云つて呉れるのを、隣りのおかみさんに誘はれたとか、おきみさんと三人で芝居見に行つたりして、今も散々小言を云つた所ですが……」母親はこんなに云ひ出した。私は默つてゐた。

「何ね、二藤とか見たぎりだとか」と母親は元右衛門のかみさんを顧みた。

「私、ちつとも知らなかつた」元右衛門のかみさんは自身がそれに全く無關係である事を私に知つて貰ひたいやうにいつた。

「矢張り行つたのか」

「へえ、己の爲めを思つていつて下さるのが解らないなんて、何といふ馬鹿な奴で」

「きみ、お前はこれを持つて直ぐ町に行つて魚でも何んでも買つて來てくれ。……それからお前には家でよく話したいから、來てくれ」私は石の母親にいつた。

「お暇になるやうなら、これから宵は直ぐお貰ひ申して行きたいと思つて……」と母親はいつた。

「そりや、何方でもいゝ」と私は答へた。而して石には暇をやる事を心で決めた。

きみが使から歸つた時に一緒に行くといふので、私だけ一人先に歸つて來た。

「矢張り行つたんだ」私は妻の顏を見るといつた。私は自分の思つた事が間違ひでなかつた事は滿足に感じてゐた。然し明瞭と嘘をいふ石は恐しかつた。左枝子が下痢をした場合、何か他所で食はせはしなかつたかと訊いた時、食べさせませんと斷言をする。或は、自身が守りをしてゐて、うつかり高い所から落すとする。而して横腹をひどく打つとする。あとで發熱する。原因が知れない。左ういふ時、別に何もありませんでしたと斷言する。これをやられては困ると私は思つた。

「お父樣、誰にお聞きになつて？」

「石の母親から聞いた。元右衛門の家に今皆來る所に會つたのだ」

妻は呆れたといふやうに默つてゐた。

「石はもう歸さう。あゝいふ奴に守りをさして置くのは可恐いよ。今に荷を取りに來る」

石を歸す事には妻も異存ない風であつた。然し私はこれから間もなく其處に起るべき不愉快な場面を考へると厭な氣持になつた。私は一人その間だけその場を避けたいやうな氣も起したが、それは妻も同樣なので仕方がなかつた。

石の親子の來るのを待つてゐた。何かいつて石にお辭儀をされた場合、心に當惑する自分でも妻でも眼に見えた。然し私は石をその儘に置く事は仕まいと思つた。私は暫く此不愉快な氣持を我慢しようと思つてゐた。

使にやつたきみが中々歸つて來ない。少し晩過ぎる。多少心配になつて、私はぶら〳〵と又町の方に行つてみた。坂の上まで來た時に丁度他所から歸つて來た友達に會つた。私はその立話で前晩からの石の事を話した。私の話は感情を離れた雜談にはなり得なかつた。或る餘り感じのよくない私情に卽き過ぎてゐた。友達とは離れ〳〵な氣持であつた。私はそんな話を今云ひ出した事を悔いた。私は別れて町の方へ行つた。魚屋へ行くときみは今歸つた所だといつた。何處かで擦違つたのだ。又元右衛門の所へ歸つて來ると、石は何か大きい聲で話してゐたが、私の姿を見ると急いで土間に隱れて

了つた。其處にきみが來たので、皆連れて來るやうにいつて私は先に歸つて來た。
「お前よく云つて見れ。なるべくあつさりいふがいゝよ」
「よく云ひ聞かしても……駄目ネ」と妻は私の顔色を覗ひながら云つた。
「一時は不愉快でも思ひ切つて出して了はないと又同じ事が繰返るよ」
「左うネ」
臺所の方に三人が入つて來た。妻は左枝子を私に預けて直ぐ女中部屋の方へいつた。
左枝子を抱いて緣側を歩いてゐると石の母親が庭の方から挨拶に來た。
「永々お世話樣になりまして、……」といつた。
石は末つ子で十三まで此母の乳を飲んだとか、母親には殊に大事な娘らしかつた。石の母親が感じてゐる不愉快は笑顔をしても、丁寧な言葉遣ひをしても、隱し切れなかつた。顔色が變に惡かつた。而して眼が涙を含んでゐた。私は氣の毒に思つた。然し此年寄つた女の胸に渦卷いてゐる、私に對する惡意をまざ／＼と感ずると、此方も餘りいゝ氣はしなかつた。嘘に對し、私達は子供から嚴格過ぎる位嚴格に敎へられて來た。所が、石も、石の母親も嘘に對しては、それが嘘に止まつてゐる場合、何もそんなに騷ぐ事はないと思つてゐるらしかつた。却つてそれを云ひ立てゝ娘を非難する主人の方が遙かに性の惡い人間に見えたに違ひない。私は石に就いて、今度の事は兎も角も惡い、然しこれまで石が不正な事をしたと思つた事は一度もなかつたし、左枝子の事も不純に心配してくれた事は認めてゐるし、といふやうな事を云つた。私は石に汚名をつけて出したといふ事になるのは厭だつた。左枝子の爲めに、これでは安心出來ない自分達の神經質から暇を取つて貰ふのだからと云ふ風に、前に「兎も角惡い」といつた言葉をさへ緩めて云つた。然し母親にはそんな言葉を丁寧に聽く餘裕はなかつた。而して荷作りを濟ました石を呼んで、石にも挨拶をさせた。石は赤い眼をして工合惡さうに、只お辭儀をした。
「お父樣」と座敷の内から妻が小手招きをしてゐる。寄つて行くと、
「もう少し置いて頂けない？」と小聲で哀願するやうに云つた。妻も眼を潤ませてゐた。
「狹い土地の事ですから失策で出されたといふと、後迄も何か云はれて可哀想ですわ。それに關の事もありますし、關の家へはよくしてやつて、石の家にはこんな事になつたとすると、大變角が立ちますもの。關の家と石の家とは只でも仲が惡いんですから、こんな事があると何ですわ。ね、左うして頂けない？　その内角を立てずに暇を取つて貰へば、いゝんですもの。石だつて今度で懲りたでせうよ。もうあんな嘘は乾度つきませんよ。……左うして頂けなくつて？」
「……そんなら、よろしい」
「ありがたう」
妻は急いで臺所の方へいつて、石親子が門を出た所を呼び返して來た。
關といふのは石と同じ村の者で私の友達の家へ女中にいつてゐたが、昔私の家の書生だつた、或る鑛山の技師と私達が仲人になつて結婚さした女である。關の家と石の家とは前から仲がよくなかつた。例へば石の家の山を止めさして置いて初茸狩りに行くやうな場合、關の家でも何か用意して置くと、自家のお客樣だからと、わざ／＼遠廻りまでして私達を關の家へは寄らせぬ算段をした。こんな風だつたから私達との事は此儘で濟むとしても私達の一方によく、他方に惡かつた事が後まで兩方の家に思はぬ不快な根を殘し兼ねなかつたのである。妻

としては大出來だつた。

其晩私は裏の六疊で早くから床へ入つて本を見てゐると、

「今ネ」左う云ひながら妻はニコ／＼して入つて來た。「旦那樣はそりやあ可恐い方なんだよ。いくら上手に嘘をついたつて皆心の中を見透してお仕舞ひになるんだからネ……、かう云つてやつたら、吃驚したやうな顏をして、はあ、はあ、つて云つてるの」妻はクス／＼笑ひながら首を縮めた。

「馬鹿」

「いゝえ、其位に云つて置く方がいゝのよ」と妻は眞面目な顏をした。

下

所が石は未だ本統の事を云つてゐなかつた。實は一人で行つたのであつた。それをきみまで同類にして知らん顏をしてゐた。此事は少し氣に食はなかつた。前からきみの行かなかつた事を私は知つてゐた。少くも十一時半までは家にゐたのを私は知つてゐる。私の怒つてゐるのを承知で、それから出掛けるのも變だし、萬一出掛けたとすれば、それは石を迎ひに行つたに違ひないと思つてゐた。所が石は母親にきみと一緒に行つたといつて、その儘にしてゐる。私は、或時、それを妻に云ふかも知れないと、待つやうな氣持でゐた。然し石は遂にその事は知らん顏をして了つた。忘れて了つたのかも知れない。或は最初から氣にしなかつたのかも知れない。兎も角妻の御愛嬌な嚇しは餘り役には立つてゐなかつた。

石は全く平常の通りになつて了つた。然し私は前のやうな氣持では石を見られなかつた。何んだか嫌になつた。それは道學者流に非難を持つといふよりはもつと只何んとなく厭だつた。私は露骨に石には不愛想な顏をしてゐた。

三週間程經つた。流行感冒も大分下火になつた。三四百人の女工を使つてゐる町の製絲工場では四人死んだといふやうな噂が一段落ついた話として話されてゐた。私は氣をゆるした。

丁度上の離れ家の廻りに木を植ゑる爲めに其頃毎日二三人の植木屋がはひつて居た。Yから貰つた大きな藤の棚を作るのにも、少し日がかゝつた。私は毎日植ゑる場所の指圖や、或時は力業の手傳ひなぞで晝間は主に植木屋と一緒に暮してゐた。

而してたうとう流行感冒に取附かれた。植木屋からだつた。私が寝た日から植木屋も皆來なくなつた。四十度近い熱は覺えて初めてだつた。腰や足が無暗にだるくて閉口した。然し一日苦んで、翌日になつたら非常によくなつた。所が今度は妻に傳染した。妻に傳染する事を恐れて直ぐ看護婦を頼んだが間に合はなかつたのだ。此上はどうかして左枝子にうつしたくないと思つて、東京からもう一人看護婦を頼んだ。

一人は妻に一人は左枝子につけて置く心算だつたが、妻と離されてゐる左枝子は氣六ケしくなつて、中々看護婦には附かなかつた。間もなくきみが變になつた。用心しろと八釜しく云つてゐるのを無理をしたので、倘惡くなつた。人手がないのと、本人が心細がつて泣いてゐるので、時々此方の醫者に行つて貰ふ事にして、車で半里程ある自身の家へ送つてやつた。然し暫くするとこれはたうとう肺炎になつて了つた。

今度は東京からの看護婦にうつつた。今なら歸れるからとかなり熱のあるのを押して歸つて行つた。仕舞に左枝子にも傳染つて了つて、健康なのは前にそれを濟まして居た看護婦と、石とだけになつた。而して此二人は驚く程によく働いてくれた。

未だ左枝子に傳染すまいとしてゐる時、左枝子は毎時の習慣で乳房を含まずにはどうしても

寢つかれなかつた。石がおぶつて漸く寢つかせたと思ふと直ぐ又眼を覺まして暴れ出す。石は仕方なく、又おぶる。西洋間といつてゐる部屋を左枝子の部屋にして置いて、私は眼が覺めると時々その部屋を覗きに行つた。一枚の半纏でおぶつた石がいつも坐つたまゝ眼をつぶつて體を搖すつて居る。人手が足りなくなつて晝間も普段の倍以上働かねばならぬのに夜はその疲れ切つた體でからして横にもならずにゐる。

私は心から石にいゝ感情を持つた。私は今まで露骨に邪見にしてゐた事を氣の毒でならなくなつた。全體あれ程に八釜しくいつて置きながら、自身輸入して皆に傳染させ、暇を出すとさへ云はれた石だけが家の者では無事で皆の世話をしてゐる。石にとつてはこれは痛快でもいい事だ。私は痛快がられても皮肉をいはれても仕方がなかつた。所が石はそんな氣持は氣振りにも見せなかつた。只一生懸命に働いた。普段は餘りよく働く性とは云へない方だが、その時はよく續くと思ふ程に働いた。その氣持は明瞭とは云へないが、想ふに、前に失策をしてゐる、その取り返しをつけよう、左う云ふ氣持からではないらしかつた。もつと直接な氣持からしかつた。私には總てが善意に解す事が出來て來た。私達が困つてゐる、だから石は出來るだけ働いたのだ。それに過ぎないと云ふ風に解れた。長い事、樂みにしてゐた芝居がある、どうしてもそれが見たい。嘘をついて出掛けた。その嘘が段々仕舞には念入りになつて來たが、嘘をつく初めの單純な氣持は、困つてゐるから出來るだけ働かうと云ふ氣持と石では左う別々な所から出たものではない氣がした。

私達のは幸に簡單に濟んだが肺炎になつたきみは中々歸つて來られなかつた。而して病人の中にゐて、遂にかゝらずに了つた石はそれからもかなり忙しく働かねばならなかつた。私の石に對する感情は變つて了つた。少し現金過ぎると自分でも氣が咎める位だつた。

一ケ月程していゝきみが歸つて來た。暫くすると、それまで非常によく働いてゐた石は段々元の杢阿彌になつて來た。然し私達の石に對する感情は惡くはならなかつた。間拔けをした時はよく叱りもした。が、ギリ〳〵と不機嫌な顏で困らすやうな事はしなくなつた。大概の場合、叱つて三分あとには平常の通りに物が云へた。

四谷に住んでゐるKが正月の初旬から小田原に家を借りて、家中で其處へ行く事になつたので、私達はそれと入代りに我孫子からKの留守宅に來て住む事にしてゐた。私には丸五年振りの東京住ひである。久振りの都會生活を私は樂みにしてゐた。

その前から石には結婚の話があつた。先は我孫子から一里餘りある或る町の穀屋といふ事だつた。私達が東京へ來ると同時に暇をとるといふので、私達もその氣で後を探したが中々いい女中が見當らなかつた。

或時妻は誰からか、石の行く先の男は今度が八度目の結婚だといふ噂を聽いて、それを石に話した。而して兎も角もつとよく調べる事を勸めた。後で妻は私にこんな事をいつた。

「石は餘り行きたくないんですつて。何んでもお父さんが一人で乘氣で、兎に角行つて見ろ、その上で氣に入らなかつたら、歸つて來いつて云ふんですつて。どうも其處が當り前とは大分違ひますのネ。行く前に充分調べて、行つた以上は如何な事があつても歸つて來るな、なら解つてゐるが、歸るまでも、一度は行つて見ろと云ふのには變ネ—」

その後暫くして石の姉が來て、その先は噂の八人妻を更へたといふ男とは異ふ事が知れた。而して、石は少しも厭ではないのだと姉は

云つてゐたさうだ。

石は先の男がどう云ふ人か恐らく少しも知らずに居るのではないかと思つた。寫眞を見るとか、見合ひをするとかいふ事もないらしかつた。何しろ田舍の結婚には驚く程呑氣なのがあるのを私は知つてゐる。結婚して初めて、此家だつたのかと思つたといふやうなのがある。私の家の隣りの若い方のかみさんがそれだ。來て見たら、自分の思つてゐた家の隣りだつた。而して、貧乏なので失望したといふ話を私の家の前にゐた女中にしたさうだ。然しその家族は今老人夫婦、若夫婦で、貧乏はしてゐるらしいが至極平和に暮らしてゐる。

「石の支度は出戻りの姉のがあるので、それをそつくり持つて行くんですつて。何んだか直でいゝわね」妻は面白がつてゐた。

石の代りはなかつたが、日が來たので私達は運送屋を呼んで東京行きの荷造りをさした。而して翌朝私達も出かけるといふ夕方になると、急に石は矢張り一緒に行きたいと云ひだした。

「何んだか、ちつとも解りやしない。お嫁入りまでにお針の稽古をするから是非暇をくれと云ふかと思ふと、又急にそんな事を云ひ出すし。皆が支度をするのを見てゐる内に、急に羨しくなるのね。子供がさうですわ」と妻がいつた。

それを云ひに歸つた石と一緒に翌朝來た母親は繰返し／＼どうか二月一杯で必ず歸して貰ひたいと云つてゐた。

上京して暫くすると左枝子が麻疹をした。幸に輕い方だつたが、用心は嚴重にした。石もきみもその爲めには中々よく働いた。一月半程していよ／＼石の歸る時が近づいたので、或日二人を近所へ芝居見物にやつた。何か恐しい者が出て來たとか、石は一幕の間、どうしても震へが止まらなかつたのを暫くして、やつと直つたと云ふ話がある。

いよ／＼石の歸る日が來たので、先に荷を車夫に屆けさして置いて、丁度天氣のいゝ日だつたので、私は妻と左枝子を連れて一緒に上野へ出かけた。停車場で車夫から受取つた荷を一時預けにして置いて、皆で動物園にいつた。而して二時何分かに又歸つて改札口で石を送つてやつた。

私達には永い間一緒に暮らした者と別れる或る氣持が起つてゐた。少し涙ぐんでゐた石にもそれはあつたに違ひない。然しその表れ方が私達とは全く反對だつた。石は甚く不愛想になつて了つた。妻が何かいふのに碌々返事もしなかつた。別れの挨拶一つ云はない。而して別れて、プラットフォームを行く石は一度も此方を振向かうとはしなかつた。よく私達が左枝子を連れて出掛ける時、門口に立つていつまでも見送つてゐる石が、かうして永く別れる時に左枝子が何か云ふのに振向きもしないのは石らしい反つて自然な別れの氣持を表してゐた。

私達が客待自動車に乘つて歸つて來る時、左枝子は切りに「いゝや、いゝや」といつてゐた。

石がゐなくなつてからは家の中が大變閑散になつた。夏から秋になつたやうに淋しくも感じられた。

「芝居を見にいつた時、出さなくて矢張りよかつた」

「石ですか？」と妻がいつた。

「うん」

「本統に、そんなにして別れると矢張り後で寢覺めが惡う御座いますからね」

「あの時歸して了へば石は仕舞ひまで、厭な女中で俺達の頭に殘る所だつたし、向うでも同樣、厭な主人だと生涯思ふ所だつた。兩方と

も今と其時と人間は別に變りはしないが、何しろ關係が充分でないと、いゝ人同士でもお互に惡く思ふし、それが充分だといゝ加減惡い人間でも憎めなくなる」

「本統に左うよ。石なんか、缺點だけ見れば隨分ある方ですけれど、又いゝ方を見ると、中々捨てられない所がありますわ」

「左枝子の事だと中々本氣に心配してゐたネ」

「左うよ。左枝子は本統に可愛いらしかつたわ」

「居なくなつたら急によくなつたが、左枝子が本統に可愛かつたは少し慾目かな。左うさへしてゐれば此方達の機嫌はいゝからネ」

「全くの所、幾らかそれもあるの」といつて妻も笑つた。「だけど、それだけぢや、ありませんわ。此間もきみと二人で何を怒つてゐるのかと思つたら、Tさんが、左枝ちやんは別嬪さんになれませんよ、と仰有つたつて二人で怒つてゐるの。何故そんな事を仰有つたか分らないけれど、Tさんは大嫌ひだなんて云つてるの」

二人は笑つた。妻は、

「今頃田舍で嚔をしてますよ」と笑つた。

石が歸つて一週間程經つた或晩の事だ。私は出先から歸つて來た。而して入口の鐘を叩くと、其時戸締りを開けたのは石だつた。思ひがけなかつた。笑ひながら石は元氣のいゝお辭儀をした。

「何時來た？」私も笑つた。私は別に返事を聽く氣もなしに後の戸締りをしてゐる石を殘して茶の間へ來た。左枝子を寢かしてゐた妻が起きて來た。

「石はどうして歸つて來たんだ」

「私が此間端書を出した時、お嫁入りまでに若し東京に出る事があつたら是非おいで、と書いたら、それが讀めないもんで學校の先生の所へ持つていつて讀んで貰つたんですつて。するとこれは是非來いといふ端書だといふんで、早速飛んで來たんですつて」

「丁度いゝ。で、暫くゐられるのか？」

「今月一杯ゐられるとか」

「左うか」

「歸つたらお嬢樣の事ばかり考へてゐるんで、自家の者から久振りで歸つて來て、何をそんなにボンヤリしてるんだ、と云はれたんですつて」

石は今、自家で働いてゐる。不相變きみと一緒に時々間拔けをしては私に叱られてゐるが、もう一週間程すると又田舍へ歸つて行く筈である。而して更に一週間すると結婚する筈である。良人がいゝ人で、石が仕合せな女となる事を私達は望んでゐる。

（大正八年三月）

十一月三日午後の事

晩秋には珍しく南風が吹いて、妙に頭は重く、肌はジメ〳〵と氣持の惡い日だつた。自分は座敷で獨り寢ころんで旅行案內を見て居た。差當り實行の的もなかつたが、空想だけでもかう云ふ日には一種の清涼劑になる。而して眠れたら眠る心算で居た。其處に根戶に居る從弟が訪ねて來た。

自分は起きて緣側に出た。從弟は庭に溢れてゐる井戶で足を洗ひながら、

「今日大分大砲の音がしましたネ」と云つた。

「あつちの方に聽えたネ。小金ケ原あたりかしら」

「演習がもう始まつたんだな。昨日停車場へ行つたら馬が澤山來てゐた」

從弟は足を拭いて上つて來た。二人は椅子の部屋に來た。從弟は自分の手にある旅行案內を見ると、

「そんな物を見て何かむほんの計畫でもあるんですか」と云つた。

二人は旅行の話をした。九州の方へ行くとすると汽車より汽船行きか何か、船の方が面白さうだといふやうな話をした。而して長崎までの汽車賃と船賃とをその本で調べたりした。

蜂が四五疋鈍いなりに羽音をたてゝ其邊を飛び廻つた。每年今頃になると寒さに弱つた蜂が日當りのいゝ此部屋の天井へ來て集まる。今年は子供がそれを手づかまへにしかねないので、氣がつくと蠅たゝきで殺して居た。で、今も自分は從弟と話しながらそれ等を殺しては捨てゝ居た。

「今日は七十三度だよ」

「七十三度といふとどうなんです」

「今頃七十三度は暑いぢやないか。一寸した山なら夏の盛りだ」

「それに蒸すんですよ。蒸すからこんなに頭が變なんですよ」左う從弟の方で說明した。而して「今まで晝寢をしてゐたんだけど……」と顏をしかめながら大分延びた丸刈の髮を兩手の指で逆にかき上げた。

「久しぶりで散步でもしようか」

「しよう」

「柴崎に鴨を買ひに行かうか」

「いゝでせう」

自分は妻に財布とハンケチを出さした。妻は、

「町のお使は如何するの？　其[illegible]は今晩は祝日なの？」と云つた。

「今晩は祝日だ」

二人は庭から裏の山へ出た。西の空が一寸嶮しい曇り方をして居た。畑から子の[illegible]道に出て、暫く行つて又畑の間を小學校の方へまがつた。成田線の踏切りを越して行く騎兵の一隊が遠く見えた。皆帽に白い布を卷いて居た。

暫くして自分達も其踏切りを越した。すると今度は後から步兵の一隊が來た。其時それはかなり遠かつた。二人は餘り注意もせずに話しながら來たが、其一隊は寧ろ案外な早さで間もなく自分達の直ぐ背後に迫つて來た。

「乾度敵を追ひかけて居るんですよ」と從弟が云つた。

此蒸暑いのに皆外套を着て居る。幾ら若くてもそれは[illegible]で[illegible]手には凌げないらしい。帽子だけは皆手に持つて居た。それには矢張り白い布が卷いてあつた。然しそれも先頭に步い

てゐた若い士官が一寸後を向いて何か簡單な號令をかけた時に皆は默つて了つた。蒸し風呂から出て來た人のやうな汗の玉が皆の額を流れて居る。而して全く默り込んで、只急ぐ。汗と革類とから來る變な惡臭が一緒について行つた。

十二三間長さの兵隊は間もなく自分達を追拔いて往つた。一足遲れに行く或る一人の疲れ切つた後姿を見ながら從弟は、

「何んだか色んな物がちつとも身體について居ないのネ。もう少し工合よく作れさうなものだ」と云つた。

「外套は二枚持つて歩くのかい？」

「背嚢について居るんですか。あれは毛布でせう」と從弟が云つた。

兵隊は遠ざかつて行つた。往來には常になく新しい馬糞が澤山落ち散つて居た。二人は中學時代に行つた行軍の話などをしながら歩いた。

常磐線の踏切りから切通しのダラ〳〵坂を登つて少し行くと向うの桑畑に散兵してゐるのが見えた。百姓が處々に一トかたまりになつてそれを見物してゐた。

東源寺と云ふ樫の大木で名高い寺への近道の低地のある所から街道を外れて入つた。左手の細道を騎兵が七八騎一列になつて馬を元氣に歩かしながら來た。間もなく自分達は竹藪の中のジュク〳〵した細い坂路を下りて、目的の鴨屋へ來た。

鴨は一羽もなかつた。其朝丁度東京へ出した所だと云ふ。而して今居るのはをしどり位なものです」と云つた。それを見た。然しをしどりは未だ少しも馴れてゐなかつた。隅の隅で出來るだけ小さくなつて、片方の眼だけを此方へ向けて如何にも不安らしい樣子をしてゐた。

「是は未だ雛です。別々に捕つたので親子でないから雌に押されて居るんですよ」主は雌が地面へ嘴をつけたきりで、少し歩いても中腰でヨチヨチしてゐるのを辯解するやうに云つた。

近所の仲間には鴨もある筈だといふので、自分は矢張りそれを頼んだ。二人は主がそれを取つて來る間、一町程先の利根の堤防へ行つて見た。堤防と云つても現在水の流れて居る所までは一里程もあつて、其間は眞菰の生ひ茂つた廣々とした沼地になつてゐる。

二三發續いて銃聲がした。近い所で急に鴨が頓狂な聲で鳴き立つた。遠くの方で小鴨の一群が飛立つた。銃聲は尚續いた。おびやかされるやうに小鴨の群は段々に高く舞上つた。

同じ堤防の上を此方へ向つて十騎程の騎兵が早足で來る。而して間もなく銃聲は止んだ。

二人は堤防を下りて引返して來た。

向うの四つ角で地圖を持つた士官が二三人の兵隊と何か大聲で道の事を訊いて居た。小さい田一つへだてた鴨屋の婆さんが矢張り大きい聲でそれに返事をして居た。士官と兵隊とは急いで教へられた方へ入つて行つた。

自分達が其四つ角まで來た時に青くびの鴨を一羽下げた主と出會つた。自分は其鴨の無邪氣らしい顔を見ると、今二三分の間に殺して了ふのが不快になつた。食ふ爲めに買ひに來て、餘り面白くもない所へ飼ひの鴨を持つて歸るのも考へ物だと思つたが、兎も角殺さずに持つて歸る事にした。

鴨屋へ來ると主はそれを持つて土間を拔けて裏へ運つた。殺す氣かしらと一寸思つた。而して少しいやな氣をしながら、殺して來たら殺したでもいゝと云ふ氣を漠然持つた。すると、

「殺しに行つたんぢやないんですか」と從弟に注意された。で、自分も、

「オイ〳〵殺すんぢやないよ」と大聲で主に注意した。

「此儘お持ちになりますか」主はひねりかけた其手つきのまゝ、土間へ入つて來た。

鴨はあばれもしなければ、鳴きもしなかつた。自分達はそれを風呂敷に包んで貰つて其處を出た。

東漸寺近道の棒杭の所まで歸つて來ると、其處の百姓家に軍馬が二三匹つないであつた。

「兵隊が寢て居る。如何したんだらう」と從弟は百姓家の方を覗き込んで云つた。歩きながらだと、反つて敷居をとほして、それがチラチラと見えた。「休んでゐるのかしら、帽子は布を卷いてませんネ。左うすると先刻のは逃げてゐたんだな」と從弟が云つた。

街道へ出ると、五間程先の道端に上半身裸體にされた兵隊が仰向けに背嚢に倚りかゝつて寢てゐた。一人が看護して居る。胸にハンケチを當てゝ、それに水筒から水をたらして居た。病人は意識も不確らしく、眼をつぶつた儘、力なく口を開けて居た。其横顏だけは汗ばんでかなりに赤い。變な氣がした。立止まつて見るのがいやだつた。

それからダラダラの切通しをドリて來ると其處で二百人許りの歩兵の一隊と擦違つた。かなりの急足で歩いてゐる。隊の中頃へ來て自分は全くまゐつて了つた一人の兵隊を見た。兩側から一人づゝ其腋の下に腕を差込んでまゐつた儘をどんどん隊の歩度で急いで行く。其兵隊はもう眼を開いてはゐなかつた。そして泥醉した人のやうに肩に据らない首を一足毎に仰向けに、或は右に左に振つてゐた。

同じやうな人が又來た。其顏には何の表情もない。苦痛の表情さへも現れない程苦しいのだと云ふ氣がした。丁度踏切りを越える時に足がレールの僅な溝に引懸ると、其人は突飛ばされたやうに前へのめつて了つた。支へてゐた兵隊の腕にも力はなかつた。而して倒れた人は何も云はない。倒れたきりで居る。

急足の隊は其處で一寸さへぎられると後から後から人が溜まりかけた。

「止まつちやいかん」と上官が大きい聲で云つた。流れの水が石で分れるやうに人々は其處で二つに分れて過ぎた。人々の眼は倒れた人を見た。然し默つてゐる。皆は見ながら默つて急ぐ。

「オイ起て、起たんか」頭の所へ立つてゐた伍長が怒鳴つた。一人が腕を持つて引き起さうとした。伍長は續け樣に怒鳴つた。倒れた人は起きようとした。俯伏しに延び切つた身體を縮めて一寸腰の所を高くした。然しもう力はなかつた。直ぐ他愛なくつぶれて了ふ。二三度其動作を繰返した。芝居で斬られた奴が俯伏しになつた場合よくさう云ふ動作をする。それが一寸不快に自分の頭にうつつた。倒れた人は一年志願兵だつた。他の兵隊から見ると脊も低く弱さうだつた。

「これは駄目だ。物を去つてやれ」と士官が云つた。踏切番人のかみさんが手桶に水をくんで急いで來た。自分はそれ以上見られなかつた。而して涙が出て來た。

後から來た從弟が、

「眠つちやいかん、眠つちやいかんつて切りに云つてましたよ」と云つた。

五六間來ると其處にも一人倒れて居た。力なく半分閉ぢた眼をしてゐながら、其兵隊は上半身裸體のまゝ起き上つて歩き出さうとする。それも全く口をきかずに。

「起きんでいゝ。起きんでいゝ」と看護してゐる兵隊が止めた。一人の兵隊が下の田圃で田の水を水筒に入れて居た。從弟は妙な顏をして、それを自分に注意した。

十間程來ると其處に又一人倒れて居た。どれ

もこれもぼんやりと何の表情もない顏をして居る。

自身の背嚢の上に更に二つ背嚢を積上げ、雨の肩に銃を一挺づつかけて、默々として一人歩いて來る若い小柄な兵隊に出會つた。

少し行くと又一人倒れて居た。

「水を少し貰へませんか」それを看護してゐる兵隊が丁度其處へ通りかゝつた四人連れの兵隊を見上げて聲をかけた。「兩方一滴もなくなつちやつた」

「少しあるだらう」とかういつて其内の一人が立止まつて自身の水筒を拔いて渡した。

兵隊は眼をつぶつて仰向けになつてゐる兵隊の口にそれから僅な量をたらし込んだ。次に額に二三滴、ハンケチをかけた胸に二三滴、丁度儀式か何かのやうにたらすと、其僅な水も使ひきらぬやうにして禮を云つて立つて居る兵隊に返した。其兵隊は水筒を受取ると仲間を追つて駈けて行つた。

自分達はそれからも二三町の間に倘四五人左う云ふ人々を見た。

小學校の前で從弟と別れた。そして夕方の畑道を急いで來た。自分は一人になると又興奮して來た。それは餘りに明か過ぎる事だと思つた。それは早晩如何な人にもハッキリしないでは居ない事がらだ。何しろ明か過ぎる事だ、と思つた。總ては全く無知から來てゐるのだと思つた。

自分は何時か道を間違へてゐた。まがる所をまがらずに來たのだ。子の神の入口まで行つて自家の方へ引きかへして來た。

歸ると直ぐ自分は風呂敷の鴨を出して見た。羽がひを交叉して其下に首を仰向けに差込んであつた。此間まで鴨を入れて置いた小屋の中で自分はそれを自由にしてやつた。然し鴨は半死になつてゐた。羽ばたきをして地面をかけようとするが首がもう上がらない。のどを延ばして、それを地面にすりつけて只もがいた。自分は出して池へ放して見た。然し何故か眞直ぐには浮かばない。直ぐ裏がへしになつて白い腹を見せ、バタ〳〵騷いだ。自分は重ね〳〵不愉快になつた。

「オヤ、お父樣が鴨を買つていらした。とうとよ」こんな事をいつて妻が小さい女の子を抱いて出て來た。

「見るんぢやない。向うへ行つて……」自分は何んといふ事なし不機嫌に云つた。而して鴨は女中を呼んで隣の百姓へやつて、殺して貰つた。それを自家で食ふ氣はもうしなかつた。翌日それは他へ送つてやつた。

（大正七年十一月）

城の崎にて

山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、其後養生に一人で但馬の城崎溫泉へ出掛けた。背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷だが、そんな事はあるまいと醫者に云はれた。二三年で出なければ後は心配はいらない。兎も角要心は肝心だからといはれて、それで來た。三週間以上、我慢出來たら五週間位居たいものだと考へて來た。

頭は未だ何んだか明瞭しない。物忘れが烈しくなつた。然し氣分は近年になく靜まつて、落ちついたいゝ氣持がしてゐた。稻の穫入れの始まる頃で氣候もよかつたのだ。

一人きりで誰れも話相手はない。讀むか書くか、ぼんやりと部屋の前の椅子に腰かけて山だの往來だのを見てゐるか、それでなければ散歩で暮らしてゐた。散歩する所は町から小さい流れについて少しづつ登りになつて行く路にいゝ所があつた。山の裾を廻つてゐるあたりの潭になつた所に山女が澤山集まつてゐる。而して尚よく見ると足に毛の生えた大きな水蟹が石のやうに凝然として居るのを見つける事がある。夕方の食事前にはよくこの道を歩いて來た。冷々とした夕方、淋しい秋の山峽を小さい清い流れについて行く時考へる事は矢張り沈んだ事が多かつた。淋しい考へだつた。然しそれには靜かないゝ氣持がある。自分はよく怪我の事を考へた。一つ間違へば今頃は青山の土の下に仰向けになつて寢てゐる所だつたなど思ふ。青い冷たい堅い顏をして、顏の傷も背中の傷も其儘で。祖父や母の死骸が傍にある。それももうお互に何の交渉もなく、――こんな事が想ひ浮ぶ。それは淋しいが、それ程に自分を恐怖させない考へだつた。何時かは左うなる。それが何時か？

今迄はそんな事を思つて其「何時」かを知らず知らず遠い先の事にしてゐた。然し今はそれが本統に何時か知れないやうな氣がして來た。自分は死ぬ筈だつたのを助かつた。何かが自分を殺さなかつた。自分には仕なければならぬ仕事があるのだ。中學で習つた、ロード・クライヴといふ本にクライヴが左う思ふ事によつて激勵される事が書いてあつた。實は自分も左ういふ風に危かつた出來事を感じたかつた。そんな氣もした。然し妙に自分の心は靜まつて了つた。自分の心には何かしら死に對する親しみが起つてゐた。

自分の部屋は二階で隣のない割りに靜かな座敷だつた。讀み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄關の屋根で、それが家へ接續する所が羽目になつてゐる。其羽目の中に蜂の巣があるらしい。虎斑の大きな肥つた蜂が天氣さへよければ朝から暮れ近くまで毎日忙しさうに働いてゐた。蜂は羽目のあはひから摩拔けて出ると一ト先づ玄關の屋根に下りた。其處で羽根や觸角を前足や後足で丁寧に調へると少し歩きまはる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を兩方へシッカリと張つてぶーんと飛び立つ。飛立つと急に早くなつて飛んで行く。植込みの八つ手の花が丁度滿開で蜂はそれに群がつてゐた。自分は退屈するとよく欄干から蜂の出入りを眺めてゐた。

或朝の事、自分は一疋の蜂が玄關の屋根で死んで居るのを見つけた。足は腹の下にちゞこまつて、觸角はダラシなく顏へたれ下がつて了つてゐた。他の蜂は一向冷淡だつた。巣の出入りに忙

しくその脇を這ひまはるが全く拘泥する様子はなかつた。忙しく立働いてゐる蜂は如何にも生きてゐる物といふ感じを與へた。その脇に一疋、朝も晝も夕も見る度に一つ所に全く動かずに俯向きに轉がつてゐるのを見ると、それが又如何にも死んだものといふ感じを與へるのだ。それは三日程その儘になつてゐた。それは見てゐて如何にも靜かな感じを與へた。淋しかつた。他の蜂が皆巣に入つて仕舞つた日暮れ、冷たい瓦の上に一つ殘つた死骸を見る事は淋しかつた。然しそれは如何にも靜かだつた。

晩の間にひどい雨が降つた。朝は晴れて木の葉も地面も屋根も綺麗に洗はれた。蜂の死骸はもう其處になかつた。巣の蜂共は元氣に働きつゝあつた。然し死んだ蜂は雨どよを傳つて地面へ流し出された事であらう。足は縮めた儘、觸角は顏へコビリついたまゝ、多分泥にまみれて何處かで凝然としてゐる事だらう。外界にそれを動かす次の變化が起るまでは死骸は凝然と其處にしてゐるだらう。それとも蟻に曳かれて行くか。それにしろ、それは如何にも靜かであつた。忙しく〳〵働いてばかりゐた蜂が全く動く事がなくなつたのだから靜かである。自分はその靜かさに親しみを感じた。自分は「范の犯罪」といふ短篇小說をその少し前に書いた。范といふ支那人が過去の出來事だつた結婚前の妻と自分の友達だつた男との關係に對する嫉妬から生理的方面の壓迫もそれを助長させてその妻を殺す事を書いた。自分はそれに范の氣持を主にして書いた。然し自分は今は范の妻の氣持を主にして仕舞に殺されて今は墓の下にゐる、その靜かさを書きたいと思つた。

「殺されたる范の妻」を書かうと思つた。それはたうとう書かなかつたが自分にはそんな要求が起つてゐた。其前からかゝつてゐた長篇の主人公の考へとはそれは大變異つて了つた氣持だつたので弱つた。

蜂の死骸が流されて自分の眼界からなくなつた、又間もない事だつた。ある午前自分は圓山川、それからそれの流れ出る日本海などの見える東山公園へ行くつもりで宿を出た。「一の湯」の前から小川はゆるやかに往來の眞中を流れて圓山川へ入る。或所迄來ると、橋だの岸だのに人が立つて何か川の中の物を見ながら騷いでゐた。それは大きな鼠を川へなげ込んだのを見てゐるのだ。鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸許りの魚串が刺し貫してあつた。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出てゐる。鼠は石垣へ這上らうとする。子供が二三人、四十位の車夫が一人それへ石を投げる。中々當らない。カチッ〳〵と石垣へ當つて跳返つた。見物人は大聲で笑つた。鼠は石垣の間に漸く前足をかけた。然し這入らうとすると魚串が直ぐにつかへた。而して又水へ落ちる。鼠はどうかして助からうとしてゐる。顏の表情は人間にはわからなかつたが動作の表情に、それが一生懸命である事がよくわかつた。鼠は何處かへ逃げ込む事が出來れば助かると思つてゐるやうに、長い串を刺された儘に又川の眞中の方へ泳ぎ出た。子供や車夫は益々面白がつて石を投げた。傍の洗場の前で餌を漁つてゐた二三羽の家鴨が石が飛んで來るので吃驚し、首を延ばしてキョロ〳〵とした。スポン、スポンと石が水へ投込まれた。家鴨は頓狂な顏をして首を延ばした儘鳴きながら、忙しく足を動かして上流の方へ泳いで行つた。自分は鼠の最期を仕舞まで見る事が出來なかつた。鼠は殺されまいと、死ぬと極つた運命を擔ひながら全力を盡して逃げ廻つてゐる樣子が妙に頭についた。自分は淋しい嫌な氣持になつた。あれが本統なのだと思つた。自分が希つてゐる靜かさの前にあゝいふ苦しみのある事は恐し

い事だつた。死後の靜寂に親みを持つにしろ死に到達するまでのあゝいふ動騷は恐しいと思つた。自殺を知らない動物はいよ〳〵死に切るまではあの努力を續けなければならない。今自分にあの鼠のやうな事が起つたら自分はどうするだらう。自分は矢張り鼠と同じやうな努力をしはしまいか。自分は自分の怪我の場合、それに近い自分になつた事を思はないではゐられなかつた。自分は出來るだけの事をしようとした。自分は自身で病院をきめた。それへ行く方法を指定した。若し醫者が留守で、行つて直ぐに手術の用意が出來ないと困ると思つて電話を先にかけて貰ふ事などを賴んだ。半分意識を失つた狀態で一番大切な事だけによく頭の働いた事は自分でも後から不思議に思つた位である。しかも此傷が致命的のものかどうかは自分の問題だつた。自分は然し致命的のものかどうかを問題としながら殆ど死の恐怖に襲はれなかつたのも自分では不思議であつた。「フェータルなものか、どうか？　醫者は何んといつてゐた？」かう側にゐた者に訊いた。「フェータルな傷ぢやないさうだ」かういはれた。かういはれると自分は然し急に元氣づいた。亢奮から自分は非常に快活になつた。フェータルなものだと若し聞いたら自分はどうだつたらう。その自分は一寸想像出來ない。自分は弱つたらう。然し普段考へてゐる程死の恐怖に自分は襲はれなかつたらうといふ氣がする。左うして左ういはれても尙自分は助からうと思つて、何かしらん努力をしたらうといふ氣がする。それは鼠の場合と左う變らないものだつたに相違ない。で、又それが今來たらどうかと思つて見て、猶且餘り變らない自分であらうと思ふと「あるがまゝ」で、氣分で希ふ所が、左う實際に直ぐは影響はしないものに相違ない、しかも兩方が本統で、影響した場合は、それでよく、しない場合でも、それでいゝのだと思つた。それは仕方のない事だ。

そんな事があつて又暫くしてである。或夕方、町から流れに沿うて一人段々上へ歩いていつた。山陰線のトンネルの前で線路を越すと道幅が狹くなつて路も急になる、流れも同樣に急になつて、人家も全く見えなくなつた。もう歸らうと思ひながら、あの見える所までといふ風に角を一つ〳〵先へ〳〵と歩いて行つた。物が總て青白く、空氣の肌ざはりも冷々として、物靜かさが反つて何んとなく自分をソハ〳〵とさせた。大きな桑の木が路傍にある。向うの桑の路へ差出した枝で或る一つの葉だけがヒラ〳〵、ヒラ〳〵同じリズムで動いてゐる。風もなく流れの他は總て靜寂の中にその葉だけがいつまでもヒラ〳〵ヒラ〳〵と忙しく動くのが見えた。自分は不思議に思つた。多少怖い氣もした。然し好奇心もあつた。自分は下へいつてそれを暫く見上げてゐた。すると風が吹いて來た。左うしたらその動く葉は動かなくなつた。原因は知れた。何かでかういふ場合を知つてゐたと思ふ。

段々と薄暗くなつて來た。いつまで往つても、先の角はあつた。もうこゝらで引きかへさうと思つた。自分は何氣なく傍の流れを見た。向う側の斜めに水から出てゐる半疊敷程の石に黒い小さいものがゐた。蠑螈だ。未だ濡れてそれはいゝ眞黒な色をしてゐた。頭を下に傾斜から水へ臨んで、凝然としてゐた。體から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸程流れてゐる。自分はそれを何氣なく、踞んで見てゐた。自分は先程蠑螈は嫌ひでなくなつた。蜥蜴は多少好きだ。屋守は蟲の中でも最も嫌ひだ。蠑螈は好きでも嫌ひでもない。十年程前によく蘆の湖で蠑螈が宿屋の流し水の出る所に集まつてゐるのを見て、自分が蠑螈だつたら堪らないといふ氣をよ

く起こした。蠑螈に若し生れ變つたら自分はどうするだらう。そんな事を考へた。其頃蠑螈を見るとそれが想ひ浮ぶので、蠑螈を見る事を嫌つた。然しもうそんな事を考へなくなつてゐた。自分は蠑螈を驚かして水へ入れようと思つた。不器用にからだを振りながら歩く形が想はれた。自分は踞んだまゝ、傍の小鞠程の石を取り上げ、それを投げてやつた。自分は別に蠑螈を狙はなかつた。狙つても迚も當らない程、狙つて投げる事の下手な自分はそれが當る事などは全く考へなかつた。石はコツといつてから流れに落ちた。石の音と同時に蠑螈は四寸程横へ飛んだやうに見えた。蠑螈は尻尾を反らして高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思つて見てゐた。最初石が當つたとは思はなかつた。蠑螈の反らした尾が自然に靜かに下りて來た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて前へついてゐた兩の前足の指が內へまくれ込むと、蠑螈は力なく前へのめつて了つた。尾は全く石へついた。もう動かない。蠑螈は死んで了つた。自分は飛んだ事をしたと思つた。蟲を殺す事をよくする自分であるが、其氣が全くないのに殺して了つたのは自分に妙な嫌な氣をさした。素より自分の仕た事ではあつたが如何にも偶然だつた。蠑螈にとつては全く不意な死であつた。自分は暫く其處に踞んでゐた。蠑螈と自分だけになつたやうな心持がして、蠑螈の身に自分がなつて其心持を感じた。可哀想に思ふと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかつた。蠑螈は偶然に死んだ。自分は淋しい氣持になつて漸く足元の見える路を溫泉宿の方に歸つて來た。遠く町端れの灯りが見え出した。死んだ蜂はどうなつたか。其後の雨でもう土の下に入つて了つたらう。あの鼠はどうしたらう。海へ流されて今頃は又其水脹れのした體を塵芥と一緒に海岸へでも打あげられてゐる事だらう。而して死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる。左う思つた。自分はそれに對し、感謝しなければ濟まぬやうな氣もした。然し實際喜びの感じは湧上つては來なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に差はないやうな氣がした。もうカナリ闇かつた。視覺は遠い灯を感ずるだけだつた。足の踏む感覺も視覺を離れて、如何にも不確だつた。只頭だけが勝手に働く。それが一層左ういふ氣分に自分を誘つて行つた。

三週間で自分は此處を去つた。それからもう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かつた。

（大正六年四月）

濠端の住ひ

一ト夏山陰松江に暮らした事がある。町はづれの濠に望んださゝやかな家で、獨住ひには申分なかつた。庭から石段で直ぐ濠になつて居る。對岸は城の裏の森で、大きな木が幹を傾け、水の上に低く枝を延ばして居る。水は淺く、眞菰が生え、寂びた工合、濠と云ふより古い池の趣きがあつた。鳰鳥が始終、眞菰の間を啼きながら往き來した。

私は此處で出來るだけ簡素な暮らしをした。人と人との交渉で疲れ切つた都會の生活から來ると、大變心が安まつた。蟲と鳥と魚と水と草と空と、それから最後に人間との交渉ある暮らしだつた。

夜晩く歸つて來る。入口の電燈に家守が幾疋もたかつて居る。此通りでは私の家だけが軒燈をつけてゐる。で、近所の家守が皆集まつて來る。私はいつも首筋に不安を集め、急いでその下を潜る。これは餘りありがたくない方の交渉だが、その他、私が若し電燈をつけ忘れてでも居れば、色々な蟲が座敷の中に集まつてゐた。蛾や甲蟲や火取り蟲が電燈の周りに渦巻いてゐる。それを覘ふ殿樣蛙が幾疋となく疊の上に陣取つて居る。それらは私の跫音に驚いて、濠の方へ逃げて行くが、柱にとまつた木の葉蛙は出來るだけ體を捩ぢ曲げ金色の眼をクリ／＼動かしながら私と云ふ不意な闖入者を睨みつけて居る。實際私は蟲の棲家を驚かした闖入者に違ひなかつた。

私は一ト通り蟲を追出し、此座敷を自身のものに取返す。そして、書きものを始める。明け方、疲れ切つて床へ入る。濠では靜かな夜明けを我もの顏に鯉や鮒が騷いで居る。丁度産卵期で、岸でそれらは盛に跳ね騷いだ。私はその水音を聽きながら眠りに落ちて行く。

十時。私はもう暑くて寢て居られない。起きると庭つゞきの隣りのかみさんが私の爲めに火種を持つて來る。七輪はいつも庭先の櫻桃の木の下に出しつぱなしにしてある。かみさんは勝手に臺所から炭を持つて來て、それで火をおこし、藥罐をかけて歸つて行く。私は床をあげ、井戸端で顏を洗ひ、身體を拭いてから、食事の支度にかゝる。パンとバタと――バタは此頃の種畜牧場で出來上る上等なのがあつた。――紅茶と生の胡瓜と、時にラディシュを漬けて出來てゐる。

前に私は尾の道に獨住ひをして、其時は初めて自家を離れた淋しさから、なるべく居心地よく暮らす爲めに、日常道具を十二分に調へた。然し實際はそれらを少しも使はなかつた經驗から、今度は出來るだけ簡素にと心掛けた。

食器はパンと紅茶に要るもの以外何もなかつた。若し客でもあると、瀨戸ひきの金盥で牛肉のすき燒をした。別にきたないとは感じなかつた。却つてそれを再び洗面器として使ふ時の方がきたなかつた。一つバケツで着物を洗ひ、食器を洗つた。馬鈴薯を茹でる時には臺所のあげ板を蓋にした。

私が寢て居る間に釣好きの家主がよく鮒や鯉を釣つて行つた。私の爲めに七八寸の大きな鮒を鰓から繩を貫し犬でも繋ぐやうにして濠へ放して置いて呉れる事がある。私はそれを刻んで隣の雞にやる。

となりは若い大工の夫婦で、然し本業は閑らしく、副業の養雞の方を熱心にやつて居た。庭

に境がなく、雞は始終私の方にも來て居た。

雞の生活を丁寧に見て居ると却々興味があつた。母雞の如何にも母親らしい樣子、雛雞の子供らしい無邪氣の樣子、雄雞の家長らしい、威嚴を持つた態度、それらが、何れもそれらしく、しつくりとその所に嵌つて、一つの生活を形作つて居るのが、見て居て愉快だつた。

城の森から飛びたつ鳶の低く上を舞ふやうな時に、雌雞、雛どり等の驚きあわてゝ、木のかげ草の中に隱れる時に、獨り傲然とそれに對抗し、亢奮しながら其邊を大股に歩き廻つて居るのは雄雞だつた。

小さい雛達が母雞のする通りに足で地を掻き、一ト足下がつて餌を拾ふ樣子とか、母雞が砂を浴び出すと、揃つてその周りで砂を浴び出す樣子なども面白かつた。殊に色の冴えた小さい鳥冠と鮮かな黄色い足とを持つた百日雛の臆病で、あわて者で、敏捷で如何にも生き〳〵してゐるのを見るのは興味があつた。それは人間の元氣な小娘を見るのと少しもかはりがなかつた。美しいより寧ろ艶つぽく感じられた。

縁に胡坐をかき、食事をしてゐると、きまつて、熊坂長範といふ黑い憎々しい雄雞が五六羽の雌雞を引連れ、前をうろついた。熊坂は首を延ばし、或る豫期を持つて、片方の眼で私の方を見てゐる。私がパンの片れを投げてやると、熊坂は少し狼狽ながら、切りに雌雞を呼んで、それを食はせる。そしてあひまに自身もその一ト片を呑み込んで、けろりとしてゐた。

或る雨風の烈しい日だつた。私は戸をたてきつた薄暗い家の中で退屈し切つてゐた。蒸々として氣分も惡くなる。午後到頭思ひきつて、ゴムマントに靴を穿き、的もなく吹き降りの戸外へ出て行つた。歸り同じ道を歩くのは厭だつたから、私は汽車みちに添うて、次の湯町と云ふ驛まで顏を雨に打たし、我武者羅に歩いた。雨は骨まで透り、マントの間から湯氣がたつた。そして私の停滯した氣分は血の循環と共にすつかり直つた。

途々見た貯水池の睡蓮が非常に美しかつた。森にかこまれた濡灰色の水面に雨に烟つてぼんやりと白い花がぽつ〳〵浮かんでゐる。吹き降りに見る花としては此上ないものに思はれた。

湯町から六七町入つた山の峽に玉造と云ふ温泉がある。が、その時丁度、歸るにいゝ汽車が來たので、私はそのまゝ引きかへした。

松江の殿町といふ町の路次の奥に母子二人ぎりでやつてゐる素人下宿がある。私はいつも其家で夜の食事をしてゐた。歸途、其家へ寄る。

日が暮れると雨は小降りになつた。

暫くして浴衣と傘と足駄とを借り、私がその家を出た頃には風だけでもう雨は止んでゐた。晝の蒸々した氣候から急に涼しい氣持のいゝ夜になつて居た。物産陳列場の白いペンキ塗りの舊式な洋館の上に青白い半かけの月がぼんやり出てゐた。切れ〳〵な淡い雲が一方へ〳〵氣忙しく飛ばされて行く。

いゝ位の疲勞と滿腹とで私は珍しくゆつたりした氣分になつてゐた。これから仕事で夜を明かすには惜しい氣分だつた。氣樂な本でも讀みながら安樂に眠りたい氣分だ。

私は歸ると、床をのべ、横になつた。誂へ向きの讀物もなく、讀みかけの飜譯小說に眼をさらし、直ぐ眠るつもりだつたが、扨て毎夜の癖で眠らうと思ふと却つて眼が冴え、却々ねつかれなかつた。

私はその小說を何の位讀んだらう。その時不意に隣の雞小屋で氣魂しい雞の啼聲と共に何か箱の中で暴れる音と、そして大工夫婦が何か怒鳴りながら出て來るのを聽いた。私は枕から首を浮かし、耳を澄ました。鼬か猫かゞかゝつ

たに違ひないと思つた。物音は直ぐやみ・雌雞のコツ〳〵と啼く聲だけがしてゐた。夫婦は其處で立話をして居たが、それも少時して家へ入り、あとは又元の靜かさに返つた。まあ、雞も無事だつたのだらう。左う思ひ、間もなく私も眠りに就いた。

翌日は風も止み、晴れたいゝ日になつてゐた。毎日の事で私が雨戸を繰ると隣のかみさんは直ぐ火種を持つて來た。そして私の顏を見るなり、

「夜前到頭猫に一羽とられました」と云つた。

「…………」

「母雞ですよ。――なにネ、吾身だけなら逃げられたのだが、雛を庇つて殺されたんですよ」

「可哀想に……」

「あすこに居る、あの仲間の親です」

「猫はどうしました」

「逃がしました」

「殘念な事をしましたね」

「そりやあ、今夜、屹度おとしにかけて捕りますよ」

「左うまく行きますか」

「屹度捕つて見せます」

雛等は濠のふちの蕗の葉の繁みの中にみんな蹲んで、不安さうに、首を並べてピヨ〳〵啼いて居た。私が近づくと、雛等は此方へ顏を向けてゐたが、中の一羽が起つと一齊にみんな起上つて前のめりに出來るだけ首を延ばし、逃げて行つた。

「親なしでも育ちますか」

「そりやあ」

「他の親が世話をしないものですか」

「しませんねえ」

實際、孤兒等に對し他の親雞は決して親切ではなかつた。孤兒等は見境なく、自分達より、少し前に孵つた雛と一緒になつて、其母雞の羽根の下にもぐり込まうとした。母雞はその度神經質にその頭や尻をつゝいて追ひやつた。孤兒等は何かに頼りたい風で、一團となり、不安さうに其邊を見廻してゐた。

殺された母雞の肉は大工夫婦の其日の菜になつた。そしてそのぶつぎりにされた頬の赤い首は、それだけで庭へはふり出されてあつた。半開きの眼をし、輕く嘴を開いた首は恨みを呑んでゐるやうに見えた。雛等は恐る〳〵それに集まるが、それを自分達の母雞の首と思つてゐるやうには見えなかつた。ある雛は斷り口の柘榴のやうに開いた肉を啄んだ。首は啄まれる度、砂の上で向きを變へた。私は今晩猫がうまく穽にかゝつて呉れるといゝがと思つた。

その夜、晩く到頭猫は望み通り穽にかゝつた。起きて來た大工夫婦は、昂奮した調子で何かしやべりながら、穽に使つた箱を上から、尚嚴重に藁繩で縛り上げた。

「かうして置けばもう大丈夫だ。あしたは此儘濠へ沈めてやる」こんな事を云つて居るのが聽こえた。

大工夫婦は家へ入つた。私はそれからも獨り書き物をしてゐたが、箱の中で暴れる猫の聲が八釜しく、氣になつた。今宵一ト夜の命だと思ふと可哀想でもあるが、どうも致方ないとも思はれた。

猫は少し靜かにしてゐると思ふと、又急に苛立ち、ぎやあ〳〵と變な聲を出して暴れた。がりがりと箱を掻く音がうるさい。然しそれも到底益ないと思ふと、今度はみよう〳〵と如何にも哀れつぽい聲で嘆願し始める。猫は根氣よく〳〵左ういふ聲を續けてゐるが、其内私も段々それに惹き込まれ、助けられるものなら助けてやりたい氣持になつた。

猫は散々それを續けた上で、尚その效がないと知ると、絶望的な野蠻な聲を張上げて暴れ出

す。それらを交互に根氣よく繰返した末に、結局何も彼も念ひ斷つた風に靜かになつて了つた。

私は現在そこに息をしてゐるものが夜明けと共に死物と變へられて了ふ事を想ふといゝ氣がしなかつた。此靜かな夜更け、覺めてゐる者と云つては私とその猫だけだつた。その一つの生命があしたは斷たれる運命にあると思ふと淋しい氣持になる。猫が雛をとるのは仕方がないではないか。殊に浮浪者の猫が、それを覗ふのは當りまへの事だ。さればこそ、雛を飼ふ者はそれだけの設備をして飼つてゐる。偶々、强雨で、箱の蓋を閉め忘れた爲めに襲はれたと云ふ事は、猫が惡いよりも、忘れた者の落度と見る方が本統なのだ。特別の恩典を以つて今度だけは逃がしてやるといゝのだ。私は晝間雛等を見てゐた時と大分異つた氣持でそんな事を思つた。

然し、事實はそれに對し、私は何事も出來なかつた。指一つ加へられない事のやうな氣がするのだ。かう云ふ場合私はどうすればいゝかを知らない。雛も可哀想だし母雞も可哀さうだ。そしてさう云ふ不幸を作り出した猫もかう捕へられて見ると可哀さうでならなくなる。しかも隣の夫婦にすれば、此猫を生かして置けないのは餘りに當然な事なので、私の猫に對する氣持が實際、事に働きかけて行くべくは、其處に些の餘地もないやうに思はれた。私は默つてそれを觀て居るより仕方ない。それを私は自分の無慈悲からとは考へなかつた。若し無慈悲とすれば神の無慈悲からう云ふものであらうと思へた。神でもない人間——自由意思を持つた人間が神のやうに無慈悲にそれを傍觀してゐたといふ點で或は非難されゝば非難されるのだが、私としてはその成行きが不可抗な運命のやうに感じられ、一指を加へる氣もしなかつた。

翌日、私が眼覺めた時には猫は既に殺されて居た。死體は埋められ、牢に使つた箱は陽なたでもう大概乾かされてあつた。

（大正十三年十月）

小僧の神様

一

仙吉は神田の或る秤屋の店に奉公して居る。
それは秋らしい柔かな澄んだ日ざしが、紺の大分はげ落ちた暖簾の下から静かに店先に差し込んで居る時だつた。店には一人の客もない。帳場格子の中に坐つて退屈さうに巻煙草をふかして居た番頭が、火鉢の傍で新聞を讀んで居る若い番頭にこんな風に話しかけた。
「おい、幸さん。そろ〳〵お前の好きな鮪の脂身が食べられる頃だネ」
「えゝ」
「今夜あたりどうだね。お店を仕舞つてから出かけるかネ」
「結構ですな」
「外濠に乗つて行けば十五分だ」
「左うです」
「あの家のを食つちやあ、此邊のは食へないからネ」
「全くですよ」
若い番頭からは少し退つた然るべき位置に、前掛の下に兩手を入れて、行儀よく坐つて居た小僧の仙吉は、「あゝ鮨屋の話だな」と思つて聴いて居た。京橋にSと云ふ同業の店がある。其店へ時々使ひに出されるので、其鮨屋の位置だけはよく知つて居た。仙吉は早く自分も番頭になつて、そんな通らしい口をきゝながら、勝手にさう云ふ家の暖簾をくゞる身分になりたいものだと思つた。
「何んでも、與兵衛の息子が松屋の近所に店を出したと云ふ事だが、幸さん、お前は知らないかい」
「へえ、存じませんな。松屋といふと何處のです」
「私もよくは聞かなかつたが、いづれ今川橋の松屋だらうよ」
「左うですか。で、其處は旨いんですか」
「左う云ふ評判だ」
「矢張り與兵衛ですか」
「いや、何んとか云つた。何屋とか云つたよ。聴いたが、忘れた」
仙吉は「色々左う云ふ名代の店があるものだな」と思つて聴いて居た。そして、
「然し旨いと云ふと全體どう云ふ工合に旨いのだらう」左う思ひながら、口の中に溜つて來る、唾を、音のしないやうに用心しい〳〵飲み込んだ。

二

それから二三日した日暮だつた。京橋のSまで仙吉は使に出された。出掛けに彼は番頭から電車の往復代だけを貰つて出た。
外濠の電車を鍛冶橋で降りると、彼は故と鮨屋の前を通つて行つた。彼は鮨屋の暖簾を見ながら、其暖簾を勢よく分けて入つて行く番頭達の様子を想つた。其時彼はかなり腹がへつて居た。脂で黄がかつた鮪の鮨が想像の眼に映ると、彼は「一つでもいゝから食ひたいものだ」と考へた。彼は前から往復の電車賃を貰ふと片道を買つて、歸りは歩いて來る事をよくした。今も殘つた四錢が懐の裏隠しでカチャ〳〵と鳴つて居る。
「四錢あれば一つは食へるが、一つ下さいとも云はれないし」彼は左う諦め乍ら前を通り過

ぎた。
Sの店での用は直ぐ済んだ。彼は真鍮の小さい分銅の幾つか入つた妙に重味のある小さいボール函を一つ受取つて其店を出た。
彼は何かしら惹かれる気持で、もと来た道の方へ引きかへして来た。そして何気なく鮨屋の方へ折れようとすると、不図其四つ角の反対側の横町に屋臺で、同じ名の暖簾を掛けた鮨屋のある事を発見した。彼はノソノソと其方へ歩いて行つた。

三

若い貴族院議員のAは同じ議員仲間のBから、鮨の旨味は握るそばから、手掴みで食ふ屋臺の鮨でなければ解らないと云ふやうな通を切りに説かれた。Aは何時か其立食ひをやつてみようと考へた。而して屋臺の旨いと云ふ鮨屋を教はつて置いた。
或日、日暮間もない時であつた。Aは銀座の方から京橋を渡つて、かねて聞いて居た屋臺の鮨屋へ行つて見た。其處には既に三人ばかり客が立つて居た。彼は一寸躊躇した。然し思ひ切つて兎に角暖簾を潜つたが、其立つて居る人と人の間に割り込む気がしなかつたので、彼は少時暖簾を潜つた儘、人の後ろに立つて居た。
其時不意に横合ひから十三四の小僧が入つて来た。小僧はAを押し退けるやうにして、彼の前の僅かな空きへ立つと、五つ六つ鮨の乗つてゐる前下がりの厚い欅板の上を忙しく見廻した。
「海苔巻はありませんか」
「あゝ、今日は出来ないよ」肥つた鮨屋の主は鮨を握りながら、尚ジロジロと小僧を見て居た。
小僧は少し思ひ切つた調子で、こんな事は初めてぢやないと云ふやうに、勢よく手を延ばし、三つ程並んでゐる鮪の鮨の一つを摘んだ。所が、何故か小僧は勢よく延ばした割りに其手をひく時、妙に躊躇した。
「一つ六銭だよ」と主が云つた。
小僧は落とすやうに黙つて其鮨を又臺の上へ置いた。
「一度持つたのを置いちやあ、仕様がねえな」
左う云つて主は握つた鮨を置くと引きかへに、それを自分の手元へかへした。
小僧は何も云はなかつた。小僧はいやな顔をしながら、其場が一寸動けなくなつた。然し直ぐ或る勇気を振るひ起こして暖簾の外へ出て行つた。
「當今は鮨も上がりましたからね。小僧さんには中々食べきれませんよ」主は少し工合悪さうにこんな事を云つた。而して一つを握り終ると、其空いた手で、今小僧の手をつけた鮨を器用に自分の口へ投げ込むやうにして直ぐ食つて了つた。

四

「此間君に教はつた鮨屋へ行つて見たよ」
「どうだい」
「中々旨かつた。それは左うと、見て居ると、皆かう云ふ手つきをして、魚の方を下にして一ペンに口へ投り込むが、あれが通なのかい」
「まあ、鮪は大概あゝして食ふやうだ」
「何故魚の方を下にするのだらう」
「つまり魚が悪かつた場合、舌へヒリヽと来るのが直ぐ知れるからなんだ」
「それを聞くとBの通も少し怪しいもんだな」
Aは笑ひ出した。
Aは其時小僧の話をした。而して、
「何んだか可哀想だつた。どうかしてやりたいやうな気がしたよ」と云つた。
「御馳走してやればいゝのに。幾らでも、食へ

るだけ食はしてやると云つたら、嘸喜んだらう」

「小僧は喜んだらうが、此方が冷汗ものだ」

「冷汗？　つまり勇氣がないんだ」

「勇氣かどうか知らないが、兎も角左う云ふ勇氣は一寸出せない。直ぐ一緒に出て他所で御馳走するなら、まだやれるかも知れないが」

「まあ、それはそんなものだ」とBも賛成した。

五

Aは幼稚園に通つて居る自分の小さい子供が段々大きくなつて行くのを數の上で知りたい氣持から、風呂場へ小さな體量秤を備へつける事を思ひついた。而して或日彼は偶然神田の仙吉の居る店へやつて來た。

仙吉はAを知らなかつた。然しAの方は仙吉を認めた。

店の横の奥へ通ずる三和土になつた所に七つ八つ、大きいのから小さいのまで荷物秤が順に並んでゐた。Aは其一番小さいのを選んだ。停車場や運送店にある大きな物と全く同じで小さい、其可愛い秤を見て、子供が嘸ぞ喜ぶ事だらうと彼は考へた。

番頭が古風な帳面を手にして、

「お屆け先きは何方樣で御座いますか」と云つた。

「左う……」とAは仙吉を見ながら一寸考へて、「其小僧さんは今、手すきかネ？」と云つた。

「へえ別に……」

「そんなら少し急ぐから、私と一緒に來て貰へないかネ」

「かしこまりました。では、車へつけて直ぐお供をさせませう」

Aは先日御馳走出來なかつた代り、今日何處かで小僧に御馳走してやらうと考へた。

「それからお所とお名前をこれへ一つお願ひ致します」金を拂ふと番頭は別の帳面を出して來てかう云つた。

Aは一寸弱つた。秤を買ふ時、その秤の番號と一緒に買手の住所姓名を書いて渡さねばならぬ規則のある事を彼は知らなかつた。名を知らしてから御馳走するのは同樣如何にも冷汗の氣がした。仕方なかつた。彼は考へ／＼出鱈目の番地と出鱈目の名を書いて渡した。

六

客は加減をしてぶら／＼と歩いてゐる。其二三間後から秤を乘せた小さい手車を挽いた仙吉がついて行く。

或る俥宿の前まで來ると、客は仙吉を待たせて中へ入つて行つた。間もなく秤は支度の出來た俥に積み移された。

「では、頼むよ。それから金は先に貰つて呉れ。其所に名前が書いてあるから」と云つて客は出て來た。而して、今度は仙吉に向かつて「お前も御苦勞。お前には何か御馳走してあげたいから其邊まで一緒においで」と笑ひながら云つた。

仙吉は大變うまい話のやうな、少し薄氣味惡い話のやうな氣がした。然し何しろ嬉しかつた。彼はペコ／＼と二三度續け樣にお辭儀をした。

蕎麥屋の前も、壽司屋の前も、鳥屋の前も通り過ぎて了つた。「何處へ行く氣だらう」仙吉は少し不安を感じ出した。神田驛の高架線の下を潜つて松屋の横へ出ると、電車通りを越して、横町の或る小さい壽司屋の前へ來て其客は立止まつた。

「一寸待つて呉れ」かう云つて客だけ中へ入つて、仙吉は手車の梶棒を下ろして立つて居た。

間もなく、客は出て來た。その後から、若い品のいゝかみさんが出て來て、

「小僧さん、お入りなさい」と云つた。
「私は先へ歸るから、充分食べてお呉れ」から云つて客は逃げるやうに急ぎ足で電車通りの方へ行つて了つた。
仙吉は其處で三人前の鮨を平げた。餓ゑ切つた痩せ犬が不時の食にありついたかのやうに彼はがつ〳〵と忽ちの間に平げて了つた。外に客がなく、かみさんが故と障子を締切つて行つてくれたので、仙吉は見得も何もなかつた。食ひたいやうにして鱈腹に食ふ事が出來たのである。
茶をさしに來たかみさんに笑ひながら、
「もつと、あがれませんか」と云はれると、仙吉は少し赤くなつて、
「いえ、もう……」下を向いて了つた。而して、忙しく歸り支度を始めた。
「それぢやあネ、又食べに來て下さいよ。お代はまだ澤山頂いてあるんですからネ」
仙吉は默つて居た。
「お前さん、あの旦那とは前からお馴染なの?」
「いえ」
「へえ……」から云つて、かみさんは、其處へ出て來た主と顔を見合せた。
「粹な人なんだ。それにしても、小僧さん、又來て呉れないと、此方が困るんだからネ」
仙吉は下駄を穿きながら只無闇とお辭儀した。

七

Aは小僧に別れると追ひかけられるやうな氣持で電車通りに出ると、其處へ丁度通りかゝつた辻自動車を呼び止めて、直ぐBの家へ向かつた。
Aは變に淋しい氣がした。自分は先の日小僧の氣の毒な樣子を見て、心から同情した。而して、出來る事なら、からもしてやりたいと考へて居た事を今日は偶然の機會から實行出來たのである。小僧も滿足し、自分も滿足していゝ筈だ。人を喜ばす事は惡い事ではない。自分は當然或る喜びを感じていゝわけだ。所が、どうだらう、此變に淋しい、いやな氣持は。何故だらう。何から來るのだらう。丁度それは人知れず惡い事をした後の氣持に似通つて居る。
若しかしたら、自分のした事が善事だと云ふ變な意識があつて、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲られて居るのが、からした淋しい感じで感ぜられるのかしら? もう少し仕た事を小さく、氣樂に考へてゐれば何んでもないのかも知れない。自分は知らず〳〵こだはつて居るのだ。然し兎も角恥づべき事を行つたといふのではない。少くとも不快な感じで殘らなくてもよささうなものだ、と彼は考へた。
其日行く約束があつたのでBは待つて居た。而して二人は夜になつてから、Bの自動車でY夫人の音樂會へ出掛けて行つた。
晩くなつてAは歸つて來た。彼の變な淋しい氣持はBと會ひ、Y夫人の力強い獨唱を聽いて居る内に殆ど直つて了つた。
「秤どうも恐れ入りました」細君は案の定、其小形なのを喜んで居た。子供はもう寢て居たが、大變喜んだ事を細君は話した。
「それはさうと、先日鮨屋で見た小僧ネ、又會つたよ」
「まあ。何處で?」
「はかり屋の小僧だつた」
「奇遇ネ」
Aは小僧に鮨を御馳走してやつた事、それから、後、變に淋しい氣持になつた事などを話した。
「何故でせう。そんな淋しいお氣になるの、不思議ネ」善良な細君は心配さうに眉をひそめた。細君は一寸考へる風だつた。すると、不

意に「えゝ、其お氣持わかるわ」と云ひ出した。「左う云ふ事ありますわ。何んでだか、そんな事あつたやうに思ふわ」

「左うかな」

「えゝ、本統に左う云ふ事あるわ。Bさんは何んて仰有つて？」

「Bには小僧に會つた事は話さなかつた」

「左う。でも、小僧は屹度大喜びでしたわ。そんな思ひ掛けない御馳走になれば誰でも喜びますわ。私でも頂きたいわ。其お鮨電話で取寄せられませんの？」

八

仙吉は空車を挽いて歸つて來た。彼の腹は十二分に張つて居た。これまでも腹一杯に食つた事はよくある。然し、こんなに旨い物で一杯にした事は一寸憶ひ出せなかつた。

彼は不圖、先日京橋の屋臺鮨屋で恥をかいた事を憶ひ出した。漸くそれを憶ひ出した。すると、初めて、今日の御馳走がそれに或る關係を持つて居る事に氣がついた。若しかしたら、あの場に居たんだ、と思つた。屹度さうだ。併し自分の居る所をどうして知つたらう？これは少し變だ、と彼は考へた。さう云へば、今日連れて行かれた家は矢張り先日番頭達の噂をしてゐた、あの家だ。全體どうして番頭達の噂まであの客は知つたらう？

仙吉は不思議でたまらなくなつた。番頭達が其鮨屋の噂をするやうに、AやBもそんな噂をする事は仙吉の頭では想像出來なかつた。彼は一途に自分が番頭達の噂話を聽いた、其同じ時の噂話をあの客も知つてゐて、今日自分を連れて行つて呉れたに違ひないと思ひ込んで了つた。さうでなければ、あの前にも二三軒鮨屋の前を通りながら、通り過ぎて了つた事が解らないと考へた。

兎も角あの客は只者ではないと云ふ風に段々考へられて來た。自分が屋臺鮨屋で恥をかいた事も、番頭達があの鮨屋の噂をしてゐた事も、その上第一自分の心の中まで見透して、あんな充分な御馳走をして呉れた。到底それは人間業ではないと考へた。神樣かも知れない。それでなければ仙人だ。若しかしたらお稻荷樣かも知れない、と考へた。

彼がお稻荷樣を考へたのは彼の伯母で、お稻荷樣信仰で一時氣違ひのやうになつた人があつたからである。お稻荷樣が乘り移ると身體をブルブル震はして、變な豫言をしたり、遠い所に起つた出來事を云ひ當てたりする。彼はそれを或る時見てゐたからであつた。然しお稻荷樣にしてはハイカラなのが少し變にも思へた。それにしろ、超自然なものだと云ふ氣は段々強くなつて行つた。

九

Aの一種の淋しい變な感じは日と共に跡方もなく消えて了つた。然し彼は神田の其店の前を通る事は妙に氣がさして出來なくなつた。のみならず、其鮨屋にも自分から出掛ける氣はしなくなつた。

「丁度よう御座んすわ。自家へ取寄せれば、皆もお相伴出來ること」と細君は笑つた。

するとAは笑ひもせずに、

「俺のやうな氣の小さい人間は全く輕々しくそんな事をするものぢやあ、ないよ」と云つた。

十

仙吉には「あの客」が益々忘れられないものになつて行つた。それが人間か超自然のものか、今は殆ど問題にならなかつた。只、無闇とありがたかつた。彼は鮨屋の主人夫婦に再三云はれたに拘らず、再び其處へ御馳走になりに行

く氣はしなかつた。さう附上る事は恐ろしかつた。

彼は悲しい時、苦しい時に必ず「あの客」を想つた。それは想ふだけで或る慰めになつた。彼は何時かは又「あの客」が思はぬ惠みを持つて自分の前へ現はれて來る事を信じてゐた。

作者は此處で筆を擱く事にする。實は小僧が「あの客」の本體を確めたい要求から、番頭に番地と名前を教へて貰つて其處を尋ねて行く事を書かうと思つた。小僧は其處へ行つて見た。所が、其番地には人の住ひがなくて、小さい稻荷の祠があつた。小僧は吃驚した。――と、かう云ふ風に書かうと思つた。然しさう書く事は小僧に對し少し慘酷な氣がして來た。それ故作者は前の所で擱筆する事にした。

（大正八年十二月）

焚火

其日は朝から雨だつた。午からずつと二階の自分の部屋で妻も一緒に、畫家のSさん、宿の主のKさん達とトランプをして遊んでゐた。部屋の中には煙草の煙が籠つて、皆も少し疲れて來た。トランプにも厭きたし、菓子も食過ぎた。三時頃だ。

一人が起つて窓の障子を開けると、雨は何時かあがつて、新緑の香を含んだ氣持のいゝ山の冷々した空氣が流れ込んで來た。煙草の煙が立迷つてゐる。皆は生返つたやうに互に顔を見交はした。

浮腰で、づぼんのポケットに深く兩手を差し込んでモジ〳〵して居た主のKさんが、

「私、一寸小屋の方をやつて來ます」と云つた。

「僕も描きに行かうかな」と畫家のSさんも云つて、二人で出て行つた。

出窓に腰かけて、段々白い雲の薄れて行く、そして青磁色の空の擴がるのを眺めて居ると、繪具箱を肩にかけたSさんと、腰位までの外套を只羽織つたKさんとが何か話しながら小屋の方へ登つて行くのが見えた。二人は小屋の前で少時立話をして、そしてSさんだけ森の中へ入つて行つた。

それから自分は横になつて本を讀んだ。そして本にも厭きた頃、側で針仕事をしてゐた妻が、

「小屋にいらつしやらない？」と云つた。

小屋と云ふのは近々に自分達が移り住む爲めに、若い主のKさんと年を取つた炭焼きの春さんとで作つて呉れる小さい掘立小屋の事である。

Kさんと春さんとは便所を作つて居た。

「割りに氣持のいゝ物になりました」とKさんが云つた。自分も手傳つた。妻も時々手を出した。

半時間程すると、Sさんが前の年の濕つた落葉を踏んで森の中から出て來た。

「これはよくなつた。これだけ出つ張りが附くと家の形がついた」と便所の出來榮を讚めた。

Kさんは、

「厄介物にされた便所が大變いゝ物になりましたよ」と嬉しさうな顔をして云つた。小屋の事は一切Kさんに任せてある。Kさんは作る事に興味を持つて、實用の方面ばかりでなく、家全體の形とか、材料の使ひ方にも色々苦心して、出來るだけ居心地のいゝ家にしようとしてゐた。

夜鷹が堅い木を打ち合はすやうな烈しい響をたてゝ鳴き始めた。暗くなつたので仕事を切上げた。春さんは掌で雁首の煙草をつめ更へながら、

「牛や馬が登つて來たから、早く柵を拵へないといけないね」と云つた。

「左うですね。作りかけを食べられちやあ、氣が利きませんからね」とKさんが答へた。家を食はれると云ふので笑つた。此山には壁土になる泥がないので、宿屋でも壁の所は總て板張りにしてある。此小屋では其處を炭俵と同じ質の大きいものを作らせて、それを二タ重にして其間に萱を入れた。

「牛や馬には此家は御馳走だからね」と春さんは笑ひもせずに云つた。皆は笑つた。

山の上の夕暮れは何時も氣持がよかつた。殊に雨あがりの夕暮れは格別だつた。其上、働いて其日の仕事を眺めながら一服やつて居る時に

は互の胸にも淡く喜びが通ひ合つて、皆快活な氣分になつた。
前の日も午後から晴れて、美しい夕暮れになつた。昨日は鳥居峠から黒檜山の方へ大きな虹が出て尚美しかつた。皆は永い事、此處で遊んだ。小屋は楢の林の中にあつたから、皆で其高い楢に木登りをして遊んだ。虹がよく見えるといふと妻までが登りたがるので、Kさんと二人で三間程の所まで引張りあげた。
自分と妻とKさんとは一つ木に登つた。Sさんは其隣りの木に登つて、SさんとKさんとは互に自身の方が高くならうとして五六間の高さまで張り合つて登つて行つた。
「まるで安樂椅子ですよ」Kさんは高い所の工合よく分かれた枝の股に仰向けに寝て、巻煙草をふかしながら大波のやうに其枝を搖すぶつて見せたりした。
Kさんの五番目の兒をおぶつた「市や」と云ふ年の割りに顔の大きい低能な男の兒が夜食の知らせに來て、漸く皆が木を降りた時には妻が木の上から落とした櫛が灯なしでは探せない程、地面の上は暗くなつて居た。
自分は前日の此樂みを想ひながら、
「晩、舟に乗りませんか」と云つた。皆賛成だつた。
・食事だけ別れ〳〵にして、四人は又下の大きい圍爐裡に集まつた。Kさんは爐の大きい茶釜の湯で赤坊に飲ますコンデンスミルクをといて居た。
Kさんは氷藏から楢の厚い板を抱へて來た。四人は大きい樅の木に被はれた神社の暗い境内を抜けて行く。神樂堂の前を通る時、Kさんはお札を賣る人に「お湯にお入りなさい」と聲をかけた。樅の太い幹と幹の間に湖水の面が銀色に光つて見えた。
小舟は岸の砂地へ半分曳き上げてあつた。晝の雨で溜まつた水をKさんが搔出す間、三人は黒く濡れた砂の上に立つて居た。
Kさんは抱へて來た厚い板を舟縁のいゝ位置に渡して、「お乗り下さい」と云つた。妻から先へ乗せた。小舟は押し出された。
静かな晩だ。西の空には未だ夕映えの名殘りが僅かに殘つて居た。が、四方の山々は蠑螈の背のやうに黒かつた。
「Kさん、黒檜が大變低く見えるね」とSさんが舳から云つた。
「夜は山は低く見えますよ」Kさんは艫に腰かけて短い櫂を静かに動かしながら答へた。
「焚火をしてますわ」と妻がいつた。小鳥島の裏へ入らうとする向う岸にそれが見える。静かな水に映つて二つに見えて居た。
「今頃變ですね」とKさんが云つた。「蕨取りが野宿をして居るのかも知れませんよ。あすこに古い炭燒の竈がありますから、其中に寝てゐるのかも知れませんよ。行つて見ませうか」
Kさんは櫂に力を入れて舳の方向を變へた。舟は静かに水の上を滑つた。Kさんは小鳥島から神社の方へ一人で泳いで來る時、湖水を渡つてゐた蛇と出會つて驚いた話などをした。
焚火はKさんのいふやうに竈の焚口で燃えて居た。Sさんは、
「本統にあの中に人が居るのかね、Kさん」と云つた。
「乾度居ますよ。若し居なければ消して置かないと悪いから、上りませうか」
「一寸上がつて見たいわ」と妻も云つた。
岸へ來た。Sさんが繩を持つて先へ飛び降りて、舟の舳を石と石との間へ曳き上げた。
Kさんは竈の前に蹲んで切りに中を覗いて居た。
「寝て居ますよ」
冷々としてゐるので皆にも焚火はよかつた。

Sさんは落ちてゐる小枝の先でおき火をかき出して煙草をつけた。竈の中でゴソ〳〵音がして、人の呻吟る聲がした。

「然し、かうして寢てゐたら溫かいだらうね」とSさんがいつた。

Kさんは其邊に落ち散つてゐる枝を火に積上げながら、

「仕舞ひに消えますからね。寢込んで了ふと、明方は隨分寒いでせうよ」といつた。

「こんな側で焚いても窒息しませんの？」

「中で焚かなければ大丈夫です。それより竈が餘り古くなるとひとりでに崩れる事があるんですよ。殊に雨のあとは危いんですよ」

「可恐いわ。Kさん教へてやるといゝわ」

「本統に教へてやる方がいゝね」とSさんも云つた。

「わざ〳〵教へなくても」とKさんは笑ひ出した。「これだけ大きな聲で話して居ればみんな聽えてゐますよ」

竈の中で又ゴソ〳〵と枯葉の音を立てた。皆は一緒に笑ひ出した。

「往きませうか」と妻は不安さうに云ひ出した。

舟へ來ると、Sさんは先へ乘込んで、「今度は僕が漕がう」と云つた。

小鳥島と岸の間は殊に靜かだつた。晴れた星の多い空を舟べりから其儘下に見る事が出來た。

「こつちでも焚火をしませうかね」とKさんが云つた。

Sさんは癖になつて居るドナウ・ウェレンの口笛を吹きながら漕いで居た。

「オイKさん。どの邊へ着けるんだい？」とSさんが訊いた。Kさんは振りかへつて見て、

「丁度此見當でよう御座んすよ」と答へた。

それから、何んといふ事なしに皆は暫く默つて了つた。舟は靜かに進んで行つた。

「岸位までなら泳げるか？」と自分は妻に訊いてみた。

「どうですか。泳げるかも知れないわ」

「奧さん、泳げになるんですか？」Kさんは驚いたやうに云つた。

「何時頃から泳げるの？」と自分はKさんに訊いた。

「少し溫かい日なら今でも泳げますよ。去年今頃泳ぎましたよ」

「少し寒さうだ」自分は水へ手を浸して見て云つた。「然し先に紅葉見に行つて、朝早く蘆の湖で泳いだ事があるけれど思つた程ではなかつた。それよりも、四月初めに蘆の湖で泳いだ事がある」

「昔はお偉かつたのね」と妻は寒がりの自分を冷やかした。

「此邊でいゝかい？」

「えゝ。どうぞ」

Sさんは三櫂四櫂力を入れて漕いだ。舟の舳はザリ〳〵と音をさせて砂地へ着いた。皆は砂へ降り立つた。

「こんなに濡れて居ても焚火が出來ますの？」

「白樺の皮で燃しつけるんです。油があるので濡れて居てもよく燃えるんですよ。私、焚木を集めますから、白樺の皮を澤山お集め下さい」

一面に羊齒や山蕗やハッ手の葉のやうな草の生ひ繁つた暗い森の中に入つて焚火の材料を集めた。

皆は別れ〳〵になつたが、KさんやSさんの卷煙草の先が吸ふ度に赤く見えるので其居る所が知れた。

白樺の古い皮が切れて、その端を外側に反らしてゐる、それを手頼に剝ぐのだ。時々Kさんの枯枝を折る音がポキン！ と靜かな森の中で響いた。

持てないだけになると、岸の砂地へ運んだ。もう大分溜つた。

何かに驚いて、Kさんがいきなり森から飛出して來た。

「どうしたんだ」

「居ましたよ。蟲ですよ。あの尻の光つてゐる奴が、かうやつて尻を振つてゐたんですよ。堪つたもんぢやあない」Kさんは尺取り蟲の類を非常に可恐がつた。息を弾ませて居る。

それを見に入つた。先に立つたSさんが、

「此邊かい?」と後の方に居るKさんを顧みた。

「其處に光つてるぢやあ、ありませんか」

「成程、これだね」Sさんはマッチを擦つて見た。一寸程の裸蟲が其割りに大きい尻をもたげてゆる／＼と振つて居た。

其先が青くぼんやり光つて見える。

「これが、そんなに可恐いかね」とSさんが云つた。

「これからは其奴が居るんで、うつかり歩けませんよ」とKさんは云ふ。そして「もう大概よう御座んすから、焚きませうか」と云つた。

皆は又砂地へ出た。

白樺の皮へ火をつけると濡れた儘、カンテラの油煙のやうな眞黑な煙を立てゝ、ボウ／＼燃えた。Kさんは小枝から段々大きい枝をくべて忽ち燃しつけて了つた。其邊が急に明るくなつた。それが前の小鳥島の森にまで映つた。

Kさんは舟から楢の厚板を持つて來て、自分達の腰を下ろす所を作つて與れた。

「蟲だけは山に育つた人のやうぢやあ、ないね」とSさんが云つた。

「本統ですよ」とKさんも云つた。「初めから知つて居ると、それ程でもないんですが、不意だと隨分膽消ますよ」

「山には別に可恐いものつて、居ませんの?」

「何んにも居ませんよ」

「大蛇なんて居ないの?」

「居ませんよ」

「蝮は?」と自分が訊いた。

「箕輪邊まで下りると時々見かけますが、上では蝮は一度も見た事はありませんよ」

「昔は山犬が居たんだらう?」とSさんが云つた。

「子供の頃よく聲だけ聽きました。夜中に遠吠えを聽くと、淋しい、いやな氣持がしたのを覺えてゐますよ」

KさんはKさんの亡くなつたお父さんが夜釣が好きで、或る夜山犬に圍まれて、岸傳ひに水の中を歸つて來た話とか、此山が牧場になつた年、馬が食はれて半分位になつて居るのを見た話などをした。

「其年、肉にダイナマイトを入れて、殺したら、一週間で絶えて了ひました」

自分は四五日前、地獄谷の方で小さい野獸の髑髏を見た話をすると、Kさんは、

「屹度笹熊でせう。鷲かなんかに食はれたのかも知れませんよ。笹熊は弱い獸ですからね」と云つた。

「ぢやあ、此山には何んにも可恐いものは居ないのね」と臆病な妻はKさんに念を押した。すると、Kさんは、

「奧さん、私、大入道を見た事がありますよ」と云つて笑ひ出した。

「知つてますよ」と妻も得意さうに云つた。「霧に自分の影が映るんでせう?」妻はそれを朝早く、鳥居峠に雲海を見に行つた時に經驗した。

「いゝえ、あれぢやあ、ないんです」

子供の頃、前橋へ行つた夜の歸り、小暮から二里程來た大きい松林の中で左う云ふものを見た、と云ふ話だ。一町位先でぼんやり其邊が明かるくなると、その中に一丈以上の大きな

黒いものが起つたと云ふ。然し、暫くして大きな荷を背負つた人が路傍に休んで居たので、其人が歩きながら煙草を飲む爲めに荷の向うで時時マッチを擦つたのだと云ふ事が知れたと云ふ話である。

「不思議なんて、大概そんなものだね」とSさんが云つた。

「でも不思議は矢張りあるやうに思ひますわ」と妻は云つた。「左う云ふ不思議はどうか知らないけど、夢のお告げとか左う云ふ事はあるやうに思ひますわ」

「それは又別ですね」とSさんも云つた。そして急に憶ひ出したやうに、「そら、Kさん、去年君が雪で困つた時の話なんか、左う云ふ不思議だね、未だ聴きませんか？」と自分の方を顧みた。

「いゝえ」

「あれは本統に變でしたね」とKさんも云つた。

かう云ふ話だ。

去年山にはもう雪が二三尺も積もつた頃、東京に居る姉さんの病氣が悪いと云ふ知らせを受けて、Kさんは急に山を下つて行つた。

然し姉さんの病氣は思つた程ではなかつた。三晩泊つて歸つて來たが、水沼に着いたのが三時頃で、山へは翌日登る心算だつたが、僅か三里を一ト晩泊つて行く氣もしなくなつて、Kさんは豫定を變へて、然し若し登れさうもなければ山の下まで行つて泊めて貰ふつもりで、水沼を出た。

そして丁度日暮に二の鳥居の近くまで來て了つたが、身體も氣持も餘りに平氣だつた。それに月もある。Kさんは登る事に決めた。然しそれから登るに從つて、雪は段々深くなつた。Kさんが山を下りた時とは倍位になつて居た。それでも人通りのある所なら、深いなりに表面が固まるから、左程困難はないが、全で人通りがないので軟かい雪へ腰位まで入る。其上、一面の雪で何處が路かよく知れないから、幾ら子供から山に育つて慣れ切つたKさんでも、段々にまゐつて來た。

月明りに鳥居峠は直ぐ上に見えて居る。夏は此邊はこんもりとした森だが、冬で葉がないから上が直ぐ近くに見えて居る。其上、雪も距離を近く見せた。今更引き返す氣もしないで、蟻の這ふやうに登つて行くが、手の屆きさうな距離が實に容易でなかつた。若し引き返すとすれば、幸ひ通つた道を間違はず行ければまだいゝとして、それを反れた、困難は同じ事だ。上を見ると、何しろ其處だ。

Kさんは、もう一ト息、もう一ト息と登つた。別に恐怖も不安も感じなかつた。然し何んだか氣持が少しぼんやりして來た事は感じた。

「後で考へると、本統は危かつたんですよ。雪で死ぬ人は大概左うなつて其儘眠つて了ふんです。眠つた儘、死んで了ふんです」

よくそれを知りながら、不思議にKさんは其時少しも左う云ふ不安に襲はれなかつた。そして、兎も角、氣持を張つた。何しろ身體がいゝ。それに雪には慣れてゐた。丁度それから二時間餘りかゝつて、漸く峠の上まで漕ぎつけた。

雪の深さは一層増さつた。然しこれからは一寸、下りになる。下ればずつと平地だ。時計を見ると、もう一時過ぎて居た。

遠くの方に提灯が二つ見えた。今時分、とKさんは不思議に思つた。然し兎も角一人きりの所に人と會ふのは擦れ違ひにしろ嬉しかつた。Kさんは又元氣を振ひ起こして、下りて行つた。そして、覺滿淵の邊でそれらの人々と出會つた。それはUさんといふ、Kさんの義理の兄さんと、その頃Kさんの家に泊つてゐた氷切りの人夫三人とだつた。「お歸りなさい。大變でしたらう？」とUさんが云つた。

Kさんは「今時分何處へ行くんですか？」と訊いた。「今、お母さんに起こされて迎ひに來たんですよ」とUさんは何んの不思議もなささうに答へた。Kさんは慄つとした。

「私が其日歸る事は知らしても何んにもなかつたんです。後で聽くと、お母さんがみいちやん（Kさんの上の子供）を抱いて寢て居ると、——不意に別に眠つて居たやうでもないんですが、Uさんを起こして、Kが歸つて來たから迎ひに行つて下さいと云つたんださうです。Kが呼んでゐるからつて云ふんださうです。あんまり明瞭して居るんで、Uさんも不思議とも思はず、人夫を起こして支度させて出て來たと云ふんですが、よく聽いて見ると、それが丁度、私が一番弱つて、氣持が少しぼんやりして來た時なんです。山では早く寢ますからね、七時か八時に寢て、丁度皆ぐつすりと寢込んだ時なんです。それを四人も起こして出して寄越すんですから、お母さんのは餘程明瞭聽いたに違ひないのです」

「Kさんは呼んだの？」と妻が訊いた。

「いゝえ。峠の向うぢやあ、幾ら呼んだつて聽えませんもの」

「左うね」と妻は云つた。妻は涙ぐんで居た。

「そんな氣がした位では却々、夜中に皆を起こして、腰の上まで埋まる雪の中を出してやれるものではないんです。それは卷脚絆の卷き方が一つ惡くても、一度解けたら、凍つて棒になつて了ひますから、迚も、もう卷けないんです。だから支度が隨分厄介なんです。支度にどうしても二十分やそこらかゝるんですよ。其間お母さんは、ちつとも疑はずにおむすびを作つたり、火を焚きつけたりして居たんです」

Kさんとお母さんの關係を知つてゐると此話は一層感じが深かつた。よくは知らないが、似てゐるので皆がイブセンと呼んでゐたKさんの亡くなつたお父さんは別に惡い人ではないらしかつたが、少くとも良人としては餘りよくなかつた。平常は前橋邊に若い妾と住んでゐて、夏になると其れを連れて山へ來て、山での收入を取上げて行つたさうだ。Kさんはお父さんの左ういふやり方に心から不快を感じて、よく衝突をしたといふ事だ。そしてこんな事がKさんを一層お母さん想ひにし、お母さんを一層Kさん想ひにさせたのだ。

先刻から、小鳥島で梟が鳴いてゐた。「五郎助」と云つて、暫く間を置いて、「奉公」と鳴く。

焚火も下火になつた。Kさんは懷中時計を出して見た。

「何時？」

「十一時過ぎましたよ。」

「もう歸りませうか」と妻が云つた。

Kさんは勢よく燃え殘りの薪を湖水へ遠く抛つた。薪は赤い火の粉を散らしながら飛んで行つた。それが、水に映つて、水の中でも赤い火の粉を散らした薪が飛んで行く。上と下と、同じ弧を描いて水面で結びつくと同時に、ジュッと消えて了ふ。そしてあたりが暗くなる。それが面白かつた。皆で抛つた。Kさんが後に殘つたおき火を櫂で上手に水を撥ねかして消して了つた。

舟に乘つた。蕨取りの焚火はもう消えかゝつて居た。舟は小鳥島を廻つて、神社の森の方へ靜かに滑つて行つた。梟の聲が段々遠くなつた。

（大正九年三月）

雪の日

——（我孫子日記）——

二月八日

晝頃からサラ／＼と粉雪が降つて來た。

前から我孫子の雪が見たいと云つて居たK君が泊りに來てゐる時で丁度よかつた。

自分には雪だと妙に家にぢつとしてゐられない癖があつた。それで女中の行く筈だつた町の使ひを引きうけてK君と一緒に家を出る。K君は妻の出して來た、赤城出來の「背負ご」を持つて行つて呉れた。

町への途にR君の家がある。R君の上の子が風邪をひいて居たので、一寸見舞ひに寄る。子供はもう元氣にしてゐた。惡さをして叱られたとか、涙だらけの頓狂な顔をして自分達を見てゐた。R君とは直ぐ別れて町へ出る。

わざと廻り路をして鐵道線路の方へ出た。乾いた所に降り出したので、雪は片端から積る。屋根も、道も、木も、藪も、畑も、鐵道線路も、枕木の柵も、見る／＼白くなつて行つた。

自分達の胸には何となく快活な氣分が往來してゐる。其邊のどんな一隅でも、其儘で妙に面白く見える。雪には情緒がある。その不斷忘れられてゐる情緒が湧いて來る。これが自分を樂ませる。

停車場前の菓子屋に行つて妻から賴まれた菓子を買ふ。八日は去年の夏、生れて三十七日目に亡くなつた直康の命日である。剝取暦に脱帖があつて一週間前から今日の八日が出て居た。女中がなかつたりして暫く墓參りが出來ずにゐた妻は不意に飛んで命日の出た事に何かしら迷信的な氣持を持つて居た。出掛けに妻はそれを云つて何かお供の菓子をと自分に賴んだ。折よく檜の葉型をつけた燒饅頭があつた。此饅頭は不斷は作らない。それが出來てゐた事も多少因緣臭い氣がした。それを皆な買つて出る。停車場の入口には寒さうな恰好をした男が三人程雪を眺めて立つて居た。

K君に豚肉を買ふ事を賴んで、自分は魚屋へ行く。魚を買つて、K君の來るのを待つ。

魚屋が流行感冒に就いて、酒を飲んで、うまい物を食つてさへ居れば假令かゝつても決して死ぬ事はない、粗食をして烈しく身體を使つてゐる者にかぎつて、かゝると乾度死ぬやうだ、と云ふ説を眞面目に聽かした。

向うからK君が雪風に吹かれながら、前屈みの急ぎ足でやつて來る。自分は魚屋の軒下を離れた。

炭屋に行く。二俵と賴まれて來たのを勝手に四俵と云ひつける。かう云ふ日にはこんな物の多い方が氣持がいゝので。

米屋に行く。腰障子を開けると三造の家内が店先にかけて居た。その足下に自家のエス（小犬）が居た。米を賴む。

「Mさんの婆アやが死んださうだネ」と云ふと、

「はあ……」と云つて三造の家内はお辭儀をした。一週間程前、流行感冒で死んだのである。Mさんの別莊番で、越後から來てゐた女であつた。三造の家内の唯一の親友で甚く力を落してゐると云ふ噂を自分は聽いて居た。

「エス、來るか？」と云ふと、エスは一寸迷つて居たが從いて來た。

郵便局による。的にしてゐた郵便物はまだ來て居なかつた。

それから八百屋に寄つて蜜柑と林檎を買ふ。町から畑道へ入る。四十分程の間に雪はかなり積つた。

柳の宅へ寄る。座敷でピアノの音がして、K子さんが東京から來たお弟子に歌を教へて居た。柳は離れの書齋を石油ストオヴで溫かくして勉強してゐた。

今日はリーチが來る筈だと柳が云ふ。

間もなく稽古を濟ましたK子さんが入つて來た。そしてお弟子から貰つたものがあるからと晩飯を勸めた。

色々な荷物があるので自分だけ兎も角一度歸つて來る事にする。

雪は降つて／＼ゐる。書齋から細い急な坂をおりて、田圃路に出る。沼の方は一帶に薄墨ではいたやうになつて、何時も見えて居る對岸が全く見えない。沼べりの枯葭が穗に雪を頂いて、其薄墨の背景からクッキリと浮き出して居る。其葭の間に雪の積つた、細長い沼船が乘捨てゝある。本統に繪のやうだ。東洋の勝れた墨繪が實に此印象を確に摑み、それを強い效果で現して居る事を今更に感嘆した。所謂印象だけではなく、それから起つて來る吾々の精神の勇躍をまで摑んでゐる點に驚く。そして自分は目前の此景色に對し、彼等の表現外に出て見る事はどうしても出來ない氣がした。

自家では妻と四つになる留女子とが待つて居た。暫く溫かにしてある部屋で一緒に遊ぶ。

橋本君と一緒に上京して今日は多分歸るまいと思つて居たFさんが、頭から肩掛けを被つて一人で歸つて來た。橋本君は柳の家へ寄つたと云ふ。

少時して、自分は長靴をはいて又家を出た。

もう日暮だつた。サラ／＼と冱で水氣のない粉雪が盛に降つて居る。歸つて來たときからは又大分積つてゐた。

柳の書齋にはK君の他にリーチと橋本君とが居た。薄暗い中に石油ストオヴの火が雲母を通して其向いた方だけを赤々と幸福さうに照らして居た。

此間柳が置いて行つた、武者の「或る青年の夢」の英譯の一部分を自分は持つて來て返した。それの發表の仕方に就いて話す。柳は全體譯せた時に單行本で出すのが一番いゝだらうと云ふ。リーチは出來た部分から一般的な雜誌で廣く紹介するのが譯者の希望らしいと云つた。結局武者と譯者のS氏にもつとよく相談する事にする。

リーチは三ケ月ほどすると一家を擧げて英國へ歸る筈である。その前にもう一度「やき物」の展覽會をする爲めに、今まで竝べた店は狹すぎるので今度は三越にしようと思ふが、と云ふやうな相談を柳にかけて居た。

「どうですか。君はどう思ふか」とリーチ云ふ。

「他にいゝ所がなければ仕方がないな」と柳が答へた。

「うん」

「だけど、部屋の取り工合や、品物のアレンヂメントは總て君がやんなきやあ、駄目だな」

「左うです！ それでなければ私もいやです」

リーチは歸るとなると、尚ほ知つて置きたいことが色々あるらしかつた。

柳は京城の李王家博物館を兎も角見て行くやう、切りに勸めて居た。

「それは大變に見たい。それから朝鮮の景色も見たいです。朝鮮では色々のものが見たいです」

自分の本の見返しに使ふ紙を柳がわざ／＼朝鮮に頼んで呉れた話から、今度橋本君がお父さんの素描集を出すに就いて、日本の色々な生紙の見本を集めた話が出ると、エッチングの爲めにそれらを見たいとリーチが云つた。橋本君は

早速送る約束をして居た。

一個の事ばかりでお氣の毒です」他の人にかう云つて、リーチは尙出發後に殘す「やき物」の處置に就いて柳に考へをきいて居た。柳はリーチが心配ないやう、それらを引き受けて居た。

「然し、それは君にとつて大變面倒な事です」

「いゝよ。何んでもないよ。何んでもないよ」

「……それはありがたう」

少時して、食事の支度が出來て皆な母屋の方へ行つた。そして食事が濟むと直ぐ、汽車の時間になつたのでリーチは歸つて行つた。

食後、座敷の大きな火鉢にかん／＼火を熾こしてK子さんや小さい連中も一緒に、其廻りに車座になつて氣樂な話をした。間もなく下の玄坊が先づ沈沒した。それから暫くして上の理つちやんも柳の膝で眠つて了つた。

橋本君の原稿にある「英國人フェノロサ」は少し疑はしいと云ふ話から、

「伊太利亞臭い名ぢやないか」と云ふと、

「たしか、スキスの人だと覺えて居るがな」と柳が云つた。

「藤岡さんの繪畫史には、たしか英國人とあつたやうに思ひますけど」と橋本君は云ふ。

「いや、そんな事はない。調べれば直ぐ解る」かういつて柳は橋本君の出して來た、東洋美術に關するフェノロサの遺稿について居る細君の書いた小傳を調べ出した。

藤岡さんの本を調べて居た橋本君が、

「ありました。米國、ボストンの人、フェノロサ……」かういふと柳は、

「いや、それはうそだ。スペインだ……」人差指で字を追ひながら急いで讀みつゝ云つた。「確かに左うだ。スペイン人だ。」

皆は笑つた。橋本君の原稿が少し短過ぎるやうだといふ話のあつた時なので、

「それを皆書くといゝ。余は英國人と思ひ、柳氏はスキス人と思ひ、藤岡作太郎氏は米國ボストンの人と思ふ、といふ風に……」こんな事をいつて笑つた。

九時半頃歸る事にする。歸る時物尺を雪に立てゝ見たら、七寸五分あつた。珍しく輕い雪だ。そして上等の燒麩のやうに少しも水氣がなくサラ／＼して居る。富山縣の或る鑛山に居た男の話に、二丈位積んだ雪の中に風が吹込むと、それが中で荒れ廻つて埋まつてゐる家を雪の中で吹倒して行く事があると云ふ。かう云ふ雪なら、それもありさうな氣がした。

表から、廣い方の坂路へ出て歸る。活動寫眞の雪のやうだと云つてK君は興がつた。自分もK君もゴムの長靴をはいてゐたが、橋本君が足駄だつたのでたうとう足袋裸足になる。

自家のそば迄くると橋本君が先へ駈けだして行つた。そして自分達が歸つて見ると先へ行つた橋本君が未だ歸つて居ない。K君が大きい聲で呼んだ。間もなく歸つて來た。自家の前が知れずに通り過ぎて了つたのだと云ふ。

留女子は橋本君と約束のお土産の繪本を待つて未だ起きて居た。

橋本君はお父さんの素畫集の一部の見本刷りを持つて歸つた。墨繪、鉛筆畫、夫々の感じが非常によく出て居た。印刷も進んだものだと思ふ。殊に橋本君のは原畫を渡して置いて、一枚一枚刷つては引き較べさして居ると云ふ。刷る方にはこれは反つて苦しいのださうだ。一枚一枚に絶えずデリケートな注意を要するから。此素畫集の出版が總ての點で旨く行く事を自分達は望んで居る。

橋本君は別に法隆寺大鏡の金堂壁畫の部を持つて歸つた。これは又云ふまでもなく、驚くべきものだ。本統に立派なものは見る度毎に其立派さを增して行く。

交る／＼湯に入る。自分達は尙暫く話した。

明日布施の辨天へ遠足する事にする。

十二時頃橋本君とFさんは上の家へ歸つて行つた。それからもK君と二人丈で又少時話して居た。

K君が寢床へいつてから、自分は毎日決めてゐる仕事に掛つた。

時々窓をあけて見る。雪は止んだ。星が出て居る。ランプの光りで見ると、前の梅の枝に積つた雪が非常に美しかつた。

（大正九年二月）

眞鶴

伊豆半島の年の暮れだ。日が入つて風物總てが青味を帶びて見られる頃だつた。十二三になる男の兒が小さい弟の手を引き、物思はし氣な額付きをして、深い海を見下ろす海岸の高い道を歩いて來た。弟は疲れ切つて居た。子供ながらに不機嫌な皺を眉間に作つて左も厭々に歩みを運んで居た。然し兄の方は獨り物思ひに沈んで居る。彼は戀と云ふ言葉は知らなかつたが、今、其戀に思ひ惱んで居るのであつた。

こんな事があつた。或時、彼の通つてゐる小學校の教員が、新しく來た若い女教員と連れ立つて行く後を彼は何氣なく從いて行つた。其時不意に教員が「オイ」と云つて彼へ振返つた。

「我戀は千尋の海の捨小舟、寄る邊なしとて波の間に〱。お前に此歌の意味が解るかね」とかう云つた。かう云つて教員は笑ひながら女教員の顏を横から覗き込んだ。女教員は俯向くと、默つて耳の根を赤くして居た。

彼も變に恥かしくなつた。自分がそれを云はれたやうな、又それを自分が云つたやうな氣も一寸した。

「どうだね。解るかね」と再び云はれると彼も女教員のしたやうに默つて俯向いて了つた。そして、沖の廣々した所に小舟のゆら〱搖られて居る樣を、何と云ふ事なし繪のやうに想ひ浮べて居た。戀と云ふ言葉を知らぬ彼には素より歌の意味は解らなかつた。

眞鶴の漁師の子で、彼は色の黑い、頭の大きい子供であつた。

そして彼は今、其大きい頭に凡そ不釣合な小さい水兵帽を兜巾の如くに載いて居るのだ。咽は其ゴムで〆上げられて居た。此樣子は戀に思ひ惱んで居る者としては如何にも不調和で可笑しかつた。然し彼にとつては不調和でも、可笑しくても、又滑稽でも、此水兵帽は左う輕々しく考へらるべき物ではなかつたのである。

其日彼は父から歳暮の金を貰ふと、小田原まで、弟と二人の下駄を買ふ爲めに出掛けた。所が下駄屋へ來るまでに彼は不圖、或唐物屋のショーウインドウで其小さい水兵帽を見つけた。彼は急にそれが欲しくなつた。其處で後先の考へもなく、彼は彼の財布をはたいて了つたのである。

彼の叔父に、元横須賀の石切人足で、今、海軍の兵曹長になつて居る男がある。それから彼はよく海軍の話を聽いた。そして、自分も大きくなつたら水兵にならうと決心して居た。

「どうだ、此ボイラーの小せえ事、恰でへついひだな」とこんな風に、或る時叔父が煙突の上に丸いオーヴンでも乘せたやうな熱海行きの軌道機關車を笑つた事があつた。これ以外に汽車を知らぬ彼には此言葉だけでも叔父を尊敬するに充分だつた。そして彼は彼の水兵熱を益々高めて行つたのである。

それ故水兵帽を手に入れた事は彼にとつて此上ない喜びであつた。が、同時に彼は後悔もして居た。折角下駄を樂しみに從いて來た弟が可哀想だつた。二人が貰つた金で自分だけの物を買つた事を短氣な父がどんなに怒る事かと考へると流石に氣が沈んで來た。

然し松飾りの出來た賑やかな町を歩いて居る内に彼は何時かそんな事を忘れて、そして前から聞かされて居た二宮尊德の社へ詣でるつもりで、其方へ歩いて行くと、或る町角で、騷々し

く流して來た法界節の一行に出會つた。
　一行は三人だつた。四十位の眼の惡い男が琴をならして居る。それからその妻らしい女が額から手から、眞白に塗り立てゝ、變に甲高い聲を張上げ〳〵月琴を彈いてゐた。もう一人は彼と同年位の女の兒で、これも貧相な顏に所斑らな厚化粧をして、小さい拍子木を打ち鳴らしながら泣き叫ぶやうに唄つて居た。
　彼は其月琴を彈いて居る女に魅せられて了つた。女は後ろ鉢卷の爲めに釣上つて居る眼を一層釣上がらすやうに眼尻と眼頭とに紅をさして居た。そして、薄よごれた白縮緬の男帶を背中で房々と襷に結んで居た。彼は嘗てこれ程に美しい、これ程に色の白い女を知らなかつた。彼はすつかり有頂天になつて了つた。
　それから彼は一行の行く所へ何處までも從いて行つた。
　一行が或る裏町の飯屋に入つた時には彼は忠實な尨犬のやうに弟の手を引いて其店先に立つてゐた。
　――沖へ〳〵低く延びて居る三浦半島が遠く薄暮の中に光つた水平線から宙へ浮んで見られた。そして影になつてある近くは却つて暗く、岸から五六間綱を延ばした一艘の漁船が穩かなうねりに搖られながら舳に赤々と火を焚いてゐた。岸を洗ふ靜かな波音が下の方から聽こえて來る。それが彼には先刻から法界節の琴や月琴の音に聞こえて仕方なかつた。波の音と聞かうと思へば一寸の間それは波の音になる。が、丁度醉時に覺めてゐようとしながら、不知夢へ引込まれて行くやうに波の音は直ぐ又琴や月琴の音に變つて行つた。彼は又その奧にあり〳〵と女の肉聲を聽いた。何々して―柿！の　は―な―からぶふ文句までが聽取られるのだ。
「奴さんだよう」こんな事をいつて下で兩手の拆先を合はせ、中腰で兩膝を開き首を振りながら、一二三度足を前へ擧げた形とか、捨兒の劍舞で眞白に塗つた顏をあげて泣く樣子、所はけな人形にする頰ずり、それらを想ひ浮べると彼の胸は變に憐ましくなつた。
　遙か小田原の岸が夕靄の中に見返られる。彼は今更に女と自分との隔りを感じた。今頃はどうして居る事か。
　彼にはあの泣き叫ぶやうな聲を張上げて居た少女の身の上が此上なく羨ましく思はれた。然し彼は其少女にいゝ感じを持たなかつた。彼が飯屋の前に立ち盡して居た時に少女は時々惡意を含んだ險しい眼つきを彼の方へ向けて居たが、仕舞に男と代る〴〵酌をしてゐた女に何か此方を見い〳〵告口をした。彼はヒヤリとした。然し女は何の興味もなささうに一寸此方を見て、直ぐ又男と話し續けたので、彼はホッとした。
　夜が迫つて來た。沖には漁火が點々と見え始めた。高く掛かつて居た半かけの白つぽい月が何時か光を増して來た。が、眞鶴までは未だ一里あつた。丁度熱海行きの小さい軌道列車が大粒な火の粉を散らしながら、息せき彼等を追ひ拔いて行つた。二臺連結した客車の窓からさす鈍いランプの光がチラ〳〵と二人の横顏を照らして行つた。
　少時すると、手を引かれながら一足遲れに歩いて居た弟が、
「今日の法界節が乘つて居た」とこんな事を云つた。彼はドキリとした。彼は自分の胸の動悸を聞いた。そして自分も何んだかそれをチラと見たやうな氣がした。汽車は何時か先の出鼻を廻つて、今は響きも聽こえて來なかつた。
　彼は今更に弟の疲れ切つた樣子に氣がついた。急に可哀想になつた。そして、
「くたびれたか」と訊いてみたが、弟は返事をしなかつた。彼は又、

「おぶつてやるから」と優しく云つた。弟は返事をする代りに顔を反向けて遠く沖の方へ眼をやつて了つた。弟は何か口を利けば今にも自分が泣き出しさうな氣がしたのである。優しく云はれると、尚であつた。

「さあ、おんぶしな」彼はかういつて手を離し、弟の前へ蹲んだ。弟は無言のまゝ倒れるやうにおぶさつた。そして泣き出しさうなのを我慢しながら、兄の項に片頰を押し當てると眼をつぶつた。

「寒くないか？」

弟はかすかに首を振つて居た。

彼は又女の事を考へ始めた。今の汽車に乘つてゐたのかと思ふと彼の空想に生々して來た。此先の出鼻の曲り角で汽車が脱線する。そして崖から轉げ墜ちて、女が下の岩角に頭を打ちつけて倒れてゐる有樣を彼はまざ／＼と想ひ浮べた。彼は又、不意に道傍から其女の立上つて來る事を繰返し／＼想像した。彼は實際に女が何處かで自分を待つて居さうな氣がして居た。

弟は何時か背中で眠つて了つた。急に重くなつた弟の身體を彼は搖り上げ搖り上げして歩いた。段々に苦しくなる。腕が拔けさうになるのを彼は我慢して歩いた。彼はこれを我慢し通さなければ駄目だと云ふ氣がした。何が駄目なのか自分でも明瞭しなかつた。然し兎も角彼は首を龜の子のやうに延ばして、エンサ／＼と云ふ氣持で歩いて行つた。

やがて、其出鼻へ來たが、其處には何事も起つて居なかつた。そして、それを曲ると彼に突然直ぐ間近に、提灯をつけて來る或る女の姿を見た。彼はハッとした。同時に其女から聲をかけられた。それは餘りに彼等の歸りの遲いのを心配して、迎ひに來た母親であつた。

すつかり寢込んで了つた弟を彼の背から母親の背へ移さうとすると、弟は眼を覺ました。そして、それが母親だと知ると、今まで壓へ／＼して來た我儘を一時に爆發さして、何かわけの解らぬ事を云つて暴れ出した。母親が叱ると尚暴れた。二人は持て餘した。彼は不圖憶ひ出して自分のかぶつてゐた水兵帽を取つて弟にかぶせてやつた。

「えゝ、穩順しくしろな。これをお前に呉れてやるから」から云つた。

今は其水兵帽を、彼はそれ程に惜く思はなかつた。

(大正九年八月)

雨蛙

（長與善郎兄に捧ぐ）

A市から北へ三里、Hと云ふ小さな町がある。道に添うた細長い町で、生垣が多く、店家は少なかつた。住民は大方土着の舊家で、分家々々と分かれて殖えた爲めに、百戸餘りの家が大體五つか六つの姓に含まれた。土地の人々は、道角の誰れ、藪前の誰れ、或は棒屋の誰れといふ風に呼び慣はし、その藪が十年前に伐開かれた今も、某が親の代に棒屋をよして居ても依然その儘に呼んで他の同姓から區別した。

町には昔から一つの組合があり、それで互に助け合つた。誰れが左ういふものを作つたか今は知らぬ人の方が多かつた。町を縦に貫く道は縣道よりも立派だつた。左右へ入る小路は冬の霜解、雨期の泥濘は仕方ないとして、人の歩くだけは一ト筋に平石が敷かれてあつた。例へば或る家が燒け失せる。左ういふ時それが再び元のやうに建てられる爲めには恐らく普通の半分の費用も要らなかつた。用材は共有の山林から只得る事が出來たし、勞力も一軒から何人として寄附される事になつて居た。

然しかういふ町からも或時、町だけの生活に滿足出來ない者が出る。その者は都會へ出る。仕事をする。失敗する。再び歸つて來る。それでも、町の人々はその家を潰さぬだけの助力を惜しまなかつた。組合の同意を得れば低利資金を借出す事さへ出來た。左ういふ町であつた。

町の中程に土藏作りで美濃屋といふ造り酒屋がある。若い主の贊次郎は一人兒で中學時代には父の意嚮で農科大學を卒業し、家業を襲ぐ筈だつたが、五六年前その父に死なれ、急に一家の若い主になつた。岡蔵といふ祖父の代からの番頭が居、家業に差支へはなかつたが、家に主がゐなければと云ふ祖母の考へで彼は市の寄宿舍から呼び返され、その儘家に居ついたのである。然し彼は此事に不服はなかつた。自分が農學士になつたからとて、もつとうまい酒を土地の人々に吞ます事が出來るとも思はなかつたし、學士になつて偉さうな顏をするなど云はれないだけでも氣安い事だ、とこんなに彼は考へる方だつた。

贊次郎の親しい友に竹野茂雄といふのがある。中學を卒業すると東京の私立大學の文科に入り、詩や歌を作り、靑葉といふ號で、文學雜誌に投書などして居た。彼は文壇の消息通で、よく左ういふ話を贊次郎に聽かした。

然し贊次郎の方は詩や歌を作らうとは思はなかつた。出來ないと思つてゐたし興味もなかつた。そして本も餘り讀まなかつた。從つて竹野の左ういふ話も身を入れて聽いては居なかつたが、町へ歸り、その生活を幾らか單調に感じ出すと、いつか竹野の影響が彼に現れ始めた。彼は市へ出る度、何か左ういふ讀物を買つて歸るやうになつた。

竹野は投書家仲間の女と最初は文通に始まり、間もなく話は結婚まで進んだ。女は東京の水菓子屋の娘で美しいといふ方ではなかつたが、若いにしては心のしつかりした女だつた。

竹野は三男で結婚には至極自由な身であると氣樂に考へて居ると、案外にも年の大分違つた長兄がそれに反對した。長兄には文學をやる女といふ事が先づ氣に入らなかつた。兩親は隱居し、總て長兄任せになつてゐたから、そ

の不同意は家全體の不同意も同樣だつた。竹野は腹を立て、家と絶縁し、A市で女と水菓子屋を開き、それで自活する事にした。

同じ頃、美濃屋の賛次郎も結婚した。遠縁の農家の娘で、彼は前から好きだつた所に祖母から云ひ出され、一も二もなく承知したのである。いゝせきと云ふ名だつた。無口で餘りはき〳〵しない、學問のない、然し誠に美しい田舍娘だつた。脊丈のない事を當人は苦にして居たが、四肢の均等した發育が、それを少しも醜く見せなかつた。首から上の小さい、髮の毛の豐かな――髮は少し赤かつたが――皮膚の滑らかな、鼻の形の正しい、そして全體に如何にもクリクリと肉附に彈力のある事が見るから健康さうな感じで何、にも一種の快感を與へた。一つ當人の知らぬ缺點を云へば茶色の勝つたその眼に光りがなかつた。

間もなくいゝせきは姙娠した。その五月目、丁度秋の末、流感がはやり、彼女はそれに罹つた。姙娠中の流感で人々は氣遣つた。そして實際胎兒は流産して了つた。で、いゝせきはそれなり直つたが、いゝせきの上を一[illegible]つた[illegible]が最後に同じ病氣に罹り、これは肺炎に進み、遂に亡くなつた。

――その時から今に三年經つ。いゝせきはもう姙娠しなかつた。そして氣短な祖母はよく〳〵その事を口にし、賛次郎に苦い顏をさせたが、當のいゝせきは却つて氣にも留めなかつた。

白鼠の間藏が中風に罹り、郷里へ歸つてからは賛次郎もいよ〳〵一本立ちで何事もやらねばならぬ身となつた――筈である。所で實際には氣丈者の祖母が永い經驗から、家事、商事、總てに釆配を振つて居て呉れた。

賛次郎の文學趣味は少しづゝ亢じて來た。彼は座敷に大きな本箱を据ゑ、それに新刊書の溜まつて行くのを樂んだ。そして近頃は自身でも短い文章を作り、竹野に見て貰つたりした。

彼はいゝせきにも左う云ふ方面の敎養を與へたいと思つた。一人では何んとなく淋しかつた。が、いゝせきにそんな事は無理だつた。賛次郎は以前の自身を想ひ、察しられたから、落膽もしない代り、念ひ斷りもしなかつた。

或日竹野から葉書で、近日、市の公會堂で講演の時作家のSと小説家のGとが講演をする、その時は是非來るやうにと知らせがあつた。賛次郎にはいゝせきも連れて行きたかつた。彼は返事に其事を云ひ、女連れ故、一泊させて貰ふかも知れぬと書いた。

やがて其日が來た。十月にしては晴れて居ながら、いやに生温かい風の吹く日だつた。會は三時からで、早ひるで出掛ける事にし、其支度をして居ると、手傳つて居た祖母が如何した事か不意に横に倒れた。脈搏が悪かつた。大した事はないが、病人を雇人任せにしては出られなくなつた。彼はいゝせきに云つた。

――お前はどうするか。竹野君が待つて居ると思ふが、お前一人だけでも行く方がよくはないか。お前が行けば私も會の模樣を聽く事が出來るし。左うしないか」

「へい」

――病人は私が居れば心配ない。案じず、ゆつくりして來なさい」

「へい」いゝせきは無心の眼差しを向けから答へた。

間もなく待たせてあつた俥に乘り、出掛けて行つた。賛次郎は店前に立ち、その後姿を見送つた。今は田舍でも餘り見かけなくなつた廂髮を搖られながら、生垣の續く長い一本道を、いゝせきは一度も振返らず、段々に遠ざかつて行つた。

祖母は幾らか熱があり、常より赤い顏をして居た。賛次郎はうつら〳〵してゐる病人の枕元で本を讀みながら、時々額の手拭を絞り更へた。

酒倉の前で職人達が大樽の箍を締めて居る。

その乾いたやうな槌の響が風音と混り合つて聞こえて來る。彼は合間々々にその方の見廻りもせねばならなかつた。

今頃はどうして居るだらう。彼は時々せきの上を思つた。大勢の聽衆の中に呑まれ切つて居る妻の姿を想浮べるとせきがさう云ふ場所に餘りに不調和な人間だつた事が今更に想はれた。

その晩、彼は祖母と枕を竝べ、早く床に就いた。祖母とは何年振りかで同じ部屋に寢ると思つた。

夜に入り、風は靜まつたが、廂にぽつり〳〵雨の音がしはじめた。變に蒸々と寢苦しい晩だつた。病人は少し熱が下がつたらしく、すや〳〵とよく眠入つて居た。雨は段々烈しくなつた。

翌日彼の起きた時には空は綺麗に晴れ、風は北に變り、秋らしく冷え〳〵とした氣持のいゝ朝になつて居た。彼より先に起き出た祖母は半白の髮をさつぱりと束ね、もう勝手元を働いて居た。

「買物もあるし、遊びがてらAへ出ようと思ふが、もうすつかり快くなりましたか」

「あゝ快くなつた」

彼は食事を濟ますと直ぐ自轉車で市へ向ふ事にした。前日とは急に寒くなつたので、彼はせいきの爲めに肩掛けを風呂敷包みにし、自轉車のハンドルに懸けて出た。

實際氣持のいゝ朝だつた。道には小砂利が洗ひ出され、木や草には水玉がキラ〳〵光つて居た。蓮畑の紫の花が黒い濡土と共に大變美しく見えた。遠い空で雁の淡い一列が動いて居る。彼はのび〳〵した樂しい心持で自轉車を走らせて行つた。

彼が水菓子屋の店前で自轉車を降りた時、竹野は溝板の上で遠くから來たらしい林檎の箱を開けて居た。そして今まで俯向きに赤くなつた顏をあげると、當惑の色を浮べながら、前夜せいきは迎雲館に泊り、今、此處に居ない事を告げた。賛次郎は眼を丸くした。いゝせきと迎雲館、此對照が最初彼には甚く滑稽に映つた。市一等の旅館で自分達には足踏ならぬ場所のやうに考へられて居たからだ。然しそれも竹野の何か事ありげな氣配で、彼は直ぐ不安にされた。

竹野は着て居た厚司を帳場へ脱ぎ捨てると、先に立つて、薄暗い階子段から天井の低い店二階に彼を導いた。其處で竹野は彼に精しい事を話し出した。

前日講演會が濟んだのは既に日暮れだつた。續いて市の新聞社主催の歡迎會が昔藩主の別邸だつた清々園といふ料理茶屋で開かれ、竹野はその方に出たが、女達はその晩、講演會場の樂屋で山崎芳江といふ土地の女子師範の音樂教師から講演者達に紹介され、その時の約束で、二人は芳江と宿の迎雲館でSやGの歸りを待つてゐた。

SとGとが、烈しい降りの中を自動車で送られ、歸つて來たのは十時過ぎだつた。二人は可成酔つてゐたが、それでも女達の前では最初、割りに謹み深く見えた。

Sは色の白い、眼の優しい柔かい髮が廣い額を斜に隱し、物云ひも丁寧に、聲も小さく、動作まで何處か女らしい感じを與へる男だつた。Gは反對に眼、鼻、顎、首、總てが強い線でがつしり造られ、肩幅もあり全體頑丈で何んとなく力強い感じに溢れてゐた。竹野の細君にはGのさういふ感じが何となく恐しく思はれた。

席には女の飲む甘い酒と果物とが運ばれ、――然し人々は餘りそれに手を出さなかつたが、只芳江だけがそれを重ね、一人はしやいでゐた。

芳江は男との關係ではよく噂に上り、Sとの關係もそれを知る者には寧ろ公然の祕密で、市での評判は餘りよくなかつたが、その豐かな

肉體と峰と派手な性質とでは今は此市になくてならぬ女のやう若い連中からは思はれてゐる、左ういふ女だつた。
　皆は氣輕に話し合つた。SやGの話は講演の時より面白かつた。殊にGは自由に何んでもいひ、仕舞ひには女連れの前では憚かられるやうな事まで巧みにその露骨さを消して話した。
　せきは呑まれ切つて頬に空ろな笑ひを浮べながら、淋しい眼つきで人々の顔を見較べてゐた。
　竹野の細君は左ういふせきが氣の毒でもあり、それに雨も止む樣子がなかつたから、そろ／＼歸支度にかゝると、幾らか醉つてゐた芳江が切りと止めた。一人殘る方がいゝ筈なのに、左う思ふ竹野の細君はそれを輕く受流してゐたが、芳江は惰性的に段々執拗くそれを云ひ張つた。心にもない我を通す芳江だから關はず歸らうとすると仕舞ひに芳江は本氣に怒り出した。そして捨鉢に、
「そんなら私も一緒においとましてよ」そして泣き出しさうな顔で男達を流し眼に見ながら如何にも甘えた調子に「ねえ、Gさん、私もおいとまするわ」
「左うかい」殊更無關心にGは答へた。「然し君にはSが何か用事があるんぢやないか」
「串戲云つちやいけないよ」Sはにやりとした。「それぢやあ、芳江さんの方から用事があるのか」
　芳江はいきなり荒つぽく起つて行つてGの背中を二つばかり強く撲つた。Gは故意に平氣な顔を見せてゐた。
　竹野の細君は居堪らない氣持になつた。そして吃驚してゐるせきを連れ、座敷を出ようとすると芳江は險しい眼つきで寄つて來た。
「そんなら貴女はもうお止めしないわ。けど、せき子さんだけはお止めしてよ。せき子さんは何處へ泊るのも同じだわね。左うでせう？　此降りにわざ／＼お歸りになる事ないでせう？」
「若しおよろしければお泊りになりませんか」Sも云つた。
「へい」せきは微笑し、かすかに點頭いた。
「お泊りになりますか？」
「どちらでも」
　竹野の細君は吃驚した。そしてどういつていゝか分らずにゐる內、到頭力のある芳江の爲めに廊下へ押し出された。Sが起つて送つて來た。その後から芳江は勝誇つたやうにこんな事をいつた。「いくら女だつて、堅いばかりが能ぢやあないわ」
　贊次郎には話の重さが分らなかつた。何んでもない事のやうでもあり、何かしら非常に困つた出來事のやうでもあり、見當がつかなかつた。只、それを話す竹野の意氣込が只事でなかつた。
　下に俥が止まり、竹野は急いで降りていつた。間もなく階下から竹野の何か細君に怒る聲がして來た。
「えらい髪に結つて來られたよ」苦がり切つて竹野は還つて來た。
「どんな髪だらう？」
「直ぐ結ひ直さすよ」
「いゝぢやないか。僕もそれが見たいよ。せきのは餘りに舊式だからね。少しは新式にならんといけないのだよ」贊次郎は殊更氣輕に起つて行つた。薄暗い階子段の下にせきと竹野の細君とがぼんやり向かひ合つて立つてゐた
「どう、髪を見せなさい」贊次郎は店の明かるい方にせきを連れ出した。それは耳隱しといふ髪で、頬に紅などをさした當世風が思ひがけなくせきには甚く似合つてゐた。
「よろしい。よろしい」贊次郎は冷かしさうに伏眼をしてゐるせきの尖つた小さい顋を指先に

摘んで此方へ向けた。實際彼はそれから少しも厭やな感じを受けなかつた。せきは指先から頤を外し、又俯向いた。

「疲れたやうな顔をしてゐるね。直ぐ歸らうか？」

せきは首肯いた。

「講演は分つたか？」

せきは首を振つた。

「左うか。それはいけなかつたね。けれども山崎女史の唄があつたさうだね。いゝ聲だつたらう？」

首肯いた。

「一昨晩、迎雲館では山崎女史と一緒だつたか？」

首を振つた。

「せき一人にされたのか？」

その時せきは横を向いた儘、意味の解らぬ微笑を浮べた。賛次郎はどきりとした。そして思はずせきの顔を見凝めたが、せきは一寸側になつた力のない眼差しでぼんやり遠く往來の方を見てゐた。賛次郎はそれ以上訊く氣がしなかつた。それは許されてない事のやうでもあり、自分としても訊くのが恐しかつた。訊けば直ぐ正直に答へるせきだけに恐しかつた。

彼の心は甚く亂された。

直ぐ歸る事にし、彼は又階子段を昇つて行つた。上では竹野夫婦が何かひそ〳〵話し合つてゐた。彼の足音で、細君は急いで起ち、段の上で昇り切る彼を待つて降りて行つた。賛次郎は出來るだけ平靜にと心掛けた。

俥の來る間二人は向かひ合つてゐたが、話が全でなかつた。賛次郎は火のない宣徳火鉢に窮屈な姿勢で兩手を突き、自身の心の空虚と戰つてゐた。出窓の千本格子を透して向う側の蒐寶屋の二階が見えた。赤地に白くメリヤスとぬいた大きな旗が秋の軟かい日差しを受けてゆら〳〵大きく搖れてゐた。

「左うだ。肩掛けを持つて來た」賛次郎は不圖ぼんやりこんな事を考へた。

「俥が參りました」階下から細君の聲がして竹野は降りて行つた。賛次郎は何んといふ事なし、忘れ物はないかしらといふやうな氣持で部屋中を見廻し、それから、暗い急な階子段を用心しい〳〵降りて行つた。

せきは店の葡萄や林檎やバナヽ、などを竝べた間に立つてゐた。竹野は懐手のまゝ、不機嫌な顔をして框に突立つてゐた。賛次郎はその足元に屈んで靴を穿いた。竹野の細君は函の大鋸屑から林檎を幾つか取出し、荒い目籠に入れて、それを車夫に渡した。

「その内又來てくれ玉へ」

「ありがたう」賛次郎は尻端折をしながら、響のない聲で答へた。

朝はそれ程でもなかつたが向ひになると風は寒かつた。せきは默つてゐる。話しかけても肩掛けに頬を埋めたまゝ、返事をしなかつた。打碎かれた淋しい心、何をいつてもそれに觸れさうな恐しさで、凝つと不機嫌に默り込んでゐる、左ういふせきであらうと賛次郎は思つた。耳隱し、頬紅などの當世風が先刻はよく思つたが、陽なたの田舍道では醜く見えた。

彼も默つてゐたかつたが、年寄の車夫が彼を默らして置かなかつた。郵便の簡易保險は如何いふものだらうとか、田より畑の方が値がよくなつたとか、A市の郊外に工場が出來るので、賛次郎の町の某の息子が新潟の醫專を出て、市の病院へ來るのか、それとも町で開業するのかとか、左ういふ話題が盡きなかつた。賛次郎は車夫との話がつらくなつた。彼はせきの疲れを氣にしながら、

「どうだらう。此邊から歩かうか」と云つた。

縣道から町へ分かれる所に大きな榎がある。前夜の雨に打たれた枯葉が一面に散敷いてゐ

る。其處でせきは俥を降りた。果物の籠を自轉車に移し、それを曳き、二人は肩を並べて歩いた。熟れ切つた稻の香が強く鼻へ來る。足元からうるさく稻子が飛立つた。逃げまどつた一疋がせきの肩に止まり、暫く二人の道連になつた。

せきは少しも口を利かず、贊次郎のゐるさへ意識しないやうに、ぼんやり遠い一點を見つめて歩いてゐた。その樣子が贊次郎には何かせきが其處に或る幻影を認め、それを見つめる事から氣の遠くなるやうな陶醉を感じて居るのではないかしらといふ氣が不圖して來た。打碎かれた淋しさの不機嫌としては餘りにその眼は何かを夢見てゐた。如何にも甘い夢だ。それに醉ふ一種の喪心狀態に思はれた。贊次郎には變にはつきりとせきのその心持が映つて來た。彼は思はず頰に血の昇るのを感じた。胸の動悸を聽いた。力に溢れ切つたやうなと云はれるGと、此美しい肉附のせきと、此關係は實際不思議な力で彼の肉情を刺激して來た。彼にとつて、その事の想像は最早他人の戀愛事件ではなかつた。

「あのね、彼は息をはずませながら、優しい聲で云ひ出した。「昨夜は一人でなく誰れか側に寢たか？」

一初めは芳江さんが寢てゐました一

「それから？」

「何時の間にか芳江さんが居なくなつてGさんが入つて來ました一

一それで？」

「GさんはSさんと芳江さんに追ひ出されて來たのだといひました」

「それで？一

一……」せきは急に下を向いた。

彼は不意に其場でせきを抱きすくめたいやうな氣持になつた。せきが堪らなく可愛い。そして彼は危くその發作的な氣持に惹込まれかけたが、ガタンと音のするやうな感じで我に還ると、驚いて其不思議な氣持から飛退いた。

「何んと云ふ自分だらう」

彼はそれきりもう默つた。そして自分の氣の靜まるのを待つた。然し彼の胸は淡いなりにせきをいとをしむ心で一杯だつた。

暫くして、それは一方が田、一方が森になつてゐる所で、贊次郎は電柱に自轉車を持たせ、その道傍の草へしみ〴〵と小用を足した。長い小用だつた。其時彼は何氣なく上を見ると、電柱の中程に何か青い物を認めた。何だらう？　左う思つて直ぐ雨蛙だといふ事に氣附いたが、森の傍で何故こんな柱などに住んでゐるのだらうと考へた。雨蛙は其電柱が未だ山で立ち木だつた頃、其處から小さい枝が生えてゐた、その跡が朽ち腐れて今は臍のやうな小さな凹みになつてゐる、その中に二疋で重なり合ふやうに蹲つて居た。その樣子が彼には如何にもなつかしく、又親みのある心持で眺められた。その少し上に錆びた鐵棒の腕があり、蜘蛛の巣だらけの電球が道を見下ろして居た。雨蛙は其灯に集まる蟲を捕る爲め、こんな所につゝましやかな世帶を張つて居るのだ。これは屹度夫婦者だらう、左う思つた彼は、やがてそれが自分達の生活なのだと云ふやうな氣持になつた。彼はせきに雨蛙を示したが、せきは何の興味も持たなかつた。

間もなく二人は自分達の町へ歸つて來た。それは昨日のまゝの靜かな、つゝましやかな町だつた。いや、贊次郎には僅か數時間前に出たばかりの町だつたが、それが如何にも久しく見ない所だつたやうに彼には思はれた。

その夕、贊次郎は四五冊の小說集と二冊の戲曲集とを本箱から拔取ると、人知れず、裏山の窪地へ持出し、何か惡事をする者のやうな臆病さで燒捨て、漸くほつとした。

（大正十二年十二月）

轉生

一

或る所に氣の利かない細君を持つた一人の男があつた。男は細君を愛しては居たが、その氣が利かない事ではよく腹を立て、癇癪を起し、意地惡い小言を續け樣にいつて細君を困らした。その度、細君は自身のその性質を嘆き、愚痴を云つた。
「貴方は私のやうな氣の利かない奥さんをお貰ひになつた事を心では後悔してゐらつしやるでせう？ 屹度左うに違ひない」
「うん。後悔してゐる」
「本統に？」
「本統に。然し今更後悔しても追つかないと諦めて居るよ」
「私、それがいやなの。それがいやなのよ」と細君は泣く。

二

「女と云ふものは全く度し難いけだものだ」
或る日良人は癇癪まぎれにこんな事を思つた。
それから暫くして幾らか機嫌が直つた所で、彼は又こんな事を思つた
「然し同じけだものを飼ふなら、兎に角ドメスティックなけだものゝ方が無難でいゝ。隨分野獸を飼つてゐる男もあるのだから。中には猛獸を飼つてゐる人さへあるのだから。猛獸使ひで暮すよりは、豚飼ひの方が安氣でいゝのだ。左う諦めるより仕方がない」
かう思つて彼は自分を慰めた、彼は女性解放といふやうな事も黒奴解放以上には解してゐない男であつた。

三

類は友を呼ぶの譬に洩れず、來る女中來る女中、皆氣が利かなかつた。する事爲す事が彼の思ふ壺を外れた。が、彼の機嫌のいゝ時はそれでもよかつた。然し一たん蟲の居所が惡いとなると、自分でも苦しくなる程、彼には小言の種が眼の前に押寄せて來た。左ういふ時彼は加速度に苛々し癇癪を起こし、自分で自分が淺間しくなるのであつた。
「總てに馬鹿さの感じが、漲つてるぢやないか。家中が馬鹿さの塊りで一杯だ。眼も口も開いてられやしない」こんな風に見得も擺りもなく怒鳴り散した。
「又、出家遁世ですか」
「本統に俺は旅行するから、直ぐ支度をして呉れ」
「お旅行が始まりましたネ」
「直ぐ支度して呉れ」
「何をそんなに怒つてゐらつしやるの？ 何もそれ程お怒りになる事ないぢやありませんか。何がいけないの？」
「一から十までいけないんだ。十から百までいけないんだ」
子供から寢起きの惡い良人は朝飯の食卓でよくかういふ癇癪を起した。空腹だゝ一層それが烈しかつた。

四

「つまり貴方があんまりお利口過ぎるのね」
或る朝良人が珍らしく機嫌のいゝ時、細君は

笑ひながらこんな事をいつた。
「お前が馬鹿過ぎるんだよ」
「左う？ そんなら私も今度は出來るだけ利口に生れて來ますからね、貴方ももう少し馬鹿に生れて來て頂戴よ。釣合ひがとれないからね」
「人間に生れて來たんぢやあ、いつまで經つても同じ事だよ。女の馬鹿は昔から通り相場だ」
「人間でなく、何がいゝの？」
「豚かね？」
「貴方さへおつき合ひ下さるなら……」細君は笑つた。
「豚は御免蒙らう」
「一番夫婦仲のいゝ動物は何なの？」
「何かな。狐なんかいゝといふ事だ。樺太の養狐場の話でそんな事を讀んだ事がある。しかも嚴格に一夫一婦ださうだ」
「感心ですわね。大變いゝ事ですわ」
其時良人は一夫多妻主義の動物は何かな、と考へてゐた。然しそれは口に出さず、
「狐も俺はいやだよ」と云つた。
「それぢやあ何がいゝの？ 他に夫婦仲のいゝ動物あつて？」
「鴛鴦かな？ いゝいゝ、ゑんあうの契で」
「鴛鴦は綺麗でいゝわ」
「但し綺麗なのは雄だけだが、それでもいゝかね？」
「結構ですわ。それぢやあ左ういふ事に今からお約束して置きますよ。忘れちやあいけませんよ」
「忘れるのはお前だ。間違へて家鴨なぞに生れて來ると取返しがつかないよ」
「眞逆」
「眞逆なものか。あり勝ちな事だ」

五

扨てこれからがお伽噺になる。何十年か經つて此口八釜しい良人は一生細君に小言の云ひつゞけ、癇癪の起こし續けで、目出度く死んで了つた。
細君は一方ほつともしたが、小言ももう聞けない事かと思ふと流石に淋しい氣持になつた。細君は一層耄碌した。そして死ぬさへ忘れたかのやうに氣樂にそれからしばらく生きてゐた。
死んだ良人は約束通り鴛鴦に生れ變つて、細君の死ぬのを待つて居た。彼は細君が呑氣らしくいつまでも生きて居るのを相不變だと思つた。彼は一緒に外出する時、よく門の外でながく待たされた事などを憶ひ出して居た。

六

何年かして細君の方も到頭死んだ。そしていよいよ生れ變る時が來たが、何に生れ變るのか、それを忘れて了つた。鴛鴦だつたかしら、狐だつたかしら、それとも豚だつたかしらと考へた。豚でない事は確かに思へたが、鴛鴦か狐かが分らなくなつた。細君にはどうも鴛鴦だつたやうに思へた。然し日頃良人が口癖のやうに云つて居る事を憶ひ出した。「迷ふ二つの場合があると、お前は屹度いけない方を選ぶ。たまにはまぐれにもいゝ方を選びさうなものだが、宿命的に間違ひを選ぶのは實に不思議だよ」
これを憶ひ出すと細君は彷迷はずには居られなかつた。自身が鴛鴦だつたやうに思ふ所にその宿命があるのかも知れない、これは逆に狐を選ぶ方が却つて間違ひないだらう。左う考へて、たうとう狐に生れ變つて了つた。

七

女狐は森から森、山から山と良人を尋ね歩いた。然し中々出會ふ事は出來なかつた。そしていよいよ尋ねあぐみ、或る山奥に來た時に、その時は既に三日も餌にありつかず、疲勞から殆

と昏倒するばかりになつてゐたが、遙か下の方に流れの音を聞くと、せめて水なりと飲んで一時をしのがうと、力の抜けた足を踏みしめ〳〵よろ〳〵とその方へ降りて行つた。

良人の鴛鴦は清い渓流に獨り淋しく暮らして居た。彼は今も潭をなす水面から一寸頭を出して居る一つの石の面に片足で立ち、うつらうつらして居ると、不圖何か自身に近づくもののあるのに氣が附いた。彼は驚いて飛び立たうとした。が、同時にそれが待ちに待つた細君である事に氣附くと二度吃驚し、思はず叫んで、その傍へ飛んで行つた。

女狐も驚いた。然し今は餘りの喜びと空腹とから、彼女はその儘其處に意氣地なく這ひつくばつて了つた。扨て兩方で額を突き合はして見て、初めてその大變な間違ひに驚き呆れた。良人は女狐の臭氣にむせ返りながら、それでも直ぐ持前の癇癪を起こし怒鳴り出した。

「何と云ふ馬鹿だ！」

八

女狐は泣く〳〵自身の思ひ違ひを詫びた。然しいくら詫びた所で、又よし良人がそれを許した所で、もう追ひつかなかつた。

良人の鴛鴦は頭の毛を逆立て、羽搏きをしながら怒つてゐる。女狐の方は詫も詫だが、空腹と疲勞から意識も絶え〴〵に言葉さへはつきりとは口に出なくなつた。眼の前で怒鳴り散らして居るをしどりは良人には違ひなかつたが、少し意識がぼんやりして來ると、それ以上に此上ない餌食に見えて仕方なかつた。要領の惡い所から兎にも野鼠にも逃げられ通しで來た細君には一層その感が深かつた。然しこれは餌食ではないぞ、大事な〳〵良人だぞと心に繰返して我慢して居るのだが、良人の小言は餘りに執拗かつた。

今はどうにも堪へられなくなつた。女狐は一ト聲何か狐の聲で叫んだと思ふと不意にをしどりに飛びかゝり、忽ちの内にそれを食ひ盡して了つた――――と云ふ話である。

これは一名小言の報い」と云ふ大變教訓になるお伽話である。

「それは口八釜しい良人に對する教訓なのですか」

「左うです」

「氣の利かない細君の教訓にもなりますね」

「左うですか」

「小言を云はれても其細君が良人を愛して居る場合には……」

「成程」

「これは貴方の御家庭がモデルなのでせう」

「飛んでもない事です。私の家内は珍らしい氣の利いた女です。私とても至つて溫厚な良人です。私の家庭では小言の聲など聞く事は出來ません。文藝春秋と云ふ雜誌に私の名で家内安全の祕法を授く、と廣告が出て居た位です」

（大正十三年三月）

大津順吉

第一

一

「自分の生涯にはもう到底戀と云ふやうな事は來はしない」から云ふ事を思つては私はヨク淋しい想ひをした時代があつた。仕事にもマルデ自信がなかつたし、「戀が何んだ！」とそんな強い音は迚も出せなかつた。

其頃私は生ぬるい基督信徒だつたのである。境遇として色々な誘惑に遠かつた私はポーロの「汝等淫を避けよ」と云ふ言葉を殆どモットオとして居た。私にとつて此モットオを敷衍すると、妻にする決心のつかない女を決して戀するな、と云ふ事にもなつた。こんな事が私を益々女に縁のない生活に導いたのである。

十七の夏、信徒になつて、二十過ぎた頃からは私には女に對する要求が段々強くなつて行つた。私は何んとなく偏屈になつて來た。其偏屈さが自分でも厭はしく、もつと自由な人間になりたいと云ふ要求を時々感ずるやうになつた。

然しそんな事も私の信仰を變へる迄には其頃の私としてカナリ長い時日と動機となるべき色々な事件とが必要だつたのである。

子供から學校が嫌ひで、物に厭きツぽくて、面白くない事にはマルデ努力出來なかつた私は信仰上の事にも實際怠惰者であつた。私は自分の信仰は十七の時からズーッと教へを聽いて居る角筈の「U先生に預かつて居て貰ふやうな心持で居た。尤も先生はイツモから云つて居た。「人間が同じ弱い人間に倚つて信仰を保つて居る位危險な事はない。第一吾々が師と呼ぶべき者は唯一人しかない。それはキリストである」然し我の強い、いゝ意味で一本調子な先生は少しでも自分と異つた信仰を持つやうになつた弟子は只出入りする事さへ快く感じなかつた。それは弟子となつて居る者は誰でも感じないワケに行かなかつたらうと思ふ。まして私は運動の事と小說を讀む事、これ以外に殆ど得意のなかつた頃で先生の考へを批評する氣もなかつたし、只々偉い思想家だと決めて、それを手頼つて居たのであつた。

のみならず、私は何よりも彼によりも、先生の淺黑い、總ての造作の大きい、何となく恐ろしいやうで親しみ易い其顏が好きだつたのである。高い鼻柱から兩方へ思切つて、グッと彫り込んだやうな鋭い深い眼をして居る。それがニーチェにもカーライルにも何處か似て居る。ベートウヴェンが歐羅巴第一の好男子であると云ふやうな意味で、先生は日本第一のいゝ顏をした人だと私は獨り決め込んで居た。

――「淫を避けよ」と云ふ言葉をモットオにしてゐた位で、私にとつて教へでの最も不調和なものは姦淫罪の律であつた。教へに接するまでの三四年間に男同士の戀で自由を行つて來た、その習慣からも姦淫は私にとつて殆ど唯一の誘惑になつてゐた。私は教へに接すると間もなく烈しく自身の肉體を呪ふやうになつた。

其頃私はレイノルズの「天使の頭」と云ふ題の寫眞銅版の額を自分の部屋の鴨居にかけて置いた。可愛らしい子供の頭が四ツ五ツ、首のツケ根から生えた小さな翼で空を飛び廻つて居る畫だ。肉體を切りに呪つて居た私には此繪が殆ど來世での理想だつたのである。

或る日、先生の居ない時、弟子達が十人ばかり

寄つて、「復活の時には此肉體は如何なるか？」と云ふ問題の相談をした事があつた。文科大學へ通つて居る人が、

「靈魂だけで飛び廻つて居るとは僕には考へられないネ。若し何かそれの宿るべき物がなければならないとすると、それは今の此肉體であつて欲しいネ」から云つた。それでは私には困るのである、未だ新米の信徒だつたから私は恐る恐る小聲で云つた。

「僕は首から上だけで復活して呉れないと困ると思ふんです。左うでないと天國も此世も結局同なじ事になつて仕舞ふと思ふんです」

誰も相手になつて呉れなかつた。醫科大學へ行つて居る人が云つた、

「毎日學校でアルコール漬けの人間を見て居ると、此肉體が其儘復活するとは考へられないからナ」

二

こんな相談をして居た頃からは五六年經つて、或るクリスマスの晩だつた。皆が圓形を作つて膳に就くと、先生は快ささうに一座を見渡して、

「此中ではもう中野君と大津君が一番古狸だネ」と云つた。私もそんな事を云はれるやうになつた。尤も此長い間には自分の仕事と云ふやうな事に就いても色々と考へが變つた。「結局自分は傳道者になるやうな事になりさうだ」から云ふ聖いやうな、淋しいやうな心持になつた事もあつた。(宗教を聽く迄の私は外國貿易で大金持にならうと考へて居たのである)又私は哲學者にならうと思つた事もあつた。而して仕舞に私は純文學へ行く事に決めた。然し此間最初から變らずに絶えず私を苦めて來たものは私の肉體に湧く力であつた。

或時先生がから云ふ話をした。

「姦淫の大きな罪である事を本統に強く云ひ出したのはキリスト敎が初めてで、而して姦淫は殺人と同程度に大きい罪惡である。」

私は此言葉から恐しく不愉快な響を受けた。

それは私の「心」と「體」とが絶えず戀する者を探しながら、「境遇」と「思想」とにさまたげられてゐる、その不調和が苦しくて〱ならない時だつたからでもあつた。其頃私は自分の部屋の床の間に人間の頭より少し大きいヴィーナスの石膏の首を懸けて置いた。私は美術品への愛好心からでも、文學的な洒落氣からでもなく此石膏の女に一種の愛情を持つてゐて、悶えるやうな堪へられない氣分になると時々私は其冷たい固い唇に接吻をした。私の鼻と觸れ合ふヴィーナスの鼻が仕舞に薄黒くなつた。私は或日自分が入る時、湯殿にそれを持ち込んでシャボンですつかり洗つた事を忘れない。

左う云ふ私は先生の言葉に反對して「關子と眞三」と云ふ小說を其時書いた。これが私には初めての出來上つた小說であつた。內容は結婚した夫婦の間にも姦淫罪はある、結婚しない相愛の男女の性交にも姦淫でない場合が幾らもあると云ふ考へで、一體姦淫とは何んだ、と云ふやうな事を書いたものであつた。

三

或日――其日は殊に私の不機嫌な日だつた。

親しい友達の一人が近頃眞理を恐れ始めた。とそんな事を私は獨り部屋の中で考へて居た。私は所感を書きとめて置く小さな手帳を開いて、小むづかしい顏をしながら、「人間も自分が眞理を知る事を恐れるやうになれば、もう救はれない墮落である」とこんな事を書いて居た。

其處へ女中が女の人から電話がかゝつたと云ひに來た。珍しい事で私は少し胸を躍らせな

から電話口へ出た。
「今度の水曜日に皆さんに來て頂いて遊ばうと思ひますから、貴方もどうぞ……」
「どんな人が出ますか？」
「明光さんや佐藤禮吉さんもいらして下さいます」
「何時からですか」
「八時からどうぞ……今度はダンスは致しませんから是非……」
「大概あがります」
「大概なんて仰有らないで是非ね」
電話を斷つて二階の部屋へ歸つて來ると、もう私の氣分は餘程變つてゐた。私は座蒲團を四つ折りにして、それを枕にして寢ころんだ。而して私は四五年前、新富座で川上音次郎が「狐の裁判」と「浮かれ胡弓」のお伽芝居をした時に隣の桝に來てゐた十二三の眞圓に太つた何の表情もない顏をした混血兒の小娘を憶ひ起して居た。
其時から私は其小娘の兄と知り合ひになつて二三度往き來をした。
一年か一年半程して、其男がドレスデンへ行く事になつた時、私は其家へ招かれた。仲間の會があつて、餘程晩くなつて私が行つた時には食事が濟んで應接間の大きなテーブルで知つた顏の四五人がピンポンで夢中になつて居る所だつた。隅のソーファでそれを見てゐると、少し醉つて赤い顏をした男が入つて來て、
「日本間で百人首が始まるとさ。出來る奴は行かないか——大津はうまいんだらう」こんな事を云つた。
日本間へ行くと其處には新富座で見た時とは見違へる程美しく、大きくなつた娘が居た。其母も兄も居た。私は其二人に挨拶をした。然し娘は何かしらんイヤに高慢な顏つきをしてゐるので、それが自然私をも娘にだけは高慢な顏つきにして了つて、遂に挨拶は互に仕舞ひまで仕ずに了つた。
一度組になつて私は偶然其娘と並ぶ事になつた。私から娘、其向う隣りが娘の兄、と、からなつてゐると、娘はソヽクサ起つて、
「私と更つて頂戴」と兄の向うに身を差し入れて、無暗と兄の體を此方へ押してよこした。私は「生意氣な奴だ！」と獨り思つた。
——娘とは其後色々な所で會つた。新橋の停車場で會つた。大晦日の晩に銀座で會つた。高等商業學校の外國語の大會で會つた。歌舞伎座で八百藏が土佐坊昌俊の芝居をしてゐる時に會つた。上野の或る音樂會で馬車に乘つて來るのに門の所で會つた。麻布の谷町で擦れ違つた。而して其度々いつでも兩方で知らん顏をしてゐた。
或時遠夫といふ、其頃大學へ通つてゐた五六年前にヨク遊んだ年上の友達が、
「ウィーラーの所のダンスで男が足らないから君に來て呉れとさ」と云つた事がある。
「ダンスは閉口だ」
「西洋人が澤山來るから會話の稽古になるぜ」
「西洋人も閉口だ」
「なぜ？——そんなら何時か見に來いよ」
「見にだけなら何時か行かう」
「そんな事を云つたつて、直ぐ引つぱり出されるけど……」こんな事を云つてゐた。
暫くすると遠夫と其娘とが互に有頂天になつて居ると云ふ噂があつた。
所が、間もない或日娘から電話がかゝつて、——私は其時初めて娘と口をきいた。
「男の方が足りないんですから是非……」と云ふ。それが私には「習ひたての下手な方があつて、其相手に困つてるんですから」と云ふやうにも聞えた。少くも其處まで用心しなければ——左う云ふ氣が起つた。斷ると、

―でも此間逢さんにいらつしやると仰有つたんでせう」詰るやうな調子だつた。

又半月程すると同じやうな電話がかゝつた。其時も私は斷つた。其時でも前の時でも、不愛想に斷つて置きながら、後で暫く其事に就いて私は色々な事を考へないでは居られなかつたのである。而しては仕舞に私はヨク自己嫌惡に陷つた。

其暮れ、娘からクリスマス。カードを送つてよこした。それを受取つた日私はソザ〳〵丸善まで出かけて賣れ殘りから長い事かゝつて三枚選んで、歸つて又それから一枚選んで娘へ送つてやつた。――尤もかう云ふ事は相手が何者でも多少は必ず働く私の癖ではあつた。

――其の後娘からは電話がかゝらなくなつた。速夫は鎌倉で別莊を隣り合せにしてゐた人の娘と結婚して、間もなく三井物產會社へ入つて、其處の綿の方の係りで米國のオクラハマへ出かけて行つた。而して彼と有頂天になつてゐた娘はそれからヒステリーのやうになつたと云ふ噂を私は聞いてゐた。

……四つ折りにした座蒲團を枕にして、かう云つた色々な事を憶ひ出して居る内に私は不意に身を起すと、本箱の抽斗から一冊の女の雜誌を出して來た。

其口繪に、或る外交官の家で、日露戰爭が濟んだ祝ひの宴會でした活人畫の寫眞が出てゐた。日の出前の海の背景で英國大使の娘の平和の天使がヤシの葉を片手に持つて、片手で大和姬の手を高くさゝげてゐる。大和姬の一方の手には白い鳩がとまつて居る。神代風の兩方へ分れた髮の端が輪になつて、それが兩乳の上あたりに輕く垂れて居る。耳を隱し、豐かな頰に添つて垂れた髮が肉附のよい顏を一層可愛らしい形に輪郭を取つて居る……

四

水曜日と云ふ日が來たが、私は朝から氣分が惡かつた。體も妙に大儀で、午後一寸學校まで行つて歸るともう坐つてゐるのもツライ程に疲れて了つた、が、病氣とは思つてゐなかつた。日が暮れると曇つて來た。私は部屋へ寢ころんで、不愉快な心持で、ボンヤリ迷つてゐた。其内七時半になつた。イヨ〳〵決心して俥を呼びにやると、私は大學の制服に着かへて、秋の寒い晩だつたから外套も着た。

俥は其家から半町程手前の坂の上で降りて私はソロ〳〵と其處から歩いて行つた。此時背後から坂路を勢よく俥が一臺私を追ひぬいて、娘の家の門を入つて行つた。

其二人とは私は玄關の中で出會つた。――顏も名も互によく〳〵知り合ひながら、知り人ではないと云ふ關係が都會の生活では殊に多いと思ふ。

其二人も私にとつて左う云ふ類の人々であつた。脊の高い方が帽子掛けに附いた鏡の前でネクタイの傾を直してゐる所だつた。而して二人共燕尾服で踊り靴を穿いてゐた。

二人と入れ更つて私は右手の其小さい部屋に入つて外套と帽子をかけると、不快な氣分に被はれながら二人の入つた客間へ足を運んだ。

「アー、大津さんでいらつしやいますか―久しぶりで會つた娘の母が愛想よく迎へた。娘は其處に見えなかつた。明光も禮吉も見えなかつた。娘の母は、

「暫く。お變りもありませんで？　何より！」

妙な切れ〴〵な詞を使つた。

「ジョージさんは御變りありませんか」

「ありがたう。どうもあれは甚く筆不精な兒ですから、大方何方も御無沙汰で御座いませう。心では十分思つてるんで御座いますが……」

●こんな事を云ひながら、ピアノの上の譜を選

り分けて居た二十四五の前にも此家で會つた事のある混血兒の女に、
「ミス高木」と呼びかけた。

― 八 ―

「貴女御存知でせう？」と紹介の手だけを私の方へ延ばして「大津さん」今度は私の方を向いて「ミス高木」と云つた。

こんな風に毛バ立つた制服にあみ上げの靴を穿いてゐた私が、燕尾服からタキシードと順々に紹介された。

「ジョージさんは矢張リドレスデンですか？」

私にはこれより他に話す種はなかつた。

「此春からロンドンの方へ參つて居ります。實は來年の春位まであちらへ置く心算でしたが、獨逸はどうも性に合はないとか申すもんですから……」

髮を綺麗に分けた男が寄つて來て、馴々しく娘の母に、

「お絹さんは？」と云つた。

私は後ろのソーファの端に腰を下ろした。

「いゝえ、あちらで何かしてませうよ」

「病氣はもうスッカリおよろしいんですか」

こんな會話を聞いてゐると、同じソーファの他の端にゐた四十恰好の赭ら顏の西洋人が腰をずらして私の方に寄つて來た。私は「オヤ〳〵」と云ふやうなイヤな氣がした。西洋人は私の學校の事に就いて英語で話しかけた。然し獨逸人らしかつた。――娘の母は娘の病氣の話をしてゐる。

「一時は貴方、何を頂いても上げて了ふんでネ、頂く物がないやうなワケでしたのよ。ツイ先頃まで林檎のおつゆだけ吸つて居ましたが、よくまあ、持ちました。それが貴方五六日前不圖、久し振りでダンスでもやつて見ようかと云ふもんですからネ、父も喜びまして、疲れたら直ぐ休むやうにと申しましてネ、今晩皆さんに御いでを願つたんですの……」

西洋人は文科ならフロレンツ君を自分はよく知つてゐるなど云ふ。

外國語――中でも會話の不得意な私は人の居る所で話をするのがイヤで〳〵ならなかつた。然るに――餘談になるが――私は大學では英文科に籍を置いて居た。それればかりでなく、私は卒業後は田舍の中學の英語の教師にならうと考へてゐたのである。生涯の仕事としては其頃から私は文學上、創作をしようと云ふ考へであつた。それには相當の自惚もあつた。然し仕た仕事が殆ど一つもない點で、其自惚にはマルで裏うちが出來てゐなかつた。私は時々の氣分次第で根こそぎ其自惚を見失つて了ふ事が少くなかつた。「イマニ何かする」から思つても、それが何時の事か少しも見當がつかなかつた。

「君は大きくなつたら何になるんだい？」

「僕は陸軍大將になるんだ」

七つか八つの子供――勿論私も實際に其一人だつた――がかう云ふ事を云ふ。それと殆ど變らなかつた。假令、それに「僕は世界的の大文豪になるんだよ」と云ふ言葉を用ひなかつたにしても……。只異つてゐる所は子供はそれに不安を感ずる事はないが、私にはそれが時々來る事である。

所で私の父は私に就いてから思つてゐる。

「偏屈で、高慢で、怒りッぽくて、泣蟲で、獨立の精神がなくて、怠惰者で、それにどうも社會主義のやうだ」

而して私にはヨクかう云ふ。

「貴樣は大學を出たら必ず自活して呉れ。えゝ？　これは貴樣を一個の紳士と見て堅く約束をして置くからナ」

私が學習院の高等科になつた頃から、將來の話の出る度々に父は決してこれを云ひ忘れたか

つた。父はかうして實世間的に私を教育しなければならぬ考へでゐた。所が、私はこれを云はれる度に「[illegible]」の[illegible]で[illegible]い子供に意地惡をされる時のやうな心細い心持を感ぜずには居られなかつた。私には自分の書いた物が實際に金と代へられる場合をどうしても考へられなかつた。――書いた物ばかりではない。自分の仕た事の報酬が金になつて自分の手に渡されるどんな場合をも想像する事が出來なかつたのである。――假りに或る時期に書いた物から金を得る事があり得るとしてもそれで生活出來る程、左う多く書く事は私には到底出來ない。若しそれをすれば私は生涯の仕事として只ヤクザな作物を量に於て殘すだけで、それも人類の間にでなく自分の子孫（それらが若し祖先を尊ぶ氣の多少ある人々であれば）それに殘すだけである、こんなに思つて居た。

其位なら、持つてゐる或る固定した知識を見せては引込まし、見せては引込まし、十年一日の如く、そんな事をしてゐても立ち行き得る中學教員になつて、生活の費用はそれで得た方がいゝと考へた。或る限りある食物を三度づつ食つて、それを毎日繰返して行くといふ物質的な生活の爲めには實に恰好な職業である、と考へて居た。蟲のいゝ私は散々にナマケて來た自分の、中學時代に學校をどれ程ひどい裏切りをされるかはマルデ考へてゐなかつたのである。而して私はそれに入學を拒んだ。尤もそれは不得意さの程度が國文も漢文も全く變りなかつたからでもあつた。

西洋人に何の文學を研究してゐるかと訊いた。私は日本文學だと答へた。後では、それでかまはなかつた、と思つたが、其時は答へながら烈しい不快に陷らずにはゐられなかつた。これ程明らかなウソを自分に何年ぶりで云つたらうと思つた。

西洋人は又何か私に尋ねたが、それが解らなかつた。問ひかへしても、未だ解らなかつた。私は當惑したやうな不愉快な顔をして、もう默つて了つた。西洋人も少し當惑したやうな顔をしてゐたが、微笑しながら起つて行つた。クサクサして堪らなくなつた。少し前屈みになつて、靜かに歩いて行く西洋人の丸い肩を私は親みなく見送つた。其時私は少し離れた所からサッキ玄關で會つた男の一人がそれとなく此方を見て居たのに氣がついた。

廣間との界の大戸が兩方に開かれた。寄木の床はスッカリ拭込んであつて天井の電燈を其儘に映して居た。私の氣分は益々惡くなつて行つた。額から油汗のやうなものが出る。私は大儀な體を起して、廣間に懸けられた色々な繪を見に行つた。黒い眞圓な緣に入つた文晁の浪の繪があつた。其他は主に浮世繪派の物で、北齋の八十七歳の肉筆で雨中の樵夫と漁夫の對幅などが其三四年前錦繪のコレクションに熱中しただけに私の心を惹いた。私はさう云ふ物で四圍を忘れようとしたが、それは[illegible]で許さなかつた。私は元のソーファに還つた。明光や貞吉は未だ來なかつた。

和服で紫がかつた袴を穿いた十六七の春のスラリとした細面の美しい娘が其邊を歩いて居る。それが永い病氣で左うなつた此家の娘だとは私は心づかなかつた。メランコリックな顔の表情と細々と如何にも疲れたやうな弱々しい體の表情とが其處にゐる他の男や女の誇つたやうな一種緊張した心持で見得を張つて居る中に際立つて私に親しみの感じを起させた。コルセットで緊めた程に腹の所が細くなつて居て、心持前のズリ下がつた帶の上に輕くふつくりと懷がたるんでゐる。その洋服のやうな着方にも一種の感じがあつた。

暫くして氣がついて、私はその烈しい變りや

うに驚かされた。二三日前自分の部屋で見た雜誌の口繪とは殆ど同人と信ずる事が出來なかつた。

　プログラムがくばられた。金緣の小さなカードを二つ折りにして、小楊枝より少し大きい金屬性の美しい色をした鉛筆が細のヒモでそれへ下がつて居た。男共は直ぐそれを持つて女に相手を申込み始めた。女の方で來つて其番へ自分の名を書き込んでゐる者もあつた。

「貴方は？　一番は貴方と」一寸かけたつきりで居る私の所へ又娘の母が來た。

「ヲドリは出來ませんから、拜見してゐます」私は溜息でもするやうに答へた。

「エ、？　お上手なんでせう……」と笑ふ。

　私は「底に鋲の打つてないだけの此靴を御覽下さい」と云ひ度かつた。然し第一にそんな事お輕く云へる程開けた人間で私がなかつた上に、其時の氣分が益々私をカタクナにして居たから、返事をせずにゐた。

「遠藤さんの奧さん」娘の母はかう美しい混血兒の女に呼びかけた。それは私の家から十町程離れた所に居る或る外國の會社の代理店の支配人をして居る人の細君で、内氣ないゝ人であつた。

「貴女、どなたかと一番御約束があるの？」

「エ、」

「二番は？」

「ありません」

「左う……大津さんと御約束をして下さい」

　娘へ首背いて其人は往つた。私にはもう直樣にそれを斷る元氣もなかつた。

「二番は……」と鉛筆で帶へ挾んで下げてゐたプログラムを取上げて見ながら、「ツゥ・ステップですネ。易しいんですもの直ぐ出來ます」かう云つて娘の母も私の側をどいた。

　間もなく廣間には男と女と二人づつ並んで立つた。高木といふ女の彈くピアノが鳴り出すと同時に皆が動き出した。

　私の性質からも趣味からも、かういふ事は好きである筈だつた。然し私には禁慾的な思想と、それから作られた第二の趣味と性質とがあつた。しかも、それらは本來の趣味や性質より私の意識でイヤに明らかなる點で私は知らず知らずそれへ義理立てをしないではゐられなかつた。私には殊更な態度と呪ひの眼で、無暗に血の氣を上げて踊り狂つてゐる人々を見てゐたのである。今の私は思想に義理立てをするやうなかういふ弱い心を恥ぢてゐる。けれども、若し同じ事が今の私に來ようとも既にかうなつた私は私の本來の性質と趣味にコダハリなく從ふ事が出來るかどうかを疑ふ。多分出來ない。

……それが濟むと二十人近い人々は私の居る部屋へ還つて來た。娘とは未だ挨拶をしなかつた。娘は時々私の方を見てゐた。けれども私が私の顏に表して居た表情が娘の近よる事をこばんでゐるらしかつた。

　二番目の踊りが始まらうと云ふ時に内氣らしい若い細君が私の側に來た。

「失禮します」私は或る努力を以つて、それを靜かに丁寧に斷つたつもりだつた。所が、氣分と體から來る不快が私の聲帶で裏切つて居たから何んにもならなかつた。

　内氣らしい若い細君は顏を少し赧らめて只首背いて行つて了つた。

　ツゥ・ステツフスが濟んで、スケーティングが濟んで、四番目がウォルッだつた。其頃に私はいつか自身の不愉快な氣分に中毒して了つて居た。私はソーファに腰掛けた儘、不愉快な凝結體にでもなつたやうな氣持がして居た。

　人々は愉快さうに、時々話しながら、時々笑

ひながら電燈の強い光りを頭や背にあびて烈しく踊つて居る。

娘は脊の高い若い西洋人と踊つてゐた。西洋人は左手で娘の體を支へ、右手はハンケチと一緒に娘の左手と握り合はせて、それを高く擧げた儘、クルリ〳〵と輕くよく廻つた。廻る度に娘の體は兩足共に殆ど床を離れた。娘は大儀さうに自身の肩の上に首を傾げて居た。青白く見えた額には血の氣が見られた。

其内如何にも疲れたらしい樣子で、娘は相手の耳に何かさゝやいた。西洋人は首肯くと、其儘踊り續けながら、娘の體を抱くやうにして巧みに人々の間を拔けて其けん外に出て來た。

娘と私とはスヂカヒの隅の椅子に腰を下ろすと手近な團扇を取つて獨りあふいでゐた。

娘は時々此方を見た。私は踊りの方ばかり見てゐた。少時すると、娘は兎も角もと云ふやうに起ち上つた。其時私はヂッと寧ろ一層堅くなつて前からの姿勢を保つてゐた。其場合若し私が少しでもクツロイだ姿勢に變れたら娘は必ず私の方へ寄つて來たに相違なかつた。娘は體で話しかけた。所が私の體はそれに答へる自由を失つてゐた。娘はその儘ピアノの傍へ行つて、その側面に輕く倚り掛かると何氣ない風で又踊りの方を見てゐた。私も踊りの方を見てゐた。然し私の意識は私の視野の最も端に置いてある娘の體にひたすらに集まつてゐた。

娘は思ひ切つたやうに體を此方へ向けると足を四分の一步程ふみ出しかけて――又ヤメた。而して娘は首を垂れて了つた。遂に娘は首を垂れたまゝ進んで來た。

ソーファに竝んで腰かけた。娘はダンスの事も明光や禮吉の來なかつた事も一ト言も云はなかつた。而して兄の噂とか速夫の噂とかをした。

「速さんから二三日前御手紙を頂きました。此方の奥樣にもうお兒さんがお出來になつたんですつてネ」娘は少し笑ひながら、それに子供らしい惡意を見せてこんな事を云つた。

話してゐる内に私は段々に堅くなつて行くい、い、結びツこぶがゆるめられるやうな快さを感じた。

「兄と歌舞伎へいらした時、六代目の樂屋へいらしたんでせう?」

「エヽ」

偏屈な、邪氣のある、不愉快な心理を散々に、ゞつて來て私は今、意味もない子供らしい會話の相手になつて了つた。

「川上のお伽芝居で御一緒になつた事がありましたわネ。あの時分、私は九つか十位でしたのネ」娘は覗き込むやうに私の顏を見た。

「そんな事はないでせう」と私は答へた。

踊りは中々濟まなかつた。

「東京座の道成寺は御覽なりましたか?」から私がきいた。

「エヽ。中々よござんすのネ。貴方は所作事がお好きなんでせう?」

「日本の踊りは大好きです。然しかう云ふダンスなんか見て不愉快です」

私には皮肉を輕く云ふと云ふやうな藝當は迚も出來なかつた。

娘はそれには濟まして、直ぐ、

「十一日明治へ連中で參らうと思つてますが貴方も御入り下さいませんか。宅の親戚の者で大層左團次を贔屓にしてる者があるんですの」と云つた。

私は此處でも、知らない人の中に入るのはつまらないからイヤだ、と重つ苦しい嫌味をいつた。娘は笑つた。然しこんな事でも私の氣分は幾らかづつよくなつて行つた。

其踊りが濟むと皆は、輕い食事の用意された隣の部屋へ行つた。女の連中は既に盛つて

ある皿と飲物とを受取つた。

凝結しきつた心持から多少自由になつた私はもう歸らうと思つて、男の連中が皆受取る空いた皿は受取らずにゐた。それを見て娘の母は物を盛つた皿を持つて來てくれた。どうしたのか少しも食慾がない。若しかしたら病氣かナ、と思つた。

間もなく、私は娘と娘の母と、其他口をきいた三四人の人々に挨拶をして此家を出た。十二時を少し過ぎてゐた。

五

翌朝も工合の惡い事は同じだつた。私は朝の食事もせずに部屋にトヂ籠つて、前晩の事などを繰返し／＼考へてゐた。考へれば考へる程、私が通俗な言葉で云ふ「開けない男」である事が腹立しくなつた。自分は何時の間にこんな男になつて了つたらうと云ふやうな事を考へた。

私は又、娘の美しい細々とした體や、子供らしい其ツマラナイ言葉をていにをは一つ誤らずに憶ひ浮べては、長い／＼熟考に耽つて居た。

其末に私は娘へ手紙を書かうと思つた。――哀哉、卑屈な心！――私はそれに前夜の不快を書いて送らうと考へた。

午後、私は手紙はヤメて、それを云ひに出かける事にした。大儀な體を起して洋服に着更へて家を出た。

幼年時代を過ぎてからの私には女の友達と云ふものが全くなかつた。だから、それは殆ど初めての經驗と云へた。然し男の友達を多く持つてゐる、あの娘にとつては私から訪ねられると云ふ事は左う突然な事ではあるまいと云ふのが僅かに私に勇氣をつけてゐた。

けれども、其日私はたうとう娘の家まで行かずに了つた。それは其途中で娘の母に會つたからであつた。

直ぐ引きかへす氣もしないので、其儘澁谷の友達を訪ねたが、友達は留守だつた。私はどうにもならない體を運ぶやうにして其屋敷の裏の廣い空地になつてゐる原へ來ると、木の影になつた草の上に横になつて、暫くは深い溜息をついて居た。

澄み切つた空の高い／＼所を白い雲が靜かに動いてゐた。時々鳥が飛んで行つた。

――不知眠つて、再び眼を開いた時には日が入つて其邊の風物が總て青味を帶びて鳥の群が忙しさうに一方へ一方へと飛んで行く頃であつた。私は幾らか輕い氣分になつてゐたが、もう友達は訪ねずに其儘俥を雇つて歸つて來た。

六

歸ると、上の妹と其次の妹とが飛び出して來て、上の妹が直ぐ、

「お兄樣！　高ちやんが赤痢になつたんですつて……」と其表情をしながら云つた。

「五日間は誰も外出出來ないのよ」と次の妹が附け加へた。門番が其邊に石灰を撒いてゐる所だつた。

其晩から私も下痢を始めた。醫者は矢張り類似赤痢になつてゐる。然し極く輕いのだから此の方は警察へ届けなくてもいゝだらうと云つた。

谷中の寺のだつた表の門を入ると、直ぐ左に小さな石の門があつて、それを入つた右が母屋の臺所で、左の突き當りがヤクザ普しんの二階建ての離れ家の玄關になつてゐる。此離れの事を自家では「書生部屋」と云つて、階下に近頃田舎から出て來た書生がゐて、二階に此家が建つて以來十何年か私が住んでゐるのである。

高子といふ四つになる妹は奥の母の部屋で母と看護婦だけの看護で、家の中で交通遮斷と

云ふ事、又私は七十二になる祖母の看護で上下を往する恐ろしく險しい梯子段を界にして矢張り自家の中での交通遮斷と云ふ事になつてゐた。

祖母は隣りの四疊半の本箱や机や椅子などの置いてある狹苦しい中に寢て、私の腹を溫める爲めの蒟蒻を時々起きて冷えたのと熱いのを取更へてくれた。夜中も二時間毎に起きては煮てあるのを乾いた日本手拭に包み、それを又西洋手拭で卷き、私の幾重にも卷いたフランネルの腹卷の間に挾んで呉れた。段々に熱くなつて來て、腹の皮がヒリヽヽして來る。それが如何にも利きさうな氣がして私には快かつた。

私は病氣の場合いつも祖母の世話にならぬと云ふ事はなかつた。傳染病では六つの時にした腸チフスで、其時は全く祖母一人の手で看護されたやうなものであつた。一つは私が祖母以外の人の世話をこばむからでもあつたらう。

「どんな傳染病でも氣さへ張つてゐれば……」

これが祖母の信念であつた。

私は何年ぶりかで又祖母だけの看護を受けた。或時仰向けに寢ながら、祖母の仕てくれるまゝに腹の蒟蒻を取更へて貰つてゐた。すると私には不圖幼年時代の情緒が起つて來た。それは祖母の體の獨特な香が私に幼年時代――其頃はいつも抱かれて寢てゐた――を突然に憶ひ起さしたのであつた。

「犬だネ」それを聞いた友達が私を笑つたが、此經驗から色々な人の獨特な香――それは其人々の體程に異る香を中々多く自分が知つてゐる事に心着いた。

七

十日程すると病氣は段々よくなつて行つた。よくなるにつけ私は段々食辛棒になつた。竹葉の鰻に、風月の西洋料理に、大金の鳥に、梅園の汁粉に……寢ながら切りとこんな事を考へるやうになつた。然し少しでも固形物を食ふと直ぐにサハツた。下腹を絶えず懷爐で溫めて置かないと直ぐ工合が惡くなる。

外へ出られるやうになつてからは散步して來ると云つては土橋の先の壺屋の陰氣臭い二階に行つて、シュークリームのクリームだけを匙で嘗めた。

クリームがサハつたのではなかつたが、暫くすると遂にブリ返して、又烈しく血を下した。それが慢性のやうになつて了つた。

私は大きな金火鉢の炭火で部屋を溫くして、床に入りながら呑氣な氣分で本などを見るやうになつた。

然し一寸でも懷爐は離せなかつた。仕舞に溫んだ下腹には縞が出來て、いつの間にか自然に焼けて其處の皮が赤茶けた色になつてゐた。

娘からは其後全く電話がかゝらなくなつた。

而して其頃は私も竹葉とか大金とか風月とかをそれ程考へなくなつた。

第二

一

春の末から初夏へかけて私は每年少しづつ頭を惡くする。左うなると泥水に浮び上つた錦魚の心持であつた。それに焦々した氣分の加はるだけが錦魚よりも苦しいと私は考へてゐた。

或午後私は獨り左ういふ心持で二階の部屋に寢ころんでゐると、隣りの西洋人の家の芝庭であうむがけたゝましく地聲で鳴き立て始めた。私はあうむが薄黑い圓い舌を見せて、羽ばたきをして、頭を振り立てながら、わめき立てる其ヤケらしい様子を想ひ浮べると、人間にもあんな眞似が出來たら、こんな時には幾らかい

いだらうにと云ふやうな事を考へた。あうむは中々それを止めなかつた。仕舞に此方の氣分まで次第々々焦立つて來る。

暫くすると、言葉はそれ程ハッキリしないが、アクセントだけは正確に、「前へ！　オイッ」とか「氣を附けッ」とか色々な號令をタテ續けに叫びだした。隣の家の裏が陸軍の一聯隊で、西洋人の家の向う隣りが聯隊司令部になつてゐる。それで自然そんな事を覺えてゐるのである。

千代といふ色の淺黒い十七八の女中が梯子段を登りきつた所に膝をついて、

「お茶が入りました」とそれを知らせに來た。

私は起き上つて、縁へ出て、靜かになつた、隣りの籠を眺めた。あうむは其時頸を出來るだけ延ばして籠の針金を熱心に嚙んでる所だつた。

茶の間で茶を飲んでゐると、急に前の建仁寺垣の向うに七八人の足音がして、大聲に話しながら倉の横を庭の方へ行く。

「何んだ」――から云つて吾々は顔を見合はせた。

「なりたけ長いのを借りて來い」こんな聲がする。

私は直ぐ下駄を突つかけて、出て往つて見た。――兵隊だ。

「どうだい、こいつの方が少し長えだらう」汚れきつた作業服を着た二人が物置の軒下にかけてあつた、三梃の梯子を取り下ろしてゐた。私などは眼中にない風だ。その一梃をかついで倉の方に行くから私もついて行つた。

「どうだ、それで屆くかな」と伍長が云つた。伍長の後ろに五六人の兵隊がかたまつて、三階になつてゐる土藏の屋根を見上げてゐる。

「マア登つて見い。なら高くなくてえゝ」

「けれども、木がありますから……」

「いゝや、あの釘にかけたら見える」

伍長から畳一でふよりも少し大きい布れの標的を受取つて一人が梯子を登り始めた。――其時私は不意に怒り出した。兵隊共は吃驚して私の顔を見てゐた。

「オイ降りないか」私は可恐い顔を仰向いて梯子の上の者にも鋭くいつた。

伍長は山本小隊長殿からどうのかうのと辯解を始めたが、私はそれを諾かなかつた。

私の大きな聲で、小さい妹と千代とが出て來た。それについて、白といふイタヅラな小犬と赤と云ふ年寄りの利口な犬とが出て來た。白は嬉しさうに切りに私の足にからまりついた。ト、直ぐ又かたまつてゐる兵隊の汚れた脚絆に其黒々とした鼻づらを擦りつけたりした。

千代は少し離れた所から、私に、

「今朝旦那樣がお出かけ遊ばした後に士官の方が御出でになりました」と云つた

「何んだつて？」私は怒つた顔を其儘千代の方へ向けた。

「よく解らないから」と笑ひながら、「お留守ですと申上げたんです」と云つた。

私は又伍長の方を向いて、云つた。

「そんなら駄目ぢやないか。何しろ歸つて貰はう」

何故私がそんなに興奮してゐるのか兵隊には解らなかつた。私は只ガミ〳〵と丁度鷄がけたゝましい聲を出すかのやうにワメキたてたのである。小さい妹はそれに驚いて還つて行つて了つた。

然し伍長も兵隊も皆善良な人々だつた。元通りに梯子を物置の軒下に仕舞つて、標的を卷いて歸つて行つた。

人が集つたので白はヒトリはしやいで、千代と私とに交る〳〵飛びついた。

私は怒つたやうな顔をして自分の部屋へ歸つて來た。然し其時は今迄の氣分が大分直つてゐ

るのを感じてゐた。

二

白のイタヅラには皆弱つた。妹の植ゑた花壇の草花を根こぎにする。下駄の鼻緒を噛み斷る。父の大切にしてゐる盆栽の土を掘る。尤もこれはいゝめを煮た汁をかけて置いたからでもあるが。毎日何か惡い事を仕ない事はない。雨降揚句の泥足で座敷中を歩き廻つた時に、私は竹箒を振りあげて大きな聲をしながら庭中を追廻した事がある。仕舞に追ひつめられると尻を丸くして地面へ腹もノドも着けて了つて、口を細くして閉口しきつて小便をもらしてゐる。其癖二つ三つ撲つて許してやるともう直ぐ足へからまりついて來る。こんな事が何遍かあつた。

或日私は學校から歸つて來て直ぐ茶の間の縁側へ行かうとすると、庭の方から尾を下げて白が一生懸命に逃げて來た。立つて見てゐると倉の角から不意に千代が竹箒を丁度私がやるやうな恰好に振り上げて飛び出して來た。私を見ると千代は急に笑ひ出して後ろを向いて了つた。耳から首筋まで赤くして笑つてゐる。

「何かやられたのか？」

「……」向うを向いた儘で笑つてゐる。

「馬鹿！」から云ひ捨てゝ私は茶の間へ來た。

茶をいれてゐた松といふ女中が、

「千代の外行きの下駄を噛まれたんで御座いますよ」と母に話した。母は、

「まア白にも本統に困りもんだ」と云つた。

其時庭の方から未だ赤い顔をしてゐる千代が入つて來た。

「下駄を噛まれたつて？」母は浴衣を縫ひながら云つた。千代は只笑つてゐた。

「もう穿けないやうにされたのかい？」

「エヽ」と笑つてゐた。

千代は私に、

「順吉様に先刻御電話が御座いました」と云ふ。

「誰から」

「伺ひましたが仰有いませんでした」

若しかしたらあの娘からだと私は思つた。

「女の人か？」

「エヽ」千代は少し云ひよどんで左う答へた。

「又後程御かけ致しますつて……」

「よし」

祖母も母も押黙つてゐるのが何んとなく無心でないやうに感じられた。

三

電話は夜になつてからかゝつた。

「何んだか餘ンまり度々ですから止さうかと思ひましたが、昨日歸つて參りましたもんですから……」こんな事を云ふ。私には何の事か解らなかつた。

「それからネ、今日は貴方に少し御願ひがあるの……」

誰によらず、から云ふ順序で物を云はれるのが私は嫌ひであつた。其事の程度が知れない一種の不安を感じて私は胸を轟かすやうな事がある。

私は默つてゐた。

「あのネ、貴方の御寫眞を頂かして下さい」

「……それより貴女の大和姫の寫眞を下さい」

「アラ、私ぢやありませんよ、あれは」

「いゝえ」

「貴方が本統に下されば、他のを差上げませう」

「今ないから寫して送りませう」

「先に兄の頂いたのが御座いましたのネ」

「エヽ。然しあれはもうありません――兄さんには向うから送つて頂く筈になつてたんですが來ませんよ」

「それはネ。宅に參つて居りますよ」

娘のと娘の兄のとを送つて貰ふ事にして、私も近い內に寫して送ると云ふ約束をして電話を斷つた。

「餘ンまり度々ですから」と云ふのが不思議に思へた。「昨日歸りましたから」といふのも何の事か解らない。私は私の留守にかゝつた電話を故意に取次がなかつた事を考へずにはゐられなかつた。

私は千代を呼んで、少し荒い語氣で、

「乃公の留守にあの女の人から電話がかゝつたらう」ときいた。

「エ、」

「何故乃公が歸つた時取次がない」

千代は眞面目腐つた顏をして私をにらむやうな眼つきをして默つてゐる。

「エ、ツ？」と促すと、

「御隱居樣が申上げなくてもいゝと仰有つたんです」

「何遍かゝつた」

「二三度」

「よし」

私は不機嫌な顏をして机の方へ向き直つた。

千代は默つて起つて行つた。

翌日娘からジョージの寫眞だけ送つて寄越した。其翌日に娘のが屆いた。茶の間にゐる時來たのを私は其場で開封して、母に先づ見せてやつた。其後で祖母も見て、二人は着物の批評などをしてゐた。それは浪に鶴の裾模樣で袖が裾位まである着物を着た全身の寫眞であつた。

私は寫眞屋で一枚、友達で上手な人がゐたから其人に二枚寫して貰つた。寫眞屋から來たのは如何にも氣六ケしさうに、寧ろ陰氣な顏に寫つてゐた。友達の寫したのゝ一つが最も通俗な意味でいゝ顏に撮れてゐた。然しベートウヴェンやＵ先生の顏がいゝと云ふ標準からは寫眞屋で作つた氣六ケしさうなのが一番いゝ事になる。その點で私は多少考へなければならなかつた。私は迷つた。ベートウヴェンも偉いが、モッアルトも偉い。又ミケルアンゼロも偉いが、ラファエルも偉いと思つた。其他ツルゲーネフとトルストイ、こんな比較も作つて見た。が、結局私は矢張り可恐く寫つた方を選ばずにはゐられなかつた。向うから何も書かずに送つてよこしたから私も何も書かずに送つてやつた。

其晩娘から電話がかゝつて來た。

「私のは別に仕舞つて置いて下さるんでせう？」

「いゝえ」

「どうしてらつしやるの？」

「友達のと一緒に文庫に入れてありますよ」

「いけませんよ。チャント別にしといて下さらなければ……。誰方にもお見せんなつちやあイヤですよ。貴方も餘まり見ちやあイヤですよ」

「承知しました」

其寫眞は實際に餘り見なかつた。私にはそれが其娘より何んとなく美しくなく見えたし、又前の年の秋見て、以來半年の間私が頭に描いてゐた娘とは別人のやうに再び肥つて了つたからでもあつた。

四

濕氣の烈しい、うかうかたらしい氣候から來る不機嫌には私は中々打ち克てなかつた。而して其不機嫌は多くの場合他人に對する不快と一緒になつて私を苦しめるのが常であつた。私は其頃祖母に對して何んとなく不快でならなかつた。娘に對して或る警戒でもしてゐるやうなのも私の氣分を焦々させた。私は其時の氣分で二日も三日も此方からは一切口をきかない事などもあ

つた。祖父は前年の正月に胃癌で亡くなつた。而して今は私と云ふものに唯一の望を置いてゐる七十歳を越した祖母に對してする科としては少し殘忍な感じも時々はした。然しこんな殘忍もそれを安心して働ける人間は私にとつて祖母以外一人もない。こんな事が自分には云ひわけになつてゐた。

或午後私は二階の部屋で新しく着いた外國の雜誌を見てゐると祖母が登つて來た。

「角筈は何日です」如何にも機嫌を取るやうな調子で云ふ。私は一寸間を措いてから、

「あしたです」と答へた。

「お庭の枇杷がよく熟したけど、持つてつて上げませんか？　もう烏がかゝつたから此次と云つたらアラカタ無くならうもの……」

私が取り合はない樣子を見せてゐるので、祖母は緣側へ出て往來を眺めてゐた。私は又祖母が其處にゐると云ふ意識ばかりハッキリして雜誌に讀み耽れなくなつた。私は同じ便で來た、The Theatre と云ふ演藝畫報を開けてその寫眞版に只眼をさらしてゐた。

「米國の田中さんからか」

「エ、」

「此方からもお送りしますか？」

「送つてますよ」

「矢張り雜誌ですか」

「エ、」

私は一字でも餘計な字をいへば、それだけ好意が現れてでも了ひさうに或る努力を以つて出來るだけ切りつめた返事をしてゐる。

「近頃雜誌にいゝ小說が出ますか？」

「どうですかネ」

又話が途斷れた。

祖母は後手をして今更らしく鴨居の額などを見て廻つた。

「何か丸善から買ひたい本でもありませんか？」

「今は別にありませんネ」

又沈默が來た。たうとう祖母もそれに堪へられない風で獨言のやうに、

「明日先生のお家へ枇杷を持つて行くなら、今日の內に熊吉にでも庄兵衛にでも取らせなければならない」こんな事を云ひ〳〵靜かに用心をしながら、急な梯子段を降りて行つた。ドンと一番下の段を降りる音が暫くして聞えた。

其後で私は獨り泣いた。泣くと、いつも頭痛のするのが私の癖であつた。私は其儘晝寢をして了つた。

——茶を云ひに來た千代の聲で眼を覺ますと、氣分の惡い時には一番いけない事を天井でやつてゐる。ギラ〳〵とそれで赤味を帶びて、それがふるへてゐる。どんな時でもこれを見ると私は焦々して了ふ。

自家との界の塀に近く隣りの温室があつて、それが私のゐる二階から見下ろされる。或る嵐の時に其温室の後側の屋根のガラスに被せてあつたよしずが破られて、それ以來、其處へ夕日が反射すると私の部屋の天井へ來て、ギラギラと赤味を帶びたものが震へるのである。これが堪らない。——それは主に夏の事だが、冬は冬で、スティームを作る石炭の油煙が風によると、私の部屋の緣側へ來て、コロコロ〳〵〳〵何か小さなイタヅラ者でも遊んでゐるやうに行列を作つて轉げ廻る。若し障子を閉め忘れてでもゐると、机の上へ來てそれをやる。左う云ふ時は本氣で腹を立てゝ、隣りに手紙でも出してやらうかと思ふ事もあつた。が、惡い事ばかりでもなかつた。夜更けて靜まりかへつた頃、讀み物でもして起きてゐると、あたりがシーンとして、何となく淋しさに襲はれるやうな事がある。そんな時、よく長火鉢などの銅壺がやるやうに、ゴトッ〳〵と老人でもつぶやくやうな厚

味のある音をチューブの中でスティームがたてくれる。出所の知れてるだけに、それが私の不安な心持を大變に慰めてくれるのである。

だから一途にも醒めなかつた。

私は起き上ると其側の雨戸を閉めて、下りて來た。

赤いたすきをかけて、手拭を被つた千代が直ぐ下の縁側で花莚を敷いて單衣の引きのしをしてゐた。而して私の姿を見ると脱ぎ捨てゝ置いた私の下駄を其處へそろへた。

五

私は茶の間から部屋へ還ると、

「何も彼も云つて了はう」と左う思つた。

私は梯子段の上の小さい硝子窓を開けて、下で未だ引きのしをしてゐた千代を呼んだ。

「お祖母さんに一寸二階に……」

「お呼びするんですか？」と千代は輕く口を開いたまゝ見上げて居る。

「直ぐ」かう云つて私は部屋へ入つて歩きながら待つた。ソロ〳〵と登つて來た祖母は最後の段を上る時、

「どつこいしよ」といつて入つて來た。

「何だ？」と祖母は如何にも穩かな調子で云つた。

「……若しお祖母さんに少しでも僕を監督しようといふやうな氣があれば、それは大變な間違ひですからネ」突然にこんな事を云ひ出した。

然しそれで、私が何を云はうとするかは祖母にも直ぐ解つた。祖母も調子を變へた。

「お前はお父さんが平常どんな事を云つとんなるか知らないからそんな事を云ふんです」

「そんな事は別の問題です」

「……全體お祖母さんが何を監督しました？」

「仕なくても絶えず左う云ふ氣があるからいけないんです。僕ばかりの話ぢやありません。房子や順三にだつて同じ事です」

「孫の世話はお前でもうコリ〳〵です」からいつて押出すやうに祖母は笑つた。

「眞ンからコリて貰ひたいもんだ」

「勝手にしろ。自分では何一つ本統に出來もしない癖に他の小言ばかりいつて、年を取つたお祖母さんをイデメル……」祖母は少し赤い顔をして私をにらんだ。「こんな眼には會ふし、お父さんや親類からはお祖母さんが甘やかしたからあんなヤクザになつたと云はれるし、もう本統に早く死んで了つた方がいゝ」

祖母は極端に私を價打のないものにしてゐる。それが少し可笑しくも思はれた。

「そんな事を云つて、一體僕が何をしてゐるか、何を考へてゐるかお祖母さんに解りますか？」

「エ、解ります。毎朝寢坊をして、學校は休んでばかりゐるし、毎日お友達の所へ行くか集めるかして、やあ芝居だ寄席だと、そんな話ばかりしてゐる……」

「へえ。それが何んです？」

「用と云つたら手紙一つ本統に書けもしない癖に……書けないのもいゝが讀めもしない癖に……」

亡くなつた祖父の兄弟が未だ田舍で村長をしてゐる頃で左ういふ人々からよく來る手紙を讀まされる。毛筆で走り書きにしてある昔の人の手紙はよく讀めなかつた。で、大概いつも決まつてる内容の意味だけを「まあ大體左んな事ですよ」と云つてやる。すると、祖母は返事を出して置いてくれといふ。候文の手紙を書く機會の殆どない私には、假令言文一致を使つても候文的な内容きり書けさうもない叔父や叔母への手紙は容易に書けなかつた。「困つたものだ」と祖母に其度々に嘆息した。

「兎も角近頃はお祖母さんに解つて貰はうとも

思はないけど、邪魔だけはなるべくして貰ひたくないんですよ。おかげで世間並な意氣地なしになつたかも知れませんが私はそれに少しも不平は持つてゐませんし、今更お祖母さんがウマク監督をやつた所で直るワケもなし。それに私だつてイマに何か仕ますよ。それがお祖母さんを喜ばす事かどうかは別問題として此處何か仕ますよ。其「何か」は云つてもどうせ解りはしないのだから、只「何かする」と云ふ事を信じてゐて貰へばいゝんです。それ以上は此方も望まないから、お祖母さんもいゝ加減な所であきらめをつけてゐて下さらないと困りますよ――どうせ理解は出來ないのだから、迷信的に信じておいでなさい」こんな事を私は繰返し／＼云つた。

祖母は何を云はれてるのかよく解らなかつた。それに第一、二つの時から三週間と嘗て自身の傍を離した事のない此孫の中に理解するとか、信ずるとか、そんな事をすべき物が何處にあるのだらう？　又若しあるとすれば、何時の間にそんな物が出來たんだらう？　祖母は默つてこんな事を考へてゐる態だつた。

然しこんな事でも私の氣分は大變すぐれて來た。祖母も何となく愉快さうに見えた。

二番目の妹が登つて來て、隣りの部屋で手をついて、

「お兄樣御飯。お祖母樣御飯」と云つた。

食事の時急に話が起つて、翌日、祖母と上の妹と私とで、明治座の堀江の人形芝居を見に行く事になつた。忠臣藏の通しで、大隅太夫が七段目の由良の助と九段目一段を語る筈であつた。

六

私はいつか、段々に千代を愛するやうになつて行つた。私は不機嫌な時に殊に其事を感じた。不機嫌な時に千代と話をするとそれが直ぐ直る事がよくあつたのである。

私は日記の七月十一日の所に次のやうな事を書いてゐる。

―自分は彼を單に好きだと云ふだけではない。何故なら、彼の事を考へる時に必ず一種の苦みを感ずるもの…。自分は三時間その顏を見ないと或る淋しさを感ずる。彼も自分の傍で用をする事を好むやうである。自分にはどうして愛を云ひ表すだけの勇氣がないのだらう？　それは惡い意味で自分は利口だからである。自分は彼を愛しつゝ、彼が美しい女でない事を知つてゐるからである。然し又彼が自分と自分の仕事を解するやうな女でないと云ふ氣もするからである。一言にいへば結婚はしたくないと云ふ氣が十分にあるからである。結婚する氣のない戀を云ひ表すのは只彼に大きい苦痛を與へるだけである。

自分は何も云ふまい。自分はもう眼で彼を追ふまい。二人の眼は日に幾度會ふか知れない。然しそれもヤメなければいけない」

七月十五日の所に、

―外出しても自家の事が頭を去らなくなつた。千代は少くも自分一人にとつては美しい女である。これまでの自分の空想は自分の妻として無限に美しい女を描いてゐた。この描かれた美しい女に比較されてはどんな女でも醜婦になる。千代も初めはそれに比較されてゐた。然し今は千代は自分の頭からその女を消してくれた。自分にとつては今は千代は唯一の美しい愛らしい女である。

自分はK・Wをも愛してゐるかも知れない。然しあの貴族主義な女とは徹頭徹尾結婚は出來ない事をよく知つてゐる。

自分は自分が其人をよく知り、又、自分を其人によく知らせないでは結婚しまいと決めてゐ

る。次に自分は其人を愛し、又自分が其人に愛されなければ結婚しまいと決めてゐる。最後に自分は自分の仕事と撞着する結婚は斷然出來ないと決めてゐる。K. W. とは此の最後の條件でどうしても相容れない。それはよく解つてゐる。

　千代に於ては此點に少しの撞着もない。

　自分は千代との關係が雇人と雇主の關係であるのが甚だ物足らない。」

　廿日の所に、

「自分は千代を愛するやうになつて、雇人と云ふ者に對して今迄になかつた同情を持つやうになつた。雇人が臺所でどういふ物を食つてゐるだらうと云ふ事を初めて考へて見た。雇人は雇はれてゐる間は一度でも自分が毎日入つてゐるやうな全くアカの浮いてゐない澄んだ風呂に入る事はないのだと云ふ事を初めて思ひついた。

　自分は昨夜千代と話して彼が彼の家で兩親や兄から丁度自分が祖母や祖父に愛されてゐたやうに愛され、丁度自分が自家の者に我儘を云ふやうに我儘を云つて育つて來た事を聽いて一寸異様な感じがした。」

　――神經質に日に幾度か手を洗ふ癖のあつた私は殊に夏は何度となく湯殿に出入して其處の水道を使つた。湯殿の小窓の直ぐ下が井戸端の三和土で、洗物の多い頃で千代がよく其處で洗濯をしてゐた。私は其小窓を通して千代とよく眼を見合せた。見まいと思ひながらツイ見る。すると千代はいつでも怒つたやうな可怒い眼つきをして私の方を見てゐた。

七

　或る午後私は二階の部屋で本を讀んでゐると、裏の往來で不意にキァーン／＼と烈しい犬の啼聲がして、續いて、棒か何かで肉體を直接に撲るバッタン／＼と云ふ氣持の惡い音が聞えて來た。全く受け身なむごたらしい犬の悲鳴と棒の音とが暫くは入り亂れて聞えてゐたが、段々に犬の啼聲が細つて行くと、バッタン、バッタンと棒の音だけが續いて、仕舞にそれもたうとう止んで了つた。

　私は急に落着かない氣分になつて緣へ出て其方を見たが梅の枝の茂みで見えなかつた。其處に前の家の末つ子で其春から小學校へ通ひ出した太つた男の兒が開いた大きな洋傘を肩にかついで堅くなつて二三歩先の地面を見つめて、急足で其方面から歸つて來た。顏色を變へてゐる。而して息をはずませながら、小聲で、

「犬が殺された……犬が殺された」こんな獨言を云ひながら眞直ぐに自分の家の門を入つて行つた。車をひいた羅宇屋煙管の爺が「坊つちやん坊つちやん」と聲をかけたが子供は振り向きもせずに入つて行つて了つた。

　其時私は「若し」といふ氣が一寸したので直ぐ二階を降りて、

「白、白」と呼んで見た。

　庭の方から白が頭も尻尾も低く下げて、轉がるやうに滅茶苦茶に駈けて來た。而して無暗と胸へ飛びついた。赤も少時すると庭の方から駈けて來た。

「まあ、どうしたんだらう」と物干から下りて來た千代が笑つてそれを見てゐる。

「今、外で犬が殺された」

「まあ」千代は驚いた顏をした。

「赤も一緒に、そつちで菓子でもやつて、暫く門を出さないやうにしといて呉れ」

　かう賴んで私は門の所へ行つて見た。勞働者としては綺麗な顏立ちをした若者がシャツ一枚でむしろをかけた小さい荷車を挽いて急足で丁度前を通る所だつた。私は其興奮した赤くなつた顏を見ると、立派に「兇行者」の表情

があると思つた。

三四日すると急に白が見えなくなつた。何んと云ふ事もなく私には此小犬が私と千代との間で何かの役をしてゐるやうな氣がしてゐたから、變な淋しい感じを私は感じた。眞白な房々とした美しい毛を持つた犬の事で、若しかしたら殺された、左もなければ盜まれたと皆思つた。兎も角警察へは屆けて置いて、更に車夫や門番に近所を探さして見た。千代も五つになる高子の守をしながら自分で町へ探しに出たりした。

見えなくなつて、二三日すると不圖した機會に飯たきの女が物置の炭俵を積んだ裏の狹いあはひからその死骸を發見した。

私が見に行つた時にはそれが物置の前に持出されてあつた。眞白かつた毛が炭の粉で薄よごれて、前足は前の方へ、後足は後の方へ眞直ぐに延ばしたまゝ腹をベツタリ地へつけて、妙に平つたくなつて死んでゐた。伯父さんと云ふ格だつた赤は少しシヤクレた平氣らしい顏で、死骸の方は見向きもせず其處に立つてゐた。赤が近所での憎まれ犬だつたから、それへやるつもりの毒をこれが食べたのに相違ないと云ふやうな事に一致した。

いやな顏をして立つて見てゐた千代は赤が頭を下ろして横腹の蚤を嚙んでゐるのをイキナリつかまへて、

「エイ、憎らしい！」と平手で強く其頭を撲つた。皆は笑つた。

八

八月に入つて、私は祖母と妹二人と弟一人とを宰領して箱根の蘆の湯に行かねばならなかつた。女中は千代を連れて行きたいと祖母はいつた。然し私はそれに反對して前からゐる松を連れて行く事に決めた。

「お祖母さんはお前を連れて行きたいとお云ひなるがネ」と私は自分の部屋で千代にいつた。「松が舊くからゐて左ういふワケに行かないから乃公が反對してやつた」

千代は只笑つてゐた。

それも私自身では二週間でも三週間でも千代を離れて考へる必要があるといふのが主な理由であつた。

私は箱根で考へた。が、それは狹苦しい中で、ドウ／＼廻りをしてゐるやうな考へ方であつた。小さな帳面に千代の事をCとして、私は色々な事を書いてゐた。要するに私は私の躊躇は千代がそれ程美しくない事、及び千代の家が社會的に低い階級にあると云ふ事などから來てゐるといふ風に寧ろそれ〻脅迫觀念的に左う考へられた。私は私のヴァニティーを殺す事が出來ればそれで此問題は形がつくのだと考へた。

滯在中私は二葉亭の譯した「片戀」といふツルゲーネフの小説を其處の驛の夕ぐレた見すぼらしい貸本屋から借りて讀んだ。その終りの方に、「若い私は未來と云ふものを際限もない永いものに思つて、何のこんな事（こんな戀）はこれから先にもまだ幾らでもある、もつと嬉しい事があると考へてゐた。然し遂に來なかつた」といふ意味の句を見つけると私にはそれが此問題に與へられた運命の暗示ででもあるやうに感じられた。私は與へられた此機會を出來るだけ注意して進まねばならぬと考へた。今自分がこれを進まずに避けるならばそれは思慮あるしかたとはいへない、臆病者の行である。こんな事を思つてゐた。

八月廿日に歸つて來た。然し其時も未だ私には堅い決心が出來てゐなかつた。私は私の帳面に「若し此決心が一年も續かなかつたら」とか「結婚するにしても今のCには二三年間

の學校教育が必要である」こんな事を書いてゐた。

私は何にしろ千代が私をどう思つてゐるかをハッキリ知らずにこんな事を考へてゐても仕方がないといふ氣がした。若し千代に約束した人とか好きな人とかがあれば自分は一も二もなく想ひ切つて了はうと思つた。私には千代に左ういふ人があつてくれゝばいゝと思ふ心さへあり得たと思ふ。若し千代が許嫁があるといつたら私は失望しながら喜んだかも知れなかつた。

西根から歸つた翌々晩私は千代を部屋に呼んで、自分が愛してゐるといふ事を話した。然し決して熱烈な愛といふ程度のものではないといふ事をも話した。

私は緣側へよつた隅の机に背をつけてゐた。千代は次の四疊半から敷居を越した所にかしこまつて坐つてゐた。

私は結婚の事は一ト言も云はずに千代がどう自分を思ふかを尋ねようといふつもりであつた。私はまはりくどい自分でもよく分らない事を切りにいつてゐる。それが、自分の思つてゐることはスッカリ云はずに向うの思つてゐることをスッカリきかうといふ樣なズルイ態度であつた。その內に自分でもそれがミニク、て〱堪はなくなつてきた。

千代は想つてゐる。然し想つても、どうにもなりはしないからアキラメてゐる、といふ意味の返事をした。

其處で私も何も彼も露骨に尋いて了はうといふ氣になつた。

「約束したとか、愛してるとかいふ人はないのか？……惡い事でも恥しい事でもないんだぜ」

「ありません」千代は眞面目腐つた表情をしてゐた。

「そんなら、若し乃公が結婚を申込んだら貴樣は承知するか？」

「……」千代は一寸驚いたやうな顏をして默つて下を向いて了つた。

「返事は何時でもいゝぜ。一週間でも十日でも考へていゝぜ。只自家の人に相談して決められちやあ困るんだ。お前だけの考へが聞きたいんだ」

私は「若し申込んだら」と或る場合として初めは話した。が、事實はその儘申込んだ事になつてゐた。千代は最初「身分が……」といふやうな事もいつた。それは私は諾かなかつた。私はいつか興奮してゐた。私は起つて用箪笥の抽斗から亡くなつた母の不細工な金の指環を出して來てそれを千代の指に穿めてやつた。而して私は首を抱いて接吻してやつた。

私が千代の體に觸れた事は二タ月計前暗い所で千代の持つて來た私の懷中時計を受取る時に私の指の先が千代の掌へ一寸さはつたのを覺えてゐるばかりだつた。其時私は自分の愛する女の掌が案外堅いのに驚いたのでよく覺えてゐる。

抱きすくめるやうにして接吻してゐると、何んだか千代の體が急にゲッタリと重く私にかかつて來た。少し私が身を離すとガックリ首を前へ垂れて、氣を失つたやうになつて了つた。何かいつても默つてゐる。

其時私は驚くよりも不圖、或るいまはしい邪推を起した。それは接吻以上の事をされはしまいかといふ恐れからする芝居ではないかしらといふ考へであつた。汗で後れ毛の附いた首筋を見せて千代は疊に突伏してゐる。私の心は妙に冷かになつた。一寸の間私は少し離れた所からヂッとそれを見てゐた。而して起して見ると、千代が餘りに青い顏をしてゐるのに今度は本統に驚いた。

私は直ぐ硯に使ふ水で寶丹を含ませてやつた。

「女中部屋まで歸れるか？」

千代はカスカに首を振つた。

「誰か呼んで、――乃公も一緒に連れてつてやらう」からいつたが千代は又首を振つてそれをこばんだ。もう少し此まゝにして置いてくれと勢のない聲でいつた。

「そんなら、もつといゝ水を持つて來てやらうか」

千代は眼を眠つたまゝ首肯いた。

私が段を急いで降りると段の下で岩井といふ、顏色のよくない、肥つた田舍から出たばかりの書生が狼狽した態で獨りマゴ〳〵してゐた。

「せいでも松でもいゝからコップに直ぐ水を持つて來さしてくれ」

岩井にから命じて私は直ぐ又二階へ登つて來た。私は直ぐ千代の指から指環をとつて、それを机の抽斗へ入れた。

三十分程して他の女中二人に助けられて女中部屋に還つて行つた。

其後暫くは私は一種云ひ難いイヤな心持を感じてゐた。

九

翌朝起きて行つた時には千代は血の氣のない顏をして他の女中と、緣側にピッタリと坐り込んで、新聞紙を開いた上にとぎ板を置いて前晩父の客で使つた、ナイフやフォークを磨いでゐる所だつた。千代は成るべく私に顏を見られないやうにしてゐた。

午前九時頃になつて私はペンと紙とを持つて奥の中二階に行つた。口でいふと直ぐ興奮して了ふ恐れから、手紙にして自家の人へ發表してやらうといふ考へであつた。庭で蟬が八釜しく啼く。私は其部屋にある唐木の机に倚りかゝつて、書くべき事を考へてゐた。其處へ未だ青い顏をした千代が登つて來た。

「工合が惡いか？」

千代は笑つて、

「もう、スッカリ直りました」といふ。

「時々あんな事があるのか？」

「イヽエ……あんな事は今迄一度もなかつたんですけど、どうしたんですか……」

私は今自家の人にどういふ風に發表しようかと考へてゐる所だと話した。千代は暫く當惑したやうな顏をしてゐたが、それについては何も云はなかつた。

其日は午後になつて友達が來た。夜又一人來て私には遂に手紙を書く機會も云ひ出す機會もなかつた。其晩千代が來た時、

「お祖母さんとお母さんは大概いゝと思ふがお父さんが何んか屹度云ひなさるよ」

「旦那樣は六ケしい事は仰有いますまい……」

と千代は氣樂な顏をして云つた。

「そんな事ない」から首を振つて打消すと、

「左うですかしら」と千代は不審さうな顏をしてゐた。

――翌日の朝私は祖母を奥の中二階に連れて行つて、總てを打明けた。終ひに、

「然し、これはもう相談ぢやありませんよ。約束をして了つたんだから、その報告ですよ」

此高飛車な物言ひは私にとつて政略でもなんでもなかつた。

祖母は母に來て貰つて、自分で、簡單に私の云つた事を繰返した。

「山本さんのお雪さんも元は矢張り女中だつた」

祖母は知つてゐる或る金持の家の事を云ひ加へたりした。

二人は勿論贊成はしなかつた。然し別に不贊成も云はなかつた。兎も角母から父に話すといふ事にして、二人で其中二階を降りて來た。

其晩も私は一時間餘り自分の部屋で千代と話

した。

――翌朝私が獨り部屋にゐると祖母が登つて來た。

祖母は大津家として、そんな事は嘗てない事だから、それに口約束だけなら何んでもないから斷つて了へといつた。實は加藤さんの二番目のお嬢が評判だから心ではあの人でもと思つてゐた所だつたといふ。何祖母はかういふ事には大事な事だからと切りにそれを繰返した。

「大事な事だから僕に祖母さんのやうな人には迚も任して置けないんですよ」私はそのまゝ祖母を措いて部屋を出て了つた。

其日私は三浦岬へ行つてゐる重見といふ友達に手紙を出して「直ぐ歸つてくれ、こんな我儘は君だからいふ」といつてやつた。其晩私は千代と事實で夫婦になつた。私は初めて女の體を識つた。私は直ぐ又重見へ手紙を書いた。「事の内容を少しも書かずにこんな手紙を度々出すから隨分君に心配をかけてゐる事と思ふ。然し、もう歸つて來てくれなくていゝ」かういふ意味の事だつた。

――翌朝、祖母の部屋へ行くと祖母は父が「そんな事は決して許さん」といつてゐる事を話して、

「今、どうして千代に暇をやらうかと考へてゐる所だ」といつた。その云ひ方が如何にも憎々しかつた。

私は急にカッとして了つた。

「若しそんなことをすれば、僕は祖母さんを捨てる許りです」私はそれから烈しく祖母を罵つた。祖母もスッカリ興奮して了つた。而して烈しい劔幕で覺悟があるといつて立つて倉の方へ行つた。その倉の二階に刀簞笥といふのがあつてツマラナイ刀や短刀が七八本入れてある。

芝居氣だとは思つた。然しそれから本統になり兼ねない位に祖母は興奮してゐると私は思つた。又芝居氣もそれをハッキリと意識してゐないから場合によつては興奮からズル／＼と他愛もなく本統の境へノメリ込み兼ねないと云ふ氣がその時トッサに或る感じとして私に感じられた。私には「勝手におしなさい」とは云へなかつた。其處に母も出て來て止めた。

其晩も私は部屋で千代と十二時過ぎまで話した。

翌日の朝早く重見から、今歸つたといふ電話が掛つた。私は急いで麹町の彼の家へ行つた。

「海が荒れて船がチットモ出なかつたけど、昨晩一艘だけ出たんで歸つて來た」と重見に云つた。それが私の初めの手紙を見て間もなくの事で、「歸らなくていゝ」といつた手紙の屆かない内だつた。

私は嬉しい興奮で何も彼も打明けた。

「然しチットモ熱烈でないから時々迷ふやうな心持が起るんで不愉快で仕方がないんだ」

かう云ふと、重見は、

「前後の考へも浮ばずに押し通すんなら左う偉くはないさ。今は心中する程の戀がいゝとも美しいとも思へないからナ。前後を考へる餘裕があつて其上で自分の行くべき道を自覺しながら進んで、それで敗れなければ、本統に偉いんだと思ふんだ」と云つた。

私は自家の者には少しも弱い態度を見せずに來たけれども歸つて千代に對して弱い音を吹いたゝを非常に氣にしてゐた時だつた。

夕方まで話して、私は元氣になつて歸つて來た。

歸つて部屋へ入ると直ぐ千代が登つて來た。千代は其日、私の留守に祖母と母とに一切私の部屋に入つてはならぬし、而して兎も角一つたんは宿に下つてくれと申し渡されたと泣いてゐた。

千代は私にもうなるべく家を空けないやうにして呉れとそれを繰返して云つた。

千代を還して私は直ぐ母に部屋に來て貰つた。

「家庭の問題でもありませうが、それ以上に私自身の問題ですからネ」私は興奮から息をハズマセながらいつた。「私も一切陰廻りな事は仕ませんから、自家でも一切それはよして貰はないと困ります」

而して私の承諾なしには決して千代を宿へ下げないと云ふ約束をして貰つた。

母は私が千代と約束した事は早計であつて、その事には同情出來ないが約束して了つたものは添はねばならぬといふ意味を云つて同情して呉れた。話してゐる内に母は私が十三の時自家に來た其頃からの二三年間の我の強い祖母との關係での苦しい經驗を話して泣き出した。私も意を入れられた。十年間々、母が云ふ言葉から聯想出來る只一つの不快な感情をも嘗て私に經驗させなかつた母に對して、私も涙を流さずにはゐられなかつた。而して私は心から又祖母を憎く思つた。（祖父の死後は殆ど私一人の爲めに生きてゐるやうな祖母——我の強い祖母は長い間、一人孫であつた私を、殆ど無意識的に自身の想ひ通りにしようとする、私は又殆ど無意識的に左うなるまいとする、而して反つて祖母を自分の想ひ通りにしようとする。二人のこの烈しい爭ひは互に愛し合ひながら私の少年時代から絶えた事がなかつたのである。私は此祖母といふ敵に常に愛されながら、又愛しながら一方では憎まずにはゐられなかつたのである）

私は母と話して大變いゝ氣分になつた。

「大學を卒業したら二三年も洋行をさせて、歸つた所で相當の家から嫁を貰ふ事にしてあるのだし、今度のやうな事は決して許さん」かう云つてゐるといふ父には母からよく話して貰ふ事にした。

「何々する事にしてあるのだからと將來の事をいくらお父さんだからつて他人に左う勝手に定められちやあたまりませんよ」笑ひながら私がこんな事を云ふ時分にはもう母も笑へた。

十

翌朝重見が來てくれた時に千代に會つて貰つた。話もなかつた。千代は少し横向きになつて下を向いたり、外を見たりしてゐた。暫くして、私は、

「もうあつちへ行くといゝ」かういつて還してやつた。

此日祖母は朝から眼まひがすると云つて居間で寢てゐた。私はそれに邪推を起したが、元來腦の弱い祖母の事で部屋へ行つて其ノボセたやうな顏を見ると滿更手段の病氣とも思へなかつた。

午後私は重見と芝公園から銀座の方を散歩した。

「なるべく早く歸らないか」途々重見は二三度かういつた。

其晩も十二時過ぎまで千代と話した。

「どうせ貧乏して暮らすんだぜ。お前は貧乏してもいゝか」

「いゝ事はありませんけれど、仕方がないぢやありませんか」

「貧乏はいやか？」

「えゝ、いやですよ」千代は輕く答へた。

「うまいものが食べたいのか？」

「いゝえ」

「何んだい……いゝ着物が着たいのか？」

「えゝ」

「いゝ着物が着たい」

「えゝ、着物は着たう御座いますよ」

「うまい物は食はなくてもいゝから、いゝ着物が着たいのか」

「えゝ」

　こんな會話も私の耳には何んとなく物珍しく響いたのである。

　こんな話もした。

　千代は未だ肩揚げをしてゐた。

「女は幾つ位まで肩揚げをつけてるだらう？」

から云つた時に千代はアゴを引いて自身の肩揚を見ながら田舍の自家の隣りの醫者に未だ肩揚げをしてるのかとからかはれた時「これから？　これは未だ中々とらんないよ」といつてやつたと云ふ話をワザと田舍詞のダイレクトナレーションで云つて笑つたりした。

　周圍に全く味方のなかつた千代は重見を切りに頼りにした。而して「今度は何時來て下さいませう」なぞといつてゐた。

　翌朝私は現在の事情について巴里にある友人へ手紙を書いた。手紙の紙に二枚ばかり書き進んだ時に子供から一緒に育つた四つ上の叔父が鎌倉から上京して來た。私は知らせでペンを置いて私は茶の間へ出て行つた。

「鎌倉の方も段々人が減つて來ましたよ」叔父は紅茶を飲みながら母にこんな事をいつてゐた。

　少時すると、

「一寸座敷へ來てくれ」

から云つて、叔父は机に散らばして置いた巻煙草の箱を二つばかりカタビラの袂に入れると煙草盆を自分で下げて先に立つて大きなからだをユスリながら縁側を座敷の方へ行つた。

「乃公は電報で出て來たんだ。今簡單な事はお姉さんから伺つたよ。然し乃公も贊成はせんぞ、勿論乃公だつて、社會上の地位なんかは問はんけど、貴様のお父さんがそれを問はれるのは至當だと思ふんだ。然し勘當されても何んでもかまはんといふ決心があるなら、それでやつて見るさ」

　此叔父は私については自ら常に或る責任を感じてゐるらしく私の爲めに出來るだけの事は仕ようといつてゐた。

　其午後重見から長い手紙が來た。

　今帝劇に行く時君達のことを考へた、何となく、目が濕うて來た、「もし君達のことが甘くいつたらどんなに嬉しいだらう」と思つた、僕の理窟は「君が苦しめば苦しむ程爲になる」と云ふが、實を云ふと早く君達の生活が見たい。

　自分は出來るだけのことがしたい、手紙を書いて君に送つたら、君の勇氣を助けることが自分が出來ると思つた、すると、早く歸りたくなつた。

「どうしたらいゝだらう」と獨りに自分は思つた、その結果次ぎの小説(？)を書くことにきめた、まだ、例の如く終りまで考へてない。

……………

　不幸な祖母さん、

「實際、彼もその女も可哀さうだ、涙もろい彼はどんなにつらいだらう、それは察してゐる、またその女の人も、全く他人の意思によつて自分の身が定るのであるから不安でもあるし、つらくもあるだらう、しかし自分は祖母さんを一番不幸な方と思ふ、ありふれた小説風にゆくと、それは祖母さんが一番憎まれ役だ、しかし祖母さんになつて見玉へ、

　七十幾歳になる身で、自分の杖柱とも思つてゐた彼に、自分の最も愛してゐる彼に、その人にのみ望をおき、樂しみにしてゐた彼に、一見捨てると云はれたと思つて見玉へ、どんなにつらいかわかりはしない、祖母さんと云ふものは、いくらいゝ人でも、ひがみと云ふものがあ

るものだ、彼にさう云はれたらほんとに彼が自分を愛してゐないと思ひ、自分のことなんかどうでもいゝと思つてゐると、思ふのは無理がないと思ふ、さう思つたと考へて見玉へ、今迄蔭になりひなたになり、二十何年と云ふ永い間、彼のために骨折り、それが爲にどのくらゐ苦勞し心配したかわかりはしない、この事を祖母さんは明らかに自覺してゐる、自分がこんなに思つてゐるのに、こんなに骨折つたのに、こんなに心配したのに、ハイ〳〵の出來ない時から大學に入つた今まで、一日否一時間だつて彼のことは思はないことはないのに、この自分を何とも思つてゐない、じやまに思つてゐる、かう思ふのは無理はない、決して無理のないことぢやないか、かう思つたとしたまへ、祖母さんが不幸に思ひ、悲しく思ひ、彼に口をきかず彼の苦しみを察せず、なほ苦しめるのは無理はないと思ふ、祖父さんの死んだ後祖母さんの樂みは實に彼より他にないのだ、たよりに思ふのは彼より他にないのだ、そのことを明きり考へて見玉へ、僕は祖母さんが一番可哀さうだと思ふ。

　それは君の云ふ通り、祖母さんが『ウン』と一つ承知すれば、彼も喜び祖母さんもどんなに幸福か知れない、しかし君、昔の人なる祖母さんにこのことがわからないと云つたつて責めることは出來ないと思ふ、それが分る樣なら、祖母さんを不幸な人とは僕は云はない。

　彼は今になつて、いくら祖母さんが泣かうが、笑はうが、怒らうが、おどかさうが、聞きはしまい、聞くやうな弱い男ではない。

弱い男なら祖母さんは不幸ではない、聞かないに定つてゐる人を無理に聞かさうとするから、祖母さんを不幸な人、お氣の毒な人と云ふのだ。

　この場合祖母さんが折れるより仕方がない、祖母さんが折れたら、彼はどんなに喜ぶだらう、さうして必ず祖母さんの思つてゐる通り、望んでゐる通り、孝行をするにちがひない、それを知らないで、折れることの出來ない彼を折らうとして、彼を益々怒らせる、祖母さんは不幸な方ではないか。

　どうしてこんなことがわからないのだらうと思ふかも知れないが、そこが昔の人だから、やむを得ない。

　幸になれるのに、ならないで、可愛い孫を苦しめ、柱と思ふ孫に嫌はれる、祖母さんを不幸と君は思はないか、祖母さんのことを考へると涙が出る。

　彼もそれはつらいだらう、祖母さん思ひの彼が、祖母さんに『見捨てます』と云ふまでにはどんなにつらいかわからない、しかし彼は若いし、勝つにきまつてゐるし、自らつくつたことだから、今こそつらいが、望みがあるから、祖母さんよりいくらいゝか知れない、その女の人もつらいにちがひない、一番つらい位置にゐる、しかし彼にたよつてゐればいゝのだ、彼を信じてゐるらしいから、不幸な内に望みがある。

　どうしても一番不幸なのは祖母さんだ。

　責任の重いのと複雜な苦しみをしてゐるのは彼にちがひない、約束した今その女の人をすてれば、大罪人になり一生の不幸である、さうかと云つて祖母さんを捨てることはどのくらゐつらいか知れない、彼は祖母さんの自分を賴り、自分を愛してゐることをよく知つてゐる、彼は常に、祖母さんのことを心配してゐた、しかしこの苦悶は意味のある苦悶である、祖母さんのはさうではない。

　しかし誰が一番不幸であると云つたつて始まらない、たゞ僕等は祖母さんが承知して三人が互に愛し、幸福に生活するやうに努力しなければならない。

　僕は無論、彼とその女の人とは結婚しなけれ

ばならないと思ふ、祖母さんがいかに反對しても結婚するのがほんとうと思ふ、だからどうかして祖母さんに、彼は折れるわけはないと云ふことゝ、彼の思ふ通りにさす方がいゝ、さゝなければいけない、さうした時に、どのくらゐ幸福を得られるかを知らせたいと思ふ、實際昔の云ふとほり、祖母さんさへ承知すれば、極上吉で三人とも幸福であるし、めでたし／＼だ、しかしそこがわからないと云つて責めることは出來ない、昔の人だもの、

實際彼の心が祖母さんにわかればいゝのだがね一終

……………………

なんの爲めにこれを書いたかは御存じと思ひます、早々

此手紙は強い感動を與へた。私の其時に此位適切な手紙はなかつた。私は涙ぐんだ。

重見はそれを祖母に讀んでやれといふつもりで書いてくれた事はわかつてゐたが、其日は其機會がなかつた。

十一

夜八時頃になつて、千代は戸を閉めに登つて來た。其時私は本を讀んでゐた。

戸を閉めると千代は部屋に入つて來て、

「私の爲めにこんな騒ぎが起つたと思ふとツラクッテツラクッテ……」

こんなことを切りに云つた。

「自家の奴が、皆ワカラズ屋だからさ」私はこんな事をいつた。

こんな話でも一時間では何程も話せなかつた。九時頃湯に入るといつて千代は降りて行つた。すると千代は直ぐ又登つて來て、オド／＼した調子で、

「順吉樣、村井さんのおカミさんが今お茶の間に來てるんで御座いますよ」といつて息をはずませてゐた。

父の出てゐる鐵道會社の下役をしてゐる男の妻で、千代を世話した四十恰好の女である。

「何を驚いてるんだ！」私は叱るやうに云つた。「乃公が承知しなければ決して下げない約束がしてあるんぢやないか、馬鹿な奴だナ」私は驚きから赤い顏をして私の眼を見つめて居る千代の顏を見て笑つてやつた。

「千代！　千代！」硝子窓の下から角のある聲で呼んでゐる。

「村井さんですよ。順吉樣、村井さんですよ」

千代は裸頭で寄つて來た。私はその女が千代を連れて來た時に「お千代さん」と云つてゐた事を記憶してゐた。吾々が眞面目に正面から行つてゐる此出來事に對する皆の失禮な態度が、此女の此呼捨てに露骨に現されてゐるやうに感じて私は急に腹を立てた。

「千代！　千代！」かういふトガ／＼しい聲が梯子段の直ぐ下からして來る。

「あんなに怒つてゐる……」千代は泣きさうな顏をしてオド／＼した。

「行けよ、乃公も一緒に行くから……」

私は立つて千代の肩を其方に押してやつた。私が段の上へ行くと其女はそれを登りかけてゐた。

「何か用なのか？」私は怒りから鋭い調子でいつた。

「えゝ左うです」

「何の用だい」

「何の用か知らないけど、乃公も一緒にいつて聞かう」

「貴方には何んにも用はありませんよ」

「生意氣いふな」私は大きい聲をした。

茶の間へ行つた。其處には茶や菓子が出てゐる

て、母が一人坐つてゐた。

座につくと其女も興奮から眼の色をかへたまゝ、

「何にしろ急用でこれの兄が先程の汽車で上つて來て宅で待つとりますから、急いでゐると此の方がどうしたんだか大變な怒りやうで　リケが解りやしない」と一寸流し眼で私の方を見た。

「失禮ぢやあないか。何んだつて貴樣は無遠慮に乃公の部屋へ入らうとした」

「だつて下女が主人の部屋で話し込んでるつて法がありますか。私はそれを怒つたばかりでよ」

「生意氣云ふな」

私は若しかしたら松か、或はセイといふ飯たきかゞ、手柄顏に世話した此女に知らせたのではないかしらと思つた。會つても口をきく事さへない村井といふ下役の男やその妻などが自分達の或る運命に一ト言でも何かいふさへがヒドイ侮辱に思はれて氣持が惡くてならない所に、女中までが、と思ふと取りかへしのつかない輕蔑を受けてゐるとしか考へられなかつた。私は一層烈しく腹を立てた。然し證據も何もない事を私はどうしていゝか解らなかつた。

「此方が正面から仕へる事に、若し陰廻りをして手段的な事でもする奴があつたらそれこそどんな事をしても罰してやるからナ。決して許さないぞ」

私は一ト間と臺所とをへだてた女中部屋まで聞えるやうな大きい聲で、こんな事を繰返した

寢間着の姿で祖母も起きて來た。

「何をいつてるんです。千代は用が濟めば直ぐ歸つて來るんです」祖母はたしなめるやうにこんな事を云つた。母も、その女に、

「此方にも今、少し片附かない事があるのですからね、明日は用の濟み次第、屹度直ぐ還して下さいよ」といつた。

私は若しかしたら自分が餘ンまり氣が早過ぎたかしら、とも思つた。前から一ツコクな女だと云ふ事を母から聞いてゐたし、千代の返事が遲いので腹を立てたのかも知れなかつたといふ氣もして來た。それでも危まれた。私は皆の前で千代に、

「此事が何方ともハッキリ決まらない間は決してお前に暇はやらない事になつてるんだからネ」二人の間では幾度か話された事を此處でも繰返して、傍叱るやうな調子で、

「あしたは屹度歸つて來なくちやいけないぜ。……それから若しも向うで事情が變る樣な場合があつたら、其時は必ず電話で一應乃公に相談しなければいけないぜ」といつた。

「ハイ」興奮してゐる千代はかうハッキリ答へると部屋へ着物を着更へに下がつた。私は起つて暗い緣側を往き來してゐた。

その女と千代は臺所口から出て行つた　出て行く時千代に、

「あしたは兄さんと一緒に歸つて來い。いゝか」と云つた。千代は何かしら不安な眼差してへつついの側に起つてる私の顏を見上げて首背いた。

十二

私は其儘物置の屋根に作つてある、物干場へ登つて、又そのヤグラの上へ乘つた。星の多い晩だつたが、割りに蒸し暑かつた。

兎も角今の場合千代を一寸でも此處から離すのは不利な事だつたと考へた。其方の都合で還す事はならない。用ならあしたでも兄を寄越すやうにしろと云つて我を張れば、それで何の事もなかつたのにといふやうな考へも起つて來た。

私は遠く見える灯を見ながら、あの女に連れられて不安な心持をしながら急足で行く千代の姿を想ひ浮べずにはゐられなかつた。而して物足らない淋しさを感じた。

　私はあした兄といふ男に會つたら何も彼も話して、向うの方だけはどうか片をつけられるだらうといふやうな事も考へてゐた。錘のついたくさりで閉めてある小門を開けるケタヽマシイ音がした。その音で夕方から其春結婚した細君の實家へ行つてゐた四つ上の叔父が歸つて來たことがわかつた。私は同時に物干を降りて行つた。

「未だ起きてたのか？」

　叔父はこんな事をいひながら臺所から母屋へ入らうとしたのを、

「一寸二階へ來てくれ玉へ」といつて一緒に私の部屋へ連れて來た。

　私は其晩の事を話して、

「若しかすると、陰で此事に邪魔しようとしてる奴がありやしないかと思ふんだ。誰か、他の女中おやないかと僕は疑つてるんだがネ」といつた。

「女中なもんか。お父さんさ」と叔父は輕くいふ。

「何故」私はもう興奮して來た。

「今日會社で村井に、千代には何の過失もないが、セガレが不埒をしたに就いて、兎も角千代には暇を取つて貰ひたい、と云ひなつたんだ」

「そんな筈はない、此問題が或解決に達する迄は千代は決して還さない約束になつてるんだもの」私は叔父のいふ事を信じなかつた。

「的になるものか、そんな事が。お父さんは貴樣の事を痴情に狂つた猪武者だと云つとんなるんだぜ。約束に一々責任なんぞ持ちなるものか」

　私は怒りから體が震へて來た。

「よし！　此方が何處までも眞正面から話をしてゐるのに皆が陰廻りをする氣なら此方も考へを變へるからネ」

　かう云ふ事も私はもう叔父に對して云つてゐた。

　叔父は切りに慰めて暫くして臺所口から母屋へ歸つて行つた。

　私は又物干場へ登つた。十二時頃だつた。汽車の笛とか電車のレールをキシル音などが未だ聞えて來た。

　私は直ぐ其處の屋根の下に今までゐた千代はもう決して再び歸つて來る事はない、と云ふ樂な事、明日から松か君かが自分の用をするんだといふやうな事、などを思つて感傷的な氣分になつて行つた。又若しかしたら千代は今晩の内に佐原の方の郷里へ送りかへされたかも知れない、こんなことを思ひながら時々稲光りのする東の遠い空を見て私は今更に千代と自分との空間的な距離を感じた。父は今度の事については絶對に自分と直接に會はうとはしない。それはいゝ。自分もその前年の夏の下らない事からの烈しい衝突を考へると出來る事なら父とは直接に會はずに問題を進めて行きたいと思つてゐた。然し今晩のやうな事に會つて只痴情に狂つた猪武者のする事位に輕蔑されてゐる位なら、どんな衝突をしても、直接に會つて、もう少しは解つて貰はなければと思つた。

　私はそれだけの事を知りながら、私には少しも話さずに夕方から外出して了つた叔父に對しても、用が濟めば千代は直ぐ歸つて來るといつた祖母に對しても、「此方にも今、少し片附かない事があるのだから……」といつてゐた母に對しても、その空々しさ、その行爲の趣味の惡さ、其幼稚さなどを思ふと堪へ難い不快と惡意とを持たずにはゐられなかつた。

實際これらの人々には私は變則な發育をとげた子供以上には見えなかつたかも知れない。皆は私共のいふ事がいつまでたつても價値のない空想であつてそれが實際の人生では仕舞迄何の役にも立たぬものと決め込まずにはゐられなかつたであらう。私共は絶えず、何かしら自惚強い事を云はずにはゐられなかつた。然し仕事に對するその烈しい野心と、實際持ち得る自信とには何處か不均衡な所のあるのは自分でも感じてゐたのである。いひかへれば其時の現在に於ては多少なり自信を持ち得るやうな仕事が出來なかつた、その事が何となく私共の自惚をいふのに幅のない聲きり出させなかつたのである。如何にも甲ン走つた聲であつた。而して此キイ〳〵聲でいふ自惚は實際その仲間以外には通用しなかつた。私が痴情に狂つた猪武者であるやうに仲間以外の人には私共は皆何かに狂つてゐる猪武者に過ぎなかつたであらう。然し其處で吾々も止つてはゐられなかつた。而して其止ることなき若者についてそれから先を考へようと全くしなかつたのが、それ等の人々が私共との關係で彼等自身を或る意味で不幸にした一つの原因なのだと思ふ。これは然し殆ど避けられない事とも思ふ。

十三

私は部屋へ歸つても迚も寢られさうにもなかつた。雨戸を閉めた緣側を往き來して考へた。どう考へても、腹立たしくてならなかつた。自家の者のやり方が餘りに此方を輕蔑したやり方であると思ふ。

私はボンボリをつけて、其時はもう一時近かつた、臺所口を叩いて、女中に其處を開けさせて、父の寢室に行つた。

父は中々返事をしなかつた。私は少しお話したい事があるから起きて頂きたいといつたが、父は承知しなかつた。

「そんなら明日の朝聞いて頂きます」

「明日は早く外出するから會つてゐられない」

「どうしてもそんなに早くお出かけにならなければならないんですか？」

「左うさ今は會社で一番忙しい時だもの」

父は或る鐵道會社の事務取締といふ役をしてゐた。其時は丁度其鐵道が官有になるについて、四五日で引渡しをするといふ時だつた。

「左うですか。そんなら聞いて頂かなくてよござんす」

私はハッキリ强い調子でかういふと起ち上つて來た。それが自分にすら、何をするか知れませんよとでも云つてるやうに聽えた。

部屋へ歸ると私は只々興奮した。

私は部屋の中を暫く歩き廻つてゐた。何か物でも叩きつけてやりたいやうな氣がしてならなかつた。私は机の上から埃及煙草の百本入りの空箱を取るとクリッケットの球でも投げるやう手を延ばしたまゝ力まかせに疊へ叩きつけて見た。角が當つた所が三角に疊の藺を切つて、函はイビツになつてハズンだ。中からは小さな紙切れが五六枚飛び散つた。二三年前洋畫家のF氏の所でデザインの參考になるべき小さな物をハッたスクラップブックを見て、左う云ふ事に或る程度の興味を持つ私は其時から氣をつけて外國の雜誌や廣告などから左ういふ物をキリヌイてはためてゐた。その内の小さい部を百枚バカリその小函に入れて置いたのであつた。

私は此時程の急烈な怒りと云ふものを殆ど經驗した事がなかつた。然しこんなヤケらしい樣子も餘儀なくされてするのではない事を其時の現在に於て明かに知つてゐた。若し側に人がゐたら私はヴァニティーからもそんな事は出來ないと知つてゐた。それでも腹立しい心持には

何かそんな事がして見たかつた。それを努力して壓する必要もあるまい。こんな事が其時の現在で私の頭に浮んでゐた。

私は輕いブリツキの函の如何にも手答への無い物足らなさに戸棚を開けて九磅の鐵亞鈴を出して、それを出來るだけの力で又叩きつけた。鐵亞鈴は斜めに一間餘りハズンで、部屋の隅の机に飛び乘つて更に障子に當つてガタ〳〵ガタと音をして机の裏へ落ちた。

私は戸棚の段にヒヂをつけて興奮から起る體の心の震へをおさへるやうにしてヂッとうつ伏しになつてゐた。ト、私の頭に不圖下に寢てゐる岩井の樣子が浮んで來た。鼻の低い顏色の惡い、然し肥つた、如何にも田舍者らしい新しく來た書生が、眞夜中寢てゐる直ぐ上の天井に今のエライ音を聞いて暗の中にムックリ起き上つた樣子を想ひ浮べて了ふと、私には堪へられない可笑しさがコミ上げて來て獨りクスリクスリ笑はずにはゐられなかつた。

(其後二年程して疊がへの時見たらカナリ厚い根太板が眞ン中から折れてゐた。其時も私は其晩の事を考へて獨り笑はずにはゐられなかつた。あれ程の怒りの中にもこんな止められない可笑しさを感じた事を私は面白い經驗だと思つた。又、「こんなヤケらしい樣子も仕まいと思へば直ぐよせる、然しそれを壓へたつて偉くもない」一方でこんな事を思ひながらしてゐる心の餘裕、――これを考へた時私は其時に鐵亞鈴が机の上のランプとは五寸と離れない所へ飛んで行つた、それを見ながらヒヤリとも何んとも仕なかつた事を想ひ出して、自分は矢張り平常の心持ではなかつたと思つた。――私は子供からランプには非常に用心深くシッケられて來て、下の書生がそれをつけ忘れて寢た場合など私は本氣になつてそれを怒つたものであつた)

暫くして私は巴里にゐる繪かきの友達への手紙の續きを書き始めた。

「今は夜の一時だ。

僕は今晩程の怒りを嘗て經驗した事がない。今、僕は獨り如何にも愚な亂れ方をした所だ、亂れまいと努力するのが面倒臭いからだ。今晩は迚も眠れない。起きてゐれば益々焦立つばかりだ。それで午前の手紙を書きつゞける事にした:::」

私は興奮から切れ〳〵な文章で書いた。

――これでも僕は怒つては惡いか――こんな句が所々にある。

レターペーパーの裏表に九枚書いた。仕舞に、

「父は僕を廢嫡するとも此事は許せぬと云ふさうだ。

祖母は廢嫡は家のカキンである。これに比すれば地位の違つた女でも入れる方がよいと云ふさうだ。

そんな事はどうでもよい。兎も角僕はこんな人達とは共に暮らせない。

僕が孤獨で平氣でゐられる人間でない事は君もよく知つてゐよう。僕には君と重見と千代とがゐる、實を云ふと、もう一人祖母がゐると加へたいのだ。

もう書けない」

書き終つて私は傍の懷中時計を見て又、「明治四十年八月三十日午前三時半」と入れてペンを擱いた。

(大正元年八月)

或る男、其姉の死

一

或る男と云ふのは私の腹異ひの兄です。直ぐ上の兄ですが、年は十程違ひました。此兄は私が十八の暮れに自家を出て、それなり行方不明になつたのです。

然しそれから五年して信州の或る寒村に居た其上の姉の臨終の床で私は再び此兄に會ひました。私は五年目に見た兄の變化に驚きました。どうすればかうも變つたらうと驚きました。

兄は三日其處に私共と一緒に居ました。而して葬式が濟むと直ぐ元來た廣い高原を越えて一人何處かへ行つて了ひました。其時から今に丁度七年になりますが、誰も其消息を聞いた者はありません。「もう死んだかも知れない」彼を知つてゐる者がよくから云ひます。然し私は屹度兄は死んでゐないと信ずるのです。私には何故かさう信ぜられるのです。

兄が姉の死の床に出て來たのは全く不意だつたのです。誰一人その居る所を知つた者はなかつたのですから、人の知らせで來たのでない事は明かだつたのです。兄は其時何にも云ひませんでしたから、はつきりした事は知れません。然し兄が偶然其近くに來て居て、それを知つて來たとは思はれません。若し想像が許されるなら、丁度ベツレヘムの星に導かれた東方の學者たちのやうに何百里をへだてた所から兄は何かに導かれて、トボ／＼と其處へやつて來たのではないかと思はれるのです。その樣に、左うした兄は何時か又、何かの場合に不意に私共の前に現れて來ないとはかぎらない氣がされるのです。私は屹度來ると思つて居ます。私共には去年米壽の祝事をした祖母が未だ生きて居るのです。此祖母は姉よりも私よりも、寧ろ段をつけて、此兄を愛して居ました。幼少からそれに慣らされて居た私は別に不服にも感じませんでしたが、姉などは時々それをこぼして居た位です。

今は祖母ももう兄の事は決して口には出しません。私や私の生母へ對する氣兼もあると思ひます。然し兄をどうしても忘れられずにゐる樣子は他眼にも氣の毒に思はれる事があります。祖母はいつか（それはもう十年程も前になりますが）「私も、もう芳行に會ひたいとは思はない」と云つた事があります。これは祖母として僞言を言つて居るのではなかつたでせう。が、それとは全く別に兄が何時か必ず自分を見に來るに違ひないといふ信念は祖母にあると思ひます。私もそれは信じます。私は今度兄が私共の前に現れるのは屹度祖母の死ぬ時だらうと云ふ氣がして居ます。それが假令頓死であらうと、變死であらうと、其前に兄は必ず何百里へだてた所からでも歸つて來るに違ひないのです。祖母と兄との關係では妙にかう云ふ事が信じられるのです。

七年前の秋でした。私は姉の良人から、姉は夏前から寝てゐるが、多分もう助かるまいと思ふから知らせると云ふ手紙を突然に受取りました。然し其時、其頃未だ生きて居た私の父は「なに、誰れも行く必要はない」と云ひました。一體父は自分の云つた事に捕はれる人間で、非常に氣まづい關係になつた姉の良人に對して、「もう貴樣の所とは絶對に交際をしな

いから一と云つた事があるからなのです。然し私の母が承知しませんでした。勿論父も一ト通り自分さへ立てば實は行つて貰ひたかつたのでせう。山國の事で滋養品等もあるまいと云つて、母が色々左う云ふ品物を買求めて呉れた、それを持つて直ぐ私は上野から汽車でたつ事になりました。

二

關東の平野は未だ秋のとり入れで田の面に人々の賑はつて居る時でしたが、信州の高原へ來ると、それはもう、遠い山の頂に薄く雪などの見られる初冬の景色になつて居ました。私はその或る停車場を降りると、尚十里餘り奥へ入つて行かねばならなかつたのです。其晩は迚も行けないと云ふのですが、一足でも近く行つて居たい氣持から、私は餘り喜ばない車夫に金を餘計にやつて漸くそれから五里ある或る村まで其晩の中に行く事にしたのです。暗い夜でした。急流に沿うて新しく開かれた爪先上りの路を私は襟を立てた外套の中で寒さに身を堅くしながら乘つて行きました。私には自然、不幸だつた姉の生涯が考へられます。

姉は美しい女でした。二十歳の時に今の良人にかたづいたのです。姉の良人は其頃父の居た會社の下役で、所謂腕利きの部に入れられる若者でした。父も大變信用して居ました。殊に、その後、兄が何と云ふ定職もなしにぶら〳〵して居るにつけ、父は一層姉の良人を頼りにしたのです。尤も年も兄とは大分異つて居ましたし、父は自家の中の事まで、反つて兄には何一つ相談せず、姉の良人に何かと相談してゐたさうです。祖母はそれを常に不愉快に思つてゐました。

兄が自家を出た時には父は六十を越してゐました。絶えず不愉快を感じて居たもの〻、左う云ふ氣不味い別れ方をして見ると矢張り年だけに父は隨分淋しい氣持になつたらしいのです。そんな事から尚父は姉の良人を頼るやうになつて行つたのです。

所が二年程して、其頃父はもう會社の方を退いて自分の後に姉の良人を重役に直して置いたのですが、其位置を利用して姉の良人が、大膽な相場に手を出し、失敗をして、其穴を會社の金で融通して置いた、それが知れた時には父は實に大變な怒り方をしました。自分の信頼を裏切られた事も勿論ですが、當面の責任が直樣父へか〻つて來るからでもあつたのです。然しそれは自家の財産を空らにしても埋めきる事の出來ない穴でした。結局父は自家の財産の三分の一を投げ出して、其責任の一部を果して事済みとなりましたが、其時父は其姉の良人は勿論、姉までも絶對に自家へは足ぶみはさせないと斷言したのです。祖母や母や私などが、其良人は兎も角として、姉まで左うされる理由はないと云つたのですが、父は氣違ひのやうな大きな聲を出して、それを怒りました。

「貴樣達は皆な乞食になつてもい〻氣なら、さうしろ」などと云ひます。父は姉を出入りさせれば乾度仕舞には其良人も出入りするやうになる、少くも自分の死んだ後には必ず左うなる、と云ふのです。

「若し時子が別れて歸つて來るなら俺も入れないとは云はない」こんな事も云ふのです。然し姉にはもう十になる娘と七つになる男の子がありました。それでなくとも、何處か昔氣質の女でしたから、實は左う良人から愛されても居なかつたのですが、別れて歸る事などは思ひもよらぬ事だつたのです。父とても姉が別れて歸る事を望んで居たわけでなく、勢ひからそんな言葉が口へ出たのが、本統だと思ひます。

姉は暫くは根氣よく、祖母や母などから、詫

を入れて居ましたが、逆も聽かれないと知ると、きつぱり、では良人につくより仕方がない、と云つて、それから間もなく良人の故郷の其寒村へ一緒に行つて了つたのです。

三

兄の家出を父のかたくな故と決めてゐる祖母には、父が信用しきつてゐた姉の良人の不始末に對して、「それ見た事か」と、いふやうな復仇的な氣があるのが私共にも解りました。實際兄も若し父がもう少し愛情を持ち、兄の仕たい仕事に寛大であり得たら、あれ程にならずに濟んだらうと私にも考へられるのです。然しそれが直接に兄をあゝまでしたのではなかつたのです。其事は兄も明らかにいつてゐました。自分の運命が父の氣持だけで支配されてゐると考へる事が一つは愉快でもなかつたのでせう。兎も角兄は現在の自身がイヤで〱ならなくなつたのでした。勿論兄は父に對して非常に不快を感じて居たのです。然しそれ以上自分がイヤで〱堪らなくなつたのです。「他人にどんなにイヤがられたつて、それだけなら生きて行けない事はないが、自分で自分がイヤになるともう死ぬより仕方がない」兄は充血した如何にも力のない眼つきをして私にこんな事をいつた事がありました。丁度それは自家を出る一ト月ばかり前の事でしたが、其頃のオド〱とした全で自信のない兄の樣子を見ると、私でも「これは全く堪らなさうだ」といふ氣がしたのです。精しくは後で云ひますが、だから、祖母が、父との關係にだけ兄の家出を歸してゐるのは誤解なのです。私はそれをいつてやりたかつたのですが、腹異ひといふ事と兄の出た後、私が自家の財産をつぐ事になつた事が矢張りこだはりになつて、何んとなく云ひにくい氣がしたのです。

もう姉からは何んにも云つて來なくなりました。私や母の出した年始狀にさへ返事を寄越しませんでした。十か十一の時に、實母を失つた姉はいゝ人ではあつたが矢張り何處かひねくれた性質を持つてゐたのです。祖母の愛は専ら兄の方に傾いてゐましたし、誰れからも本統に愛されてゐなかつた姉は妙に邪推深い所もあつたのです。只兄とだけはよく喧嘩もしましたが、心から親しむ事もあつたやうです。で、表面は仕舞まで、私の母とはよかつたのですが、兄の家出とか、自分の出入をとめられた事などから、それは全く誤解で、純粹に父の意志から出た事なのですが、その裏で母が私だけに此家をつがせたいといふ考へから何かしてゐるのではないかと云ふやうな女らしい邪推もして居るらしかつたのです。實子の私がいふのは可笑しいやうですが、それは確かに邪推です。それは母でも人間として超絶出來ない感情から起る事はあたりまへです。然しそれに支配されて、父をそゝのかしたといふやうな事は勿論、自身私に意識の表面にそれを浮ばして、そんな事を思つた事も斷じてないと私は信じるのです。

一家には急に暗い影がさして來たやうな氣がしました。父は相不變頑固でしたが、一方弱々しい氣持になるのが隱しきれない樣子が私共にもいた〱しく感ぜられました。私は「これはならん」といふ氣になつたのです。然しどうする事も出來ません。物の傾いて行く時にそれを支へようとする力程に無益で、しかも苦しいものはありません。それ位なら、それを倒れるまゝに任して、更に新らしいものを築き上げるに如くはないと思つたのです。私は其頃未だ法科大學へ通つてゐたのですが、自分から結婚したいといひだしたのです。母は未だ早いと叱りましたが、反つて父が贊成して、間もなく父の

選擇で、私もそれを承知して今の妻を貰つたのです。兄の家出も結婚の問題がこぢれたのが起りだつたから父もこりてゐたのでした。私の妻は氣樂な子供のやうな奴です。此奴が入つて來て暗い家も幾らか明るくなりました。が、翌年女の子が生れると自家中の者が總がゝりでする努力の何十倍かの力で今度はそいつが直ぐに自家中を明るくして了ひました。

四

然し明るい中にも兄の事を思ひ姉の事を思ふ度、太陽の前を通る雲が大地に影を曳くやうに、それが私共の心を暗くして過ぎるのでした。

然しこれもあきらめるより仕方のない事でした。私はよく母に云ひました。「此運命が又變はる時もないとは云へません。其時それを逃がさないだけの心用意をして居るより仕方ありません」と。すると母は、本統に、と答へるのです。「お父さんでも、兄さんでも、姉さんでも皆惡い方ではないのだからネ」

實際左うです。父も姉も兄も決して惡い人間ではありません。三人共に寧ろ變に正直なのです。同時に頑固なのです。只それだけです。

私は三人の性格を思ふと、流石に血すぢだと思ひます。よくも共通な物を持つて居るものだと云ふ事を考へさせられます。只異ふ所は時代と境遇とです。父にしろ、兄にしろ、如何にも一本道で我儘ですが、父の方は自身のする事を殆ど疑はずにやつて行きます、所が兄の方は直ぐ迷ひ出すのです。一つは父の一本道は、主に家庭での話ですが、通らうと思へば通れる筈のものですが、兄のそれは大概通れないやうになつてゐたからです。それは父が左うして置くのです。而して、此意識は最初から兄を迷はせます。然し幾ら迷つても中々兄には他の道は選べない方でした。それが彼の性格でした。通れないとなると、益々それが唯一の道に思はれて來るらしいのです。兄は散々獨で迷ひます。その擧句思ひ切つて父に交渉して行くので、その頃は兄もいゝ加減氣分の方から、まゐつてゐて、最初から多少喧嘩腰でない場合はないと云つていゝ位でした。これは馬鹿氣た事に違ひなかつたのです。然し兄は父と話すのに、假令それがどんな一寸した雜談にしろ、殆ど無心では何事も云へない方でした。

私の覺えてゐる最初の衝突は、兄が夏の休みに友達と奈良京都の旅行をするからと云つて父に旅費を貰はうとした時でした。父は頭から怒り出しました。

「貴樣は誰れに斷つてそんな約束をした」と云ひました。兄は默つてゐました。

「順序が異ふ。俺の許しを受けた上で約束をするなら解つて居るが、最初に約束をして、それから俺の許しを受けに來る……」

兄は少し青い顏をして、ジロ〱と父の顏を見ながら未だ默つて居ました。此不言の反抗が一層父を焦立たしました。

「直ぐ斷われ。電話でも何んでもかけて斷わつて了へ。怪しからん。俺は順序の違つた事は大嫌ひだ」

「ぢやあ、お父さんは私が正しく順序を踏めば許して下さいましたか？」

「それは解からん。許すかも知れないし、許さないかも知れない」

「此場合はどうなんです」

「だから解からんと云つてるぢやないか」

「いゝえ、僕には解かつて居ます。お父さんは屹度お許しになりません」

父は變な苦笑をしました。而して、

「どうして、それが貴樣に解かる」と云ひました。

「それは解かつて居ます」兄の唇はかすかに

震へて居ました。
「結局同じなんです。僕から云へば順序はないのです」
「それだけ解かつて居て、貴樣は何故そんな約束をしたんだ」
「行きたいからです、どんな場合だつて、これまでお父さんが氣持よく僕の申し出しを通して下さつた事がありますか」
「よろしい」父も少し亢奮して云ひました、「それだけ解かつて居たら貴樣は何も申し出しをしないがいゝんだ」

五

父は續けました。
「全體俺は貴樣のしようと云ふ仕事が氣に入らないのだ。然し貴樣がやるといふ以上それに反對はしないが、例へば今度の旅行では奈良京都邊の寺や美術品を見て歩きたいとか、そんな暇人の年寄りの道樂旅のやうなものには一文の金でも出してやるのがいやなのだ。第一そんな事を親がゝりの身で平氣で云ひ出すから氣に入らないのだ。貴樣がちやんと獨立した生活が出來るやうになつてからなら、何をしようと差支へない。俺は不贊成は云はん。只俺に食はして貰つて居る間は左う云ふ勝手な事は許さんから。今後とても左うだ。何度左う云ふ事を云つて來ても許さんから――」
「然し僕は行きます」兄は亢奮しながら父の言葉をさへぎりました。
「勝手にしろ！」父もかつとして兄を殘し、庭へ出て行きました。
兄は間もなく古本屋を呼んで來て、殆どあるだけの本を賣つて了ひました。而して其晩友達と一緒に旅へ出かけて行きました。
夜おそく父は歸つて來てそれを聽くとひどく怒りました。兄を辯護して何か口答へをしたと云ふので母は父から火箸を投げつけられました。
かう云ふ出來事を擧げれば恐らくきりがありません。兎も角父にとつて兄の態度はかなり不快なものだつたのは事實です。兄の態度は常に挑戰的なのです。それは不思議な位です。兄には弱い〳〵性質があるのです。だから、他人との氣まづい關係には人一倍臆病なのですが、何故か父に對してだけ常に挑戰的で、强情なのです。これは明らかに弱い所から來てゐるので、自己防衞の路として、兄には實際これより仕方なかつたらしいのです。何故なら若し兄が父に對し、讓歩し出したら、それはきりのない事だつたかも知れません。父の註文には恐らく留度がなかつたに違ひありません。第一、兄は藝術の仕事を斷念しなければなりません。第二に、若し愛する人が出來た場合、九分九厘其人と結婚する事は望めない、と左う兄は信じて居るのです。これは私に云はせれば幾らか恐迫觀念に近いものです。所で事實は左うなりました。然し愛する人も何もない内から兄は其場合におびやかされて居たのは滑稽と云へば滑稽です。尤も此恐迫觀念が兄自身に起りかける愛する氣持を未然に冷やし冷やしゝた事實はあつたやうです。人を戀ふれば必ず一家に一ト騷動起すと云ふ事が、兄には餘りに疑へない事だつたからです。兄は直ぐ挑戰的になる癖に其一ト騷動を甚く恐れて居るのです。彼は知らず知らずの間に戀は淡い芽の内につみ取つて了ふやうな事を繰返して來たのでした。
兄に結婚の話の起り出した時でした。父はかう云ひました。「先の家を先づ俺が選ぶ。其上で人を取る取らないは芳行の自由に任せる」父は自分が大變物の解かつた人間でもあるやうに得意氣にこれを云つたものです。實際父としては解かつた言葉でした。然しこれも遂に何の

役にも立ちませんでした。

六

兎も角父は並外れて我執の強い方でした。父はそれに少しも疑問を插挾みません。そこに一種の強みがあつたのです。父はよく自家の爲めと云ふ事を云ひます。然しそれは自家の財産の爲めで、その財産は父が自分の仕事として作り上げたものですから、云ひ換へれば意識して居たか居ないかは別として、矢張り父一個の我執の爲めと云つてそれは差支なかつたのです。尤も其財産をそつくりうけついで相當の仕事をしつゝある私がから云ふのは少し變に聽こえる事で、父が生きてゐたら怒るかも知れません。而して、「俺があの位にして貴樣達の爲めに財産を殘して置いてやらなかつたら、貴樣でも貴樣の子供達でも今どんな暮し方をしてゐるか知れたものではない」と云ふかも知れません。それは然うかも知れません。然し兄の場合を思ふと父の「貴樣達の爲め」ももう少し反省が要ります。矢張りそれは我執が主です。然し實際父は家族の爲めに働いてゐると思つてゐたかも知れません。例へばから云ふ場合があります。小さい子供を何人か殘して死んだ親類の後見などをする場合、父は隨分思ひ切つて其遺族に切りつめた生活をさせるのです。先づ生活費の安い田舍へ皆やつて了ひます。而して、如何なる場合にもあてがひ扶持以外金を出してやりません。泣きつかれて、母などがよく間に立つて口をきからとしますが父は決してそれを諾きません。官には針を入れず、私に車馬を通ずとかいふ、左う云ふ事は父には出來ません。一本調子です。而して十何年か經つた時に其家にはかなり財産が出來る。それが父には云ひやうのない滿足なのです。誇りでもあるのです。所が、然うして貰つた其遺族は生活の安定を得た事は感謝しながらも、十何年の間、あるものをも使ふ事が出來ず、苦しんで來た事を考へ、而して、其間に苦しいまゝに死んで行つた家族の事を憶ふ時、感謝ばかりもして居られない氣持になるのです。

父のは結局我執です。或は性格です。父はそれを自分の主義としてゐますが、實は性格なのです。全く父のする事は主義として見る時には時々矛盾がありますが、性格として見る時は反つてよく統一のある事を感じます。而してその性格はかなり野生のまゝでした。此點は私の祖母と似てゐます。父の教養は、所謂處世法までは其手が及んで居ましたが、性格までは及ばなかつたと云へます。變に冷酷かと思ふと、妙に涙もろい所があります。又金にはかなり執着しながら、貪婪といふ方にはなりませんでした。

こんな事がありました。私の妹が結婚して間もなく知人の家にも結婚があつて、其處へ祝物を持たしてやらねばならぬ場合、父は母に三越から松魚節の切手を取るやうに云つたさうです。母は何十枚か來たばかりのがあるので、それでいゝだらうと云ふと、父は「それでは氣持が惡い」と云つたといふのです。一種の潔癖です。然しそれは氣持のいゝ事に私は思ひます。

七

父はかなり感傷的でない方でしたが、兄は又かなり感傷的な方でした。一つは九つで實母を失つた事が何時までも兄の感傷にからまりついてゐたからでもあつたやうです。兄の實母の事は殆ど知りません。其母が若し生きて居たら、兄とはどう云ふ關係を作つたか、又父と兄との仲をどう云ふ關係に作り上げたか、それは解りません。然し殆ど盲目的に兄を愛してゐる

た祖母だけの愛情は其母と雖も迚も持つ事は出來なかつたに違ひありません。兄自身その事は云つてゐました。一お母さんが生きてゐた所で、お祖母さんの三分の一も愛し合へたかどうかわからない一と。が、それにしろ、兄には何か祖母だけでは滿たされない氣持がありました。而してそれを兄は矢張り亡き母の幻影に求めて居たのです。妙な事です。祖母の愛には飽き滿ちながら、兄は尙も愛情を求めてゐたのです。結局兄はそれを父にまで求めてゐたのが本統だつたと思ひます、然し兄はそれをハッキリとは意識してゐなかつたやうです。が、兎も角それは困難な事でした。或は亡き母の幻影に求める以上に困難だつたかも知れません。然し又、左う云ひ切るにしては、何んといつても二人は肉親です。枯れ切つたと見捨てた木からもごよう芽の出る例はある事です。どう云ふ春の光に枯れ切つたと思ふ父の兄に對する感情からも新しい愛の芽がふかないとはかぎらなかつたのです。自身胸の奥そこにその芽を感じて居た兄は如何にその春の日を密に待ち望んで居た事でせう。或時何かの場合兄はそれに近い事を私にもらした事がありました。が、遂に其時は來ませんでした。父は死にました。

　最初兄が何かにつけ焦々と無暗に父へ突掛つて行つた、その氣持は確に父に愛情を求めて得られない、其何かしら、やりきれない氣分がそんな變な現れ方をしたに違ひなかつたのです。其頃の兄はよく泣きました。泣きながら亂暴な事を云ひます。父の方も度重なるに從つて兄との交渉を避けるやうになりました。話が或る所まで來ると父は一これから先を云へば喧嘩になるばかりだ。俺は何も云はん一から云つて不愉快で堪らないと云ふ顏をします。かういふ時、兄の方は又變に執拗くなるのです。

一もう、あつちへ行け。あつちへ行け一父は犬でも追ふやうに云ひます。兄は起ちません。すると、父は自分から起つて庭へ出て行きます。兄は尙それへついて行く事さへあります。父はたうとう外出して了ひます。

　から云ふ時兄は直ぐ自分の部屋へ入つて暫く泣くのがきまりでした。

　若し兄が仕舞ひに漸く或る程度に達し得た、それだけの冷淡さを其頃から持つ事が出來たら二人の關係は多分あゝまではならずに濟んだらうと思はれます。冷淡といはずとも兄があれ程に父からの愛をさもしくも求めなかつたら未だよかつたのです。しかも、左ういふ自身の態度が、愛を求める氣持の變態的な現れだと云ふ事は兄には意識出來なかつたのです。まして、父がそれを左う解して、それに應ずる態度をとれなかつたのは當然な事でした。只無暗と楯突いて來る、何かしら氣違じみた不遜な若者を父がどうする事も出來なかつたのは實際無理ならぬ事と思ひます。

八

　兄が如何に父からの愛情の印を見たがつてゐたかは次の事でも明かだと思ひます。

　兄が本統に家を出て了つた、その二年程前の事でした。兄は自分の短篇小説を集めて、自費出版をしようとした事がありました。兄は父から五百圓だけその爲に出して貰ふ事にしました。それを父が承知した事を兄も祖母も大變喜んで居ました。然し一方兄にはなるべくなら父の世話にならずに本屋だけからそれを出したい氣がありました。それにもう少しいゝ物が書けてから一冊にしたいと云ふ氣もありました。それで何と云ふ事なし、半年程延び〳〵になつて居ました。然し矢張、今度は本屋と一緒になつて出す事にした時、兄は改めて又其事を父に

頼みに行きました。丁度父が庭で盆栽の手入れをして居る時で、私もそれを手傳つて居る時でした。

「此前、もうよしたと云つて居たぢやあないか」と父は直ぐ持前への嶮しい眼つきをして云ひました。

「よし切りによしたのではありません。一ト先中止した意味だつたのです。今度は本屋も少し金を出す筈で、それと一緒にして出すつもりです」

「全體貴樣は小說なぞを書いて居て將來どうする心算だ」

兄はむつとして默つて了ひました。

「第一小說家なんて、どんな者になるんだ」と父は輕蔑を示した調子で續けました。

「馬琴でも小說家です。然しあんなのは極く下らない小說家です。もつと本統の小說家になるのです」兄は[illegible]から早口に云ひました。此場合突然馬琴が出て來たのは父が馬琴好きで、よく八犬傳その他を讀んでゐる事を知つて居たからです。

「左樣な事を……」と父は肯定しました。

二人は少時默つて居ました。すると不意に、

「どうだ。貴樣はこれから自活をして見ては……」と父が云ひ出しました。

兄は一寸胸を叩かれたやうに、父の顏を見て居ましたが、直ぐ、

「それなら自活しませう」と答へました。實際自活といふ事は兄にとつて急所だつたのです。

二三問答の末、

「貴樣は一時の感情で、直ぐ然う云ふ事を云ふ……」云ひ出した父の方が却つてこんな事を云ひました。それ程に兄に自活の能力のない事は父にも明かだつたのです。

「一時の感情ではありません」

「左うか。左うでなければいゝが……本統にやつて見るか」

「えゝ」

「それなら、よからう。金は前に約束したから五百圓だけはやる」かう父は云ひました。

後で祖母は五百圓は本を出す爲めの金だから、それだけで出て行けと云ふのは空手で出て行けといふのも同じ事だと云つて腹を立てたさうです。然し兄は出版には百圓出しただけで、あとは本屋に出さす事にしたので、暫くは食ふに困る事はなかつたのです。

翌日は朝から甚い吹き降りでした。兄はその中を貸間探しをして歩きました。而して京橋の或る宿屋に小さい靜かな部屋を見つけて、日が暮れてから人力車何臺かに荷を積んで、雨の中を引移つて行きました。

母は兎も角父の留守に暇乞ひもせずに行くのはよくないから、明朝にするやうと、切りに止めましたが、兄は翌日父には會ひに來るからと云つて、諾かずに出て行きました。私は玄關で兄を送りましたが、變な感動からたうとう泣いて了ひました。

其晩おそく父が歸つて來て、母からそれを聽くと、急に淋しい顏をして、

「あゝ、たうとう出て行つたか」と云ひました。

而して、「どうしようゝ　どうしようゝ」と繰返して母に云つて居ました。これを見た時、私は此軟らかい氣持の父に對して、心から愛情を感じました。而して兄のかたくなに對し突然腹立たしさの湧いて來るのを感じました。

九

兄はその宿屋に一ト月半程居ました。然し仕事は出來ないやうでした。一寸した動搖でも兄は氣分の方で割りにこたへる方でした。まして、生れて二週間以上自家を離れた事のない兄が左う云ふ生活で調子がとれるまでは一寸暇

のとれるのは無理ありません。兄は淋しさから誰かしら友達を絶えず呼んで居ました。三日も四日も泊らせられて居た友達もありました。然しかう云ふ生活では第一に金が續きません。兄は其一ト月半の間に父から貰つた半分程を使ひはたして居ました。兄は結局生活費の安い田舍へ行つて一人靜かに仕事をする事に決めました。瀬戸海にある小豆島へ行く事にしました。

　而して其暇乞ひに來た時でした。

　丁度皆茶の間でおやつの茶を飲んで居る時でした。兄は誰にともなく、――然し主に母の方を向いて、小豆島の寒霞溪の話などを氣輕らしく努力しながら話して居ました。一體兄は雜談は巧な方でしたが、若し其處に父が居ると、妙にこだはつて本當に氣輕くは何事も云へなくなるのが癖でした。

「幾月位行つて居るつもりだ」父は不愛想な調子で訊きました。

「半年か一年位行つて居るつもりです」兄も負けずに不愛想な調子で答へました。

　荷造りも出來てゐるし、汽車も夜の九時何分かだと云ふので、兄は其日珍らしく祖母の部屋にゆつくりと腰を据ゑて居ました。

　父はずつと書齋へ入つたきり出て來ませんでしたが、夕方になると出て來て、宴會へでも行くのか紋つきなどを着込んで、體の支度の出來る間、少し落ち着かない樣子で茶の間だの玄關の方だのへ往つたり來たりして居ました。父は明かに兄が出て來て挨拶するのを待つ風でした。然し兄は何故か知らん顏をして出て來ません。

　勿論兄は知つてるのです。が、變に意固地なのです。私は氣が氣でありませんでした。私は父に同情しました　而して、兄が何故そんなにも無益に挑戰的になるかを思ふと氣が滅入つて來ました。不愉快になりました。

　父はヂリ／＼して居ます。「こんな足袋は駄目だ」とか「ハンケチがよごれてゐる」とか一度はいたり袂へ入れたりしたのを其處へ投出して母に當り散らしてゐました。若し兄が仕舞まで出て來なかつたら、これから永い間顏を合はす事のない父にどんな不快な印象を殘す事かと思ふと、ハラ／＼しました。

　私以上に母は又ハラ／＼してゐるのでした。然し母は「一寸御挨拶においでなさい」と兄には云へない方でした。其内俥の支度が出來て父は玄關へ出て行きました。母はどうしようかとマゴ／＼して居ました。然し不意にちよいと……」と云つて兄のゐる方へ向け、私の肩を突きました。左ういひ捨てゝ母は父の後を追つて行きました。私は直ぐ祖母の部屋へ行きました。而して

「お父さんお出かけ……一寸出ませんか」と兄に云ひました。

「うん」かう云つて、兄は不承々々らしく立ちあがりました。そして、いやに落ちついた足どりで廊下を歩いて行きます。然し其時私は感じました。兄の左う云ふ態度は皆うそだと云ふ事を。兄は實は前から出て行きたくて心でモジモジして居たに違ひなかつたのです。かうして仕舞まで出て行かない事が、どんなに父を不快にし、且自身どんなに不快になり、後まで悔い苦しむ種になるかといふ事を總て意識しつゝ、ぢいつとしてゐたに違ひなかつたのです。而してそんなにも思ひながら兄はどうしても自分から出て行く事は出來なかつたのです。永い／＼父との不自然な關係が、兄の性情をこんなにも歪ましたかと思ふと氣の毒でもあります。他の事にはかなり素直になれる性質を持ちながら、父との事だけには不思議な程に兄は意固地になるのです。

玄關では父が丁度俥に乘つた所でした。父は兄を見ても相不變無愛想な顏をして居ました。然し車夫が梶棒を擧げると、父は突然兄の方を向いて、少し低い聲で、

「なるべく早く歸つて來い」と云ひました。

兄は一寸驚いたやうな顏をしました。而して父の顏をぢつと見つめました。父は幾分眼を落としましたが、其儘俥が廻ると一緒に何氣なく顏を外らして了ひました。

兄は直ぐ又祖母の部屋へ引きかへして行きましたが、少時して私が其處へ行くと、兄は默つて泣いて居ました。

十

兄は北の方の或る小さい町で生れました。父が其處に銀行員として行つてゐる時に生れたのです。

兄の前にもう一人兄があつて、父は其兄を非常に愛してゐたさうです。賢い美しい兒だつたさうです。然しそれは三つの秋に死んで了ひました。而して翌年の二月兄が生れました。寒い地方の事で、若し入口の戸が凍りついて産婆の迎ひに行く事が出來ないやうでは困ると云ふので、其頃矢張り其町にゐた祖母の弟が産の日が近づくと毎晩大きな茶釜に湯をたぎらせて置いたといふやうな話を聽いた事があります。

兄が兩親と一緒に東京へ出て來たのは三つの時でした。上の兄の死を若い夫婦の過失かなぞのやうに考へてゐた祖母は今度こそと云ふ心がまへでそれを待つてゐました。而して上京と共に兄は父母の手から祖父母の手に渡されたのです。姉はその前から既に祖父母の手にありましたし、若かつた父は結句それを安氣な事に思つたでせう。

暫くして父は九州の方へ行く事になりました。而して二年して再び歸つて來ましたが、惰性的に其時も姉や兄は兩親の手にはもどりませんでした。

兄の實母はそれから二年程して死にました。而して同じ年の暮れに私の母が來たのでした。而して間もなく父は又地方へ出ねばならぬ身となりました。私は福岡で生れました。

俗に育ての親といひます。父は生みの親ではありましたが、遂に育ての親ではなかつたわけです。何よりも此事が後年の呪の種となつたやうです。

かう云ふ種を蒔いたのは然し誰の責任か解りません。然し父はそれを祖父母に歸して居ました。

父と兄とが本統に衝突らしい衝突をしたのはW川沿岸の鑛毒事件が急に八釜しくなつた時に、演說會その他で刺戟された兄が鑛毒地を見舞旁視察に行くと云ひ出した時だと云ふ事です。其頃私は八つの筈でしたが、自身の記憶としては何も殘つてゐませんが、母の話によると、此衝突はかなり烈しかつたやうです。

何しろ兄は未だ中學生でしたし、總てが一層一本調子だつたに違ひありません。所で父は「自家の者が被害民に同情して居ると云ふ事がFの方に知れたら、第一俺が非常に迷惑する」と云つたさうです。「貴樣は學生だ。そんな事は學生のかれこれ云ふ事ぢやあない」と云つたさうです。「兎も角Fは明治の偉人の一人として俺は尊敬して居る」と云つたさうです。すると兄は大きな聲で「あれは惡人です」と云つたさうです。

結局押問答で終つたのですが、兄は亢奮から泣きながら、仕舞まで鑛毒被害地へ行くと云つて我を張つて居たさうです。

然し兄はたうとう鑛毒被害地へは行かずに了ひました。その代り祖母や母などが先になつ

て古着だの菓子だの、包みを幾つか作つて被害地へ送つてやる事にしたさうです。

　此事はこれだけで濟みましたが、兄の父に對する謎を消して了つたと云ふ意味で、それは後まで悲しむべき結果を殘しました。何んといつても父は子にとつて或る謎です、幾ら輕蔑して居るつもりでも、其處に輕蔑しきれない或る謎が殘つて居るものです。所が父は若し知れたら俺が非常に迷惑すると云つて怒りました。兄には此の事がかなりこたへたやうです。後年「ノラ」の筋を私に聽かして呉れた時、兄は此事を云ひました。それから、「兎も角、今まで子供だつた奴が十七八になると何かしら精神的に眼ざめて行く時だからね。その氣持に餘りに無理解に學生は只學生でゐればいゝと云ふやうな事を云へば、云つた者の輕蔑されるのは仕方がないよ」とこんな事を云つて居ました。

十一

　鑛毒地の事で父と兄とが衝突した時に、祖父は毎時のやうに柱に背をもたせて坐つて居ましたが、初めから仕舞ひまで遂に一ト言も口をきかなかつたさうです。此事は一寸妙な氣をさせます。何故ならA銅山は元來祖父がFに勸めて一緒にやり出したのが初めだつたからです。

　祖父は若い頃二宮尊德の弟子として野州の今市に住んでゐましたから、Aが有望な銅山である事は其頃から知つて居たのです。所で明治になると祖父は福島縣の大參事と云ふ役をしてゐたので、若し何事もなければ其銅山をどうかしようと云ふ考へは持たなかつたに違ひないのですが、舊藩主の家が貧乏しきつて、どうにもならない時に再三頼まれ、祖父はたうとう自身の役を捨てゝ舊藩主の家の家扶となつた、而して其傾きつゝある家運を盛りかへすには到底一ト通りの事では六ケしい時に祖父は必要からA銅山を憶ひ浮べたのでした。

　丁度其頃FはFで、彼が其處の番頭だつた井筒屋と云ふ店(多分昔の札差しと云ふやうな店)がつぶれて、する事もなくぶら／＼して居た時で、或時雜談の末祖父が銅山の話をして、若し一緒にやる氣があれば、と云ふやうな事を云つた、それが初めだつたと云ふのです。

　Fはつぶれた店の番頭と云ふので山の名義は祖父になつてゐましたが、無論祖父は無一文ですから資本は藩主を說いて、其處から出さしたのです。

　山は當りました。すると其頃になつて、反つて舊藩主の家にもFの家にも金が出來ました。華族が山をする法はないといふやうな非難が舊藩士の間から起つて、祖父を排斥する運動が始まりました。

　祖父は若し自身が居ないとすると、或る危險もあると思ひました。其處で山は總てFの方に讓渡す事にしたのです。

　元々藩主の家の爲めにしてゐた事でしたから、Aがそれ程當つても、それとは全く無關係に祖父は貧乏しきつてゐました。父は其頃福澤諭吉の塾に入つてゐました。迚も家扶の月給では食へないので、祖母が味噌酒類の店を開いたり、素人下宿のやうな事をして漸く生活して行つたと云ふ事です。

　から云ふ事情をよく知つて居たFは山を總て彼の方へ讓り渡した時に禮として金を千圓呉れたと云ふのです。其頃の千圓は貧乏して居る家には大金だつたに違ひありません。それから多少自家の生活も樂になつて行つたと云ふ事です。

　所で、これだけを見れば祖父の仕た事が何か一種の收賄らしく見えるかも知れません。左もなければ、祖父がFの下風に立つたやうといはれる

かも知れません。然しそれが左う云ふ性質のものでない事は祖父を知つてゐれば無説明で容易に信じられる事なのです。一寸説明する代りにこれだけを書いて置きます。

所が、兄はかう云ふ消息に就いては何も知りませんでした。若し知つて居たら一層反撥的な感情を持つたかも知れません。而して父の言葉を一層不愉快に感じたかも知れません。が、兄がそれを知らなかつたのは却つて好都合でした。

然し又左う云ふ事情をよく知つて居る父が兄の行動に就いてFの方に氣兼ねをしたのは父としては至極尤もな事でした。

只、一種妙な感じのするのは、其間で最初から仕舞ひまで一ト言も口をきかなかつた祖父の氣持です。

それは想像で、はつきりした事はわかりません。然し兎も角、自身云ひ出した銅山の鑛毒がW川沿岸の農民を殆ど絶望的にして居ると云ふ事は祖父にとつて無關心で居られる事がらではなかつたに相違ありません、二宮尊徳と云ふ聖農家の弟子だつただけに祖父は假令自身と關係ない場合にしろ農民が苦しんでゐると云ふ事には冷淡で居られなかつたらうと思ひます。まして自身の云ひ出した仕事の結果が左う云ふ悲慘な事態を作つてゐると云ふ事は一種重苦しい、感じで心を苦しめて居たやう思はれます。所に突然、子と孫とが其問題で烈しい口論を始めました。祖父は默つてそれを聽いてゐるより仕方なかつたに違ひありません。

兄にとつてはそれは一本道の問題でした。同樣父にもそれは一本道から來た問題でした。然し祖父にはそれは二つも三つもの道から押し寄せて來た問題だつたと云ふ氣がします。

此時の祖父の氣持を想ふと、どうにもならない淋しさを感じます。人はどうかすると老年になつて思はぬ時に、かう云ふ淋しさを味はねばならぬものかも知れません。

十二

祖父は晩年になつて段々佛教に親んで行きました。殊に禪に。

「もう少し早くから知りたかつた」と祖父はよく云つてゐました。然し年にしては驚く程の根氣で勉强しました。年寄りの事で朝は大概二時か三時に眼を覺まします。それから夜明けまでは屹度枕元の行燈の光りで佛書を讀んでゐました。而して朝は朝で、必ず習字でした。空海の風信帖の實大の寫眞版を手本にして書いてゐました。

祖父は身體の大きい、風采の立派な老人でした。それから大變いゝ眼を持つてゐた事を憶ひ出します。それは靜かでゐて、力のこもつた眼でした。しかもそれが嘗て度強く光つた場合を見なかつた事も孫なる私にはいゝ感じを殘して居ます。

然し只一度、私は祖父の泣いたのを見た事があります。それは日露戰爭の黑溝臺の戰ひで親類の青年が戰死した、其報知が來た時でした祖父は豫ねてから、此眞面目ないゝ性質を持つた青年を愛してゐたのです。

「まあ、然し名譽な事だ」こんなお座なりを云ふ者もありましたが、祖父は、

「あいつを今死なしたのは惜しかつた」かう云ひました。涙がしきりに頬へ落ちて來ました。

後年私は其青年の家で、戰地から送り還して來た軍用行李にあつたと云ふ祖父の書を見ました。それは出征の暇乞ひに來た時に祖父が書いて贈つたのだと云ふ事です。

霸者民忻々如。王者民悠々如。

私は祖父が其青年の爲に此句を撰んだ事を面白く思ひました。部下をして忻々如たらしむる

な、悠々如たらしめよ、と云ふ注意は進んだ注意だと思ひました。而して其青年の性質をよく飲込んだ上の注意だと思ひました。家長としての祖父の態度が實にそれでした。家中には何んとなく悠々とした氣分がみなぎつてゐました。

私共は祖父に死なれて反つて段々祖父をなつかしむやうになりました。一つは新しい家長なる父が、性格的に變に家人をおびやかす方だつたからでもありませう。

積レ金以遺二子孫一、子孫未二必能守一。
積レ書以遺二子孫一、子孫未二必能讀一。
不レ如積二陰德於冥々之中一以爲二子孫長久之計一。

誰れの字でしたか、こんな句を書いた軸を祖父は常に自分の寢る座敷の床に掛けて置きました。宿屋の唐紙にでもありさうな至極在り來りな句です。然し祖父がそれを掛けて置いた氣持は私共には何んとなくシックリ來ます。在り來りの句程反つて、それを使ふ人によつてはシックリ來るものです。一體警句は誰れが云つても相當に人を動かすものです。然し在り來りな句をそれが最初に云はれた時の新鮮さと充實さで云へる人は却々ありません。孫の贔屓眼もあるでせうが、祖父には時々左う云ふ事がありました。

―積金はお父さんだ。積書は俺だ―或時其軸を見ながら兄は笑つてゐました。それは其少し前に、シエクスピアの五十圓程するケムブリッヂ版を買ひたいと云つて父と口論をした、その事があるからでした。

然し此軸は祖父が死ぬと間もなく何處かへ見えなくなつて了ひました。父が、誰かにやつて了つたに違ひありません。

十三

兎も角かう云ふ祖父が丈夫な間は父と兄との間も左う大した事は起こらずに濟んで居ました。然し祖父が死ぬと直ぐそれは下らぬ事で破裂して了ひました。

祖父が八十で死んだ、其夏でした。兄は其年大學に入るので父の贔屓にしてゐる或る洋服屋で大學の制服を作らせました。其洋服屋は一體もの丶高い家でした。高い家で作らす事は兄も多少氣がひけて居たらしく羅紗でなくヘルと云ふ地で作らせました。尤も總ての大學生が羅紗服を着て居る中に厚ぼつたい、少し底色の變つたヘルの服を着ると云ふ事は幾らか洒落氣もあつたやうに察せられるのです。

所が案の定、兄が其家で作つた事を知ると父は頭ごなしに贅澤だと云つて怒り出しました。大學の制服は普通羅紗であるが、ヘルにしたから、高いと云つても普通の家で羅紗のを作るよりは安いのだと云ふやうな事をいつて居ました。父は兄の云ふ事を聽かずに怒つて居ます。兎ゝ角高い家で作らす其贅澤な精神が惡いのだと云ひました。所が實際父も少し不用意だつたのです、何故なら、父はその一ト月程前に小學校に通つて居る私の妹達の夏服を同じ家で作らして居るのです。兄の氣持には其事があつたに違ひありません。父は多少不愉快に思ふだらうが、それがあるから明ら樣には怒りもしまい、こんな風に兄は考へて居たらうと思ひます。所が頭から怒られました。兄も心で腹を立てました。然し妹達の事を口に出して云ふのは氣がひけて默つて居ました。默つてゐても不愉快は不愉快でしたらう。其處を父が餘りに無遠慮に、その事には全く知らん顏をしながら、「假縫ひが濟んでも何んでもかまはない。斷つて了へ」と云ふ風に怒つたから兄も仕舞ひにたうとう本統に腹を立てゝ了ひました。

兄は青い顏をして、ブル〳〵身を震はしなが

ら、身體で父に突掛かつて行くやうな樣子をしました。突掛からしては厄介だと思つたから、私は二人の間に入つて、無理に兄を兄の部屋に引張つて來て了ひました。

「惡意だ。全然惡意だ」兄は獨言のやうこんな事を云つて居ました。

此時の衝突などは中でも下らぬ衝突でした。兄の云ふやう、それは別に高い洋服ではなかつたのですが假りに地が羅紗で高かつたとしても其頃の事で二三圓、多くても四五圓の差だつたに違ひないのです。所が父はかう云ふ事から取締つて置かねば將來が心配だと思つたかも知れません。それは理窟で。

其處で、かう云ふ場合、物靜かに云へない性で父は直ぐ怒り出しました。而して一度怒り出すと、もう、理窟に認めさせた最初の目的は何時か忘れて、只々兄に對するイラ〳〵する腹立ちだけが、其出場を見出したやうに、云ひ譯けを聽く餘裕もなく、頭ごなしに、止め度なしに叩きつけられたのが本統だつたと思ひます。實際兄の云ふやう只々惡意になつて了ひました。

「假縫ひが濟んでもかまはない。斷つて了へ」といふのは、「其服の價ひだけは俺が拂ひ捨てる。兎も角貴樣はあの家で服を作る事はならぬ」とかう云つてゐるやうに兄には解れたに違ひないのです。

最初理窟で認められた目的は全く何處かへ飛んで行つて、取りかへしのつかぬ犧牲を其處へ殘して了ふのです。馬鹿氣た事です。

一週間か十日經つてからでした。其頃父は北の或る地方に新しく農場を買つた、それを見にゆくのに兄を誘ひました。祖母も母も私も喜びました。兄も喜びました。兄は其前から父に對し自分の現はした樣子が、餘りに粗野であつた事を悔いてゐた時でしたから、心から父の誘ひを喜んでゐました。

而して二人が出發の時、私は上野まで送つて行きましたが、父は自身は一等車に乘り兄は二等車に乘せて同じ列車で別々に行つたには一寸驚きました。

父にも兄を本統に愛する事が出來たら如何にいゝだらうと云ふ氣はあるに違ひないのです。が、扨二人額を突き合はせて見ると、愛情と云ふには未だ餘りにかけ離れた感情が其處にウロウロしてゐる事を互ひに感じ合ふ、それが、同じ列車に乘りながら、別々になつて行くと云ふやうな變な事をさせるのではないかと思ひます。

十四

前の衝突から凡そ一年間は先づ無事でした。而して一年目、即ち翌年の夏、兄が突然自家に居る女中の一人と結婚すると云ひ出した時に又烈しい衝突をしました。

然し此衝突に就いては略します。其代り此衝突の最中に偶然起つた出來事で、兄自身でも思ひがけない、父に對するいゝ感情が不意に現れた、その方を書かうと思ひます。

自家では兄が其女中と結婚する爲めに家を出るとか出ないとか騷いでゐる最中父は又父で、自分が創立以來やつてゐる或る鐵道が官有になるので、その引き渡しや清算が非常に忙しい最中でした。而して忙しいばかりでなく、賞與金の分配法が不公平だと云ふので、丁度少し前N鐵道で同じ事をして、結局重役達自身が一度取つた賞與金を又吐出して漸く事が落着した、それと同じ事をさせるつもりで、驛員其他大勢が頻りに騷ぎ立てゝ居る時でした。

新聞の噂によると、數名の重役の受取つた賞與金と千人近い驛員その他の全體が受取つた賞與金とでは重役の受取つた金の方が多かつたと云ふのです。

自家の者は左う云ふ不平連をさも下等なモッブのやうに憎んで居ましたが、その中で兄だけは重役のやり方が惡いのだと云つて反對して居ました。

「立派な株主の方々が一緒にお決めになつた事ですもの、まさかそんな不公平はありますまい」

母は少し不愉快な顏をして兄にから云ひました。兄は、

「然し現にN鐵道なんか、所謂立派な株主達が寄つて決めた事が不公平で、重役が一度取つた金を又吐き出して、やつと型がついたんですからね」と云ひました。

暫くもめた末、或る晩、左う云ふ連中の集會の崩れが大勢自家へ押寄せて來ると云ふ通知がありました。同時に警察からも何人か巡査が來て門を閉めてそれに備へました。

すると、間もなく二三十人の連中がガヤ〳〵と寧ろ雜談しながらやつて來ました。それが其連中です。もう少し興奮した連中が大勢來るのかと思つてゐたら、案外左う云ふ氣勢もないので、備へてゐる方は一寸拍子拔けの形でした。然し私共は安心しました。

巡査のはからひで、代表者が一人だけ門内に入つて、父と會ふ事になりました。それは或る驛の助役で身體の逞い男でした。父と其男とは玄關の間で會ひました。父は例によつて直ぐ怒り出しました。其男も負けずに大きい聲で云ひ爭つてゐました。

其時一番父の上を心配して居たのは兄でした。兄は二人が談判をしてゐる直ぐ襖のかげで異樣な興奮からブル〳〵身體を震るはせながら、うづゝまつて居ました。私も其處に立つて居ましたが、何故それ程心配なのか解かりませんでした。が、兎も角兄は一人非常に心配して居るのです。實際は何事も起りませんでしたが、若し其男が一寸でも父に危害を加へるやうな事をしたら其前に兄は飛び出して行つて其男をこらしたに違ひありません。

賞與金の分配の表だけでも見せて貰ひたい。若し不公平がないなら、これ位の事はしてもいい筈だ、と其男は云つて居ました。然し父はそれをもはねつけて居ました。結局不得要領で其男は巡査に連れられて門の外へ出て行きました。

私は此時の兄の樣子を不思議にも思ひ、愉快にも感じました。兄は自身の問題で父にはかなり惡意を感じてゐる最中でした。が、それとは全然別な氣持で心から父の上を心配してゐたのは流石に肉親の不思議な本能だと云ふ氣がして私はいゝ感じを受けました。

十五

賞與金の分配法の問題は結局多數の泣寢入りと云ふ風になりました。所が、代表者になつて來た男は多少責任を持つて皆から幾らかの運動費を出させて居ましたから、うやむやになつて來ると、皆からもつゝ突かれるし、失職してゐるから生活の方からもおびやかされるので、仕舞ひには自暴自棄な氣持で握太のステッキを持つて、自家の門前で父の出入りを待伏せしたりするやうになりました。

私の小さい妹達は其男を甚く恐れました。庭は割りに廣いのですが、父が大事にして八釜しい事を云ふので、門の内外が寧ろ妹達の遊び場所になつて居ました。つまり妹達は遊び場所を奪はれたわけです。

「お兄樣。お兄樣。あの人可恐いわ」こんな風に云はれると、兄は私の方を向いて、

「芳三。お前いつて話してやれ」と云ひます。

「兄さんも一緒に行つて呉れゝば話してもいい」から云ふと、

「二人出て、談判する程の事はないよ」と云ひま

した。

「だから、お兄様一人で話して來て頂戴よ。芳三さんでは頼りないわ」こんなに云はれて、兄はたうとう出て行きました。

兄は其男を門内へ連込んで來ました。

「會社の事で話しがあるなら、會社の方へ行つて呉れ。自家へ來て左う張番されてちやあ、小さい連中が可恐がつて遊びに出る事も出來ない。會社の問題は父だけの問題で、小さい連中には全く無關係な事がらなんだから」

「それは餘計なお世話です。僕が此家に侵入するなら知らず、往來に立つて居るのに君から彼れこれ云はれる事はないんだ」

「何だ」兄は短氣に云ひました。「そんな理窟を云ふか」

「何が理窟だ」

「そのステッキは何んだ。それでおいおいに危害を加へる氣か。そんな事をするときかないぞ」

「君は何んでそんな事を云ふのだ。そんなおどかしに驚く僕ではないぞ。主義もあれば主張もあつて仕て居る事だ。君等千金の子のあづかり知らん事だ。温順しく引込んで居給へ」

「それだけの主義や主張があるなら何故もつと公の問題として爭はないんだ、ステッキを持つて張番したりするのが不可と云つて居るのだ。此方は主義や主張に故障を云つて居るのではない。自家の前に張番することに故障を云つて居るのだ。何んにも知らない連中が迷惑するからだ。問題を問題として社會的に解決するのは何方かと云へば贊成なんだ。何故左うしないんだ」

「資力がない」其男は苦笑して云ひました。

「資力？」

「それから學力もありません」其男は兄が必ずしも敵でない事を感じたらしく、穩かな氣持を現しました。

「資力や學力がそんなに要るかしら」

「それは要ります」

「要るにしても自分にそれがなくてもいゝだらう。兎も角誰れかに相談するといゝ」

「どう云ふ人ですか」

「矢張り社會主義者がいゝだらう。S・KとかK・Sとか云ふ連中の所へ行つて相談したらいいと思ふ」

「社會主義者ですか……」

「左うでなくても居るだらうが、社會主義者が一番手つ取り早いだらう」

「左うですか」から云つて、其男は獨り首を振つて居ました。而して袂から卷煙草を出して火をつけながら、「兎に角貴方にも今度の事は一ト通り聽いて置いて頂きます」と云ひました。

「それは澤山だ」と兄は直ぐ斷わりました。

「何故ですか」男は顏を擧げて兄を見つめました。

「大概解つて居る。それに、それ以上聽いて君達に同情した所で困るもの……」

「別に困る事はないでせう……」其男は急に不服らしい顏をしました。

「困るんだ。同情した所で君達の何んの便宜も計れないし、反つて、その爲めに此方にだけ色々不愉快な事が起る位のものだから」

「それはどう云ふ意味ですか」

「もういゝ。それより……君の今の態度を變へて私に解決しようとせずに、もつと公の問題として社會的に解決をつけるやうにするといゝ。なるべくあせらずに」

「それが左う行かない事情があるのです」

十六

其男の云ふ所は、前にも一寸書きましたが、責任を持つて皆から運動費を出させて、それが思ふやうに行かず　而して今は運動費ばかりか、

自身の生活費さへなくなつて了つた、あと五日以内に若し何等かの解決がつかなければ、現在妻子と居る深川の木賃宿も立退かねばならぬのだと云ふ事でした。

一それはいけない一と兄は云ひました。一兎も角一緒に少し歩かう。歩きながら話さう一かう云つて兄は一つたん自分の部屋の方へ行つて、而して帽子をかぶつて出て來ました

以下は後で聽きました。

何しろ食ふ事に追ひつめられてする仕事は假令それが正當な場合にも自棄自棄が混るので誤解され易い。又實際不純にもなり易い。それ故出來る事なら、せつぱつまつた生活に追ひつめられる事なしに、なるべく正確に問題を解決して行くといゝ、と兄は云つたのださうです。そして十圓あれば半月は食へるといふので兄は其時それだけしか持つてゐなかつた十圓の金貨を其男にやつたのです。金貨本位になつた時に父が見本にそれを祖母に贈つたのです所が祖母はそれを直ぐ兄にやりました。兄は使ひにくいので紙に包んだまゝ机の抽斗に入れて置きました。それを憶ひ出して今出掛けに持つて來たのでした。

兄は何、或る解決を得る日まで、生活費は自分が出してもいゝと云ふやうな事を云つたのです。其男は喜びました。そして禮を云つて歸つて行つたさうです。

が、考へて見ると、其處まで引きうけるのは兄にとつて少し無理な事でした。勿論一錢の金も兄は自分で取る事は出來ません。兄は決つた小遣錢を自家から貰つてゐたのですが、其内から或る田舍の町の裁縫學校に入學させた其女中の學費を毎月送つて居たのでした。その上に又、假令木賃宿の生活にしろ、親子三人のそれを引きうける事は未だ學生の兄としては寧ろ無理な事だつたのです。一つは父から貰つてゐる金を默つて父に刃向ふ者の爲めに費してゐるといふ事が行爲として如何にも感じが惡くなつて來たのでした。それから又、あの男　しろ、あれだけの肉體を持ちながら、或る目的の爲めとは云へ、妻子を食はす爲めの働きを全でしずにゐるといふ法はないと云ふ氣がして來たのでした。

それらを書いた手紙を兄は其晩出しました。そして、昔ならば或正しい目的の爲めに、妻子を餓ゑさせ、或は其一命を犠牲にするさへ是認されたかも知れないが、今はそれは許されないといふやうな事まで書加へたのでした。

書いてゐる時は殆どそれは兄の良心に觸れずに濟みました。寧ろ其斷わる理由が明らかで井然としてゐる點が兄の氣に入りさへしたのでした。所が、其手紙を出して了ふと、兄は急に氣が滅入つて來ました。

兎も角、一度引きうけながら、そんな理由を並べて又斷わる。これは正しく自分の弱い所から來てゐるのだ。理非は引きうける前にこそ考へねばならぬ。然し一つたん引きうけた以上理非を考へるのは要らぬ事だ。それは引きうけた事にたぢろいて考へるのだ。何んといふ弱さだ。何んといふ恥知らずだ。こんな風に兄はそれを鼻先にこすりつけられるやうに感じ出したのでした。千代（其女中）との事が既にさうだ。徹底しよう徹底しようとしながら、弱さに支配されて其處に破綻を見せる。遂に自分は何事をも遂げ得ない人間かも知れない……

然し兄がそんなに考へてゐる間に結果は案外善くいつて居たのです。十日程して其男から兄へ禮手紙が來ました。それには社長との交渉で萬事は好都合に運びましたから何卒御安心下さいと云ふやうな事を書いてありました。そして、妻子を餓ゑさしていゝと云ふ法はないと云ふ貴方の御言葉はあの時の私には一せい射撃

のやうにこたへましたと書いて來ました。

散々にこぢれぬいた交渉が、何故そんなに早く型がついたか、ハッキリした事は知りません。然し兄が間に入つた事が、其男の一途に反抗的になつてゐた氣持を多少變へさせたのは事實です。それから、それまで切りに父の方にばかり交渉して來た男が、兄が間に入つた爲めに社長の方に行くやうになつた、とりもなほさず兄が自家から社長の方へ其男を差し向けた結果になつた、其事が流石に頑固な父にも早く落着さす氣を起こさしたのではないかと推察されます。兎も角父はそれらの事について何も云ひませんでした。恐らく父も兄のした事を惡意には解してゐなかつたらうと思ひます。

十七

私は憶ひ浮ぶまゝに書きましたが、出來事の時間的順序が讀者に少しはつきりしない氣がして來ました。それ故、今、簡單にこれまでの所を年順に繰返して置かうと思ひます。

三歲の時、上京、祖父母の手に渡される。

九歲の時、實母死し、私の母來る。

十三歲、中學入學。

十九歲、高等學校入學、その前年W川沿岸の鑛毒事件に就いて父と烈しい衝突をする。

二十二歲、大學入學、其正月祖父死す。其夏制服の事にて衝突。

二十三歲、夏女中との事、秋賞與金分配法の不平で來た男との交渉。

二十四歲、大學中途退學、此時案外衝突なし。

二十五歲、短篇集出版、自活云々小豆島行きの事。

からなります。

（大變話が飛び〳〵になりますが）兄の小豆島での生活を一寸書きますと、それは最初兄が豫期して行つた程、工合のいゝものではなかつたやうでした。第一に友達のなかつた事が兄には堪へられない事だつたやうです。聲を出して笑ふ場合、高い聲で呼ぶ場合、これが、其處にゐた半年程の間に遂に一度もなかつたと云ふのです。本統かも知れません。

兄の住んでゐたのは三軒棟割りになつて居る長屋の一方の端で、六疊に三疊、これだけの家だつたさうです。壁一重の隣りには隱居仕事に商船會社の切符きりに出てゐる、七十位の爺さんと六十位の婆さんとが住んでゐたさうです。そして此老夫婦が何かと、兄の爲めに親切を盡くして呉れたらしいのです。

兄は其前から計畫してゐた或る長篇小說を其處で書き上げるつもりでした。それが書上げられゝば一年か一年半の生活費は得られるわけだつたのです。兄は一體、夜勉強する方でした。そして興奮すると、部屋中を歩き廻る癖がありました。そして其狹い家でも兄は興奮し出すと、どうしても歩き廻らないでは居られなかつたと云ふのです。所が、ねだ板の一部が境の壁の下を通つて隣りと共通になつて居たから、兄が此方で亂暴に步き廻ると、隣りの爺さんか婆さんの寢床の下で板がガタガタと音をたてるのださうです。眼ざとい年寄り達にはかなり迷惑な事に違ひなかつたのです。然しそれらしい顏つきは遂に見せられなかつたと兄は好意を持つて話して居ました。

夜、二時か三時頃、靜かさから來る一種の音が耳の中で八釜しいやうな時に、書く事に疲れた兄がペンを措いてぼんやり卷煙草をふかしてゐると、不意にさびた一種厚味のある爺さんの聲で、

「あ――あ、しんどいなう！」と大きく獨言を云ふのが聽こえて來る事があると云ふのです。眼の覺めて了つた爺さんが夜明を待遠しがつて

居るのでした。からいふ時には兄も思はず、ほほ笑む事が出來たさうです。

村端れの鮨屋が昔旅廻りの義太夫語りで、今も師匠を稼業としてゐる、其處へ兄が弟子入りしたといふ話があります。餘りに聲を出す機會がないので、段々陰鬱になつて行く、義太夫でも習つて出來るだけの聲でも張り上げたら、と云ふのが目的だつたさうです。然し初めて行つた時に三十回の回數券を買つて、其の日それを一枚使つたのですが、兄はそれだけで、もう止めて了つたさうです。それが目的であつたにしろ、迚も大きな聲を出す氣分にはなれなかつたのださうです。

十月に行つて、翌年の三月末に兄は痩せこけて歸つて來ました　兄は又行くつもりで、荷物などは置いて來ましたが、其如何にも衰弱した樣子を見ると、再び兄を出してやる氣はしませんでした。それは皆で止めて了ひました。

兄の長篇は遂に完成しませんでした。それ故、自活云々も自然立消の形になつたのは勿論でした。

十八

衰へ切つて小豆島から歸つて來た兄も、親しい友等と毎日行き來してゐる内に案外早く其健康を回復して了ひました。元々氣分から來てゐたのが主だつたからです。

そしてその六月にはかなり元氣になつて、二三人の友と上州の赤城山に出掛けて行きました。新緑の美しい事、山のつゝじの美しい事などを書いた便りを貰つたのを覺えてゐます。すると十日程して私共は突然、兄の大怪我の知らせに驚かされました。母と一緒に直ぐ前橋の病院へ行つて見ました。

所が行つて見て、意外だつたのは途中心配してゐたとは全でちがつて、少くも見かけだけは兄が至極元氣な顏をしてゐた事でした。

友達が二人ついてゐました。然しその話によると前日まではかなり惡かつたと云ふ事でした。腦震盪を起こした爲めに頭が少し變になつてゐたといふのです。

祖母が驚くと困るから、なるべく怪我を輕く云つて呉れと云ふ事と、もう一つは、自分は最近小豆島の方へ行つてゐた事があるかしら、然し一體何をしに行つて居たのだらうと云ふ事を繰返し／＼殆ど夜つぴて訊いたと云ふ事でした。

「お祖母さんの事は心配しなくてもいゝ」と云ふと、

「うん、然うか」と直ぐ解かるのですが、一分もしない内に、

「僕は小豆島に行つて居たかしら」と訊き出すのださうです。「何しに行つてゐたらう」

「勉强しに行つて居たのだよ。長篇を書きに……」

「どんな長篇だらう」

「君自身の事を書いた長篇さ」

かう云ふとそれは直ぐ納得するのださうです。と、又、祖母の事を云ひ出します。それが解かると、又小豆島の事を訊く。切りがないと云ふのです。友達等は弱りもし、氣味惡くもなつたらしい話ぶりでした。

その癖、或る時兄は、

「一體僕の怪我はフェータルなものか、それとも助かりさうか。醫者はどう云つて居た？　本統の事を云つて呉れ玉へ」こんな事を云つたさうです。

「無論大丈夫だよ。それは醫者が請合つて居る」かう云ふと、兄は喜ぶと云ふより變に快活になつて了つて、たうとう興奮から、其夜中眠らなかつたさうです。

怪我する時の話は一寸ぞつとするやうな事

でした。何んでも何澤とか云ふ清い流れのある谷合ひのやうな所へ皆でピクニックに行つたのださうです。途々、水菜と云ふ野生の草、それから太郎ッペ（本統はタラの穂と云ふのださうです）然う云ふ木の芽、それから椎茸などを探しながら行つて、其處へ着くと流れの石を上げて來て、かまどを作り、鍋を掛け、持つて來た牛肉の罐を開けて、それと取つた野菜とを煮る答だつたのです。かまどを作る係り、流れに葡萄酒や果物を冷す係り、食器を洗ふ係り、たき木を集める係り、食卓係り等、それ〲分擔でやる事にしたのださうです。

兄は其たき木係りになつたさうです。所が、谷合ひだけに、落ちてゐる枯木は黒く朽ち腐れてゐるか、然もなくともジットリと水氣を含んだものばかりで、そのまゝでは迚も燃えさうもないものばかりだつたさうです。兄はもつと乾いた枝が欲しいのですが、皆面白さうに話しながら支度してゐる時に自分だけ谷を出てそれを捜しに行く氣もしなかつたものと見えます。兄は谷へ差しかけた高い木へ登つて切りに枯枝を探しては折つて落してゐたさうです。

「あぶないぞ」と云ふと、

「大丈夫だ」と上で答へて居たさうです。

十九

「オイ〲、小鳥の巣があるよ」大きいはんの木の上から兄はかう云つて皆を呼んださうです。こげ茶色の胸毛をした動作の殊に敏捷な小鳥が枝から枝と飛び移りながら、切りとけたゝましい啼聲をあげて居たさうです。

「子を取られると思つて、心配してるんだネ」木の蔭に立つて兄が下を向いて云つたさうです、そして今度は鳥の方を向いて、

「心配しなくてもいゝ。捕りやしないよ」と云つたさうです。

巣は枯れた枝のつけ根が折れて五寸程の深さで空ろになつて居る、その奥にあつたさうです。淡紅色の未だ全で毛の生えてゐない小鳥の子が、それでも何か不安らしく、互に寄添はうとして動いて居たさうです。

兄が根氣よくそれを覗いて居ると、親鳥が氣違ひのやうに直ぐ頭の上の枝まで來て啼き叫んでゐたさうです。

「大丈夫だよ。……そんならもうよしてやらう」

かういつて兄は覗くのをやめたさうです。そして何上の枯枝をとる爲めに幹を登りかけると、不意に、

「あゝ！」と聲をあげて、狼狽て降りて來たさうです。

「どうした」

「蛇だ〲」然ういつて兄は急いで降りて來ました。所が、下で、

「危いぞ。氣をつけろ」と、かう聲を掛けると、殆ど同時に兄は足をすべらして、捨て忘れた小さい枯枝を握つたまゝ、仰向けの姿勢で落ちて來たと云ふのです。

後での兄の話によると矢張り小鳥の子をねらつて居た、一間程の紫色した蛇が、兄が登らうとする直ぐ顔の前で、「ぷッ」と云つて鎌首をあげたと云ふのです。紫色の蛇と云ふのも聞いた事がないし、蛇が「ぷッ」と云ふのも變な話だが、兄はそんなに話して居ました。

兄は三間程の高さから、石ころのある所へ仰向けに落ちたのです。皆が驚いて寄つて行くと、

「大丈夫だ」から云つて兄は兎も角一度は立ち上がつたさうです が、直ぐ又突伏すと、其儘氣が遠くなる様子だつたさうです。

仰向けに落ちたと思つたさうですが、頭の怪我は殆ど眞上で、其處から血が氣味の惡い程流れ出して來たさうです。友の一人が自分の帯を

解いてそれでぎり／＼と鉢卷をしてやつたら、間もなく血は止まつたさうですが、傷から云ふと、それよりも背中の打ち傷の方が大きかつたのでした。

友の一人が意識の不明になつた兄を抱きかゝへたまゝ、皆でこれからどうするかを相談したさうです。宿屋へ連れ歸つて醫者を呼ぶか、それとも此儘直ぐ前橋の病院へ連れて行くか。すると、突然、

「前橋へ連れて行つて呉れないか」青い顔をした兄が眼をつぶつたまゝ云つたさうです。

「途中我慢出來さうか」

「出來る」

「では然うしよう」

兎も角、俥も、乗馬もない往復十二三里の山路を醫者の來る迄待つのは皆にとつても如何にも不安な氣がして居たといふのでした。

そして其處からは比較的近い沼尻の宿屋に行つて戸板と敷蒲團を借りて來てそれへ兄を俯伏に寝かせ、そして一里程ある箕輪といふ所まで皆でかい、ぎ下ろしたのださうです。然うして箕輪からは人足を四五人雇ひ、わきへ友達が二人だけついて、夜に入つて漸く前橋の病院へかつぎ込んだと云ふ事です。

二十

兄の傷は退院まで二十日程かゝりました。

「頭の傷はこれで全快です、然し背中の方はもう少し氣をつけて頂きたいと思ひます。萬々左う云ふ事はないとは信じますが、若し脊椎カリエスにでもなると危險ですからな。二三年の内に出なければもう心配はありません」退院の日に外科の醫長がかういつたさうです。

兄は東京へ歸つて來ました。然しそれからも或る外科病院に局部の熱氣浴をして貰ひに半月餘り通ひました。さうして、それが一通り濟むと、後養生に湯河原の温泉へ出かけて行きました。

兄が前橋の病院に居る間に自宅の者は代る代る見舞ひに行きました。姉だけは姙娠中の丁度汽車に乗れない時期で行けませんでしたが、あとは皆代る／＼出掛けた中に祖母と父だけが遂に一度も出掛けませんでした。

父のは一つは仕事の方が忙しかつたからでもありますが、其處にあるこだはりのあつた事も事實でした。兄の怪我が致命的なものででもあつた場合は別ですが、左うでないとすると、わざわざ前橋まで此方から出て行く事が、父として何か讓歩のやうな、それでなければ僞善のやうな、一種こだはつた氣持で中々出かけられなかつたのではないかと思はれます。父が素直な氣持で若しそれが出來たら兄はどんなに喜んだか知れません。恐らく誰から見舞はれたよりも喜んだらうと思ひます。然しその氣持は父には通じません。父は行きたくもあり、いやでもあつたらうと思ひます。さうして一方冷淡であられない氣持から怪我の時、色々世話になつた人達の家を贈物を持つて自身禮に廻つてゐました。

私から云へば禮廻はりは私にさして、其暇間で一度でも前橋まで行つてくれたら、それが萬事に、どんなによかつたか知れないのです。然し父にはそれが中々出來ません。丁度兄が小豆島行の日に、自發的にはどうしても父を玄關まで送れなかつたやうに、父も氣にしながら出かけられなかつたのではないかと思はれます。これが二人の性質でした。二人の關係に生じた共通の癖でした。

兄の怪我を本統に心配してゐたのは何んと云つても祖母でした。恐らく心配以上、それを自身にこたへてゐたと云ふのが本統でした。祖母は毎朝母とか女中とかに前橋へ電話をかけさ

せて、兄の模樣を訊かして居ました。左うして自身では遂に一度も出かけようとしませんでした、未だ身體にも元氣のある頃で、出かけようと思へば出かけられたのですが遂にそれを云ひ出さなかつたのは、怪我した兄を見る事が祖母には餘りに恐ろしかつたからです。餘りに强い刺激だつたからです。

戊辰の役で、其頃十六でそれに出てゐた父の一隊が全滅したといふ噂を聴いた時、祖母は直ぐ「死ぬのは仕方がないとして、どうか醜い死に方をして呉れなければいゝが」と云ふ事を考へたといふ事です。左ういふ祖母が四十何年か經つた今、兄の怪我をそれ程にこたへると云ふのは、一つは年の故でした。心身の衰弱が左う云ふ刺激に堪へられなくなつて居たからです。

それにしても誰れよりも心配しながら、其心配故に尚、其處へ行けなかつた年寄りの氣持を思ふと如何にも哀れ深く氣の毒な氣がしました。

二十一

背中の傷は二箇所程皮膚の組織の變つた所だけ、薄黑くあざのやうになりましたが、案外早く回復しました。

「電車の飛降りをすると背中がねぢれて變な痛み方がするけど、普通にしてゐれば何んでもなくなつた。反つて醫者が全快したと云ふ頭の方が、傷は全快かも知れないが、無闇と物忘れをするので閉口だ」こんな事を兄はいつて居ました。

多量の出血が神經衰弱の原因になるさうですが、その爲めか、兄は多少神經衰弱にかゝつてゐるやうでした。

半年程經ちました。左うして何時とはなしに自家では兄の細君探しを始めて居ました。

「昨日Tさんの奥さんが此寫眞を置いていらしたけど……」かういつてキャビネ型ともう少し大きい型の寫眞とを母は兄に渡しました。

兄は其のキャビネの方を暫く見てゐました。左うして、默つてそれを側にゐた私の方へ出しました。丸顔の鼻の小さい善良さうな、如何にも特徴のなさゝうな顔の娘さんでした。

兄は大きい方の一家族で寫した寫眞を見てゐました。

「これがお母さんです」と母が覗込んで、それを指しました。

「えゝ。よく似てゐますネ。此人が年をとると、かうなるんですネ。考へものだな」と兄が云ひました。母は笑ひました。左うして、

「此間のお孃さんとどうですか？」と云ひました。

「そりやあ、あの方がいゝでせう。殊にあの妹さんの方なら數等上等です」

「妹さんは駄目。未だ學校ださうだし、それに派手者で、外交官といふお望みださうですもの」

兄は又寫眞を私の方へ出して、

「學校でも出たら考へが變らないかな」と云ひました。

母は未練らしく私の置いたキャビネの方を取上げて、ながめて居ました。そして、

「これは落第ですか」と云ひました。「音なしさうな、いゝお孃さんのやうに思ふけど。何方かと云ふと、内氣で家庭向きなお孃さんらしいけど」

「どうも此方が家庭向きでないから、せめて細君だけでも家庭向きの方がいゝにはいゝが……」

「どうですか。お祖母さんも此お孃さんはよささうだと云つていらつしやるんだけど」

「いやな所もない代り、何んだか如何にも平々

凡々ですネ」
「そりやあ、音なしい位の人は幾らか其傾きはあるけど、年をとると、其平々凡々も屹度惡くないものよ。――自家なんかも、もう少し平々凡々だといゝんだけどネ」かう云つて母は笑ひました。「だけど、かう云ふ事は一寸した所が氣に入つたり、入らなかつたりで、本統に緣ですからネ。他でかれこれ勸めるわけにも行きませんよ」
「Tさんの奥さんの口は餘り信用出來ないんで、……此間みたやうに五六年前の寫眞を持つて來て、少し若く撮れてゐますけれど、なんて、先か、あの人か、何方の罪か知らないが、兎も角少しひどすぎますからネ」
「本統に」二人は笑ひました。
其同じ寫眞が五六年前の婦人畫報に出てゐたと云ふのです。
私は然し、二三年は脊椎カリエスを氣をつけるやう云はれて居る兄が、今結婚なんかしていいのかしらと思ひました。脊椎の直りきらない内に若し結核菌がそれへ着くと、カリエスになるのださうです。そして十中九まではそれは助からぬ病氣だといふ事です。兄がその事を忘れたやうに平氣で結婚の事などを云つて居るのが、呑氣なのか、ずるいのか一寸解からない氣がして少し不愉快になりました。
然し兄のは一方その危險のある事をよく知りつゝ、他方では全然ならない事に決め込んでゐると云ふ風でした。

二十二

兄は寫眞だけでは中々乘出して行けない氣持で、どれにもこれにも生返事ばかりして居ました。
其内兄に結婚する氣のある事を知つた兄の親しい友が、自身の從妹で、兄も二度會つた事のある、其人を貰ふ氣はないかと云ふ事を手紙で勸めて來ました。
兄は前から其人に對しては或る程度の好意を持つてゐました。其境遇も割に氣の毒な人でした。結婚して一二年すると良人に死なれて、一人の男の兒と一緒に良人の父の家にゐて、中風のやうな病氣をしてゐる其父の看護で此二三年を過ごしてゐると云ふのです。
兄は自家の方に大した反對がなければ結婚しようと思ひました。然し父と烈しい衝突をしてまで結婚する氣はありませんでした。兎も角返事を出す前に自家の方から決めてかゝる氣で、先づ祖母や母にそれを打明けました。再婚と云ふ事が二人の氣に入りませんでした。此事は兄自身にも問題だつたのです。自身の事を棚に上げて私に問題にしてゐた事でした。然し今祖母や母にそれを云はれて了ふと反つて兄は「向うの事ばかりは云へませんからネ」といつて、自身の問題も一緒に解決して了つたのです。
祖母も母も大した反對もしませんでした。左うして翌日同じ事が母をとほして父に相談されました。父は卽座に否定しました。
其人の家は公卿華族でした。其家柄としては父が獨り心できめてゐる條件、それは多分何十萬以上の資產ある家といふ條件には少し足りない財產だつたに違ひありません。それだけです。それで父は反對したのでした。
兄は腹を立てない事に決めてゐながら、矢張り腹を立てゝ了ひました。理由にならない事が理由になつて自分の運命が左右される。此意識が變に兄を焦立たすのでした。
然し兄は結局其怒りを父までは現はさずに了ひました。それは寧ろ珍らしい事でした。一つは其人との關係が直接には未だ話した事もなく、兄の方では知つてゐても其人の方では兄に會つた事を多分覺えてゐないだらう位の關

係だといふ事、それから此事が此儘に立消えるとしても、或る進みつゝある運命がそれで方向を變へるといふには未だ餘りに淡すぎる運命の發足だと云ふ氣もあつたのだと思ひます。

それにしても兄は矢張り怒つてゐました。例の如くに否定されたと云ふ氣が屢〳〵してゐる怒りを刺戟します。

兄が楯突いて來る事を豫期してゐた父は毎時になく素直なのを喜んだのかも知れません。不圖思ひ立つたやうに其晩山王臺の京都料理に皆を連れて行くと云ひ出して、早速人數などを電話で云はしてゐました。

兄は直ぐ外出して了ひました。

父は其晩其處で、

「どうして芳行は來なかつたらう」から興ざめた顏をして云つてゐました。

然し兄にとつては怒りを直接に父に現はさないだけが漸くでした。平氣で一緒に左う云ふ場所で父と會食するなどは思ひもよらぬ事でした。怒らないのは怒つて居ないからではないと兄は云ひたかつたかも知れません。

其晩おそく歸つて來て兄は友へ斷りの手紙を書きました。

二十三

それから間もなくでした。商賣の事で長らく歐羅巴に行つて居たHと云ふ親類の者が歸つて來ました。そして自家の色々な事情を知ると、Hは直ぐこんなに云ひ出しました。

―兩方の意志が疏通しないからですよ。他でほつて置くと云ふ法があるものですか。小父さんの云ふ事だつて、小父さん時代の人の云ひ草としては無法と云ふではなし、行さんだつて、わからず屋でもないのだから、僕が一つ間に立たう。屹度うまくやつて見せる。小父さんも行さんも滿足するやうな立派なお嫁さんを僕が探さう。左うして結婚したら直ぐに別居さすんですよ。いゝ年をした息子が何時までも親父と一緒に暮らして居れば喧嘩するのが當り前ですよ。お祖母さんも小母さんも安心して僕にお任せなさい。屹度いゝお嫁さんをお世話しますから―

Hは洋行歸りによくある一時的の變な優越感から、左ういふ一家のいざこざがうぢ〳〵と如何にも馬鹿らしく、齒がゆい氣がしてならなかつたらしいのです。其處で「俺が一つ片附けてやらう」左ういふ氣持ちになつたのでした。

兄にも同じ事を云つたと見えて、後で兄は「Hさんのは仕事でも片附けるやうな調子だから閉口だ」と母に云つてゐました。

―でも折角親切に云つて下さるんだから、それに世間は隨分廣い方だから、屹度いゝお嫁さんを探して下さるでせう―

四五日した或る晩、おそくなつてHが興奮しながらやつて來ました。そして、

―非常にいゝ話がありました。然しそれは明日ゆつくりお話しします。兎に角、今晩僕は此處に泊りますが、少し疲れてますから直ぐ寢かして下さい―こんなに云つて、それがどう云ふ話かい、わざと誰にも話さずに寢て了ひました。

此やり方はまづいと思ひました。如何にも細工と云ふ事が見えすいてゐました。それが兄に如何に馬鹿々々しく見えてゐるかを思ふと少しヒヤ〳〵しました。

翌朝になりました。そして女中が未だ座敷の掃除を濟まさない内に或る若い紳士がHを訪ねて來ました。それが、Hが兄にと思つた人の兄なのです。Hは少時其人と座敷で話してゐましたが、朝の食事の前、私達が祖母の居間で茶を飲んで居る、其處へ來て、

「昨晩は少しおそかつたので話しませんでした

が、と豫定の如く話し出しました。

それによると今來た人は第〇高等學校出のUと云ふ法學士でHよりは少し後で、學校では知らなかつたが、〇高出身者の會で昨日會つて、丁度道が同じで、歸途一緒に來ると、色々の話から其人の妹の事が出たのださうです。Hはすかさず、それへついて尚色々訊くと、何故ですかと云ふので、此方の事を話すと、Uは却つて兄の事をよく知つて居たと云ふのです。小説を見て、人も大概見當がついてゐると云つたさうです。

それから二人は妙に興奮して了つて、隨分歩き廻つたと云ふのです。此方の事情も話し、向うの事情も大體聽いた、大變い丶縁のやう思ふ、とHは云ひました。學習院の女子部を出てから双葉會で、佛蘭西語と英語を勉强して居る。それで、「語學だけは兄貴より本物だ」と云ふやうな話まで聽いて來ました。

兄は明ら様に不機嫌を現はしてゐました。自身の結婚がそんなにして、どん〳〵運ばれる事は兄には何か侮辱のやうにとれる風でした。偶然前夜會つた人。その見た事もない妹に。そして今朝は何も云はずに其兄を呼んでゐる・・・。

二十四

「切りがないから、何しろ明日、役所へ出る前、來て呉れないかと云つたんです。――内務省です。――で、どうだい、行さん。君、一寸出て會つて見て呉れないか」とHは兄の方を向いて云ひました。

「そりやあ、いやだ」と兄は不愛想に答へました。

「どうして」

「どうしてゞも、閉口だ。――君は話だけで氣に入つてゐるけど、僕が其話を君と同じやうに聽くかどうか解らないよ」

「うんそれはさうかも知れない。然しどうだい。左うこだはらずに、もつと氣輕に會つて貰へないかネ。U君は實際君の小説を愛讀してるんだ。愛讀者に會ふ位の氣持で會つてくれないか」

兄はかういふ側の人達に自分の小説の事を云はれるのを神經質に嫌つてゐました。その爲めも加はつて焦々と早口にさへぎりました。

「兎も角今日會ふのはよさう。もう少し會ふ事が自然になつた時に會はう。左うして呉れ給へ」と云ひました。

豊子と云ふ十六になる私の妹が縁側を馳せて來て、いきなり一枚の寫眞をHに渡しました。

そして、

「Uさんて此方ぢや、ない事？」と云ひました。

「左うかも知れない」Hは少時見た後で云ひました。「眼が何處か兄貴に似て居る」

「どら？」今まで何も口を利かずにゐた母が手を出してHから、それを受取りました。

「Uさんは小學で私より三つか四つ上の級にゐらしたのよ。多分これUさんと思ふわ。Uさんのお話が出たから、若しかしたら、あのUさんかも知れないと思つて探して來たの」妹は幾らか得意らしく皆の顏を見廻して云ひました。

兄から祖母から私から父母と云ふ風にその寫眞が廻されました。それは手札型の全身の寫眞で、眼の腫れぼつたい、何となく醜い感じのする十六位の娘さんでした。それは實際醜い以上に變に遲鈍な感じが身體全體に現れてゐるのが見る者を不快にしました。

「どうしてお前、これを持つてゐるの？」と母が訊きました。

「次郎さんが先に持つていらしたのよ。先に次郎さんが澤山持つていらした事があるでせう。あの中にあつたのよ」

「左う〳〵」と母は首肯きました。
寫眞屋志願で田舍から出て來た親類の青年が或る大きい寫眞屋に弟子に入つてゐた、そして或時燒きそこなひの寫眞を澤山妹達の玩具に持つて來て吳れた。その一つでした。
「それぢやあ、仕方がない、僕はあつちへ行かう」Hはさも落膽したやうに、起つて座敷の方へ還つて行きました。
兄は苦笑しながら、又其寫眞を取りあげて、
「若し君ならどうする？ ともう一度これを見せたかつたけど」と云ひました。
「折角親切に世話しようと云ふのに、兄さんのやうにあゝつけ〳〵云はれると側でハラ〳〵する」と母がいひました。
「然しお母さんならどうですか、此人は」兄は笑ひながら其寫眞を突きつけました。母も少し笑つて、
「左うね。あんまりいゝとは思はないけど」と答へました。
「あんまりいゝとは……ですか」兄は少しイライラした調子で笑ひました。

二十五

三日程經ちました。晩になつてHが快活な笑聲を立てゝ入つて來ました。そして、其處に坐つて居た豐子の頭へいきなり手をかけると、
「オイ〳〵串談ぢやあ、ないぜ」と云つてそれを搖すりました。
妹がUさんだと云つた寫眞は實は妹の思ひ違ひで、眼の少しはれぼつたいやうな所に幾らか似た所もあるが、全く別人だつたと云ふのです。Hは其日Uの家で、其人に會ひ、事の行き違ひに、思はず笑ひ出して了つたと云ふのです。
Hは其人のキャビネ型の寫眞を貰つて來ました。其頃流行した鹿の子の細かい絞りの袖振を着て椅子にかけてゐる七分身の寫眞でした。成程顏は似て居ると云へば何處か似て居ますが、その如何にもキリヽとした賢さうな感じが前の寫眞の如何にも遲鈍らしい感じと變つてゐる所に大變な相違がありました。
「どうだネ、豐ちやん。お前も見てお吳れ」かう云つてHはそれを豐子に渡しました。豐子は先刻から少し赤い變な顏をして居ましたが、それを一寸見ると、怒つたやうな調子で、
「えゝ、Uさんだわ」と云つて直ぐHに返して了ひました。
「お前のおかげで、もう少しでエライ事になる所だつた」とHが云ひました。すると豐子は負けずに、
「あの寫眞でもよく似てゐらつしやるわ。學校にゐらした時分はあゝだつたわ」と云ひました。
「行さんは？」とHが云ひました。
「おひる頃から出て、未だ歸りません」と母が答へました。
「今度は行さんの意志も出來るだけ尊重するつもりですから、よく考へて、話を進めるものなら進めて貰ひたいと、よく小母さんから話して置いて下さい」
「承知しました」
「然し此の人なら惡くはないでせう？ 小母さんのお考へはどうですか」
丁度そんな事を云つて居る所に兄が歸つて來ました。Hは早速其寫眞を見せました。
兄は少時見てゐましたが、其日は割りに素直な調子で乘氣な返事をしました。
「左うかそれはありがたい。僕は今日、本人に會つて來たが、兎に角僕は立派な人と思つた。君の奧さんとして決して恥かしくない人だと思つたよ」
「本統に、此お孃さんなら、立派なものです

わーと母も云ひました。そして妹の方を向いて、「まあ、どうして豐子はあんなお孃さんと間違へたの？　氣をつけなくちや、駄目ですよ」
とたしなめるやうに云ひました。
妹は眞赤な顔をして、ジロ〳〵と母の顔をにらんで居ましたが、其内不意に變な表情をすると、疊へ突伏して大きな聲で泣き出して了ひました。
「馬鹿ねえ」と母が云ひました。
「もういゝ、豐子」と兄の方が氣の毒がつて居ました。「實際似てゐるよ。もう泣かなくていゝ。えゝ、もう泣かなくていゝ」
妹は却々泣き止みませんでした。私は少し面倒臭くなつたので、母に、
「早くあつちへ連れていらつしやい」と云ひました。母は泣いてゐる妹を無理に起こして、別室へ連れて行きました。
兄はHが歸つてから私に、
「却々いゝ、喜劇だ」と云ひました。
實際此話が此儘若し順調に行けば、それは兄の云ふやうに、面白い喜劇になつたと思ひます。兄が其人と結婚する。可愛い子供が生れる。三人は幸福に暮してゐる。其時兄が不圖此行違ひに就いて考へる。兄は和いだ氣持で、結局惡意のなかつた運命を想ふ。左うして、それを小さい品のいゝ喜劇に書く。これは其時の考へではあり得る事でした。
運命の一寸した惡戯から、一時的の葛藤を惹き起こす。騷ぎの中で不意に事が明瞭になる。皆は喜ぶ。皆は惡意も何も忘れて笑ふ。其日出度し目出度しの中で、運命の道具に使はれた妹だけが、一人大きな聲で泣いてゐる。幕。
これは兄に書かしたい喜劇でした。兄の書いていゝ喜劇でしたが、兄は遂にそれを書きませんでした。それは事實も此處までは喜劇でした。然しそれから先が私共では悲劇に變つて了つたからでした。父は此結婚に反對しました。

二十六

Hが初め、父と兄との間に立たうとした時に
「私を信用して、或る所まではお任かせ下さいますか」と云つたのださうです。すると、父は、
「私は以前からから云つて居るのだ。先の家は私が選ぶ。その上で、其人をとるとらないは芳行の自由に任かせる、と。然し若し此意味がお前に徹して居るなら、私は或る所まではお前に任してよろしい」から答へたさうです。
「よく、わかりました。實際親類として釣合はぬ家から貰ふ事はお互の爲めに面白くない事ですから……」
Hはこんな風に早吞込みをして了つたのです。そして、Uの家に就いても、其父が銀座の方に店を持つて居る貿易商だと云ふ事、それから兄が内務省の官吏で割に評判がいゝと云ふやうな事位で、父もそれなら別に不服もあるまいと一人きめ込んで居たのでした。
所が、父の方は任すと云ひながら矢張り不安心だつたのです。其朝Hから其話を聽くと直ぐ、外出のついでに俥で其店の前を通つて見たのださうです。それは案外小さな店でした。父は落膽しました。そして、其頃自分が出てゐた會社へ行くと、さう云ふ事の消息通に色々訊いて見たと云ふのです。
Uの父は初めから大きい貿易商ではなかつたが、別けても最近失敗して、今は住ひも人手に渡し、郊外に小さい借家住ひをして居ると云ふやうな噂も父は聽いたのです。「これは駄目だ」と父は思つたのです。
然し其夕、父は歸ると、自身その事を云ひ出す前に母から、兄が其話には全く氣乗りがして居ないと云ふ事、寧ろ、そんな人を勸めるH

の無責任に腹を立てゝゐると云ふ事を聽いたのでした。父もHの無責任に就いて兄とは異ふ意味で同感でしたらう。そして、「それなら」と安心したのでした。「それなら、わざ〳〵憎まれ役になつて不服を云ふ事もいらない」と思つたのでした。然し此事が惡かつたのです。

本統の寫眞が來ると、話は急に復活しました。皆は何も云はない父に反對があるとは思ひませんでした。どし〳〵話を進めて行つたのです。兄は先の兄と會ひました。Hは勿論乘氣でした。祖母や母も喜んでゐました。すると父が不意に反對を云ひ出しました。母やHが切りに父に說きましたが、父はどうしても諾きませんでした。仕舞にはHも怒りました。父も怒りました。

結局此話はそれで破れて了つたのですが、父に云はすれば「よく解りました」と云つたHは實は少しも解つては居なかつたのでした。所がHの方は、

「何故、それなら、最初、其店を見たり、貸家住ひと云ふ噂をお聽きになつた時に不贊成なら不贊成と云つて下さらなかつたのです。話を進めてから突然そんな事を云はれるのは私を餘り踏みつけにした話です」かう云ふのです。

一芳行が不服だと聽いて居たからさ」と父は云ひました。

喜劇の動機となつたものは此處へ來て、悲劇の動機となつたわけです。然しそれも若し父と兄との關係が、もつとなだらかな自然なものであつたら、必ずしも、さうならずに濟ませた事でした。が、關係が關係でした。兄には充分のひがみがあります。なりゆき、それが行き違ひのみから來てゐるとは兄には考へられなかつたのです。「惡意だ。矢張り惡意だ」これがギラギラと兄の頭には映るのでした。

實際喜劇の畑には何がこぼれても喜劇の種となり、悲劇の畑には何がこぼれても結局悲劇の種となるやうな氣がします。

二十七

幾らか乘氣になつて來た所を突然父から否定されたと云ふ事は兄にはかなりの腹立ちだつたに違ひありません。いつもなら直ぐ一ト衝突なければならぬ所です。が、兄は珍らしく、それをしませんでした。それは、それをするには寫眞で見たゞけの人に對する兄の感情が未だ餘りに淡かつたからだと思ひます。兄の腹立ちはそれより寧ろ、いざ進まうとした出鼻を例によつて、いきなり押へつけられた所にあつたのでした。然し兄はそれをも破裂はさせなかつたのでした。

兄は父が「それ位なら○の方の話がまだましだ」と云つてゐたと云ふ事を聽くと直ぐそれを復活させようとしたのでした。○といふのは兄の友の從妹の事です。所が父は矢張りそれをも否定しました。さうして「そんな事を云つた筈はない」と云ひました。

其處で到頭兄は本氣に腹を立てゝ了つたのでした。

次の手紙は兄が家出をしてから暫くして姉に見せて貰つたものです。然し書いたのは丁度此腹立ちの最中だつたのでした。

以下は其手紙です。

姉さんは他人から死ねばいゝと思はれて居る事を痛切に感じた事がありますか。僕は色々な罪惡の中でも他人を死ねばいゝと思ふ程、氣持の惡い罪惡はないと思つてゐます。これは然し弱い人間には起り易い考へです。然し左う思はれる側の人間になつて考へれば、これ程に氣持の惡い、腹の立つ事はないと思ひます。鏡花といふ小說家が昔「化銀杏」と云ふ短篇でこの事を書いてゐます。殺さうと思ふ心より、早く死

ね早く死ねと思ふ心の方が如何に慘酷か知れないと云ふ意味を書いてゐます。僕がそれを讀んだのは芝の山内にゐた頃ですから多分十一か十二と思ひます。それでも子供ながらに「これは堪らぬ事だ」と思つたので妙に頭に殘つてゐたのです。

實際、死ねばいゝと願ふ心は殺さうと思ふ心より感じが遙に慘酷です。

僕は祖母上が[illegible]きして一時お惡かつた時、あの白らつ兒の葬儀社の主人に變に脅かされた事がありましたが、あの男が祖父上の場合のやうに近所まで來てゐて今か／＼と待つて居るやうな氣がして仕方なかつたからです。

「早く死ねばいゝ」から願ふ事は假令それが左う云ふ商賣の者にしろ決して許されない事と思ひます。私に心からそれを憎みます。

所が一昨日です。僕は本所の叔母さん（兄の實母の姉）の所へ行くと叔母さんが、

「こんな事を云うたら、お前は氣を惡くするか知れないが、本統の所、お父さんはお前にはもう愛はないと云うてなさるさうだ。死ぬものなら早く死んで呉れる方がいゝと思うてなさるさうだ」とこんな事を云ひました。

僕は自分の顏から不意に血の去つた事を頬の冷りとした感覺で知つた程に心を打たれました。叔母さんは僕の顏を見て驚いて了ひました。そして、

「そんな事は云うても、血を分けた親子の事だから……」こんな風に當惑しきつた顏をしながら誤魔化さうとしましたが、一つたん出して了つた言葉はもう駄目です。

叔母さんは、うつかりそれを口に出して了つたのです。出してから自分でも吃驚したのです。それはよく解つてゐます。が、それでも僕は矢張り腹を立てました。僕は二樣に腹を立てたのです。父上に對しても、――それは腹立ち以上です。それから叔母さんにも。馬鹿な事を饒舌る奴だと思ひました。假令それが眞實でも、何も云ふ必要はない事です。僕だつて、父上が僕に就いてさういふ感じを抱いてゐられる事は實は知つてゐるのです。勿論知つてゐるのです。然し知つてゐても同じ事を他人の口から左うと聞かされたら、どうですか。いくら知つてる事でも堪つたものではありません。

叔母さんはお饒舌で無智です。實際氣の毒です。そして、それは過失です。正直者だけに直ぐ其過失を可哀想な程後悔してゐました。

それにしろ、僕は僕で矢張り無闇と腹を立てて了ひました。相手かまはずに腹が立つて來ました。

「よし！」何んだか、かういふ荒々しい感情を起こしたのです。

二十八

（手紙の續き）

其時僕には、僕が先年徴兵にとられた時の事、それから、去年怪我した時の事、それが思ひ浮んで來ました。當時三分の一程意識して居て、殘りを意識しようとしなかつた、それを全部的に不意に意識して了つた氣がしました。

あの頃僕が如何に徴兵を恐れて居たかは姉さんも知つてる事と思ひます。僕にとつては、それは死刑の宣告を間接に受けるやうな感じでした。誇張のやうですが實際です。然し幸に僕が入營後二週間目に不健康の爲めに退營を許された事は御承知の如くです。大概許されさうもないと思つてゐた時だけに此時の喜びは嘗て經驗しなかつた不思議なものでした。練兵を休んで獨り營室にゐる時、脊の高い中隊長が不意に入つて來て「君は常後備役免除になつたから……」と云ひ渡してくれました。僕は頭を下げてから、默つて居ました。中隊長は案外喜

びもせず、不愛想な男だと思つたのかも知れません。そして出て行きました。

その直ぐあと、僕は一體如何いふ樣子をしたと、姉さんは思ひますか？ 僕は營室内の白壁へ行つて身體と顔とを無闇に擦りつけて歩いたのです。ニコ〳〵する所ではありません。萬歳と叫ぶ所ではありません。僕は只、眞面目腐つた顔つきをして、壁へもつていつて、顔も身も擦りつけて居ました。一種の表情には違ひありません。が、自分ながら不思議な表情もあればあるものだと後で感じました。

これまで僕のやうにして免除になつた者がどれだけあるか知れませんが、中でも僕は最も最も喜んだ一人に違ひないのです。しかも他の最も喜んだ人達は兵營内の苦しみを味はつてからの人々に違ひないのです。所が僕の二週間の兵營生活は實に苦しみといふ程の苦しみは何んにもなかつたのです。皆からも割りに好意を持たれましたし、練兵なども病人扱ひを受けて大變樂をして來たのでした。

僕のは元來は思想から入つたものでした。それが、仕舞ひには感情の底まで浸透つたアンティミリタリズムになつて了つたのです。今は好意を持たれようが樂であらうが、何んでも彼でも閉口なのです。それは我儘な、そして、より氣分的なアンティミリタリズムなのです。然しそれが反つて本統とは信じてゐますが。

そして二週間目に自家へ還つて來ました。祖母上のお喜びは非常でした。祖母上には僕が入營と決まつた日から、近い兵營の消燈喇叭を聴き、起床喇叭を聴く度毎に日一日と僕の入營の近づくのを何んとも云へず淋しく思はれたといふ事です。其處に僕が還つて來ました。祖母上は日頃信心の天照皇太神の掛物に神酒をあげて、お辭儀をして居られました。

所が父上は……父上は苦い顔をして、かう云はれたさうです。

「一年行つて來る方がよかつたのに……」

僕は非常に不愉快でした。父上の左う仰有る氣持が、僕が自身とミリタリズムとを結びつける事を如何に恐れてゐるかに比し、餘りに簡單で、しかも安價なのに僕は腹が立つたのです。

父上は僕の[illegible]がそれで直るだらう位にしか考へて居られないのです。僕は祖母上にそれを云つて怒りました。僕が豫備の軍人として恐ろしい戰爭に行つて死ぬ場合があるかも知れないと云ふ迄は父上はお考へにならないのだ。簡單すぎる。そして無責任すぎる。かう僕は祖母上に云つたのです。

所が、今思ひます。父上は僕が戰爭へ行つて死んで了へばそれは猶よい事だと思つてゐらしたのだと。どうですか？、姉さんはどうお思ひですか？。私のひがみでせうか？。確かに或る程度にひがみです。それは僕も知つてゐます。

然し、それは扨て措いて今度は去年の夏の怪我の場合に移ります。

二十九

(手紙の續き)

あの怪我で僕が不具者にもならず濟んだと云ふ事は實際「命拾ひ」以上です。十に一つ、恐らく二十に一つのそれは場合でした。それが僕に來たのです。僕は何に感謝していゝか解らない變な心淋しさを感じた位でした。何んといつても自分は何かから愛されて居るのだ。其資格ある善良な人間なのだと、こんな事を信ずる氣さへ起りました。

所が同時に「(若しかしたら左う思つたが故の反省から)それとは全然反對な者が、僕の死なかつた事を心から物足らなく思つてゐる事を

感じたのです。其人も此不慮の事が起らなかつたら多分考へなかつたでせう。然し偶々それが茲に起つて見ると、

「いつそ、死んで呉れたら‥‥」といふ事を不圖想ひ浮べる、左ういふ人が確かにある、左う僕は感じたのです。然し此考へは不愉快ですから僕は直ぐ自ら打消したつもりでした。

實際それはあり得る事です。僕にかぎつた事はありません。多分誰れにでも左う云ふ呪ひは多いか少ないかの差で掛かつてゐると云つていいかも知れません。然し向うの人間にしてもそれが自然に湧いて來る氣持なら仕方がないと思ひます。或る程度にそれは同情出來る事です。理性や道徳意識の手を不意にすり抜けて來る、左う云ふ惡い考へは實際直ぐ手を出しても一寸捕へにくいものです。が、それだけに尚、人はそれを決して放飼ひにはして置かないものだと僕は考へてゐました。それを放飼ひにして置く事は其人自身にとつても餘りに恐ろしい事であるからです。人を呪はゞ穴二つです。人はその恐ろしさからでも、出て行く時捕へ損じたそれを必ず捕へ、打碎いて了はずには置かぬものだと僕は考へてゐたのでした。

所が今思ひます。父上は‥‥。

こんな事を僕が書くのは姉さんには嘸ぞ不愉快でせう。腹が立つでせう。そして、僕の父上に對する心持を餘りに慘酷だとお思ひでせう。誤解だとお思ひでせう。邪推だとお思ひでせう。それでなければ誇張だとお思ひでせう。そして叔母さんの愚かしい失言に餘りに執しすぎてゐるとお思ひでせう。實際、誤解で、邪推で、誇張で病的で執し過ぎて居るかも知れません。自身、左うも思つてゐます。そして實際それが僕の誤解で、邪推で、誇張であつたらどんなに僕は嬉しいか知れないのです。

姉さんも御承知の通り、父上はこれまで絶えず僕には不服ばかりでした。僕が贅澤をしたがると云つてよくお怒りになりました。所が僕が贅澤に興味がなくなつてからは、怠けてばかりゐる、といつてよくお怒りになりました。然し間もなく僕は勉強家とは行かないまでも、それ程怠けなくなりました。すると父上は友達を呼んで夜晩くまで下らない雜談をしてゐると云つてお怒りになりました。これでは切りがありません。勿論僕にも惡い事はあります。然し父上のは如何に僕が變るにしても何かしら僕に對する小言の座右銘を一つ宛作つてゐられなければ氣が濟まれないのです。殊に僕が大學を中途でよしてからは一文の値打ちもないノラクラ者として絶えずイラ〳〵した氣持で僕に向はれました。實際所謂定職がないといふ事は其人の生活がノラクラに見えるものです。父上がさう思はれる事は無理ではないとも考へました。然し今思へばあの頃の僕は比較的勉強してゐた時代だつたのです。が、それすら父上には夜ふかしをする、朝寢をするといふ小言の種で、ノラクラの一部になつてゐたのです。此事も然し無理ありません。僕としては勿論不平な事でしたが。

そして僕は仕事の方で少しづゝ進んで行つたのです。僕は仕事の方で父上から直接の理解を得ようとは嘗て考へた事はありませんが、それが或る市價を生ずるやうになれば其時は流石に父上も或る程度に認めて下さるに違ひないと、其處に實は望みをかけてゐたのでした。幸ひ僕は間もなく或る雜誌社から仕事を賴まれました。一方世間に乘り出して行くといふ事に變な反感もありましたが、それにもかゝはらず、それを引き受けたのは前にいつた理由と、それから祖母上を喜ばして上げたいと云ふ氣も多分に加はつてゐたからでした。そしてその小說で僕は百圓貰ひました。出先きから歸つて來る

と、留守に其金が屆いてゐました。そして、それは祖母上の指圖でお盆にのつて神棚にあげてありました。その上、お神酒があげてあるのです。僕は變な氣がしました。然し祖母上がそんなにもそれを喜ばれた事は僕も大變嬉しく感じました。

三十

（手紙の續き）

祖母上は「お父さんにお話しておいで」と云はれました。僕には勿論それは氣輕く出來る事ではありませんでした。何かしら不自然を冒かす努力の要る事でした。然し思はぬい丶結果が待つて居ないともかぎらない氣がしたので、思ひ切つて中二階へ行きました。

父上は「何を云ひに來たか」と云ふやうな僕の險しい眼付きを向けられました。それだけで僕の氣持はかなり沮まれたのです。然し或る努力で僕はそれをお話しました、すると父上は如何にも興味のない調子で、「左うか」と云はれました、それ切りです。「それがどうしたと云ふのだ」と後につかないばかりです。僕はがつかりしました。そしてそんな事をわざ／＼云ひに來た事を腹から悔いました。

それにしろ、僕が初めて自分の仕事で金を取つた事が、父上にそれ程にも興味のない事とすれば全體僕は父上との關係をどうすればい丶のか、と思ひました。僕は屈辱を感じながら實に手持不沙汰な氣持で父上の前を引き下がつて來たのです。

（作者云ふ。私は此時の兄の氣持には心から同情して居ます。然し同時に父にも同情してい丶氣持はあつたと思ひます、父には兄がそれを云ひに來た氣持が「お父さん。お父さんはいつも僕を無能なノラクラ者と仰有いますが、僕でも金は、取らうと思へば此通り取れるのです」かう解れたに違ひないのです。此氣持も兄にはなかつたとはいへません。が、もつと素直な調子で「初めて金を取りました」から云つて父に喜んで貰ひたい氣持も勿論あつたのです。兄の手紙でも知れる通りこれが兄の氣持としては主だつたのです。若し父が兩方の意味を一緒に聽き取つて、其善意の方を一層强調して感じて呉れるやうだと、それが又何か新しい良い物を惹き出す機緣ともなり得るのですが、それが出來ないのが、永い／＼二人の歪まされた關係に生じた惡い惰性でした。一つの解りやうがあれば父は知らず／＼その惡意の方を選んで了ふのでした。左う解つて置けば間違ひはないと云ふやうに、左うしてそれは結局左う解つて置いて間違ひない結果になつて了ふのでした。

尤も此事では兄にも不純な矛盾があつたのです。兄がそれで金を得て父を喜ばさうとした其小說は、兄が自家にゐた千代と云ふ女中と結婚しようとした、其時のごた／＼を其儘に材料としたもので、中に出て來る父は決してい丶役をしては居なかつたのです。解らず屋の如何にも頑固な物質主義者になつて居るのです。私は父がそれを讀んだ場合に脅かされた位でした。兄は頭から父はそれを讀まないものに決めて居ました。然し若しも兄が心に望んだ程、父がそれに興味を持ち、そして、其小說を讀みたいとでも云ひだしたら、兄はどうするつもりでしたらう。兎も角、その小說から得た金で父に喜んで貰はうと考へた兄は、考へて見れば餘りに呑氣な、蟲のい丶人間と云はねばなりません。

それから父と兄との關係ではから云ふ事もあつた樣に考へられます。それは私の家では永い間、祖父が家長らしい家長として、ゆつたりとした氣持で皆の上に臨んでゐましたが、此事が惡い意味で父と兄との間を大變近くして

ゐたやうに考へられます。祖父──父──兄、此關係が等差級數的に行つてゐればいゝのです。所が、祖父──父、兄と云ふ風に父と兄とが同じ平面に立つて居た形だつたのです。年のちがつた仲の惡い兄弟、寧ろその方でした。其爲めか、父は何時も親らしい餘裕ある態度で兄に云ふ事は出來なかつたのです。直ぐ對等になつて爭つて了ひます。此點、父は兄に對する時と私達に對する時と大變異つて居たのでした。

父と衝突するのは勿論兄ばかりではなかつたのです。私も衝突しましたし、妹の豐子の方は私などよりも一層烈しく衝突したものです。そして父が嶮しい眼付きをしてガミ〱云ふ事は兄の場合と別に變りありませんが、最後に父の方も幾らか讓歩して呉れるのが、寧ろ多くの場合でした、そして、父は讓歩しながら、親らしい一種の餘裕を持つて「困つた奴だ」と云ふ位でした。が、これが兄の場合となると父は最後まで決して讓歩しません。讓歩は父にとつて負けでした。私共への讓歩は許容で、兄の場合では負けと云ふ氣が父にはしたに違ひないのです。

かう云ふ一種の張り合ふ氣持が──憎惡ではなく、張り合ふのです──これが折角芽ぐんだ良きものをも、その萌え出る前に踏みにじつて了ふ、これはよくした事のやうでした。)

三十一

(手紙の續き)

こんな事を云つても姉さんは一寸は信じられないかも知れません。然し僕には父上を喜ばして上げたい慾望は絶えず何かの形であつた事を白狀します。それが父上に對する本統の愛か、それとも僕の内に潛んでゐる何か多少卑屈に近い考へからか、僕自身でもよく解つて居ません。それにしろ、左う云ふ氣持が僕の胸に絶えず往來して居た事は不思議な本統でした。

次の事は多分滑稽に聞こえる事です。然し僕は故と其滑稽な例を書きます。それは先年小豆島に居た頃、屋島から金刀比羅、それから鞆の津、尾の道と云ふ風に船で廻つた事があるのです。僕は其時汽船の甲板で煙突の傍に腰をかけて、愚にもつかない空想にふけつて居ました。話相手の全くない孤獨な其頃の生活では獨り何か空想して居ると云ふ事は丁度東京での生活で誰かと口をきいてゐる、それに當る事でした。そして其時もどう云ふ順序で空想が其處へ達したか、それは忘れましたが、僕は自分が偉い發明をして非常に大きな飛行船を作つて、夫に乘つてゐる事を考へて居たのです。多分それは鞆の津から、大きな岩の上にある阿武兎觀音へ向ふ時でした。其邊にはひねこびた老松の生えた二三百坪程の殆ど一つの大きい石から出來てゐる島が幾つかあるのです。僕は其一つを非常な力を持つた飛行船で、根こそぎにする事を考へたのです。飛行船は鷲が鼠の死骸をさらつたやうに、それをつり下げて東京の方へ飛んで行きます。そして夜の間に東京の自家の庭にそッと下ろして置きます。誰れも知りません。そして夜が明けます。父上が起きられます。御覽になります。どんなに驚かれるか。そしてどんなに喜ばれるか。(父は庭とか盆栽とかを甚く愛してゐました)僕はこんな事を考へて居たのです。他愛ない事です。然しかういふ空想は其時ばかりでなく、尾の道へ着いてからも、其處の千光寺と云ふ山寺へ登つて「珠の岩」といふ寶珠の玉形をした、一寸小さい二階家位ある石を見て、同じやうな事を考へたのです。これはどう云ふ氣持でせう。何故か僕は祖母上を喜ばして上げる空想は餘りしません。そして反つて、絶えず此方からも不服な父上に對して

のみ・かう云ふ空想を僕はするのです。知らず知らずして居るのです。僕が父上に對して實際現はしてゐる態度を見て誰れも僕にかういふ氣持のある事は察しもされない事と思ひます。然しそれも父上にだけはどうかした場合、それが通じないとはいへないと云ふ氣を持ちました。自分にあるだけに、父上にも夫がないとはいへない氣がしたのです。然し今は左う云ふ望みも僕は捨てました。

それにしても、父上は全體僕に何を望んで居らつしやるのでせう？　僕が藝術上の仕事で一トかどの事をした所で、そんな事は父上にとつては爪のあかです。僕は左う考へます。それより反つて、「僕には迚も藝術上の天分はありません」かうとでも若し云へば初めて父上は僕に笑顔を見せられるかも知れません。然しそれとても、其場ぎりの事です。假りに僕が會社員となるか銀行員となるかしてもそれで父上との關係が總てよくなるとは考へられません。矢張り直ぐもとの木阿彌です。恐らく父上は僕に今は何にも望んでは居られないのが實際と思ひます。若し望んで居られる事があるとすれば、叔母さんに云はれた事を盾に取つて云ふのではありませんが、僕が死ぬ事です。僕が早く死んで了ふ事です。左う思ひます。

姉さんは僕が餘りに執念深く、そして色々な事を、好んで惡意に解つてゐるやうお考へになるでせう。僕も少しは書きすぎて居ます。けれども、更にかう云つたらどうですか。それでも誇張でせうか。僕が若し、病死なり自殺なりをします。其時父上は多分可哀想な事をしたとお思ひになるでせう。が、同時に初めて父上はホッと息をつかれます。この事はどうですか。姉さんも此事までは否定なさるまいと考へます。

――

僕は疲れました。これで筆を擱きます。そして今は興奮も去りました。僕は何んだか色々な事を書いたやうな氣がします。書いてはならぬ事も澤山書いたやうな氣がします。僕はもう此手紙を出すのが少し厭やになつてゐます。然し兎も角破らずにとつておきます。そして姉さんだからこんな手紙を書いた事を覺えてゐて下さい。他の人だつたらかうは書きません。若し僕が此手紙を出したら、そのつもりで見て下さい。

本統に僕は今疲れ切つてゐます。氣持もすつかり靜まつてゐます。どうか餘り心配しないで下さい。

三十二

（兄の手紙にはもう一つ次のやうなものが同封してありました。前の手紙から二日して書いたものです）

姉さん。僕は今自分を本統に恐ろしい人間だと思つて居ます。前のやうな手紙を平氣で書いた事を本統に恐ろしく思ひます。何と云ふ無反省な人間でせう。僕は自分だけが父上から呪はれて居るやうに書いて居ます。然し「そんならお前は如何だ」と、かう訊かれたら、僕はこれに何と答へられますか。若しも父上が「それならお前は俺が死んだ時にホッと息をつかないか」かう云はれたら何んと云つたらいゝでせう。迚も「決して……」とは云へません。寧ろ「屹度」です。屹度僕はホッと息をつくに違ひないのです。こんな自分でありながら自分の事を棚にあげて、父上に對して不服を並べてゐます。惡いのは僕です。僕だけが惡いのです。かういふ僕を父上が愛されないのは實に當然な事です。然しどうか許して下さい。僕も根からの惡い人間ではありません。馬鹿なのが直に境遇に卷込まれて了ふのです。つまりは馬鹿だからです。そしてこれから先もかういふ關係を續けて行

く事はどう考へても無意味だと思ひました。徹底的にどうかしなければなりません。此儘で、そんな恐ろしい考へを胸に祕めつゝ生きて行く事は此世を好んで地獄に變へる事です。凡そ馬鹿馬鹿しい、そして惡い事です。僕には未だ未練があります。いゝ意味での未練があります。然し僕は自分の力を信ずる事が出來ません。なま中信ずれば屹度しくじります。僕は矢張り一人何處かへ行かうと決心しました。

然し僕に就いて、どうか心配しないで下さい。元々自分らしく生きたい所からの家出です。自暴自棄の行ひをしては餘りに水の泡です。今は父上との事のみが僕の眼に度強く映つてゐるからですが、これが人生の總てゞない事は理性がよく知つてゐます。

只僕の胸に痛いのは祖母上とお別れする事です。祖母上がどんなに淋しがられるか。それを考へると堪らない氣がします。然しそれも祖母上に堪へ忍んで頂かねばなりません。左うでないと今の僕はどうにも動きがとれなくなります。そして僕さへ居なくなれば自家の渦卷きは自然にをさまるのです。

小豆島へ行つた頃の經驗から思ふと、僕もこれからはかなり淋しい活き方をしなければならぬと思ひます。が、僕はそれに堪へて見せます。どうしても堪へなければなりません。お國の曾祖母さんや、お伯母さん（祖母の長姉）の事を考へると祖母上もまだ／＼御丈夫に違ひありません 祖母上が御丈夫でさへあれば屹度僕も歸つて來ます。何よりも丈夫でゐて頂きたく思ひます。

それから母上に對しては僕は心から感謝して居ます。母上は實に立派な方と思つて居ます。義理の母上としてはこれ以上望めない所まで何時もして下さいました。母上にはくれ／＼もよろしく。そして僕の家出に就いては餘り氣をもまれぬやうにとお傳へ下さい。

芳三、豐子、君子等に對しては深い愛情を持つて居ます。皆との左ういふ關係が父上との事の爲めに犧牲になるのは悲しい氣がします。

姉上もお身體大切に。姉上の所の小さい連中の事も僕は何時までも忘れません。

ではこれで筆を擱きます。

前の手紙其儘でお送りします。これと一緒に讀んで頂けば却つていゝと思ひます。

（兄は此外に伺祖母と兩親とに宛てた手紙を書いてゐます。祖母には心配しないやうにと云ふ事を繰返し書いてゐました。兩親へはよりよく生きる爲めにはこれが自分に必要なのだといふ事、そして家を私に繼がす事に躊躇しないで貰ひたいと云ふ事、それから形式的には仕方がない迄も、それ以上に自分の跡は追求しないやうにと云ふやうな事が書いてありました）

三十三

兎も角、兄の家出は一家に暗い影を投げました。

最初に祖母が變に意固地になつて了つたには皆困らされました。祖母は其日から三日位の間は、興奮から、のぼせた赤い顏をして居ました。それが矢張り頭に來てゐたのです。多分四日目です。朝、私が茶の間で新聞を讀んでゐると、傍に坐つて居た祖母が獨りクスリ／＼笑ひ出しました。見ると、祖母は疊の上を人さし指でしきりに擦つて居ます。

「どうしたんですか」かう云ふと、

「蜘蛛が居た……」と、伺指で疊を擦つて居たのです。

「どう？」左う云つて其指を退けて見ると、それは小さい燒け焦げの跡なのです。

「燒け焦げぢやありませんか」

「蜘蛛です」祖母は出鱈目を云ふものではないとたしなめでもするやうに云ひ切りました。「足を此通り動かして居ます」
「それは足ぢや、ありませんよ。餘り擦するので燒け焦げのまはりがさゝくれたんですよ」
「左うか？」と祖母は案外素直にそれから指をはなして、快活に笑ひました。其笑ひ方で、私はこれは少し變だぞと思ひました。私は急に或る不安に襲はれました。私は祖母自身に其變だと云ふ事を氣附かす事が妙に恐ろしい氣がしたのです。そして、
「うん成程、一寸蜘蛛に見えますよ。まはりのさゝくれが何だか動くやうな氣がしますよ」と云ひました。
「お母さん、おぐしを上げませうか」と臺所の方から熱い湯を入れた小さい金だらひを持つて、母が出て來ました。
「頭がかいくて困つた」切下げの、然し年にしては澤山ある半白の髮の毛の間から指を入れて頭をかきながら祖母が云ひました。
「アルコールを入れませう」母は側の戸棚からアルコールのびんを出して、熱湯にそれを少し注ぎ入れました。
二人は化粧間にしてある、日當りのいゝ三疊の方へ行きました。
私は矢張り其處で新聞を見て居ました。すると暫くして、三疊の方で祖母と母とが笑ふ聲がしました。そして母の聲で、
「芳三。芳三」と呼んで居ます。
私は起つて行きました。
「お祖母さんが障子のさんにお蠶さんのやうな蟲が這つて居ると仰有るんだけど……」
又何かを見て居るなと私は思ひました。そして、
「どれですか？」となるべく何氣なく訊いて見ました。
「其處に這つて居るのが見えませんか。それが若い者の眼で見えませんか」かう云つて祖母は日のよくあたつて居る、下から三段目のさんの或る所を指さして居ます。「何か居るかな？」私は故と丁寧に其處を調べて見ましたが、實際に何も居ません「何處かしら。此邊ですか？」
「其這つて居るのが見えないかつす」祖母は焦れつたさうに國言葉を出して云ひました。
「何かお間違ひでせう」と母は笑つて居ます。
私はいよ〳〵祖母の頭がどうかしたのだと思ひました。それでも何、何かを見誤つて居るのではないかと云ふ氣がしてよく見ると、成程蠶によく似た形の小さいものが其處にありました。障子をはつた時、幾らか糊をつけ過ぎた、それが實に僅か、紙に添うて、さんからはみ出したまゝ固まつて居るのです。長さが二分か三分です。それも半透明で紙の色と同じだから、私の眼でも一尺離れると一寸見失ふ位でした。それを祖母は三尺位離れた所から見て居たのです。年をとつて反つて眼のよくなる方の人もありますが、祖母は左う云ふたちではないのです。兄や私の足袋繼ぎが祖母の仕事になつて居ましたが、絲は常に人に貫して貰はねばならぬのでした。私は變な氣がしました。然し兎も角、其處にそんなものゝあつた事は祖母が幻を見てゐたのでないだけいゝと思ひました。
「本統に！ ありますよ。お祖母さんの眼は實にいゝな。それに全くお蠶の形ですよ」かう云つて、私はそれが糊のはみ出したものだと云ふ事を說明してやりました。眼の性の係りよくない母にはそれを教へるのに骨が折れました。
然し祖母は矢張頭を惡くして居たのです。眩暈がすると云つて午頃から寢ましたが、それから一週間程起きられずに夜晝よく眠つてばかり居ました。

三十四

兄の家出の理由に就いては兄の思ひ過ごしだつたと云ふ氣がします。殊に父が其後の取り方を見ると猶そんな氣がしました。勿論父にも兄の云ふやうな氣持がなかつたとは云へません。然しそれが總てゞない事も確なことでした。只、當事者たる兄が夫を總てかのやうに強く感じた事は仕方のない事で、それは知らず／＼誇張されて居たのです。然し又、見やうによれば若しも二人の關係があの儘の勢ひで、あの儘の方向へ進むものとしたら、兄の其誇張は——即ち兄の家出は結果から云つて、或は「轉ばぬ前の杖」であつたかも知れないのです。が、それとて誰にもはつきり云へる事ではありません。

自家では警察の方や、それから私立探偵のやうなものにも頼んで、兄の行方を探して貰ひました。然し何の消息をも得られませんでした。

それからの永い年月に就ては、細々した事はありますが此處には書きません。姉の良人の失敗、私の結婚、姪の誕生、左う云ふ事で、さした事もなく、九年經ちました。

其處で私は信州の或る寒村へ入つて了つた姉が、今度はもう助かるまいと云ふ知らせを受取つた、そして此話の最初に書いたやうに——それを私が見舞に行く、あすこまで、この思はず延びて了つた筆を還さうと思ひます。

……信州の高原へ來ると、それはもう遠い山山の頂に薄く雪の見られる初冬の景色になつて居ました、私はその或る停車場で降りると、猶十何里奥へ入つて行かねばなりませんでした。其晩は迚も行けないと云ふのですが、一ト足でも近く行つて居たい氣持から私は餘り喜ばない車夫に金を餘計にやつて漸くそれから五里ある或る村まで其晩の中に行く事にしたのです。暗い夜でした。急流に添うて新しく開かれた爪先上りの路を私は襟を立てた外套の中で寒さに身を堅くしながら乘つて行きました。

川添ひの一軒家で、新しく出來たらしい旅人宿に着いたのは九時少し過ぎでした。宿では戸を下ろして皆寢てゐました。然し車夫が聲を掛けると、直ぐ、細帯をした儘の女主が戸を開けて呉れました。

大きい圍爐裏では未だ火が燃えて居ました。其方を足にして、まはりに三四人の人が寢て居ました。

私は直ぐ下に水音を聽く、未だ壁なども中塗りのまゝの奥座敷に通されました。床には石版の山水大將夫妻の軸が掛けてあつて、其前に鶴の形に作つた木の根の置物がありました。女主がいゝおき火を山に積んだ今戸燒のやうな火鉢を持つて來て呉れたので、先づ何よりも助かりました。間もなく、岩魚の煮びたし、それから椎茸と麩の水つぽい汁、左う云ふ食事が來ました。

少時して、もう寢ようと思つてゐると、愛想ぶりに話相手になるつもりか、[illegible]いて來たないに綿子半纏を羽織つた車夫が入つて來ました。綺麗に洗つた足だけがいやに眼立つて居ました。

此車夫は實は此處から停車場の方へ還る筈でしたが、村の車夫が今居ないとかで、これから先も此車夫に行つて貰ふ事にしました。

車夫をかへすと直ぐ寢床へ入りました。足を延ばすと踵が疊へ出るやうな小さい蒲團でした。流れの音が何んだか淋しく枕へ響きました。枕元の火鉢には又澤山いゝおき火を入れて貰つたので、小さい鐵瓶がシン／＼と音をたて始めました。車夫と女主とが何か話してゐる聲が聞こえて來ます。車夫は酒を飲んでゐる風でした。

外では先刻吹いて居なかつた風が吹き出し

て、雨戸をガタコトいはせます。何故か障子の一番上のさんだけはついてないので其處から風が來ていやに冷え〳〵しました。

私は何時か眠りました。

三十五

翌朝寢て居る所に女主が炭火を入れに來ました。風は未だ吹いて居ます。私は顔を洗つてから、川に面した肘掛窓を開けて其日當りのいい所に腰かけました。前夜は暗くてよく知れませんでしたが、川幅は思つた程はありませんでした。然し水量は多く、それが勢ひよく流れて居ます。向う岸の川楊の枝が烈しい風に吹き振られて居ます。一しきり又烈しい風がぱつと來ると岸から流れの方に延びた儘枯れて居る眞葛の葉が力なく蔓を離れて吹き上げられます。或るものは流れへ落ち、或るものは岸を傳はつて轉ろがつて行きました。

岸から一寸した畑があつて、其先が直ぐ山になつて居ます。其處には赤茶けた枯葉を澤山につけた未だ若い榧が一面に生えて居ます。其山の上は直ぐ若い空でそれが又如何にも濃く澄み渡つて居ました。

朝食を濟ますと、俥の支度が出來てゐるので直ぐ出掛けました。然し俥はそれから四里半しか行きませんでした。或る傾斜地の村があつて、其處からは田も畑も林もない荒蕪の高原になるので、三里餘りは歩いて行かねばならぬのです。私は其村で新しく雇つた人夫に荷物を背負はせて出掛けました。

村から一段登ると、其處はもう全くの高原になつて、何といふ木か、人の腰位しかない灌木がポツリ〳〵生えて居る他、所々に若い白樺が見られるだけで、道はあつても、それが、大雨の後、一時に流れる水の爲めに薬研のやうに掘られてゐました。其上時々來る深い霧の爲めに其赤土が濡れてゐるから、靴では滑つて閉口しました。又只流れの跡で、三四尺幅の左ういふ溝が至る所、縱横に走つて居ます。大雨の後は一時に其總てに水が奔流するのださうです。その有樣を想像すると、何んだか夢の中に出て來さうな景色か思はれました。

寒い西北の風が背後から吹きつけます。時々私共の足元からピイッと鋭く鳴いて、風と一緒に石でも投げたやうに低く飛んで行く小鳥があります。

寒いので私達は急ぎ足で行きました。そして同じやうな景色の中を凡そ二里餘り來た時に私は自分達より先に行く一人の男の姿を見出しました。此方の方が足が早いので自然追ひつきましたが、其男は古ぼけた縁のくづれた黒い二重まはしを着て、同じやうに古い鍔廣の黒い帽子を阿彌陀に被つて居ました。猫背の見すぼらしい姿でトボ〳〵と歩いて居る所は旅の者らしくもなく、更に又此邊に住んで居る人と云ふ樣子でもありませんでした。不意に烈しい風が來ると、押されるやうに五六歩駈けて居ました。そして時々まはしの裾が風にあふられ、歩く足の間に挾まつたりしても如何にも左う云ふ事を意に介さない風に又トボ〳〵と歩くのです。

私は其男が何者であるか。追越して行く時顔を見合はせながら氣がつきませんでした。――それが九年ぶりで見た兄だつたのです。

――芳三か？――かう聲を掛けられると、私はドキリとしながら、其瞬間非常に多くの事を一時に頭に浮べたやうな氣がしました。

兄はなつかしさうに私の顔をぢつと見入りました。其眼は柔かい、そして温かい感情を含んで居ましたが、それにかゝはらず、ぢつと見られると私は變な壓迫を感じました。それは兄が家出をした頃のあの如何にも自信のないオド

オドした眼なざしではありません。私の全く豫期しなかつたものでした。見すぼらしい姿、トボ〳〵とした歩み、そんなものを超えた眼なざしでした。

三十六

私共は言葉少なに歩きました。

何と云つても一人の兄です。私は妙に感動して了ひました。そして其感動は兄にもあつたやうに思はれました。これが尚二人を沈默勝ちにしました。私は祖母や兩親の爲めにも色々云ひたい事や、聞きたい事があつたのですが、それを今直ぐ云ひ出すのが、何かしら不躾らしくも又不自然にも思へて、左う云ふ事には觸れられませんでした。そして私には「ずつと御丈夫でしたか?」とか「遠くからいらしたの?」とか、そんな事きり云へませんでした。兄の方も「お祖母さんは御元氣だネ?」と云ふ位でした。

日が入ると急に凄くなりました。私共は漸く此高原を通りぬけました。

其處は小さい山の麓で五六軒の農家で出來た寒村でした。それが薄暮の中に靜まり返つて居ます。姉の家は一番奥で、前が茶畑になつて居て、屋敷の入口には五つ六つの赤い實をつけた大きな柿の木がありました。

廣場があつて、その側に納屋か何かの建てかけがありました。母家は割りに大きな家で、其軒下にむいた柿が藁繩に下げられ、幾すぢか渡してありました。

家の中は妙にひつそりとしてゐました。人夫が先に立つて、土間の大きな敷居をまたぐと、土間の暗い隅で、十三四の男の兒が竈の下を焚いて居ました。薪割臺に腰かけたまゝ火の赤く映つた顔を向けて不思議さうに私共を見てゐます。その何んとなく險しいやうな眼差しが矢張り私共一家の――と云ふより私の父の血をうけて居る事を示して居ました。

「正男ですよ」私は兄に注意しました。それは七つから見なかつた私共の甥なのです。

「左うだ」兄も微笑しました。

「お客樣でムります」大きい聲で人夫が奥へ聲を掛けました。八重子と云ふ姉の上の娘が出て來ました。

「兄さんと芳三だ」から云ふと、八重子は驚いたやうに、返事もせずに又奥へ驅けて行きました。

私は疲れからかまちへ腰かけて居ました。すると「まあ〳〵」と云ふ聲がして姉の姑が半分駈けるやうにして出て來ました。その後から釣洋燈を持つた姉の良人が出て來ました。義兄は七年間に如何にも田舍者らしく變つてゐました。日にやけた顔には耳の下から顎へかけていやに太い皺などが二三本出來てゐて、二寸程に延びた髪にも、もう大分白髪が混つて居ました。

「さあ、どうぞ」義兄はから云ひました。

「姉さんは如何ですか」から云ふのに、義兄は答へずに又、

「さあ、どうぞ」と云ひました。

「さあ…」姑もから云ひます。珍客でももてなす樣な其調子が大病人のある家とも思へない氣がして、若しかしたら姉の病氣も知らせ程ではないのかしらと一寸思ひました。然し姑は「ようこそ」と云ふやうな事を云つた口の下から急に聲をひそめて、實は昨日一度息が絶えたので、死んだ事と思つて居ると、一時間程して未だかすかに息のある事を八重子が氣附いたと云ふ事を話しかけました。すると、義兄は荒々しい調子で、

「そんな事を今云はんでもいゝ!」まるで下僕でも叱るやうに云ひました。

「左らか／＼」姑は二三度輕く頭を下げて、私共の顏を見て、自信のない變な笑顏をしました。

三十七

姉の床は廣い部屋の黒光りのする大きな板戸の前へ片寄せてとつてありました。姉は仰向けに眼をつぶつて寢てゐました。掛けた蒲團が薄い所に身體も骨と皮ばかりになつてゐる爲めか、上が平べつたく低く見えてゐるのが、一寸死人が寢てゐる時のやうな氣がしました。

兄は傍へ坐つて默つてその顏を覗き込んでゐましたが、姉にはまるで意識はない風でした。落ち窪んだ眼や、半分は垢かと思ふ色艶の惡いカサ／＼した皮膚とかを見ると私は堪らない氣持になりました。人の一生がこんなにして終らねばならぬといふ事は恐ろしい以上、物凄い感じがしました。死んで了へばどういふ死も結局は同じであるとしても、此場合すゝけた變に廣い部屋に暗い釣洋燈が一つ、そして見るもの何一つ華やかな色もなく、姑と良人との心持にもう色も温かみもないやうな感じから、私には此光景が既に黄泉のやうに感じられたのです。私は若しも同じ死の床を赤十字病院の病室のやうな所で見出したとすれば死の恐ろしさを此半分にも感じなかつたかも知れません。色々な草花、白い壁、白いシイツ、死別に泣く人々、そんなものが、まだしも其恐れを和げて呉れるのです。所が此處では何一つ左う云ふものはありません。私は無限の闇に落ち落ちて行く、丁度寢つきにどうかすると左う云ふ氣持になる、それに似た死の恐れを感じたのです。鳥が啼いたり、蟲が飛んだり、日が照つたり、風が吹いたり、花が咲いたり、犬が駈けたり、子供が騷いだりする明日のある事がどうしても頭に浮んで來ませんでした。死が永遠の闇なら人生は高原での寒い日の薄暮といふやうな氣がしたのです。少なくも姉にはそれは實際に左うだつたと云ふ氣がして來たのです。

私は若しも一人で此場に來たのであつたら、どんなにこれが恐ろしかつたか。然し其處に兄がゐます。兄は高原で見出した時にはトボ／＼と、何となく暗い物悲しい感じを受けましたが、今は唯一の手頼りの氣がして來ました。殊にあの眼、それは死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼でした。實際兄は姉の其姿を凝つと見詰めて居ながら、現在私がすつかり捲込まれて居る其氣分には少しも捲込まれずに居る事が感じられたからです。

姉の病氣は惡阻から變化した餘病のやうですが、はつきりした事はわかりませんでした。今は醫者にも見せて居ないのです。そして燈心灸といふのをやる隣村の提灯屋に毎日來て貰つてゐると云ふ話でした。私は姑や義兄の話ぶりが幾ら意識が不明であるとしても、其本人を前にして云ふには餘りに傷々しい事を平氣で云ふには閉口しました。そして餘りに執着なく死を決め込んでゐるのが不愉快でした。

八重子が臺の高い置洋燈を持つて來ました。それについて四つ位の愛らしい女の兒が入つて來ました。女の兒は姑の方の親類の兒を預かつてゐるのだとか、可愛がるので姉といつも寢てゐたが、病氣になつてからは段々女の兒の方から冷淡になつて、今は側へ寄るさへ恐ろしがると云ふ姑の話でした。

「叔母さんに抱かれて御覧」姑は自分の話が本統である事を示す氣か、こんな事を云つて其兒を病人の方へ押しやりました。女の兒は泣きさうな顏をして、やにはに姑の膝へ乘ると胸の開きから手を深く差込んで切りに姑の乳房を探つて居ました。

三十八

翌日は晴れて風のない、いゝ日になつてゐました。姉の寝てゐる部屋にも其秋らしい穏かな日が差込んでゐました。前夜のうなされてゐるやうな私の息苦しい氣持も其日差しを見ると何か夢のやうな氣もされるのですが、其處に仰向けに寝てゐる死んだやうな姉を見ると前日とは異つた矢張り淋しいイヤな氣持になりました。兄は其日の當つた所に胡坐をかいて、外を眺めてゐました。

私共が爐端で、朝の食事をしてゐる時に、隣村の灸をする男が來ました。其男はユックリと煙草をのみながら、稲作とか繭の出來などを義兄と話してゐました。私は下駄を借りて、正男を連れて直ぐ後ろのはじや漆の紅葉が綺麗な山へ登りました。山への登り口に山から引いた清水が筧から四斗樽に落ちてゐました。

私は正男に東京へ出る氣があるか、そしてどういふ事をしたいかといふやうな事を訊きましたが、正男は子供に似合はずアンビシアスな氣持を少しも現はしませんでした。私は若し左う云ふ氣持でもあれば、どうかしてやりたい氣がしてゐたのです。又一方には左ういふ事を聽く事で自分の氣持も引き立てたい氣があつたのですが、私が豫期してゐたやうな返事を正男はしませんでした。そしてそんな話をしてゐる時に直ぐ足元から山鳥が驚く程強い羽音をたてゝ飛び立つた時に正男は自分はどんなのでもいゝが鐵砲が一梃欲しいのだと云ふ事を、それが唯一の望みであるかのやうにいひました。

私が歸つて來た時には丁度提灯屋が燈心灸を始めた所でした。其男の話だと、總ての病氣は體内に惡い瓦斯が溜る所から起こるもので、その出所がない爲めに色々な機關を冒し、神經を刺激するのだといふのです。それ故その出所をさへつけてやれば瓦斯が自然とれて病氣は直る。瓦斯が出たがつてゐる所だと燈心の火が三尺も四尺も飛ばされる事があるといふやうな事をいつてゐました。

何か呪文のやうな事をとなへながら、ともし油で火をつけただ心を鳩尾の邊に輕く打ちつけてゐます。そしてその打つて離す運動が多年の熟練から如何にも中の瓦斯ではね飛ばされでもするやうに見えるのでした。これは元來可成り熱い灸だといふ事ですが姉には全く感覺はないやうでした。病氣が直るに從つて、段々熱く感じるのだと其男はいつてゐました。そしてかうしてゐる内にも病氣は少しづゝ移動するのだからといつて、今度は下腹の方へそれを打ちつけてゐました。

姉のかういふ意識のない状態は一週間以上續いてゐるといふ事です。所が姉は不意に其一週間つぶり續けた落窪んだ眼をパッチリと開きました。それは全で豫期しない澄んだ眼で、眼差しもはつきりとして、私共の顔を一人々々凝つと見ました。誰よりも驚いて感動したのは八重子でした。八重子は泣きさうな聲をして私共の來た事を第一に告げました。姉は默つて首背くやうな事をしましたが、實際に矢張り本統でない證據には、私共を見ながら只ケロリとした顔をしてゐるのです。

—兄さんと芳三です。わかりますか—と私は顔を寄せて云ひましたが、姉は首背くだけで、何もいひません。わかつてゐないのでした。

—お母さん。お母さん—八重子は興奮して只耳へ口を寄せて叫ぶばかりでした。

—何か云ひたいやうだ、湯かお茶を上げて御覧—兄がかう云ひました。八重子は急いで小さい急須を持つて來て、それから口へ水をたらしました。

姉は嗄れた小さな聲で何か云つてゐます。

八重子が耳を寄せて聴きますがよくわかりません。

「えゝ？……えゝ？蒲團が？……」八重子は大きな聲で、こんな事をいつてゐましたが、

「何だかよくわかりませんけど、蒲團をよごすといけないからとか云つてゐらつしやるわ」と私の方を向いて、悲しさうな當惑顔をしました。

私が代つて聴いて見ました。

三十九

姉の云ふ事はよく解りませんでしたが、何んでも今死ぬのに客用の蒲團を汚して了ふのは勿體ないから、何處とかに入れてある、きたない蒲團と、納屋の上へあげてある、子供が汗疹の時使つた砂を入れた枕を出して、更へて呉れと云つてゐるらしいのです。

それを云ふと、八重子はべそをかくやうな顔をして、小聲で、

「そんな事が出來るものですか」と云ひました。

其處に義兄が入つて來ました。そして八重子が泣きさうになつてその事を話すと、義兄は、

「そんなら左うしてやつたらいゝ」と云ひました。それが、左うしてやつた方が氣休めになるからといふ意味か、それとも姉自身がいふやうに蒲團を汚さない方がいゝと云つてゐるのか分明しない程、私には冷めたい感じがしました。

姑は流石に不贊成をいつてゐましたが、兎も角、更へないまでも氣休めに更へる事を承知した事だけ通じさす方がいゝといふ事になりました。

「お母さん。お母さん」と八重子は大きな聲をしてそれをいふと姉は首肯いて安心したやうに又眼をつぶりました。

「氣がからはつきりするのはいゝか、惡いかだネ」と灸をすゑる男は腕組みをしていひました。

「若しかすると、これで間もなくいけなくなるかも知れないネ」

畑へ出て行つたばかりの正男が呼ばれて歸つて來ました。八重子は息をはずませながら今の事を話しました。正男は驚いたやうに眼を丸くして聽いてゐました。

其男がいつたやうに十分しない内に急に姉の様子が變つて來ました。つぶつたまゝ引きつるかして、半眼に白目を見せて、呼吸の間が段々延びて行きました。そして死んで了ひました。

八重子が聲を張り上げて泣き出しました。

姑も正男も泣いてゐました。兄の頬にも涙が流れてゐました。私も泣きました。只良人だけが其中で泣きませんでした。

間もなく村の人達が集まつて來て、急に家の中は賑やかになりました。近所の内儀さん達が襷をかけて、土間で御馳走の支度を始めました。

若い男が納屋から棺桶をかついで來ました。それは三日前一度息が絶えた時に近い村の桶屋に人を遣つて誂らへて了つた、そして、それを斷わらなかつたから昨日出來て來たのを納屋に入れて置いたのでした。

兎も角其日は終日何かしら皆忙しく立働きました。兄は姑から頼まれて會葬者が額へつける、よく亡者の額にある三角の紙を幾つも作つてゐました。

八重子は若し母が又生き返る事がないとは云へない氣持から時々その白い布をあげては顔を覗き込んでゐました。

義兄は私共と話す時よりはもつと快活な大きい聲で村の人達を相手に何か話してゐました。皆は話しながら酒を飲むのです

葬式は翌日の午前中にする筈で、然し死體は今夜の中に棺へ納める事に義兄は決めてゐました。そして日が暮れて、表では丁度皆が酒を飲み談笑して居る時に、私共は奥の間で湯灌をしたのです。

姉の死體は垢だらけでした。兄と私とは顔の部分を洗つて居ました。

兄は一度八重子に返した糠袋を又貰つて時々覗き込むやうにしては姉の耳の下を丹念に擦つてゐました。

「叔父さん、それは痣ですわ」と八重子は氣がついて注意しました。

「左うか？」

「お生れつきの痣なのよ。叔父さんお忘れ遊ばしたの？」と不思議さうに八重子は兄の顔を見て居ました。

「左うかな」からいつて兄はもう一度其處を覗込んでから少し氣まり惡さうに其糠袋を八重子の方へ返しました。

四十

兄が姉の痣を忘れてゐたといふ事は、書捨てて置いた原稿の斷片で、兄が此の痣を書いたのを知つてゐる私にも不思議な氣がしました。

それは此死んだ姉が、此處に嫁入つた年の事でした。嫁入前といふので兩親から八釜しく云はれて夜なべに裁縫の稽古をしてゐる時でした。

其頃中學校に通つてゐた兄は十四五でした。

或晩、釣洋燈の下で姉が一人少し上氣したやうな顔をして一心に針仕事をしてゐると、兄はすることもなく其處で仰向けに、丁度姉の羽織の袖が疊に流れてゐる、其處へ頭をやつて寢ころびながら、何か雜誌を見てゐたのです。間もなく兄はそれに厭きると雜誌をなげ出してボンヤリと天井を眺めてゐましたが、不圖姉の艶々した日本髮の其ふくらんだ鬢の下から桃色の柔かさうな耳が半分出てゐる、それへ眼をやると、兄の注意はその下に青味がかつた拇指の腹程の痣がある、それへ移つて行きました。肌理の細かい滑らかな皮膚を透して見られる青味を帶びたその痣が其時何故かひどく美しく思はれたのです。兄には何氣なくそれに觸れて見たい不思議な慾望が起つて來ました。兄は側にあつた物尺をとると暫く無心にそれを弄んでゐる風をしてゐましたが、其間で一寸それを痣へ觸れてみました。姉は默つて肩を上げ、首を曲げて其處を拭くやうな事をしました。

其樣子が一層兄の慾望を強めました。もう一度何氣なく前よりも強く物尺の端を其處へぶつけました。

「あぶないわ」姉は今度は眉を顰めて兄を見下ろしました。

「御免」からいつて兄は其儘物尺を横にしましたが、どうしても、もう一度やつて見なくては矢張り氣が濟まなくなりました。兄は又物尺を立てゝ何氣なく動かし始めました。すると、姉は氣がついて、

「おもちやぢやない事よ」叱るやうにいつて手荒く物尺を取り上げると、それを反對の側に置いて了ひました。

兄は其時自分の慾望を見抜かれたやうな氣がして、それで一種妙な羞恥心を感じたのです。しかも其慾望がどういふ性質のものか、自分でも解らぬなりに、それでも倘兄はもう一度それを繰り返さずにはゐられない氣持になつて居たのです。

「あ——あ」こんな事を云つて兄は起き上りました。そして姉の背後に廻りましたが、その美しい襟足を見ると矢張り何んとなく躊躇されるものがありました。

「イヤよ。いたづらしちやあ」姉は不安らしく尻を廻しました。

「大丈夫だよ」

然し姉が又針を運ばし出すと、兄は、

「わつ」といつて姉の兩肩を兩手でドンと突きながら、其際どい間に一寸指の先で痣に觸れ

て逃げて行きました。

「まあ、ひどい」といふ聲が後からしました。

兄の其斷片には大體こんな風に書いてあつたのです。兄としては可成り古いものらしいので、恐らく悲以上にこんな斷片を書いた事を兄は忘れてゐるかも知れません。然し假りにその何方かを覺えてゐるとしても今の姉の悲はそれとは到底附き得ぬまでに醜いものと變つてゐたのも事實でした。其れはカサ〳〵と油氣のぬけた皮膚に着いた一つの汚い汚點とより見えませんでした。

其夜は皆でお通夜をする筈でしたが、私は翌日葬式の濟み次第出發する事にして居たので、十二時頃から先へ床へ入りましたが、翌朝起きて見ると、兄は何時の間にか、誰れにも云はずに何處かへ行つて、もう其處には居ませんでした。

私は殘念な氣がしました。一晝夜以上兄と一緒に居ましたが、其間、妙に話したり訊いたりする機會を私は捕へる事が出來なかつたのです。然し歸途、若し兄も一緒に其處を出る事を承知したら、それから色々話しもし、訊きもする事が出來さうに思つて居たのです。後で思ふと、兄には私の話したい事も訊きたい事も總て解つて居たのかも知れません。それに違ひなかつたのです。私としてもそれは話さねばならぬ事、訊かねばならぬ事ではなかつたのです。只、話して置きたく、訊いて置きたい、それは寧ろ左う云ふ氣持だつたのです。そしてそれが兄には餘り望ましい事ではなかつたのでした 兄は飄然と又何處かへ行つて了つたのです。

以來今に丁度五年になりますが、同樣何の消息もありません。或る時、北海道で土工をして居る兄を見たと云ふ事を知らせて呉れた人があつて、調べて貰ひましたが、これは矢張り人違ひでした。

その後では去年の夏、伯耆の大山に確に兄だと思ふ人が居ると云ふ知らせを貰つて、丁度休みで、出掛けて見ましたが、それも人違ひでした。

兄は今、何處で、どう云ふ生活をして居るか、さう云ふ事は一切わかりません。然し兎も角、兄が無意義な生活をして居るのではない事は私は信じて居ます。兄が又、どう云ふ姿で、そして、どう云ふ眼差しで再び私共の前へ現はれて來るか、それは私にとつて或る眞面目な期待となつて居る事です。

（大正九年三月）

和解

一

此七月卅一日は昨年生れて五十六日目に死んだ最初の兒の一周忌に當つて居た。自分は墓參りの爲め、孫子から久し振りで上京した。

上野から麻布の家へ電話をかけた。出て來た女中に母を呼び出して貰つた。

「お祖母さんは如何ですか」と云つた。

「お元氣ですけど未だお出掛になるのは少し早いので、お墓へは今朝私が出て來ました」と母が答へた。

「左うですか。僕もこれから青山へ行く心算です」

二人は一寸默つた。

「今日は青山だけですか？」と母が云つた、

「友達の所へも寄る心算です」と答へた。

母は云ひにくさうに少し小聲になつて、

「今日はお父さんお在宅なの……」と云つた。

「左うですか。又其内に出て來ませう」

自分は出來るだけそれを無心らしくいつたが、屈辱から來る不愉快な表情は電話口だけに露骨に自分の顏に現はれるのを感じた。母は、

「康子や留女子も元氣ですネ」と未だ產褥にゐる妻や九日前に生れた第二の兒の事を訊いた。

「元氣にして居ます」

「お乳もよく出ますか？」

「よく出ます」而して自分は「それぢやあ……」と云つた。

「あのね。若しお出かけになるかも知れないから、又後で掛けて見て下さい」と母が云つた。

承知して電話を斷つた。

自分は直ぐ電車で青山に向かつた。三丁目で降りて墓地へ行く途中花屋によつて色花を買つた。自分は未だ少し早いとは思つたが、其店の電話を借りて又母へ掛けて見ると、父は未だ自家にゐると云ふ事だつた。茲でも自分は不愉快な、而して腹立たしい氣分に被はれた。

毎時より其日自分は祖母に會ひたかつた。一つは祖母が自分に會ひたがつて居さうな氣がしたからであつた。

去年の兒は東京の病院で生れたので、一日おき或は一日おきに祖母はそれを見に出かけた。然し今年の兒は我孫子で生れたから祖母は未だ一度も見なかつた。暑さと少し勝れない健康とで、祖母は來たがりながら來られなかつた。それで尙自分に會つて赤兒の樣子を訊きたがつてゐさうな氣がしたのである。自分は父とだけの不愉快な關係から左う云ふ氣持まで犧牲にするのは少し馬鹿々々しい氣がした。祖母や母がそれを破れないのは仕方がない。然し自分も一緒になつてそれを認めて居るのは馬鹿氣て居る氣がした。第一父の留守にこそ〳〵と祖母に會ひに行く自分の姿が如何にも醜く、而して腹立たしく自分に感じられた。

自分は先に祖父と實母の墓へ行つた。祖父の兒夫婦の墓も其處にあつた。花立ては其朝差した花でどれも一杯だつた。自分は今持つて來ただけの花は自分の赤兒の墓へ差してやらうと思つて、それは帽子と一緒に刈込んだ要垣の上に置いた。

特別な場合の他は墓の前でお辭儀をしない癖が自分にあつた。それは十六七年前キリスト教を信じた頃の或る理窟から來た習慣だつたが、墓の前を只ブラ〳〵歩いてゐる内に他の場所で

は到底それ程には出來ない近さと明瞭さで其墓の下の人が自分の心裡に蘇つて來る。
　自分は祖父の墓の前を少時歩いてゐた。其内祖父が自分の心裡に蘇つて來た。其祖父に對し自分には「今日祖母に會ひに行きたいと思ふが」といふ相談するやうな氣持が浮んだ。「會ひに行つたらよからう」と直ぐ其祖父が答へた。自分の想像が祖父に左う答へさしたと云ふにしては餘りに明らかに、餘りに自然に、直ぐそれが浮んだ。それは夢の中で出會ふ人のやうに客觀性を持つてゐて、自分には如何にも生きてゐた時の祖父らしかつた。自分は其簡單な言葉の裡に年寄つた祖母に對する祖父の愛撫をさへ感じたやうな氣がした。而して其時自分の心は不快から明らかに父を非難してゐたにもかゝはらず同じ自分の心に蘇つてゐる祖父には少しも父を非難する調子はなかつた。
　自分は實母の墓の前へ行つた。それは祖父程に明瞭とは蘇つて來なかつたが、自分が同じ事を話しかけた時に、實母は如何にも臆病な女らしく不徹底な調子で何か愚圖々々云つた。自分は相手にしないやうに其前を去つた。
　自分は矢張り祖母に會ひに行かうと思つた。板挾みになる母には氣の毒な氣がした。勝手の方から廻つて直接祖母の部屋に行つてやらうかしらと考へた。父の家へ出入りするのではない。祖母の部屋だけに出入りするのだと云ひたかつた。然し勝手から廻るのは考へれば矢張不愉快だつた。仲の口から茶の間を拔けて電話室の前へ來て、其處で電話室にゐる父と窓越しに顏を見合はす場合もないとは云へない。それにしろ勝手から廻るのは不愉快だと考へた。
　慧子の墓へ來た。其處の花立てにも花が一杯だつた。自分は持つて來た花束を墓の前へ置いて、祖母のゐる麻布の家へ向かつた。
　自分は門を入つて行つた。而して仲の口を上がると直ぐ其處の廊下で女中に何か命じてゐる母に會つた。母は一寸驚いたやうだつたが、直ぐ何氣なく普通の挨拶をした。自分は其儘祖母の部屋へ行つた。祖母は如何したのか旋風器を二つも据ゑて、一つは止めてあつたが、片方のに背中を吹かせながら背を丸くして一人氷水を匙ですくつて飲んでゐた。
　祖母は妻の事や赤兒の事を色々と訊いた。而して、もう少し涼しくなつたら是非我孫子へ行くといつた。母や小さい妹などが出て來た。女中が菓子や冷した飲物などを運んで來た。自分は三十分程ゐて其處を出た。父には會はずに濟んだ。

二

　自分は八月十九日までに仕上げねばならぬ仕事を持つてゐた。夜十時頃から書いたが、材料が何んだか取扱ひにくかつた。最初「空想家」といふ題にしてゐたが後に「夢想家」と變へた。それで自分は六年前、自分が尾の道で獨住ひをしてゐた前後の父と自分との事を書かうとした。
　自分は父に對して隨分不愉快を持つてゐた。それは親子といふ事から來る逃れられない色々な縺れ混つた複雜な感情を含んでゐたにしろ、其基調は何不和から來る憎しみであると自分は思つてゐた。自分は口でそれを話す時は比較的簡單な氣持で露骨に父を惡くいつた。然し書く場合何故かそれが出來なかつた。自分は自分の仕事の上で父に私怨を晴すやうな事はしたくないと考へてゐた。それは父にも氣の毒だし、何それ以上に自身の仕事がそれで穢されるのが恐しかつた。
　自分の氣持は複雜だつた。それを書き出して見て其複雜さが段々に知れた。經驗を正確に見て、公平に判斷しようとすると自分の力はそれに充分でない事が解つた。自分は一度書いて失

敗した。又書いたがそれも氣に入らなかつた。とうとう約束の期日まで六日程しかなくなつて、それで少しも完成の見込みが立たなかつた。自分は材料を變へるより仕方がなかつた。十月號の雜誌に約束して、それに書かうと思つてゐた空想の自由に利く材料にかへた。支へてゐた關から流れ出すやうに遲筆の自分にしては珍らしい程に書けた。十五日中にそれは書上げられた。

十六日の朝自分は其原稿を持つて自家を出た。郵便局に寄つてそれを賴んで九時何分かの汽車で、東京へ出て來た。その原稿を書き上げたら會ひたいと端書を出して置いた友があつたので上野で其友に電話をかけて見た。所が其友は鎌倉へ行つたといふ返事だつた。鎌倉ならSの家へ行つたといふ事がわかつてゐた。自分はSにも會ひたい氣があつた。鎌倉まで出掛けようかと考へた。然し何んだか身體が疲れてゐて、氣分にも張りがなく、それが物臭い氣がした。兎も角麻布の家へ電話をかける事にして、母を呼び出すと、父は小さい連中を皆連れて箱根の別莊に行つてゐて、今日歸る筈だが今は祖母と二人だけだからよかつたら、直ぐに來てくれといふ事だつた。祖母は一週間程前から少し風邪氣で弱つてゐるといふ事を便りで自分は知つてゐた。自分は父の事で箱根を朝早く起つて來るとすると自分のゐる間に屹度歸つて來るだらうといふ氣はしたが、行く事にして電話をきると直ぐ電車に乘つて麻布の家へ向かつた。

祖母は寢床の上に坐つてゐた。もう餘程回復して割りにいゝ顏色をしてゐた。

一時間程經つた時に、向うで人々の氣色立つのが聞こえた。皆歸つて來たなと思つた。廊下を女中が馳けて來た。而して

「皆樣、お歸りになりました」と報告して歸つて行つた。直ぐ隆子といふ三番目の妹と昌子といふ小さい四番目の妹とが來た。二人は、

「只今」といつてお辭儀した。隆子は自分を見て一寸驚いたやうな顏をした。而して少し當惑したやうな顏をして、

「お父樣も一緒にお歸りになつたのよ」と自分を見て云つた。

「よろしい〳〵」と自分は答へた。

「淑子や祿子は如何した？」と祖母が訊いた。

「祿オちやんは一緒よ」

「祿オちやん！」と昌子が大きな聲をして呼んだ。

祿子の「なあに？」と云ふ聲が向うでした。

「淑子は？」と又祖母が云つた。

「淑つ子ちやんだけ殘つたの……」

「どうしてつさ」

「……みんな歸ると云ふとお父樣が何んだか不快な顏をおしになるの」

「どうして」

「どうしてゞすか」と隆子は當惑したやうな顏をして「本統は私も殘るつもりだつたの。だけど、餘り色んな物を食べて昨日から下痢したもんで歸る事にしたの」

淑子が何故一緒に歸つて來なかつたかは隆子の話では結局わからなかつたが、祖母は切りに「一緒に歸つて來ればいゝものを」とそれを繰返して居た。

一番下の祿子が馳けて來た。昌子は、

「お祖母さん。お祖母さん。お父樣ね。毎日お客樣と碁ばかり打つてゐらつしやるの。昌アちやんつ、、まんなかつたわ」と甘えるやうな調子で云つた。祿子も一緒になつて、

「お父樣碁ばかり打つてゐらつしやるんですもの、祿オちやん何處へも行かなかつたわ」とこんな事を云つた。

「うそ」と隆子が睨んで云つた。「乙女峠の方へ行つたぢやないの？」

「うん。左うか／＼」と祿子は首を縮めて一寸舌を出した。

廊下から父が來た。自分は胡坐をかいて居た足を、横坐りに直しながら、其爲めともお辭儀ともつかぬ程度に少し頭を下げた。最初父は一寸自分がわからない風だつた。二人は丸二年會はなかつた。（尤も一度其間に東京驛の横で向うから俥で來る父と擦違つた事があつたが、路幅の廣い所だつたし、一緒に歩いて居た妻も氣がつかずに居た位で、左う不自然でなく自分は知らん顏をした）其上自分は不精から一寸近く頤ひげを延ばしてゐたから顏も少し變つてゐた。が、間もなく父は自分と認めると、云ひやうのない不愉快な顏をした。父は其儘引かへさうとするやうな樣子を一寸したが、それでも祖母に、

「どうだつす？」と云つた。祖母は、

「段々いゝ」と云つた。それきりだつた。緊張した沈默が一寸來た。かう云ふ場合自分は毎時人一倍それを強く意識してギューッと堅くなる性質だが、其時は如何したのか穩やかな氣持で父の顏を見上げて居られた。かう云ふ場合はこれ迄も度々あつた。その場合父が不愉快な顏をすれば、それだけ自分も不愉快な顏をする方だつた。左うしまいとしても自分の頑な氣持が承知しなかつた。而して其場が過ぎても其不愉快は殘つて今度は自身を苦しめるのが例であつた。

父は默つて引きかへして行つた。

晝飯の支度が出來たので呼ばれて皆は茶の間へ行つた。自分の食事だけが祖母の部屋に運ばれた。

暫くして自分は麻布の家を出た。

身體が甚く大儀だ。病氣かも知れないと思つた。自分は直ぐ我孫子へ歸る事にしたが、汽車の時間には少し間があつた。

神田の古本屋で金を拂ひに行かねばならぬ所があつたので其處へ寄つた。時間つぶしに暫く主人と話してゐたが、如何にも應答が面倒臭い氣がした。

上野の待合室で暫く休んだ。汽車に乘つてからはウト／＼として何時か眠つて了つた。北小金で眼を覺ましてからは乘越す恐れから、（四五度前の上京のかへり乘越しをしたので）眠らぬやうにしてゐた。

自家まで俥に乘らうと思つて停車場を出ると、一臺しかない俥に今人が乘らうとしてゐる所だつた。

やう／＼漕ぎつけたと云ふ氣持で自家の段々を登つて行くと門の所で何かしてゐた使つてゐる男が急いで降りて來て、自分の荷物を受取つた。而して、

「如何かなさいましたか、大變お顏の色が惡いですが」と云つた。

「お歸り遊ばせ」といつて赤兒を抱いた妻が玄關へ出て來た。光りが背後から來てゐるので妻には自分の顏色はわからなかつた。

「お父ちやま、お歸り遊ばせ」妻は少し浮はついた調子でこんな事をいつて赤兒を差しつけて、それを自分に抱かせようとした。自分は何んだかムカ／＼とした。默つて座敷の次の間へ來てゴロリと横になつた。浮かれた氣持を不意に叩かれた妻は調子のとれない不安な顏をして、傍へ來て坐つた。

「少し工合が惡い、身體が大儀で仕方がない」

「お腰を揉みませうか」

妻の氣持が少しもピッタリしてゐない。自分は默つて便所へ起つて行つた。少し下痢だつた。出て來ると妻は同じ所に坐つたまゝ、ポカンとしてゐた。自分は其處から故と少し離れた所に妻の方を背にして又ゴロリと横になつた。妻は赤兒を傍に寢かして寄つて來た。而して自

分の腰を揉まうとした。自分は默つて其手を拂ひのけた。
「何故？」と情けない聲をした。
「兎も角、觸らないでくれ」
「何を怒つて居らつしやるの？」と云ふ。
「かう云ふ時お前のやうな奴と一緒にゐるのは、獨り身の時より餘程不愉快だ」
暫くすると妻が泣き出した。
かう云ふ時自分はヂリ〳〵する程意地惡くなる。自分で自分を制しきれなくなる。然し一方妻の乳が止まられると厄介だといふ氣があつた。去年の赤兒に對し、死んだといふより自分の不注意で殺したといふやうな氣がどうかするとする自分は今度の赤兒には出來るだけ注意深く扱つてやらうと云ふ氣が中々强かつた。自分はいゝ加減の所で我慢した。
其晩醫者を呼んだ。
二日程寢た。

三

身體が直ると又十月の雜誌に出すべき仕事にかゝらねばならなかつた。「夢想家」を書き直す事にした。
事實を書く場合自分にはよく散漫に色々な出來事を並べたくなる惡い誘惑があつた。色々な事が憶ひ出される。あれもこれもと云ふ風にそれが書きたくなる。實際それらは何れも多少の因果關係を持つてゐた。然しそれを片端から書いて行く事は出來なかつた。書けば必ずそれらの合はせ目に不充分な所が出來て不愉快になる。自分は書きたくなる出來事を巧みに捨てゝ行く努力をしなければならなかつた。
父との不和を書かうとすると殊に此困難を餘計に感じた。不和の出來事は餘りに多かつた。
それから前にも書いた如く、それを書く事で父に對する私怨を晴すやうな事は仕たくないといふ考へが筆の進みを中々に邪魔をした、所が實際は私怨を含んでゐる自分が自分の中にあつたのである然し それが全體ではなかつた。他方に心から父に同情してゐる自分が一緒に住んでゐた。のみならず丁度十一年前父が「これからは如何な事があつても決して彼奴の爲めには涙は溢れない」と人に云つたと云ふ。而して父が左う云ひ出した前に自分が父に對して現はした或る態度を憶ふと自分は毎時ゾッとした。父として子からこんな態度をとられた人間がこれまで何人あらう。自分が父として子にそんな態度を取られた場合を想像しても堪へられない氣がした。父が左う云つたと聞いた時に父の云ふ事は無理でないと思つた。而して自分も孤獨を感じた。
然し父が今明ら樣に自分に就いて云つてゐる不快はそれではなかつた。一昨年の春だつた。自分が京都に住んでゐる時に、其前に起つた二人の間の不和の後に或る和ぎを作る目的で、父が自分の一番上の妹を連れて京都に遊びに來た。「今たつ」といふ電報を受取つた時、自分は其電報の來る前に出發した態にして擦れ違ひに東京へ行かうと考へた。自分は父に不愉快を與へるのは好まなかつた。然し會ふのは億劫だつた。自分が其時の現在に持つてゐる父に對する不快を押し包んで何氣ない顏で話する事は迚も堪へられなかつた。若しそんな事をして自分を欺き、第三者を欺きした所で何になると思つた。後に殘るものは今の不和よりも尙惡いものだ。今の不和に更に尙惡いものを附け加へるばかりだと考へた。本統の和解が其時に來るなどとは自分には夢にも考へられなかつた。父も自分の上京を偶然の擦れ違ひとは考へないかも知れない。然し多少は半信半疑の氣持になるだらうと考へた。自分は上京する事にした。丁度其頃妻は神經衰弱のかゝりかけ

で、よく弱つてゐた。結婚して三月程にしかならぬ妻には假りに神經衰弱でなかつたにしろ、未だ馴染の薄い父と妹とを良人の留守に客として受ける事は大きな重荷に違ひない。其上に妻は神經衰弱だつた。其上に妻との結婚が父との不和の最近の原因になつてゐた。妻は弱つて泣いた。自分は怒つた。怒つた儘家を出た。

家を出ると自分は妻が可哀想になつた。實際今の妻には少し重荷過ぎると思つた　自分は停車場まで行かずに歸つて來た。

自分は父に手紙を書いた。禮儀を缺かない程度で正直に而して簡單に、自分の氣持を書いて會ひたくないといつた。然し妹だけはどうか寄越して貰ひたいと賴んだ。父がそれを承知するかどうかを危みながらさう書いた。

汽車は日が暮れてから着く筈だつた。手紙を持たして妻を迎ひに出した。出る時、自分は繰返し〳〵手紙は必ず停車場で父に渡さなければいけないと念を押した。妻は泣いた。自分は「若しお前が手紙を渡さずに歸つて來たら、俺は直ぐ東京へ行くからね」といつた。

妻の出て行つた後自分は直ぐ家を出た。而して大阪から來て居る友達を其宿屋へ訪ねた。

十時頃自分は衣笠村の家へ歸つて來た。妻と妹と、留守に偶然來合はせた從弟とが出て來た。皆は割りに元氣な顔をしてゐた。久し振で會ふ妹を見て自分にも和いだ喜びが湧いた。

然し自分は直ぐ妻に手紙の事を訊いて見た。妻は停車場では如何しても渡せなく、一緒に宿屋に行つて食事をして今までゐたが、其間にも其機會がなく、今妹と俥で歸つてから車夫を待たせて、三人で色々相談した擧句車夫に持たせてたうとうお屆けする事にした所ですと答へた。尚妻は父が吾々を連れてこれから奈良大阪を歩く心算で居る事を話した。自分は宿屋の一と部屋で自分の手紙を讀んで不快な氣持で一人居る父の樣子を想像した。自分も不愉快になつた。然し仕方がないと思つた。

翌日は朝から出て銀閣寺から三十三間堂まで東山側を四人で歩いた。其翌日は嵐山へ行つた。夕方嵐山から歸つて四條の小さい料理屋で食事をする時、自分は妹に父の宿屋に電話を掛けさせた。父は甚く怒つて妹に直ぐ宿屋へ歸るやういつたと云ふ事だつた。自分達は妹に別れて衣笠村の家へ歸つて來た。間もなく宿屋から車夫が妹の手紙を二通持つて來た。一つは父のゐる前で書いた、使の車夫に置いて來た荷物を渡してくれといふ手紙だつた。一つは父に隱れて鉛筆で走書きした、父が甚く怒つてゐる事、而して叱られた事、而して明日の朝京都は引上げて大阪へ行くといふ事を書いた手紙だつた。

此事があつてから半年餘り經つた。其間に自分と妻とは京都を引拂ひ鎌倉に住む心算で雪の下に借家したが妻の神經衰弱が少し甚くなつたので、一週間程で又其處を出て上州の赤城山に行き、其處に四ヶ月程暮らし、それから暫く又旅をして十月の初めから我孫子の手賀沼の畔の今の家に落ちついたのである。妻の神經衰弱は殆ど直つた。而して妻は懷姙した。

或日自分と妻とは祖母を見舞に上京した。其晩は麻布の家へ泊る事にして自分だけ一寸は左うでないが其頃は未だ友達だつた或人夫婦を訪ねて、二人の泊つてゐる麹町の或宿屋へ遊びに行つた。而して夜十二時頃自分は麻布の家へ歸つて來た。皆は寢てゐたが、母と妻が起きて來た。祖母も眼を覺まして暫く話をした。暫くして自分も寢間着に着更へて床に入つた。すると一度寢室へ歸つた母が又出て來て「つらい事はお察ししますが、どうか一寸、京都の事をお詫びして來て下さい」と云つた。自分は一寸まごついた。自分は我孫子へ住むやうになつ

た時父の部屋にそれを云ひ旁々挨拶に行つた。父は碌に返事をしなかつたが、自分から挨拶に行つた事で京都時分と氣持の變つた事を下た手から示した心算でゐた。それでもう其事は濟んだ心算でゐた。

「お父さんはお部屋ですか」と自分は云つた。

「お起きになつてお部屋で待つて居らつしやるの」

自分は帶の結び目を後ろへ廻して、父の部屋へ行つた。父は机の前に机を背にして坐つて居た。父は、

「貴樣が此家へ出入りする事は少しも差支へない。それは俺は喜んで許す。然しきまりをつけねばならん事は明瞭つけたいが、どうだ」と云つた。

「京都の事はお氣の毒な事をしたとは思つて居ます。あの頃とはお父さんに對する感情も餘程變つて居ます。然しあの時私があゝした事は今でも少しも惡いとは思つて居ません」から答へた。

「左うか。それなら貴樣は此家へ出入りする事はよして貰はう」

「左うですか」自分はお辭儀をして起つて來た。自分はもうカッとしてゐた。

「直ぐ歸ります」自分は祖母と母に左ういつて、妻に「お前も來るなら來い」と云つて着物を着かへ出した。

「何も今から出なくてもいゝぢや、ありませんか」と母は淚を流しながら帶をしめようとする自分の手を握つて動かさなかつた。「今から出ても泊る所もないでせう。明日の朝早くお歸りなさい。どうか左うして下さい」といつた。

妻も一緒になつて泣聲を出して何か云つた。自分は怒つて妻を突飛した。妻は寢床の上へ倒れた。

默つて寢床にゐた祖母が亢奮した調子で、

「康子も一緒について行け」と云つた。

母も諦めた。

妻の支度の出來るのを待つて、麻布の家を出た。

一時を過ぎた往來には人通りもなかつた。妻は一と足遲れに默つて後からついて來た。自分は麴町の二時間程前までゐた宿屋へ行つて泊まらうと思つて其方に歩いた。

「若しお前が俺のする事に少しでも非難するやうな氣持を持てば、お前も他人だぞ」自分は突然こんな事を云つた。妻は默つて居た。

「若し俺がお父さんの云ふ事をはい〳〵諾く人間だつたらお前とは結婚してやしなかつたぞ」自分は嚇すやうに又こんな事を云つた。

宿屋は皆寢てゐた。戸を叩いて起こすと、寢間着を着た女中が潛りを開けて呉れた。

二人は二階の小さい部屋に通された。

翌朝妻は女中が妻だけに仲間同士のやうな妙にぞんざいな言葉使をするゝ怒つて居た。

「あんなに晩く連れて來たのでお前を只の女でないと思てゐるのだらう」と自分は云つた。妻は腹を立てた。而して早くこんな家を出ようと云つた。

四

翌年の六月に妻は產をする筈だつた。產婆もゐない土地で、產は東京でする事にした。丁度妻の伯母の知つてゐる婦人科の病院があるので其處へ入れる筈にして置いた。すると父が自分の親しくしてゐる婦人科の醫者があるから其處へ入れたらいゝだらうと云つたさうだ。六月初めに妻は上京して麻布の家へ行つた。而していよ〳〵近づいた時に其病院に移り、間もなく女の兒を安產した。

父は其初めての孫を見る爲めに病院に一度來た。然し其處で自分と落ち合ふ、多分其恐れ

から二度は來なかつた。然し三週間して病院から又麻布の家へ歸つてからは赤兒が一人眠つてゐる所などに時々來て見てゐると云ふやうな噂を自分は妻から度々聞いた。妻は喜びを以てそれを話した。然し父に對しては妙に邪推深くなつてゐる自分は妻のやうな素直な喜びを以てはそれを聽けなかつた。

父は出産の費用を總て出してくれるといつたと云つて祖母や妻は其好意を喜んでゐた。自分はそれにも拘泥つた。然し結局出して貰つた。祖母は、「一寸お父さんの所へ行つてお禮を云つておいで」と再三繰返した。自分は「うん、うん」と其度曖昧な返事をしながら、たうとう行かなかつた。而して妻を代理にやつて禮を云はした。

此赤兒が父と自分との和解の緣になるやうと皆が願つてゐる事がわかつてゐた。皆には此赤兒を其爲め出來るだけよく利用しようと云ふ氣が暗々の裡にある事がわかつてゐた。然し此赤兒を通してと云ふ氣は自分にはなかつた。

麻布の家の門番の兒が二人續いて赤痢にかゝつたので豫定より早く、丁度生後廿四日目に赤兒は妻と一緒に我孫子に歸つて來た。それは汽車に乘せるには未だ少し早かつた。其晩は頭に受けた刺戟から亢奮してよく眠れなかつた。然しそれは翌日はよくなつてゐた。

それから一ト月近く經つた。祖母からの便りで、父が赤兒を見たがつて居るから最近に連れて來て見れと云つて來た。自分は何んだか赤兒を東京にやりたくなかつた。其上に自分には又邪推があつた。父が赤兒を呼びたがるのは八十一歲になつた祖母を我孫子へ寄越したくないからだと云ふ氣がした。父は祖母が自分の家へ來てゐる事を前から、非常に嫌がつた。それは年寄つた祖母が若し自分の家へ來てゐる間に重い病氣にでもなつた場合、自身出入りを止めてゐる身で其家へ入つては行けないと云ふ考へが絕えず父を恐迫してゐるらしかつたからである。（自分は時々祖母に會ひに行つた。然し妻は泊つても自分だけは友達の家や伯父の家や或は宿屋などに泊つて麻布の家へは泊らなかつた）

自分は祖母へ返事を出す前に東京の醫者に手紙を出して赤兒はもう汽車に乘せてもいゝか如何かを訊いて見た。醫者からはなるべく百日位は動かさぬやうと云ふ返事が來た。自分は上京した時電話で母にそれを云つて祖母の方から來て貰ひたいと云つた。

二三日すると祖母が麻布の小さい連中を四人と赤坂の伯父の子供とを連れて我孫子へ來た。皆は二タ晩泊つて翌々日の午前歸る事にした。

歸る時祖母は父が見たがつてゐるからと赤兒を連れて歸りたがつた。自分は醫者が今になるべく動かさぬやうと云つてゐるのに祖母がそんな事を云ふのを變に思つた。然し醫者は一體安全な事を云つてゐるのだとは思つた。現に廿四日目に此地へ連れて來る時相談したのには醫者は大丈夫ですと答へたのだと云ふやうな事を考へた。それにしろ何だか氣が進まなかつた。後で知つたが、祖母は醫者が動かさぬやうと云つた事は知らなかつた。母がそれを傳へ忘れたか、祖母がそれを聽き落としたかわからない。それは何方にしろ落度とは自分は思つてゐない。只落度は自分がそれを知りながら、且つ何んとなく氣が進まないなりに、弱々しい氣持から赤兒を連れて行く事を承知した所にあつた。赤兒も不運だつた。若し其場合、自分が電話で母に云つた醫者の言葉を繰返したら、祖母も自身の云ひ出した事を取消したに違ひない。然し何故か自分は其時それを云はなかつた――然し兎も角今からそんな事を云ふのは馬鹿氣てゐる。かういふ云ひ方で幸不幸の別れ道がきめられるものではないから。

上野から祖母と妻と赤兒と小さい連中だけ客待自動車に乘せて、自分は上の妹二人を連れて、村井銀行の下に食事をしに行つた。自分は其處から麻布へ電話をかけた　途中自轉車と衝突して、東京驛で自動車を取代へたが、皆は無事に着いたと云ふ返事だつた。

暫くして妹等と別れて自分は友達の家へいつた。其處に他の友達が三人來た。而して其晩は勝負事で夜明かしをした。翌日も晝頃までそれを續けた。

夕方自分は友達の家を出て赤坂の伯父の家へ行つた。吹き降りの甚い日だつた。伯父夫婦は切りに泊まつて行けと勸めた。然し疲れ切つてゐる自分は自分の寢床が戀しかつた。自分の寢床でグッスリ眠りたかつた。

嵐の中を自分は終列車に乘る爲めに伯父の家を出た。電車へ行くまでに自分はづく濡れになつた。

自分は電車の中で中川の欄干のない鐵橋を想ひ出すと急に恐しくなつた。普段でも欄干のない鐵橋は氣持よくなかつた。まして今晩のやうな嵐にあの鐵橋の上から横倒しに吹き落とされたら、それつきりだと云ふ氣がした。

自分は須田町で電車を降りて終つた。大粒な雨が人道の三和土の上ではね返つてゐた。電線は變な音を立てゝゐた。或る店家の前で濡鼠になつた工夫が鈎の附いた長い竹竿を電燈線へかけて雨の中にしよんぼり立つてゐた。それでも風が烈しくなると何かと擦れ合つて、被覆帶の破れた所から紫色の火花が散つて來た。

自分は兎も角雨宿りをしなければならなかつた。其邊の店は皆もう戸を閉めて居た。自分は萬世橋の停車場へ行つた。自分はこれから又赤坂の伯父の家まで歸るのもいやだつた。自分は其處にゐた子供の夕刊賣りから一枚夕刊を買つて、ベンチでそれを讀んだ。其內もう終列車にも間に合はないだけの時間になつた。決心して又電車に乘つて伯父の家へ歸つて行つた。

其晩は寢不足の癖に妙に亢奮して、それに蚤に食はれて眠れなかつた。

翌朝九時頃麻布の家へ人をやつて、自分が未だ東京にゐる事を妻に知らした。所が妻は其朝早く赤兒を連れて我孫子へ歸つたと云ふ母からの返事だつた。

自分も午後の汽車で歸つて來た。

五

其晩自分達は蚊やりを焚いて食事をしてゐると、向うで赤兒の泣聲がした。

「蚊がひどいのよ。慧坊を呼んでやりませうか」と妻が云つた。而して妻は坐つたまゝ「龍、龍」と十二になる守の名を呼んだ。

龍は返事をしなかつた。自分も大きい聲をして呼んだ。然し自分が呼んだ時に龍は直ぐ襖の陰に來てゐて、返事をせずに襖を開けた。

「お孃樣、今吐くやうな事、なさいました」と龍がいつた。

妻は赤兒を受取つて座蒲團の上に寢かしておむつを見た。赤兒は又泣き出した。

妻はおむつをランプの灯に翳して、

「少し青いやうよ」といつた。「粘液が混つてゐるわ」と眉を顰めた。

「そんなら今晩は乳をよせ。――熱を計つて見よう」

「もう少し前、計りましたが、ありません」

額をおさへて見たが熱もないらしかつた。

妻はおむつを更へてから赤兒を抱上げた。赤兒は倘しきりに泣く。

「オヽ、誰れが〱」こんな事を云つて妻は自身の頰を赤兒の頰へ擦りつけると、赤兒は觸れられた頰の方へ開けた口を持つて行かうとした。

「もし／＼。それはお母アさんのお顔つぺですよ」と妻が云つた。

龍は笑ひながら女中部屋へ下がつて行つた。

赤兒は中々泣き止まなかつた。

「慧ちやん、どうしたの？」

妻は少し不安な顔をした。而して、

「少し泣きやうが變ぢやないこと？」と云つた。

實際泣聲は普段と變つてゐた。

「お湯の時、ガアゼの水が少し鼻へ入つたんですけど、それでぢやないでせうね」と妻が云つた。

「そんな事はないだらう。兎も角早く寝かす方がいゝ」と自分は云つた。「床はとらしたか？」

「まだ」

「そんなら早くとらせないか」何といふ事もなく自分は腹が立つて來た。

自分は續いた寝不足で頭痛のする上に、前に書くのを忘れたお臀に出來た根太の膿みきる前で其處がづき／＼痛く、氣分が悪かつた。常と云ふ女中が床を延べると直ぐ自分は寝間着に着更へて寝床へ入つた。

妻は暫く子守唄を唄ひながら暗い縁側を往復してゐた。而して赤兒が眠ると蚊帳へ入つて來て、小さい綿の寝床へそれを寝かした。

妻は自分の頭を少時揉んでから蚊帳を出て行つた。

十五分位すると又赤兒は眼を覺まして泣き出した。妻は茶の間から起つて來て蚊帳へ額をつけて中を覗いた。自分は小聲で云つた。

「かまふと、抱かれようと思つて尚泣くから、ほつて置く方がいゝよ」

「どうかしたんでせうか」

「いゝからお前はあつちへ行つといで」

妻はそつと立去つた。赤兒は烈しくは泣かないが、中々泣き止まなかつた。

「もう私も休みますわ」と妻も寝支度にかゝつた。

自分は少し不安になつて來た。自分は少時、その不安を抑へて默つてゐた。然し我慢しきれなくなつて、起上ると赤兒を抱き上げ、胡坐のまゝ體をゆすつてゐた。赤兒は間もなく又眠つた。

妻は浴衣を衣紋竹へかけたり、少し片付け物などをしてから、御本尊様と云つてゐる自身の佛様を拜みに行つて、それから蚊帳へ入つて來た。其間二人は赤兒を覺ます恐れから口をきかずにゐた。自分は赤兒の顔色の悪いのに氣がついた。何うかしてゐると思つた。すると赤兒は又眼を覺まして泣き出した。自分は起上りながら赤兒の額に自分の額を當てゝ見た。額が冷りとした。唇が紫がかつて居た。

「オイ直ぐ回春堂を迎へにやつて呉れ。一人ぢや淋しいだらう。二人でやれ」

妻は蚊帳を出て急いで臺所へ行つた。

「直ぐだよ。いゝかい？　直ぐだよ。慧坊の様子が少し變なんだから」かう云つてゐるのが聞こえた。

泣きやうが著しく變になつてゐた。「あつは。あつは」と云ふ風な泣き方だつた。

「何んでもいゝから、大急ぎで行け」と自分も大聲で云つた。

妻が蚊帳へ入つて來た。

「お乳をやつて見ませうか」

「やつて御覧」

赤兒を妻へ渡した。然し赤兒にはもう乳を飲む氣はなかつた。顔の色は見る見る變つて行くやうに思へた。妻は狼狽して了つた。而して叱りでもするやうに、烈しい聲で、

「慧ちやん！　慧ちやん！」と紫色をした小さい唇に無闇と自身の乳首を擦りつけた。

自分は妻の手から赤兒を受取つた。而して起つて、赤兒の足の方を持つて倒様に振つて見

た。何の甲斐もなかつた。顔色は寧ろ土に近かつた。
「直ぐ抱いて行かう」
自分は抱いたまゝ蚊帳を出て、他は〆まつてゐたので臺所口から裸足で出た。
「あゝ。あゝ」絶望的な妙な聲を出して、妻は赤兒を抱いてゐる自分の手へつかまつた。
「どうしませう」と云ふ。自分は、
「お前はついて來ちや、いけない」と云つた。
「獨りで自家に居られませんわ」と妻は首を振つた。
「そんならYの所へ行つて居ろ」
急いで自分は門から暗い路へ降りて行つた。雨上りの田舍路は踝迄ぬかつた。隣りの百姓の家族が起きて居た。
「急いで提灯をつけて下さい」と自分は大きい聲で云つた。然し左う云ひながら自分は足を止めなかつた。今出してやつた常と龍との行く提灯が遠く見えた。自分は赤兒の身體を烈しく搖らない程度で出來るだけ急いだ。追ひ着くと自分は、「お前は直ぐ俺と回春堂へ行くんだ。——龍は奥さんを連れてYさんの所へ行つて呉れ」と云つた。何自分は二三十間後に薄白く見える妻に「お前は龍と一緒にYの所へ行くんだぞ。此方へ來ちや、いけないぞ」と大きい聲をして云つた。
寢間着の裾が膝まで泥水に濡れて、それが足に絡まりついた。自分はその儘急いだ。
赤兒は絶えず、
「あーア。あーア」と弱々しい聲で泣いた。身體も毎時より何んとなく輕いやうな氣がした。筋肉が總て緩んで居た。死んだ兎を抱いて行くやうな感じがした。
「慧坊、慧坊」と自分は時々赤兒の名を呼んだ。
町長の小さい家が町から離れた小さい坂の下にあつた。その側を通る時自分は、
「道はもう見えるから、お前醫者まで走つて行け」と云つた。常は少し急いだが走らうとはしなかつた。
「何故駈けないんだ」自分は少し怒つた。
「私、駈けられません」と答へた。常に脚氣の病氣のある事を憶ひ出した。それでも常は出來るだけ急いだ。
町では人々が軒先で涼んでゐた。漸く醫者の家へ來たが、醫者は五町程先の絲取工場へ行つて留守だつた。直ぐ迎へをやつて貰つた。——又迎へをやつて貰つた。
赤兒の顔は普段と變つて了つた。而して口の邊が細かく震へて居た。
自分は妻が龍と一緒に土間の入口の暗い陰に立つて居るのに氣がついた。
「Yの所へ行つて居なくちや、いけない。又頭でも變になると二重に面倒ぢやないか。——直ぐおいで！」左う云つた。
妻は何、往來で醫者を待つてゐるらしかつた。然しその内、見えなくなつた。
「慧坊、慧坊」自分は時々左う云つた。
自分は往來と赤兒とを交る〲に見てゐた。
「お上りなさいませ」と醫者の細君が、土間へ下りる幅の狹い緣に腰かけて居る自分に云つた。
「足が泥です」
「私がお抱きしますから、足をお洗ひなさいませ」と云つた。自分は赤兒を渡して土間續きの臺所へ往つて足を洗つて來た。
敷蒲團を二つ折りにした上に赤兒は寢かされて居た。醫者の細君は赤兒の額に手を當てゝ
「お熱はないやうでムいますね」と云つた。
醫者は急いで歸つて來た。
自分は先刻からの經過と、前々日東京へ連れて往つて、今日午前中歸つて來て夕方まで元氣にして居た事などを簡單に話した。
醫者は仰向けに寢てゐる赤兒の後頭へ兩方

から二本づつ指を入れて何遍も〳〵それを擧げて見た。

自分は醫者の顏色を覗つた。醫者は首を傾けた。その顏には希望は見えなかつた。

「熱はないやうですね。こりやあ腦の刺戟かも知れません」醫者は尙赤兒の頭を擧げ下げして見せて、

「かうして、顎が胸に着くやうでないといけません。――大分痙攣を起こして居ます」醫者は尙手を見た。兩方とも堅く握りメめて居た。醫者はそれを默つて自分に見せた。

醫者は次の間から眞中に穴のある反射鏡を取つて來て蠟燭の光りで赤兒の眼を見た。

「どうですか」と自分は云つた。

「瞳孔は開いて居ますね」

「心臟は如何ですか」

醫者は其處に投出して置いた聽診器を取上げて聽いた。耳からそれを取りながら、

「心臟は未だ大丈夫なやうです」と云つた。而して醫者はよくする癖で其たれ下がつてゐる口髭の先を下脣の端で口へ拘ひ込みながら考へて居た。醫者は、

「兎も角カンフルを一本射して置きませうか」と云つた。醫者は直ぐ仕度をして來た。赤兒の小さい乳の側をアルコールを濕した綿でよく拭つてから、其處を摘み上げると、一寸餘りある針を横に深くさし込んだ。赤兒には全く感覺がないらしく見えた。藥は靜かに射された。醫者は針を拔くと指で跡をおさへ、其手の甲に着けて置いたゴム絆創膏を其處にはつた。

醫者は道具を片づけながら、

「頭を冷して見ませう」と云つた。醫者は家の者に氷を取らしにやつた。

「灌腸もやつて置きませう」左う云ひながら又醫者は次の間へ起つて行つた。何故か自分もそれについて起つて行つた。

自分は醫者はもう見離して居ると思つた。然しそれでも訊いて見た。醫者は返事に困つて居た。而して云ひにくさうに、

「大分困難なやうです」と答へた。

自分も灌腸の手傳ひをした。すると氷を取りに行つた使が何處にも氷はありません、と云つて歸つて來た。醫者は、

「半左衞門所へ往つて見たか？」と訊いた。

「半左衞門とこにもありません」と答へた。

「停車場前の菓子屋にあるがな。其自轉車を借りて自分で往つて來よう」と自分は云つた。

自分は東京の醫者も呼ばなければならぬと思つた。自分は紙と筆を借りて其小兒科の醫者と麻布の家とへの電文を書くと醫者の自轉車で急いで停車場へ向かつた。灯りなしで暗い町を急ぐ時、かういふ時落ち着かないと衝突なぞをするぞ、と云ふやうな事を考へた。

氷は菓子屋にもなかつた。前日の嵐で沼向うから來る筈のが來なかつたから、今日は何處にもありますまいと云つた。自分は當惑した。

上野發は九時が終列車だつた。で、自分は醫者への電報に「赤兒危篤、此處の醫者は腦の刺戟と云ふ、自動車にておいで願ふ」と書いて置いた後に「此地には氷なし」と加へて驛から打つた。

自分が又醫者の家へ歸つて來た時にはYが來てゐてくれた。使つてゐる男の三造も來てゐた。隣りの百姓家の婆さんも來て呉れた。妻を送つた籠も歸つて居た。

醫者は息子に、

「山市にある筈だ。お前直ぐ行つて取つて來い」と云ひつけた。Yは三造と隣りの婆さんとを沼向うの氷藏へやつて呉れた。

赤兒の土色をした脣は妙に痙攣つて、かすかに震へて居た。身體は全體に冷え渡つて居た。而して下腹が異樣に脹らんで居た。

間もなく氷が來た、細かくかいて氷枕をこした。上からも氷嚢で頭を冷した。腹に溫罨布をする事にした。Yは裾の方に廻つて兩手で赤子の冷えた足を溫めて呉れた。吾々は出來るだけの事は何でもしようとした。然しいゝ考へもなかつた。

醫者は又灌腸をした。便らしいものは何も出なかつた、入れただけの液體が直ぐ其儘に出て來た。醫者はおむつに滲み込んだあとを指先で擦つて見て、

「矢張り粘液が少し出ますね」と云つた。

自分も指先で擦つて見た。ぬる〳〵した。

「腦膜炎とは異ひますか」と自分は訊いた。

「腦膜炎ぢや、ありますまい。只腦が刺戟を受けたんです」

「龍」と自分は土間に立つて此方を見てゐる龍を呼んだ。「お前先刻抱いてる時に頭をぶつけや、しなかつたらうね」

「どうも、しませんでした」と龍は直ぐ答へた。

「そりやあ、頭でもぶつければ直ぐ大きな聲をして泣くから知れますね」と醫者も云つた。

「矢張り汽車が惡かつたかな」と自分は云つた。

自分は心苦しかつた。

「汽車に搖られた爲めに受けた刺戟とすると、もう少し早く出さうなものですがね」と醫者が云つた。

「康子さんは午前に歸つていらしたんだらう？」とYが訊いた。

「非常に元氣だつたさうだ。僕が歸つたのは夕方で、其時は眠つて居たが、其前までよく笑つて居たさうだ」

自分は赤兒の枕元に坐つて氷嚢を抑へて居た。自分は空に見開いてゐる赤兒の眼を見る事が堪へられなかつた。自分は氷嚢の下に當ててある布を眼にかぶせた。視力を働かさないだけでも多少はエネルギーの經濟になるだらうと云ふ氣がした。

「あつあア。――あつあア」

左う云つてゐる赤兒の顏には苦痛の表情は殆どなかつた。然し出來るだけ病氣に抵抗しようとする其努力が見て居て堪らなかつた。

「腹が痛むかも知れません」と醫者が云つた。

Yの家の婆アやが平たい瓶と一緒にK子さんの手紙を持つて來た。

「K子が芥子をはつたら如何かと云つて來たがね。親類にそれで助かつた兒があるんだ」と手紙を見ながらYが云つた。

「やつて頂きませうか」と自分は醫者の方を見た。

「やりませう」

醫者は平たい瓶の芥子を皿にあけてそれを練つた。Yは其手傳ひをしながら、

「K子に何か又いゝ考へがついたら、直ぐ云つて寄越せと云つて呉れ」と婆アやに云つた。Yは又自分に、

「康子さんは御心配なくと云つて來たよ」と云つた。

「ありがたう」自分は心から禮を云つた。

紙に延ばしたのを鳩尾から下腹、それから背中、それから兩方の足にはつた。

「まあ十分ですかね」と醫者は掛け時計を見上げた。

「そんなものですか」

「餘り長くやると火腫のやうになつて、あとで困ります」

自分は少し位困つてもいゝから充分にやつて貰ひたいと云つた。Yも贊成した。

今は東京の醫者の來るのが僅かな望みだつた。

「九時半に電報がついて、支度に三十分と見て、それから一時間半したら來ませう」と醫者が云つた。

「一時間なら來るさ」とYが云つた。
「夜道だからな」と自分は危んだ。
「早くて十一時半ですか」と醫者が云つた。
「昨日の荒れで水がどうかな」と又自分が云つた。
醫者は胸の芥子をそつと剝して見た。明瞭した輪郭で其處だけ赤くなつて居た。
「利いて來ました」から云つて醫者は又枕元へ廻つて立膝をした儘、赤兒の頭を擧げ下げして見た。
「少し曲りますね」と醫者は自分の顏を見た。
「痙攣も餘程とれました。口の邊に少し未だ殘つて居ますが」醫者は又赤兒の手の掌を開けて見せて、
「これが開くやうになりました」と云つた。
自分は望みを得てYを顧みた。
「少しよくなつたやうだね」
「先刻からすると餘程よくなつたさ」とYは云つた。
「これで泣き聲が、あーと大きく續くやうになると大概大丈夫ですがね」と醫者が云ふ。
「左うですか。――赤坊。大きく泣け！　大きな聲で泣いて見ろ！」自分は力を入れて云つた。
「もう十五分ですが腹の方だけ取りませうか」
と醫者が云つた。
「左うですね」自分はもう少し其儘にして置きたいやうな氣がした。
醫者は鳩尾の所を剝して見せた。かなり甚く赤くなつて居た。醫者は細君に手拭を湯で絞らせて、剝した跡をそれで拭いた。自分は皮がつるりと剝けはしまいかと云ふ氣がした。醫者は、
「背中だけ、もう少しかうして置きませう」と云つた。
吾々には緊張した中に一種の小康が來た。
醫者が云ふ。
「普通の赤さんだと先刻の痙攣で大概いけなくなるのですがね。よく抵抗しました」
自分は腹の底に喜びを感じた。自分は又腹に力を入れて、
「さあ、もつと大きい聲をして泣け！」と云つた。
蒸し暑い晩だつた。吾々は足を蚊に食はれて弱つた。
間もなく三造と隣りの婆さんとが沼向うから氷を充分に買つて歸つて來た。自分は三造に、赤兒の夜着と着物とおむつと、それから八疊釣りの蚊帳と、自分の着物とを取らしにやつた。
自分は自分の頭痛が何時の間にか直つてゐるのに氣がついた。而して夕方迄づき／＼と痛んでゐた根太も今はどうもなくなつて居たのに氣がついた。然し時々欠びだけが出た。
赤兒が「あアー」と大きく泣く度が少しふえて來た。吾々は喜んだ。然し醫者はもつと大きく泣かなければいけないと云つた。それが二タ聲三聲續くやうになればしめたものだと云つた。
醫者は反射鏡で又眼を調べてくれた。
「どうですか」と自分は側から云つた。
「餘程窄みましたね」と答へた。
「若しかすると助かるぞ」と自分は云つた。自分は自分の眼の輝くのを感じた。
三造が色々な物を運んで來た。更へられる物は新しい物と取り更へて、皆は蚊帳へ入つた。着物を更へさす時に醫者は下腹を診た。餘程前より小さくなつてゐた。總てが僅かづつ順調に行くやう思はれた。
「これで心臓が仕舞ひまで堪へてくれると、うまいですね」と醫者が云つた。
十一時か鳴つた。もう三十分、或は一時間と思ふ。今は東京からの專門醫を待つばかりだつた。
「あアー」と赤兒は時々大きい聲を出した。其

度吾々は顏を見合はせた。然しもう少し大きくと念じても其處まで屆かなかつた。自分は叱るやうに、

「もつと、しつかり泣けないか！」と云つた。

時は段々に經つて行つた。赤兒はそれより良くも惡くもならなかつた。吾々は自動車の響を今か〳〵と待つた。僅かな響にも「來たかな」と云つて耳をそば立てた。

吾々は何遍も〳〵貨物列車の響に騙された。

「然しもう來てもいゝ頃だがな」こんな事を云つて時々掛時計を見上げた。

「今度は左うだ」とYが往來へ出て見てくれた事もあつた。十二時になつた。

此處へ來て、もう五時間になる。其間赤兒は眼を開いたきりでゐる。今まで乳を飲むと、飲んで居る内に眠くなつて眠つて了ふ兒が、――殊に夜は、間に乳で一度起きる外いつもよく眠つて居る兒が、かうして死に抵抗し、努力してゐるのを見ると如何にもいた〳〵しかつた。

「あー、あー、あー」赤兒は初めて大きく啼いた。自分は直ぐ醫者の顏を見た。

「えゝ」と醫者は首肯いた。

Yも非常に喜んで呉れた。

「これが連續するとしめたものです」と醫者が云つた。自分は淚ぐんだ。見てゐた赤兒の顏が見えなくなつた。自分は、

「康子を呼んでやらうか」とYに相談した。

「直ぐ呼んで上げ給へ」とYは贊成した。醫者も贊成した。

自分は土間の細い緣に腰かけて居た常をYの家へ直ぐ迎ひにやつた。

六

然し赤兒は遂に助からなかつた。一時頃漸く着いた東京の醫者も出來るだけの事をしてくれたが、どうする事も出來なかつた。段々惡くなると、醫者はカンフル注射と食鹽注射とを二十分或は十分おきに絕えずした。カンフルは胸に射した。仕舞には小さい胸に射す場所がなくなつた程一杯に絆創膏が貼られて了つた。赤兒はカンフル臭い息を吐いた。食鹽水は股に射した。赤兒の身體は其何方を射す時でも全く無感覺になつて了つた。それでも死ぬまいとする何かの強い意志が何も知らない赤兒に働いてゐる事は明らかに見られた。かうなるともう醫術の力は「知れたもの」になつてゐた。此小さい赤兒自身の死に對する一生懸命な努力が或る時間續くか、續かないかにあつた。（左う東京の醫者自身が云つた）其間に何處かで折り合ひがつけば助かりますと云つた。

腸を洗ふ事にした。我孫子の醫者が助手になつて、再三それをやつて見た。一度小さくなつた腹は何時か又脹らんだまゝ、何度洗つても小さくならなかつた。多少血の氣を見せた脣も今は土色になつて、ひきつつて絕えず震へてゐた。

四時頃だつた。東京の醫者は待たせてある自動車で一度東京にかへると云ひ出した。自分達は一寸不愉快を感じた。然しそれはもう迚も助からない事を云つてゐるのだと思つた。自分は何も云ふ氣がしなかつた。然し自分は「危險な御病人でもあるのですか」と訊いた。醫者は「いゝえ左うではないのです」と答へた。Yと我孫子の醫者とが露骨に不愉快な顏をしてもつと殘るやう云つてくれた。而して丁度東京に用のあつたYが、其自動車で、其醫者の友達の小兒科の醫者を賴みに行つてくれる事になつた。賴みに行く先の醫者はYも知つてゐる人だつた。

戶外は白々と明けて來た。

赤兒の身體は段々に冷えて來た。心臟の働きが弱つて來たからだ。熱湯で絞つたタウルでそれを防ぐ事にした。其前から來て赤兒の事、康

子の事に色々世話を焼いて居て呉れたK子さんが三造を使にやつてYの家からと自分の家からと、あるだけのタウルを取寄せて呉れた。

Yの家からは湯上りに使ふ一疊敷位のが二枚と其他に何枚か來た。自分の家からもあるだけ來た。醫者の細君が、竈でどん／＼湯を沸かして呉れた。K子さんが先になつて三造や常やが土間で手もつけられない程の熱湯からタウルを絞り出しては渡してくれた。初めの程はそれを開いて少し冷ましてから、背中、胸、足と包んでやつてゐた。温めても／＼赤兒は中々温まらなかつた。然し其内に幾らか取り直して來た。然しそれも二十分とは續かなかつた。心臟の働きは又弱つて來た。八人程の人が今は赤兒を温めるだけに忙しく立働いてくれた。東京からの醫者も一生懸命に働いて呉れた。自分は腹の中で皆に感謝した。それにしろ、此兒の爲めにもつと近い血縁の麻布の家の人が一人も居ない事は何んとなく此兒の爲めに可哀さうな氣がした。而して自分も物足らない氣がした。

背中、胸、足と順繰りに絶え間なく更へて居ても赤兒の身體は少しも温まらなかつた。仕舞には吾々の皮膚では一秒でも觸れて居られない熱さの儘でどし／＼包んだ。もう絶望的になつてゐた自分は不具にならうが、後でどんな事が起らうが、それらを省みる氣はなかつた。兎も角死なしたくなかつた。

腹は益々脹れて來た。此脹れてゐる中のものが今の内に出れば如何かなるかも知れないといふ氣がした。東京の醫者は尻から出來るだけ深く細いゴムの管を差し込んで中の物を洗ひ出さうとした。

赤兒の力は段々弱々しくなつて來た。それでも尙其僅かな力で出來るだけの抵抗をしようとした。

東京の醫者は手早く洗滌器の先から細いゴム管を取りはづすと、深く差し込んだまゝ、口で其管から腸の中の物を吸ひ出さうとした、醫者は吸つては側の金だらひに吐いたが、殆ど何も出なかつた。而してさうしてゐる内に赤兒はもう息をしなくなつた。赤兒の口と鼻から黑いどろどろの液體が湧き出すやうに流れ出した。それが青白くなつた兩の頰を幅廣く項の方へ流れ落ちた。醫者は急いでそれを拭き去ると、人工呼吸を暫くやつてくれた。然しそれは自分達への氣休めに過ぎなかつた。

妻は烈しく泣き倒れた。K子さんはそれを起こし、自身の胸へ其顏を抱〆めて「貞子さん。しつかり遊ばせ。ねえ。しつかり遊ばせ」と云つた。K子さんの眼からも淚が流れてゐた。

自分は泣いた。實母に死なれた時のやうに泣いた。

七

赤兒には自家から取寄せた、いゝ着物を着せてやつた。自分達は赤兒を三造の家内に抱かせて醫者の家を出た。晴れたいゝ天氣だつた。妻は新しいハンケチで丁寧に赤兒の顏を包んだ。而して自分達は昨晩提灯の光りで急いだ田舍道を夏の午前の太陽に照らされながら自家の方へ歸つて來た。赤兒を抱いた三造の家内は半町程先を歩いてゐた。妻は下を向き、自分の三四間後からついて來た。

前夜の電報で麻布の母が來た。それから暫くして死去の電報を見た妻の兩親が來た。又暫くして麻布からTさんと云ふ父の從妹の良人が來た。

「飛んだ事で厶いました」とTさんが云つた。而して「先程電報を拜見しまして早速電話で箱根の御別莊の方へお指圖を願ひました所、慧子さんは我孫子のお寺へ葬るやう御命令で御座いました」と云つた。

聽いてる内に自分はムカ〳〵して來た。

「私共もどれだけ此處に住んで居るか分りませんからね。葬るのは矢張り東京へ葬つてやるつもりです」と云つた。

「はあ。左樣ですか」とTさんは云つただけだつた。

自分は麻布の人間全體に不愉快を感じて居た。祖母にも母にも。前夜打つた危篤と云ふ電報に來て吳れとは書かなかつたが、醫者に自動車で來るやう頼んだ事を書き加へて、來るなら、それで來てくれと云ふ事を自分は暗示した。所が電報を見た祖母や母は赤兒がひきつけた位に驚いて打つたものと解してゐたと聽いて自分は益々不愉快になつた。他の場合とは異ふ。危篤と云ふ電報から差引いて考へる奴もないものだと思つた。殊に赤兒を東京へ連れて行きたがつた祖母に對しては腹が立つた。それから、第一Tさんもお指圖を願ひますと云つて、其お指圖によつては自分がそれを素直に諾く人間か諾かない人間かはよく知つてゐる筈だと思つた。

自分はそれまで實は多少感傷的な氣持になつて居た。青山の墓所に埋まつてゐる、今の自分より年若く死んだ實母の側に其初孫を埋めてやる事は實母の爲めにも赤兒の爲めにも左うありたい氣が自分にはしてゐた。然し自分からそれを云ひ出す氣は少しもなかつた。のみならず東京に葬りたいといふ考へも、其處へ葬つて貰ひたい氣で云つてゐたのではなかつた。自分はTさんに二坪或は三坪位の墓地を青山に買つて貰ふ事と、翌日其處に葬る手續きと、用意と、それから、瓢の骨のやうな坊主に經を讀んで貰ふ代りに赤坂の伯父の先生の建長寺の管長さんに戒名をつけて貰ふ事と其日鎌倉でお經を上げて置いて貰ふ事とを頼んだ。

東京から畫家のS・Kが來てくれた。而して其晩は皆々と一緒にお通夜をして吳れた。

棺には色々なものを入れてやつた。種々の寫眞も入れてやつた。妻が大切にしてゐた佐四郎人形もあるだけ入れてやつた。着物も妻の實家から來た紋付きを入れてやつた。

翌朝東京から自動車が來た。S・KとYと自分とが一緒に乘る事にした。自動車は町の大光寺で待つてゐた。其處まで新しい印半纏を着た出入りの大工と植木屋とが太い青竹で小さい棺を擔いで往つてくれた。田圃路から町の方へ坂を登つて行く途中に町の知つてゐる家のお婆さんが草花を澤山持つて見送りに出て居てくれた。其花は棺の上に乘せて貰つた。

產後の七十五日の經つてゐない妻は自家に殘る事にした。

其朝赤坂の伯父から、棺は赤坂へ運ぶやうと云ふ電報が來た。父が麻布の家へ運ぶ事を拒んだのだと思つた。自分は腹から不愉快を感じた。自分にはかういふ考へがあつた。若し皆に父と自分との關係に赤兒を利用する氣がなかつたら、赤兒は死なずに濟んだのだ。素より自分が氣が進まないのを折れて赤兒の東京行きを承知した事は悔いても〳〵足りない氣がしたが、今はもう仕方がなかつた。今はせめて死んだ者に對して出來るだけの事をしてやりたかつた。所が父は麻布の家へ連れて行く事を拒んだ上に赤兒の小さい叔母共や曾祖母に、「皆も赤坂へ行く事はない」と云つたと云ふ事を聽いて、自分は腹の底から腹を立てた。自分に對する怒りを其儘に赤兒に移して現はされた場合、前々夜から前日の朝までジリ〳〵とせまつて來た不自然な死、それにあるだけの力で抵抗しつゝ遂に死んで了つた赤兒の樣子を凝視してゐた自分にはそれは中々思ひ返す事の出來ない不愉快だつた。總ては麻布の家との關係の不徹底から來てゐると思つた。自分は腹立たしかつた。然しそれを徹底させる爲めに祖母との關係をそ

れに殉死さす事は自分には出來なかつたのである。腹は立つが、不徹底は毎時其處から起つて來た。此事は自分の作する上にも毎時邪魔をした。自分は此五六年間父との不和を材料とした長篇を何遍計畫したか知れない。然し毎時それは失敗に終つた。自分の根氣の薄い事も一つの原因であつたにしろ、又それで父に私怨をはらすやうな事はしたくないといふこだはる氣も一つだつたにしろ、それよりも其作物の發表が生む實際の悲劇を考へると、自分の氣分は必ず薄暗くなつて行つた。殊に祖母との關係の上に投げる暗い影を想ふ時に、自分は堪らない氣がした。三年程前松江にゐた時自分はその悲劇を出來るだけ避けたい要求から長篇に次のやうなコンポジションをした事があつた。或る陰氣な顏をした青年が自分の所へ訪ねて來る。それは松江の新聞に其頃續物を書いてゐる青年だつた。其青年が屆けてくれる續物を讀む　それは父との不和を書いたものだつた。其內續物が途中で急に新聞に出なくなる。青年が亢奮してやつて來る。それは青年の父が、青年が僞名で出してゐたにかゝはらず氣がついて、東京から人を寄越して新聞社に金をやつて連載させなくしたと云ふのだ。それから色々氣持の悪い出來事が其青年と父との間に起つて來る。それを第三者として自分が書いて行く。自棄に近い其青年が腹立ちから父に不愉快な交渉をつけて行く。父は絕對に此青年を自家の門から入れまいとする。其他色々さう云ふ場合父と自分との間に實際起り得る不愉快な事を書いて、自分はそれを露骨に書く事によつて、實際にそれの起る事を防ぎたいと思つた。見す／＼書かれたやうには吾々も進まず濟ませる事が出來ようと思つたのだ。而して其最後に來るクライマックスで祖母の臨終の場に起る最も不愉快な悲劇を書かうと思つた。どんな防止もかまはず入つて行く亢奮しきつた其青年と父との間に起る爭鬪、多分腕力沙汰以上の亂暴な爭鬪、自分はコムポジションの上で其場を想像しながら、父が其の青年を殺すか、其の青年が父を殺すか、何方かを書かうと思つた。所が不意に自分には其爭鬪の絕頂へ來て二人が急に抱き合つて烈しく泣き出す場面が浮んで來た。此不意に飛出して來た場面は自分でも全く思ひがけなかつた。自分は涙ぐんだ。

然し自分は其長篇のカタストローフを左う書かうとは決めなかつた。それは決められない事だと思つた。實際其處まで書いて行かねばそれは如何なるかわからぬと思つた。然し書いて行つた結果左うなつて呉れゝば如何に愉快な事かと自分は思つた。

此長篇は少し書いたが、續かずに了つた。而してこんなコムポジションをした後に又結婚の事で父との不和は色濃くなつた。それにしろ、其長篇のカタストローフで自分に作意なく自然に浮んだ其場面は父との關係で何時か起り得ない事ではないといふ氣がしてゐた。それは二人の關係が最も悲惨なものになつた時に不意にそれが出て來ないとは云へない氣がした。或は必ずしも左う行かないかも知れない。其場まで行つて見なければわからないにしろ、左ういふ急な引繰り返り方をするだけの何物かは父にも自分にも殘つて居さうな氣が自分にはして居た。此事は妻にも、或る友達にも自分は話した。

八

赤兒に死なれた後の自家は急に淋しくなつた。夜庭に椅子を出して涼んでゐるやうな場合、遠く沼向うの森であーッ。あーッと啼く鳥の聲がして來る。自分達はそれが堪らなかつた。

我孫子も嫌になつた。此春あたりから又京都の郊外へでも行つて住まうかと云ふやうな事を話し合つた。

十日程してYが朝鮮支那の旅へ出てから、我孫子は尚淋しくなつた。丁度其頃最も若い而して最も親しい友のMが細君と一緒に泊りがけで遊びに來た。Mは醫者から體が悪いと云はれたと云つた。自分は淋しい氣がした。然し何んとなく一時的な身體の不調和のやうな氣もした。自分は我孫子に住む氣はないかと勸めて見た。それをいふ時は自分が京都へ行く事は念頭になしに云つた。又松の多い冬も水蒸氣の多い、割りに温かい此沼べりは呼吸器病にはいゝに違ひないと思つたので。

M夫婦は我孫子ではないが、隣村の松林に後ろをかこまれた高臺に氣に入つた所があつて其處に新しい家を建てる事にした。而してそれが決まると間もなくMの肺病は醫者の全く誤診だつた事が知れた。

自分達は旅行でもして赤兒の死によつて受けた心の打撃を早く忘れたかつた。三日を七日と數へ、二十一日を七々四十九日として、それが丁度妻にも産後七十五日になる所から八月廿日を旅立ちの日と決めて置いた。

畫家のS・Kが其少し前から家族を連れて信州の上林温泉に行つて居たので自分達も其處へ行く事にした。八月廿日朝我孫子を出て妻は初めて赤兒の墓參りをした。それから自分は友達の家へ行つた。妻だけ麻布の家へ行つた。時間をきめて自分は麻布の六本木の停留場へ行つて、其處で妻と一緒になつて上野へ行く心算だつた。處が約束の時間に妻は中々來なかつた。自分はイラ／＼して少し麻布の家の方へ歩いて行つた。妻は弱り切つた顔をして、それでも急ぎ足でやつて來た。かう云ふ場合、妻が約束を遅れた以上、麻布の家へ自分が入つて行けないといふ屈辱が自分の氣を怒りつぽくさしてゐた。自分は妻を叱りつけた。

電車の中で妻は父の部屋へ行くとイキナリ何故赤兒の死骸を東京へ連れて來たと怒られたといつて泣いた。其日は祖母も母も小さい妹達も箱根の別莊へ行つて不在だつた。只二番目の妹の淑子と父だけがゐた。感傷的になつてゐる妻は誰れに會つても其頃は直ぐ涙が出さうになつてゐた。妻は父の部屋へ入らうとすると、もう涙が出かゝつて來た。其時の妻には「慧子も可哀さうな事をしたな」と云ふ父の言葉が意識しない豫期となつてゐたに違ひない。處がイキナリ父は怒つた。妻は吃驚して了つた。――それを云ひながら妻は泣いた。自分は父に對し、腹から腹を立てながら、慰めるとも怒るともつかない調子で何か云つた。乗合ひの客が妙な顔をして自分達を見てゐるのに氣がついたが、恥かしい氣も起らぬ程腹立ちの方が強かつた。

上野から信越線廻り神戸行の夜行に乗つた。自分は汽車の中で其汽車が衝突しさうな氣がして仕方がなかつた。自分は妻の燈心で出來た肘掛けを借りてそれを板張と頭の間に挾んで置いた。衝突した場合頭を板張に打ちつける時幾らかいゝだらうと云ふ氣だつた。人も込んだので殆ど眠れなかつたが、兎も角汽車は無事に濟んだ。然し上林へ着くと其晩から自分は又他の強迫に脅かされた。時々どゞーんと云つて地響きがする。三日目にたうとう自分は我慢しきれなくなつた。平氣でゐる皆の氣が知れなかつた。自分は切りにS・Kに此處を引あげようといつた。S・Kは其處で充分に仕事をする氣で、其時も七分通り描けた十二號位の油繪の仕事を控へてゐる時だつた。自分は一分でも其處にゐるのが不安だつた。然しもう夜だつた上に澤山な荷物を始末して、少し健康を損つてゐる子供などを連れて五六里の道を俥で行く事は

他の人には思ひもよらなかつた。
翌日五人は二ケ月程居る心算で用意して來た澤山な荷物を持つて、其處を出た。宿屋の主や女中は皆笑つてゐた。
實際結果から云つてS・Kには氣の毒な事をしたが、其時の自分には笑つてゐる主や女中が命知らずの馬鹿に思へた。自分達が出發てから山鳴りは段々烈しくなつて縣廳の役人が其笠法師山と云ふのに調べに行つたと云ふ新聞記事を自分達は暫くして加賀の山中温泉で見た。
一ト月程して自分達はS・Kと別れて京都に行つた。奈良、法隆寺、石山邊を歩いて、而して十月初め我孫子へ歸つて來た。Mの地所では東京から來た大工が三四人せつせと働いて居た。
旅の初めには妻は何よりも死んだ兒位の赤兒を見る事を恐しがつた。自分には寧ろ無神經だつた。一緒にゐると妻だけ何處へか行つて了ふ事がある。然う云ふ時よく其處に、誰れかに抱かれた赤兒がゐた。然しそれも段々に薄らいで來た。
十一月の幾日か海軍士官に嫁いで鎌倉に住んでゐる自分の一番上の妹が産をした。女の兒だつた。祖母から今度の日曜に小さい連中を連れて行くが一緒に行かないかと云ふ便りがあつた。多少危みながら妻も一緒に行きたがつた。
其日、朝早く我孫子を出て祖母等の一行とは新橋驛で落ち合つて行つた。最初伯父の家へ行つた。伯父は十何年か建長寺で參禪してゐたが眼病の爲め一年餘り赤坂に借家して其處から醫者に通つてゐたが、九月初め漸く少しよくなつたので又鎌倉に引移つて居た。
妹も赤兒も元氣だつた。自分の赤兒が出來るまでは赤兒は何れもこれも同じに見えてゐたが、妹の兒を見ると自分の死んだ赤兒とは全く異つてゐた。少しは憶ひ出したが、自分はそれ程ではなかつた。自分が十五の正月に此妹が生れた。其晩の事などを自分は話した。それまで同胞のなかつた自分は非常に樂みにして茶の間で待つてゐると今鎌倉にゐる伯父の祖母が赤兒を抱いて來た。それは頭の無暗と長い眞赤な變な物だつた。その赤兒が又こんな赤兒を生んだのだなと云つた。
一番下の妹の祿子が、顏を寄せて赤兒の匂ひを嗅ぐやうな事をして居ると不意に、
「慧子ちやんお死になつていゝ匂ひがしたわ」
とそんな事を云ひ出した。棺の中に香水をまいて置いた、それを憶ひ出したのだ。妻は驚いて祿子の背中をつゝいた。
間もなく妻は變な顏をして急いで起つて玄關の方へ出て行つた。少しして自分も出て行くと、妻は泣きながら、
「皆さんに濟みませんわ。私如何したんでせう」と云つて、「濟まない」を切りに繰返した。而して、
「貴方は平氣で、いゝのネ」とそんな意味を序でに云つた。
妻は直ぐ伯父の家へ歸した。暫くして自分も祖母や小さい連中と一緒に伯父の家へ歸つて行つた。
妻は自分の顏を見ると直ぐ物かげに連れて行つて、
「如何したらいゝでせう」と云つた。「皆さんに惡いから決して泣かない心算で來たんですのに……」
「仕方がない。もうそれでいゝ。誰れも惡く解る人はない」
左ういつても妻は中々それを云ふのを止めなかつた。自分は妻を措いて祖母のゐる方に來て了つた。
自分は祖母と話して居た。祖母は背を丸く、

自身の膝に覆ひ被さるやうな恰好をして煙草をのんでゐた。其處に康子が眼を赤くした儘出て來た。康子は祖母の前へ來て坐ると、イキナリお辭儀をして震へ聲で、

――お祖母様、御免遊ばせ――と云つた。

祖母は前からの姿勢で下を向いた儘、煙草の吸口を銜へて默つてゐた。祖母の脣は震へて居た。

自分は其時、赤兒の死で祖母に不愉快を感じた自分を恥ぢた。

九

鎌倉行から間もなくであつた。吾々は妻が又懷姙した事を知つた。自分は餘り早過ぎるやうな氣がした。出來るにしても、もう少し經つてからでもいゝやうな氣がした。然し妻は喜んだ。祖母も喜んだ。而して自分も、前に多少でも赤兒の死で祖母に非難する氣を持つただけ、それの早く來た事は祖母の爲めに嬉しかつた。

Mが暮れ近くから隣村に住むやうになつてからは我孫子も賑やかになつた。五六年前から多く他の地方で住んでゐた自分は久し振りでMと繁々往來するやうになつた。而して日が過ぎ、月が過ぎるに從つて自分は自分の中にあつたMに對する舊い愛が、又何か新しいものを附加しながら眼覺めて行くのを感じた。此事は愉快だつた。而して自分の心にいゝ影響を與へた。

彼は實際相手の內にあるよきものを摘き出す不思議な力を持つて居た。又彼は心と心の直接に觸れ合ふ妙味をよく理解して居た。此事で彼に失望させられた事は一度もなかつた。自分には和いだ、而して緩みのない氣持の日が續くやうになつた。

自分は足掛四年前、松江にゐた頃、それは前に書いたやうな長篇のコムポジションをして、それが書き續けられず、止して了つた後、或る期間創作に筆をとる事はよさうと決心した事があつた。それは其前後の自身の精神狀態が餘りに惡く如何にも慘めな貧しい心で、そんな自分が放射的な創作と云ふ仕事をしようといふのが最初から間違つた事だと考へたからであつた。而して其儘自分は最近まで殆ど何も書かなかつた。偶に書けば直ぐ失敗した。自分は創作の仕事を捨てる氣はなかつたが、偶に試みる創作で、六七年前感じたやうな亢奮を感じられない點で多少の不安を感じもした。

二月頃だつた。自分は或る親しい友へ其友も健康の不調和から暫く創作に筆を絶つてゐたと毎土曜二人だけで廻覽雜誌を作る事にした。半分冗談だつた。然し其冗談から駒を出さうと云ふ氣は二人共にあつた。自分は懲りずに又長篇にかゝつた。三回程出した限、中止にして、今度は短篇を出した。其次も又短篇を出した。然しそんな事をしてゐる內に友は不遠慮な醫者から健康に就いて不愉快な事を云はれた。自然廻覽雜誌も立消えになつた。然し惰性で自分は又一つ短い物を書いた。それは誰にも見せなかつた。而して何れも土曜といふ期日の前に一ト晚か二タ晚でなぐり書きしたもので、自信もなし、發表する氣もしてゐなかつた。

丁度其頃或る本屋から叢書の一つとして自分の前に書いたものを出したいと云つて來た。最初本屋はMの物を賴みに行つて、其時Mに自分のも出したいと話した。Mは多分承知しまいと答へて、其儘自分にも話さなかつたが、Mの細君が一寸それを云ひ出した時に、自分は出して貰つてもいゝと思つた。自分は其出版が自分に新しい創作をさす何かの刺戟になりさうな氣がしたからであつた。自分は何か書けさうな氣もしてゐた。

或日自分は廻覽雜誌に書いた短篇を二つだ

けMに見せた。Mは其一つに「しつかり書いてあると思ふ」と云つて呉れた。もう一つの物には「しんみりした味がよく出てゐると思ふ」と云つて呉れた。而してそれを發表する事をすゝめた。Mの歸る時自分は田舍路を一緒に歩いた。路々Mは理解のある氣持のいゝ評をしてくれた。自分は翌月の「白樺」で其一つを發表する事にした。

それから多分二三日してからだつた。多分偶然或る雜誌社の人が其雜誌に創作を載せる事を勸めに來た。自分はもう一つを其翌々月に出して貰ふ事にした。又間もなく他の雜誌から頼まれた。自分には未だ一つ短篇が殘つてゐたが、それには新しく書く事にした。昨年の夏妻が産の爲め東京の病院に行つて居た留守に不圖浮んだ空想から得た材料、それを書く事にした。

それは、茲に正直な、然し習慣的に品行方正とは云はれない良人がある。細君は何かの都合で暫く自家を留守にする。其留守中に女中が懐姙する。然し其對手は良人ではなかつた。良人は其良心から云つても疑はれても仕方がない人間だつたが、或る時、女中の懐姙が明らかになつた時に、良人は細君に「女中の相手は俺ではないよ」と云ふ。すると細君は其儘に、あゝ、左うですか」とそれを信ずる。それだけが自分は書きたかつた。良人も細君も賢かつた、悲劇はたうとうつけ込み損つた。左う云ふ事を自分はそれで現はしたかつた。少しづつ調和的な氣分になりつゝある自分には實際の生活で、其儘に信じていゝ事を愚さから疑つて、起さなくてもいゝ悲劇を幾らも起してゐるのは不愉快な事だと云ふ考へがあつた。而してそれは必ずしも他人に就いての考へでないのは勿論の事だつた。

自分は然し失敗した。若し期日の約束なしの仕事としてかゝつてゐたら、書直す事でもう少し其氣持を出せたかも知れなかつた。が、期日が來たのでそれは不滿の儘で送つて了つた。

間もなく或る新聞から十枚位の日記か、感想を送つて呉れと云はれた。自分は「或る親子」と云ふ題をつけて僅か二枚半の文章に、註文とは違ふから、若し不要だつたら直ぐ返送して貰ひたい、返送されても不服には思はない、といふ手紙を添へて送つた。それは自分の書いたものではなく、或る市で知り合ひになつた其處の郵便局員の書いた二百枚近い長い物から勝手に自分で抜いて文章だけ少し直したものだつた。それにも簡單に左う斷つて置いた。

其人は電話の方のかゝりで其處の美しい交換手との關係から、局長からは「君達は實に破廉恥極まる事を行つて居たのだ」と云はれて、早速二人共に免職させられたが、其少し前に其人が兩親にそれを打明けて結婚の許しを乞ふ、其會話の所だけを自分は新聞に送つた。許しを乞ふと父は直ぐ承知し、母もそれを喜んで涙を溢してゐる事が書いてある。これでも自分は吾々は簡單に調和して差支へない事を妙にヒネクレる所から起さずに濟む悲劇を起こして苦しむ。其反對がそれに現はされてゐる所が好きで自分は書きぬいて置いたのであつた。自分は父と自分との親子に對して之も亦或る親子の心算で「或る親子」と云ふ題をつけたのだが、それはそれだけでは結婚の事で前後四度父と不和を起こした事を知つてゐる自分に近い少數の人だけにしか解らぬ事とは知つてゐた。

自分は自分が段々に調和的な氣分になりつゝある事を感じた、これでいゝかしらと云ふ氣も少しはした。然し今までの不調和よりは進んだ調和だと考へた。而して自分も好人物の好運ばかりを何時迄もは書いてゐられまいと云ふやうな事も考へた。

自分の調和的な氣分は父との關係にも少し

づつ働きかけて行つた。然し或時、例へば妻と一緒に上京して電話で祖母を見舞ふと、丁度父が留守だから直ぐ來て來れと母が云ふ。自分達は電車で直ぐ麻布へ向ふ。而して門を入らうとすると其處に立つて待つてゐた隆子が駈けよつて來て、小聲で、お父さんがお歸りになつたのよ」と云ふ。自分達は門を入つただけで誰れにも逢はず、直ぐ引つ返して來る。かう云ふ場合、流石に自分の調和的な氣持も一時調子が變る。然し又或る時、人の口から、父が自分の妹達などの事でチリ／＼と苛立つて氣六ケしい事を云ふ噂などを聽くと、父の左ういふ氣分の根が猶且つ自分との不快にある事を考へずにはゐられない點で、而して今の自分が自分だけで調和的な氣分になりかけてゐるのにといふ氣のする點で、段々年寄つて行く父の不幸な其氣分に心から同情を持つ事もあつた。

＋

出産の日が段々に近づいた。今度は我孫子で産をする事にした。東京の病院で産をして三四週間で汽車に乘せて來る危險を冒かすよりは田舍でも出來るだけの注意を拂つて、産後動かさずに置く方が赤兒の爲めにも産婦の爲めにも遙かにいゝと思つたからである。然し時には萬一難産でもあつたらと云ふ不安が自分の頭を掠める事もあつた。自分は去年の事から自分が少し臆病になりすぎてゐると思つた。用心深いのはいゝ。然し臆病過ぎる事から反つて危險を冒かす愚をする場合があるといふ考へも自分にはあつた。自分は故ら其不安は打消すやうにしてゐた。

産婆は去年の産婆を賴む事にした。醫者は我孫子の醫者を賴む事にした。看護婦は産婆の家にゐる産婆としても開業出來る産科專門の割りに年のいつた看護婦を賴む事にした。

其看護婦は七月十三日に來た。

一週間程經つたが、赤兒は中々生れさうもなかつた。自分は赤兒が生れさうになつたらYの所に行つてゐて、生れてから歸つて來る事にしてゐた。

或日勘で東京から産婆が出て來た。然し勘は外れて産婆は翌朝早く歸つて行つた。

又或日二年程前から友になつたK君が久振りで訪ねて來た。K君は最近に人の父になつてゐた。K君は赤兒が嚔を一つしても何んだか冷々すると云ふやうな話をした。

K君の所では東京の病院で産をしたのださうだ。産れさうだと云ふ電話がかゝつてからK君は妙に落ちつかなくなつて、自家にゐても何をしていゝか分らないやうな變な氣がして一人そは／＼してゐると、安産と云ふ知らせが來た。早速病院へ出掛けて行くと其處には、もう生れた赤兒が細君の側の小さい蒲團に寢かされて居た。其處でK君は「なーる程」と思つたと云ふ事だつた。此「なーる程」に何だか感じがあるので、自分達は隨分笑つた。

K君は育兒法に就いて、もう一廉の知識を待つてゐて、其事では看護婦とも色々話の種があつた。

其内妻が腹の工合が少し變だと云ひ出した。看護婦に樣子を訊いて、「其位ではどうですか？」と云つた。K君は、「明日の晝の二時頃かも知れませんよ。何んだか僕はそんな氣がする」と云つた。よく聽くとK君の所のお産が晝の二時頃だつたと云ふのだつた。

間もなくK君は歸つて行つた。自分は停車場まで送つて行つた。K君には歸つたら麻布の家へ兎も角電話をかけて置いて貰ふ事にして別れた。然し妻の腹の工合は其儘又直つて了つた。

二十二日の晩だつた。庭へ椅子を出して、沼

を渡つて來る風に吹かれながら涼んでゐる時、妻は

「少しおなかが張つて來たやうよ」と云ひ出した。産婆を呼ぶにしても、もう終列車には間に合はなかつた。看護婦はどうせ自動車で來て貰ふなら、もう少し樣子を見てからでもいゝだらうと云つた。「明日の午前か午頃にでもなりはしますまいか」とも云つた。

寢る事にした。妻も大した痛みもなく、其儘皆も眠つた。然し一時半頃自分は妻の聲で覺まされた。自分は起きて看護婦を起こした。それから常と久を起こして早速湯を沸かすやう命じた。而して自分は提灯をつけて停車場へ出掛けて行つた。テル(犬)が一緒について來た。

我孫子では時間外の電報を扱はない。自分は驛員の好意に賴つて規則外の電話を掛けて貰ふより仕方なかつた。去年赤兒の死んだ後、其頃ゐた助役の人が、急な場合には驛の電話をお使ひ下さいと親切に云つて吳れた。其人は轉任してゐなかつたが、其後に來た助役の人に自分は電話を賴んだ。其人は快く承知して吳れたが、上野の驛で中々出なかつた。漸く出たと思つても中々用が通じなかつた。其内下りの終車が着いたので助役はタブレットを渡しにプラットフォームに出て行かねばならなかつた。顏馴染のある他の驛員が代つて電話をかけて吳れて漸く用が通じた。

自分は急いで歸つて來た。

「そんな事では未だ〱」そんな事を云ひながら看護婦は一人で立働いてゐた。

自分は座敷にしてゐる八疊の部屋を産室にするつもりでゐた。看護婦は次の間の六疊をそれにする氣でゐる。親切な性質はいゝ女だが、中中我を張る性で、自分の云ふ事を諾かない。自分は腹を立てゝ、自分で看護婦の用意した産の床を座敷へ引張つて來た。

外は未だ眞暗だつた。自分は眠つてゐるＹの所へ逃げて行くわけにもいかなかつた。

「いよ〱となつたら、俺は庭へ出てゐるからね」自分はこんな事を云つてゐた。自分は昔からの習慣で良人は妻の産を見ないものだと云ふ事に何か理由がありさうな氣がして居た。赤兒を兎も角無事に産み落すと云ふ事以外良人に醜い顏、醜い姿勢を見せたくないと云ふ心使ひを妻にさす事はいゝ事ではないと云ふ氣があつた。自分としても妻の醜い顏、左ういふ醜い姿勢を見る事はいゝ事ではないと云ふ氣があつた。その上苦しむ妻を凝つと見てゐねばならぬ苦痛も厭だつた。

腹の痛みは時々來ては又休む。然し其休む時間が段々に短くなつて來た。自分は久を三造の家へやつて、三造を町の醫者へ迎へにやらした。

夜が明けて來た。玄關の軒にゐる鳩の飛立つ羽音などが聽こえた。

妻の痛みは段々に烈しくなつて來た。自分も妙に落ち着かなくなつて、部屋へ入つたり出たり、家の中を用もないのに只歩いた。何しろ人手がなかつた。未だ若い女中達に産室の用をさして、自分だけ庭へ出て居る氣はしなかつた。然し何をしていゝか――別に自分のする用もなささうだつた。

「旦那樣、旦那樣」と看護婦が呼ぶ。自分は行つた。

「奥さんの兩方の肩をしつかり持つて上げて下さい」

自分は直ぐ枕元に坐つて妻の兩方の肩を大きな手でしつかりと抑へてやつた。妻は兩手を胸の上で堅く握り合はせて全身に力を入れてゐる。妻は少し青白い顏を顰めて、幾つにも折つたガーゼを一方の糸切齒で、堅く〱噛んでゐる。妻の顏は不斷より美しく見えた。それは或

る一生懸命さを現はしてゐた。
「赤さんが先か。自家の先生が先か。此處の先生が先か。競爭です」看護婦は落ち着きを見せてこんな事を云つた。然し看護婦が緊張した氣持でゐる事はよく解つた。自分は看護婦にいい感じを持つた。
妻は息を止めて眼を堅く〳〵つぶつた。自分もつられて手に力を入れた。
「赤さんがお膝だ〳〵」
水が少し噴水のやうに一尺程上がつた。同時に赤兒の黑い頭が出た。直ぐ丁度塞かれた小さい流れの急に流れ出す時のやうにスル〳〵と小さい身體全體が開かれた母親の膝と膝との間に流れ出て來た。赤兒は直ぐ大きい生聲を擧げた。自分は亢奮した。自分は涙が出さうな氣がした。自分は看護婦の居る前もかまはず妻の青白い額に接吻した。
「偉い〳〵、赤さんのお膝だ〳〵」看護婦は顔中玉の汗にして、手早く後始末をしながらいつた。看護婦は赤兒を其儘にして起つて行つた。
赤兒は何勢よく泣き續けながら、小さい足を動かして母親の内もゝを蹴つて居た。
妻は深い呼吸をしながら、自分の眼を見上げて力のない、然し安らかな微笑を浮べた。
「よし〳〵」自分も涙ぐましい氣持をしながら首肯いた。自分には何かに感謝したい氣が起つた。自分は自分の心が明らかに感謝を捧ぐべき對象を要求してゐる事を感じた。
生れたばかりの赤兒に對しては別に親らしい感情も起こらなかつた。自分は其處に泣いて暴れて居る赤兒を近寄つて見たいとも思はなかつた。それが男か女かを早く知りたいとも思はなかつた。只自分には其兒の出生によつて起つた快い而して涙ぐましい亢奮が胸の中で後まで其尾を曳いて居る事が感じられた。
出産、それには醜いものは一つもなかつた。一つは最も自然な出産だつたからでもあらう。妻の顔にも姿勢にも醜いものは毛程も現はれなかつた。總ては美しかつた。
後も總て順調にいつた。町の醫者が來て、東京の産婆が來て、暫くして東京の母が來た。
自分は母に命名を祖母に賴む事を賴んだ。出産屆をする爲めに二三日して自分は實印を持つて上京した。祖母は別にいゝ名も考へられないから、自身の留女と云ふ名をつけては如何かと云つた。二番目の妹がそんな名は可笑しいと云つて笑つた。今の女學校にそんな名の生徒が居ないからかも知れない。然し自分は祖母の名は好きだつた。母も贊成だつた。純粹に同姓同名も困る事があるかも知れないと云ふので、子の字をつけて留女子とした。

十一

而して、それは今から四週間程前の事になる。
歌舞伎座でやつてゐる「團七九郎兵衛」の新聞評を見て自分は久し振りで芝居を見たい氣がした。
自分はMを誘つて、二十三日それを見に行く事を約束した。自分には其日でないと便じない用もあつたので其日ときめたが、其芝居は二十三日の前にもう千秋樂になつて居た。然し何處かにあるかも知れない、若しいゝ芝居が無ければ活動寫眞を見てもいゝと話し合つた。自分は其前に用を片づけ、Mとは丸善の二階で十二時半に、若しそれより遲れたらMの細君の行つてゐる吳服屋の高島屋で落ち合ふ事に決めて置いた。
其日自分は起きぬけに食事もせず、一番で出かけた。橋場の方の友達に用があつて南千住で降りて其處に寄り、一時間程ゐてから日本橋の三井銀行に行つた。十五分位で濟むつもりだ

つたが二時間經つても埒があかなかつた。番號をいふのを、もうか〳〵に引かされてゐる不愉快には敵はなかつた。讀む物でも持つてゐれば未だよかつた。然し平常呼吸してゐる空氣とは餘りに違つた左う云ふ空氣の中に只凝然としてゐる内に不安と不快で自分は苛々して來た。どれも、これも赤の他人ばかりだ。自分だけが水に滴らされた油のやうな氣がした。

とうとう我慢しきれずに自分は金を受取らずに其處を出て來た。大きな建物で大勢の人間を使ひながら働きのない所だと思つた。急行に乘れば國府津の先まで行ける時間一つベンチに凝然とさせて未だ埒があかないのは、ひどすぎると思つた。樣子を知らず律義に腰かけて待つてゐる人に大體の時間をいつて注意しないのは不親切な所だと思つた。

自分は今度は消極的な用で、日本橋を渡ると森村銀行に行つた。自分は用を頼んで置いて、前の黑江屋にいつて、妻から頼まれた、翌日の宮參りに配る赤飯のお重を買つた。而して其處で電話を借りて麻布へ電話をかけて見た。母が出て來た。

「お祖母さんのお顎が外れましてね」と云つた。

母の話によると、其朝淑子が祖母の部屋へ行くと祖母は床の上で口を開いて、ぼんやりしてゐた。淑子が何かいつても祖母は口を開いた儘「あー、あー」と首肯くだけだつた。（其前（それは自分は知らなかつたが）一度縁側に立つて居た時、誰れかに「お月樣が出ました」と云はれ、「左うか」とヒョイと上を向かうとすると、其拍子に片方の顎が外れた事があつたさうだ。淑子はそれを知つてゐたので、直ぐ母を呼んで置いて親類の醫者に電話をかけた。處が醫者は病氣だつた。今度は違ふ親類の醫者に電話をかけたがそれは旅へ出てゐて留守だつた。仕方なしに又前の醫者に電話をかけて他の醫者を頼んで貰はうとすると、氣の毒に思つた其醫者は自身の病氣を押して直ぐ來てくれた。一方は直ぐ入つたが、他方が中々入らないので祖母は痛がつた、と母は話した。

「今はようくお寢みになつておゐでなんですけど、少しお熱があるやうなの」と母が云つた。

「何度位ですか」

「さつきお計りした時には三十八度三分でしたの」

「大分ありますネ。それぢやあネ、一寸用がありますが、濟まして、直ぐ行きます」と自分は云つた。「ええ」と母は答へた。自分は父が居るのだなと思つた。

自分は重箱の大きな包みを下げて其店を出た。森村銀行での用はちやんとして置いてくれた。自分は又三井銀行へ行つた。未だ駄目だつた。

自分は祖母の事が氣にかゝつた。自分は今まで祖母の顎の外れた事は知らなかつた。顎の外れる事、それは別に心配な事はない筈だと思つた。然し祖母の肉體がいよ〳〵毀れ物らしくなつたといふ氣が何んとなく淋しい氣をさした。

丸善で會ふ約束の時間を少し過ぎたので自分は直ぐ高島屋へ行つた。M夫婦の姿は見えなかつた。然し間もなく二人は段々を上つて來た。一ト汽車乘り遲れたと云つてゐた。

二人は其處で食事をした。自分は銀行での不愉快の上に祖母の病氣ですつかり氣分を惡くしてゐた。食事を濟ますとMと自分だけ其處を出た。自分はもう銀行まで行く氣はしなかつた。四時が仕舞ひだから、四時に行けば幾ら何んでも埒があくだらうと思つた。自分は四時頃淺草で會ふ活動寫眞の小屋をきめて置いてMと別れ、麻布へ向かつた。Mは丸善へ行つた。Mは、其處で呉服屋の用を濟まして來る細君と

落合ふ筈だつた。

自分は肉體からも氣分からも氣持の悪い疲勞を感じてゐた。其上厭に嵩張つた紙包みの重箱を下げて歩く事が一層氣色を悪くした。

電車を降りると急いで麻布の家へ行つた。重箱を玄關に置いて直ぐ祖母の部屋へ行つて見た。其處には母と隆子とが居た。

母は直ぐ祖母の額の所へ額をやつて、少し聲を張り上げるやうにして、

「順吉が參りました」と云つた。

祖母は重い眼蓋を少し開けた。自分は潤んだ、少し充血した眼を見た。祖母は直ぐ又眼を閉ぢて了つた。

今度は自分が額を寄せていつた。

「お祖母さん、赤坊は元氣にして居ます」

祖母は眼をつぶつたまゝ、わからない位に首肯いた。自分は又、一ト調子高い聲を出して、

「顎の外れる位は何も心配な事はありません」と云つた。祖母は一寸首肯くさへ大儀さうに默つてゐた。

「お煙草をつけて上げて下さい」と母がいつた。

自分は側にある長い烟管で烟草をつけた。祖母に渡すと祖母は眼をつぶつたまゝ、吸口が入るだけに僅か脣を緩めて烟草を吸つた。然し祖母の意識は明瞭してゐるとは思へなかつた。

其内祖母は切りに股の間を氣にしだした。通じが出てゐた。次の間からおかはを持つて來た。自分は祖母を抱き起こした。而して後から抱き上げて用を便じさした。

此事は自分に非常に心細い氣をさした。自分の胸は痛んだ。勝氣で潔癖で左ういふ事には殊に締りのいゝ祖母はかなり悪い病氣の時でも室内で用便する事を厭がつた。自分はその事ではよく祖母に怒つた。怒つても祖母は「はばかりでなければ出ないから仕方ない」と云つて無理に立つて行つたりした。然し祖母も段々に無理は云はなくなつた。病室におかはを入れる事もそれ程厭がらなくなつた。それにしろ、知らずに粗相するやうな事は自分はこれまで一度も知らなかつた。

母は女中に湯を持つて來さして身體の下の方を丁寧に浄めた。而してそれをしてゐる時に他の女中が來て母に、

「旦那樣がお呼びでムいます」と云つた。

始末を濟ますと母は直ぐに其處を起つて往つた。

八十二にしては祖母は珍らしい力のある生々したいゝまなざしを持つてゐた。身體は此四五年段々弱つたやうに思つても、其いゝまなざしを見る時に自分は未だ未だといふ安心を持つ事が出來た。聲にも祖母は一種の力を持つてゐた。離れた所にゐる女中や、孫達に坐つた儘に何か命じたりする、其時は中々強い聲を出した。それを聽く時自分は何時も或る愉快な氣持を感じた。實際自分は祖母の死を恐れた。祖母の死の場に起る父との不愉快な出來事を想像しても、それは恐しかつた。然し夫より兎も角祖母にはもつと生きてゐて貰ひたかつた。自分は前に擧げた良人と妻と女中懐姙との話で妻の祖母が大病になる事を書く場合にも、其祖母の年を祖母より二つ年上にし、而して其大病が直る事を書いた。自分は何んとなく縁起を善くして置かないと氣が濟まなかつた。然し今自分は眼の前に何處に望みをかけていゝかわからない祖母を見た。顎の容易に外れる事で胸を打たれた自分は更に祖母の粗相を見た。自分の恐れて居た事がいよ〳〵來たのではないかと云ふ恐怖を感じた。

母が不愉快な顔をして歸つて來た。而して縁側から自分に手招きをした。自分は起つて行つた。母は小聲で、

「お祖母さんもネ、此御樣子ならもう心配はありませんから、今日はどうかこれで歸つて下さい。ねえどうか氣を惡くしないで」と云つた。自分は母が「此樣子なら心配はない」と云つてゐる氣持が理解出來なかつた。母は又、
「かう云ふ御病氣の中で若しお父さんと衝突でもするやうな事があると、それこそ、何よりの不孝になるのですから」と云つた。
「お父さんと僕との關係と、僕とお祖母さんとの關係とは全然別なものに僕は考へてゐるんです。それはお母さんも認めて下さるでせう？」
自分は少し亢奮して云つた。
「えゝ。それはよく解つてゐます」
「そんならお父さんにもそれを認めて頂きませう。若し認めて下さらなくても僕のする事は同じですけれども、兎も角出來るだけ穩かにお父さんに手紙を書いて願つて見ませう」
「それが、よござんすよ。心から穩かにネ」
「そんならいつそ今お會ひして來ませうか。お書齋ですか？」と自分は云つた。
「今はどうか止めて。兄さんの氣持も落附いた時に穩かに手紙で書いて上げて下さい」
「左うですか。そんなら左うしませう。それからネ。これはお母さんに願つて置きますが、お母さんの手紙は何時でも僕に心配させまいといふ氣でお祖母さんの事をお書きになりますが、あれは却つて僕には不安心な氣が起りますから、これから本統の事を正直に書いて頂きます。差引いてあると思ふと、それだけ此方は加へて考へますからネ。其加へ方も何の位加へていゝか、程度が知れないので倍不安になるんです」。
「解りました。それは氣をつけます」と母は云つた。
「ぢやあ歸りますが、明日の朝我孫子へ電報を下さい。何方道二三日内に出て來ますが、兎も角電報を下さい」
「承知しました。それならお父さんに上げる手紙も理窟は云はないで、出來るだけ穩かにネ」と母は念を押した。
五分程して自分は又大きい重箱の包みを下げて麻布の家を出た。
自分の氣分は益々惡くなつた。自分は父が母に「順吉を直ぐ歸せ、直ぐだぞ」と青筋を立てゝ怒つてゐる樣子を見るやうに考へられた。「彼奴にはどんな事があつても決して出入は許さん」かう云つてゐる聲も自分は實際聞くやうに考へられた。
自分は不愉快だつた。腹立たしい氣もしてゐた。然し其處には何も豫期以上の事は起つてゐなかつた點で、自分は其不愉快に自分の氣持全體を惹き込まれずに居られた。自分でも意識して惹き込まれないやうにもして居た。それにしろ祖母の容態は自分の胸に痛かつた。
自分は妻から出產の祝ひ返しの品々を買ふ事も賴まれてゐた。妻は翌日の宮參りより、それを遲らしたがらなかつた。自分は疲れた身體と衰へた氣分をしながら其買物の爲めに銀座へ行つた。重箱の外に又二つ紙包みが出來た。
四時少し前に又三井銀行に行つた。漸く用は濟んだ。而して淺草へ行つた。
約束の小屋でM夫婦と一緒になつた。或る寫眞が濟むとMは其日丸善から買つて來たロダンの大きい本を自分に見せた。三四枚その寫眞を見てゐる内に又暗くなつた。自分は自分の氣分から活動寫眞が少しも面白くなかつた。
三十分程して三人は其處を出た。初めは二軒見るつもりだつたが、其處を出ると誰れもそれを云ひ出さなかつた。M夫婦は其時の自分の氣分に一番適切な氣持で自分に對して居て呉れた。自分の氣分は言葉は使はずに三人に通ふ氣

分の上だけで慰められた。二人は少なくない買物を持つてゐたが、自分の多い荷物の一部を分け持つて呉れた。而して或る家に食事をしに入つた時、自分は其處から母に電話をかけた。

「別にお變りありませんから、心配なく」と云ふ返事だつた。

暫くして三人は其家を出た。仲店をブラブラ歩いて居る時に自分はMに麻布の家を出る時の事を話した。自分は靜かな氣持でそれが云へた。

「ファザーは相變らず頑固だネ」とMは少し淋しいやうな笑顔をして云つた。

九時の終列車には少し間があるので、雷門から上野の廣小路まで電車に乘つて、其處から逆に夜店の出てゐる路を停車場の方へ歩いた。

停車場の前で三人は永水屋に入つた。自分は又其處から麻布へ電話をかけて見た。さう度度母を呼び出すのは厭な氣がした。自分は出て來た女中に、

「お祖母さんは別にお變りないネ」と訊ねた。

「別にお變りムいません」

「左うか、それならよろしい。誰れも呼ばなくてよろしい」左う云つて電話をきつた。

自分の衰へた氣分は中々直りさうもなかつた。自分は若し此氣分が少しでも續くと、今かかつてゐる「夢想家」の調子まで狂はしかねないと思つた。自分は汽車に乘つてからも暫くボンヤリした氣持でゐた。

自分は汽車が北千住を出る頃から、Mの買つて來たロダンの本の插繪を見だした。最初は捕へられてゐる自分の氣分から、中々それに惹き込まれて行かなかつた。然し暫くすると段々に惹き込まれて行つた。自分はロダンの藝術の持つ永遠性を沁々と感じた。自分は腹の底に湧き上つて來る亢奮を感じた。自分の氣分は氣持よく解放された。自分は自分の心がロダンの心を求め、それへ飛びついて行かうとして居るやうに感じた。自分の心は不思議な程に元氣になつた。

我孫子の停車場ではMの家からの迎ひと共に三造が、テル(犬)を連れて待つて居た。テルは喜んで無暗と自分に飛びつかうとした。M夫婦とは停車場から突當つた神社の前で別れた。

テルは嬉しさうに、追越しては寄り路をし、遅れては驅けて來いして所々に小便をかけながら、ついて來た。

自分は三造から翌朝早くYが上京する筈だと云ふ事を聞いた。自分は歸ると直ぐ手紙を書いて、我孫子へ歸る前、麻布へ電話をかけて祖母の樣子を訊いて貰ふ事をYに頼んだ。手紙は直ぐ三造に持たしてやつた。

十二

翌日自分は父への手紙を書いて見た。自分は母に云はれる迄もなく、理窟をそれに書く氣はしなかつた。理窟でいゝならそれは易しい事だつた。然し理窟で自分の要求が如何に正當であるかを書き現はせた所で、それが實際で何の役にも立たない事はよく解つて居た。若しそれが拔目なく、それでも自分の出入を禁ずると父に云ひにくいやうに書ければ書ける程、理窟の上に立つて居る場合、結果は益々惡くなるに決まつてゐた。だから左う云ふ手紙を書く氣は少しも自分にはなかつた。而して自分は多少父の感情に訴へるやうな手紙を書きかけて見た。然しそれは直ぐ止めた。相手を動かさうと云ふ不純な氣持が醜く眼について迚も續けられない。

自分は二三度書直して見た後、手紙では今の自分には如何しても感じは現はせない事を知つた。一番困難な事は手紙を書いてる内、頭に置

いてゐる父が少しも一つ所に止まつてゐない事だつた。云ひかへれば父に對する自分の感情が絶えずぐら／＼する困難だつた。自分は書出しに調和出來るかも知れない、比較的穩かな顏をした父を頭に浮べながら、自分も穩かな氣持で、其父に書いて行く。所が書いて居る內に其父の顏は段々變つて行く、左ういふ時には實際書いてゐる自分自身が、そろ／＼と理窟がましい事に入つて行きかけもしたが、其內に父の顏は急に意固地な不愉快な表情をする。自分はペンを措くより仕方がなかつた。

自分は今の自分には父に手紙は書けないと思つた。自分は母宛てに父への手紙を止めた事、その代り近日上京して直接お話する事にしました、と云ふ手紙を書いた。

午後電報が來た。

「キノウヨリヨシ、タイオン三七二、イシグロサンゴシンサツ、チヨウカタル、カンゴフクル、シンパイナシ」

前日此儘二三日で如何かなるかと云ふ恐怖を持つた自分は其電報で安心した。

晩飯を食つてゐる時、前日訪ねた橋場の方の友が用事旁々訪ねて來た。而して友が十時十二分の終列車で歸る時、自分は停車場まで送つて行つた。

上りの列車が少し遲れて、上野からの下り終列車が先に着いた。Yが出て來た。Yは電話で聞いた祖母の容態を精しく話して呉れた。自分は此分なら前日感じた恐怖はいよ／＼空なものになつて呉れるぞと思つた。上りが出てから自分はYと一緒に歸つて來た。

翌日自分は新聞で、早稻田に居る口の大きい或る年寄が大病だと云ふ記事を見た。自分は此年寄がかなり嫌ひであるに拘はらず、其時、助かるといゝが、と云ふ感情を持つた。それは或る期節の氣溫の變目に、よく續け樣に年寄りが倒れる事がある。今が左ういふ時ではないかといふ不安を祖母の爲めに感じたからであつた。

自分は又十月の雜誌に出すべき「夢想家」に取りかゝつた。

自分は今、父を憎んでは居ない。然し父の方で心からの憎しみを露骨に現はして來た場合、それでも自分は穩かに、今の氣持を失はずに父に對する事が出來るだらうかと氣づかはれた。

京都にゐた頃高等學校に通つてゐた從弟から「貴方の大きな愛が他日父君を包み切る日のある事を望みます」とこんな事を手紙で云つて來た事があつた。其時自分は甚く腹を立てた。「大きな愛といふ言葉の內容を本統に經驗した事もない人間が無暗と他人にそんな言葉を使ふものではない」と云つてやつた。自分は今其事を憶ひ出した。自分は自分の現在の調和的な氣分で父がどんな態度を取る場合にも心の餘裕を失はずに穩かに對する自身を信ずる事は少し自惚れ過ぎてゐると思つた。自分は知らず／＼の中に、所謂大きな愛で父を包み切る事が出來るやうな氣になるのは馬鹿氣た事だと思つた。自身の實際の愛の力も計らずに。

心から、而して努力なしに父が假令如何な態度を取らうとそれに惹込まれず、或る餘裕を以つて引退つて來られゝば此上ない事である。然し今の自分が其場合必ずそれをやらうと考へるのは何處かで一足飛びをした、切れ目のある考へ方だと思つた。

兎も角會つた上の成行きに任せるより仕方がないと思つた。感情上の事に豫定行動が取れるかのやうに、又取らす事が出來るかのやうに思ふのは誠に愚な事だと思つた。

八月三十日は實母の二十三回忌の祥月命日だつた。自分は其日の墓參に上京した時、若し父が自家にゐたら會はうと考へて居た。

十三

三十日に自分は自轉車を持つて上京した。自轉車は前々日書家のS・Kが東京から乘つて來たのを置いて行つたものである。

上野からそれに乘つて麻布に向かつた。

谷町の方から麻布の家へ登る坂へ來て自分は自轉車から下りた。而してそれを牽きながら歩いて居る自分は向うから和服を着た父が歩いて來る事を想像してゐた。此想像は當りかねない想像だつた。父が若し自分と會ふ事を厭がつて自分と落合ふ事を避ける爲めに外出するとすると父は一番近い電車への路とは反對な此道を來るに違ひなかつたからだ。自分は若し父が來たら話だけは矢張り仕た方がいゝと考へてゐた。自分にはそれをする父と自分との樣子が想ひ浮んだ。自分が話をしようとして寄つて行くと、父は何も云はずに急足ですり拔けて行つて了はうとする。自分が何か云ひながら立塞がる。父は仕舞ひまで口を利かずに其儘すり拔けて行つて了ふ。左ういふシーンが自分には浮んでゐた。それは想像にしろ、起り得べき事に一番近い想像だと自分には思へた。

自分は麻布の家へ行つた。仲の口に鎌倉の伯父の杖があるのを見た。自分は直ぐ祖母の部屋の方へ行つた。祖母は其日は廊下を隔てた隣りの部屋に床を延べさせ、自身は其床の側に座蒲團を敷いて坐つてゐた。豫期したよりも遙かに元氣な顔をしてゐた。力のあるまなざしも何時か又祖母に歸つて居た。自分は喜んだ。看護婦が二人ついて居た。其部屋には伯父と、毎時よりいゝ着物を來た妹達と母とが居た。

祖母は自分に何故もつと早く來なかつたかと云つた。坊さんの讀經が今濟んだ所だとそれに間に合はなかつたのを殘念らしく、何かいつてゐた。

伯父は自分に二三日内に京都へ行く心算だと云つた。すると祖母は伯父に、

「昨晩お前が京都のお寺に免狀を頂きに行くと云ふ夢を見て、お母さんがお前なぞに未だ免狀が頂けるものかと云ふとこだつた……」といつて少し意地の惡いやうな顔をして笑つた。

「お前なぞに取れないは少し酷いなあ」と伯父は云つた。「いや實際私共には免狀は未だとれませんよ」

「まさ伯父さん。免狀を頂きにいらつしやるの？」と隆子が訊いた。

「そんな事ぢやないよ」と伯父は笑つた。「それはお祖母さんの夢だ、まさ伯父さんは久し振りで建仁寺の老師にお會ひしに行くんだ。それはさうと私が京都へ行く事はお母さんにお話し仕ましたかね。何んだか仕ないやうに思ふがな」

「聽かなかつたやうだ」と祖母が答へた。

前から少し落ちつかない樣子をしてゐた母が、自分に、

「兄さん一寸お佛樣にお線香を上げて來ませんか」と云つた。

「えゝ」左ういつて自分は起つて佛壇の間へ行つた。母も直ぐついて來た。

佛壇には燈明や線香や花や茶や菓子や果物などが上げてあつた。佛壇の横に其日の佛が三つで死んだ自分の兄を抱いてゐる、掛軸に仕立てた下手な肖像畫が下がつてゐた。

自分は線香を立てゝお辭儀をした。

「お父さん お家ですね？」と自分は側へ坐つてゐる母にいつた。

「えゝ、おゐでです」

「手紙だと氣持が中々現はれないので、矢張り直接お會ひした方がいゝと思つたのです」

「そりやあ、穩かにお話出來ればそれに越した事はないのですから、どうかね、本統に穩か

な心になつて、靜かにお話して頂戴。私も今朝から度々今日のお佛樣にどうかお手引き下さるやうにつてお願ひして居たの。兄さんも一時の感情で又烈しい事なんか云つたりしないで、一ト言でいゝから眼をつぶつて、これまでの事は私が惡うムいましたとお詫して下さい。お父さんも段々お年をお取りにはなるし、兄さんと今のやうな關係でいらつしやるのは本統は大變お苦しいんですよ。だから一ト言兄さんが左うお詫すれば、それでお父さんは滿足なさるのですからね。お父さんも、あゝ何處までも盾突いて來る者に親として此方から口を切つては行けないとお思ひになるのは、それは無理はないでせう？ お父さんだつて、頑固は隨分頑固な方ですけど、別に惡いと云ふ方ぢやあ、ありませんものね」母は眼に涙を溜めて居た。

「そりやあ、左うです。然し私にはかう云ふ考へがあるんです。今日迄のお父さんとの關係は、それは仕方がないと思つてゐるんです。私としては若しかうなつて呉れなければ困る事だつたのです。お父さんには實にお氣の毒な事だとは思ひます。それから或る事では自分が惡かつたと思ひもします。然し今の結果については私は止むを得ない事で、後悔も出來ない事と思つてゐるのです。若し私がお父さんのお氣に入る人間になつてゐたと假定して今の私の眼でそれを見れば、それは適はない人間ですからね」

「えゝ、そりやあ、解つてゐます。自分を少しも立てずに只諾々と親の云ふ事ばかり守つて居ていゝと思ふやうな人間では仕方がないと云ふ事はよく解つて居ます。左うですけど、今となつて兄さんが、お父さんの前へ一ト言お詫びをしたからとて、それで急に自分と云ふものが立たなくなるわけもないのですから、どうぞ、お願ひします、今までは惡かつたと一ト言お詫をして下さい。それさへ兄さんがして下されば、お父さんお祖母さん初め、家中の者が皆晴々として、これから樂しく暮らして行けるのですからね。どうか眼をねむつて一ト言お詫して下さい。お願ひします」母は亢奮して何度も頭を下げながらそれを云つた。

「然し、それは感情が其處まで行つて居ないで、只眼をつぶつてお詫する事は僕には出來ませんがね。今の僕がお母さんの仰有るやうにお父さんの前へ出て只お詫するのは、兎も角廣い堀を一つ飛び越さなければなりませんものね。而して假りに飛び越してお詫をした所で、お父さんだつて其場には氣がおつきになるから形式ではお詫が出來たやうでも、それは結果からいつて實際何んにもなりはしますまい」

自分は續けて云つた。

「然し兎も角お會ひして見ます。それは大部分感情の上の事ですもの、豫定して行つた所で其通り運ばす事は出來ませんし、それはお會ひした上で私の氣持もなだらかに今私が思つてゐる以上に進まないとはかぎりません」

「本統に左うです。左う穩かに是非進むやうにね」

「お父さんはお書齋ですか？」

「左うでせう。お書齋でなければ奧のお部屋でせう」

自分は起つて洋室の方へ行つた。自分は自分の心が動搖してゐる不安を感じた。此儘で直ぐ入つて行くのはよくないと思つた。自分は疊廊下を往つたり來たりして心を靜めようとした。自分は如何いふ事から云はうかと云ふやうな事を少しも考へなかつた。二分間程で自分の氣持は靜まつた。自分は父の書齋の入口へいつてノックした。返事がない。自分は戸を開けて見た。父はゐなかつた。奧の日本間の居間へ行つて見た。其處にもゐなかつた。自分は又祖母の部屋へ歸つて來た。

「いらつしやいませんよ」と母にいつた。
「お庭かも知れない。お呼びして來ませう」母
は起つて行つた。
少時すると母は急いで還つて來た。而して、
「お書齋」と云つた。
自分は起つて行つた。
書齋の戸は開いて居た。自分は机の前の椅子
を此方向きにして腰掛けてゐる父の穩かな顔を
見た。父は
「其椅子を……」と窓際に竝べた椅子へ顔を向
けながら、自身の前の床を指さした。
自分は椅子を其處へ持つて行つて向ひ合つて
腰かけた。而して默つて居た。
「お前のいふ事から聽かう」と父は云つた。而
して「、、まさは彼方に居るか？」と云つた。その云
ひ方が自分にいゝ印象を與へた。自分は、
「居ます」と答へた。
父は立つて壁のベルを押した。
それから又椅子へかへると、
「それで？」と默つてゐる自分を促した。
女中が用を聽きに來た。
「あゝ、あのね、鎌倉の旦那さんに直ぐ此處へ
來るやう」と父が云つた。
「お父さんと私との今の關係を此儘續けて行
く事は無意味だと思ふんです」
「うむ」
「これまでは、それは仕方なかつたんです。そ
れはお父さんには隨分お氣の毒な事をして居た
と思ひます。或る事では私は惡い事をしたとも
思ひます」
「うむ」と父は首肯いた。自分は亢奮からそれ
らを宛然怒つてゐるかのやうな調子で云つてゐ
た。最初から度々母に請合つた穩かに、或は
靜かに、と云ふ調子とは全く別だつた。然しそ
れは其場合に生れた、最も自然な調子で、これ
より父と自分との關係で適切な調子は他にな
いやうな氣が今になればする。
「然し今迄はそれも仕方なかつたんです。只、
これから先までそれを續けて行くのは馬鹿氣て
ゐると思ふんです」
伯父が入つて來た。伯父は自分の背後にあつ
た椅子に掛けた。
「よろしい。それで？　お前の云ふ意味はお祖
母さんが御丈夫な内だけの話か、それとも永
久にの心算で云つてゐるのか」と父が云つた。
「それは今お父さんにお會ひするまでは永久に
の氣ではありませんでした。お祖母さんが御
丈夫な間だけ自由に出入りを許して頂ければ
よかつたんです。然しそれ以上の事が眞から望
めるなら理想的な事です」と自分は云ひながら
一寸泣きかゝつたが我慢した。
「左うか」と父が云つた。父は口を堅く結んで
眼に涙を溜めてゐた。
「實は俺も段々年は取つて來るし、貴樣とこれ
迄のやうな關係を續けて行く事は實に苦しかつ
たのだ。それは腹から貴樣を憎いと思つた事も
ある。然し先年貴樣が家を出ると云ひ出して、
再三云つても諾かない。俺も實に當惑した。仕
方なく承知はしたものゝ、俺の方から貴樣を出
さうと云ふ考へは少しもなかつたのだ。それか
ら今日までの事も……」
こんな事を云つてゐる内に父は泣き出した。
自分も泣き出した。二人はもう何も云はなかつ
た。自分の後ろで伯父が一人何か云ひ出した
が、其内伯父も聲を擧げて泣き出した。
暫くすると、父は立つて又壁のベルを推した。
女中が來た時に、
「奥さんに直ぐ……」と云つた。
母が入つて來た。母は父の横にある低い椅子
に腰掛けた。
「今、順吉の話で、順吉もこれまでの事は誠
に惡かつたと思ふから、將來は又親子として永

く、交はつて行きたいと云ふ……。左うだな？」と途中で父は自分の方を見た。

「えゝ」と自分は首肯いた。それを見ると母は急に起上つて來て自分の手を堅く握りしめて、泣きながら、

「ありがたう。順吉、ありがたう」と云つて自分の胸の所で幾度か頭を下げた。自分は仕方がなかつたから其頭の上でお辭儀をすると丁度頭を上げた母の束髪へ口をぶつけた。

母は又伯父の所へ行つて、

「まささんありがたう。ありがたう」と心からの禮を云つてゐた。

「お祖母さんに直ぐお話して來い」と父が母に云つた。母は涙を拭きながら急いで出て行つた。

妹達が六つになる祿子まで四人で入つて來た。皆は誰れにともつかず一つにかたまつて其處でお辭儀をした。

皆が出て行くと、父が不意に、

「あした我孫子へ行つて見よう」と云つて、都合を訊くやうに自分の顏を見た。

「どうぞお出で下さい」

「左うか。留女子も見たいし、お前の家も如何な家か見に行かう」父は快活な顏をして云つた。

「どうぞ」と自分に云つた。

十四

祖母の床は何時か隣りの部屋から又祖母の部屋へ移されてゐた。伯父や自分が其處で話して居る所に父が入つて來た。父は、

「順吉の事は、おききやつたらう？」と云つた。

「聽いた」と祖母は首肯いた。

父は祖母がもつと其後に何か云ふかと待つ風だつた。自分は祖母が、もう少し父の要求してゐる氣持に應じた様子を見せればいゝのにと思つた。然し祖母には氣持にあつても或る感情は露はせない性質があつた。父も何か云ひかけてよして了つた。而してどういふ氣持か、父は時時佛壇の方へ眼をやつてゐた。其處には前にも書いたやうに自分の死んだ兒を抱いた、死んだ母の下手な肖像が掛かつて居た。

晝飯の時父は酒を飲んだ。母も伯父も自分も妹達も皆一つづつ飲んだ。飲めない者は眞似だけした。

何の爲めに左ういふ事をするのか誰れも口に出すものはなかつた。皆には只其胸に通ひ合ふ和いだ嬉しい感情があるだけで誰もそれを口には出せなかつた。それは氣持のいゝ事だつた。吾々は只雑談をした。それでも父は想ひ出して、

「お浩。英子の所へ今日の事を電報で云つてやれ」と云つた。

英子といふのは自分の一番上の妹で鎌倉にゐる。

「今晩か、それでなければ明日早く私が行つて話しませう」と伯父が云つた。

「左うか。それなら、それでもよからう」と父は答へた。父は又、

「あしたは、我孫子へは誰れと誰れが行くのですか？」態とそんな事をいつて小さい連中を見渡したりした。

「祿ウちやん行く」

「昌アちやんも行きます」

「左うか。そちらの大きい姉さん達はどうかね？」と父は笑ひながら其方を見た。

「みんな參ります」と淑子が云つた。

自分は其日朝飯をよく食はずに出て來たのだが、晝飯も少しも食ふ氣がしなかつた。自分は父が命じて呉れた葡萄酒を水に割つて少し飲んだ。

午後、父だけは少し酒に醉つたので少し睡ま

して、湯に入つてからと云ふので別になつたが、その他祖母を除き、總勢七人で青山へ墓參りに出掛けた。自轉車の自分は電車でない所は伯父と並んで歩いたが、二人の間で其日の話は何もしなかつた。母とも同樣だつた。
　自分は昨年死んだ赤兒の墓の前で皆に別れ自轉車で四谷のS・Kの家へ行つた。
　S・Kは庭へ水撒きをしてゐた。自分はS・Kがそれを濟まして足を洗つて來る間、母への禮手紙を書いた。永い間板挾みの苦しい位置にゐて、何度失敗しても父と自分との和解の望みを捨てずに居て吳れた事を感謝した。それから先刻云つた堰を飛越すやうな事なく、感情に何の無理もなく彼處に落ちつく事の出來たのは自分には望外の事で、今度の和解は決して破れる事はないと信じてゐる事などを書いた。
　自分は其日の事をS・Kに話した、S・Kは大變に喜んで吳れた。而して大變氣持のいゝ事として好意を見せて吳れたS・Kは、
「康子さんに電報を打たないか。喜ばれるだらう」と云つた。
「今日父と會ふと云ふ事は多分知らないから、別に心配はしてないと思ふ」と自分は答へた。
　暫くすると集まる約束になつてゐた友が二人來た。
　自分はS・Kの家に來た時から非常に身體も心も疲れて來た。而してそれは不愉快な疲れ方ではなかつた。濃い霧に包まれた山奧の小さい湖水のやうな、少し氣が遠くなるやうな靜かさを持つた疲勞だつた。長い／＼不愉快な旅の後、漸く自家へ歸つて來た旅人の疲れにも似た疲れだつた。
　自分は終列車に間に合ふやうに皆と別れて上野へ向かつた。
　我孫子の停車場では三造が提灯を持つて迎ひに來てゐた。歩いて居る時、
「明日は麻布の旦那樣がいらつしやるさうで」と後から三造がいつた。
「電報が來たのか？」
「三時頃參りました」
「又小さい連中が來るからネ、お天氣だつたら蜆取りでもやるから、朝の內船を自家の前へ廻して置いて吳れ」
「かしこまりました。それから、いゝ、あしたの鳥の肉も先刻鳥屋へ行つて賴んで參りました」
「左うか。左うしてお前はネ、來られたらなるべく早く來て家の廻りを少し掃除して置いて吳れ」
「掃除はもう皆すつかりして置きました。奧樣が先に立つて、內も外もすつかり出來てゐます」
　自分は自家の坂を登らうとすると其處に妻が立つて居るのを見た。妻は默つて近よつて來て自分の手を兩手で堅く握りしめた。而して、
「お目出度う」と云つた。

十五

　翌朝自分は一人で停車場に迎ひに行つた。妻も行きたがつたが、赤兒が妙に身體をピクッピクッとさしてゐたので、自分は來させなかつた。
　汽車が着いた。隆子が一番先に降りて、祿子、昌子がそれに續いた。次に父が降りて來た。自分はお辭儀した。父は何の表情もない顏をして、
「あゝ」と云つて輕く頭を下げた。
　自分は停車場を出るまで父と餘り口をきかなかつた。お互に多少窮屈な感じがあつた。自分は此窮屈な感じは其內にとれて吳れるだらうと思つた。此窮屈を破らうとして無い話を無理にするのは反つてよくないと思つた。父も無理に口をきかうとはしなかつた。

皆は俥に乘つて自分の家に來た。妻が赤兒を抱いて門から出て來た。父の顏を見ると妻の眼からは涙が出かゝつてゐた。父は赤兒を見てゐた。

其日は自分には一日氣持のよい日だつた。窮屈さは直ぐ去つた。陶器の事、繪の事などが主な話題だつた。自分は自分の持つてゐる僅かな古い陶器や、古い布類などを出して來て父に見せた。父は近頃買つた軸物の話などをした。吾吾は少しも退屈しなかつた。二人の間では前日の事は何も話されなかつた。然し父は小さい連中が皆戸外に出て行つた時に、

「順吉も今後は又親子として永く附合つて行きたいと云ふ希望だと云ふし、それは私にとつても誠に望ましい事なのだから、これまでの事はなかつたものとして、お前もその心意になつて居て貰はねばならん」と妻に云つた。

妻は何も云はずに涙を拭きながら只首肯いてゐた。自分は父が前日母に云つた事を其儘此處で妻に繰返すかも知れないと父が何か云ひ出さうとした時考へた。而して自分は父がそれを云つたにしろ、自分は決して不快は感じないで濟ませると云ふ自信を持つてゐた。所が父は左うは云はなかつた。自分は大變いゝ感じを受けた。自分は父に感謝する氣持を持つた。

「慧子はどうした事だつたかな……」と父が云つた。自分達は答へなかつた。然し自分は慧子の事でも今は父に不快は感じてゐない事は自ら感じた。

皆は三時少し前の汽車で歸る事にした。

父は歸る時又妻に、

「これからは時々來るからね」と云つた。

「どうぞ、是非おいで遊ばして頂きます」

「どうぞ」と自分も一緒に云つた。

自分は停車場まで送つて行つた。汽車は遲れた。自分は淑子に、

「兄さんはこれから少し忙しいから暫く東京へは出ない」と云つた。側から昌子が見上げて、

「お兄樣、でも、今年中にいらつしやるでせう？ 屹度いらつしやいね。いゝ事、屹度よ」と云つた。姉達は笑つた。昌子には何か考へがあるらしく、何度も又これを繰返して居た。自分は未だ滿八歳にならぬ昌子の小さな心にも此和解は決して小さくない出來事だつたに違ひないと思つた。

父は少し疲れたかのやうに見えた。暫くして汽車が着いた。皆は乘込んだ。父は自分のゐるプラットフォームとは反對の窓の側に腰を下ろした。妹達は此方側の窓に重なり合つて顏を並べてゐた。

笛がなると、皆は「さよなら」と云つた。自分は帽子に手をかけて此方を見てゐる父の眼を見ながらお辭儀をした。父は、

「あゝ」と云つて少し首を下げたが、それだけでは自分は何んだか足りなかつた。自分は顰め面とも泣き面ともつかぬ妙な表情をしながら尙父の眼を見た。すると突然父の眼には或る表情が現はれた。それが自分の求めてゐるものだつた。意識せずに求めてゐたものだつた。自分は心と心と觸れ合ふ快感と亢奮とで益々顰め面とも泣き面ともつかぬ顏をした。汽車は動き出した。妹達が何時までも何時までも手を振つてゐた。長いプラットフォームを出外れて右へ弓なりに反つて此方が見えなくなるまで、手を振つてゐた。自分は誰れもゐないプラットフォームに一人立つて何時までも洋傘を上げてゐた自分を見出した。自分は停車場を出ると急いで歸つて來た。何故急ぐのか解らなかつた。自分は父との和解も今度こそ決して破れる事はないと思つた。自分は今は心から父に對し愛情を感じて居た。而して過去の樣々な惡い感情が總てその中に溶け込んで行くのを自分は感じた。

十六

自分にはもう父との不和を材料とした「夢想家」を其儘に書續ける氣はなくなつた。自分は何か他の材料を探さねばならなかつた。材料だけなら少しはあつた。然し其材料へ自分の心がシッカリと抱き付くまでには多少の時が要つた。多少の時を經ても心が抱き付いて行かぬ事もある。左ういふ時無理に書けばそれは血の氣のない作り物になる。それは失敗である。自分は十五六日までの期日に何か物になる程のものが出來るかしら？

自分はこんな事を考へながらも、又不圖父との事を味ふやうな氣持で考へてゐた。自分は最近に又會ひたいと思つた。自分には二三週間後に會ふより今の內もう一度會つて置く方が此際實際的にもいゝやうな氣もしてゐた。自分は又何かで父に好意をあらはしたいやうな慾求から自身の手で得た金でS・Kに父の肖像畫を描いて貰つて贈らうと云ふ事を想ひ着いた。自分達の事を心から喜んで吳れたS・Kにそれを賴むのも無意味でないと云ふ氣がした。自分は早速S・Kに手紙を書いた。

翌朝（九月二日）其手紙を出してから、自分は矢張り上京して、父に會ひ、S・Kにも會ひ、其事に早く埒を開けて置く方がいゝと思つた。

自分は停車場へ行く途中郵便局に寄つて自分宛ての手紙を受取つた。鎌倉の妹からのがあつた。自分は步きながら讀んだ。

「今朝早く、寢てゐる內にまさ伯父さんがいらつしやいまして、嬉しい〳〵お話伺ひました。私は伺つて居る內に泣き出して了ひました」

自分と妻との名宛てにしてから書いてあつた。自分は涙ぐんだ。

自分は上野から直ぐ麻布の家へ行つた。父の書齋に一番先に行つたが父は其處に居なかつた。仲の口から自分について來た昌子が、

「そんなら屹度お庭よ」と云つた。

昌子は座敷の緣側から、

「お父さん。お父さん」と大きい聲をして呼んだ。父は東家の中から急いで出て來た。父は電話と思つたらしかつた。

自分は庭下駄を穿いて下りて行つた。

二人は此時も亦、前々日の朝のやうな或る窮屈な感じで少し堅くなつた。自分は仕方なかつた。其儘肖像畫の事を話して、坐つて貰へるかどうか訊いた。父は快く承知した。

自分が緣へ上がつて向うへ行かうとする時、父は立つて何か考へてゐる風だつたが、不意に此方を向いて何か云ひさうにした。自分は一寸戻つた。すると父は云ひかけた事を、

「うゝつ」と其儘にして下を向いた。而して步き出した。

祖母の部屋へ行かうとすると、途中の部屋で母が寢てゐた。母は大腸が惡いと云はれたと云つてゐた。下痢が續いた爲めと何も食はない爲めに母は疲れ切つてゐた。

「永い間の事が片付いたので、氣の疲れも少し出たのかも知れないの」と母は云つた。

「左うですか、一昨日の事は淑子からお聞きでせう？」

「えゝ。それから康子からも手紙を貰ひました。本統にもう安心しました」

自分は其處に暫くゐてから祖母の部屋に行つた。祖母は元氣な顏をしてゐた。それでも床はとつてあつたが、祖母は離れた所に座蒲團を敷いて坐つてゐた。

「今度の事は氣持に少しも無理がない點で、僕は大丈夫だと思つてゐます」

「あゝ、本統によかつた」と祖母は三日前の時とは變つた腹からの氣持よささうな顏を見せた。

「お高（祖母の妹）が歸つて、お國で皆が寄つた所で話したとッさ。皆は一緒に泣き出したと。あれ、あの手紙に書いて來た」左ういひながら祖母は寢床の上に重ねてある二三通の手紙を指した。

「左うですか」自分はその手紙は見なかつた。

祖母は又父が我孫子は思つたよりいゝ所だと讃めてゐた事、家や庭の事も讃めてゐたと、そんな事をいつた。其内祖母は默つて了つた。

自分は何氣なく他の話などをしてゐた。祖母は下を向いて返事をしない。自分で何か想つてゐる内に感動して了つたのだらうと自分は思つた。それとも又顎でも外れたかしらと云ふ氣が一寸した。祖母は然し口を固く結んでゐる。

女中が來て何かいつた。祖母は直ぐ口をきいた。

鎌倉の妹が赤兒を連れて出て來た。

暫くすると父が出て來て、

「いゝ、まさの居ないのは殘念だが、今日丁度皆集まつたから何處かへ飯を食ひに行かう」といつた。

山王臺の料理屋に行く事にした。自分の汽車の都合で、四時に其處へ行く事にして、左う電話を自身でかけてゐた。

自分は間もなく麻布の家を出て、S・Kの家へ行つた。S・Kは永田町の方へテニスをしに行つて留守だつた。自分は又其テニスコートへ出掛けて行つた。S・Kは汗水苦になつてHとシングルの勝負を爭つてゐた。三十分程して、自分は二人と一緒に其處を出た。S・Kには十月幾日までに仕上げねばならぬ先約の仕事が二つあつた。其後でよかつたらと云つた。自分は頼んだ。

自分はHと一緒にS・Kの家へ行つた。而して二時頃其處を出て、麻布へ歸つて來た。間もなく鎌倉の妹の良人も來た。八人揃つたが、弟の順三が中々歸つて來なかつた。父は切りに氣を揉んで心當りに電話をかけるやう命じたりしてゐた。

待ちきれなくなつて皆は家を出た。雨が少し落ちて來たので、女だけ俥で行つた。父と自分と妹の良人とが歩いて行つた。

料理屋へ行つてからも順三は中々來なかつた。父は可笑しい程、それに氣を揉んだ。

「來る筈の者が集まらんのはどうも氣になつていかん」辯解するやうにこんな事も云つた。

然し父は機嫌がよかつた。順三が約束の時間に來ず、既に出來た料理を出させずに皆で待つてゐる事は、其場合多少主人役の位置にゐる父の氣を苛立させ、癇癪を起こさすには充分な事であつた。自分は父が餘り不愉快にならぬ内に順三が來てくれゝばいゝがと思つた。然し父は氣を揉んでも中々それを苛立せはしなかつた。自分は父が氣を苛立つ事で穩かな其日の調子を亂したくない所から自身を抑へて居るのだとも思つた。然し多分それ以上に父は其胸に動いてゐる調和的な氣分から、それが苛立つて來ないのでもあるのだらうと云ふ氣がした。

「もう少し待つて見て、來なかつたら始めようぢやないか」父は左う自分にいつた。

自分は三年半程前、或る事で父に不愉快を感じた。然し父は其時自分がそれ程不愉快を感じてゐると思つてゐなかつたらしい。翌日、不意に父は家中の者を今ゐる此料理屋に連れて行くと云ひ出した。而して電話をかけて人數を知らしたりしてゐた。自分は其時の氣持で迚も一緒に其處へは行けなかつた。自分は母に斷つて一人晝頃から外出して了つた。

「順吉はどうして來なかつたのだ」向うに行つてから切りに父が云つてゐたといふ事を自分は後で祖母から聞いた。其時の事を憶ひ出した。自分の仕た事はあの場合仕方がなかつた。

それにしろ、父が其時感じた不愉快に對しては今更に氣の毒な氣がして來た。

食事を初めると間もなく順三が來た。父は全く機嫌よくなつた。

七時頃皆は其處を出た。自分の乘る終列車までは二時間あつた。父は自身は醉つて少し眠いから歸るが、皆は送りがてら銀座の方でも散歩したらよからうと云つた。

溜池で父は俥に乘つた。

別れる時、其日は自然に父の眼に快い自由さで、愛情の光りの湧くのを自分は見た。自分は和解の安定をもう疑ふ氣はしない。

皆とは銀座で別れた。

自分は仕事の日の一日一日少なくなる不安を感じた。自分は矢張り今自分の頭を一番占めてゐる父との和解を書く事にした。

半月程經つた。京都から鎌倉へ歸つた伯父からの手紙が來た。それは自分が月初めに出した禮手紙の返事だつた。

一先日の和解は全く時節因緣と深く感じ申候。父上も此度は大丈夫だらうと話された。君の手紙でも一時的の感じでないと云ふ事もあるし、拙者も其場で左樣感じた。

東西南北歸去來
夜深同見千岩雪

と云ふ古詩の興を感ずる云々

（大正六年九月）

矢島柳堂

白藤

畫家の矢島柳堂は冬の終りから春へかけ坐骨神經痛でひどい苦みをした。日限のある大作にかゝり、時別寒かつた其冬、病氣の痛み出しに無理をした、それがあとに祟つた。それともう一つは五年越し住んでゐる彼の住ひが沼べりにあり、地面も空氣も濕氣が多く、それもよくなかつた。

兎に角、烈しく痛みだすと、自身は勿論、はたからもどうにも手のつけやうがなかつた。彼は恰も牛のやうに唸つた。そしてかう云ふ時、彼は一寸した事にもよく苛立ち、そこらにある物を妹のお種に投げつけたりした。

お種は氣立ての優しい物分りのいゝ女だつた。それが近頃急に耳が遠くなり、兄の言葉を時々聞違へるので、機嫌のいゝ時にはそれでもよかつたが、一たん痛が昂つてくると、柳堂はよく「馬鹿」とか「聾」とか怒鳴り散らした。然しお種はその事は別に氣にかけなかつた。兄の氣短も我儘も今に始まつた事ではなかつたからだ。それよりも餘りに痛みが烈しく來ると看護をするにも手のつけやうがなく、その當惑からお種は涙を流す事があつた。

或る時、

「今度はお前にも隨分苦勞をかけたな。えゝ? もう少しよくなつたら溫泉へでも出かけようかね。何處がいゝか。お前も其處でゆつくりと保養をするのだ」左う柳堂はお種にいつた。

「お兄さんと一緒ぢやあ、何處へ行つたつて私の保養にはなりませんよ」

「ふむ」

「それは本統ですよ」

「御挨拶だが、俺も左う思ふよ」

春も末に近づくと柳堂の病氣は幾らかづつよくなつた。杖をついて家の中を少し位は步けるやうになつた。唯、雨とか曇り日などには病氣は覿面にそれを感じた。

戸外の景色は日一日に變つて行く。沼の眞菰は氣持よくすく／＼とその淺綠の葉をのばして行つた。汀の葭にはもう行々子が來て啼き始めた。

或る朝、弟子の今西といふ青年が庭を掃いてゐると、寢床に腹這ひになつてゐた柳堂が、

「オイ今西」から呼んで側の小さいみだれ函から自書の詩箋を取つて、默つて低い肘掛窓の上へそれを置いた。

「……」今西は尻端折の裾を下ろしながら、取上げた。

牀隱㆓屏風㆒竹几斜。
臥看新燕到㆓貧家㆒。
閑居心上渾無事。
對㆑雨唯夢損㆓杏花㆒。

「俺がかうして寢てゐる姿を南畫風に描かないか。左ういふ讃をしてやるから」

今西は詩箋を眺めたまゝ默つてゐた。

「お種に見せたら、俺が唸つてゐる所の方がいいといふのだ。さもなければ、痛癪を起してゐる所を描いて貰ふ方が氣が利いてゐると云ふのだ」

「その方なら僕も描きませう」

「笑談云ふな」
二人は笑つた。
「これは先生の御作ですか」
「俺にはそんな漢詩なんて洒落たものは出來ないよ。高青邱の詩だ」
「……閑居心上渾テ無事。雨ニ對シ唯憂フ神經痛」
「はゝゝゝゝゝゝ」

五月に入ると急に陽氣がよくなつた。未だ彼は起居に本統でなかつたが、痛みが少し遠退くと却々家に凝つとしてゐられなかつた。風に當ると後がよくないといふお種の言葉も肯かず、長閑な日には籐の寝椅子を庭先の藤棚の下に出さし、半日、沼の景色を眺め暮した。

殼を被つた白藤の莟は三番叟の鈴のやうな形で一杯についてゐた。その殼が散り始めた。柳堂の額にも胸にも足にもこぼれ落ちた。身動きも大儀な氣持で彼は眼をつぶつてゐた。そして全身それに埋まつて行くといふ空想に彼は恍惚としてゐた。

郵便を持つて來た今西は彼が熟睡してゐるのだと思つた。そして腰の手拭をとり、静かにその殼を拂ひ始めると、柳堂は眼をつぶつたまま、物憂さうに云つた。
「オイ餘計な事をするな。今、涅槃の夢を見てる所だ」

天氣さへよければ柳堂は毎日その藤棚の下で半日を暮らした。殼が散ると直ぐそれは花だ。がさつ者の熊蜂が終日騒ぎ廻つた。熊蜂はよく花を蹴落したり、自身地面まで轉げ落ちたりした。

柳堂は或る時不圖、藤蔓が常に左から右へ同じ方向にばかり巻いてゐる事を發見した。彼は直ぐ今西を呼んで近所の別莊の藤を見さしにやつた。

暫くして歸つて來た今西は、蔓は成程、柳堂のいふやうに同じ方向に巻いてゐるが、左から右へではなく、右から左へ巻いてゐたと報告した。
「一寸待つて呉れよ」柳堂は寝ながら額の上で指を輪に廻しながら、「右から、左へ……右から、左へ……それでいゝぢやないか。同じ事だ」と云つた。
「それぢやあ、左から右へでせう」
「そんな事はない。いゝか？　右から左……」
「そりやあ、木の裏つ側を巻いてる時です」
「うん、さうか。前つ側は左から右となる——全體お前は何方を見て來たんだ。表を見て來たのか、裏を見て來たのか」
「勿論表を見ました」
「をかしいね。もつと他の藤を見て來て呉れ」
今西はそれから二三軒藤のある家を見て廻つたが、何れも右から左へ巻いてゐた。
柳堂は不興顔をして云つた。
「そんなら此藤が片輪なんだ。——藤の旋毛曲りも珍しくて面白い」

翌朝柳堂は眼を覺すなり、今西を呼んだ。
「氣の毒だが、不動の瀧前にある藤を見て來て呉れ。いゝか。よく見て來て呉れよ」
今西は笑ひながら出て行つた。
不動の寺までは小一里の道だつた。
一時間程して歸つて來た今西は、如何にも滿足らしい顔をして云つた。
「全く先生のお考へ通りでした。他に二株白藤を見て來ましたが、皆左から右へ巻いてゐました」
「左うだらう」柳堂も至極滿足した。そして早速お種を呼びつけ、自分の大發見を得意になつて話して居た。

―一ト月程經つた。
―お前は矢つ張り温泉へ行くのはいやかね―
―お兄さんが若し御不自由なら行つてもかまひませんけど―
―俺はもう不自由はないよ。けれどもお前の爲めにさ。お前のからだの爲めに出掛けちやどうだい」
―私、別にからだどうもありませんもの」
―……聾の爲めにどうだい―柳堂は意地の惡い笑ひを浮べた。
―温泉なんかへいつて逆上せたら尙惡くなる―
―成程。逆上を下げる湯だと、俺の病氣に惡し、俺の病氣にいゝ湯だとお前の聾に惡し、そんなら仕方がない、俺一人で出かけよう。……一人の方が金がかゝらなくて結構だ―
七月中旬、蒸暑い夜だつた。田舍から出て來た柳堂は日暮里で新潟行の夜行列車に乘込んだ。
夜ぢうつら〱して翌朝未明彼は輕井澤で降りた。高原らしい、冷々した空氣が沼畔のじめじめした水蒸氣の多い土地から來ると何よりも快かつた。

新輕井澤──舊輕井澤、赤い屋根を彼方、此方に見ながら、輕便列車はゴルフ・リンクに添うて段々に登つて行つた。桔梗、女郎花、鬼百合、松蟲草などが咲き亂れてゐた。上野信濃の國境あたりは殊にそれが美しかつた。地藏川、吾妻の高原は又別の意味で柳堂の眼を喜ばした。その昔、彼は澁の兒玉果亭を訪ねた歸途、山越しに此邊へ出て來た事がある。應桑から沓掛へ出た。人つ子一人通らなかつた六里ケ原の、あの水楢の林が今は別莊地として幾つかの土地會社が土地分讓をやつてゐる。その變化に彼は驚かされた。
温泉の宿では床も緣もない屋根裏のやうな三階の部屋に通された。却つて靜かでいゝだらうと彼は思つた。
發病以來、彼は全く禁酒をして來たが、扨てかう落ちついて見ると、夜食の膳にまるでその氣のないのは何か物足らなかつた。そして少しばかり飮んだが彼は直ぐいゝ氣持になり、四つ折りにした座蒲團を枕に疲れたからだを橫たへてゐた。
宿帳を持つて番頭が入つて來た。

―そちらでつけて下さい―柳堂に寢たまゝ、物臭さうに云つた。──千葉縣東葛飾郡──」
―東葛飾郡―
―○○町字新田―
―矢島柳堂―
―矢島……?―番頭は筆を止め、顏をあげた。
―左うだ。矢島正之介。干支の正だ。スケはカイ」
―……へい」
年は四十八歲」
―……へい」
―それから?」
「お職業は?」
―お職業と……」彼は一寸考へた。
―矢張り、農で……?」
―農? 百姓ですか?……あゝ、さうです」
番頭はそれを書き込むと御辭儀をし、矢立を腰にさして出て行つた。
柳堂はこれまでも、東京の畫家仲間から、一村長さんとよく云はれてゐた。

赤い帯

柳堂は退屈すると、よく低い欄干のついた東

向きの出窓に腰かけ、戸外の景色を眺めてゐた。此温泉に來て十日にもなると、その往き來する人々の顏にも段々と眼馴染が出來た。「時間湯」で、客の世話をする散切り頭の脊の低い、男のやうな醜い女とか、もと旅役者で女形をしてゐたといふ大きな若い男とか……。

「あの男は……」或る時、柳堂は膳を運んで來た女中に話しかけた。「此間、玉突場の前で洗濯をしてゐるのを見たが、褄をから膝の間に挾んで姉さん被りをしてゐる樣子が、お前さん達よりは餘程女らしかつた」

「そりやあ、歩く姿でも……拔き衣紋で……お尻を振つて……」

「あゝいふのは女が見てどうだい」

「どうだいとは？」

「いゝか、惡いか」

「馬鹿らしい」

「さうかな。さういふものかな。けれども、もう一人の男のやうな小さい女、あれも亦不思議な奴だね。俺は此間まで男とばかり思つてゐた」

「あれは感心な人ですよ。お客樣のお世話もよくしますし、それでお客樣からどんな少しの物を頂いても、屹度年をとつた姉さんの所へ持つてつてやりますし、そりやあ感心な人です。姉さんは半みちばかり向うの村に住んでゐるんですが……」

「左うかね、それは感心な婆さんだ。人は見かけによらぬものだ」

「婆さんだなんて可哀さうですよ。あれが婆さんなら旦那もお爺さんですよ」

「それぢやあ、感心な娘か」

「口が惡い」

「時々山から綺麗な草花を澤山取つて來るが、あれは内職にでも賣つてるのかね？」

「あれは頂き物をしたお客樣の所へ皆お禮に持つて行くんです」

柳堂には左ういふ眼馴染がまだ〳〵多かつた。彼は一體からういふ場所へ來ても、他の客とは決して知り合ひにはならなかつた。が、今いふ眼馴染だけは割りに多く作る方だつた。そして左ういふ一人に「赤い帶」といふのがあつた。

彼のゐる二階から「湯畑」を挾んで向うの丘の上に松琴亭といふ遊び茶屋がある。もと、矢張り湯やどの一つであつたに違ひない、古風な大きい建物で、二百年近い松の大木が二階の屋根に被ひかぶさつてゐた。

「赤い帶」は此の松琴亭の女である。十四五の潑剌とした少女で、着物は時に變つたが、帶だけはいつも赤い支那繻子をメめてゐた。そして此帶の方が先づ柳堂の眼に馴染んだ。遠目には白地の中形を着てゐる時に殊にそれが美しく見えた。

「赤い帶」は日に何度となく丘の側面の稻妻型の坂道を町の方へ下りて行つた。男の兒のやうに大股に歩いて行く事もあれば、何か自分の手の物に注意を奪はれながらぶら〳〵と靜かに下りて行く事もある。西日の一つぱいに當つた坂路を右に左に何度も折れ曲つて驅け下りて行くのを見ると、柳堂は玉轉しの玩具を憶ひ出した。

「運動の茶屋」で素人角力の催しがあつた。二三日前から赤いんきで書かれたその廣告比羅が風呂場だの町角などに出てゐた。その日おそくなつて、柳堂は暇つぶしに其處へ出かけて行くと、向うから「赤い帶」がもう一人の姉分らしい白粉を塗つた女と一緒に歸つて來るのに出會つた。柳堂は初めて「赤い帶」を近く見た。小さいなりに、よくしまつてくり〳〵した娘だつた。

「赤い帶」はすれ違ひに一種子供らしい神經質から、こはい眼つきをして柳堂を凝つと睨んで行つた。連れの女が頽廢し切つた感じの女だけに娘の新鮮さが一層よく思はれた。雛でいへば百日雛の美しさだつた。

ある午後、柳堂は何氣なく出窓に腰かけてゐると、一人の男が黒い牛を曳いて丘の坂路を靜かに登つて行くのが見えた。牛は下げた首をゆるく左右へ振りながら歩いてゐる。丁度その時、松琴亭からも「赤い帶」が出て來た。「赤い帶」は上の路を、黒い牛は下の路を、一つの曲り角へ向かつて歩いてゐる。そして、「赤い帶」がその角へ近づいた時、不意に牛が其處から首を出すと、「赤い帶」は甚く吃驚して、あわてゝ元來た方へ逃げ出した。牛を曳いた男が何か云つても、「赤い帶」は聽かうともせず、上の畑の方へ出る急な小路へ上つて、其處から牛を見下ろしてゐた。牛が通り過ぎると、「赤い帶」は路へ下りて來た。そして振りかへり／＼又下つて行つた。遠くこれを眺めて柳堂は一人笑つた。

柳堂の「赤い帶」に對する興味は少しづつ進んで行つた。窓に腰かけ、戸外を眺めてゐるやうな時、彼の心は不知、松琴亭を出て來る、「赤い帶」を心待ちにしてゐた。青年時代はあつて、此十何年來殆ど影を見せないその心持は何かの意味で戀といふものには違ひなかつたが、それを左う認める事は柳堂には出來なかつた。が、兎も角、その小娘と自分との生活をもつと結びつけたいといふ漠然とした要求が起つてゐた。あの小娘があのまゝあんな場所で育つよりは、自分や、お種の手で育てゝやる事の方がどの位よき事であるかといふやうな事が思はれるのだ。多分それ以上を柳堂は望まなかつた。

或る晩、彼は散歩に出ると、「湯畑」の柵に日本ユニテリヤン教會とした高張提灯を結びつけ、その前で、若い傳道師が、說敎してゐるのを見た。不恰好な洋裝をした若い細君が、小さいオルガンの前に腰かけ、その側に無智な丸い顏をした脊の低い五十男が立つてゐた。

柳堂も輪を作つてゐる浴客達の中に立交つてそれを聽いた。

神の攝理とか、罪のあがなひとか、救ひの道とかいふ言葉が彼には如何にも空虛に響いた。一ト頃柳堂はキリスト教徒だつた事があるだけにそれが一層安價に且つ汚い調子に聽きなされるのだ。キリストが安價なのではなく、左ういふ傳道師等につき纏つてゐる雰圍氣が甚く穢はしいものに感じられるのだ。殊に着流しの五十男が自身の懺悔話を始めた時には彼は居堪らない氣持になつて、歩き出した。「手袋なしには觸れられない本だ」聖書について左うニイチェがいつたといふ事は殊更奇矯の言を弄したやうに柳堂は解してゐたが、今、それは恐らくニイチェの僞りない實感だつたに違ひないといふ風に考へられた。

同じ夜、彼は思ひ切つて松琴亭へいつて見た。庭口から廻つて行くと家の中はいやに森閑としてゐた。柳堂は緣先へ立つて、二三度聲をかけた。

「……」

少時して四十餘りの女が出て來た。

「いゝか？」

「どうぞ」

彼は二階の西向きの廣い座敷に通されたが其處は彼のゐる宿屋から眞正面に見える座敷だつた。彼は自分で北向きの小さい部屋を選び、そこへかへて貰つた。

「始終赤い帶をしめてる娘があるね。あれだけ呼んで呉れないか」

「えゝー」女は眼を丸くしていつた。「あのチビですか？　チビだけ呼ぶんですか？」

柳堂は暫く待たされた。そして漸く廊下に足音がすると、

「今晩は……」といつて、恐る〳〵「赤い帯」が入つて來た。尤も、此時、「赤い帯」は赤い帯をしめてゐなかつた。誰かの借物らしい子供にしては地味過ぎる絽の帯をしめ、例のこはい眼つきで柳堂の顔を睨みながら入つて來た。

柳堂は彼が頭に拵へ上げてゐたとは大分へだたりのある變に下品な娘を見た。強い生々した感じは、遠眼でよく、から膝を突き合はして見ると、悪い意味で變に野生的な感じを受けた。殊に例の赤い帯を去つた「赤い帯」は柳堂にとつては半分の價値もなくなつた。（然しこれは何も此娘の知つた事ではない）柳堂は自身に左ういひきかした。

「もつと此方へおいで」と彼はいつた。

娘は眞正面に彼の顔を見ながら急に開けひろげな下品な聲で笑ひ出した。柳堂は不意に大入道に出られたやうに思つた。

「私の姉さんをあげてくれない？」

「一人ではこはいか？」

「よう、あげてくれない？　私呼んでくるよ」

柳堂が默つてゐると、娘は直ぐ起つて行つた。

間もなく浴衣に青つぽい單衣羽織をだらしなく肩へずらして着た女が一緒に入つて來た。此間角力を見に行く時に連れ立つてゐた女だつた。柳堂は自分が頭の中で餘りにも都合よく「赤い帯」を勝手に作り上げてゐた事を滑稽に思つた。

話もなかつた。柳堂は女達に唄をうたつて貰つた。娘は有明節と云ふのより知らなかつた。唄ひながら眼と眉毛の間を出來るだけ延ばして一寸泣きさうな顔をする時には矢張り可愛らしかつた。

柳堂が何か笑談を云ふと、娘は直ぐ「いけ好かない」と云ふ言葉を使つた。それが如何にも得意の文句らしく、柳堂を苦笑させた。

一時間程して彼は「赤い帯」に送られて、その家を出た。「湯畑」の所では未だ、先刻の傳道師達が説教をしてゐた。「赤い帯」はそれを聽きたがつた。柳堂は少し離れた所で待つてゐた。そして「赤い帯」が還つて來た時、彼は、

「俺の座敷まで送つて來ないか。俺の描いた綺麗な畫をやらう」と云つた。

「赤い帯」は少時、默つて彼の顔を見てゐたが、不意に顎を突き出し、

「あゝ父なる神様。厭でムいますよう！」さう云ふと、いきなり彼に背を見せ小鹿のやうに逃げて行つた。

•

鶴

如何にも秋らしい靜かな午前だつた。柳堂は縁前に折り疊みのチェアを開き、沼の景色を眺めてゐた。

獵犬を先に立てた鐵砲打が沼べりの畔みちを行くのが見えた。遠くの方で、二つ續けて鐵砲の音がすると、犬は立止つて、耳を立てた。

「俺は鶴が飼ひたいよ」柳堂は突然、妹のお種を顧み、こんな事を云ひ出した。お種は縁で針仕事をしてゐた。

「中庭に綺麗な水を流し込んで、葭を植ゑ、其庭へ一羽でも二羽でもいゝが、鶴を放し飼ひにするのだ」

「一朝志を得たら、でせう？」お種は顔もあげず、冷した。

「そんな事ぐらゐ、志を得なくたつて何時で

も出來る」

「中庭のあるやうな家が建てられて？」

柳堂は笑つた。

「色々贅澤な事ばかり考へてゐらしても、少しもお金を取らうとなさらないから駄目よ」

その晩、風呂が濟み、茶の間で茶を飲んでゐる時、柳堂は弟子の今西に同じ事を云ひ出した。

「葭よりも朝鮮だん竹の方が、よくはないですか」

「そりやあ、いけない」

「何故ですか」

「何故でもいけない」

「私はだん竹が好きですがな」

「第一、鷭にはあの莖が太過ぎるぢやないか」

柳堂が鷭を愛するには柳堂だけの氣持があつた。

前髮に赤い手絡を結び、萌えだしの草の莖のやうな足で葭の間を馳け歩く姿を見ると、その羞むやうな樣子が彼には十四五の美しい小娘を見る氣がした。然し彼は此事をお種に云ふわけには行かなかつた。

今から十何年か前、京都に住んで居た頃、町家のさう云ふ小娘に對し、彼は或るしくじりをした。そして此事はお種だけが知つて居る。

最初彼は自身のした事を甚く良心に咎め、惱つて居たが、年が經つに從ひ、それもそれ程には思はなくなつた。そして却つて、その小娘を美しい氣持で色々憶ひ浮べるやうになつた。よく夢にも見たが、それは決して彼を不愉快にするやうなものではなかつた。そして何時とはなし、彼の頭では、其小娘と鷭とが結びついて居た。

同じ女が今は既に三十歳だといふやうな事は、彼には考へられなかつた。

一週間程經つた。柳堂は離れの畫室で、その朝、寫生して來た寫生帖から、横物の畫を描いてゐた。その時、庭の木戸から、割烹着を着たお種が風呂敷を被せた小さいものを兩手に持ち、入つて來た。

「お兄さん。いゝものをあげます。ありがたうと仰有い」お種はにこ〳〵しながら緣へ來て腰かけた。

「何んだ」

「生きてる鷭よ。隣のお婆さんが呉れたんです」

柳堂は默つて筆を置き、立つて來た。

「如何？　お嬉しいでせう？」

「どうして、こんなものを呉れたんだ」

「此間鷭の話をしたら、鰻の流しばりを田へ立てゝ置くと捕れると云つて、それで捕つて呉れたの」

柳堂は手を延ばして、その被せた風呂敷を去らうとした。今まで凝つとしてゐた鳥は急に中で暴れ出した。

「逃げられるといけないから、およしなさい。今、今西さんが隣から雞の箱を借りて來ますから」

鳥は少しも聲を立てず、風呂敷を被つたまゝ暴れてゐたが、間もなく又凝つとして了つた。

鷭は少しも馴れなかつた。馴れないばかりでなく、餌を全く食はない。そして柳堂がゐないと逃げようとし、騷いでゐるが、彼の姿を見ると直ぐ、箱の隅へ行つて、彼方向きに凝つとしてしまふ。

柳堂は氣をもんだ。最初隣から貰つた鮠や小鮒をやつてゐたが、食はないので、今西に鰌を買はせたり、沼から蜻蛉の幼蟲を捕つて來さしたりした。が、鷭はそれをも食はうとはしなかつた。箒の棒で、凝つとしてゐる鷭の足元へ

それらを寄せてやると鷭は驚いて、急にばたばた騷いだ。そして今度はちがふ隅へ行つて又同じやうに彼方向きに凝つと立つて身動きせずにゐる。
　柳堂はその驚く樣子や、隅へ行つて拗ねたやうに凝つとしてゐる樣子が、猶且、十四五の小娘のそれのやうに思はれて仕方なかつた。彼は憶ひ出したくない事を憶ひ出し、不愉快になつた。
「お兄さんのやうに附きつきりで、あゝ執拗くしてゐらしたら、却つて馴れませんよ。ほつといて、自然に馴れるのを待たなきやあ。お腹がへれば仕方なしに餌につきますよ」
「左うかな」柳堂は珍しく素直に云つた。
　翌朝、柳堂は起きるなり、鷭を見に行つた。鷭は箱の中で、横倒しに長い足を延ばし、死んでゐた。そのまはりには、蛹や蜻蛉の幼蟲が這ひ廻つてゐた。柳堂はいやな顏をして、暫くそれを見てゐた。
　その晩、茶の間で、今西が、
「鷭は非常にうまい鳥ださうですな。埋めた話をしたら隣で大變惜しがつてゐましたよ」と云つた。
「いくらうまくたつて、飼ふ氣で飼つたものは食へないよ。俺は一朝、志を得ても、もう鷭を飼ふ事はやめだ」左う云つて柳堂はにが笑ひをしてゐた。

百舌

　そろ／＼草の萌出す頃で、柳堂は尻端折りをして一人、庭の草取りをやつてゐた。ぽか／＼と朝の陽を背中に受けながら濡れた地面から立つ土の香りを嗅いでゐると、如何にも心の落ちつくのを覺えた。昨年は今頃坐骨神經痛で甚く惱まされた。今年はかうして草取りなどが出來る。それを想ふだけでも非常な幸福に感じられた。
　五六年前東京から此沼べりへ引越して以來、彼は植込み以外庭の手入れを、殆ど植木屋の手を借らずにやつて來た。田舍は氣樂だつた。散步などでいゝ木を見つけると簡單な交渉でそれを手に入れる事が出來た。そして植込んだ木が一年々々他の木とをり合つて行くのを見る事が彼には一つの樂みとなつてゐた。
「先生。一寸いらして御覽なさい」
　弟子の今西が庭口から呼んだ。彼は泥だらけの手をはたくと、腰をのしながら其方へ歩いていつた。
「百舌と蛇とが喧嘩をしてゐるんです」
「何處で」
「物置の裏でやつてゐます」
　二人は臺所の前から湯殿を廻つて、物置の裏へいつた。
　熊笹の中でガサ／＼と音を立てながら、百舌がひとりで暴れてゐた。然しよく見るとその首に女の小指程の太さで銀色をした小さな蛇が卷きついてゐた。蛇が頭を上げると百舌はその頭を烈しく嘴で突いた。蛇はもう大分弱つてゐた。頭は既に碎かれてゐるが、それでも下から鎌首を擡げては百舌に食ひつかうとした。
「これは地もぐりといふ蛇だ。小さいが却々氣の強い奴で、ステッキなどを出すと、向ふ奴だよ」
「兩方氣の強い奴だから、いゝ勝負ですな」
「もう蛇は駄目だよ。とつてやれよ。何か棒のやうなもので押へてからでないと危い」
　百舌は蛇と戰ひながら人間の方も用心してゐる。今西が小さい竹の棒を持つて來ると、百舌は蛇を首へ下げたまゝ、地面とすれ／＼に飛ん

で逃げた。そして隣との境の藪へ逃込まうとすると、小松の下枝に蛇の體が觸れ、百舌は突のめるやうに其處へ落ちた。

今西は直ぐ驅けて行つて竹で蛇の體を押へた。百舌は口を開きカツ〱といふやうな音をさせた。

「馬鹿」今西は一寸癪に觸つて、空いた方の手で百舌の頭を打つたが、百舌はすかさずその手を突いた。

「蛇よりは人間の方が强敵だからな」柳堂は立つて見てゐた。

「何かもう一つ竹を取つて頂きます」

柳堂はその邊を見廻したが適當な竹がたかつた。それで生えた竹の枝を折つた。

「どうだ。これでいゝか」

蛇は二タ卷き卷いて一つ結んでゐた。竹の先で觧すのは却々厄介だつた。

「死にかけてゐて、未だしめてるです。蛇といふ奴は全く執念深いな」

「その蛇は植木に惡い事をする奴だから、離したら、完全に殺して了へよ」

「百舌はどうしませう」

「百舌なんか飼つたつて仕方がない」

「囮になりますがな」

「生き餌だから面倒臭い。鶏で懲りた」

蛇のからだが、觧けると、百舌は非常な敏捷さで逃げて行つた。

「お禮もいはずに逃げて行つたね」柳堂は笑つた。

柳堂は庭先に溢れてゐる井戸の水で手を洗ふと離れの畫室に入つた。彼は膠を火にかけながら壁に立てかけた描きかけの枠張りに眼をやつた。それはあした或る畫の會の若い畫家が取りに來る筈の繪だつた。が、迚も今日中には描きあげられさうもなかつた。

妹のお種が庭下駄を鳴らしながら、茶道具を持つて來た。

「どうだ、これは……」柳堂は顎で一寸その繪を指していつた。

「……」お種は茶道具を持つたまゝ少時立つて、それを見てゐた。

「餘り面白くないか」

「さうでも、ありませんよ。然し何方かと云へば否氣な繪ね。……でも、いゝ事よ。面白い所があつてよ」

「今日中に描き上げられないと困るのだ」

「涌島さんが取りにいらつしやるのは明日？」

「明日だ」

「潤筆料が貰へない繪だから、怠けてるなんて思はれるといけませんよ」お種は冷した。

「馬鹿な事をいへ。これでも此月描いたものではましな方だ」

お種は柳堂が膠鍋を下ろすのを待ち、火鉢の炭を次いで還つて行つた。

キイーツ〱といふ小鳥の强い啼聲が先刻から畫室の裏でしてゐた。柳堂は便所へ立つたついでに、裏の窓を開けて見た。裏は松山で、畫室は此松山の一部を切り崩して建てられたもので、その切り崩した崖の途中に實生の三年程經つた小松が生えてゐる。キイーツ〱といふ聲はその中でしてゐた。間もなくその枝の一つが搖れ出すと、其處に雀程のいやに眞圓い小鳥が現れて來た。嘴の工合、百舌の子らしかつた。小鳥はしきりにその邊を見廻しながらキイーツキイーツと强い聲で啼き立てゝゐる。先刻の百舌の子に違ひないと柳堂は思つた。蛇は此子鳥を狙つたのかも知れない。

氣が氣でない不安さうな聲で切りに母鳥を呼ぶ樣子が如何にも可憐だつた。長くなる筈の尾は未だ餘り延びてゐず、それでも啼く度ピクリ

ビクリ動かしてゐた。
　柳堂は今西を呼んで梯子を持つて來さし、自分でその小鳥を捕へた。靜かに手をやると、小鳥は少しも恐れず、柳堂は安々それを掌中にする事が出來た。
　前にカナリヤを飼つた事があり、八角の大きな鳥籠があつたので、それへ入れてやつた。
「可愛いのね」
「何んだつて子供はみんな可愛いもんだよ」
「いまにお前さんもいやに威張り散らして憎々しくなるのかねえ」
「そりやあ仕方がない。その頃には逃してやるのだ」
「それまで生きてるでせうか」
「こいつは子供だから直ぐ餌につくだらう。あんまり啼かなくなつたぢやないか」
「おとなしくしてますわ、人間でも傍にゐる方が賴りになるのかしら」
「こりやあ、鶯より面白いよ」
「第一、柄ですわ。お兄さんに馴れるなんて、百舌位なものよ」
　柳堂は苦笑した。
「ひどい事を云ひやがる」
　柳堂は興味を持つたものがあると、日に何度となくその前へいつて厭きるまでは時間つぶしをする惡い癖があつた。それを知つてゐるお種は、
「今日一日はお預りして置きますからね」と云つて、それを持つて行かうとした。
「馬鹿、子供見たやうな事をいふな。仕事の合間合間に見て、氣を更へるんだ」
「駄目ですよ。お兄さんのはこだはり出すと、いつまでもこだはつてゐらつしやるんだから。明日取りにいらして出來てないと惡い事よ」
　餌は大丈夫つけて見せるといふ事で到頭お種はそれを何處かへ隱して了つた。
　百舌の子が早く見たいからといふわけでもなかつたが、柳堂の仕事は珍しく捗つた。そして夕方灯りのつく迄にはどうかかうかそれを仕上げて了つた。
　彼は甚く上機嫌で夜食の支度の出來た茶の間へ入つて來ると、
「オイ、此處へ百舌を持つて來い」こんな調子にいつた。
　百舌の子は柳堂によく馴れた。籠は庭の榎の枝にかけてある。此方から小さく切つた雞の肉を持つて柳堂が行くと、百舌の子は遠くからそれを見つけて、全身の毛をふくらまし、小さな羽根を震はして喜んだ。
「コラ馬鹿々々」
　尖らした箸の先にさした小さな肉を入れてやると、百舌の子は少しもこはがらずに直ぐ食つた。
　柳堂は「百舌がこんなに可愛いものだと思はなかつた」など云つた。
　或る日柳堂は東京へ行く用があつて一日家を空けた。
　そして翌日彼は寢過ごし、床の中で眼を開くと、親百舌らしい強い啼聲が戸外でしてゐるのを聽いた。親百舌ならいゝが、他の百舌が、狙ひに來てゐるのではないかしら、と思つた。そして、彼は寢間着に丹前を着て、まぶしい戸外へ出ていつた。
　籠はいつものやうに榎の枝に下げてあつたが、どうした事か、柳堂が近づくと百舌の子は甚く驚いて、籠の中でバタ〳〵騷いだ。
「どうした〳〵」彼は左ういひながら引返して餌を取つて來た。櫻の木の高い枝で親百舌がけ

たゝましく鳴いてゐた。
　百舌の子は彼のやらうとする雛の肉を食はなかつた。そして一途に逃げようと中で暴れてゐる。
「お種。お種」彼は大きな聲でお種を呼んだ。
お種は手を拭きながら出て來た。
「昨日ちやんと餌をやつたか」
「えゝ」
「をかしいぜ。何んだか、すつかり野生に還つて了つてる」
「昨日から親鳥が來て餌をつけ出したんです」
「それでだな。どうもをかしいと思つた。——あすこで鳴いてる、彼奴か」
「さうね。乾度あれでせう」
「人間といふ恐しい動物だから油斷をするなとでも教へたかな」
「本統に」お種は笑つた。「いゝ加減に逃してやる方がいゝわね」
「自分が助けられた事も忘れやがつて、怪しからん奴だ」
「でも、自分の子供がこんな籠の中に入れられてるんですもの、心配なんでせう。昨日から始終この邊に來て鳴いてゐるのよ。逃してやる方がようムんすよ」
「いや／＼。もう少しかうして飼つてゝやる」
　百舌の子はそれからもずつと馴れなかつた。柳堂も諦めて、夜は軒下へ移すが、晝間は少し位雨の日でも、榎の枝にかけつぱなしにして、近頃は餌をやる事さへやめて了つた。親鳥は絶えず餌を運んでゐた。子鳥が食ふ以上に運ぶので、それらは段々鳥籠の底に溜つた。蜥蜴の胴切りの兩方に一本づつ足のある奴などが、幾つも仰向けになつて入つてゐる。
「どうも、これがやり切れない」
「だから、もう逃してやればいゝのよ」お種も眉を顰めて云つた。
「仕方がない、逃してやらう」
　親鳥が櫻の高い枝で切りに鳴いてゐる時だつた。柳堂は籠の口を開けてやつた。子鳥は如何にも覺束ない飛び方で、親鳥のゐる方へ飛んで行つたが、笠のやうな太い松の上まで來ると、その笠の中へ沈んで了つた。櫻では親鳥が夢中になつて鳴き立てた。子鳥も鳴きながら、再び飛び立つたが、到底一度では親鳥の所まで行けなかつた。そして無經驗から、自身の重みに堪へられないやうな細い枝の先にとまると、その度落ちかけて甚く狼狽した。
　親鳥は子が近づくと、鳴きながら先へ行つた。又來ると又先へ行きして到頭何處かへ連れて行つて了つた。

（大正十四年十二月）

蘭齋歿後

一

「こんな派手なものは僕には着られませんよ」
「派手な事があるものか。お前は氣が老けて居るからそんな事を云ふのだ。お前だつて、今は一家の主だもの、いつまで絣の洗洒しばかり着てはゐられないよ」
「いや、絣の洗洒しで結構です。そんなぞろぞろした物を着せると、道樂を始めて、心配をかけますよ。お父さんの遺傳で、その點は請合へませんよ」
「馬鹿な事をお云ひでない」お幾は老眼鏡の上から息子の浩をにらんだ。笑はれないと浩も引こみがつかなかつた。
「兎に角、僕は若いからこんなものは着られない。お父さん位になれば却つて可笑しくはないが」
「お前が着ないと分つてゐれば誰かにやればよかつた」
「今からでもいゝですよ。竹齋さんへでもおやんなさい」
「御形見なんてものは誰でも大事にしたがるものだが、お前にはまるでそんな氣がないんだから」
「さうですよ。僕は人にひき合はされる時、蘭齋さんの御子息ですとやられると、何時もいやな氣がするんだ。蘭齋の息子が僕の唯一の價打見たやうに聞こえますからね。蘭齋の子、金澤浩で、僕の肩書になつちやあやりきれない」
「お前は偉い人だからね」
「未だ偉かありませんよ。これから偉くなるんだ。はゝゝゝ」
「本統にこれは着ないかい。折角ほどいて、洗張りにやらうと思つてゐるんだが」
「着ないけど、それおやあ貰つて置きませう。貰つて仕舞つて置きませう」
「それでいゝんだ。初めから、さう云へば何の事はないのに、竹齋さんへでもおやんなさいなんて、いやに粗末にするやうな事を云ふから腹が立つ」
「誰かにやればよかつたと云ふからですよ」
「さう云つたからつて、何も手輕に相槌を打つには及ばない事だ」

彫金の名工金澤蘭齋が八十一の高齢で亡くなつたのは去年の秋、初旬の事だつた。蘭齋は年の話が出ると、屹度、「俺は百十六まで生きて見せる」と云つてゐた。彼の祖父にその年まで生きた人があるからで、實際持病はなし、養生家でもあり、殊に仕事に對する根氣の強さからも、本人がさうはつきり云つてゐるのを聞くと、家の者まで、百十六は兎に角、百位までは大丈夫生きられさうに、何時かそれを信ずるやうになつた。所が、去年の秋、一寸した風邪が元で、それが肺炎に進み、十日程で蘭齋は枯木を倒すやうに此世を去つた。

「御自分ではあゝ云つてゐられたが、近年は大分靜脈が硬化して來ましたから……」かゝりつけの醫者はかう云つた。

然し家の者には思ひがけない死だつた。自分達が今まで何かに騙されてゐた、そんな氣さへした。そして彼等は想ひ出したやうに、
「それはお年を考へれば不足も云へないけれど……」と附加へるのだ。

蘭齋は若い頃から家内縁の甚く薄い方だつ

た。二十代に結婚し、お幾と一緒になるまで、彼は六人の家内を失つた。そして六人の五人までは死別だつた。蘭齋は三人目の時も、四人目の時も、もうこれからは獨りで暮らす、さう決心するのだが、何時か又誰かさういふ對手が自然に出來た。そして最後に結婚したのがお幾で、お幾は當時二十二歳、蘭齋は五十四歳だつた。此親子程の年の違ひは恰で妾でもあるかのやうで世間體が惡いと、お幾の親達は反對だつた。お幾は家を逃げ出し、蘭齋と何處かへ姿を隱して了つた。

その蘭齋といへば、當時正倉院御物の金具一切の修理をした程にその道の名工だつたのである。

蘭齋にはかういふ出來事はこれまでにも決して珍しくはなかつた。彼がその昔、初めて江戸へ出て來た時も、――それまで彼は三河の或る禪寺の小坊主だつたが、――檀家の未亡人と駈落ちをして來たのだ。お幾と一緒になり、清が生れてからも、名古屋の廓の老妓と夢中になり、本妻にするといふ起誓文を取交し、ごたごたした事があつた。あとで、その起誓文を取かへす爲め、蘭齋の弟が名古屋まで二度も足を運んだといふ逸話が殘つてゐる。それは蘭齋が六十歳の時の事だつた。

然し彫金の腕にかけては彼は全く名人だつた。圖をつけず何んでも直に彫る所に、見る者が見ると不思議な生氣が溢れてゐた。弟子達も多かつたが、此眞似だけは誰にも出來なかつた。

蘭齋はもと鐵甫といつてゐた。或る年上野の美術協會が天子の行幸をあふぎ、それにつれ名工に御前製作をさせた事がある。鐵甫は銀板に四君子を彫つて御らんに入れたが、その圖が大變御氣に召した。以來彼は鐵甫を蘭齋と改め自ら天恩を記念する事にした。

此時の話では普段は刀の刃を總て前へ向け並べて置くのを、柄を向うに、刃を手前に並べた心掛けを時の會長S子爵に大變讃められたといふのが、彼の自慢話の一つになつてゐる。

蘭齋は美術學校創立當時、其處の教授になつてゐたが、何れかと云へば職人氣質の名工で、藝術の大家先生達とはどうもうまが合はなかつた。そして自ら退いて了つたが、一方、青年時代の風潮の影響とでもいふか、所謂尊王の志は厚く、可笑しいが、大正の御代となつても天長節には屹度赤飯を作り祝ふ事を忘れなかつた。

只蘭齋の評判の惡いのは、色々な贋物を作る事だつた。贋物に平氣で箱書もすれば、弟子達の作に平氣で自分の銘を入れたりする事だつた。

一刀彫の杜園は彼の親しい友で、杜園歿後はよく人から箱書を頼まれてゐたが、明かな贋物にも構はず箱書をした。或時、清がそれを非難すると、「なに杜園だつて時にはあんなものを作つて居たよ」困つたやうな顏をしながらこんな事を云ふのだ。

「然し兎に角、今のは贋ですね」

「あゝ贋だ」蘭齋は仕方なしに笑ふ。「だが、あゝ書いといてやれば五十兩でも百兩でもあいつが儲けられるからね」

贋物を作るといふのは、彼を辯護する者は、彼には何んでもやれる腕があり、才に任せて色々な物の模造をする。それが彼の手からは模造として出るのだが、流れ流れて、いつか本物と思ひ込まれ、それが又蘭齋作の贋物だといふ事になるのだと云つた。

尤も、時々古道具屋から安い物を探し出して來て、それに一寸細工をして、自分の銘を入れて高く賣る、かういふ惡戲半分のやうな事も嫌ひではなかつた。

末松潮風が近世名人傳を書きながら蘭齋だけは名人と認めながら書かぬ理由として、蘭齋のさういふ不徳を擧げてゐた事がある。丁度旅へ出てゐた浩がそれを讀んで、默つてその本を蘭齋へ送つてやつた。そして浩は歸つて、父がどういふかを樂みにしてゐたが、蘭齋は全でそんなものは讀まなかつたやうにその話には觸れなかつた。

偽贋物の話として、一ト頃星巖の書が大變流行つた折りに、蘭齋はそれを習つて、かなりうまい贋物を作つた。その一つを紅蘭女史が見て、これは確かに先生の眞筆には違ひないが、餘程氣分の勝れぬ時、筆をとられたものに違ひないと云つたと云ふ話を蘭齋は面白がつてよく人に聞かせたものだ。

又、或る時、前の美術協會長であつたＳ子爵の家に泊り、丁度寒い晩で六曲屏風で寢床をたて廻してあつたが、見ると、星巖の書で、實は以前彼の作つたそれが贋物だつた。此時は流石の彼も冷汗を流した。第一主人がそれを承知で故意にやらした事か、それとも無心でさせた親切か、全く見當がつかなかつたには甚く參つて了つた。そして彼は一ト晩中いやな氣持で過ごし、翌朝は早々其處を引きあげて了つた。こんな話をする蘭齋を見てゐると誰も彼を憎めなかつた。蘭齋自身もそれを知つてゐて、「懺悔をすれば罪が消えるといふから……」そんな事を云ひ、聞く者が、何の惡意も持たず、一緒に笑ふのを見るのが彼には嬉しいらしかつた。

そして彼は死の床に就くまで實によく働き、朝は九時から、そして午後一寸晝寢をする位で、客がなければ、そのまゝ夜十時頃まで仕事を續けてゐた。茅原を前に嫩草山、春日山、高圓山を一眼に見渡す居間兼仕事場の二階座敷には何時もその頃まであか／＼と電燈がついてゐた。然し彼が餘り仕事をつめてした跡には定つて、一寸斜視になつた。お幾はそれを見度に、なるべく無理をさせぬやう注意してゐたが、その一寸斜視になつた蘭齋の顏には不思議な一種の愛嬌が現れ、お幾には又それが堪らなくよく思はれるのだ。

彼は漢籍、佛書もよく讀んでゐたが、長田幹彦の「祇園情話」なども愛讀してゐた。そして彼は對手によつて際どい話を、殆ど不快な感じを與へず話す事に妙を得てゐた。

彼の病氣が重くなつてからお幾の看護につとめた事は一ト通でなかつた。一週間程の間ではあつたが、殆ど不眠不休といつていゝ位よくつとめた。

死ぬ日の朝だつた。浩は離れの病室へ行かうとすると、傍の便所で、お幾が病人の便器をあけ、浩のゐるのも氣づかず、それに手洗鉢の水を何度も入れて洗つてゐた。そして直ぐ同じ水で自分の口も漱ぎ、そのまゝ急いで二階へあがつて行つた。日頃極端に潔癖で、總てを几帳面なお幾としてはそれは受取りにくい事だつた。浩の眼には何んといふ事なし、涙が浮んだ。

蘭齋歿後、お幾は浩達が心配してゐた程は弱らなかつた。蘭齋が仕事場にしてゐた離れの二階をそのまゝ居間にして、若い女中を夜は隣りの部屋に寢させた。浩は母屋の方に蘭齋の若い弟子達と一緒に暮らしてゐた。そして廊下傳ひで行ける別の離れに函のやうな感じの暗い茶室があり、浩はそれに船渠と云ふわざと不風流な名をつけてゐたが、籐莚を敷き、椅子テーブルを置き、それを自分の書齋に直して了つた。此家が餘りにも蘭齋の趣味で統一されてゐる事は若い浩には工合惡かつた。死んで見れば、父は矢張り一代の名工だつたと彼も思ふのだが、全で異ふ道へ進まうとする彼はさういふ人を父に持つたといふ事を自分の誇りにして落らしたく

はなかつた。父の遺物、さういふ物にもなるべく執着しまい。自分は自分で全然別な自分を築き上げて行かねばならない。浩はこんな事を考へてゐるのだ。それ故、彼は單に父としての蘭齋は兎に角、名工蘭齋の影が餘り自分に強くさす事は嫌つてゐた。然し彼のこの氣持はお幾にはどうしてもはつきり呑込めなかつた。

二

お幾は自分の泣聲で、不圖眼をさました。大和天井、春日山穴佛の拓本を張交ぜにした唐紙、朽木の火鉢、雲母のもみ紙に澁をひいた枕屛風、長命寺の櫻餅の函をそのまゝ煙草盆にしたもの、そんなものが、枕元の有明の灯でぼんやり眼に入つた。お幾は、あゝ、私は又毎時の夢を見てゐたのだ」さう思つた。これは蘭齋が生きてゐる頃からよく見る夢で、蘭齋の夢といへば何故か大概この夢だつた。——自分はどうしても蘭齋と一緒になる。それを兩親や兄が反對し、他の男（それが誰だか分らないのだが）の所へ嫁入らさうとする。お幾は浩を抱いて家を逃げ出す、然し蘭齋が何處にゐるか全で的がつかない。左側に溪流のある石高の山路を苦しい思ひをしながら登つて行く。その溪流が幅廣くなつた場所へ來た。水面は道と殆ど同じ高さで脛位しかない淺い池で、綺麗な水が細い水草を一方へ搖り動かしながら流れてゐた。しかも池の中には色々な雜木が立つてゐて、それは山奥の自然の庭と云ふ趣きだつた。お幾は蘭齋が此池の彼方に庵を結んでゐると思ふ。お幾はそれを渉りにかゝつたが、見るから冷たさうな水が、足に少しも感じなかつた。それが却つて氣持惡く、早く渉らうとするが、細い小さな水草が案外にも女の髮の毛のやうに長く、からまりついて足搔がとれない。お幾は何度も池の中に倒れたが、痛みも冷たさも感じない。お幾は歯がゆくて堪らなかつた。何しろ足が重く、仕舞ひにはどうにも動けなくなつた。思ひ切つて泣聲を出したら、何處からか、蘭齋が來てくれるだらうと考へた。——かう考へてゐるお幾には壁の中段あたりで、坐禪を組んでゐる蘭齋の姿がはつきり浮んでゐるのだ。お幾はその蘭齋に對し、故意に大きな聲で泣いたが、蘭齋は恰で聽こえぬやうに動かない。自分はこんなにして來たのだ、此浩（その浩は乳呑兒で、蘭齋の方は最早八十の老人なのだ）の爲めにもそんな佛様を氣取つたやうな事をしてゐなくともよささうなものだと思つた。お幾は何事にも氣取屋の蘭齋を様子のまゝには信じないのだ。悟り濟ましたやうに氣取つてゐるのが腹が立ち、悲しくなり、堪らなくなつて、本統に聲を出して泣いた。——その聲で眼が覺めた。壁の中段に坐禪をくんでゐる姿は、穴佛の本尊の輪郭を薄眼で見てゐたものに違ひなかつた。

お幾は寢間着の袖で涙を拭きながら、思はず微笑した。實際お幾の見る蘭齋の夢は大體此筋書のものだつた。それ程蘭齋を愛してゐるのだと思ふとお幾は嬉しい氣がした。そして淋しい氣にもなつた。そして一方ではかうして、何時か又、他の世界で蘭齋を探し出すのかも知れないと云ふやうな迷信的な考へも湧いて來るのだ。

秋に入つて、初めての冷え〳〵する夜だつた。蟲の聲も今まで程ではなく、雄鹿の啼く、冴えた強い聲が時々聽こえた。お幾は夜明けに間もないだらうと思つたが、時計がないので知れなかつた。朝、起きぬけに墓參をしよう、そんな事を考へ、まじ〳〵としてゐた。暫くすると、船渠といつてゐる書齋の方から浩のする咳の聲が聞こえて來た。「未だ起きてるのかしら」お幾は思つた。自分がかうして蘭齋の事を考へてゐる時に、全で自身の事ばかり考へてゐる浩の

ある事は、思へば何か氣丈夫な心持もした。

然し毎日本ばかり讀んでゐて、海のものとも山のものとも、見當のつかぬ清の將來を考へると、親らしい心配も起つて來るのだ。只夜更しだけはやめるといふが、そんな事を却々素直に諾く性ではないから、とも思つた。

翌朝、お幾が起きた時には前の原は一面の霜で、茅の穗や葉がその重みで垂れてゐた。

庭に使ふ水道栓で顔を洗ふと、よく寢入つてゐる家人を起こさぬやうにして、蘭齋が冬よく首に巻いてゐた焦茶の厚い襟卷を肩にかけ、菓子と線香の小さな袱紗包を持つて家を出た。鷺池あたりへ來た時、丁度柵を出された鹿が行列を作り、その持場々々へ急ぐのを見ると、彼女は秋の雄鹿の氣の荒い事を思ひ出し、急に恐しくなつた。お幾は澤芳といふ俥宿の方へ引返した。澤芳の主は竹箒を横にし、人通りのない前の往來を掃いてゐた。

「若い衆は未だ起きてないの？」

「私がお供を致しませう」

空海寺までの道は靜かだつた。公園には未だ人出がなく、お幾はわざと氣樂に歩いて貰つた。

南大門を廻り大佛殿の前の鏡ケ池の所へ來て、先年此處で月見をした事を憶ひ出した。毛氈、重詰、瓢簞、總て、蘭齋好みの風流だつたのはいゝが、涼しすぎる晩で、皆あとで風邪をひいた事など二人は笑ひながら話し合つた。

大佛殿の裏から正倉院に添つて行つた。空海寺は小さな寺で、大和八十八ケ所の一つだつた。

お幾が先に石段を登つて行くと澤芳は本堂の傍の閼伽井からバケツを下げて來た。

菩提樹の下に一面杉苔を植ゑ、その中に小さな石塔が建つてゐる。梵字で空風火水地、蘭齋墓と簡單に彫つてある。建てたばかりで落ちつきはないが、これは清の設計だつた。

蘭齋は死ぬまで俗氣と若さを失はなかつた名工である。人々はその俗氣を非難し、その若さから來る色々な出來事を非難したが、要するに俗氣も若さも實は彼の仕事の「色」となつてゐたのだ。人々はそれに惹きつけられながら、その源を氣づかず、非難してゐた。氣品、枯淡は素より彼の柄でなかつたが彼の俗氣は氣品や枯淡の假面を被る事さへ好んでゐた。此點、それを意識して嫌つた北齋などとは變つてゐる。それは兎に角、人々の好惡は別として、彼が一代を代表するその方の名工であつた事は疑ひなかつた。

お幾は長いこと、墓前にぬかづいてゐた。

蘭齋にはモデルがあるが、その人の仕事は此の小説の如く彫金家ではなかつた。「正倉御物の金具一切の修理」云々と書いたので、此事を明らかにして置く。

プラトニック・ラヴ

戸外は毎日吹雪だ。石ころだらけの廣い河原の中を流れてゐる川では波が流れに逆らつてゐた。その上を雪は眞横に飛んだ。が、降る割には積もらず、山の立木は綺麗に吹拂はれて、裸で搖られてゐた。

來た當座、いさゝか壓迫され氣味で落ちつけなかつた。烈しい時は部屋の中まで雪が舞込んだ。机を据ゑた側の掛障子の破れ目からも、硝子戸の隙間といふ隙間からも小さな雪の粉が舞込んで來た。炬燵の上で見てゐる本の頁の上にそれが落ちては消え、落ちては消えたりする時、一體が寒がりで、風邪を引き易い私は、これは迚も落ちついてはゐられないと思つた。三日程はそんな氣持で慣れなかつた。

然し私にはラジウム含有量で世界第二位といふ此處の湯が氣に入つてゐた。如何にも厚味のあるトロリとした肌ざはり、そして出てから何時までもぽか／＼温まつてゐる、これが見捨てかねた。それから遠慮せず我儘をいつて見ると、何んでも快くしてくれる宿の居心地よさも見捨てかねた。只、大社詣の客が一ト組二組と團體で來る、その連中が毎晩藝者を呼んで騷ぐ、書きものをするものにはこれだけは困つたが、もと／＼さういふ場所柄故、文句をいふ方が無理で、然し隣のない、割合に氣持のいゝ座敷にかへて貰ひ、夜具など今年作つた輕いのに更へさせ、いやがられない程度でなるべく勝手をいつて氣持よく過ごす算段をすると、段々には私も落ちついて來た。山鳥か野鴨が食べたいといふと宿の者は三里の所を直ぐ翌日取寄せてくれた。

夜、戸外をさく／＼音をさせながら人が通る。寝ながら聽いてゐると、それが如何にも親しみのある落ちついた氣持にさせた。

或る晩私は炬燵に横になつて、友達の書いた小説を讀んでゐた。雜誌の續き物で前の所は分らないが、何んでも花柳界藝人界に勢力のあつた魚河岸の年寄の息子が洋行する、それを大勢が東京驛に送る所が書いてあつた。大變な見送人で、雜沓したプラットフォームは身動きさえ出來ず、來は來ても本人のゐる窓ぎはまで附きつける事は容易ではなかつた。さういふ場所で主人公が、古い馴染の吉原藝者に會ふ。

「私についていらつしやい」

—といつて別にさう、たつて見なければならないといふお顏でもないんだけど。なアんて惡いことにかり云つて……お若ちやん御免なさい—

—へーえ、お若さんは當時さういふことだつたのかい—

—えゝえ、よく見てゝごらんなさい。もうおきポロッ／＼と……」

かう云ふ事が書いてあつた。私はこの藝者を知つてゐる。知つてゐるせゐもあるのか、これだけの會話の中に非常に明瞭とその女を憶ひ浮べた。「といつてさう斷つて見なければならないといふお顏でもないんだけど」もよく、「なアんて惡いことばかり云つて……」と變はる所は鮮で、私にはその顏が眼に見えた。あとひとつも「おきポロッ／＼と……」から、いつて笑ふ顏させた顏、笑窪までが見えるのだ。書いてない事がいやにはつきり見えるのは少し變な位だつた。友達はかういふ事は非常にうまい。うま過ぎると云はれる位にうまいのだが、そのうまい以上に自分がその女をはつきり浮べてゐるさうなの

で、何んの事はない讀みながら頭で勝手に合作してゐるのだと思ふと可笑しくなつた。

私は藝者には餘り知合ひのない方で、書くものにも藝者は殆ど現れないが、此藝者だけは前に長い小說の中に書いた事がある。登喜子といふ名にしてゐるので此處でも假りに登喜子とするが、今からいへば十七八年前雛妓時代に一寸見た事があり、それから一二年して若い藝者として、度々會つたが、その後は二年目に一度、或は五年目に一度といふ風に、むかうは、お父樣には時々お眼にかゝります――これは宴會での話だが、それ程私とは却つて、疎遠の間がらだ。然し小說では主人公が此藝者を切りに想ふ事が書いてあるので、その緣故といふのも可笑しいが、私としては數少い藝者の知合ひの中でも此藝者だけは特に通り一遍でない氣持があつた。事實、その小說の主人公といふのは境遇からいつて私自身ではないのだが、人間としてはその頃の自分をモデルとし、其藝者に對する氣持も或程度には本統だつた。それにも書いたやうに、一人角力で惚れてゐたのだ。

最近では去年の春頃だつたか、その前年の秋だつたか、東京の個人所有の名畫を見せて貰ふ爲め上京した折り、前の小說を書いた友達に連れられ行つて會つたのが、これ亦五六年ぶりの登喜子であつた。三十幾つか、年は知らないが、兎に角藝者としてはもう若い方ではないが、會つた感じでは少しもさういふ氣がしなかつた。矢張り美しいと私は思つた。京都に住んで上方の女ばかり見てゐた眼には綺麗、きたない以外で惹かれるものがあつた。そして圓熟とは異ふが、その女として內外共に美しさが完成されたやうに思へた。調和が出來、落ちついて來た。好きな役者の噂――何處で會つたら、かういはれた、あゝいはれた、そんな事を云ひたがつた十八九の時代、その時代を若し罪のない時代とすれば、それを云はなくなつた今は却つて罪の深い時代なのかどうか、その邊の所は私には分らないが、兎に角信者の姐さんに連れられ、岡山縣の金神詣を三等列車の講中で出かけた話など、何の嫌味もなしに素直にするのを聽いてゐると、進んだものだとつまらぬ事に私は感服した。

歸途、自動車の中で友は、頭の動き方が少し神經質過ぎる、長く一緒にゐると此方が疲れて來る、と云つた。成程左ういふ所はあるかも知れないと私も思つた。然しそれは特に此友達の場合強く感じられるのだらうとも考へた。絕えず言葉の應酬を拔け目なくキビキビやる此友にはそれに違ひない。それを聽きながらぼんやりしてゐてよかつた自分には別に氣にならなかつたわけだと思つた。左ういへば、友が便所に立つた一分か二分の間二人きりになつた時、一寸窮屈な氣がした事を憶ひ出した。左ういふ氣分の反射し方が早い所はたしかにあると思つた。それは兎に角自分は昔ながらに淡い氣持で此女に惚れてゐると思つた。淡いながらこれでもプラトニック・ラヴといふものだらうと考へた。そしてかう云ふのもいゝものだと思つた。忘れてゐれば一年でも二年でも忘れてゐる。憶ひ出せば戀人だ。それで、誰一人迷惑する者もない。誰一人迷惑する者もないといふやうな戀は戀として甚だ心細いものかも知れないが、かういふ戀がいけないといふ理由はない。

私達がK侯爵家の有名な畫帖である「筆耕園」と「唐畫鏡」とを見せて貰つたのはそれから二三日してからだつた。その朝、私は一緒に行く筈だつた田端のA氏に時間を知らせる必要があつたので、常に持つてゐる手帳を出し、調べると、「田端四三五、A」その下に「淺一六六六」と書いてある。これは覺えいゝ番號だ。左う思ひながら、早速かけると、女の人が出た。

「甚だ、恐れ入りますが、Aさんの方をお呼び願ひたいんですが……」自分としては物を賴む時の言葉だ。

「Aさん？」

「A・Rさんです」

「へえ。こちらではさういふ方は存じませんが、全體何番へおかけになつたんですか？」

「淺草の千六百六十六番です」

「千六百六十六番はこちらですが、でも、何かお間違ひぢやないんですか」

生憎自分はその家の名前を知らなかつた。然し現在手帳のA氏の名の下にちやんと書いてあるんだから、どうも變だと思つた。

「この番號で呼び出して呉れといふ話だつたのですが」

「御近所にA・Rさんと仰有る方は居らつしやいませんがねえ」女の人は切口上になつた。此方が執拗いので大分苛々した調子だつた。私は先刻から何んだか聞いた聲のやうにも思つてゐたが、そんな筈はないので……が、此時急に憶ひ出した。出てゐるのは登喜子だ。瞬間何も彼も私は憶ひ出した。震災後暫く電話が來なかつたが最近漸くかゝつたから書いて置いてくれといふので、どうせかける用のない事は分つてゐたが、まあいゝとも云へず、開けた餘白に私は何氣なくそれを書いて置いた。それが偶然にもA氏の番地を書いた下の餘白だつたのである。今更名乘るよりはあやまる方が早かつた。

「甚だ失禮しました」卽ち可笑しさを堪へてこちらも切口上になつた。

自分は笑つた。間違ひだけでも可笑しかつたが、如何にも十五六年持ち越して來たプラトニック・ラヴらしい間拔さが可笑しかつた。御近所にないといつて、曲輪の中では成程A氏の家はないわけだとも思つた。A氏の呼出し番號をきいてゐたのは自分ではなく京都から一緒に出て來たHだつたのである。

これが、私と登喜子との今の所では最後の會話である。そして此つぎ又話すのは何時の事か。三年後か。五年後か。さう思つてゐたが私は今はからず友達の小說の中に登喜子を見出し、その言葉を聽いた。私は滿足した。私は友達へ端書を書いた。

「吹雪の山陰で會へるとは思はなかつた」

結局私は毎夜の藝者の騷ぎに辟易して此處を引きあけた。東京の藝者を想ひながら、此處の藝者に擊退されたわけだ。然し私は久しぶりで雪見らしい雪見をした事を喜んだ。汽車の窓から見る景色は時々見える海のほかは見渡すかぎり雪だつた。四五尺の雪だ。鳥取の手前の湖山池、此邊の眺は廣々と殊に美しかつた。湖の水は一面に雪を含んで薄鼠色に濁つてゐた。岸に近く、寄せた波がそのまゝ弓なりに凍つてゐた。氣まぐれな鳥が一羽、湖畔の楊の木から楊の木へ氣樂さうに飛び移つてゐた。餌などあるわけはないのだから、遊んでゐるのだらうと私は考へた。枯木の鳥よりは又一段とこれはいゝと思ひながら見て過ぎた。豐岡、それから八鹿邊では汽車から五六間の所に鶴が遊んでゐるのを見かけた。

（大正十五年三月）

弟の歸京

夏の日暮れだつた。順吉は前の廣場に向かつて、京都驛の正面入口に立つてゐた。薄青い銀色の空の下に街燈や店々の灯りが美しく光つてゐた。氣忙しく行交ふ黒い影の中から、彼は弟の姿を見出さうとして居る。妹の結婚式が二三日に迫つてゐる今、順三を其旅先から連れて行かうと思つてゐるのだ。

もう改札を始めてゐると思ふと、彼の氣もせいて來た。乘らうとする列車が着いても、弟の姿は見えなかつた。若し來なければ一ト汽車遅らさう。かうだふ事もあらうかと彼はわざと寢臺をとらずに置いたのだ。

發車まで四五分といふ時、漸く彼は遠く、急足に來る弟の姿を認めた。彼は蝙蝠傘をあげて合圖した。

「少しおそくなつた。私の切符は?」

「ある。直ぐ乘らう」

順吉は先に立つた。

「これ、どうしませう」後から弟は變に厚ぼつたい一通の手紙を出した。それは彼が東京をたつた時、母から託された嫂宛ての手紙だつた。

「馬鹿に厚ぼつたい手紙だな。何が入つてゐるのだ」

「……」

順吉はそれに觸つて見た。半襟か何か入つてゐるらしかつた。

「持つて行かう。もう時間がないから」

「封筒を書いて來たんだ。此處から出して置きませう」弟は奈良の番地を書いた大きい封筒にそれを入れると、急いでポストの方へ走つて行つた。

彼等がプラットフォームに出た時には發車の號鈴が鳴り響いてゐた。荷物を赤帽から受取ると二人は急いで列車に乘込んだ。

弟の順三は三週間程前に東京を出てゐた。彼がストーリーを書いた、その活動寫眞の撮影が京都の衣笠村の方である。それを見るのが目的であつたが、出る時、兎に角一番先きに奈良の順吉の家に行くやう、彼はくれぐれも母から云はれて來たのだ。

所が、順三には自家に内證の道連れがあり、其都合で京都に一日泊り、それから大阪へ行つたが、其處で道連れが病氣になると、その女の親類にそれをあづけ、自分は蘆屋の友達の所へ行き、其儘、其處へ尻を落ちつけて了つた。

順吉は東京からの便りで順三が關西に來て居る事を知つたが、弟の呑氣な性質で、何時來ることかと思つてゐた。自分が上京する迄に來て呉れさへすればいゝ、と腰を据ゑて待つてゐた。順三は彼の腹異ひの弟で、年は十七程ちがつてゐた。

「何んでも來たら、無理にでも一緒に連れて行かないと、式までに歸らないからね。全體式の日は知つてるのかね」

「そりやあ、もうお知らせになつてるでせう」

「居處が分つてゐればいゝが……」

順三が奈良へ來たのは順吉が東京へたゝうといふ前日の夕方だつた。

二階の書齋にゐると、玄關で細君が甲高い聲で何か云つてゐるのが聽こえた。その氣配で順三の來た事が分つた。彼は急いで階段を降りて行つた。

「たうとう來たね」彼は笑ひながら弟を迎へ

た。

「順三さんのお呑氣さんには本統に呆れ返つてゐたのよ。鐸子さんの御婚禮の日、御存じなの？」

「來る時、聞いたけど……」

「忘れて了つたの？」

「いゝえ。知つてるんですよ。然し變つたかと思つて……。鐸ちやんから甚く怒つた手紙を貰つた」

「俺はあしたの晩たつ。お前も一緒に歸らう」

「えゝ」

「順三さん、もう逃がさないことよ。縄をつけてお兄さんに引張つて行つて頂くの」

弟が漸く來たといふ事で家中變に快活になつた。そして皆はよく笑つた。

その夜、順吉と順三は二階の書斎で話し明かした。

順三は蘆屋の友の家で、降込められ、退屈まぎれに窓の外の蜘蛛の巣に色々な悪戯をした話などをした。マッチの棒を巣にかけると蜘蛛は神經質に直ぐ來てそれを足で落して了ふ。そんな話を聞いてゐると順吉には蜘蛛の様子よりも氣樂さうにそんな事をしてゐる弟の姿の方が浮んだ。

「それはさうと、左枝子達のお土産だつてお菓子を自家から頼まれて來たんだけど……」

「何處にあるんだ」

「京都の宿へ置いて來ちやつた。ビスケットの方はいゝかと思ふが、あとはもう濕つたかも知れない」

「話の種に、それを又東京のお土産に持つて歸れよ」順吉は笑つた。

「あした京都から送らせませうか」

「濕つた菓子なんか送つて貰つても仕方がない」

「そのほかに、實は頼まれて來た手紙もあるんだ」順三は氣のひけるやうな笑ひ顔をしながらこんな事も云つた。

彼の投げやりは左ういふ他人の事だけではなかつた。旅の第一の目的だつた活動の撮影さへ未だ一度も見てゐなかつた。それ故、あしたは彼だけ一ト足先に京都へ行き、一寸でもそれを見てから停車場で落ち合ふといふ事にした。

夜が明け、食事までの時間に二人は公園を散歩して來た。柵を出された鹿が朝露の原を無闇に馳け廻つてゐた。

「私はもう寝ないや。寝ると又おそくなつちまふから」

「疲れるだらう」

「今晩、汽車でよく寝られていゝや」

順吉は汽車の時間を云ひ、必ずそれに遅れぬやう順三に念を押して、自身の寝床へ入つた。

そして十一時頃眼を覺ますと、彼は隣りの座敷にぐつすりと寝込んでゐる順三を見た。

顔を洗つてゐると、細君が笑ひながら入つて來た。彼は顔を見合はせ、

「どうも徹底したものだ」と笑つた。

「つまり、あの手なのよ。お父様やお母様がお家でやいゝゝきもきしてゐらつしやる時分に、順三さんは行くときまつて、つまりあゝなのよ。全くお氣はいゝのね。只、あつとはかりお呑氣さん過ぎるのよ」細君はさも可笑しさうに笑つた。

「あいつの呑氣さには魅力があるよ。それで徹底してゐるから」

「全く」

「然し今日はもうたてないぜ」

「お起こしして來ませうか。今から直ぐなら間に合ふの？」

「あしたにしよう」

順三が起きて來たのは四時過ぎだつた。そして順吉の姿を見ると不思議さうに、

「今日たつのおやめになつたの？　何故？」など云つた。

翌日も順三は十時頃まで寝てゐた。細君に起こされ漸く起きて來たが、食事を済ますと、寝ころんで「朝日グラフ」のクロッス・ウォードをやつてゐた。そして十二時頃の汽車で京都へ出かけて行つた。

「あした俺は鎌倉へ寄るからね。荷物は持つて行つて呉れないか」

「えゝ」

「活動を寫すのは見て來たのか？」

「時間がなくて、たうとう行かれなかつた」

汽車が米原を出る頃、二人は食堂に行つた。そして再び席へ還ると順吉は直ぐ寝支度にかかつた。順三は烟草を横ぐはへにし、烟さうな眼つきをしながら又週刊雑誌のクロッス・ウォードをやつてゐた。

沼津邊で夜が明けた。朝霧をとほして來る日光を顔に受けながら、順三は窮屈さうな姿勢でよく眠入つてゐた。

富士は見えなかつたが佐野あたりの朝の景色が面白かつた。順吉は弟の起きるのを待つて一緒に食事をしにいつた。

二人は幾らか疲れてゐた。

大船近くに來て、順吉は降り支度をしながら、

「歸ると怒られるぞ」と云つた。

順三はうつ向いてゐた顔を擧げ、口を結んだ儘、變な笑を頬に現してゐたが、

「實は私も今、丁度それを考へてゐたんだ」

といつた。

此邊まで來て初めてその事を思ひ出したやうな口調が順吉には甚く可笑しかつた。

（大正十四年十二月）

山形

その夏、凡そつまらぬ事から、私は父と衝突した。一週間程して、父は宮城縣の方に新しく買つた小さな鑛山を一緒に見に行かぬかと誘つた。私は不思議な氣がした。どう云ふ心持から父がそんな事を云ひ出したか分らなかつた。然し、私は自分が狂暴とも云へる態度を父に對し、とつた事を心ひそかに悔いてゐたから、喜んで承知した。

夕方の汽車で上野からたつた。父は上等に乗り、私は中等に乗り込んだ。父はSM鐵道の專務取締をしてゐ、日本鐵道といつてゐた頃で此鐵道のパスを持つてゐた。然し一緒に行く旅で別々の客車に乗せられた事は私の心を淋しくした。

その五六年前、青森から上等で一緒に歸つて來た經驗があるので、此事は何故か氣輕には考へられなかつた。召使ひかなぞのやうにも思へ、愉快でなかつた。然し實際、一人づつで行くのは互に氣樂だつた。それ故父もさうしたのだらうと思つたが、それなら、わざわざ旅に連出す氣持が私には分らなかつた。

翌朝仙臺で降り、其日は其處で一日暮らした。父は鑛山監督署に出掛けた。

私は宿で湯に入らうとした。先に女が二人ゐたが、關はず入ると、その内その連れらしい女が五六人入つて來た。大きな風呂場ではあつたが三十から五十位の女達で其處が一杯になつた。ダブダブした大きな肉體が大聲に笑ひ合つた。私は壓迫を感じ、夢の一場面のやうに思つた。

午後私は北一番町といふ所にゐる祖父の妹を訪ねた。八十に近い大叔母は不意の訪問を甚く喜んだ。私は其家の貧乏たらしい空氣を餘り好まなかつたが、其日は夕方まで尻を落ちつけた。大叔母は一分銀、一朱銀など云ふ錢を出して來て私に呉れた。

翌日小牛田まで行き、其處で父は用があり、私だけ乗合馬車で先に鳴子温泉へ向かつた。

「商賣は何んだつす？」竝んで腰かけてゐた五十ばかりの男が話しかけた。

「何にも商賣はしてゐない」

「お前位の年で商賣のない人間はあるめえつさ。商賣もなしになんで旅なぞしてゐる」

男は私が隱してゐるとでも思つたらしく、一寸不快な顏をした。

「未だ學校にゐるんだ」

「ふうん」男は意外なやうに私の顏を見てゐたが、今度は家の商賣を訊いた。

「親爺は鐵道へ出てゐる」

「さうか。矢張り機關車にでも乗つてゐるか？」

「機關車の方とは異ふ」

二三年前箱根で無數の金ぶんぶんが一つの木にゐるのを、目的もなしに捕つて壜につめてゐると、見てゐた年寄りが、それは一升幾ら位に賣れるのかと訊いた事がある。それを憶ひ出した。

途中たて場茶屋で晝食をし、又、同じ馬車に乗つて進んだ。

鳴子は如何にも田舍々々した温泉場だつたが、賑はつてゐた。間もなく父も來た。

父と私とは一緒に東京を出て、出來るだけ離れて來た。然しその晩は珍しく和いだ氣持で話し合つた。

銅山の話から、
「足尾は最初お祖父さんが眼をつけ、古河と一緒に始めなすつた山だ。その頃のS家(舊藩主)はそんな事でもしなければ迚も立ち行かない財政狀態だつたのだ」

そんな事を父は話した。それから私の家も其頃非常に貧乏だつた事なども色々話し、

「お前のおつ母さんが來た時はそんな風だつた」と云つた。亡き母の事である。私は今の母が義理の關係として此上を望めぬ程よくして呉れるのに對しても、亡き母の事は一切口にしなかつたが、今父の口から僅でもこんな風に云はれると、矢張りわけの分らぬ感動を覺え、やがて父に對しても、父子らしい氣持が湧いて來た。

翌日早起きし、四里ほどある熊澤といふその銅山に出かけた。木の繁つた美しい山で、その邊では「澤」と云つてゐる小さな溪流が幾つかあり、青葉を透かした夏の光りが水の上に踊つてゐた。深い苔が岩石を被ひ、その上にがくの花が美しく咲き亂れてゐた。私達は澤づたひに登つて行つた。

「これが鑛脈です」案内に立つた技師は岩の間に酸化し、黒くなつてゐる、さういふ場所を所々で示しながら行つた。

「この脈がみんな中まで續いてゐれば大したものですが」と技師は笑つた。

然し父は最初から此小さな鑛山にさう大きな期待はしてゐなかつた。只、父は今まで、使用人として會社の爲め働いて來たが、近く會社の仕事が政府に買上げられるので、今度は自身の仕事を何かやつて見たい、そんな氣持だつた。そして前から知り合ひの足尾銅山技師長の世話で此山を買つたのだが、その人もいふやうに、大きな利益もない代り、危險な仕事とも考へてゐなかつた。

三年程前、私は内村鑑三、阿部磯雄、片山潛、木下尚江等の渡良瀬川鑛毒事件の演説を聽き甚く惹き込まれた。その後被害地を見に行かうとし、父と其事で烈しい口論をした。

今の父はその時の事を全く忘れたやうに見えた。これはそれに拘泥されるよりはよかつたが、私はさういふ事には前と少しも考へを變へてゐなかつたから、父と同じ心持で此鑛山を見てはゐられなかつた。父にとつて一つの新しい樂みである鑛業が、私には甚く冷たい氣持でしか見られなかつた。

採鑛區域を大體一ト通り廻つた。山の背から南側は他の所有で、其處は木も伐拂はれ、烟突から煙を上げたバラック式の建物など所々に見えた。それは何んとなく鑛山らしい眺めで、早晩、此方側もそんなになるのかと思つた。

私達は木道を引き込んだ坑内にも一つ二つ入つて見た。そして其晩は坑夫の合宿所に續いた事務所に泊つたが、蚤にせめられ、よく眠られなかつた。

翌日鳴子に歸り、その翌日は、鬼頭の間歇溫泉を見に行つた。その途中、これも熊澤と一緒に買つた極く小さな鑛山を見に寄つた。子供のある夫婦、その他二三人の坑夫がゐて、高さ一間、幅何尺、奧へ一尺につき幾許といふ請負仕事で掘つてゐた。私達は一寸見て直ぐ出掛けた。

或る流れを渡る時、屈強な若者が穗が長く握りの短い魚扠を逆手に持ち、一間ばかり水の落ちる瀧壺へ飛込んで鱒を捕つてゐた。見る間に二尾突いたが、水中に潛つて魚を追ひ廻すやり方が、如何にも原始的で勇敢な感じがした。私は水滸傳の張順を憶ひ出した。

鬼頭は地理でその名は子供から馴染深かつたが、一軒小さな宿があるだけで、淋しい場所だつた。熱海を見た眼には時々吹き出す間歇泉も

公園あたりの噴水に過ぎなかつた。

東京を出て既に六日になる。私達はこれで來た目的を果したわけで、翌日は又もと來た道を引返す事と思つてゐると、その晩父は不圖想ひついたやうに、こんな事を云つた。

「お前は歸り、山形へ寄つたら、どうだ」

山形とは私が子供から一緒に育つた四つ上の叔父の事である。叔父は日露戰爭で片眼を失ひ、今は退役大尉で、Mといふ山形の盲人の禪僧についてゐる。

私は父と一緒にゐる事を今はさう苦にしてゐなかつたが、久し振りに親しい叔父と會ふ事は嬉しかつた。

父は大體の旅費を渡し、

「費つたものはちやんと書いて、殘りは返せ」と云つた。

父は屹度これを云ふ。私も金には几帳面だつたので、これを云はれると、いつも侮辱されたやうに感じた。

翌朝父に別れ十六七里の路を一人、俥で行つた。その六七年前奥羽線のない頃私は此道を一度旅した事がある。大石田から二日がけで最上川を下り、酒田から象潟を通り本庄まで十八里の路を俥で行つた。今度はそれに次ぐ俥での大旅行だつた。此日も尻が痛くなつて閉口した。

新庄から汽車に乘り、山形の叔父の家に行つたのはもう夜だつた。叔父は裏に畑のある素人屋の二階に住んでゐた。

私は私の不意の訪問を叔父が驚くだらうと思つてゐた。所が、叔父は、

「來たか、疲れたらう」こんな風に恰も豫期してゐたやうなことを云つたので、初めて私は今までの總てが豫定の行動だつたと云ふ事にはつきり氣がついた。

叔父は父から手紙を受取つたのだ。叔父は自分の師匠であるMさんによく話して貰はう。然し露骨にさう云へば順吉は恐らく承知しまい。何氣なく此方へ寄越してくれないか。こんな返事をしたのだと私は察した。それで何氣なく私に鑛山行きを誘つたのである。そして何氣なく山形行きを勸め、私は何氣なく此處へ來て了つたのだ。さう私は思つた。

私は叔父にその事を確めては見なかつたが、それに違ひないと信じ、さう自分が扱はれた事を快からず思つた。

翌朝私は叔父とその盲目のMさんを訪ねた。寺は三里程離れた川岸にあつたが、Mさんは町中の仕舞屋に住み、此處の聯隊で講話を續けてゐた。盲目で寺の方では不便でもあり、且、息子が從業員で山形の驛につとめてゐる關係もあるらしかつた。

額の廣い何處かすつきりした感じの人だつた。初めからの僧侶ではなく、徳川の旗本で、儒教で修行した方だつたが後年失明して禪へ入つたと云ふ話だつた。話し振りや樣子にも江戸ツ兒といふ風が殘つてゐた。

「秋になつて秋刀魚を憶ひ出すと一寸東京も戀しくなるね」こんな事をいつて笑つた。

「腐るかも知れませんが、お送りして見ませう」

最初そんな話をしてゐたが、Mさんは段々話を目的に近づけようとした。Mさんは私が此四五年日曜毎に通つてゐる基督教のUさんの噂などを始めた。

「Uさんは社會主義に就いてはどう思つてゐるかね」

私はUさんの信仰と社會主義とは相容れないものがあり、毎日曜來てゐた中年の女の主義者をその理由で斷つてゐたのを見た。そんな事を話した。

「あなたはどう思ふ」とMさんは追求した。

私は父や叔父が私を社會主義にかぶれて、といふ風にMさんに話してゐるのだと思つた。

私は父と衝突する場合、父の尊敬してゐるものと自分の尊敬してゐるものとの相異を云ふのが一番手ッ取り早く、結局其處へ議論を落して了ふ。

「昔は殿様の御馬前で討死するのを名譽に思へたかも知れませんが、今學校にゐるあの馬鹿な連中の爲めに討死して私が名譽と思へなくなつたのは當り前ぢやありませんか」

こんな事を云つた。私の通つてゐた學校では大名華族の子弟が半數以上を占めてゐたからだ。かういふ私の考へ方は私の實感で、社會主義とは何の關係もなかつたが、父はそれをさう解して居たのだ。

私はMさんとそんな話をするのがいやだつた。私はなるべくそれを避け、不機嫌な顏をしてゐた。

「兎に角」とMさんは云つた。「學生の間は學生らしく、學校の方だけを勉强して、大學でもいい成績で卒業するのが第一の急務だよ。社會の事は社會に出てからやるとして、今は勉强だけをおやり、それが一番だ。それに何といつても今は肩書の世の中だから、大學は何を措いても卒業する事だよ」

私は甚く不愉快になつた。こんな事を聽く爲め、山形まで連れ出されたかと思ふと腹が立つて來た。

間もなく私達はMさんの家を出た。叔父は歩きながら、

「お前はMさんの話をどう思つた」といつた。私は直ぐ、

「非常に下らないと思つた」と答へた。

叔父は返事をせず、不快な表情をした。

午後私達は二三里あるMさんの持家に出かけた。川で泳ぐのが目的だつた。古いいゝ寺だつた。さびた庭があり、池には紅白の蓮が咲いてゐた。鐵道に出てゐるMさんの若い息子も來て、三人はわきの割りに流れの强い川で日暮れまで泳いだ。

暗い靜かな晩だつた。三人は書院に寢ころび、氣樂に話した。池の蛙だけが八釜しく、然しそれも時々ググググッと聲を拔いて强く鳴くのがあり、それが鳴くと、ぱたりと皆鳴き止むので急に其處らが森と靜になつた。少時すると、恐る〳〵又鳴き出すのがある。その聲が二疋になり、五疋になり、十疋になり、三十疋になり、忽ち、又元の八釜しい合唱となる。「又、親方が鳴くぜ」こんな事をいつてゐるとググググッとそれが鳴き、ぱたりと又皆鳴き止む。何遍でも繰返した。

十時頃三人は蚊帳に入つた。

翌日もよく晴れた暑い日だつた。Mさんの息子は勤めで早く歸り、私と叔父とは又泳ぎ、午近くなつてその寺を出た。

「川魚料理で名代の家がある。寄つて見ようか」と叔父が云つた。

私達は一里程來てその家へ行つた。料理屋は素人屋のやうな家だつた。門を入ると捨石と松の木とで出來た小さい馬車廻しがあり、その向うに式臺つきの大きな玄關がある。夏の眞晝でひつそり閑としてゐた。

二三度叔父が大聲に呼んで、漸く五十ばかりの野暮なりに品のいゝ内儀さんが出て來た。

私達は二階の廣い座敷に通された。そして先づ料理よりも氷水だつた。

料理は却々出來なかつた。家の中は再び森閑として了つた。主人が要るだけの川魚を捕へに行つたのではないかと思はれる程だつた。

私は座蒲團を敷居に置き、片足を緣に出し、背を障子の緣に持たせてゐた。

「お父さんとの衝突もいゝが……」叔父が云ひ出した。「少くも、事、○○に關するやうな事を云ふのはよせよ。

「それは此方も云ひたくないが、考へ方の相違がそんな事で一番簡單に明瞭するから、つい出るんだ」

「然し兎に角さう云ふ事は口にするなよ」

「思つてる事は口に出るからね」

「お前はそんな事を始終思つてゐるのか」叔父は語調を烈しくした。

「常に思つてるわけぢやあない。そんな事を自分の仕事として決して焦點にも何にも置いてはゐない。然しお父さんの方でさういふ事に拘泥して、さういふ點で此方を非難して來れば、此方も正直な事をいふより仕方がないぢやあないか」

「貴樣はどうしてもそれを云はなければゐられないのか」

「話が其處まで行けば、右の事を左といふわけには行かない」

私が此言葉を云ひ切らない内に叔父は怒鳴つた。

「馬鹿」

同時に底の厚い氷水のコップが飛んだ。私は僅に首を曲げ、それを避けた。コップは顳をかすめ、前の欄干に當り、更に庭へ落ち、飛石の上で烈しい響と共に碎けた。

私達は興奮し、默つて了つた。私の眼には自然に涙がにじみ出た。私は顏を外向け、

「考への上の事は仕方がないぢやあ、ないか」

と云つた。

叔父は返事をしなかつた。そして二人は一緒に聲をあげ、泣き出した。互にもう何も云はなかつた。歔欷は却々止まらなかつた。

間もなく膳は運ばれたが二人には全く食慾がなくなつてゐた。大きな香魚、そんなものを私は無理に口へ運んだ。

其處から山形までは僅一里半程あつた。私達は前後三四間離れたまゝ默々として炎天の下を歩いて行つた。興奮のあとの淋しい靜かな氣持だつた。私はぼんやり、煮賣屋の大きな皿に水に住む源五郎と云ふ蟲が煮つけになつて並んでゐるのを認めたのを覺えてゐる。

叔父は立止まつて私を待つてゐた。そして「お前はもう今晩歸れ」と云つた。

私は首肯いた。私の氣持は不思議な程和いでゐた。私は叔父に對し何の不愉快も感じてはゐなかつた。私は私自身の考へた所謂危險思想とは考へなかつたが、このまゝに若し一方に押進んだ場合、自分は誰よりも先づ、此叔父に此度殺されるだらうと思つた。私はそれに殆ど恐怖は感じなかつた。恐怖に感ずるといふ事は許されなかつた。然し孤獨な淋しい氣持になつた。

叔父の下宿へ歸り、支度して、私は一人停車場へ向かつた。

（大正十五年十二月）

過去

一

家内の方の親類にSさんと云ふのがある。私は生活をなるべく單純にして置きたい方で、親類づきあひは子供から一緒に育つた叔父の家と、家内の實家と、嫁入つた妹達の所と、それ以外は殆ど絶對といつてもいゝ程、疎遠にしてゐる。それにSさんの所は家内の義母の實家で自分直接の關係でないから、これまで餘り交渉はなかつた。實をいふと、或る理由から、それでは濟まぬといふ氣持も多少はあつたが、理由が理由なので私は殊更それに拘泥しない事にしてゐた。

所が、此夏、突然、Sさんの所のTさんと云ふ少年から家内へ宛てゝ手紙が來た。

奈良の古美術を見たい。宿屋へ行くのでは兩親が許さない。そちらに泊めて頂けるならば行つてもよろしいと云ふ。お差支ないか如何か。此事母からお願ひする筈だが、健康を害して寢てゐるので自分でお願ひする。――から云ふ意味だつた。

私はSさんの所からさう云つて貰ふのは氣持がよかつた。昔、間接にSさんの所に世話になつた事がある。それは一寸禮の云ひにくい事だつた。直接禮を云はないまでもその心持で顏出しでもするやうならいゝが、それも出來ない私としては向うからさういふ風に云つて貰へるのは大變氣持のいゝ事だつた。

家内宛に來た手紙なので早速家内に返事を出さした。「喜んでお宿を致します」

それから五六日した夜、電報が來た。

「T、今御地にたつた」

後から聞けば沼津から西は初めての旅だ。十七ではあるが、うちの人には子供の一人旅だ。私は早速、發信時間と旅行案内とで、奈良着の時間を調べ、翌朝は迎ひに出るやう、家内にいつた。

翌日私はいつもより早く起きた。暑いので寢てゐられなかつた。

家内は出がけに、

「私もTさんは初めてなのよ。おちひさい時、見たかも知れないけど、覺えてゐないわ。でもSさん系統の顏なら直ぐ分つてよ」そんな事を云ひ、書生と共に出て行つた。

暫くすると、Tさんだけ俥で來た。中學五年生といふ話だが、小柄で、見た所は三年生位にしか思へなかつた。成程家内の云ふ如く、Sさん系統の顏だと私も思つた。

私の中學生時代、Sさんは同じ學校の大學科を教へてゐた。ケムブリッヂ大學の卒業生でラックロスと云ふ英國流の運動競技を吾々に教へた事があるので、顏だけはよく知つてゐたが、Tさんも明かにその系統の顏だつた。

「安子が迎ひに出たんですが、會ひませんでしたか」

「えゝ。いらしたかも知れませんが、私、大變眼が近いものですから――

―可笑しいな。あなたの方で分らなくても、大概氣がつきさうなものだが……」

家内は次の列車まで待ち、丁度それで京都から來たYと一緒に歸つて來た。

―今日は私の失策ではない事よ。Aさん(書生)が案内所で訊いたら、そんな汽車はないつていふんですもの。氷水を飲みにいつてる間に着

いたのよ。――でも、思ひがけないお土產をお連れしたから御滿足でせう」
「御出迎ひで、どうも恐れ入りました」Yは笑つた。
「Yさんが濟まして西洋人と話しながらいらつしやるから變だなと思つて聲をおかけしたら、早速別れてお了ひになるんですもの」
「よかつたぜ。さもないと博物館まで一緒に行く事になつてゐたんだ」
「氣取つて握手をしてゐらしたわ」
Yは大きな聲で笑つた。「色々美術や、寺の事を訊くんだけど、僕はまるで知らないだらう。弱つちやつた。御出迎ひですつかり助かつちやつた」
先祖世々京都に住み、日蓮がよく來たとか、兼好法師が家の二男坊だつたとか、龜卜の法はYの家だけに傳つてゐるのだとか、私の聞いただけでも、いやに由緒の多い家柄に生れながら、さういふ事には更に興味がなく、自身も京都大學以來十五六年住んでゐて、しかも古美術古社寺などとは全然沒交涉の生活を續けて來たYと、傍にゐる小さなTさん――中學生で古美術の見學に一人でわざ〳〵出て來たTさん――この對照が私には何んとなく可笑しかつた。私は南方に好意が持てた。
　その夜、私達は日除けの下の張出し緣で話した。
　現在Tさんのゐる學校と云ふのは私達――私もYも、その昔、通つてゐた學校だつた。私がその學校に入つたのは三十八年前、出てからでも三十何年になる。
「僕等の習つた先生はもう居ないだらうな。それとも少しはゐるかな」
「それはゐるよ。○○がゐるし、それから××さんも居りませう？」Yは後半をTさんに訊ねた。
「居らつしやいます。漢文の□□さんは御存じ御座いませんか」
「知つてます」
「その先生は知らない」私はYよりも三四年前の卒業だつた。
「いゝ、あなたさんは……」YはTさんの言葉に釣込まれて、丁寧な言葉を使つた。「何年の御生れですか」
「明治四十三年で御座います」
「へえ――」
「つまり吾々の時代で早く結婚した連中の子供が丁度このTさんなどと同じ年輩なんだよ」
「どうかね」Yは今更にジロ〳〵とTさんを眺めてゐたが、私が、
「吾々も爺さんになつたわけかね」と云ふと、
「ハヽヽ」Yはさも可笑しさうに聲をあげて笑つた。
　Yは自身の甥の事とか友達の子供の事などを訊ねてゐた。
　私は不圖、「あの時、Sさんの奧さんは大きな腹をしてゐた。若しかしたら、それが此Tさんではなかつたか」と思つた。私はその時代の年を繰るには每時、自身の大學入學の年を起點にした。三十九、四十、四十一、四十二、――丁度その頃だ。

二

　それは春か秋か、今は憶ひ出せない。兎に角、夏でも冬でもなかつた事は、その朝死んだ爲太郎の飲みかけの藥壜が、病室の窓枠の上に載つたまゝ、穩かな陽ざしを受けて居たので、確かだつた。陽ざしからは秋だつたやうに思へる。
　私はその朝重見からの電話で爲太郎の死を知つたが、その前病氣で入院してゐるといふ話は聞いてゐたか、どうか、――何しろ寢耳に水

の氣持で驚いた。

爲太郎の郷里は下總佐原から利根川を三四里下つた小さな町で、東京からは半日の行程だつた。私達が行つてからも未だ誰も出て來ない所を見ると、恐らく危篤の知らせも間に合はない程の急な死らしかつた。

私は暗い氣持で沈んでゐた。私と爲太郎との關係は爲太郎の妹の千代が嘗て私の家の女中で、その千代を愛した。然し私は結婚しようとは却々考へず、幾月か千代にそれを打明けなかつた。千代は田舍の左官の娘で、教養もなく、容貌も決して美しいとは云へなかつた。そんな點で、私は愛しながらも迷つてゐたが、仕舞ひに迷ふ自分に嫌惡を感じ、迷ふのは愛する氣持が不純なのだと幾らか恐迫觀念に近い考へで、遂に決心し、打明けた。當時の私には愛情を打明けるといふ事は結婚の申出になつてゐた。今から思へば總ての事が單純に考へられた。

私は自家での反對は豫期してゐた。それで、翌日祖母や母に打明ける時は、相談ではない、事の報告です、といふ風に云つた。

然し父は絶對に反對した。それまでそれ程でもなかつた祖母までが急に烈しく反對しだすと私は散々迷ひぬいて云ひ出した事だ、今更取消すわけには行かないと云ひ張つた。祖母は口約束だけなら斷つて少しも差支へないと云つた。

祖母とそんな事を云爭つた爲めではないが、三四日して私は單に口約束だけの關係ではなくなつた。こゝまで來れば、その頃の考へでは問題として迷ふ所はなかつた。自家の者は私を痴情に狂つた猪武者のやうに云つた。そして或る日千代は千代を私の家に世話した者から瞞され、利根川べりの家へ連れ歸られると、私は極度に腹を立てた。うちの者が寄つてたかつて私が本氣で云つてゐる事を少しも眞正面から解決しようとしない事を怒つた。

重見は夏で三浦半島の海岸に行つてゐたが、私の最初の手紙――「君だからから云ふ我儘を云ふ。どうか直ぐ歸つて貰ひたい」――を見て、丁度その頃二百十日にかゝつて海が荒れ、船は出なかつたが、漸く一艘魚を送る汽船のあるのを幸ひ、それで歸つてくれた。私は千代の他、全く孤獨で、日頃親しい叔父すら、他の家族との關係上、はつきりした態度をとらず、歯がゆく思つてゐた時で嬉しかつた。然しその前私は千代と口約束以上の關係になつた時、それはもう決定的な事になつたので、追ひかけ、重見に、「わざ／＼歸つて貰ふに及ばない」と書いたが、重見はそれを見る前に歸つてくれたのだ。

私の味方としては其頃麻布三聯隊に一年志願兵として入營してゐた別のTさんがあつた。Tさんは後年他の女と自殺した人であるが、當時は英國でクロポトキンなどと會ひ、さういふ思想に傾き、考へとしては割りに徹底的な方だつたが、實際は他に好きな人があり結婚したいと思ひつゝ父の不贊成から、父の選んで呉れた人と結婚しようとして居た。親孝行な性質からモノメニアックな父の心を攪亂するのは忍びないらしかつた。私からすれば年も五つ程上で、私程には簡單に考へられないのかも知れないが、それが當時では私に異樣に思はれた。

然しTさんは私に同情し、私の爲め、父と會ひ、色々話して呉れたが、結局それは無效だつた。

その他、重見の叔父のKさん――私は此時から七八年後Kさんの娘と結婚したのだが、此Kさんも私の爲め父と會つて呉れた。勿論それも無效だつた。

要するに其頃の父と私とでは、かうなつては

何處にも調和の見出しやうがなかつた。然し父も私に出て行けと云はなかつたし、私も出ようとしなかつた。一時は出るつもりで如何にして生活を立てようか、――書く事では滿足な小品一つ出來ない時代で、出來たにしろ、金に代へられるなど夢にも考へられない時代だつたから、養鷄でもやらうかと、八王子の方に家など探しに行つた事がある。然し正直に云へば私は自分で生活すると云ふ事には甚く臆病だつた。どうかなると云ふ風には、決して考へられない方だつた。私は直ぐ餓死を考へた。父に反抗しながら、私は生活では矢張り父をあてにしてゐたのだ。學校を出たら必ず獨立するやう、これは恰も座右銘かのやう常に父から云はれてゐたが、その事に少しも必然さがない點から、口では承知しながら、その氣になれなかつた。それと、三つからその傍を離れず、絶えず一緒に、夜も同じ部屋に寢てゐた程の祖母と別れねばならぬ事が、感傷的に非常につらかつた。要するに私は、自分からさうと云ふわけには行かないが、假りに他人の口を想像して云へば、我儘育ちの至極意氣地のない人間だつた。

私は今直ぐ千代と結婚したいとは思はなかつた。時々千代から貰ふ手紙は私に甚だ興ざめなものだつた。下手なりにも何か自分に對する特殊な感情の發露でも見られるならば慰められたらうが、千代の手紙は實にありきたりな形式を追ひ、文章からも文字からも甚く卑俗な感じを受けた。自分が自家の者と絶えず押し合ふ心持で緊張しきつてゐる時で、私は手紙を貰ふ度々、毎時其癇癪を返事の手紙に爆發させた。田舍に育つた十七歳の女には實際無理な註文だつた。今ならば所謂微苦笑で見られる事が當時ではさう行かなかつた。私は兎に角此女をもつと教育しなければならぬと思つた。田舍の私立女學校などが、どれ程の教育になるか、信用もしなかつたが、私の小遣錢の一部で出來る事は矢張りその程度の事だつた。

勿論この事は自家の者には話さなかつた。

三

八月の末から殆ど九月一杯ゴタ〳〵し、十月に入つて、持久戰の形となり、私の氣持も幾らかは落ちついた。それにしても私はそれまで千代の側の人とは一度も曾つて居なかつた。此方ばかり騒いでゐても、若し向う側に反對があり、千代がそれに屈する事でもあれば、自分の立場はなくなるわけだ。丁度旅でもし、靜かに考へたいと思つた時で、眼ざす旅とは反對だつたが、一度千代の家族と會ひ、はつきり約束を作りたいと考へた。

私は出發の日、荷を近傍の停車場に一時預けにし、午後から、一人佐原へ向かつた。日が短く、佐原へ着いたのは日の暮れだつた。

停車場前から俥に乘り、三四里の暗い夜道を行つた。

俥夫は六十近い頑丈な爺で、酒の臭ひをぷんぷんさせてゐた。私は單なる好奇心からでなく俥夫の生活を色々訊いて見た。自分が俥夫になるとは考へないが、幾ら位の金で生活出來るものかを。

俥夫は四人家族で、一ト月七八圓で暮らすと云つた。今からは考へられない事だが、女中の月給が一圓か二圓の時代で、田舍としてはそれが相當だつたのだらう。

――それでお前は月に幾ら位儲ける？

――俺かね。俺の稼ぎは大概十五六圓と云ふ所かね――

――それぢやあ、暮らしは樂なわけだ――

――なに、みんな呑んぢまふからね。十五六圓はそつくり俺の呑料だ――

――暮らしはどうする――

「家で商賣をやつてる。俥夫の溜りだからね、嚊が駄菓子を賣つて、どうかかうかやつてるよ」
　俥夫は自由に酒を呑みたいばかりに稼いでゐる。如何に商賣とはいへ、その樂みがなければ、此夜道を三里も四里も馳けられるものではないと云つた。收入の三分の一で一家をやしない、あとは完全に呑んで了ふといふ此年寄を私は不思議な氣持で眺めた。生活が變に重苦しく感じられてゐた私にも如何にも屈託なささうな話が氣持よかつた。
　俥は時々暗い田舍路から村へ入り、それを貫けて又暗い田舍路へ入つた。村では子供達が店先の縁臺で菱の實を齧つて居た。
　千代のゐる町に着いたのは十時頃だつた。電報をうつては置いたが、初めての所で、寢靜まつてゐたら、一寸訊ねにくいだらうと思つた。が、偶然その日、町は祭りで、御輿や踊屋臺で賑つてゐた。
　低い軒並の町に人が一杯だつた。その中に御輿が置かれ、周りには既に肌寒い氣候に、揃ひの浴衣で向鉢卷をした若い連中が集つてゐた。
　私は不圖、その群集の中に笑ひもせず凝つと此方を見てゐる千代の眼を見出した。
　千代は私が氣づいたと見ると大急ぎで、人々を押分け、小走りに近い路次の口まで行き、その薄暗い所へ立つてゐた。狹い土地で人に氣兼ねをしてゐると思つた。私は何時かの手紙に、若い郵便局員からよく冷されるといふ事を書いて來たのを憶ひ出した。
「こゝでよろしい」私は俥を下りた。
　千代は一寸微笑しただけで、そのまゝ先へ路次を入つて行つた。
　千代の家は天井の低い古ぼけた小さい家だつた。夜で何も見えなかつたが、左官職の家といふ氣もしなかつた。兩親、姉、兄、千代、弟、などが一つ部屋に集つてゐるのを見ると、獸か鳥の一族が、仲よく一つ巣に暮らしてゐる感じで、私は或る親しい感じを受けた。が、自分も自家を離れゝばこんなに暮らす事かと想ふと淋しい氣持もした。
　單純で、善良な感じの人達ばかりだつた。父親と云ふのは肥つてはゐないが、大きな男で、年は六十位だつた。色が赤黑く、皮膚が厚く、顏に太い、深い皺があり、如何にも長い勞働生活をして來た人らしかつた。餘り饒舌らず、落ちついた方で、私にも謙遜でありながら、何處か娘の婿に對するといふ風があつた。
　私は來た目的を云ひ出したが、精しい事は中學を途中までやつたといふ千代の姉婿が翌日銚子から來る故、それと話して呉れと云つた。間もなく私は千代と千代の兄の爲太郎に案内され、庭一つ隔てた齒醫者の家といふのに連れて行かれた。どう云ふわけか、それは建てゝ間のない空家だつた。其處に其夜私は爲太郎と一緒に泊る筈だつた。
　爲太郎は二十歲位の何となく手薄な感じの、おとなしい青年で、町の小學校に代用教員をしてゐるとの事だつた。「何々したのであります、、、」「さうであります、、、」と云ふ癖が妙に耳立つた。
　私は爲太郎と話してゐる事が、實に興味がなかつた。私は千代とだけ少時でもいゝから話したかつたが、爲太郎は警戒するつもりか、それとも歡待するつもりか却々その場をはづさうとしなかつた。私は不機嫌な顏をしてゐた。母親が恐らく氣を利かしたのだらう、時々爲太郎を呼びに來たが、爲太郎は行つたと思ふと直ぐ又還つて來た。
　一時頃になつて二人は同じ部屋に寢た。其夜初めて知つた人と同じ部屋に寢るといふ經驗はこれまでなかつた。拘泥しだすと、私はどうし

ても眠れなくなつた。祭りのあとで未だ人通りはあつたが、町の方も大分靜かになつた。緣の下で蟋蟀が頻りに啼いた。

爲太郎はよく寢入つてゐる。裏の家では千代も兩親達とよく寢入つてゐるだらう。私は自分だけ眠れずにゐる事が腹立たしかつた。

私は祖母や妹達の事を考へ、又親しい友の事なども考へた。そして今、知らぬ土地で、知らぬ人とかうして枕を竝べてゐる事が私には淋しかつた。

私はいつか眠つた。翌朝眼を覺ました時には爲太郎はもう學校へいつて、ゐなかつた。

私はその日の夜行で新橋から旅立つつもりだつたが、千代の姉婿が中々來ず、もう一ト晩泊らねばならなくなつた。

午後、私は千代とだけになりたい氣持から散步に誘つた。所が傍でそれを聞いて居た弟の芳次郎が自分も一緒に行きたいと云ひ出した。

「あゝ、おいで」千代は簡單に承知した。それが私には腹が立つたが、默つてゐた。

千代は町を步いて目立つのが厭だと、裏道から田や畑のある方へ連れて行つた。芳次郎の來るのを直ぐ承知したのもさう云ふ心持に思へた。

よく晴れた氣持のいゝ日だつた。東京から來ると、空が非常に廣く見えた。

千代と芳次郎とは切りに私に浚渫船を見せたがつた。河口から段々に溯つて來た河底工事で、今此邊にそれが二三艘來てゐる。[illegible]子達ひの外ぐるまきり知らない子供達には何んとなく自慢の種らしかつた。自慢でないとしても、さう云ふ珍しいものを私に見せたいと思ふのだ。然し私は千代の氣持が少しもピッタリ來ない事で苛々して居たから、不愛想に斷つた。

千代は氣六ケしくなつてゐる私をどう持成さうか迷ふ風だつた。そして山へ初茸を取りに行かないかとも云つたが、贊成しなかつた。

やがて、私達は一つの丘へのぼつて行つた。一方は赤土の崖で河へ望み、背の方は十年程經つた松の林になつてゐた。私達は崖の上の草原へ休んだ。

馬鹿〳〵しく大きな帆をあけた船が幾艘か生ひ繁つた葭の向うを靜かにのぼつて行つた。その彼方に黑い頑固な形をした浚渫船が起重機を右へ左へ動かしながら作業してゐた。

一初茸を探して來ると云つて芳次郎が一人で松山の方へ行つたあとは私達二人だけになつたが、扨て別に話す事もなかつた。

私はその中學時代所謂同性愛で、こんな場合、より遙かに戀らしい氣持を經驗した。然るに今、千代と一緒にゐて、少しもさう云ふ氣になれない事を不思議にも思ひ、物足らなくも感じた。小說などに見る、かういふ場面とは凡そ似もつかぬものだつた。

私は鐵道案內に附いてゐる地圖で翌日からの旅程を千代に說明した。が、千代は餘り興味を持たなかつた。私は行く先々から便りをする事を約し、地圖を引裂き、それで所々鉛筆で印をつけ、渡してやつた。

暫くして私達は歸る事にして、松山の方に芳次郎を探しに行つた。芳次郎は大きな初茸を四つ五つ持つて薄を押分けながら出て來た。千代は側の細い篠を折つて、一つ〳〵丁寧にそれへ貫し、私に手渡したが、そんな事でも私を喜ばさうと思ふ千代の氣持と私の氣持とは變に水と油で、一緒になれなかつた。

私達は同じ道を町の方へ還つて來た。道端の畑の中に墓地があり、小さな墓石が澤山竝んでゐた。そしてその間に赤と黃と大きな鷄頭が咲いてゐるのを見ると、私は左う答へるだらうと思ひながら、

「けいとうとはどう云ふ字を書くか知つてるか

い？」と訊いてみた。
「毛絲でせう」
「けいいは庭鳥の雞だ。とうは頭で、鳥冠みたやうぢやないか」
「えゝ」千代は鳥冠は解つたが、雞と頭が未だ呑込めぬやうな、あやしい返事をした。
私は千代から手紙を受取ると、よく、其返事で誤字や當字を直してゐたが、それと同じ子供らしい考へから、機會があれば何んでも教へようとした。
丁度日が沈みかけてゐたので、私は秋の日の早く入る事を、「秋の日は釣瓶落し」といふ言葉があると云つた。すると千代は直ぐ、「男心と秋の空つてね」と云つた。
私はがつかりした。自分でも不快な顏をしたのが分つた。

四

私はその晩、千代の姉婿と會つた。
そして翌朝は起きると直ぐ、其處をたつて、東京へ歸つて來た。
要するに千代訪問は二人の關係からいへば不成功だつた。私は此一ト月半程の間、絶えず家族を相手に緊張しきつて來た。從つて自家の中の空氣も何となく嚴しいものだつたが、千代の家へ來て、其處が、よく云へば平和で、當時の私の氣持から云へば如何にもダルで、殊に千代の心持が、一ト月半さう云ふ風にして來た私には、甚くそぐはない感じがした。
私は氣を滅入らして歸つて來た。
もう一人で旅へ出る勇氣はなかつた。私は上野から直ぐ重見の所へ行き、重見に一緒に旅へ出て貰つた。
二人は其日から一週間鵠沼の宿屋で暮らした。日あたりのいゝ二階の座敷で二人は波の音を聽きながら、近く出す筈だつた同人雜誌の相談をした。實際に出したのは二三年後だつたが、重見の持つて來た繪の本から插畫にする畫など選んでゐると、私も幾らか元氣になつた。

五

その後、私は千代を佐原の或る私立家庭女學校に入れた。一年半か二年で卒業出來る簡單な學校で、大した效果を得られるとは思はなかつたが、東京の正式な女學校に入れるにしては千代の年が大分それを過ぎてゐたし、私の小遣錢の一部では費用の點でも許されなかつた。千代は其處の寄宿舍に入つた。
それから幾月かして、或る日私は爲太郎から、手紙を受取つた。——どんな所でもいゝ、自分を書生に置いてくれる所はないだらうか……。
私は重見に相談し、重見は叔父さんのKさんに相談した。Kさんは直ぐKさんの親類であるSさんの所に爲太郎を世話して呉れた。
其後、噂に聞く爲太郎の評判は惡くなかつた。Sさんの長男が丁度學習院の初等科に入つた時で、爲太郎はその送り迎へ、それから、家での復習の手傳ひをしてゐるとの事だつた。
そして爲太郎自身もそれを大變喜んでゐると云ふ話だつた。
總てはそのまゝに過ぎて行つた。千代との事は、私は自家に對し表面、少しも讓らなかつたし、勿論自家の方でも讓らなかつた。結局千代が學校にゐる間は私も結婚する氣がなく、自家とは一二年先き、改めてそれを問題にする事にして一段落をつけた。然し私の千代に對する氣持が段々冷えて來たのは事實だつた。只その頃の考へとして、それが甚だ僅かな場合にしろ、既に夫婦の實があつた以上、其者の一生の責任を持たねばならぬと私は信じてゐた。
これはトルストイのネフリュドフの話などか

ら來た考へで、若し自分が千代を捨てでもすれば、キリスト教的に明かに自分のした事は姦婬罪になるといふのが氣に食はなかつた。恐しかつた。

然し事實、千代に對する氣持の冷えつゝあつた私には、千代が段々重荷と感ぜられて來るばかりでなく、此考へも變に重荷となつて來た。――寧ろ此考へ故に、一層千代が重荷と感じられて來たのである。

私は東京へ來てからの爲太郎とは一度も會はなかつた。自然の機會もなかつたし、會ふべき用事もなかつた。且つ私は爲太郎と會ひたいとは決して思はなかつた。

或る朝、突然私は重見からの電話で爲太郎の死を聽き、驚いた。私は直ぐ俥で重見を訪ね、其處から歩いて、一緒に、近い番町の病院へ行つた。私は死骸を見る事が恐しかつた。自分達と餘り年の異はない事が惡い。私は鎖された暗い氣持で死骸から眼を外らしてゐた。其處には前に書いたやうに朝陽の射した窓枠の上に、爲太郎がその明け方まで飮んだかも知れない藥の壜が未だ半分程殘つたまゝで載つてゐた。

Sさんの所から執事のやうな人が來てゐた。

切下げ髮の肥つた老女が忙しく病室に入つて來た。老女は死骸の顏にかけられた白い布をとり、一寸拜んでから、

「おゝ、天野、可哀さうにねえ……」と云つて泣いた。老女は歔泣きながら死骸に向かつて、色々な事を云つた。

袴を穿いた事務員のやうな男が入つて來て、

「多分坐棺だらうと思ひましたから、足はかう云ふ工合に組んで置きました」と、いきなり死骸にかけた白い布を下の方からまくつて、見せた。膝を兩方へ突き出した不快な色の細長い足が蟹のやうに見えた。

老女はその醜い樣を私達に見せまいとするやうに、

「はあ／＼、どうも、ありがたう」かう云ひながら、直ぐ事務員の手から白い布を取り、自身でそれを被うて了つた。此涙もろい老女はSさんのお婆さんだつた。

執事に導かれ、Sさんの奧さんが入つて來た。未だ三十にはならぬ人だつたが、ハキ／＼と事を運び、執事に命じてゐた。

私は年寄つたSさんのお母さんにはさう云ふ感じを持たなかつたが、自分と餘り年の異はない奧さんに對しては變に自身の位置――其處に死骸になつて横たはつてゐる書生の妹婿となる男といふ、自身の位置を意識した。私は自らそれに拘泥し、甚くぎごちない氣持になり、寸時も早く此場を去りたかつた。

Sさんの奧さんは其時、大きな腹をしてゐたが、今にして思へば、その胎兒が十七年後古美術見學の爲め此奈良の私の家へ來たTさんだつた。

私は疲れ切つた神經で半病人のやうになり、病院から直ぐ家へ歸つて來た。

午後は雨降りだつた。一人二階の書齋にゐると、重見から電話で、千代達が上京した事を知らして來た。

「今ならば病院の方に居るけど、直ぐ出掛けるかい」

私は實際直ぐ出掛けねばならぬ自分だつたが、それが非常に厭だつた。其頃の私はさういふ弱さから來る我儘な氣分に打克てなかつた。他人の不幸、殊に結婚する筈の女の不幸に對しそれでは濟まぬと思ひながら、どうしても出掛ける氣になれなかつた。

重見は甚く怒つた。怒るのは無理なく、私は一言もなかつた。

その夜、私は新宿の方の宿へ會ひに行つた。雨はあがつてゐたが、道は泥濘み――然しそれ

に灯の映つてゐるのが美しかつた。これが空つ風の吹く冬の往來でなかつた事こそ、幸ひだつた。

宿屋は道端に四五軒並んでゐた。二階が廻り緣になつて、その角に電燈があり、下にペンキ塗の堅看板が下つて居た。――それだつた。

私は一町程手前から、その二階の欄干に添つて立つた女の姿に氣附いてゐた。そして近づくに從ひ、身體の形から、それが千代だと分つて來た。雨あがりの薄ら寒い晩で、座敷の障子は閉めてあつたが、千代は獨り其處に立つて、今私が來た方を遠く眺めて居た。それが私を待ちに待つて居る風だつた。私は悔恨に近い思ひに責められた。

私の聲で、千代は、鼠のやうな早さで、段階子を廻り、降りて來た。そしてどうして、私がこんなに遲かつたのかを切りに訊ねた。

結局私は、此時から一年程して、此女とはつきり別れた。私をがつかりさせた言葉は本統になつた。

（大正十五年九月）

山科の記憶

一

山科川の小さい流れについて來ると、月が高く、寒い風が刈田を渡つて吹いた。彼は自動車の中でつけて來た卷煙草を吸ひ了つて捨てた。自家まで乘りつける事が氣兼ねで大津への街道で降り、女はそのまゝ還した。彼は歩きながら、今別れて來た女の事ばかり考へた。愛する女の事を離れて考へるのは快樂だ。二重の快樂だが、家が近づき、妻に僞りを云はねばならぬといふ豫想が起ると、それが暗い當惑となつて彼におほひ被さつて來た。流の彼方に一軒建つてゐる自家の灯を見ると、彼はいつも此の當惑を覺えた。明らかに自分が弱者の位置に立つ事が腹立たしくもあつた。

彼は妻を愛した。他の女を愛し始めても、妻に對する愛情は變らなかつた。然し妻以外の女を愛するといふ事は彼では甚だ稀有な事であつた。そしてこの稀有だといふ事が強い壓力となつて、彼を惹きつけた。その事が自身の停滯した生活氣分に何か溌溂とした生氣を與へて呉れるだらうといふやうな事が思はれるのだ。功利的な考へではあるが、それは一途に惡い意味には解されない。

彼は細い土橋を渡つて、門を入つた。門の戸に鈴が附いてゐる。その音にも、自分の怯けた心が現れる事を恐れた。彼は出來るだけ無心に開け、無心に閉めた。然し何がこんなに自分の心持を暗くするのだらう。自分を信じてゐる妻を欺いてゐる事が氣になるからだ。

中の灯を一杯に映した玄關の硝子戸を開けた。いつも直ぐ出て來る妻が出て來ない。彼は更に數寄屋から其處の障子を開けた。部屋の隅に恰も投り出された襤褸布のやうに不規則な形をして、妻が搔卷に包まり、小さくなつて轉がつてゐた。彼は妻のこんな樣子を見た事がなかつた。その變に傷ましい感じが、胸を打つた。妻を自分はこんなに扱つてゐるのだらうか。妻がこんなに扱はれてゐると感じてゐるのだらうか。その感じが胸を打つた。妻は頭から被つた搔卷の襟から、泣いたあとの片眼だけを出し、彼を睨んでゐた。それは口惜しい光りを含んだ眼だつた。

彼は何も彼も、もうわかつたと思つた。彼は興奮した。腹が立つた。默つて妻の片眼を見返した。妻が何かいふまでは一ト言も口が利けなかつた。

彼は隣りの座敷に電燈をつけた。丸い金火鉢によく熾つた炭火が活けてあつた。鐵瓶の湯が滾つてゐた。

「どうも變だと思つて、電話をかけて見たら矢つ張り左うだつた」

彼は返事をしなかつた。彼は二重廻を着たまま火鉢の脇に蹲んだ。

「そんな事は決してないから……うまい事をいつて、人をだまして……」いひながら妻は起きて座敷へ入つて來た。彼は怒鳴りたい氣になつた。然し何といつていゝか、その言葉を見出せなかつた。彼は險しい眼で妻の顏を見た。妻は如何にも口惜しさうな笑ひ顏をしてゐた。が、それが異樣な赤味を帶びてゐるのを見ると、發熱してゐるに違ひないと彼は思つた。

「お前は熱があるぞ」彼は傍へ來て坐つた妻の額へ手をやつた。妻はその手を邪見に拂ひのけ

なから、
「熱なんかどうでもいゝの」といつた。
一寸觸つただけでも熱かつた。彼は立つて自分の寢床の上に置かれた丹前をとり、妻にきせた。
妻は一生懸命だつた。日頃少しも強く光らない眼が光り、彼の眼を眞正面に見凝めた。彼にはその視線に辟易ぐ氣持があつた。然し故意に此方からも強く、
「お前の知つた事ではないのだ。お前とは何も關係の無い事だ」と云つた。
「何故？ 一番關係のある事でせう？ 何故關係がないの？」
「知らずにゐれば關係のない事だ。左ういふ者があつたからつて、お前に對する氣持は少しも變りはしない」彼は自分のいふ事が勝手である事は分つてゐた。然し既にその女を愛してゐる自身としては妻に對する愛情に變化のない事を喜ぶより仕方がなかつた。
「そんなわけはない。そんなわけは決してありません。今まで一つだつたものが二つに分れるんですもの。そつちへ行く氣だけが、減るわけです」
「氣持の上の事は數學とは別だ」
「いゝえ、そんな筈ないと思ふ」
妻はヒステリックになり、彼の手の甲をピシリピシリ打つた。
彼は妻に對し毛程も不實な氣持は持つてゐないといふ事を繰返した。
「不實な氣持がなくて、左ういふ事が起る筈がないぢやありませんか」
然し彼は嘘をいつてゐるのではなかつた。そして彼は何かいへば詭辯を弄するやうになるのが自分でも不愉快になつた。
「左ういふ感情まで一生飼殺しになつてるわけにはいかない。只お前をその事で不幸にしなければいゝのだ」
「こんな不幸な事つてない」どんな貧乏でもそんな事には堪へて見せる。然し此事ばかりは何時になつても決して平氣にはなれない。
「いつも云つてる事ぢやあ有りませんか。それを今更お前の不幸にならなければいゝ。どの口でそんな事が仰有れるの」
彼には女に對する自分の氣持が本氣だといふ所に辯解があつた。が、妻には本氣なら本氣程いけなかつた。何ういふ事にでも、割りに寛大になれる性質で、若しかしたら自分の此事にも寛大な氣持を見せて呉れるかも知れぬといふ朧げな希望を彼は持つた事もあるが、それは到底不可能な事と知れた。女に對する自分の氣持を累々と述立てる事も不可能だつた。そして妻のヒステリーが亢じると彼にはもう云ふ事はなかつた。

二

五分程默つた。二人には思ひ〳〵の事が浮んだ。彼には女の事が時々頭を通り過ぎて行つた。
「去年病院にゐた時にも、若し先生が好きになつたら大變だ、さう考へる方なのよ。本統に貴方だけ想つて滿足してゐるのに……」妻は幾分落ちついた所で、不圖こんな事をいひ出した。
「うん」彼は不思議な氣持になつた。妻の「先生」といふ、その若者を彼は明瞭と憶ひ浮べる事が出來た。「それは分つてゐる。何とかいふ醫者だ。その事は一寸書いて置いた」
「……」妻は急に眞面目な顏をして彼を凝つと見た。その妻の心持を彼はよく摑めなかつた。が、それに不純なものゝない事だけははつきりと感じられた。
「何といつたかね」
「……でも、それはお父樣のお氣持なんかとは

全で別なものよ。それは認めて頂かなければ困るわ」

「俺の氣持と別なものとは思はない。然しお前にいたづらな氣持があつたとは、それは決して思はない」

彼は起つて自分の机の上から一つの手帳を取つた。「Aといふ女がある。良妻賢母である。然しこの女の一生で只一度、はつきりとは意識せぬ戀を感じ、心をときめかした事がある。それを良人だけが感じた。それと相手の男だけが感じた。然し何事もなく、左ういふ機會もなく、其儘にそれは葬り去られた。Aといふ女も今はその事をもう忘れて居る。Bといふ女がある。この女にも同じ事があつた。然しBといふ女はその事を自ら意識さへしたかつた」此場合、Bが妻だつた。

「見て御覧、Aは〇〇さんだ」

妻は無心にそれを受取つたが、見ようとしなかつた。

「だけど、可笑しいわね」妻は自身の氣持を調べるやうな眼つきをしながらいつた。「若し私に少しでも疚しい氣持があれば、お父様に色々お話はしないわね」

實際彼が見舞に行く度に、妻は浮々した心持でその男の噂をした。

「それは左うだ」

「左うよ。私の心持は親切にして下さるのをお父様にも喜んで頂くつもりだつたと思ふわ」

「然し好きになつたら大變だと思つたのは矢張りあの醫者ぢやあないか。……俺はこれにも書いたやうに、それだけの意識さへお前にはないと思つてゐたのだ」

「……」

「四月十六日と日が入れてある、五、六、七、八、九、十、十一、十二、八ヶ月その事には少しも觸れない位だから、俺は別に何んとも思つてはしない。それもお前のその氣持に少しでも不愉快な要素があれば、却々默つてはゐられない方だが、左うは思はなかつた。俺は少しも嫉妬らしい氣持は持たなかつた。寧ろ何だかお前が可哀想なやうな氣がした。お前の氣持が左ういふものだといふ事はよく分つてゐた。病院を出る時でも、お前はガーゼの取かへに通ふといふのを、その位の事なら此處の××さんで充分だと、俺もいふし、O子さんもいふんだが、お前は却々諾かなかつた」

妻は遮つていつた。

「それは違ひます。我孫子の□□さんの事を考へてゐたから、××さんの所も何んだかきたないやうに思つたのです。折角よくなつて又黴菌でも入つたら大變だと思つて、左う云つたのよ。そんな事まで變におとりになるのは、それは少し酷いわ」

「まあ事實は何方だか知らないが、O子さんも左う解つてゐたと思ふ。いやな顏をして俺の顏を見てゐた。餘りいふのは此方も厭だから、お前の勝手にするやうにいつたが、俺はお前が意識せずに左ういふ氣持に支配されてると解つたのだ」

「左うかしら、——私はさう思はないけど……」

「俺がさう思ふばかりでなく、むかうの人もそれは意識してゐたと思ふ」

「そんなら、何故、病院に通ふ事をはつきり不可と云つて下さらなかつたの。私には左ういふ氣持なかつたと思ふけど、貴方が若し左うお思ひになつたのなら、何故はつきり止めて下さらないの。それはお父様がいけませんよ」

「お前が間違ひを起す人間とは第一思はないし、それでなくても、左ういふ事を用心しなければならぬまでにはまだ、大變距離のある事が分つてゐたんだ。自分が左ういふ事に呑氣でゐられる人間でない事だつて、一つの安心の種だ

し、それだけの事で餘計強く何かいふのは厭な氣がしてゐたに違ひない」

彼はこんな事をいひながら自分の氣持が、その事に案外餘裕を持つてゐた事を今更に氣づいた。それは妻の氣持の純粹さが彼に反映してゐたからだと思つた。

若い醫者は生々した氣持のいゝ男だつた。彼は殆ど口を利いた事はなかつたが、少しも惡い感情を持たなかつた。彼が妻の病室に入つて行くと、よく入れ違ひに急いで出て行つた。左ういふ時、妻は殊に快活だつた。或る時、一番下の娘が病院に泊り、夜中に急に自家に歸るとあばれ出した時、妻が自動車で、それを連れて不意に歸つて來た事がある。翌朝の診察時間までにかへるならばといつて、それを許したのはその若い醫者だつた。妻は醫者に冷された事をいつて笑つてゐた。そして翌朝早く又自動車で還つていつた。彼はその醫者にいたづらな氣持があるとは思はなかつた。然し妻の氣持に對し自分がそれに意識的である程度にはその醫者も意識的であつたやうな氣がした。

退院の時、御外來で通ふかどうか迷つてゐたが、結局妻は厭な顏をしながら山科の醫者にガーゼの取り更へをして貰ふ事に決めた。そして翌日その醫者へ行くと、案外清潔だつたので、左う決めた事を喜んだ。

三

話が妻の事に外れた事は幸だつた。妻は落ついた。然しそれが彼の事に對する少しでも寛大な心持をひき出す手よりにはならなかつた。妻はどうしても女と別れる事を彼に斷言さす迄は執拗に我を張つた。妻の強いの此事だけだ。彼は一時的にもそれを承知するより仕方がなかつた。

（大正十四年十二月）

痴情

一

薄曇りのした寒い日だつた。彼は寒さから輕い頭痛を感じながら、甚く沈んだ氣分で書齋に閉ぢこもつて居た。時々むかうの山の見えなくなる程雪が降つて來た。庭ぢう池になつてゐる、其池水に雪はどん／＼降込んで消えた。硝子戸と障子の硝子越しに彼はぼんやり眺めてゐた。雪は少時すると止んだ、止んだかと思ふと、急に青い空が見えた。此處も亦山國のうちだと彼は思つた。

それはさうと、此事をどう處置すべきか彼は却々決められなかつた。自分が女を念ひ斷る事が出來ればそれに越した事はないが、それはいやだつた。妻に云はれて念ひ斷るといふ事が既にいやなのだ。女の方には執着はないのだから、或る時、自分の執着さへなくなるなら、素直に別れてもいゝが、今、此心持を殺し、別れるのは如何にも無理往生で、その氣になれなかつた。假りにさう決心した所が、實行のあてはなかつた。それにしろ、此まゝ再び妻を欺き續けるのも不愉快だし、殘るところは妻が其事に寛大になつて呉れる事だが、これは前の二つにも益し、不可能な事と知れて居た。彼にとつて此事が可能でさへあれば申分ない。前夜萬一の望みをかけ、一寸きり出して見たが、思ひもよらぬ空想だと直ぐ知れた。

妻は今日中に總てを片づけて呉れと云つてゐる。妻は眞劍だ。彼は眞劍さで妻と爭ふ事は出來なかつた。彼は自分が案外この事に眞劍だと云ふ事を感じてゐるが、妻のそれとは一緒にならなかつた。

何れにしろ、形式的にも一時別れるより仕方ないと決心したが、妻が金で濟む事だと云ひ、彼には嫌味に、女に對しては輕蔑を示したのが、一寸腹に据ゑかねた。冷やかに云へばそれに違ひない。他人の場合なら、自分もそれをいふかも知れない。然しその云ひ草が日頃の妻らしくないと彼は腹を立てたのだ。妻は裏切られ、欺かれたと云ふ事で心が一杯なのだといふ事はよく分つてゐたが、彼はそれで我慢する氣にはならなかつた。

彼は女は愛し始めてからも妻に對する氣持を少しも變へなかつた。寧ろ欺いてゐるといふ苛責の念から、潤ひある氣持を續けて來たが、總てが露はになると、それさへ白け、乾いて來るやうに感じた。これだけの事で、直ぐさう、──一時的にしろ變る自分が腑甲斐なく思はれるのだ。

女と云ふのは祇園の茶屋の仲居だつた。二十か二十一の大柄な女で、精神的な何ものをも持たぬ、男のやうな女だつた。彼はかういふ女に何故これ程惹かれるか、自分でも不思議だつた。彼の好みの中にかういふ型の女がない事はない。然しこれ程心を惹かれるといふのは全く思ひがけなかつた。

女には彼の妻では遠の昔失はれた新鮮な果物の味があつた。それから子供の息吹と同じ匂ひのする息吹があつた。北國の海で捕れる蟹の鋏の中の肉があつた。これらが總て感能的な魅力だけだといふ點、下等な感じもするが、所謂放蕩を超え、絶えず惹かれる氣持を感じてゐる以上、彼は猶且つ戀愛と思ふより仕方なかつた。

そして彼はその内に美しさを感じ、醜い事を

も醜いとは感じなかつた。

彼が獨り、不愉快な顔をしてゐる所に、亢奮に疲れ、疲れながら尙亢奮してゐる彼の妻が入つて來た。

二

「銀行おそくならないこと？」

「おそくなつたら、あしたでもいゝぢやないか」

「それはいや。どうしても今日片をつけて下さらなければ……。一日延びればそれだけ私の苦みが延びるんですもの。……それより一日でも貴方を自分のものだなんて思はして置くの、いやな事だ。一時過ぎたのよ。私も支度しますから、直ぐお支度して頂戴」

「お前はよす方がいゝ」

「いゝえ、私、迚も自家で凝つとしてゐられない」

「熱があるぢやないか」

「病氣になつてもいゝの。病氣になつて死んだら、貴方も本望でせう？」

彼は上眼使ひに少時睨んでゐた。

「笑談にしろ、ものの輕重を辨へない事をいふのはよせ」

「輕重つて、貴方にはこれがそれ程輕い事なの？」

「死ぬの生きるの云ふ問題ぢやない」

「左うかしら」

「馬鹿だけが一緒にするのだ」

「でも私では一緒にならないとはかぎりませんよ」

妻の言葉は妻として必ずしも誇張とのみ云へない事は知つてゐたが、彼は矢張り腹を立てた。

「強迫するのか。そんな事で人の行爲を封じようとするのは下等だぞ」

妻は默つてゐた。彼は口から出るまゝ、毒のある言葉を吐いた。

妻は顏色を變へ、凝つと彼を見てゐたが仕舞ひに其眼を落とすと、溜息をつくやうに、「貴方は本統に勝手な方ねえ」と云つた。

「初から勝手なんだ」

「初から勝手は分つてゐるけれど、御自分が散散人をだまして置いて、それが分つたからつて、強迫するのだの、下等だの、よく平氣でそんな事が仰有れるわね。他人の事を批評なさる時は隨分拔目なく突込んで、御自分の事だと、それが全で異つて了ふのね。どういふわけ？　子供が嘘を云つたりすると、嚴格過ぎる程お叱りになる方が、御自分の嘘は左う氣にならないと見えるのね」

「本統を云つてよければ何時でも云ふ。嘘を云ふのはいやなんだ。お前がそれに堪へられるなら何時でも本統を云つてやる」

「貴方は自棄になつて居らつしやるの？　お變りになつたものね」

彼は不愉快で仕方がなかつた。もう口をきくのがいやだつた。

「だから、もういゝ事よ。何も彼も昨晩本統の事を云つて下すつたんでせう？　もう何も隱して居らつしやる事ないんでせう？　それでいゝ事よ。それで、どうぞこれからの事を堅くお約束して頂戴。もう決してさう云ふ事をしないと、――それを私に信じさせて下さい。今までの事私も忘れますからそれだけ信じさせて下さい。……えゝ？　どうなの？」

「それは分らない。ないつもりの事が起つたんだから、今後とても請合へない」

妻は急に亢奮して叫んだ。

「それぢやあ私、生きてゐられない」

「生きてゐられなければどうするんだ」

「それは自殺もしまいけど、屹度自然に死ぬや

うな事になる。屹度さうなるに決つてゐる」
妻が此調子では兎も角、女とは一時別れるより仕方ないと思ふと、彼はその事でも苛々した。

三

一時間程して、二人が京都東山三條で電車を下りた時には大きな牡丹雪が氣持のいゝ程盛んに降つてゐた。山科を出る時、陽を見て傘を用意しなかつた二人は頭や、肩にそれを浴びながら、見る〳〵白くなつて行く往來に首をちゞめて立つて居た。

「一時間か、一時間半したら還る。お前はKの所で待つて居るのだ。なるべく落ちついて居ないと見つともないよ」

妻は默つて彼の眼を見て居た。

「寒いから早く行くといゝ。着物は充分着て居るね」

妻はうなづいた。

「――それぢやあ」

彼は妻に別れ、僅な道程なので、込んだ電車よりは歩く方がよく、往來を越して、煙草を買ひに入つた。そして再び其處を出ようとすると、胸や髮に一ぱい雪をつけた妻が二間程離れた所に立ち、泣き出しさうな顏で何か小聲で云つてゐた。妻は一と晩の間に眼に見えて衰へて了つた。そして彼から近寄つて行くと、妻は片方の肩の上へ首を傾け、哀願するやうに、

「ねえ、いゝこと? ねえ、いゝこと?」と云つた。

「もう、よろしい。雪の中にいつまでも立つて居ると本統に病氣になる」

妻は漸く還つて行つた。厚いショールから出て居る引詰に結つた小さな頭の遠去かつて行くのを見ると、如何にも見すぼらしく、哀れに思へた。

彼はいつも會ふ、その宿へ入つて行つた。暗い茶の間の長火鉢に坐つた女將は、

「まあ、えらい雪どすなあ」と云ひ、さも無精たらしく、猫のやうな感じで起つて來た。

「少し用があるから、一人で來るやう。直ぐ」

女將はそのやう電話をかけた。

女は珍しく直ぐ來た。そして彼がその事を云ひ出すと、當惑したやう默つてゐたが、仕舞ひに「かなはんわ」と云つた。藝者達から祝物を貰つてある、それをから早く別れねばならぬのが「かなはん」と云ふのだ。理由は明瞭してゐた。そしてその理由で女は實際困るらしかつた。女は泣き出した。

「何も發表する必要はないぢやないか」

「直ぐ知れるわ」

「何處か遠くへ行つたとしてもいゝだらう」

京都に居て、此處へ來ない自信を彼は持てなかつた。實際、何處かへ行くのもいゝと思つた。それを云ふと、

「それかて、かなはんわ」と、女は泣いたあとの憂鬱な鈍い顏を的もなく窓の方に向け、ぼんやりして居た。

彼は女の大きな重い身體を膝の上に抱上げてやつた。女の口は涙で鹽からかつた。彼は前夜矢張り妻の口の鹽からかつた事を憶ひ、二人の左う云ふ人間を持つ事が如何にも自分らしくないと思つた。

間もなく彼は拂ふべき金を拂ひ、渡すべき金を渡し、其家を出た。戸外では未だ雪が少しづつ落ちて居た。

Kの家は東山三條を西へ入つた大きな寺の境内にあつた。その裏門を入らうとすると、出合頭に妻と會つた。

「凝つとしてお話してゐるのがつらいの」妻は辯解するやうに云ひ、彼の眼を見ながら、「もう何も彼も、すつかり濟んだのね」と云つた。

「うむ」彼はうなづいたが、うなづき方の弱い

のが自分で氣になつた。
表面は何も彼も、もう濟んだ筈である。が、彼の心持は少しも片づいて居なかつた。彼は今も女から、遠くへ行く前一度來て呉れといはれ、曖昧な返事をして來た。然し自身には女と別れる氣は全くなかつた。ない癖に妻の言葉通り何も彼も濟まして來たのだ。彼は妻を欺く代りに假りに自分を欺いてゐる。自分を欺いてゐないとすれば、そんな風にして再び妻を欺き、女をも欺いたのだ。何れにもせよ、彼には家庭の調子を全く破壞してまで正面から此事に當らうといふ氣はなかつた。それに價する事柄とは思はなかつた。女は最初幾らか彼を嫌つて居たが、今は嫌つて居ない程度で、妻に云はれるまでもなく、女には一つの商賣に過ぎない事と分つて居た。女の此氣持は彼には愉快でなかつたが、その世界ではそれが道德であり、假りに女が彼を本統に愛してゐたとしても此氣持を完全に超えさす事は出來ない事だつた。

それにしろ、彼は一人でゐる時も、人とゐる時も頭から女を完全に離しきる事はなかつた。これが何かの意味で平穩に歸して呉れるまでは彼は女と別れる氣にはなれなかつた。

其日彼は妻と町を歩き、夜になつて山科の家に歸つて來た。妻は其晩から病氣になつた。熱のある身體で出たのが惡かつた。

四

妻の病氣は風邪だが、却々直らなかつた。

「すつかり濟んで了つたのね。もう安心して居ていゝのね」

こんな事を云はれると、彼は當惑した。そしてそれに應ずる言葉で慰めはするが、その云ひ方がはればれしなかつた。妻がそれと信じたがつて居ると尙はればれ云ひにくかつた。

或時は又こんな風に云ふ。「つまり家庭の病氣みたやうなものね。直ればもう何んにも殘らないわね。……だけど、此病氣の方が餘つぽど壽命が縮まりますよ」

「病氣と云ふ以上、又かゝらないとは限らない」彼は笑談にして答へる。この方が寧ろ云ひよかつた。

兎に角彼は早く何處かへ行き度かつた。丁度東京へ行く用があつたが、妻の病氣は妙に執拗く、却々出掛けられなかつた。病氣そのものよりは衰弱が甚しく、妻は絶えず幾らか亢奮して居た。いつもめり込むやうに見えて居た蒲鉾型の指環が手を下げると自然に指から拔け落ちたりした。

以下は、それから間もなく、上京した彼が受け取つた妻の手紙である。

御無事御暮の御事と存じ升。御上京後每日の樣に雪ふりにて大へん御寒う御座いますが、お神經痛は如何で御出で遊ばされますか。○○樣の御容體如何やと御案じ申上て居り升。そち皆々樣も御きげんよく入らせられます御事と存じ升。カラスミの御禮申上戴きたく、御文したゝめる筈で御座いますが、どうも／＼只今手紙かくのがつらう御座いますから、くれぐれもよろしく御申上戴き升。御出立の時は私の相變らずから御氣をそこね御ゆるし戴き升。私はその事では少しもひかん致しませんでしたが、其日はやはり氣持惡く床に居りました。只今もづい分／＼淋しい氣持になりましたので一人淚が出ますので御文したゝめました。おかきもの〻御さまたげしてはいけませんと思ひ、づい分／＼こらえて居るので御座いますが自分の胸もずい分つらう御座いますので、またくだらぬ事をかきます。一人淋しくなりますとあの事を思出し淚ぐみます。もう／＼すぎた事だからと思ひながら、こだわりて仕方が御座いませ

ん。どうしても、ようきの氣持になれません。ほんとにもう一生のうちにこうゆうつらひ思ひをどうぞさせないで戴き升。お猿もとう〳〵死にました。今もかなしくて〳〵たまりません。もうほんとにあなたを信じさせて戴き升。ほんとに〳〵信じて信じてゐてこんな事がありましたので御座いますから、此後はほんとに内しよでもいやで御座い升。私の我まゝ斗り申上まして御氣におさわりになりますかもしれませんが私の胸の苦しみ出しまして御願ひ申上升。私はあなたに大切の人だと御申戴いて、こんなにひかんしてはもつたいないので御座いますが、一途に思ひますので其方より一方の事を思出してかなしくなり升。どうぞ〳〵委しく御返事を頂いて私の安心出來る様にさして戴き升。

毎日御いそがしく、またおかきものでおつむり御つかいの事と御察し申上升。どうぞ十分御からだ御氣をつけ遊ばされ升す様、御風邪召しません様、少しでもお神經痛の方おわるかつたら函根に御養生に御出遊ばします様願上升。御はかまを忘れましたので御送り申上ましたが御うけとり戴きました事と存じ升。夜分は別にこわる事も御座いません。子供たち元氣に致して居り升から御安心願上升。しじゆう泣いて斗りおりません。時々しづみこみますといろいろ思出してなみだが出るので御座い升。自分でも一生懸命に氣持をかへ様と思つて居り升。自分はあなたに大切にして戴き、何かおこつてもふわんの氣持になる事ないので御座いますが、それは私の我まゝでどうしても私一人でなければ神經がおさまらないので御座います。あなたの御氣持を御察しゝないで自分の事斗かいたのはほんとに御ゆるし〳〵戴き升。これだけくだらぬ事を申上ましたら胸の苦しいのが樂になりました。皆々様にくれ〴〵もよろしく。

彼が外出から歸り、此手紙を見てゐる時、電報が來た。「オカヘリネガウ」――妻がいよいよ堪へきれなくなつた氣持が彼には明瞭うかんだ。彼は妻がこれ以上我慢しようとしなかつたのは幸だつたと云ふ氣がした。用は少しも片づいて居なかつたが、直ぐ歸る事にした。

「病氣でも惡いのかしら？」

「私が道樂したんです」

母はそれには答へなかつた。そして「直ぐ歸るといゝね」と云つた。

彼は二十分程で支度し、漸く最後の急行に間に合つた。

（大正十五年三月）

瑣事

京都まで金を取りに行く、――左う家には云つてある。が、それは嘘だ。

奈良の銀行に金は來てゐる。然しさう云つて京都へ行く口實を彼は作らねばならなかつた。――京都には妻に隱れて會ひたい人間がゐた。

俥に乘つて上高畑の友の家に行く。奈良の銀行は預金がなければとるのに保證人が要るかも知れぬといふ話で、その保證人に賴むつもりだつた。

「直ぐ行くから先へ行つてたまへ。却々手間どるから」

友のKはあとからオートバイで行くと云ひ、彼は一ト足先へ出る。公園をぬけて行く。鹿が澤山遊んでゐた。もう見物の人々でそこらは賑はつて居た。下りで俥は氣持よく三條通りを走つた。

「裏書きをして下さい。然し銀行渡しになつてゐますから、今直ぐと云ふわけには行きませんよ」

左う云はれた。

十時の汽車までに僅かしかなかつた。Kが來た。

「實は今日T君が來るんだが……」彼は苦笑した。四十越した彼は女のためにこんなにして友を煩はし、京都からわざ／＼出て來る友を承知で尙出かけずにゐられない自身を恥ぢる氣持で弱つた。皮肉を云ふ事の好きなKではあるが、Kはその時それを少しも出さないのを彼はありがたく思つた。彼はその日女と約束をしてゐたわけではなかつた。女は二十日までは來るなと云つてゐた。彼はそれを女の一種のヴァニティーだと解してゐた。彼が來ない事を他人に云はれた時、女は二十日まで來るなと自分が云つてある故に來ないのだと云ひたい爲めに、そんな事を云つたのだらうと解してゐた。實際彼は二十日までは出られさうもないと自身も思ひ、むかうも思つてゐた爲めに、むかうは左う云ひ、彼もそれを承知したのである。然し、彼は二三日前からその人間に甚く會ひたくなつた。夜不圖眼を覺す。直ぐその人間の事が頭に飛びついて來る。そして離れない。彼は夜幾度か眼をさまし、その度、暫くはねつかれずにゐた。彼は二三日その寢不足から頭を疲らしてゐた。

兎に角、行かう。Tは十六七日に來ると云つてゐたのだが、彼は十六日とだけ聞き、昨日一日そのつもりで待つてゐた。そして來ないと分つてから十六七日と云つてゐたと云ふ事を聞き、今日でなければ十七日だと云ふ事を知つたが、心に決めた京都行きを一日延ばす事は氣持の上で容易でなかつた。

「どうしようかな」

「……」

「止めよう」

「……」

Kは默つて居る。Kはすゝめもせず、止めもしない。しかも少しも冷淡でない事を彼は嬉しく思つた。

「金はあるかい？」彼は自分の財布が汽車賃だけもあやしく、むかうから借りて來るのも厭な氣持から、左うKに訊いた。

「ないな……いや、あるかな」

Kはポケットから財布を出して調べた。十圓札が四枚あつた。彼はその三枚を取つて、小切

手を下に渡し、あとを頼んで俥に乘つた。

木津で牛乳を一トびん取つて三分の一程飲んだ。彼は手帳を出し、その日明け方に見た夢をそれに書いた。子供らしい變な夢で、仕舞に赤い一團の炎が自分の懐に飛込む所で驚いて身を反らし、(實際床の中で烈しく身を反らして)眼を覺した。その夢を初めから書いた。一時間程かゝつた。

外國人が四人――その一人は女――が乘つてゐて、よく喋り續けた。函根宮の下の多分寫眞屋だらうと思ふ男が、それらの外國人に話しかけ、色々な事を説明して居た。

京都で降りると彼は直ぐ東山の宿へ行つた。宿の女將は驚いたやうな顔をして、今朝彼が此長火鉢の傍に坐つてゐる夢を見た。朝の夢は當ると云ふが不思議なものだと云ひながら、起つてその人の家に電話をかけた。

「嵯峨の? ふん、嵯峨の何どす? ツキキ亭? ふーん。――電話の番號お知りしまへんか?――左うどつか……」

居ないといふ事が分つたが、彼は別に落膽もしなかつた。電話を斷つて、女將は火鉢の向うに坐り、煙管を取上げ、

「嵯峨のツッキキ亭いうたら何處やろ。あまり聞かん名やな」と云つた。

「そりやあ、奈良の月日亭だらう」

「そやろか。――あゝ左うかも知れまへんえ」

女將は又起つて電話をかけ直した。矢張り奈良の月日亭だつた。彼は笑つた。無理算段をして來て見れば、行き違ひに奈良にいつて居る事が腹から可笑しかつた。

「〇〇さんとお客さんと九時十何分たらいふので行つた、いうてどしたえ。それこそやな」女將もそれ程氣の毒がる風はなかつた。

「それは九時五十分發だ。僕は十時に奈良を出たのだ。君が夢を見て呉れても肝心のお清さんが見なければ何んにもならない」

「ほんまに。お門違ひや」女將は甲高い聲で笑つた。彼も一緒に笑つた。

「そんなら歸る」

「ほんまに、つまらん事どしたな。ほしたら何日おいでやす」

「あした來よう」

「あした。屹度來ておくれやしや。矢張り今頃どすか」

「今頃――若しかしたら一寸寄る所があるから三十分位遲れるかも知れない」

「――然し歸りは何時になるやろな」

「今直ぐ電話をかけても五時でなくちや歸れないね」

「ふーん」

「奈良へ歸つて電話をかけてやらうかな」

「男はんの聲やつたら、お清どんの事どすさかい、困らはるかもわかりまへんえ。誰ぞ女御はんの聲でかけてお貰ひたらえゝ」

「そんな事、頼む奴はないよ」

彼は直ぐ奈良へかへる事にした。左うすれば久しぶりで會ふＴともゆつくり會へるし、若し又道で一寸でもあの人間に會へれば自分は滿足出來る氣持になつてゐた。彼は自身が案外その女を愛してゐる事を感じ、愉快に思つた。

その家を出て、町で一寸買物をして、直ぐ京都驛から一時半の汽車にのつた。

汽車の中で讀むつもりで買つて來た飜譯本を讀む。直ぐ眠くなつて彼は眠つた。

長池あたりで眼を覺す。同じ客車に六十近い半白の老人とその細君らしい二十三四の眉毛を剃落した女とがゐた。その二人と彼と、他に、片隅にすつかり瀟洒した若い男とが居た。

細君は大柄な體格からいつて、彼のお清に似てゐた。然し印象的に來るその性質は全く異つて見えた。お清には男のやうな所があつた。

彼との關係で自身が冷淡であるといふ事を他に見せたい氣があつた。自身は何とも思つて居ない。が、彼の方で自分を好いて居るのだ。かう云ひたい氣があつた。「えらさうな顏して、すかんたらしい人や」と思うた「こんな事を云つた」思うて、それでどうしたんだ」と彼が云ふと、女は返事をしなかつた。

彼は女の自分に對する言葉や動作を女の自分に對する氣持と見るよりは女の性格として見る傾きがあつた。これは彼が既に年寄らしい心境に入りかけた事を語るものだつた。彼には或る子供らしさも殘つてゐたが、或る事には自分でも思ひがけなく年寄染みた餘裕を持てる事がよくあつた。彼は今年四十三歲だつた。その女は今年二十歲だつた。然し外見は二十五六歲に見える女だつた。

客車の中で見た女がお清とはかなり異つた態度でその年寄つた男に對してゐるのを彼は興味を持つて眺めて居た。女の氣持は絶えず老人の氣持を追つて居た。恰も忠實な飼犬がその主人から眼を離さないやうに絶えず何らかの注意を拂つて居た。

彼の想像によれば老人は近く年寄つた妻に亡くなられた。そして老人は家にゐた善良な若い女中と關係した。それが今の若い細君である。七分通り此想像は當つてゐさうな氣がした。

若い細君が頻りに何か話しかけるのに老人は言葉少なに應じながら、その眼で女をいたはつてゐた。細君は良人としてよりも父として甘えるやうな氣持を見せながら絶えず老人に注意してゐた。見て、いぢらしい氣がした。

奈良でその夫婦は降りた。彼は二人より先に改札口を出た。

停車場前の茶店から月日亭に電話をかけて見ようか、どうしようか、一寸彼は迷つて居た。が、不圖若しかしたらTが此汽車で來はしまいかといふ氣がしたので、其處に立つて出て來る人々を少時ながめてゐた。

向うからTがいつもの癖で幾らか身體を左右に搖する加減にして人々の間を縫つて來るのを見ると、彼は矢張りその豫感があつたと思つた。

二人は込合ふ三條通りを話しながら歩いた。彼は今日の京都行きを正直に云ふのが面倒な氣がした。それで「一寸用があつて……」とか、「銀行まで用があつて……」など曖昧に云つた。

彼は歩きながら又、若しかしたらお清にも會ふかも知れないと云ふ氣がして居た。

「近いのは此方から行くのが近いんだが、眞直ぐにいつて見ようか。——それが一番分り易い道なんだ」彼が此地に引移つて、Tは初めて來たのだ。

猿澤の池から石子詰めの舊蹟と云ふ所を通り、一の鳥居の近くまで來ると、果して、彼はむかうから來る〇〇とお清とその客らしい男の姿を認めた。第一にお清がいつも見るとは遙かに醜い顏をしてゐる事に一寸驚いた。變に角張つた、ゆがんだやうな不愉快な顏をして居た。傘なしに西日を受けてゐた爲めかも知れないが、兎に角それは醜い顏だつた。道傍の鹿の角きりの玩具を賣る大道店のその玩具を見ながら歩いてゐる。

客は〇〇の關係者であらうと彼は思つた。夏外套を着た若い男で、〇〇と何處か似た所のある顏をしてゐた。その客だけが見てゐる彼の方を一寸見たが、お清も〇〇も全く彼には氣づかずにゐた。彼と竝んで歩いてゐるTも何事も氣づかぬ風だつた。

彼は女が奈良に來た事に何かしら自分のゐる土地故といふ氣でもありさうな氣がしてゐたが、お清のその顏を見ると、それが自分の馬鹿

馬鹿しいイリユージョンだといふ事を想はされた。お清に多少でも彼のゐる土地といふ氣があれば彼との僅か二三間のへだたりの此擦違ひを見遁す筈はないと思はれた。お清には左ういふ氣はなかつたのだと彼は思ひ、腹で苦笑した。が、それはお清の冷淡からか、それとも彼女の氣持にデリカシーがない爲めか、何れかと思つた。兩方だらう。少くも冷淡ばかりではないだらうと考へ、彼はひとり苦笑した。

然し如何に醜い顏にしろ、さゝやかなるイリユージョンを破られたにしろ、彼は彼女に會つたといふ事だけで至極滿足してゐた。

―此處から曲つて行かうか……―彼は現金に擦違ふと直ぐ云つた。そして一の鳥居から曲り、四季亭の下から、築土の塀について行く時には我ながら可笑しい程快活な氣分になつて、此間其處の鷺池で活動のロケーションがあり、強い若侍に投込まれた惡者の一人が本統に溺れかけた事をさも面白可笑しく話しながら歩いてゐた。

（大正十四年五月）

晩秋

一

彼には郁子の心が動搖してゐる事はよく解つた。七條の停車場まで送つて來た井浪の女將や池野のお勝を相手に普段と餘り變らず、話してゐるのが、如何にもつらさうだつた。その年の五月に生れた嬰兒は白い毛絲の肩掛から一寸頭を見せ、女中の胸でよく眠入つて居る。三人の女の兒達は久しぶりの上京の嬉しさからしきりにはしやぎ、待合室のソーファからソーファと移り歩き、人中を關はず遠くから「お母樣。お母樣」と呼びかけた。井浪の女將はその度青白い神經質な顏を笑ひくづして受けてゐた。

時には子供達の所まで行つて相手になつた。井浪の女將は郁子をその子供時代から知つてゐた。その郁子が今は四人の子供を引連れてゐる。それが可笑しいといつて笑つた。井浪はそんな風に何氣なくしてゐたが、後で彼が郁子から聞いた話によると、井浪もその時腹では幾らか興奮してゐたに違ひない。

その藝子時代から三十年餘り、其處を離れた事のない祇園の土地で、彼が放蕩をしてゐる、そしてそれを今まで少しも知らずにゐたと云ふ事は自分の商賣柄から云つても、郁子の實家との古い關係からいつても、井浪には心外な事に違ひなかつた。

彼は洋畫家の鳥山と話してゐたが、氣持は矢張り落ちつかなかつた。もう執着はない。此まま續けて行つた所で、新しく生れる氣持はなく、不快な事だけが積み殘されて行く、關係ではもう一度郁子を欺き、それを續ける氣はなかつた。勿論今日お清に會はうなどとは少しも考へなかつたが、二三日前鳥山が池野のお勝を連れ、奈良の彼の家に遊びに來た時、上京の途、京都で又會はうといふやうな話から、早めに奈良を出、家族は繼手の井浪に屆け、自分だけ鳥山の宿である池野へ行つて見た。が、鳥山は岡崎の展覽會場から未だ歸つてゐず、留守だつた。彼はそのまゝ近い所を又井浪へ引きかへして來たが、間もなく池野のお勝が二三日前の禮がてら、鳥山が會場の歸り、繪かき仲間と他へ食事に廻つた事を知らせに來た。

汽車の時間まで三時間近くあつた。彼は食事の用意を賴み、それが來るまで一寸歩いて來ようなど考へてゐると、鳥山から電話がかゝつた。

「花見小路で會はうか。――都合が惡いかい?」

「いや、別に惡い事もないが……」かういひながら彼は迷つた。何も彼も片づいた昔の場所へ一寸でも又行くといふ事は執着はないつもりでも幾らかの魅力はあつた。然し同時にそれが漸く安心を得てゐる郁子の心にどれだけ響くかを考へると彼は躊躇しないではゐられなかつた。

「どうする? 池野で會はうか」

「飯を未だ食つてゐないんだ」

「それぢやあ、花見小路の方へ行かないか」

「うん、さうしよう」

要するに彼は一ト月程見ないお清が見たかつた。それと一つは別れたといつて現金に其處へ近よる事を避ける行爲が自分でも堅苦しい感じでいやだつた。

「鳥山とは他で會ふからね。飯はそつちで食ふ。それから汽車の時間、間違はないやうに――

「もう此處へはお寄りにならないの？」
「寄らずに直ぐ停車場へ行く」
福子は大概察したらしかつたが、露骨にはそれを現さなかつた。彼は餘り時間がなかつたから急いで身支度を仕た。それが嬉々として出て行くやう見えては困ると云ふ氣をしながら。
「鳥山さんお出しまへんの、あんたはんおいでやすか」お勝はそんな事をいひ、玄關まで彼を送つて來た。行く先きは知つてゐるらしかつた。
花見小路の茶屋ではもう鳥山が待つてゐた。大きな一間張りの食卓を間にしてお清が坐つてゐる。彼は幾らかぎごちない氣持だつた。鳥山は濟んでゐたから、彼だけ食事をした。彼はいつものやうに鳥山と樂に話す事が出來なかつた。主に鳥山とお清とが話した。
彼の書いた「瑣事」と云ふ小說でお清に使つた名が、偶然鳥山が一二年前に執着した藝子の名になつてゐた。その話から、
「此奴怪しからん奴だと思つたよ」
お清は顏を赤くして笑つた。
「本名で書くと思ふのは呑氣だな」
「うむ」鳥山も笑つてゐたが、嫉妬といふものは左ういふものだと彼は自分でも思つた。治ど執着は消えたつもりでも、これからも此家に若し來るとすれば、恐らく自分は色々な事で嫉妬を感ずるかも知れないと思つた。そして嫉妬でも感ずるやうなら、それも面白さうな氣がした。
時間が來たので彼は送るといふ鳥山と一緒に自動車で停車場へ向つた。

二

三月程前東京から老父が丁度暑中休暇になつた彼の小さい妹二人を連れ、初めての男の兒の孫を見る爲め奈良に遊びに來た。彼はそれまでに雜誌社と約束した仕事を片づけて置くつもりだつたが、却々出來ず、父達が來て既に〆切日も過ぎ、毎日のやうに催促されたが、まだ出來なかつた。短いもので、調子よく行けば一ト晩で書ける事もあるので、それを的に一日延ばしに延ばしてゐたが、それがうまく行かなかつた。老父は氣にして自分達が來た爲め、仕事が出來なくては氣の毒だと思ふらしかつた。然し彼にすれば氣の毒がらしては猶氣の毒だと思ふのであつた。
法隆寺見物の日、彼の父は「お前はやめたらどうだ」と云つた。「少しもかまひません」そして、彼は自分が書けないのは父達が居るからではなく、毎時の事なのだと云つた。
「いよ／＼駄目なら、原稿はあるんです」
それは五月頃書いて、材料の都合から、未だ間に挿み、本棚の奥に投げ込んで置いた原稿だつた。お清に會ひに行くと、入れ違ひに奈良に客と遊びに行つてゐない、それで彼は直ぐ歸つて、せめて往來ででも會へたら會ひたいと思ひ、一の鳥居の近くまで來ると、客と藝子とお清とが向うから來るのに會つた。二間程の、たたきで擦れ違つたのだが、お清は氣づかず、西日を受けて、變に醜い顏をしたまゝ行つて了つた。然し彼はそれでも滿足し、快活な氣分になつた。――二時間程で走り書きにした至極無造作なものではあるが、作品として出來榮えは嫌ひでなかつた。
然し彼は出さずに濟めば出したくなかつた。彼は明け方、隣の牧場から配達の車が何臺も出て行くのを聽きながら、書いてゐたが、いよいよ翌日には間に合はないと決つたので仕方なく、前の走り書きの原稿の淸書に取りかゝつた。
淸書して見て、彼は餘り面白い作品とは思へなくなつた。家庭に波亂を起してまで出すのは

馬鹿々々しいやうな氣になつた。その張合ひもないものだつた。然し其處まで〆切を引張つては雜誌社の方を斷る事は出來なかつた。それに遂に出來なかつたといふのは父にも何か氣の毒な氣がした。彼は上高畑の友を訪ね、讀んで貰つた。そして友がつまらないと云へばよすつもりだつたが、友は、

「此前のよりいゝやうに思ふ」と云つた。彼は出す事に決めた。

Trifles of life と云ふやうな言葉が浮んだので、彼はそのまゝ「瑣事」と題したが、それは書かれた事柄が瑣事であるといふよりは此小說の爲め郁子と物議を起した場合、要するに trifles of life ではないか、といふ意味を云ふ自身が想ひ浮んだからである。

それが郁子にとつて瑣事でない事はよく分つて居たが、今は遲かれ早かれ埒のあく問題だつたから、彼は郁子にもなるべく輕く左う思つて貰ひたかつたのだ。

お清に對しては彼は氣持の上の責任は殆んど感じなかつた。執着は彼の方からだけでお清にその氣持はなかつたからである。物足らなくもあり、氣樂でもあつた。物足らぬが故に焦るといふ氣にはなれなかつた。そして自身の執着も風邪のやうに一ト通りの經過をとれば自然、元の狀態に還るといふ風に考へるのであつた。彼にとつて眞實なものは現在の自分の執着してゐる心持だけだつた。これは自分でも動かし難いものだつた。が、同時にそれも自然の經過をとれば――お清といふ女が對手の場合では――遲かれ早かれ平靜に還る事が分つてゐると、自分の氣持は出來るだけ靜かに干渉しないで置いて貰ひたかつた。かういふ主我的な考へ方がいゝか惡いかは知らないが、彼が彼自身を處理する上にはそれが一番近路な方法であつた。

「兎に角、出來た」

彼は原稿を懷にし、急ぎ足で還つて來ると、老父の起きたあとの座敷を掃除してゐた郁子と顏を見合はせ、幾らかいひけた氣持を感じながら云つた。

「さう？」郁子は晴々した顏つきをした。「貴方のはおかゝりになれば出來る癖に、それまでが大變なんだから」

「今度はかゝつてゐて出來なかつたんだ。仕方ないから前に書いたものを淸書した」

「でも、よかつたわ。お父樣が氣にしてゐらつしやるやうで氣が氣ぢやなかつた」

郁子は直ぐ箒を置くとそれを云ひに茶の間の方へ行つた。

「小說首尾よく出來上りましたさうで、どうぞ御安心遊ばして……」切口上でこんな事をいひ、父や妹達を笑はしてゐた。

父は讀まないが、妹達は讀むかも知れない。郁子の上機嫌が後で妹達の前に顏を赧らめねばならぬ事になつては可哀想だと彼は思つた。

彼は座敷に待つてゐていつた。

「今度の小說はお前には不愉快な材料だからね」

郁子は一寸暗い顏をした。然し思ひ返したやうに、

「いゝわ」と云つた。「もう何も彼も濟んで了つたんだから……」

「見ない方がいゝよ」

「見ない事よ。氣持を惡くするだけ損ですもの。見ない事よ」と繰返して云つた。

實はその年二月にお清には別れた事になつてゐた。それ以來彼は郁子を欺き續けて來たのだ。

彼は、京都から雜誌社の人が原稿を取りに來た時、

「新聞廣告はなるべく内容を暗示しないやうにして下さい」と云つた。

正直といふ事は、事を簡潔にしてくれる意味だけでも彼は好きな方であるが、此事はさう簡單には行かなかつた。郁子が獨り苦しむのを見るのは堪へられなかつた。

郁子の周圍の女の人達までが、同じ氣持から、此事には一切觸れないやうにしてゐた。彼の我儘手な性質をよく知つてゐる點からも。

間もなく父達は歸京し、暫くすると、その雜誌が屆いたが、彼は直ぐその部分だけ截取つて仕舞ひ込んだ。然し郁子は雜誌を手にしないばかりでなく、言葉でも一切それには觸れようとしなかつた。

一ケ月程經つた。或日郁子宛に或る劇團の下端の女優である千代子から手紙が來た。千代子といふのは四五年前、作家志望で山陰の或る町から、一年餘り彼の所に來てゐた事のある娘だつた。然し來た目的から云へば何の爲めに來たか分らない程、彼とは沒交渉な關係で、只家事を手傳つてゐたが、何時か作家志望は捨てゝ、今は女優になつてゐる。善良な娘で、遠慮深い形式家だつたが、田舍の人に時にあるやうな思ひがけない脫線をした。其處からいへばこれも其脫線の一つであるが、千代子は郁子に宛てた手紙に、お好きな方が出來て、時々京都へお出かけになると云ふのは本統で厶いますかと書いて來た。「小說の事本統で厶いますか」ならば未だ曖昧にする餘地もあつたが、かう明ら樣では彼はどうする事も出來なかつた。

三

今度は郁子も餘りくどくどは云はなかつた。

それだけ一方白けた氣持もあつたに違ひない。良人を信じてゐなければならない。良人の言葉を疑ふのは不快だ。自分のかういふ心持をそのまゝ利用して、十月餘りうまうま自分を欺いてゐた。日頃立派な口を利いてゐる割りに左ういふ事が平氣なのはどう云ふのだらう、こんな事を思ふらしかつた。

「それにしても、千代子さんは何んの氣であんな事を書いて來たんでせう」郁子はそれを不愉快がつてゐた。

「善意も惡意もない、只御機嫌伺ひ位の氣持だらう、一ト言にいへば田舍つぺえなんだ。若し都會人であゝ書いて來たなら何か下心があるが、あれは左うぢやない。然し二年近くも一緒に住んでゐたら、もう少しは通じて居さうなものだがな」

彼は事情が明ら樣になつたことでは、それ程困らなかつた。自分の氣持が自發的に其處までは未だ少し行き切らない氣もしたが、仕方がなかつた。郁子が若しもう二三ケ月それを知らずにゐてくれたら彼はもつと素直に自然に別れるといふその氣持に落ちつけたかも知れなかつた。それを云ふと、「實に貴方は自分本位な方ね」と郁子は云ふ。

「實際、理窟には合はないよ。一種の暴君で自分でも不愉快なんだ」

「一々、暴君よ、貴方は何でも堪へると云ふ事が少しもお出來にならないんだから。他の事はそれでもいゝけど、――その事だけは此方で堪へてゐるといふわけに行かない事ですからね。それで困るのよ」

「つまり隱すといふやうな事になるんだ」

「それが厭ぢやありませんか。自家にゐても何か一つ始終隱してゐなければならない、それぢやあお氣持が晴れば晴れ出來ないでせう？　私には到底それは出來ない。若しそんな事でもあれば苦しくつて、直ぐ神經衰弱になるか、氣違ひになるかも知れない。貴方はさういふ事、割りに平氣でゐらつしやるわね」

――割りに平氣かも知れない。――然し晴い氣持

はしてゐる」
「もう本統にこれからさう云ふ事ないやうに出來ないこと？」
「……」
「返事がお出來にならないの？」
「うん出來ない」
「いやな方ねえ」郁子は不愉快さうな顔をして默つて了つた。それが彼には、貴方のお身體きたないやうな氣がするわとでも續いて來さうに思へた。
一週間程して彼は京都へ行つた。そして會つて彼は相不變のお清だと思つた。いつも來る藝子も、宿の女將も相不變だつた。如何にもかう云ふ事を商賣に暮らしてゐる人間達だと云ふ氣がした。彼にとつて此氣持は此時にかぎつた事ではないが、今日も亦それを感ずると、いやな事を云ひ出すには刺々しい氣分にならず、却つていゝと思つた。
お清は最初只笑つて聽いてゐたが、仕舞ひに少し興奮した調子で、
「兎に角おうちの奧さんは人並はづれて悋氣深うおすな。何んどすいな。月に三遍か四遍おいでやす位。いゝ、おうちの御商賣にさはると云ふではなし。あんたはんも餘つ程やな……」こんな事を云ひ出した。
「今もいふ通り、何も自家の者の意志だけで云つてるわけぢやないよ」
「ふーん。よう分つてます。よう分つてるが、あんたはんも餘つ程なお方やな」
「餘つぽど、どうなんだ」
「奧さんに甘うおすな」
「奧さんばかりぢやない。女には生れつき甘く出來てるんだ」
「ほんまに甘うおすな」
「甘いのはいゝぢやないか」
「いかんわ」
じめ〱されるよりはましだつた。
そしてこれがお清の本音なのだと彼は思つた。
お清は默つた。そして時々「あゝ可笑しい」こんな事を云つては殊更笑聲をたて、しきりに彼に輕蔑を示して居た。彼は相手にならなかつた。
やがてお清は靜かになつた。食卓に兩肘を突き、指先で茶託を廻しながら何か考へてゐる風だつたが、暫くすると、不圖、
「割りが惡いわ」と云つた。
「何が割りが惡い」
お清は初めて自分のひとり言に氣がついたやうに羞しさうな眼つきで微笑した。
彼は一寸不思議な氣がした。何が割りが惡いのか押して訊いたがお清は返事をしなかつた。
若しお清自身の氣持と云ふものが幾らかでもあれば、このやうに全然發言權を與へない自分のやり方は少しひど過ぎるかしらと彼は思つた。左う云ふ意味でならお清が割りが惡いと思ふのは無理ないと思つた。然し彼の癖として、自分の方からは如何に女に甘くとも、又甘いと思はれても困らないが、女の自分に對する氣持を甘く解する事は恐れて居た。殊にお清との場合では、向うはどうでもいゝ、此方からは好きなのだ、此考へが最初から彼に附きまとつてゐた。それが一番眞實に近いらしくも思はれたし、且つ若しそれ以上を要求すれば、彼は直ぐお清に無いものまでも望み、不愉快になる事が分つて居たからである。好きなのは此方からだけだ、——さう思つてゐれば不服はなかつたが、向うも好きなのだと思へばお清では恐らく腹の立つ事ばかりだつた。
結局割りが惡いといふ言葉はそのまゝになつたが、お清はそんな事を云つても彼は又還つ

て來るに違ひない、――若し又還つて來なければ來なくてもいゝと思ふらしかつた。お淸は他の事でも、面倒臭くなると、直ぐさう荒く考へる方だつた。

そして、實際一と月程して、彼は鳥山に呼ばれたからではあるが、今日此方から又お淸の所に出かけて行つたわけだ。

四

秋らしい冷々した晩だつたが、それにしても郁子は凄さうな變に血の氣のない顏色をしてゐた。彼は汽車に乘つたら、餘りにも何んでもなかつた今日の會見を此方から云ふ方がいゝと思つた。

今度の上京は彼の三番目の妹が其夏に結婚し、それが暑い盛りだつたから披露は秋に延ばした。それに立會ふ爲めで彼にも子供等も前から非常に樂みにしてゐた。そして左ういふ旅の出鼻に今日の事では、早くそれを云ひ合ひ、氣持を直して了はなければ、郁子も可哀想だつた。

「千枚漬はどうした？」

「お浪さんの所へ取つて貰ひました」

「七つあるね」

「六つきり取りませんよ」

「七つなければ足りないだらう」

「四圓のを入れたから、一つ減らして丁度いゝでせう」

「まあいゝや。何か他の物を廻せばいゝ」

こんな事でも彼は自分の思惑と違ふと却々我慢しない方だつたが、今は愚圖々々云ふ氣になれなかつた。

改札を始めたので一同步廊に出た。間もなく列車がつき、彼等は皆と別れた。

汽車が出ると郁子の張りつめて居た氣持は急にゆるんだ。

「お母樣、お母樣、お姉ちやん、時やと代つて貰つて上へ一人で寢ちやあいけない？　えゝ、いけない？」

「いけません」

「千鶴子、一人で下に寢るう」二番目がいつた。

「皆、そんな勝手な事をいつちや、いや。そんな事をいふ人は奈良へ還して一人でお留守番、させることよ」郁子は苛々して居た。

大津を出る頃にはどこからか、皆寢臺にをさまつて繪本などを見てゐた。「千鶴子がお姉さんの横腹を蹴る」時々こんな事も云つてゐたが、暫くすると眠つて了つた。

郁子は赤兒を寢せつけ、胸を合せながら出て來た。その顏は如何にも神經が疲れ切つたといふやうに見えた。

「ちよつと」彼は寢臺から足を下ろすと、下駄を穿き、郁子の爲めに半分席を空けてやつた。

「お前は今日行つた事を氣にしてゐるのか」

「いゝえ」

「何故そんな弱つた顏をしてゐるんだ」

「もう、すつかり疲れたの」

「不愉快を感じるやうな事は何にもないからね」

「えゝ、それはいゝんですけど、浪が心配して色々いつて呉れるんで、――もう、濟んだ事で、よく分つてゐるのだと云つても、自分が屹度突きとめて、よくするからつて、興奮して震へて居るのよ。親切で云つて呉れるんだから、大變ありがたいんですけど、二人だけの事にさう他人に入られるのも何んだか恥しいやうでせう？」

「うむ」

「お浪さん本統に心配しないで頂戴、と云つても一人でムキになつてるの。池野の女將さんが自分だけ何んでも知つてるやうな顏をしながら、それを浪に敎へないらしいの。それで猶、

腹が立つのかも知れないんですが、却つて心配して下さらない方がいゝつてよく云つて來たんですけど、さう云ふ口があるから、鰻でも食べないと弱つてるやうで變でせう？　實は何んにも食べたくなかつたの。それを我慢して無理に漸く半分だけ食べて來た。――二時間か三時間だつたけど、今日は何んだか、すつかり疲れちまひましたわ」

「もう、それでいゝや。東京へ行けば皆ゐるし、氣が變るよ」

「えゝ、でも麻布の方がお書きになつた物を御覽になつて知つて居らつしやると思ふと、いやあね」

「知つてゐたつて誰もそんな事に觸れる奴はないよ」

「そりやあ、さうよ。――でも、私お母様ならお話してもいゝけど……」

「馬鹿。そんな事、云ふ必要はない」

彼は笑つた。汽車は安土あたりを走つて居た。

（大正十五年七月）

創作餘談

此集に入れた作品に就いて思ひ出のやうなものを書いて見る。

「或る朝」「荒絹」「網走まで」「速夫の妹」「子供三題」など最も古いものである。「或る朝」は二十七歲の正月十三日亡祖父の三回忌の午後、その朝の出來事を書いたもので、これを私の處女作といつていゝかも知れない。私はそれまでも小說を始終書かうとしてゐたが、一度もまとまらなかつた。筋は出來てゐて、書くともものにならない。一氣に書くと骨ばかりの荒つぽいものになり、ゆつくり書くと瑣末な事柄に筆が走り、まとまらなかつた。所が、「或る朝」は内容も簡單なものではあるが、案外樂に出來上り、初めて小說が書けたと云ふやうな氣がした。それが二十七歲の時だから、今から思へば遲れてゐたものだ。こんなものから多少書く要領が分つて來た。

「網走まで」は或時東北線を一人で歸つて來る列車の中で前に乘合はしてゐた女とその子から、勝手に想像して小說に書いたものである。これは當時帝國大學に籍を置いてゐた關係から「帝國文學」に投稿したが、沒書された。原稿の字がきたない爲めであつたかも知れない。

「荒絹」或冬湯ケ原に行つてゐて書いた。オペラの梗概のつもりだつた。オペラがどういふものか全で知らない時代の事で「サムソンとダリラ」の譜の本を丸善から買つて來て、仕組だけでも知らうとしたが、結局手がつけられずに了つた。あの話は獨逸人のギリシャ神話を描いた畫から想ひついたもので、その出所を示す意味で「アラクネ」を、「荒絹」と題した。然し、話の大體は私自身の想像であつた。

「濁つた頭」は夢からのヒントと神經衰弱の經驗から作り上げた小說である。若い頃の事でかういふ病的な刺激の強いものを書くと如何にも仕事をしたやうな氣がした。三四日位で書上げたやうに思ふ。風俗壞亂の個所があると内務省で大分削られた。此本に載せたのは其檢閱濟みのものである。

「老人」これは短いものだが割りに骨を折つた。形式上の試みで、さういふ事を離れては餘り價値あるものとは思つてゐない。然し形式上の試みとしては成功したやうに思ふ。アメリカで出る「カレント・リテラチュア」といふ雜誌に毎號大陸作家の短篇が載つてゐて、アンドレーフの「ラザルス」とかストリンドベルヒの「フェニックス」とかその他色々あつたが、さういふ中に今は題名を忘れたがビョルンソンのもので、或る寺の僧が、一人の人間の一生を見る事を書いてた短篇があつた。赤兒として洗禮を受けに抱かれて來る所、それから一人前になつて結婚の儀式を受けに來る所、最後にその男が死んでその僧が葬式をしてやる事が書いてあつた。この三つの場合が簡單に書かれ、しかも變にその人間の一生が感じられる點で感心した。そしてこれから想ひついて試みたのが「老人」であるが、然し「老人」はビョルンソンの短篇の眞似ではない。

「母の死と新しい母」少年時代の追憶をありのまゝに書いた。一ト晩で素直に書けた。小說中の自分がセンチメンタルでありながら、書き方はセンチメンタルにならなかつた。此點を好んでゐる。他人から自身の作品中何を好むかと訊かれた場合、私はよく此短篇をあげた。苦勞

して書いたものには苦勞しただけの長所があり、素直な氣持でスラ／＼と書けたものには又さういふいゝ所がある。作者自身では多くの場合後者の方に愛着を感ずるらしい。

「正義派」車夫の話から材料を得て書いたもので、短篇らしい短篇として愛してゐる。

「出來事」これは自身で目撃した事實を殆どそのまゝ書いた。「正義派」は正義の支持者といふ誇りを自ら段々誇張して行つて、しかもそれが報いられない所から來る淋しさを主題としたが、「出來事」の方はもつと直接な感情、――子供が電車に轢かれかけて助かつたといふ喜び（或者は一時の驚きと、亢奮から喧嘩もするが、結局は皆、子供が死を免れたと喜んでゐる、その善良さに好意を感じ、此小說を書く氣になつた。

餘談になるが、此小說を書き上げ、其晩里見弴と芝浦へ涼みに行き、素人相撲を見て歸途、鐵道線路の側を歩いてゐて、どうした事か私は省線電車に後からはね飛ばされ甚い怪我をした。東京病院に暫く入院し危い所を助かつた。電車で助かる事を書き上げた日に自分も電車で怪我をし、しかも幸に一生を得た。此偶然を面白く感じた。此怪我の後の氣持を書いたのが「城の崎にて」である。それから此時の經驗は「或る男、其姉の死」の中に書入れてある。

「速夫の妹」少年時代の追憶で、事實に大分潤色してある。甘い感じのものであるが、のびのびと自身でも面白がつて書いてゐるやうな所が今から云へば又追憶的の氣持で眺められる。

「襖」これも事實の幾らか潤色された追憶で、箱根蘆の湯での經驗を數年後、季節はづれの淋しい小涌谷温泉で、憶ひ出し、書いた。

「剃刀」床屋で恐らく誰れもが感ずるだらう恐迫觀念から作り上げたものだ。似た材料の詩がビアズレーにあるといふ話を後に聞いた。

「祖母の爲に」これは病的で、如何にも空想的に見られるものかも知れない。然し當時の私では少しも潤色しない事實の記錄であつた。今から見れば自身も病的であつた。近頃は段段病的といふ事に興味が薄くなつたが、病的といふ事は飛躍であり、正氣では感じられないもの、又正氣では現せないものを、此飛躍で現す場合があるので、それを否定はしてゐない。

「子供三題」簡單なスケッチに過ぎない。前には子供を書く事が好きだつたが、自分に子供が出來ると却つて書かなくなつた。見てゐるだけで充分になつたのかも知れない。後に發表した「眞鶴」なども子供のない時代に得た材料である。

「鵠沼行」失敗した長い小說の一部分を切離した日記のやうなものである。總て事實を忠實に書いたものだが、唯、一ケ所最も自然に事實ではなかつた事を書いた所がある。さういふ風にはつきり浮んで來たので知りつゝさう書いた。後に其時一緒だつた私の二番目の妹が、色々な事を私がよく覺えてゐると云ひ、然し自分も此事はよく覺えてゐると云つたが、それがその一ケ所だけ入れた事實でない場所だつた。私は、其處は作り事だとは云ひ惡くなつて默つてゐたが、妹が出鱈目を云ふ筈はないので、私に最も自然に浮んで來た事柄は自然なるが故に却つて事實として妹の記憶に甦つたのだらうと考へ、面白く思つた。

「廿代一面」二十代の生活の一面を書いた。話としてはまとまつたものではない。坐骨神經痛で八十日間寢た切りになつた時、雜誌社との約束で古い原稿からこの部分を拔出し直して書

いた。八十枚、床に腹這ひになつて書くのは容易でなかつた。然し出來たものには自信がなかつた。

「クローディアスの日記」苦勞して書いた。これを書く動機は文藝協會の「ハムレット」を見、土肥春曙のハムレットが如何にも輕薄なのに反感を持ち、却つて東儀鐵笛のクローディアスに好意を持つたのが一つ、もう一つは「ハムレット」の劇では幽靈の言葉以外クローディアスが兄王を殺したといふ證據は客觀的に一つも存在してない事を發見したのが、書く動機となつた。クローディアスといふ「ハムレット」中の人物をとつて來た以上、「ハムレット」に書かれた事と矛盾したくないと思つたので辻褄を合はすのに却々骨が折れた。坪内さんの「ハムレット」をゆつくり隨分丹念に讀んだ。ハムレットといふ人物は土肥春曙のハムレットが先入主になり、本で見てもそれ以外に出られず、仕舞まで好感を持たなかつたが、何年かして活動寫眞でフォーブス・ロバートソンといふ英國の役者のハムレットを見、初めてハムレットの氣持に同情出來た。父を失ひ、母が自分の好きでない叔父と結婚したといふだけでも、感じ易い若者には頭の中だけででも面識こあれだけの悲劇は作り上げられると思つた。可憐ではあるが、ハムレットのさういふ憂鬱な氣持を導く力のないオフイリアも如何にも女らしい女で面白く思はれた。私は「ハムレットの日記」も書けると思ひ、我孫子に住んでゐた頃少し書きかけたが出來なかつた。

「清兵衞と瓢簞」これはこれに似た話を尾の道から四國へ渡る汽船の中で人がしてゐるのを聽き、書く氣になつた。材料はさうだが、書く動機は自分が小說を書く事に甚だ不滿であつた父への私の不服で、中に馬琴の瓢簞といふのが出て來るが、事實では山陽の瓢簞なのを何故さう變へたかといふと、尾の道へ來る前父が「小說などを書いてゐて、全體どういふ人間になるつもりだ」といつた時、「馬琴でも小說家です。然しあんなのは極く下らない小說家です」こんな事を私は云つた、父が馬琴好きでよく「八犬傳」を讀んでゐるのを知つてゐたからで、かういつた私は馬琴の小說は團十郞の團深山を見た折りにその條だけ讀んだほかは全然知らないのだから馬琴も崇拜である。丁度讀賣の元日の新聞に挾まれてゐたのでそれを送つたが、原稿料として一篇三圓の謝禮を貰つた。

「范の犯罪」支那人の奇術で、此小說に書いたやうなものがあるが、あれで若し一人が一人を殺した場合、過失か故意か分らなくなるだらうと考へたのが想ひつきの一つ。所がそんな事を考へて間もなく、私の近い從弟で、あの小說にあるやうな夫婦關係から自殺して了つた男があつた。私は少し憤慨した心持で、どうしても二人が兩立した場合には自分が死ぬより女を殺す方がましだつたといふやうな事を考へた。氣持の上で負けて自分を殺して了つた善良な性質の從弟が歯がゆかつた。そしてそれに支那人の奇術につけて書いたのが「范の犯罪」である。同じ材料から武者小路も里見も書いてゐる筈だ。

「冬の往來」古い原稿を後年書き直したものである。家族連れで城崎に行つてゐて、新年號の原稿書きが忙しく、雜誌社の人の居催促を受けつゝ二日半で書いたものだ。書き出しの會話はそんな所から來てゐる。薰さんといふ女主人公は私の知つてゐる三人の人から出來てゐる。

「黒犬」これも古い材料で、麻布今井町の交番を一寸曲つた所に小さい駄菓子屋があつて、その獨者の婆さんが殺された事がある。犯人は遂に出ずに了ひ、或る夜おそく其處を通り、不

圖此小說にあるやうな空想に陷入つた事があつたので、書いて置いた。そして後年それを書直して見たが、若い頃のやうにその氣持に本統にしつくりは入れなくなつた事を感じた。黑犬はその婆さんの飼犬ではなかつたが、全く見分けのつかぬ位よく似たのが二疋ゐて、私が變な空想にとらへられてゐるのを二疋で見送つてゐたので、又氣味が惡くなつた事を覺えてゐる。

「佐々木の場合」新聞の三面記事から想ひついた。新聞には書生は逃げて了ひ、女中は自分の肉を提供した、これだけが書いてあつた。私は逃げた書生にも言譯の根據はあるかも知れないと思つた。それが、書く動機となつた。此小說は丸四年間全く何にも出さずにゐて、武者小路に勸められ、久しぶりでその頃あつた「黑潮」といふ雜誌に出したものである。

「好人物の夫婦」メーテルリンクの「智慧と運命」に感心し、愚さから來る誤解や意地張りで悲劇を作る事が如何に下らないかといふ事を思ひ、それから救はれる場合の一つとして此小說を書いた。「智慧と運命」は永い間よくなかつた父との關係にも大變よく働いた。

「赤西蠣太」伊達騷動の講談を讀んでゐて想ひついた。講談ではこの小說の小江が觸れば落ちるといふ若いおさんどん風の女になつてゐて、下等な感じで滑稽に使はれてゐたが、私は若し此女が實は賢い女で赤西蠣太が眞面目な人物である事を本統に見拔いてゐたらばといふ假定をして、其處に主題を取つて書いた。最初私は芝居や講談や德川時代の小說の知識から、その時代らしく書くつもりで書いたが、私にはそれがハンディキャップになり、うまくいかなかつた。それから四五年して又それを書くつもりで、舊稿を探したが遂に見當らず、人物の名も分らなくなつたので、いゝ加減に作り、書き方も前にそれで失敗したから殊更さういふ事を無視した書き方をして見た。その後二年程して舊稿も原の講談も出て來たが、講談は典山で人物の名は蒲倉仁兵衛といふのであつた。所が更に近年聞いた所によると、此講談の作者は悟道軒圓玉だといふ事だつた。自分は伊達騷動などいふものは昔からのもので新しくさういふ風に自由に作られる事を知らなかつた。最初からそれが同時代の創作と知つてゐれば私は此材料は使はない。自分がさういふ事に少しも氣づかなかつた事は手落ちで、圓玉には氣の毒であつた。圓玉の講談中の女中と此小說で書いた女中とは解釋が大分異ふ。此異ひは一方は所謂大衆對手、他はさうでないといふ所から來てゐる。所謂大衆といふものは私が現した女中よりも、圓玉の現した女中の方を喜ぶらしい。若しさうとすれば、そして若しさういふのが大衆といふものであるならば、その大衆を目標にして、仕事をする事は自分には出來ない。己れを一人高くするといふ態度は不愉快であり、いやな趣味であるが、現在の大衆に迎合するやうな意識を多少でも持つた仕事は娛樂にはなつても、仕事にはならない。

「流行感冒」事實をありのまゝに書いた。此小說の主人公は暴君であるが、手一杯に我儘を振り廻しながら倘常に反省してゐる所があり、大體に於て女中を許さうといふ意志があり、そしてその機會は逃さず捕へてゐる所に自分は興味を感ずる。私は書く時さういふ事は思はなかつた。出來上つた物を見てさういふ所のあるのに氣附いた。然し子供の病氣に對する恐怖心は今から思へば少し非常識であつた。此小說の左枝子といふ娘の前後二兒を病氣でとられた私は此子供の爲めには病的に病氣を恐れてゐたのだ。

「十一月三日午後の事」これも事實そのまゝを書いた日記である。然し直ぐ書けばよかつた

のを何日か經つて書いた爲め、その事から受けた亢奮がその時程強く現れず、自分では物足らない物になつた。

「城の崎にて」これも事實ありのまゝの小說である。鼠の死、蜂の死、ゐもりの死、皆その時數日間に實際目擊した事柄だつた。そしてそれらから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小說といふものでも餘裕から生れた心境ではなかつた。

「濠端の住ひ」生き物を書く事が好きで、此小說も大部分それである。小說中一番の蒸々した氣候から急に涼しい氣持のいゝ夜になつてゐた。物產陳列場の白いペンキ塗りの舊式な洋館の上に青白い半かけの月がぼんやり出てゐた」かういふ所がある。私は實際の場合でかういふ印象を受けてゐたが、これを書いて直ぐ松江の此往來で、往來の北側にある物產陳列場の屋根に月を見る場合は決してない事に氣がついた。松江の人が見たら、腑に落ちない事であらうと思つた。然し一たん先入主になつた印象を捨てるのが惜しくて私は誤りを承知で書いたまゝにして置いた。

「小僧の神樣」屋臺のすし屋に小僧が入つて來て一度持つたすしを價をいはれ又置いて出て行く、これだけが實際自分が其場に居あはせて見た事である。此短篇には愛着を持つてゐる。

「焚火」前半は赤城山で書き、後半は四五年して我孫子で書いた。赤城山で書いた時には如何にも書き足りない氣がして止めて了つた。然し四五年して讀むと案外書けてゐるやうに思はれ、後半をつけ、雜誌に出した。そして今では自分でも好きなものの一つになつてゐるが、昨年奈良の若い友達が赤城山へ行き、歸つてからの話に「焚火は好きなもので、いゝと思つてゐましたが、赤城へ行つて讀むと何んだか非常に物足りない氣がしました」と云ふ事だつた。此友達は初めて赤城へ行つて大變氣に入つてゐた。私は友達の此感じは屹度本統だらうと思つた。これと同じではないが、十何年か前、松江の方の加賀の潛戶といふ所を見に行く途中、船の中でハーンの其處を書いた物を讀みながら行つたが、書き方が如何にも誇張してあるやうで、私は少し滿足しなかつた。所が、實際其場へ行つて見ると、それ程強く書いてあつて、受ける感じから云へば未だ足りない位で、自然そのものはもつと強い力で迫つて來るのを感じた。そして自然から迫られるだけにそれを強く現さうとするのは大變な事だと思つた。そして作品によつては全體の調子に合はし、それを避ける方がいい場合もあると考へた。その場合々々の問題である。

「雪の日」我孫子の日誌で、此翌日の事まで書くと、一篇の小說となるものであつたが、早く新聞に出す必要のある事情があつて、其處まで書かずに了つた。今からではもう書けさうもない。然しあれだけでも私には我孫子生活の思ひ出として愛着は持つてゐる。

「眞鶴」湯ケ原へ行く輕便鐵道の中から見た兄弟の子供で想ひついた。自身の經驗からは、同じ年頃に聯隊の軍旗祭を見に行き、下士室で下士連や客に酌をしてゐた場末の酌婦のやうな女を非常に美しく感じた事があつたので、それを書いた。後年どう考へても、それがそれ程美しい女である筈はないと思はれるのであるが、その時は、その眞白に塗つた顏が自分には此上なく美しく思はれた。この記憶を眞鶴で見た子供と一緒にした。「我戀は千尋の海の捨小舟」こんな歌が出て來るが、これは中學の一二年の頃圖畫の教室の板に樂書してあつたのを、讀んでゐた友が「戀」とは何の事だといふので說

明してやつた事がある。それを覺えてゐて使つた。

「雨蛙」「暗夜行路」といふ小説の主人公が前半では母の不義の子である故に苦しみ、後半では自身の細君の不義で苦しむ事を書くつもりだつたので、これは又その反對にその事で妻を一層いつくしむ氣持になる事を書くつもりで「暗夜行路」を書上げたら書かうと思つてゐたのを、「暗夜行路」が何時まで埒あかないので、これを先に書いて了つた。初めの方はいゝが後半は失敗した。短いものだが力を入れ過ぎ却つて失敗したやうな所がある。

「轉生」氣輕な戯作。

「大津順吉」「或る男、其姉の死」「和解」これらは材料の點から云つて一つ木から生えた三つの枝のやうなものである。「大津順吉」と「和解」は事實、「或る男、其姉の死」は事實と作り事との混合である。

「矢島柳堂」これは「白藤」「赤い帶」「鵠」と「百舌」を集めて一つにした。「鵠」と「百舌」だけに愛着がある。

「暗夜行路」は前篇だけを此本に載せたが、後篇は未だ完結してゐない。然し前篇だけでも一つの小説として見られるもの故、只「暗夜行路」として出す事にした。此小説の主人公を作者自身であると思ふ人があり、批評でもさういふ見方で批評したものもあるが、何處まで作者自身で、何處からがそれを出た人物かを説明するのは困難だ。謙作の出生にからまる事實は總て架空の想像であり、謙作の祖父、兄の信行、お榮などには遂にモデルを見出す事が出來ず了ひになつた。

「暗夜行路」に就いての思ひ出だけでも色々あるが、紙數の都合で書ききれない。以下の九篇と共に略する事にした。

昭和三年六月七日

志賀直哉

年譜

明治十六年
二月二十日、陸前國石巻町に生る。

明治十八年
兩親と上京、麹町區内幸町一ノ六、祖父母の家に住む。

明治十九年
芝幼稚園入園。

明治二十二年
學習院初等學科入學。

明治二十三年
芝區芝公園五十一號地に移轉。

明治二十八年
學習院中等科に進む。

明治三十六年
學習院高等科に進む。

明治三十九年
東京帝國大學文科に入學。

明治四十一年
大學中途退學。短篇「網走まで」を「帝國文學」に送り沒書される。

明治四十三年
四月より同人雜誌「白樺」を始む。武者小路實篤、木下利玄、正親町公和、有島武郎、同壬生馬、里見弴、園池公致、兒島喜久雄、柳宗悦、萱野二十一（後に郡虎彦）、その他田中雨村、日下諗等同人なり。長與善郎の同人となりしは一年程後なり。

大正元年
秋、中國尾の道に住む。

大正二年
正月單行本「留女」を出版す。

大正三年
夏、山陰松江に住む　この頃より凡そ三年間殆ど創作せず。九月に入り京都に移り住む。
此年の暮れ結婚す。

大正四年
五月より九月まで上州赤城山に住む。秋より千葉縣我孫子町に住む。

大正五年
夏、長女慧子生れ、生後五十餘日にして死す。

大正六年
新潮社より「大津順吉」を出版す。武者小路にすゝめられ、この頃から再び小説を發表するやうになる。夏、次女留女子生る。

大正七年
正月新潮社より「夜の光」を出版す。

大正八年
長男直康生れ、三十餘日、丹毒にて死す。

大正九年
五月三女壽々子生る。

大正十年
二月短篇集「荒絹」を春陽堂より出版。

大正十一年
正月四女萬龜子生る。「暗夜行路」前篇を新潮社より出版。

大正十二年
三月我孫子より京都市粟田口に移り住む。
秋、山科村に轉ず。

大正十四年
四月奈良市幸町に移り住む。短篇集「雨蛙」を改造社より出版。五月二十六日次男直吉生る。

昭和二年
五月短篇集「山科の記憶」を改造社より出版。

昭和三年六月二十五日印刷
昭和三年七月　一　日發行

現代日本文學全集　第二十四篇

著作者　志賀直哉

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番　一一二二番　一一二三番　一一二四番

株式會社秀英舍印刷